昭和59年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

1985・3

三重県教育委員会

序

農業基盤整備事業は、圃場整備、各種農道整備等、その事業内容は多岐にわたり、また近年その事業地がしだいに平野部から山間部へと移行しており、必然的に遺跡にかかる割合も増加の傾向を示している。

したがって事業の早期把握に基づく文化財保護との調整協議は、事業の円滑推進のうえで今後とも相互の努力がより一層必要となってこよう。

さて、ここに報告する7遺跡の発掘調査報告は、いずれも再々にわたって保護協議がなされた結果、最終的に遺跡の破壊が避けえられなかった各遺跡の調査の概要をまとめたものです。調査結果の公表は我々の責務でもあり、その成果についてはより広く利用されることを切望します。

とりもなおさず、調査に際して多大のご理解とご協力をいただいた農林水産部の各関係機関、また調査現地にあっては、各土地改良区をはじめ、多くの地元の方々の暖かいご援助を得ましたことに対し、記して深甚の感謝の意を表します。

昭和60年3月

三重県教育委員会
教育長　横　田　猛　雄

例　　言

1．本書は、昭和59年度農業基盤整備事業地域内にかかる埋蔵文化財の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部の負担による。

3．調査の体制は下記によった。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県教育委員会 事務局文化課
文化財係員（主事・技師)、及び昭和59年度文化課埋蔵文化財発掘技術者研修生

調査協力　三重県農林水産部耕地第一課、第二課、畜産課
各耕地事務所
各土地改良区
各市町村教育委員会

4．各遺跡の整理、報告書作成は各調査担当者があたり、下記の表のとおりであり、文末にも記した。

項　目	執筆者	項　目	執筆者
前　言	技師　新田　洋	金剛坂遺跡	主事　田村　陽一 研修生　宮田　勝功 研修生　浅尾　悟
古市遺跡	主事　増田　安生 主事　田村　陽一	平松代遺跡	主事　田阪　仁
曲遺跡	研修生　河北　秀実 〃　服部　久士 〃　宮田　勝功 〃　浅尾　悟 技師　新田　洋	青ノ代遺跡	主事　稲垣　良二 主事　田阪　仁
		観音寺遺跡	主事　仁保　晋作
		岸本遺跡	主事　増田　安生

なお、古市遺跡「2．古市周辺の地形と地質」については、山本　威氏より玉稿をいただいた。

5．本書で用いた遺構表示略記号は下記により、図面における方位はすべて磁北を用いた。なお、各遺跡の表示略記号は目次（カッコ書き）に示した。

ＳＢ；竪穴住居・掘立柱建物

ＳＤ；溝・堀　　ＳＥ；井戸　　ＳＫ；土坑　　ＳＦ；焼成坑

ＳＡ；柱列・柵　　ＳＸ；墓・その他

6．本書に使用した航空写真、各事業計画図面は農林水産部の提供による。

7.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

前　　言…… 1

＜県営圃場整備事業＞

Ⅰ　一志郡白山町　古市遺跡（９ＦＦＩ）…… 9

Ⅱ　松阪市曲町　曲遺跡（７ＧＭＲ）…… 47

Ⅲ　多気郡明和町　金剛坂遺跡（３ＧＫＺ）…… 93

Ⅳ　阿山郡大山田村　平松代遺跡（２ＪＨＤ）……121

Ⅴ　上野市高山　青ノ代遺跡（８ＪＡＤ）……125

Ⅵ　名張市中村　観音寺遺跡（９ＪＫＮＧ）……137

＜県営畜産経営環境整備事業＞

Ⅰ　飯南郡飯高町　岸本遺跡（８ＧＫＭ）……171

図版目次

PL1	古市遺跡	航空写真
PL2		調査前近景・調査風景
PL3		SA1・SD3、4・A。Bトレンチ柱穴群
PL4		SD19・SD29・SE21・SD23・SD24
PL5		SK28～31・SK31
PL6		出土遺物
PL7		出土遺物
PL8		石製品・金属製品
PL9	曲遺跡	航空写真・A地区調査前風景
PL10		調査区全景
PL11		A地区調査区全景
PL12		A地区SB1～3・A地区北部
PL13		A地区東部・SB19～22
PL14		SB30・31・SB36・37・38・41・42
PL15		SE7・SE6
PL16		調査風景・SD27
PL17		SE32・井戸枠
PL18		出土遺物
PL19		出土遺物
PL20		出土遺物
PL21		出土遺物
PL22		出土遺物
PL23		曲遺跡B地区航空写真
PL24		発掘調査後全景
PL25		SB1・SB4・SB6
PL26		SK5・SX9
PL27		SX3・SX3断面
PL28		SX3底部敷石・SX7
PL29		出土遺物
PL30		出土遺物
PL31		出土遺物
PL32	金剛坂遺跡	航空写真・北区全景
PL33		森田地区・南区空中写真
PL34		SK1・SX2
PL35		SX3・SX4・SX5
PL36		SX6・SX7
PL37		SX8・SB13
PL38		SX9・SX6
PL39		SX7・SX8
PL40		出土遺物
PL41		出土遺物
PL42		出土遺物
PL43		辰ノ口地区調査前風景・調査後風景
PL44		発掘調査後・SX13
PL45		SB9・SB11
PL46		SF14・SK17
PL47		出土遺物
PL48		出土遺物
PL49	平松代遺跡	調査区全景・出土遺物
PL50	青ノ代遺跡	航空写真・調査前風景
PL51		調査前風景・Eトレンチ全景
PL52		発掘調査風景・B地区全景
PL53		B地区遺構近景・SX1
PL54		出土遺物
PL55	観音寺遺跡	航空写真・発掘区全景
PL56		調査風景・SX29
PL57		SB1・SB1貯蔵穴
PL58		SB2・SB3
PL59		SB6・6・SB13
PL60		SB16・中世城館航空写真
PL61		SB19・20・SB15、18
PL62		SB26・SB12・SP57
PL63		SK43・SB27、28
PL64		出土遺物
PL65		出土遺物
PL66		出土遺物
PL67		出土遺物
PL68		出土遺物
PL69		出土遺物
PL70	岸本遺跡	SB1・SK2
PL71		出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図　調査遺跡位置図
第 2 図　古 市 遺 跡　遺跡位置図…… 9
第 3 図　遺跡地形図…… 10
第 4 図　地形分類図…… 11
第 5 図　地質図…… 12
第 6 図　発掘区平面図…… 14
第 7 図　遺構平面図…… 17
第 8 図　遺構平面図…… 18
第 9 図　Ａ・Ｂトレンチ柱穴群実測図…… 19
第 10 図　Ｅ・Ｆトレンチ柱穴群実測図…… 20
第 11 図　SD19・SD20・SE21・SD22・SD23実測図… 21
第 12 図　ＳＫ28、29、30、31実測図…… 23
第 13 図　遺物実測図…… 25
第 14 図　遺物実測図…… 29
第 15 図　縄文時代遺物実測図… 31
第 16 図　包含層出土遺物実測図(1)…… 33
第 17 図　包含層出土遺物実測図(2)…… 35
第 18 図　石製品・金属製品・瓦・鋳貨…… 38
第 19 図　古市遺跡における調理・貯蔵形態の流れ… 44
第 20 図　古市遺跡における煮沸形態の流れ…… 45
第 21 図　古市遺跡における供膳形態の流れ…… 46
第 22 図　曲 遺 跡　遺跡位置図…… 47
第 23 図　遺跡地形図…… 48
第 24 図　発掘区平面図…… 49
第 25 図　Ａ地区遺構平面図・遺構配置図…… 51
第 26 図　ＳＢ１～３実測図… 54
第 27 図　ＳＥ６・ＳＥ７井戸実測図…… 54
第 28 図　ＳＥ６井戸枠の組手模式図…… 54
第 29 図　ＳＢ19～22・ＳＢ31実測図…… 55
第 30 図　ＳＢ23・24・29・30実測図…… 56
第 31 図　ＳＥ32井戸実測図… 57
第 32 図　ＳＥ32井戸枠の組手模式図…… 57
第 33 図　ＳＢ38～40・42実測図…… 58
第 34 図　Ａ地区縄文～奈良時代の遺物実測図…… 63
第 35 図　ＳＥ32出土遺物実測図…… 70
第 36 図　ＳＥ32掘形・ＳＢ36出土遺物実測図…… 71
第 37 図　ＳＢ10・ＳＢ29・ＳＤ９出土遺物実測図… 72
第 38 図　平安時代包含層出土遺物実測図…… 73
第 39 図　中世、及びその他包含層出土遺物…… 74
第 40 図　ＳＥ６出土木製品実測図…… 75
第 41 図　ＳＥ６・ＳＥ７出土木製品実測図…… 76
第 42 図　ＳＥ32出土木製品実測図…… 77
第 43 図　Ｂ地区遺構平面図… 79
第 44 図　ＳＫ５実測図…… 80
第 45 図　ＳＸ３遺構実測図… 81
第 46 図　ＳＸ９実測図…… 81
第 47 図　Ｂ地区縄文～奈良時代遺物実測図…… 86
第 48 図　ＳＫ５出土土器実測図…… 87
第 49 図　遺物実測図…… 88
第 50 図　中世墓（ＳＸ３）出

		土遺物実測図……	89
第51図	金剛坂遺跡	遺跡位置図……	93
第52図		遺跡地形図……	95
第53図		発掘区平面図……	96
第54図		ＳＫ１・ＳＸ２実測図……	97
第55図		森田地区遺構平面図……	98
第56図		ＳＸ３～９、ＳＸ10・ＳＤ11、12実測図…	99～100
第57図		ＳＸ６遺物出土状況……	101
第58図		ＳＸ９実測図……	101
第59図		ＳＸ８・ＳＢ13実測図……	102
第60図		ＳＫ１出土遺物実測図……	104
第61図		ＳＫ３～８出土遺物実測図……	106
第62図		ＳＫ10・ＳＤ11・包含層出土遺物実測図…	108
第63図		ＳＸ８・ＳＦ14実測図……	110
第64図		辰ノ口地区遺構平面図……	111
第65図		竪穴住居・掘立柱建物実測図……	112
第66図		ＳＤ７・ＳＤ８断面実測図……	113
第67図		ＳＫ16実測図……	114
第68図		弥生時代遺物実測図……	115
第69図		古墳時代遺物実測図……	116
第70図		奈良時代遺物実測図……	117
第71図		鎌倉～室町時代土器実測図……	118
第72図	平松代遺跡	遺跡位置図……	121
第73図		遺跡地形図……	122
第74図		発掘区平面図……	122
第75図		遺物実測図・拓影…	123
第76図	青ノ代遺跡	遺跡位置図……	125
第77図		遺跡地形図……	126
第78図		発掘区位置図……	127
第79図		Ｂ区遺構平面図・ＳＢ１実測図……	128
第80図		遺物実測図……	131
第81図		遺物実測図……	133
第82図	観音寺遺跡	遺跡位置図……	137
第83図		遺跡地形図……	138
第84図		遺構平面図……	139
第85図		遺構配置図……	140
第86図		ＳＢ３実測図……	141
第87図		ＳＢ１・２・４実測図……	141
第88図		ＳＸ１・ＳＢ６～８11・ＳＫ32実測図…	142
第89図		ＳＢ４・９・10・17ＳＤ36・49実測図…	143
第90図		ＳＢ12・13・14実測図……	144
第91図		ＳＢ16・21・22実測図……	145
第92図		中世堀南北土層断面図……	146
第93図		中世堀東西土層断面図……	146
第94図		ＳＤ42土層断面図…	146
第95図		中世館跡遺構平面図……	147
第96図		ＳＢ26実測図……	148
第97図		ＳＥ59実測図……	149
第98図		ＳＢ15・18実測図…	150
第99図		ＳＢ19・20実測図‥	150
第100図		ＳＢ27実測図……	151
第101図		ＳＢ28実測図……	151
第102図		ＳＫ43実測図……	151
第103図		ＳＸ29出土遺物……	153
第104図		ＳＸ29出土遺物……	154
第105図		ＳＢ１出土遺物……	156
第106図		ＳＢ２・3出土遺物…	157

第107図　奈良時代の遺物……159
第108図　鎌倉時代の遺物……160
第109図　室町時代の遺物……162
第110図　岸本遺跡　遺跡位置図……171
第111図　遺跡範囲図……173
第112図　発掘区域図……173
第113図　遺構平面図……175
第114図　ＳＫ２・ＳＫ３平面図・断面図……176
第115図　遺物実測図……177

表　目　次

第１表　昭和59年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財一覧……3
第２表　発掘調査遺跡一覧……4
第３表　現地説明会開催一覧……4
第４表　古市遺跡試掘結果一覧……15
第５表　柱列一覧……16
第６表　曲遺跡　Ａ地区掘立柱建物一覧表……59
第７表　Ａ地区柵列一覧表……59
第８表　木製品一覧表……72

前　　言

県教育委員会では、各種公共事業の実施予定について、庁内各開発関係課あて事業照会し、当該年度あるいは次年度以降の事業計画をヒアリングするとともに、事業関係図面の添付提出を求めている。

特に圃場整備事業については、麦の転作奨励ともからみ、また通年施工とう工期の限定化も加わり、現実的に遺跡が発掘の要に至った場合の調査期間がかなり短期に制約される場合がほとんどである。

それゆえに、できるだけ早期の事業計画の把握はもとより、測量設計発注前に埋蔵文化財の埋没深度の確認後の田畑の切り盛り調整が必要となってくる。遺跡の把握は第一に分布調査（表面観察）に依るが、埋蔵文化財の属性上、当然掘ってみなければ確証がつかめない点も多く、実際の掘削（試掘調査）による遺構、あるいは遺物包含層等の正確な把握は保護協議の基礎資料として非常に重要となってくる。

また、近世以降の開墾と考えられる段差ある水田面においては遺跡の埋没深度が極めて浅い場合（耕作土直下）も多く、圃場整備の基本施工（表土扱い）との関連で遺跡の保護に支障をきたしている実例も年々増加している。

一方、各種農道整備事業の場合は、一度ルートが決定されるとその設計変更は用地買収ともからみ、非常に困難となるため、測試段階での関係課との綿密な連携により遺跡の周知徹底を事前に図る努力が必要となる。また、このためには事業の直接受益側としての工事域にかかる当該市町村との綿密な相互連絡も当然ながら大切になってこよう。

遺跡はその土地土地と密着して存在しており、広大な農業利用地にもなお数多くの遺跡が眠っている。大化年間に端を発し、あるいはそれ以降の時代の中での古代、あるいは中世の条里制（水田地割）も、昭和の条里土木ともいえる圃場整備（区画整理）によってその土地の歴史は刻々と塗り変えられつつある。土地に刻まれた往時の「字」や「小字」（生き証人としての地名）もすでに滅びつつある段階とも言える。大型機械の使用による開発のスピード化は現代文明促成の落し子とも言えようが、先人の残した貴重な文化遺産・歴史をひもとく精神の余裕も豊かな文化づくりの原点であるかもしれない。

今後とも開発と文化財保護の調整については本来的に幅広い行政哲学の中で位置づけられるべき施策とも考えられるが、なお一層の各関係者へのご理解とご協力を強く望むものである。

1．分布調査

昭和59年度農業基盤整備事業については、昭和58年8月に農林水産部各関係課あてに事業照会を行ない、昭和58年9月にその回答を得た。そこで文化課では早速同年9月～12月にかけて、事業計画図面（縮尺1：1000）をもとに県下の事業予定地全域についての現地踏査〈分布調査〉を実施した。

その結果の詳細は（第1表）の通りであるが、圃場整備事業については事業面積664 *ha*のうちで、62件（遺跡数）、面積にして764,400㎡もの遺物包含地、古墳等を確認した。

一方、農道整備事業関係についても並行して分布調査を実施した結果、広域営農団地基幹農道については7遺跡、揮発油税財源身替農道では大山田南部地区で前山1号墳がルートにかかることが確認された。

これらの分布調査結果については、各々事業主管課である耕地第一課、及び耕地第二課を通して各所轄耕地事務所等に報告するとともに、遺跡の現状保存、あるいは工事設計変更を要請する旨の通知文書を提出した。

事業名	耕地事務所	地区	事業面積(ha)	遺跡名	所在地	遺跡面積(㎡)	措置
県営圃場整備事業	桑名	大安東部	35				
		大安西部	26	堀戸遺跡	員弁郡大安町石榑	17,000	試掘のち工事可
		北勢	16				
		員弁	42	戸上川東北遺跡	員弁郡員弁町	8,000	試掘・工事立合
				大泉東遺跡	〃 大泉	1,200	試掘のち工事可
				長宮遺跡	〃 長宮	22,000	試掘のち工事可
				北金井城跡	〃 北金井	18,000	地区除外
	四日市	鈴鹿第二	17				
		安塚	35	地子遺跡	鈴鹿市地子町	8,000	試掘のち工事可
		深溝	27				
		合川・下之庄	20				
		八風	50	永井A遺跡	三重郡菰野町永井	50,000	試掘のち工事可
				〃 B 〃	〃	600	試掘のち工事可
	津	河芸南部	20				
		三雲東部	25				
		豊地	11	薬王寺遺跡	一志郡嬉野町薬王寺	3,500	試掘のち工事可
				嫁田遺跡	〃	3,000	試掘 〃
		津西部	15	薬王寺A遺跡	津市薬王寺町	1,500	試掘(1000㎡分地区除外)
				薬王寺B遺跡	津市薬王寺町	2,000	試掘のち工事可
		安濃川右岸	10	草生A遺跡	安芸郡安濃町草生	1,500	〃
				〃 B 〃	〃	1,000	〃
				〃 C 〃	〃	3,000	〃
				〃 D 〃	〃	1,500	〃
		美里中南部	22	下の郷A遺跡	安芸郡美里村五百野下之郷	18,000	試掘のち保存(盛土)(排水工事立合)
				〃 B 〃	〃	10,000	試掘
				舞谷遺跡	〃 舞谷	15,000	昭和60年度事業へ
				筒井遺跡	〃 筒井	3,600	試掘のち工事可
				井面遺跡	〃 井面	3,500	〃
		白山西部	20	山田野A遺跡	一志郡白山町山田野	4,500	〃
				〃 B 〃	〃	3,500	〃
				〃 C 〃	〃	20,000	試掘のち盛土保存
		白山	15	古市A遺跡	一志郡白山町古市	4,500	試掘
				〃 B 〃 (古市遺跡)	〃	2,500	〃 (排水路部(2000㎡)のみ本調査、他は盛土保存)
				〃 C 〃 (古市遺跡)	〃	3,600	〃 (排水路部(2000㎡)のみ本調査、他は盛土保存)
				〃 D 〃 (古市遺跡)	〃	35,000	〃 (排水路部(2000㎡)のみ本調査、他は盛土保存)
				〃 E 〃 (古市遺跡)	〃	40,000	〃 (排水路部(2000㎡)のみ本調査、他は盛土保存)
		白山西郎		両構A遺跡	一志郡白山町八対野	17,000	試掘のち工事可
				〃 B 〃	〃	11,000	試掘のち盛土保存
				〃 C 〃	〃	6,000	試掘のち工事可
				〃 D 〃	〃	12,000	〃
	津	津南部	20	磯古遺跡	津市雲出本郷町	1,400	試掘のち工事可
				高峰遺跡	〃 伊倉津町	20,000	昭和60年度事業へ
	松阪	上御糸	6				
		斎宮	30	金剛坂遺跡		100,000	試掘のち盛土保存・本調査(5,050㎡)
		東黒部	30	田の上遺跡	松阪市乙部町	18,000	試掘のち保存(排水のみ工事立会)
		明星	12	明宝苑東方遺跡	多気郡明和町明星	6,000	試掘のち工事可
		堀坂川沿岸	30	曲A遺跡	松阪市曲町	36,000	試掘のち保存・本調査(2,700㎡)
				〃 B 〃	〃	8,000	試掘のち保存・本調査(600㎡)

事業名	耕地事務所	地区	事業面積(ha)	遺跡名	所在地	遺跡面積(㎡)	措置
県営圃場整備事業	伊勢	伊勢南部	30	日向遺跡	伊勢市上野町	3,000	試掘のち工事可
	上野	大山田第一	20	平松A遺跡（平松代遺跡）	阿山郡大山田村平松	12,000	試掘・本調査（800㎡）
				平松B遺跡	〃	7,000	試掘のち工事可
				〃 C 〃	〃	6,500	〃
				猿野A遺跡	〃 猿野	2,100	〃
				〃 B 〃	〃 〃	2,500	〃
		河合	16	千貝A遺跡	阿山郡阿山町千貝	12,000	〃
				〃 B 〃	〃	25,000	〃
		赤目	13	観音寺遺跡	名張市中村	15,000	試掘のち本調査（6,000㎡）
				観音寺A古墳	〃	500	試掘のち工事可
				〃 B 〃	〃	500	地区除外
				中村遺跡	〃	7,000	試掘のち工事可
				浦遺跡	〃 字浦	10,000	試掘のち保存（1,500㎡について61年度に調査）
		上野東部	33	高山古墳	上野市高山	400	地区除外
				高山A遺跡（青ノ代遺跡）	〃	60,000	試掘
				〃 B 〃（青ノ代遺跡）	〃	8,000	〃 本調査(2,000㎡)
				〃 C 〃（青ノ代遺跡）	〃	6,000	〃
				大狭間A遺跡	上野市中友生	2,000	試掘のち工事可
				〃 B 〃	〃	7,000	〃
				上友生遺跡	上野市上友生	15,000	〃
	熊野	相野谷	18				
			664	60件		742,000	
昭和59年からの新規地区	桑名	藤原東部					
	津	久居					
	〃	中郷		北垣外遺跡	一志郡嬉野町森本	20,000	昭和60年度事業へ
	〃	芸濃南部					
	伊勢	村松		村松遺跡	伊勢市村松町	2,000	試掘のち工事可
			総件数	62件	遺跡総面積	764,400	
県営広域営農団地基幹農道整備事業	四日市	北勢二期		永井遺跡	三重郡菰野町永井	1,000	試掘のち工事可
	耕地事務所	北勢南部		深井沢A・B遺跡	鈴鹿市深溝町	3,000	〃
		〃		和無田遺跡	四日市市和無田町	2,500	本年度用買のみ・協議要
	津耕地事務所	中勢地区		岩原A・B遺跡	安芸郡芸濃町岩原	1,600	試掘のち工事可
		〃		相野遺跡	〃 安濃町草生	2,500	〃
	〃	中勢二期		並松遺跡	久居市榊原町	1,200	〃
		〃		浜城跡	一志郡白山町浜城	1,000	地区除外
県営揮発油税財源身替農道整備事業	上野耕地事務所	大山田南部二期		前山古墳（前山1号墳）	阿山郡大山田村富岡	500	本調査（250㎡）

第1表　昭和59年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財一覧

遺　跡　名	所　在　地	調査面積（㎡）	発　掘　調　査　期　間
古　市　遺　跡	一志郡白山町古市	2,000	昭和59年5月28日～同年7月6日
青　ノ　代　遺　跡	上野市高山	2,000	昭和59年5月10日～同年7月25日
観　音　寺　遺　跡	名張市中村	6,000	昭和59年6月22日～同年11月2日
曲　遺　跡	松阪市曲町	3,500	昭和59年10月15日～同年12月10日
金　剛　坂　遺　跡	多気郡明和町金剛坂	1,700（第1次） 2,600（第2次） 750（第3次）	昭和59年6月27日～同年8月31日 昭和59年10月1日～同年12月6日 昭和60年3月4日～同年3月23日
岸　本　遺　跡	飯南郡飯高町深野	500	昭和59年9月9日～同年9月10日
		計　19,050	

第2表　発掘調査遺跡一覧

遺　跡　名	開　催　年　月　日	参　加　人　員
古　市　遺　跡	昭和59年6月30日	80人
観　音　寺　遺　跡	昭和59年10月6日	110人
前　山　1　号　墳	昭和59年11月10日	80人
金　剛　坂　遺　跡	昭和59年11月18日	120人
曲　遺　跡	昭和59年12月8日	150人

第3表　現地説明会開催一覧

2．試掘調査

県営圃場整備事業では、62遺跡のうち、多くは試掘調査を実施することによって遺構、遺物の有無、及び埋没深度等、遺跡の実態を明確化してゆくことになった。それによって遺跡の拡がり、遺物包含層の深度を正確に把握し、工法上の切り盛り調整をはかる資料とし、遺跡保護に立脚した工事設計変更等について具体的に各耕地事務所との間で協議をもった。

一方、員弁町北金井城跡（町指定）と、古墳と推定された上野市高山古墳等については当初から地区除外という形で現状保存されることになった。

中でも歴史的に著名な明和町金剛坂遺跡は、試掘をするまでもなく台地上全体（約10万㎡）に遺跡が拡がることは確実であり、その全面的な保存を強く要請した。その結果、縦横に走る排水路、道路等の構築物についての設計変更は不可能であり、本調査を実施することとなり、面については基本的に客土による盛土工法に変更することとなった。しかし、台地北辺部については地元の水田化要望ともからみ、面積約5,000㎡については本調査実施を余儀なくされた。

中勢に位置する白山町古市遺跡は現古市集落をはさむ県道の南側一帯（約7万㎡）の広範囲に遺物散布がみられ、試掘調査は全面対象を余儀なくされたが、試掘時が麦刈り入れ以前にかかり、おのずと試掘個所が限定された。概観的には当初予想していた

雲出川に沿って東西に長くのびる河岸段丘上ではなく、現集落に近い県道付近を中心に室町時代の遺構が拡がることが判明した。古市に限らず、14～15世紀の集落は現集落に重複した形で埋没している場合が多いのではなかろうか。

伊賀では名張市の赤目工区に所在する観音寺遺跡、上野東部に属する上野市青ノ代遺跡等でも広大な遺跡面積をかかえ、それぞれ試掘後に至っても度重なる保護協議を継続していった。また、これらの地区では現水田が段々状を呈し、かなりの比高差をもち、必然的に圃場整備における切り盛りが大きくなることも調整を一層難行させた。特に近年、中世遺跡の発見例も多く、またその埋没深度が極めて浅いために、工事においては表土（耕作土）さえ触れることが許されないケースが年々増加してきている。

ここに至っては文化財の保護論理と圃場整備の最低限の有効論理が全く相反する現象として相剋してしまう。

農免道路関係についても、県圃に並行する形で試掘調査等を実施してきた。特に大山田村前山１号墳については横穴式石室古墳のほゞ中心が道路の幅にかかり墳丘全体の約半分についてが破壊の対象となったため、その取り扱い（保護にしても、本調査としてもその範囲の問題等）が取り沙汰された。従来も経験しているが、古墳の周溝の一部等にかかった場合など、遺跡の保護はさておき、調査の範囲設定(調査費の適用範囲とのからみ)については相互の理解を異にすることもある。他のあらゆる種類の遺跡についても言えようが、特に古墳の場合、周溝は墳丘と一体化して存在するものであり、たとえ一部であっても遺跡環境の現状変更として考えざるを得ないであろうし、今後は遺跡の保存とその在り方（環境立地を含めたその内容と質）についても環境論をも含蓄した更なる論議を尽くす段階にあろう。

３．第一次調査

４月、及び５月の上半期はなお各地区で協議と調整が続行されたが、特に今後の追加分の試掘調査結果によっては大きく調査対象面積が拡大される恐れのある上野市青ノ代遺跡は５月10日に、白山町古市遺跡は５月28日に調査を開始した。いずれも排水路部を中心とした線的調査であったが、２遺跡とも分布調査、及び第１次の試掘調査段階では膨大な面積が推定され、とりあえず調査の進展と並行して協議をしてゆくこととなった。

一方、大部分は盛土保存の方向に至った明和町金剛坂遺跡は畑作の取り入れ時期とからみ、梅雨明けの６月末に、伊賀では本年度の面調査の最大をかかえる名張市観音寺遺跡の発掘調査をほぼ同時期に開始した。金剛坂遺跡はまず排水路関係の調査を実施し、その後、秋段階で台地北辺部の面調査を行なう予定となった。年々１～２件生じているが、本年度も、麦、野菜等の作付によって調査の手順をしばしば変更することを余儀なくされ、開始前の地元への作物了解の不徹底さが各地区でみられ、圃場整備事業地内での調査遂行上の大きな課題として本年度も残った。

４．第二次調査

例年にない酷暑の夏をむかえた中、なお第一次調査は各地区で継続されたが、一方では秋以降に控えた第二次調査を準備した。

９月当初からは大山田村前山１号墳、10月に入ってからは、明和町金剛坂遺跡の面調査、ひきつづき松阪市曲遺跡の調査を開始した。

前山１号墳は当初、径10m前後の通常規模のかなり破壊のすすんだ横穴式石室墳と推定していたが、調査が進むにつれて、石室の遺存状況の良好さに加え、墳丘部に貼石をめぐらす特異な古墳であることが明らかになってきた。当初から当古墳の一部は道路予定幅外にあり、その内容何如によっては道路そのもののルート変更と埋め戻し保存を要望しており、この点については協議済みであった。

排水路調査後の面調査に移った金剛坂遺跡は各所に近年の壁土採りの穴があり、遺構の残存状況は決して芳しいものではなかったものの、予想していた通りの方形周溝墓等が検出された。

金剛坂遺跡は旧国道23号線以北の台地を中心に、又、道路をへだてた以南にも大きく拡がる大集落跡と推定され、北側は勿論のこと、南側の台地についても当初の設計協議段階で、基本的に客土による盛土工法（保存）の線で了解されていた。しかし、その一部が、耕地事務所と施工業者との間の連絡不徹底のため、包含層、及び地山の一部が工事削平されるという不詳事をひきおこした。至急、耕地事務所と連絡をとり、そのいきさつをただしたが、その根幹には強い地元要望ともからみ、業者が速断して走ったとの旨であった。しかし、こうした軽動は、基本的ルールとして許容されるものでもなく、今後の耕地側との保護協議そのものの在り方を検討せざるを得ない結果となったことははなはだ遺憾である。

終局的には、やむなく記録保存の徹底を図り、その後は埋め戻すという方向で収終せざるを得なかった。

5．本年度調査と文化財保護

昭和59年度農業基盤整備事業地域内にかかる埋蔵文化財の発掘調査は計７件となった。

試掘調査はほぼ県下全域に及び、また工事着工前、工事中等の立ち会い調査等を入れると年間の現場日数が非常に多く、出土品の整理、報告書作成、研究、普及公開等に費すことができる日数は微々たるのが現状である。

間断なく進む開発のペースは、大型機械の導入によってよりスピード化するなか、時間を十分に必要とし、且つ綿密な調査を要する遺跡発掘はまさに他次元的世界にさえおぼえる。

本年度も原則的には遺跡の破壊という反面、多くの学問的成果を得た。中でも金剛坂遺跡は排水路部の調査、台地北辺の面調査等、３次にわたる大がかりな調査となった。当遺跡は明治年間にハレス式土器が発見され、又昭和45年の土砂採取にかかる明和町主体の発掘調査による数々の成果によって、南勢地方屈指の標式遺跡として重要な位置を占めてきた。

今回の調査でも弥生時代後期を中心とする方形周溝墓群が検出され、墓域がさらに台地北縁部まで拡がることが確認された。集落とそれを営む墓地との立地関係については未解明の課題として残したが、排水路部調査で出土した良好な弥生時代前期の土器資料は、当地方における弥生文化の波及過程、土器編年上において貴重な資料となろう。

松阪市曲遺跡では奈良時代後半から平安時代全般を通しての掘立柱建物群、井戸等を検出した。平安期の集落、その構造については不明な点も多いが、当遺跡では20点余の緑釉陶器をはじめ、灰釉陶器も多く出土しており、その当時のこれらの土器の普及率ともからめて遺跡の性格を知る上で今後とも検討を要しよう。

伊賀地域では名張市観音寺遺跡が注目される。弥生時代後期前半の方形周溝墓検出は伊賀で初例であり、又これまで比較的資料の薄かったこの期の土器一括資料は伊賀地域の弥生後期土器編年の上で重要となる。また、調査区西辺で検出された奈良時代の方形掘形をもつ整然とした掘立柱建物群は円面硯出土とも相まって遺跡の性格の一端を知る上で興味深い。

大山田村前山１号墳は６世紀後半から７世紀前葉にわたる横穴式石室墳であるが、その出土遺物には目を見張るものがある。通常の副葬品の他、馬具、鉄刀等が出土し、鉄刀柄には銀象嵌による亀甲文が施されており、全国的出土例（約20例）をからめて新聞紙上をにぎわかせた。また当古墳が、幸いルート変更により、全壊の危機を脱したことは言外の至上の喜びでもあった。

その他、白山町古市遺跡では排水路幅ではあったが、15～16世紀の中世村落跡を垣間み、県下各所でそれぞれの発見と資料の蓄積的成果を得た。

調査の途中段階、あるいは終了時にはできるだけ地元を中心とした多数の人々に遺跡の理解、埋蔵文化財の大切さを知っていただけるよう現地の説明会

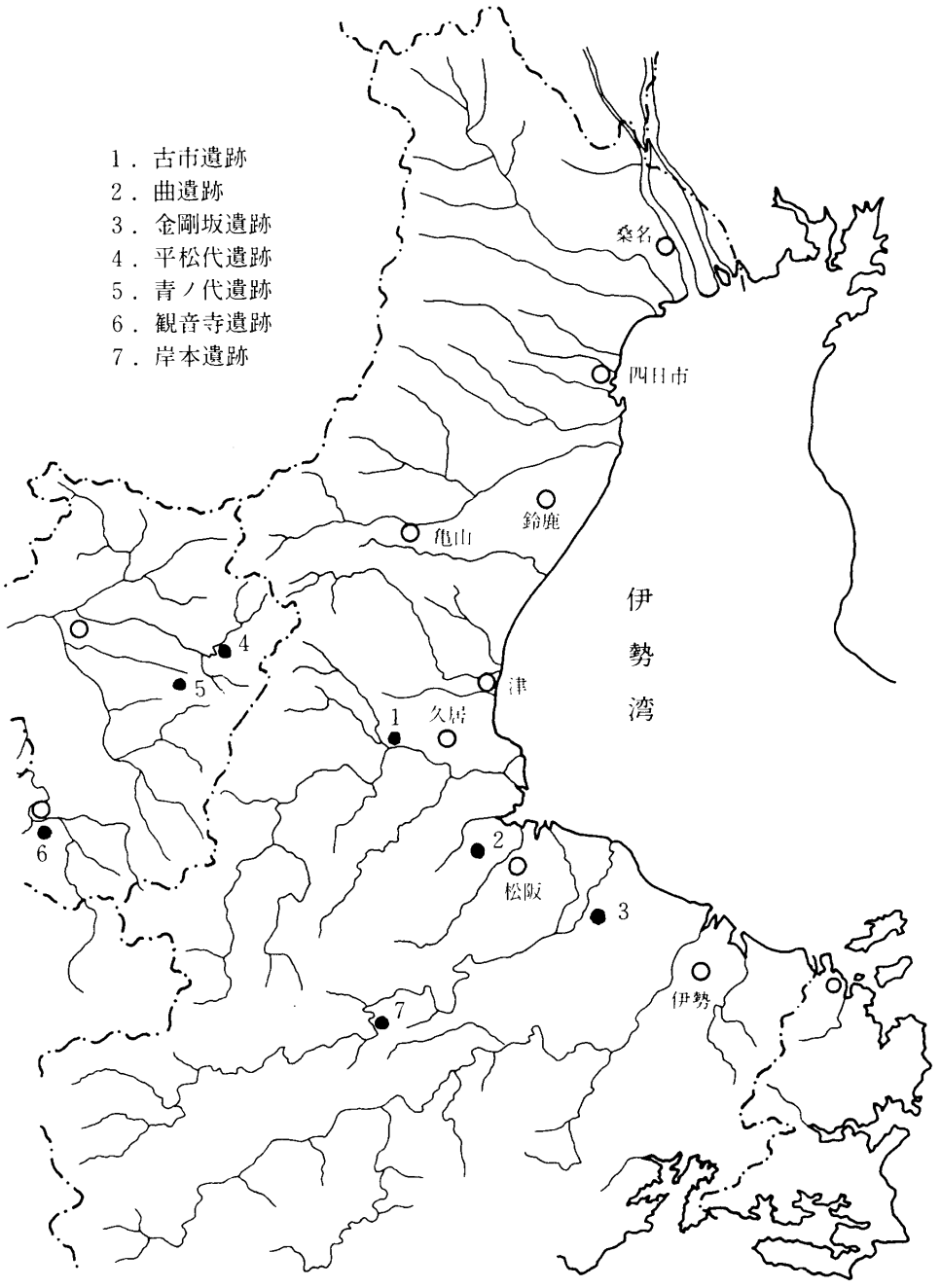
を実施した。

いずれの地区でも現水田、あるいは畑地の下に思いも寄らぬ過去の文化遺産を目のあたりにして、悠久の歴史の重さに感じ触れ、多くの参加と共鳴を得ることができた。

分布調査にはじまり、各現地での発掘調査の完了にいたる長い期間、各土地改良区、各耕地事務所には調査遂行の円滑化のために多くのご配慮とご協力をいただいた。無論、各現場にあっては地元の多くの人々の惜しみないご援助とご理解を得ることができた。一方、公務多用の中にあたって、同志の斎宮跡調査事務所、各市町村教育委員会の各位には調査の推進にあたって格別のご高配を賜わった。

以上、文末ながら記して多大なる感謝の意を表したい。

（新田　洋）



第１図　調査遺跡位置図

Ⅰ　一志郡白山町　古市遺跡

1．位置と環境

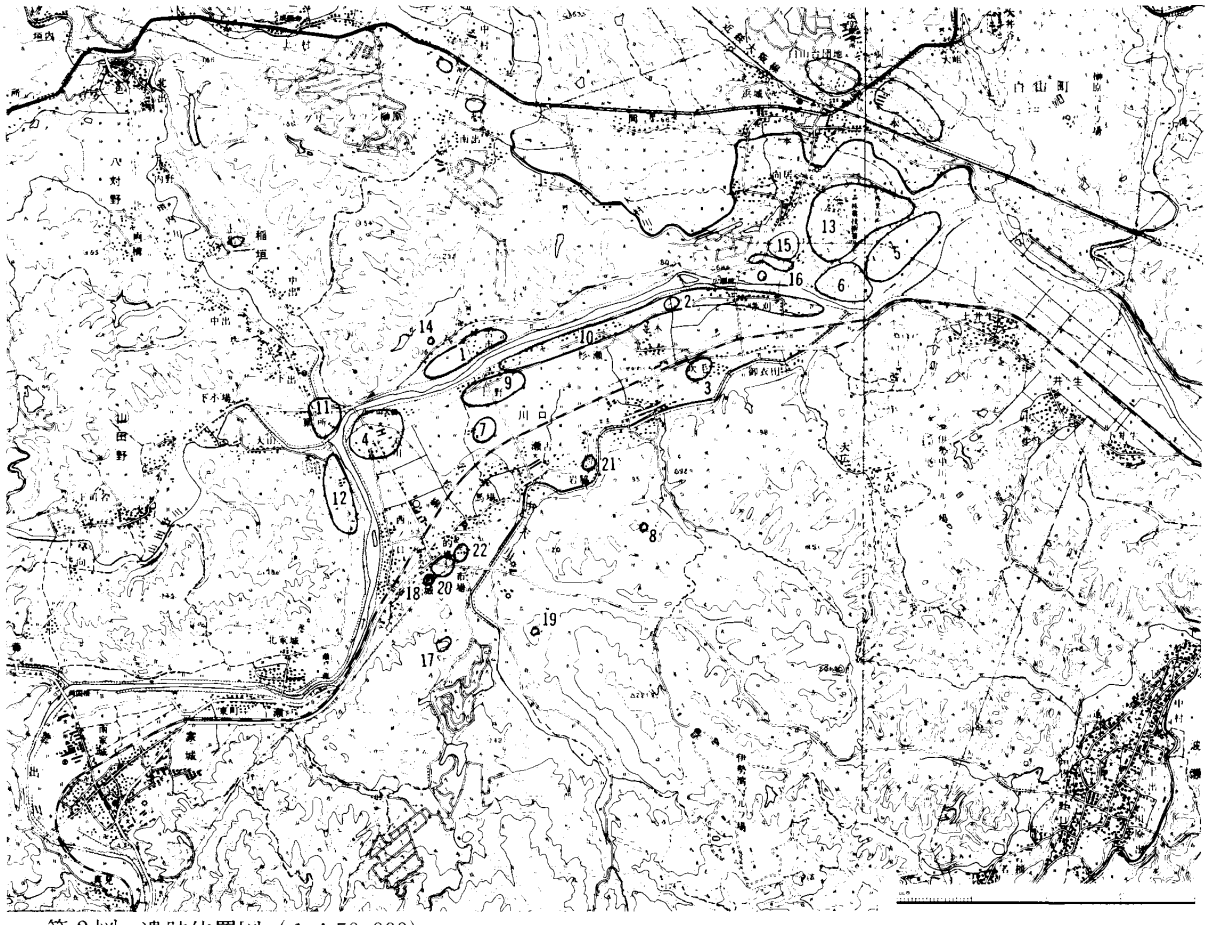
雲出川は、奈良県との境を東西走する高見山地の三峰山（1,235 m）付近に源を発し、蛇行しながら北流し、白山町家城付近では家城ラインと呼ばれる渓谷を形成しつつ、川口付近においては割合広い河岸段丘を形成している。

家城付近から流れを東に変えた雲出川は、近鉄大阪線と交差したあたりから下流域において、肥沃な沖積平野を形成し、伊勢湾に注いでいる。

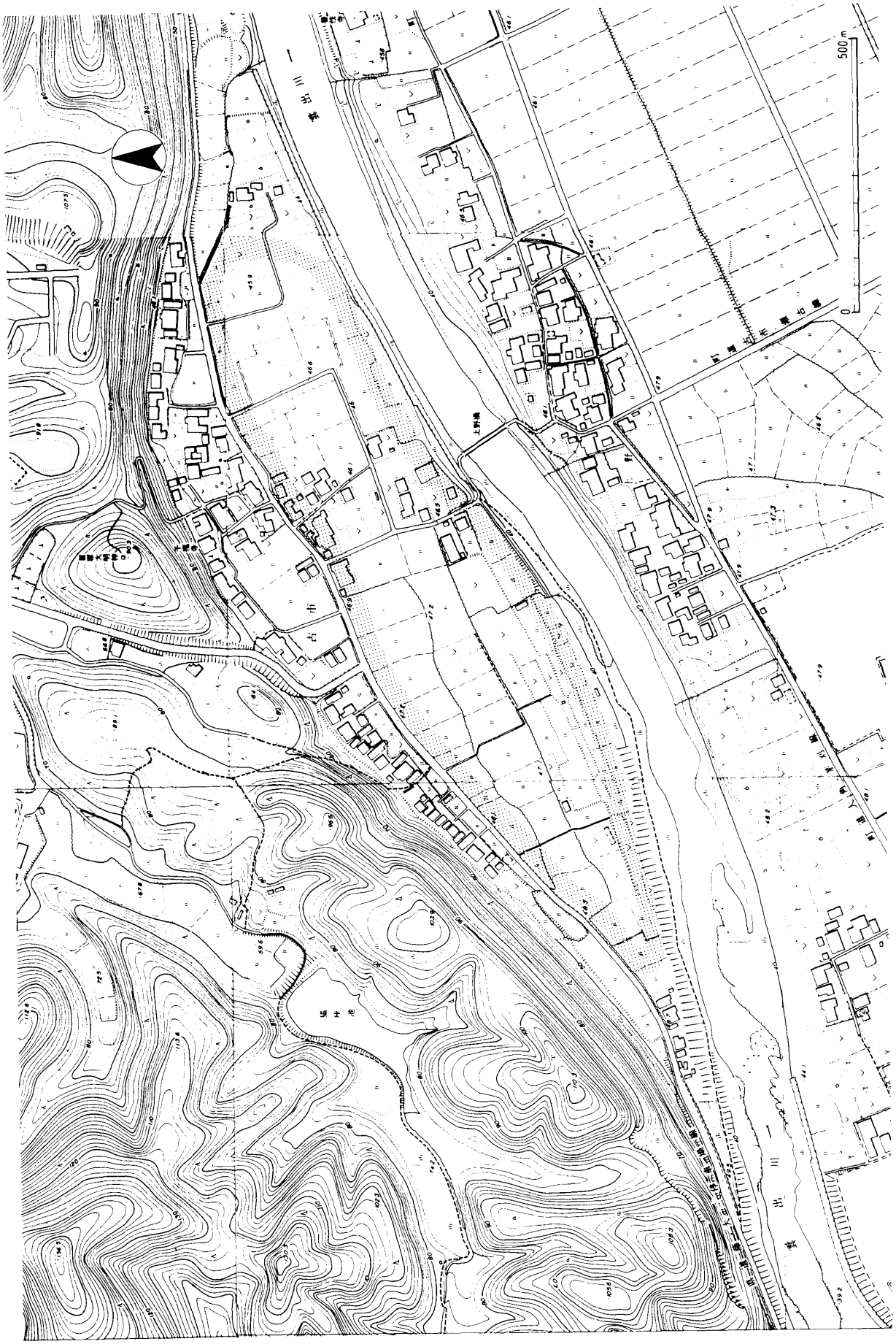
古市遺跡（1）は、この雲出川中流域左岸の、河岸段丘低位面に位置する。古市における河床と段丘面との比高は約7～10mで、段丘面の標高は46m前後である。現状は水田である。また行政上は、一志郡白山町古市字前川原、中切、東沖に属している。

当遺跡の周辺には、縄文時代の遺跡として、馬乗岩遺跡①（2）、吹毛遺跡（3）、大角遺跡②（4）、市河原遺跡（5）、岩井戸遺跡（6）等があるが、詳細は不明である。

弥生時代の遺跡も、段丘面上に多く確認されている。大角遺跡では昭和57年に一部調査が行われ、弥生時代中期の竪穴住居跡が2棟検出された。また昭和46年に調査された野田浦遺跡③（7）では、中期の土器の出土があった。その他、風呂谷銅鐸発見地（8）、上野西遺跡（9）や、東西約2kmに長くのびる川口北方遺跡（10）等があり、雲出川右岸の段丘面一帯に、弥生人の生活が展開したことを示している。一方、左岸でも、大角遺跡の対岸の算所遺跡（11）や



第2図　遺跡位置図（1：50,000）



第3図　遺跡地形図（1：5,000）網目が遺跡範囲

北家城遺跡（12）があるほか、やや下流になるが、二本木の林業技術センターが立地している和遅野遺跡④（13）がある。この遺跡は、雲出川中流域における弥生時代の拠点的集落と考えられている。

古墳については、集中的なまとまりをみせる群集墳は確認されていない。

古市の集落を見おろす標高約80mの丘陵上に、径11mで横穴式石室を有する円墳の古市古墳（14）がある。また古市古墳と県道を隔てた東側には首塚と呼ばれる小祠があるが、これは破壊された円墳上に建てられたものである。その他、岩井戸古墳群（15）、岩井戸幸方古墳（16）、馬廻古墳群（17）、狭間古墳(18)、コメンド山古墳（19）等、1～2基単位の小規模な円墳と考えられるものがあるにすぎない。

奈良時代以降についてみると、河口関跡（20）が当地方の歴史を考える上で、重要なものとなろう。『続日本紀』天平12年（740）の条に見える、「河口頓宮」あるいは「関宮」は同所と比定されている。しかし、比定地そのものをも含めて不明であり、今後の課題であるが、種々の文献にあらわれるように、この地が古代にあって、大和・伊賀から伊勢への交通の要衝を占めていたことは事実であろう。また川口の地名は、下流からの遡航地を示すし、古市の地名は、雲出川水運を利用した商業活動の隆盛を連想させる。古市遺跡も、このような古代から中世の地理的・歴史的環境の中でとらえられよう。

周辺の主な遺跡をあげると、野田浦遺跡からは、平安初期の竪穴住居跡1棟のほか室町時代の遺構・遺物が検出された。また昭和57年に発掘調査された岩脇C遺跡⑤（21）でも鎌倉時代後半～室町時代の遺構、遺物が検出されている。このほか、室町時代築造と考えられている川口城跡（22）があり、古市遺跡との関連も考えられる。

（田村陽一）

2．古市周辺の地形と地質

Ⅰ 地　　形

発掘調査が行なわれた古市は、一志郡白山町のほぼ中央に位置している。

南側には、奥一志に源を発する雲出川が流れ、北側は、海抜100 m前後の丘陵が、屏風の如くそそり立っている。

東西に細長く広がる戸数50戸足らずの小さな集落である。

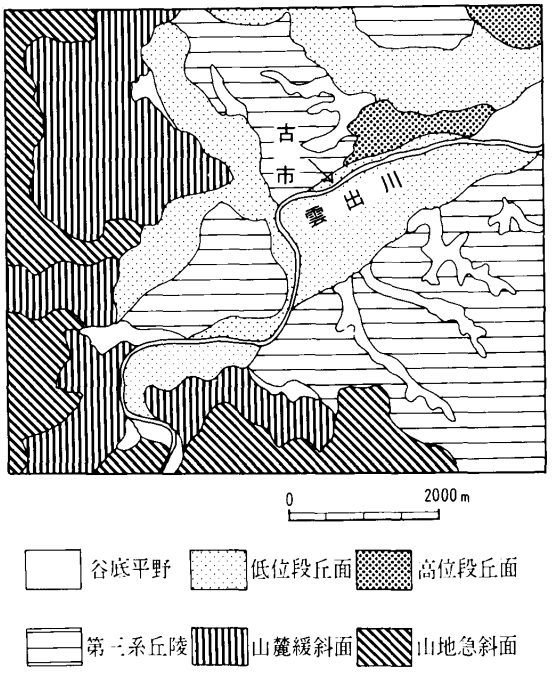
周辺の地形は、布引山脈並びに奥一志に連る山地と、海抜200 m以下の丘陵地、雲出川及びその支流によって開析されて生じた段丘面等で形成され、小さな谷底には、沖積層からなる平地が存在する。

布引山脈は、長野峠から南に次第に高度を増し、笠取山（845 m）から三角点（856 m）までは特に高原性地形を示している。この地域を青山高原と称し、隆起準平原の名残りを留めている。その東側は、急斜面となり、瀑布もかかっているが、海抜300 m以下の地域は再び緩斜面となっている。

南の一志山地も、高峯（548 m）から北は急斜面となっているが、布引山脈と同じく、海抜300 m以下では、山麓緩斜面を形成している。

丘陵地は、古市北方、山田野南方及び川口から波瀬にかけて分布している。いずれも海抜200 m以下が大部分を占め、傾斜角も10°前後以下である。水系も各方向に発達し、谷密度も大である。

台地地形としては、高低の二面が認められる。高



第4図　地形分類図（1：100,000）

位段丘面は、近鉄大三駅北方の台地(白山台)と古市北方丘陵の東半部にある。いずれも海抜100 m余であるが堆積面はよく削剝され、平坦面は殆んどない。

低位段丘面は、雲出川本流並びにその支流によって形成された平坦面である。その上には集落が形成され、稲作に利用されている。

谷底平地は、開析谷にそって各地に分布し山地、丘陵地からの運搬物で埋積され、主に湿田となっている。

Ⅱ 地　　質

1．地質概説

古市周辺の地質は、布引山地及び一志山地を構成する領家帯の片麻岩類と花崗岩類が基盤を形成し、その上に海成の第三紀層である一志層群が堆積している。

本層群は三回の堆積輪廻の産物と考えられ基盤に接する所は、礫岩や粗粒砂岩となっているが、上部は頁岩、シルト岩が多くなっている。又中には凝灰岩層を挟み、凝灰質岩も各所にみられる。

この一志層群は、その後の侵食作用によって、丘陵や平地が生じ、河川の働きによって、高位、低位の段丘堆積層をつくっている。

古市周辺の層序は次のとおりである。

第四紀		沖積層
		段丘堆積層
第三紀	大井累層	三ヶ野頁岩砂岩層
		井関砂岩泥岩層
	波瀬累層	井生泥岩層
先第三系		基盤岩類

2．地質細説

(1) 基盤岩類

県の中央部を東西に走る中央構造線より北側には片麻岩並びに花崗岩が広範囲に分布し、これを領家帯と呼んでいる。古市地区も基盤はやはり領家帯の岩石からなっている。

領家帯は、古生層の中へ花崗岩の岩漿(マグマ)が広域にわたって、地殻の深部において大規模に迸入し、単なる接触変成の程度をこえて混成現象をおこして生じたものとされている。

従って含まれる岩石も、場所によって変化は大きく、南縁部では、片状ホルンフェルスや縞状片麻岩が主流をなしているが、白山町地内では、黒雲母花崗岩や黒雲母片麻岩、所によっては、有色鉱物として角閃石を含む閃緑岩類が多くなっている。これらの岩石中には半花崗岩や変斑糏岩類も含まれている。

一般に白っぽい色をし、結晶が大きい特徴をもっている。

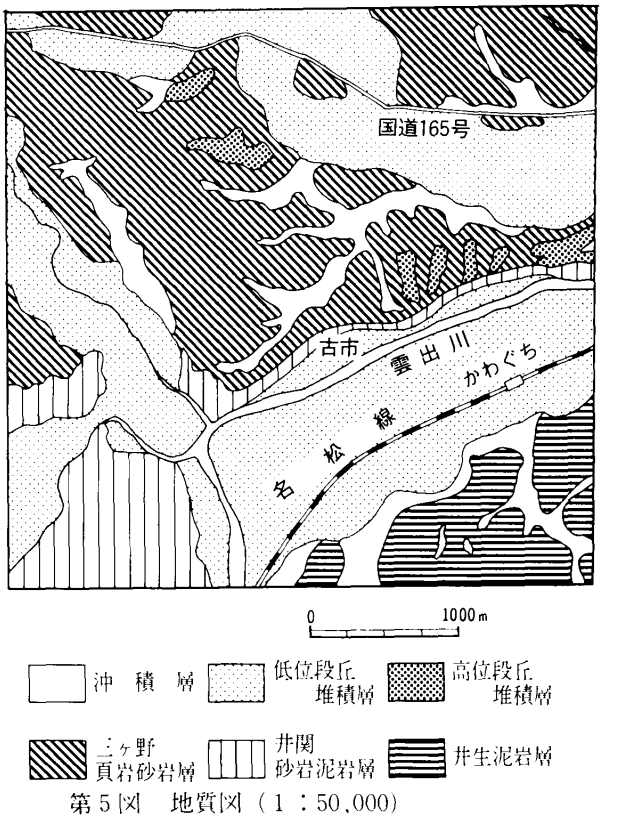
発掘地の土中から掘り出された礫も大部分はこれらの岩石である。

領家帯の生成時代については、含有元素の年令測定の結果、9千万年前後前と推定され中生代白亜紀の中頃である。

(2) 一志層群

基盤岩類が生じて後、わが国は長い間大陸の一部となっていたが、新第三紀中新世の頃になると、三重県の北半部は海底となり、白山町地内では、布引山地の麓まで海水が進入した。当時海の底に土砂が運ばれ堆積したのが一志層群で、約2千万年前のことである。

北は安芸郡芸濃町雲林院から南は一志郡嬉野町小原まで、南北20数kmにわたり、東西も雲出川流域で



第5図　地質図（1：50,000）

約15kmに達している。

白山町の小高い丘陵地や、平地の下部は、殆んど本層群からなっている。

柴田博氏によれば、一志層群は三回の堆積輪廻からなり、下部より波瀬、大井、片田の三累層で構成されている。この内古市周辺に分布するのは、波瀬累層上部と、大井累層である。

A．井生泥岩層

波瀬累層は、一志層群最初の堆積層で、基底礫岩で始まり、上方へ砂岩、泥岩と漸移する。その最上部が井生泥岩層である。雲出川以南に広く分布し、層理のない暗青灰色の泥岩とシルト岩からなっている。風化すれば黄褐色となり、タマネギ状の剥離を示す。貝化石を含み、層厚は約160 mである。

B．井関砂岩泥岩層

一志層群の中央部以南に分布し、白山中学校周辺の丘陵地や川岸及び古市の県道に沿ってみられる。

青灰色細粒～粗粒砂岩と青灰色泥岩又は暗灰色シルト岩の互層からなっている。一般に下部は10cm～40cmの中粒砂岩と泥岩の互層であるが、上部になるにつれ砂岩が優勢となり、最上部は凝灰質である。

層厚は厚い所で150 mに達し、中には二枚貝や巻貝の化石を含んでいる。

C．三ヶ野頁岩砂岩層

一志層群中最も広い分布を示し、古市周辺では稲垣から上ノ村、南出方面に広がる丘陵地を構成している。主に頁岩、シルト岩、砂岩からなり、著しく凝灰質である。

暗灰色～淡褐色を呈し、風化すれば褐色となり、タマネギ状の剥離を示す。

本層は、基盤に近接して変化した小礫まじりの中粒砂岩と、凝灰質頁岩、シルト岩の二種類があり、前者を北長野相、後者を上三ヶ野相としている。古市周辺は後者に属するもので、中には1 m以下の白色をした凝灰岩を挟んでいる。本層中にも二枚貝、巻貝等の化石を多く含んでいる。

3．第　四　系

第四系は洪積層と沖積層に分類されるが、沖積層は、最も新しい堆積層で、谷底平地に僅かに分布するにすぎない。雲出川沿いに発達する平野は、大部分洪積層に属するものである。俗に段丘礫層と呼ばれ、古市周辺では高低二段が認められる。

A．高位段丘堆積層

近鉄大三駅北方の丘陵地(白山台)に広く分布し、大三礫層と呼ばれている。同じものは、古市北方の丘陵上にも、点々と認められる。

礫は花崗岩、片麻岩、ホルンフェルス、石英斑岩、石英安山岩等で、よく円磨された中礫から大礫である。これらの礫は、花崗質中粒～細粒の砂によって比較的よく膠結されている。層理は乏しく、厚さは20m以上ある。基底の分布高度は、120m～100mである。

中に含まれる石英安山岩は、大洞山、尼ヶ岳等室生火山由来のもので、かっての大洪水によって運搬されたものである。

火山の噴出は200万年前後前のことと推定されているので、本段丘堆積層の生成はそれ以後のことと判断される。

B．低位段丘堆積層

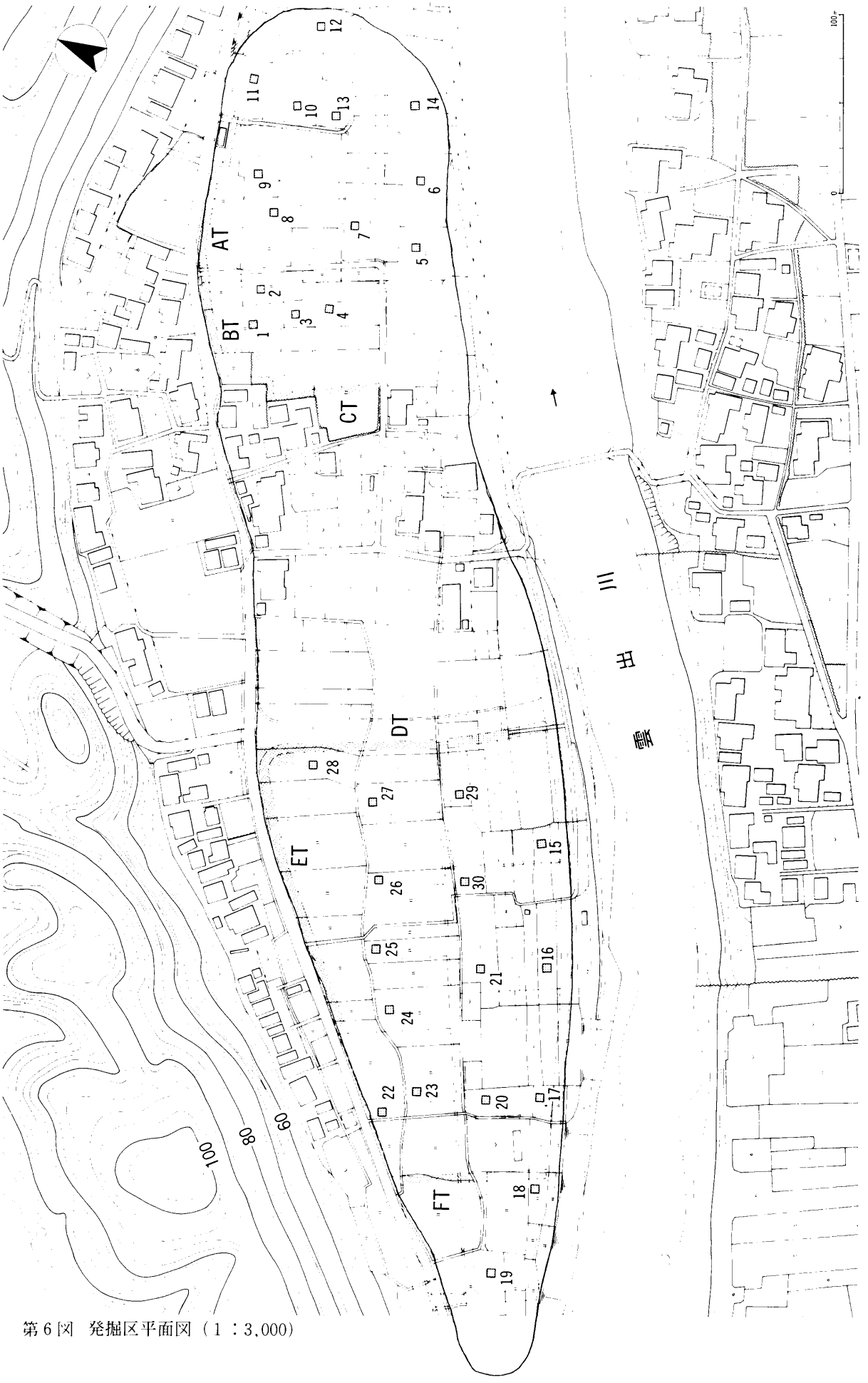
雲出川をはさんで両側に広がる古市と川口の平野及び山田野、八対野、上ノ村から大三に広がる平野は低位段丘堆積層である。

現河床からは数mの高さにあり、川岸に見られる断面によれば、基底はよく円磨された花崗岩及び片麻岩からなり、上部になるにつれて、粗粒から中粒の砂になる。

発掘調査地区の下部には、60cm～150 cmの黄色中粒砂が堆積し、その下には、主にコブシ大以下の円礫が多数みられる。これらの礫は、灰白色粗粒の砂によって充てんされている。

本層には、石英安山岩礫は稀にしか含まず高位段丘堆積層生成当時とは河川の運搬作用も小規模であったものと推論される。

（山本　威）



第6図　発掘区平面図（1：3,000）

3．試掘調査

昭和59年度白山地区県営圃場整備事業に伴なって、白山町古市地区の事業予定地について、昭和58年12月に分布調査を実施した。その結果、遺物の散布が5ヶ所で認められたため、昭和59年1月及び一部を6月に試掘調査した。この結果をもとに協議を重ね、排水路部分に限り発掘調査をすることとなった。

試掘調査の結果は、第4表に示した通りである。出土遺物については後述する遺物の項で、若干とりあげているので参照されたい。

また、圃場整備に関連して県道藤・大三停車場線の付け替え工事が予定され、その工事に伴なう試掘調査を9月に実施した。場所はFトレンチ北西方の県道北側の水田及び畑地であるが、調査の結果遺構・遺物とも検出されなかったことを付記しておく。

G番号	規模(m)	遺構	遺物	備考	G番号	規模(m)	遺構	遺物	備考
1	4×3	ピット	土師器(鍋、皿)		16	3×2.4	なし	なし	
2	5×2.4	土坑墓(2基) ピット	土師器(鍋) 古銭、骨片	土坑墓80×115cm(長方形) 土坑墓80×100cm(隅丸方形)	17	4×4	なし	なし	
3	5×2.6	土坑	土師器片少量		18	5×4	なし	なし	
4	5×2.6	なし	なし		19	4×3	ピット	土師器(鍋)	
5	5×2.6	なし	山茶椀 土師器(羽釜)		20	4×3	ピット	なし	
6	5×2.6	溝・ピット	なし		21	5×3	溝2条 (道か?)	土師器(鍋)	
7	5×2.4	ピット	縄文土器片、剥片 土師器片		22	5×3	ピット	なし	
8	5×2.5	ピット	土師器(鍋)		23	5×4	なし	土師器(鍋)	
9	5×2.6	溝・ピット	土師器片少量		24	5×3.6	井戸、石敷	土師器(鍋)	井戸は素掘り、径1.6m、深さ1.3m 井戸横に1m四方の石敷
10	5×2.6	溝・ピット	弥生土器片 土師器片少量		25	5×4	ピット	中世陶器	
11	5×2.5	ピット	土師器(鍋) サヌカイト片		26	4×3	土坑・ピット	土師器(鍋)	
12	6×2.6	ピット	土師器片少量 天目茶椀		27	5×3	なし	なし	
13	6×2.6	ピット	弥生土器片 土師器片		28	5×3	土坑・ピット	黒色土器 土師器(鍋)	79～82、86、87
14	5×2.6	溝	土師器(鍋、皿) 山茶椀、天目茶椀		29	5×2.5	土坑	なし	
15	5×3	なし	なし		30	4×4	なし	なし	

第4表　試掘結果一覧（備考欄の数字は報文の遺物番号を示す）

4．遺　　構

当遺跡の土層の基本的層序は、上から第Ⅰ層；耕作土、第Ⅱ層；明灰茶色粘質土（床土）、第Ⅲ層；灰褐色砂質土、第Ⅳ層；茶褐色砂質土、第Ⅴ層；黄褐色土（地山）である。

発掘区を東から西へ順次AトレンチからFトレンチと称することにした。東部のA～Bトレンチでは第Ⅱ層下に搬入土の層が介在するほか、東部のトレンチの溝の底などには、青灰色で粘質のグライ化土壌も見られる。一方、西部のD～Eトレンチでは全般に砂質の土壌が卓越する。

遺物包含層は第Ⅳ層で、遺構は第Ⅴ層上面で検出した。また、遺構の埋土はほとんどが茶褐色土であったが、一部の遺構には黒褐色土が埋っていた。

検出した遺構は、掘立柱建物と考えられるものやその他のものも含めた柱列、井戸、溝、土坑などを検出した。しかし、幅2m前後のトレンチ調査のため、掘立柱建物のコーナー部分を確認したものもなく規模や棟方向なども不明であり、掘立柱建物と明言できるものはなかった。そのため第5表ではすべて柱列として扱った（SB11をのぞく）。

時代的には平安時代末期の遺構と、室町時代後半の遺構とに大別できるが、なかには近世のものもある。

Aトレンチの遺構

1．柱穴群

トレンチ西端部で多数の柱穴を検出した。これは西隣のBトレンチ東端部の柱穴群と一連のものと考えられ、ひとつの居住域が想定できよう。その際、SD4およびSD15が、この居住域を画する溝と考えられそうである。

SA1は東西3間の規模で、調査区外北方へ広がる掘立柱建物であると思われる。

2．溝

SD2　肩幅2.4m、底幅1.3m～1.7m、深さ30cmの溝である。北東から南西に向って低くなっている。遺物の出土はなかった。

SD3　幅0.8m～1.2m、深さ70cmで、溝肩に河原石を2～3個積んだ石組溝である。南東から北西に向って低くなる。染付椀や灰釉小皿など、近世陶磁器類が出土した。

SD4　SD3の西に隣接する南北方向の大溝である。肩幅で6.5m、底幅で4.0m、深さ45cmである。底面の一部に河原石が散乱していた。土師器鍋、羽釜片などが出土した。

Bトレンチの遺構

1．柱穴群

トレンチ東端部で多数の柱穴が検出された。これは農道をはさんで東隣のAトレンチ西端部の柱穴群に続くものと考えられる。Aトレンチと同様に柱列を確認するにとどまった。

SB11は東西3間に、柱穴は1個にすぎないが南北1間分を検出した。また、SA9・SA10やAトレンチのSA5・SA6の柱穴内には、根固めの石がみられた。柱穴内から土師器小皿が出土している。

2．溝

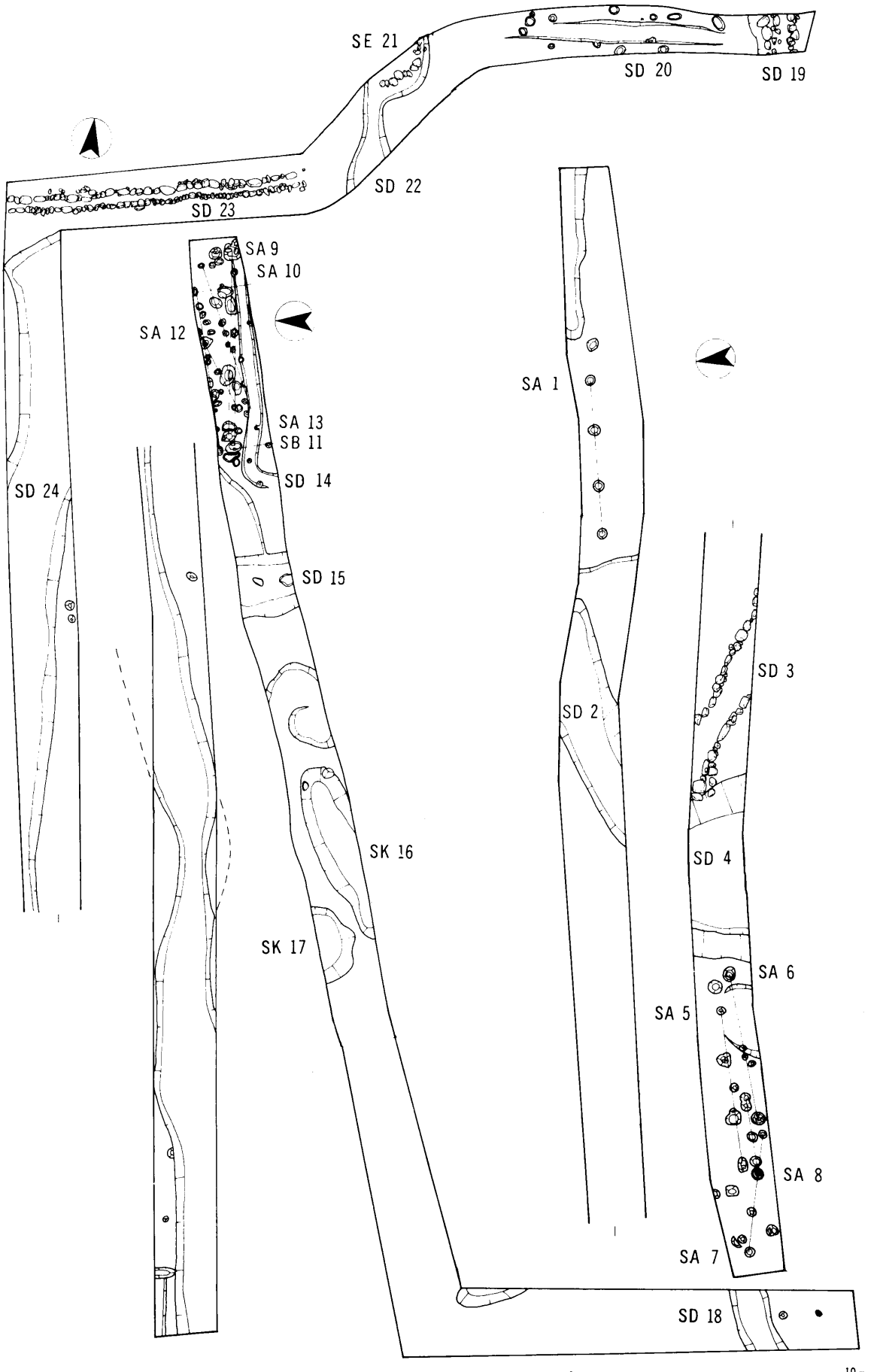
SD14　柱穴群の中を東西に延び、柱穴の途切れる西端で南へ折れる浅い溝である。溝幅は肩幅で0.4m～0.5m、底幅で0.3m～0.4m、深さは12cm～16cmで、底面はほぼ平坦である。

SD15　柱穴群が途切れる所から約3m西にある南北溝で、肩幅が2.0m～2.2m、底幅が1.1m～1.5m、深さが30cmである。底面には大きな河原石が転っていた。Aトレンチにおける柱穴群の西にあるSD4と同様、居住地域を画する溝と考えられる。

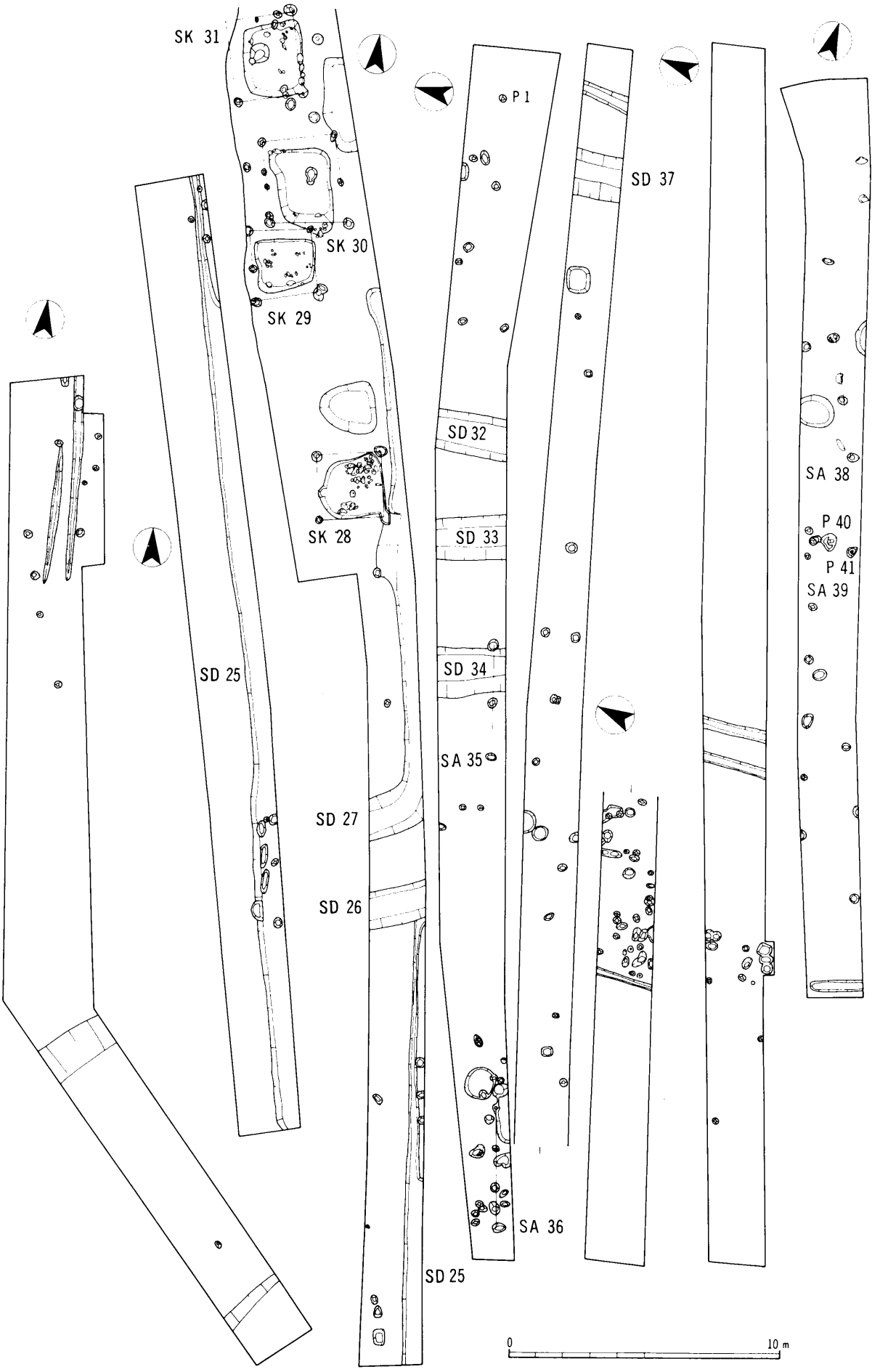
SD18　カギ状になったBトレンチの南端で検出。溝幅は肩幅で1.3m、底幅で0.8m、深さ約20cmの東西溝である。人頭大の河原石が多数散乱していたことから、石組み溝が破壊されたものと考えられる。遺物は土師器片が少量出土したのみである。

トレンチ名	遺構名	柱列軸方向	検出規模	柱間距離（m）	備考
A	SA1	N67°W	東西3間	1.8×2.0×1.8	
	SA5	N83.5°W	東西3間	1.8×2.1×1.8	根固め石あり
	SA6	N88°W	東西2間	2.5×2.5	根固め石あり
	SA7	N69°W	東西3間	1.4×1.4×1.4	
	SA8	N86°W	東西2間	1.4×1.4	
B	SA9	N91°W	東西3間	2.1×2.5×2.0	根固め石あり
	SA10	N93°W	東西3間	2.1×2.1×2.1	〃
	SB11	N101.5°W	東西3間、南北1間	東西1.9×1.9×1.9 南北1.8	
	SA12	N120.5°W	東西2間	1.5×1.5	
	SA13	N121.5°W	東西4間	1.6×1.5×1.6×1.4	
E	SA35	N102.5°W	東西2間	2.1×2.1	
	SA36	N99.5°W	東西3間	1.5×1.5×1.5	
F	SA38	N29°W	南北2間	2.2×2.2	
	SA39	N16.5°W	南北4間	2.0×2.2×2.1×2.2	

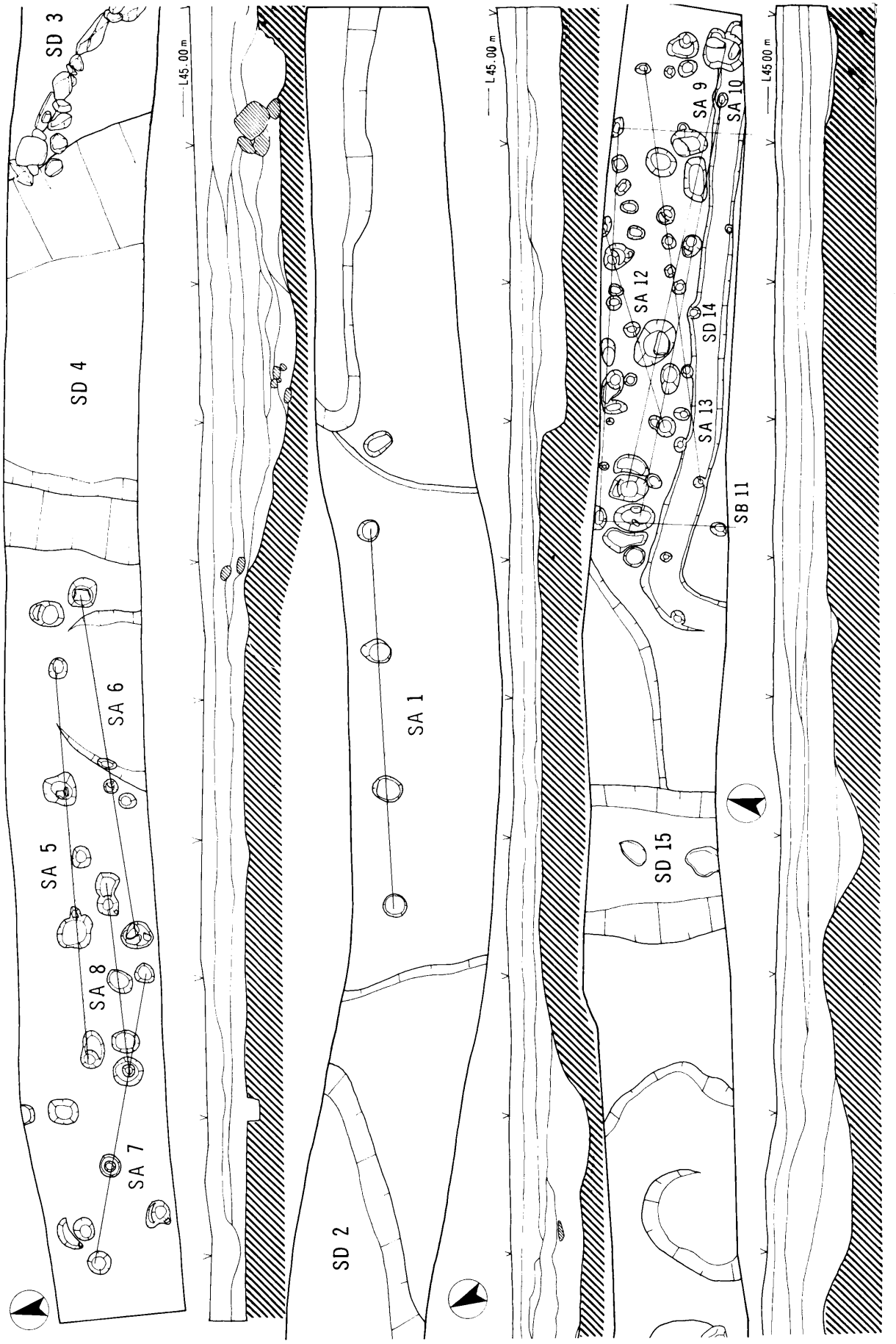
第5表　柱列一覧



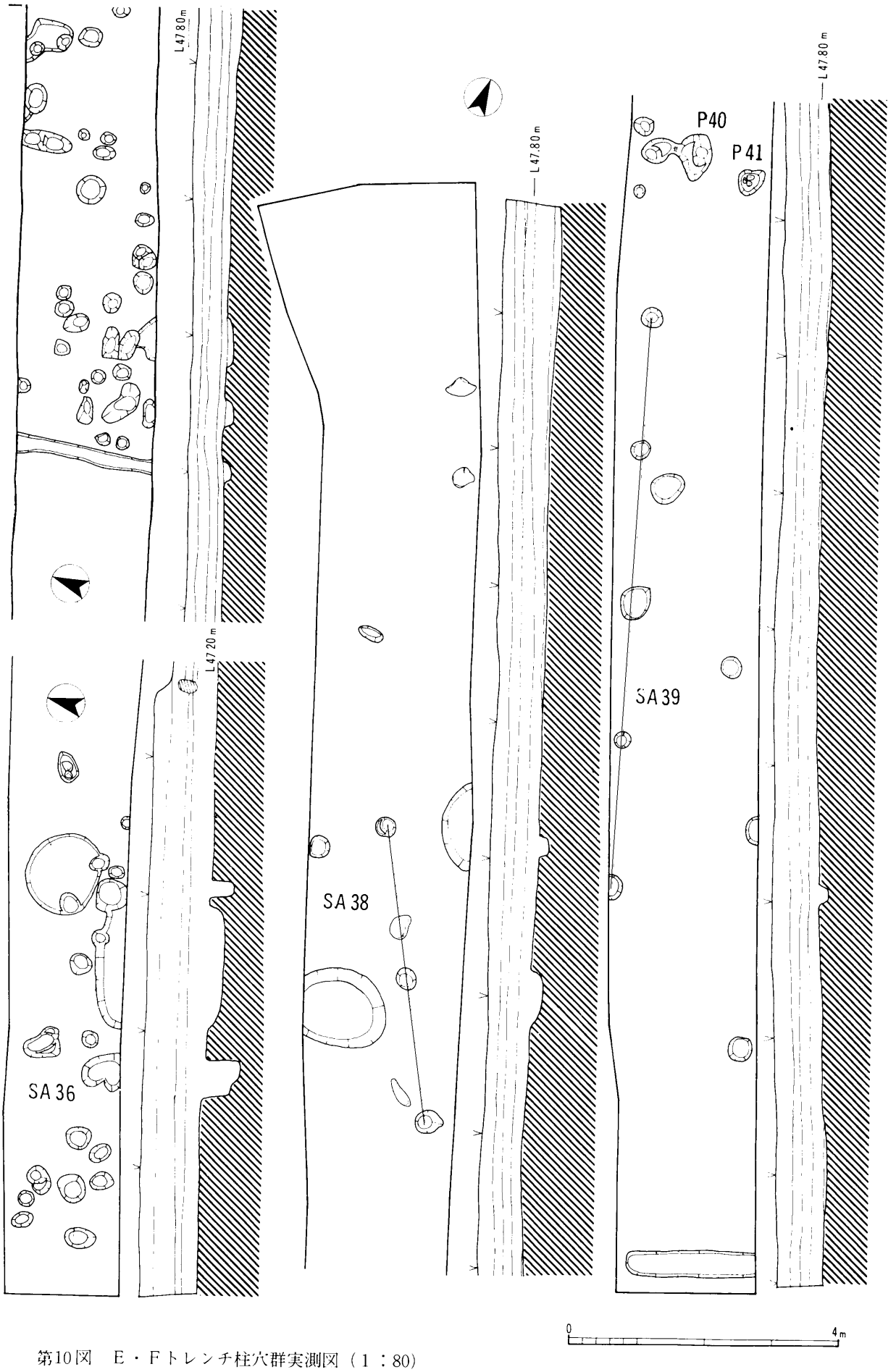
第7図　遺構平面図（A、B、Cトレンチ、1：200）



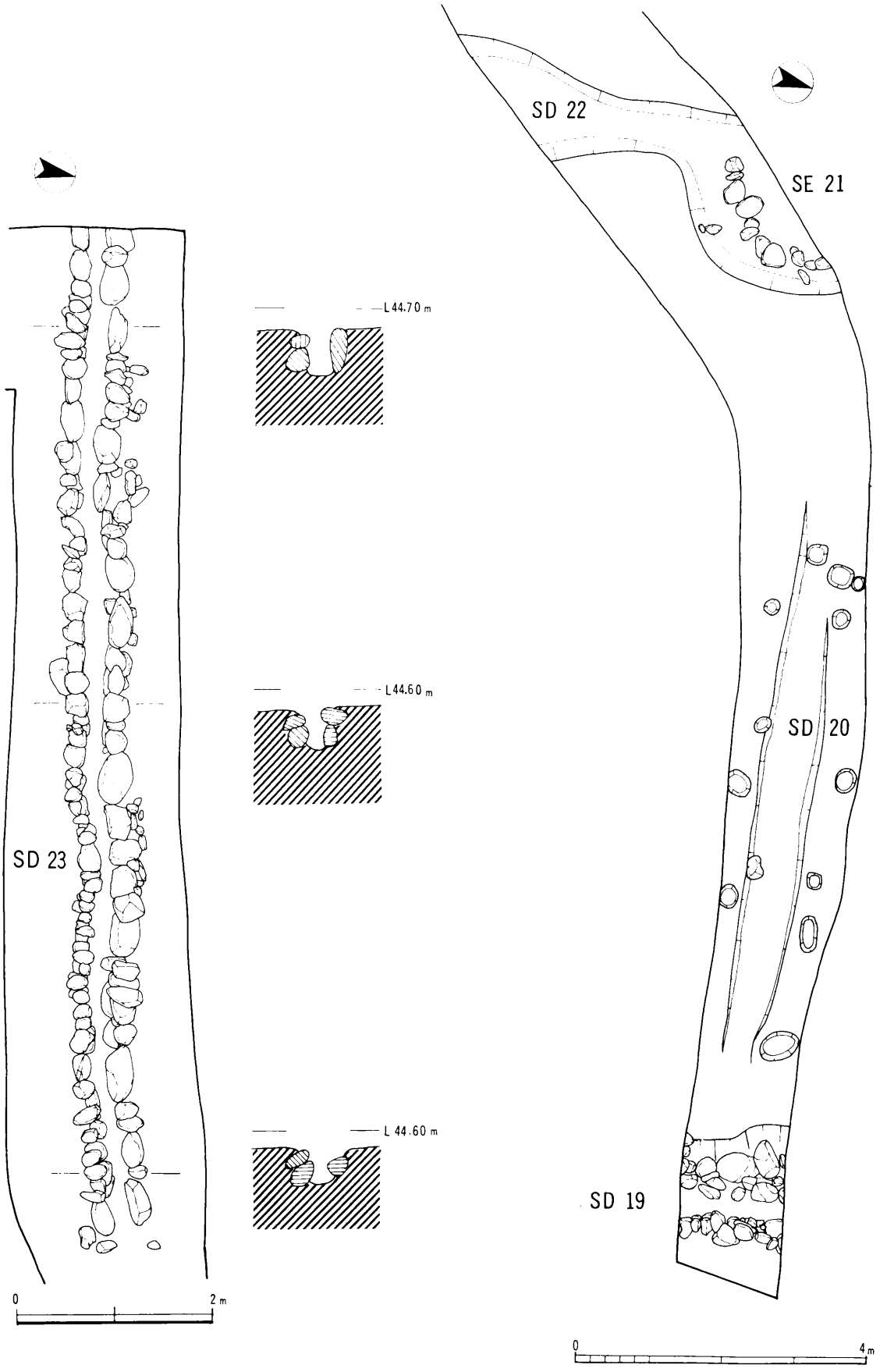
第８図　遺構平面図（D、E、Fトレンチ、１：200）



第9図　A・Bトレンチ柱穴群実測図（1：80）



第10図　E・Fトレンチ柱穴群実測図（1：80）



第11図　ＳＤ19、ＳＤ20、ＳＥ21、ＳＤ22、ＳＤ23実測図（１：80）

3．土　坑

ＳＫ16　1.8m×5.7m、深さ25cm～60cmの長楕円形の土坑で、一部調査区外へ広がる。遺物の出土はなかった。

ＳＫ17　一部調査区外へ広がるが、径2.7m、深さ30cm～40cmの円形にちかい土坑である。遺物の出土はなかった。

Ｃトレンチの遺構

1．井　戸

ＳＥ21　推定径約2mで、河原石を積んだ石組み井戸である。全体の三分の二は調査区外に広がる。
検出直後に豪雨のためトレンチの壁面が崩壊し、隣接する水田が大きく崩壊する恐れがあったため、調査を断念した。

上部の埋土中より土師器鍋（24）が出土している。

2．溝

ＳＤ19　Ｃトレンチ東端で検出した石組みの南北溝である。溝の肩幅は1.6m、底幅で0.5m、深さ約30cmである。河原石を溝の肩に乱雑に積んだ簡単なものである。土師器片が少量出土したにすぎない。

ＳＤ20　ＳＤ19の西で直交する方向に検出された浅い溝である。肩幅0.6m～0.8m、底幅0.5m～0.6mで、深さ8cm～16cmである。溝の底部は平坦である。溝をはさんでピットが多く検出されたことや、周囲に比べてわずかに高い場所であることから、居住区内とも考えられる。

ＳＤ22　ＳＥ21につづく南北溝である。肩幅は0.8m～1.5mで深さ約30cmである。井戸の排水溝かと思われる。

ＳＤ23　Ｃトレンチが東西方向から南北方向に折れる箇所で検出した。トレンチ中央部で東西に現長10.7m延びる石組みの溝である。河原石を2ないし3個ほど乱雑に積んだもので、溝幅20cm、深さ30cm～50cmである。溝は調査区外へ延びている。溝内からの遺物の出土はほとんどなかったが、わずかに擂鉢片（21）が出土したにすぎない。

ＳＤ24　Ｃトレンチの南北方向の部分で、トレンチに沿う南北溝を検出した。溝は肩幅で1.4m～2.3m、底幅で1.0m～2.0m、深さは60cm～80cmの大溝である。南から北へゆるい傾斜をもち、北端のＳＤ23の手前で東方へ折れ曲がるようで、その隅の南肩あたりでトレンチの壁面に、乱石積みの石垣様の石積みが見られた。
この溝が折れ曲る付近が最も低く、多量の土器が出土したが、完形に復元できるものはない。

Ｄトレンチの遺構

1．溝

ＳＤ25　Ｄトレンチに沿って南北に走る溝で、溝の一部は調査区東側に広がる。肩幅0.5m～1m以上で、深さ8cm～30cm、現長で51mにわたって延びている。
ＳＤ26に流れ込むものと考えられるが、遺物の出土はなかった。

ＳＤ26　溝の肩幅1.4m、底幅0.8mで深さ30cm～36cmで台形の断面をもつ東西溝である。遺物の出土はなかった。

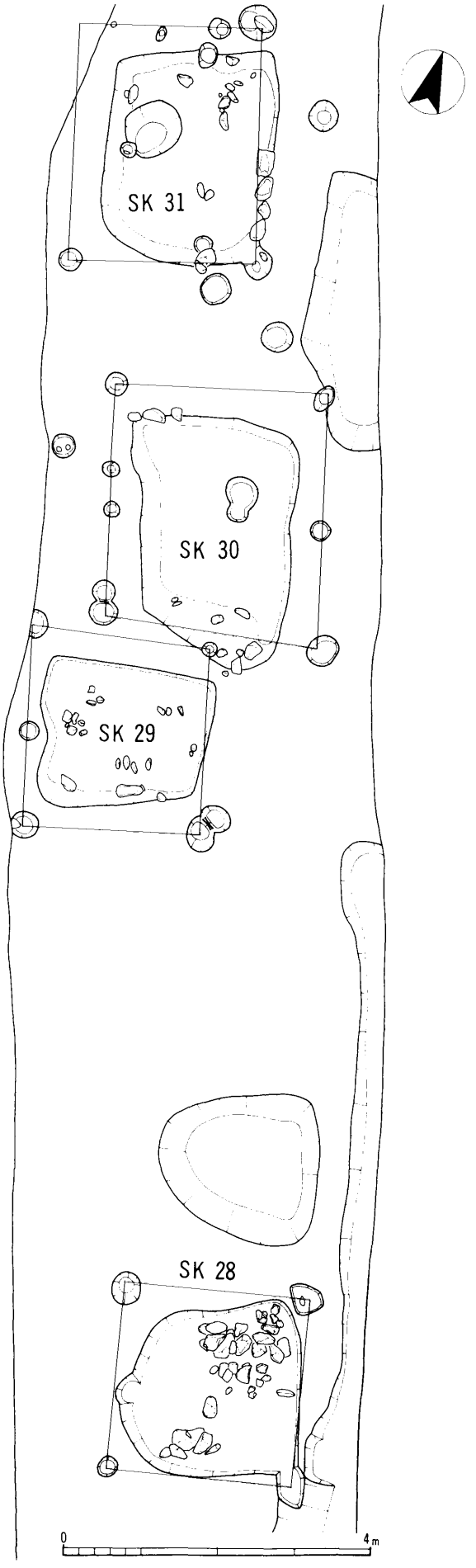
ＳＤ27　ＳＤ26から約2mを隔てて北側に検出された。ＳＤ26と平行し、トレンチ東壁付近でトレンチに沿って北へ折れ曲がり、約20mほど北へ延びる。溝幅は肩幅で1.6m、底幅で0.7m、深さは16cm～20cmである。溝内より土師器皿（25）が出土した。

2．土　坑

Ｄ区の北部で礫を多く含む略方形の竪穴状土坑が3ヵ所で検出された。いずれも調査区外へ広がるもので、土坑内の礫には焼けたものも含まれていた。この部分を拡張した結果、計4基の略方形土坑を確認した。これらには、いずれも黒褐色土が埋っており、遺物は土器の細片が出土したのみで、時期決定は難しい。

ＳＫ28　西半が円形に近いが略方形を呈する。南北2.2m、東西2.4m、深さ10cm～36cm、底面は平坦で、焼けた石を含む礫が底面に散乱していた。この土坑を取り囲むように、四隅に柱穴が検出された。柱間は2.4m×2.4mである。おそらく、この土坑の上を覆う掘立柱の覆屋であろう。

ＳＫ29　ＳＫ28から北へ約7mはなれて検出。土坑は南北1.8m、東西2.2m、深さは12cm～20cmの略方形である。底面は平坦で、ＳＫ28に較べるとやや小さい礫が散乱していた。
土坑の四隅には柱穴が検出されたが、西側の南北柱穴間にはピットもあり、2間分になるのかもしれない。柱間は南北2.4m・2.6m、東西2.3mである。



第12図　ＳＫ28、29、30、31実測図（１：80）

ＳＫ30　ＳＫ30の北に隣接して検出。土坑は南北2.9m、東西2.0m、深さ15cm～21cmの略長方形で、底面は平坦である。

礫は土坑の北西肩と南肩に少し見られたにすぎない。また、柱穴は南北２間、東西１間で、柱間はバラツキがあるが南北西側1.4m×1.6m、東側が1.6m×1.8m、東側がやや長い。東西の柱間は2.8mである。

ＳＫ31　ＳＫ30のさらに北に隣接して検出。南北2.7m、東西2.2m、深さ18cm～30cmの略長方形の土坑である。土坑の東肩には原位置を保っていると思われる礫が４個並んでおり、土坑の肩に石が貼られていたことが推定できそうである。

土坑を取り囲む柱穴は１間×１間で、柱間は南北3.0m、東西2.4mである。

Ｅトレンチの遺構

１．柱　列

Ｅトレンチにおいても、柱穴が多数検出された箇所が二ヵ所ある。Ａ・Ｂトレンチの柱穴群と同様に居住域としてまとまる区域があるようである。

ＳＡ35は、そのような居住地域からはやや離れるが、東西２間で2.1m等間の柱列である。トレンチ南の調査区外へ広がる南北棟の掘立柱建物であろう。またＳＡ36も東西３間の同様のものと考えられる。

２．溝

ＳＤ32　肩幅1.5m、底幅1.0m、深さ16cm～33cmの南北溝である。遺物は土師器の細片のみである。

ＳＤ33　肩幅1.7m、底幅0.8m、深さ32cm～37cmの南北溝である。遺物の出土はなかった。

ＳＤ34　肩幅1.6m～1.9m、底幅0.8m～1.0m、深さ24cm～32cmの南北溝である。遺物は細片が微量出土したのみである。

ＳＤ37　肩幅1.7m、底幅0.7m、深さ40cm～50cmの南北溝である。土師器鍋の小片がわずかに出土したのみである。

Ｆトレンチの遺構

１．柱　列

ＳＡ38　南北２間分を確認した。柱間は2.2mの等間で、トレンチ東方へ広がる掘立柱建物と考えられる。柱穴内からの遺物の出土はなかった。

ＳＡ39　南北４間分を確認した。柱間は2.0m×2.2m内におさまり、ほぼ等間である。トレンチ西

方の調査区外へ広がる掘立柱建物と考えられる。柱穴内からの遺物の出土はなかった。

2．ピット

P40　ＳＢ38とＳＢ39の中間で検出。70cm×40cm、深さ50cmのピットで、底から土師器鍋（26）が出土した。

P41　Ｐ40の東で検出。径40cm、深さ15cmで底面に拳大の河原石が３個おかれ、その上に山茶椀の底部（27）が底部が伏せられた状態で出土した。

（田村陽一）

5．遺　　物

出土遺物は、コンテナバット（整理箱）15箱程度である。遺物は、縄文時代後期から近世に及ぶ。主として平安時代中葉から鎌倉時代までの、黒色土器・瓦器・土師器・山茶椀・常滑産甕が出土する時期と、土師器皿、土釜、鍋、常滑産甕・捏鉢・信楽産擂鉢・瀬戸産施釉陶器が出土する室町時代後期の二時期に当っている。遺構に伴う遺物は遺構ごとに、包含層出土遺物は時代別にまとめて概述していく。なお、土器分類の基準は『ミゾコ遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会・1985）に依る。

1．遺構出土遺物

1）Ａ区・Ｂ区・Ｃ区のＳＡ・(柱穴)出土遺物

①小皿Ｃ－Ⅴ類(1)　口径８.０cm、器高1.85cm、扁平な底部から口縁部は、斜め上方に立ち上がり先端が細る。色調褐色、胎土は均質で、焼成は良好。ＳＡ５出土。

②小皿Ｂ－Ⅴ類(4)　口径8.0cm。器高2.0cm。扁平な底部から口縁部は、直立する。色調濁橙褐色で胎土は均質で金雲母を含む。焼成良。Ａ区ＳＡ６出土。

③皿Ｂ－Ⅴ類(3)　口径9.4cm、器高2.4cm。薄手で直立する口縁部を持つ。色調濁乳褐色で胎土は、良質で石英砂を含む。焼成は、良好である。Ａ区Pit２出土。

④皿Ｂ－Ⅴ類(2)　口径10.5cm、器高２cm。薄手で直立する口縁部を持つ。色調淡乳褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。Ａ区ＳＡ７出土。

⑤皿Ｂ－Ⅴ類(6)　口径11.0cm。器高2.0cm。(２)に類似。色調橙褐色で胎土・焼成は、良。Ａ区ＳＡ８出土。

⑥青磁小椀（15）　底部径３.０cmである。ケズリ出し高台で、高台は断面三角形である。全面施釉で釉の色は、淡灰青色。胎土は、淡灰白色で良質。焼成は硬い。龍泉窯系青磁小椀Ⅲ－１類。Ａ区Pit５出土。

⑦Ｂ区pit　１小皿Ｃ－Ⅴ類（５）口径8.0。器高1.4cm。色調乳褐色を呈し、胎土・焼成は良好。Ｂ区pit１出土。

⑧小皿Ｂ－Ⅴ類(7)　口径8.0cm。器高1.9cm。口縁部は直立する。色調淡橙褐色。Ｂ区ＳＤ14出土。

⑨小皿Ｂ－Ⅴ類(8)　口径8.2cm。器高2.5cm。（４）に類似。色調乳褐色。胎土良好。Ｃ区Pit１出土。

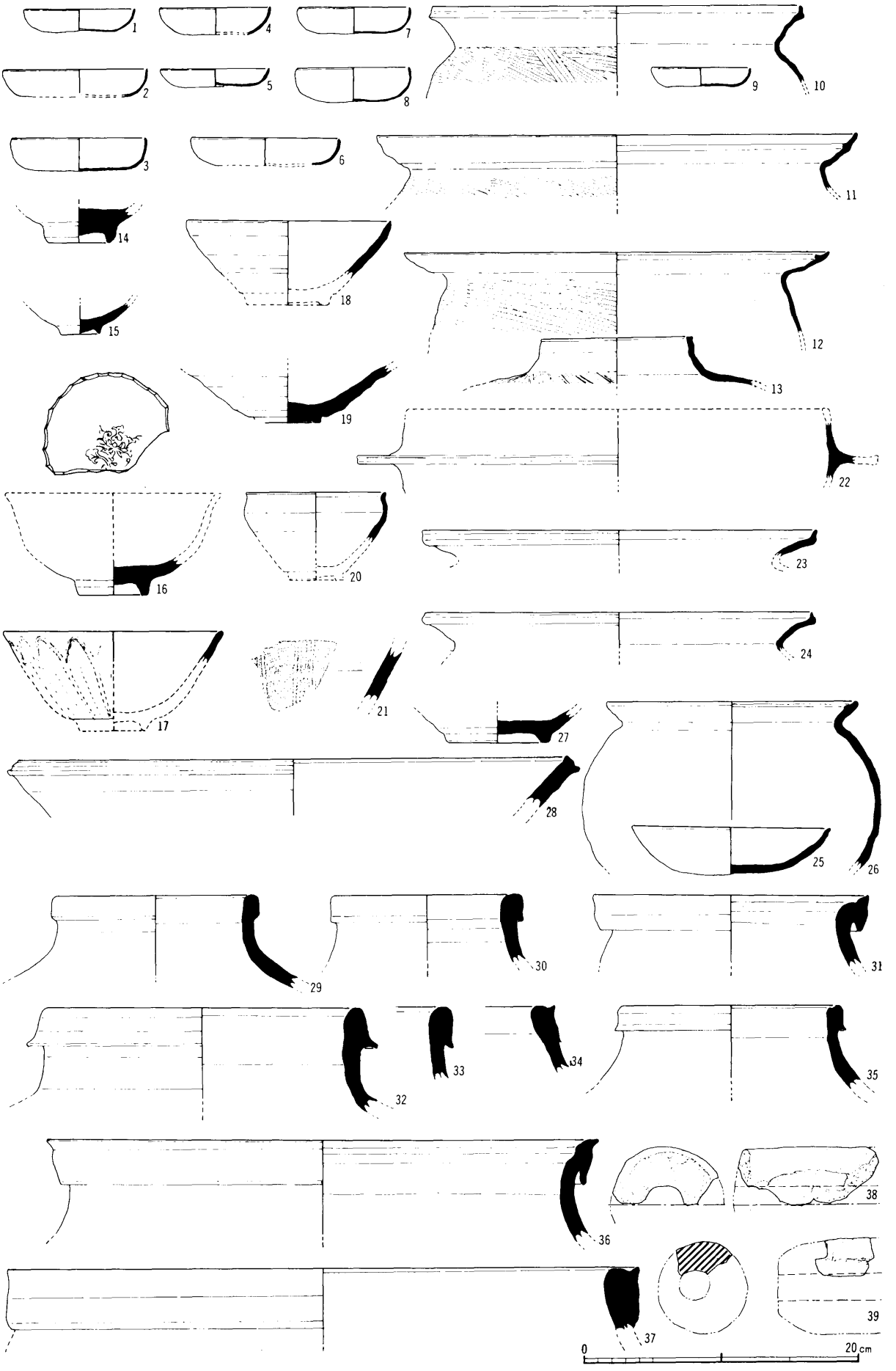
⑩青磁小椀(15)　Ａ地区pit 22より出土した。底部のみ完形で、底部径３.０cmである。ケズリ出し高台で、接地面が細く丸味を持つ。底部の中央が、逆円錐状に厚くなる。釉は、淡灰青色で底部内外面ともに施される。胎土は、淡灰白色で精良である。森田分類[7]の龍泉窯系青磁小椀Ⅲ－１類である。

2．Ａ区・ＳＤ４出土遺物

①土師器小皿Ｃ類（９）　推定口径７.２cmの小ぶりで薄手の皿である。底部乱ナデで口縁部を横ナデして先端部を先細らせている。色調乳褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

②土師器鍋Ａ－Ⅴe類[8](11・12)　強く外反した後口縁部は、内側に折り曲げられて内面に段を持つ。口径30～35cmで胴部外面に荒いハケ調整を施す。(11)については不明だが、(12)の内面には、横方向のハケ調整が認められる。色調濁乳褐色、胎土には、白色微砂を含む。胎土、焼成ともに良好である。

③土師器鍋Ｂ－Ⅵ類（10）　くの字状の頭部から外反して立ち上がる口縁部は、その先端を上方につまみ上げられて断面が三角形となる。胴部外面は、横方向に刷毛調整が施されている。口径27cmで、色調濁褐色・胎土の均質は個体である。



第13図　遺物実測図（1：4）

④茶釜A－Vmm類(13)　推定口径11.2cm。高さ2.4cmの頸部はやや内傾し、口縁部は真上に引き上げられ、その端部はやや肥厚し上面に端面を持つ。胴部外面にはハケ調整がなされる。推定口径11.2cm。色調淡褐色で、胎土・焼成ともに良好である。

⑤青磁椀(14・16)　(14)は、底部のみ残存し底部径4.4cmである。削り出し高台で、底部中央部に未調整部が円形に残る。高台の接地面がやや細く、釉が高台内面半分までかかっている。釉は灰緑色で、胎土は灰色である。焼成は、良好である。森田分類の青磁椀Ⅰ－7類である。

(16)は、印花文青磁椀で底部径5.0cmである。高台内側は、斜めにけずり出され、外側はケズリ痕が2段になっている。釉は、やや甘く淡黄灰緑色を呈する。釉は、底部外面までかかる。胎土は灰色で、均質である。焼成は硬い。見込に明瞭な蓮華文が刻印されている。残存状態を見ると、底破片の端部が打ち欠かれて円形に成形されている。蓋等への転用であろう。森田分類龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5d類である。時期的には、15世紀代を考えている。

⑥灰釉平椀(19)　底部径9cmである。削り出し高台の底部から腰が、広く直線的に立ち上がる。釉の色は、淡灰緑色であるが、施釉が安定せず剝落している。胎土は並で、焼成はやや軟。瀬戸昔田窯のものと類似しており、15世紀後葉と考えている。

3）B区SD15出土遺物

①灰釉平椀(18)　推定口径14.8cmの口縁部は、直線的にゆるやかに立ち上がり、その口縁端を上方に向け丸くおさまる。釉の色は、淡黄灰緑色である。胎土は、淡黄褐色で黒色微粉を含む。焼成は堅緻である。15世紀後半の所産である。

②土釜(22)　推定口径30cm。口縁部は、薄手で直立する。鍔部をはりつけて作っている。鍔部下半部には、すすが付着している。色調淡橙褐色で、胎土は良好である。金雲母・白色砂を含む。焼成は、良好である。土釜D－Ⅳ類である。

4）B区SD18出土遺物

天目茶椀(20)　口径10.5cm。口縁部のくびれが強く、口縁端部は直線的に立ち上がりやや外反する。釉の色は、茶黒色を呈する。胎土は均質で金雲母・黒色粘質粉を含む。16世紀後半の所産である。

5）C区SD19出土の遺物

①土師器鍋B－Ⅳm類(23)　外反する口縁部から口縁部は、上方につまみ出され、断面三角形におさまる。推定口径28.8cmである。色調は、外側暗褐色、内側褐色を呈する。胎土は良好で白色砂を含む。焼成は、良好である。16世紀前半の所産。

②常滑甕(32・35)　32は、口径23cmで口縁部のみ残存する。直立する口縁部は、その端部を折り返して仕上げられている。下垂した面の先端を指でつまみ出しなでている。色調は、褐色で肩部に自然釉がかかっている。胎土は、良質で白色砂・黒色砂を含む。焼成は硬い。(35)は、内傾しつつ立ち上がる口縁部から、口縁端を外側に折り返し下垂した端面をさらに指でナデている。口径16cmをはかり、色調は暗褐色である。胎土は、良質で白色砂・黒色砂を含む。焼成は、硬い。

6）C区SD20出土遺物

①鎬蓮弁青磁椀(17)　口縁部は、ゆるやかに外反する。蓮弁数は、推定20である。釉の色は、淡青白色に発色している。胎土は、精良で鉄分の微粒を含む。焼成は硬い。森田分類Ⅰ－5a類である。

7）C区SE21出土遺物

①土師器鍋A－Ⅵm類(24)　外反する口縁部から口縁端は、上方につまみ出されて横ナデにより断面三角形となる。推定口径28.8cmである。口縁端部の外側へのつまみ出しが強いため爪当りの沈線が現れている。頸部外面には、ハケ目をナデ消した痕跡がある。外面には煤が付着している。器壁は薄い。色調は、外面暗褐色、内面濁乳褐色である。胎土は良質で、焼成は硬い。井戸内青灰粘土層から出土している。

8）C区SD23出土遺物

擂鉢(21)　色調茶褐色を呈する。カキ目の幅は、1.6cmで5条の櫛目状を呈する。カキ目の数は、約24と推定される。胎土は、良質で長石質砂粒を含む。

焼成は硬い。16世紀前半の所産か。

9）D区SD27出土遺物

①土師器皿A－Ⅰ類（25）　口縁部は、その端部を斜め上方につまみ出され、その先端がやや外反する。口縁部は、横ナデされている。口径は、14.6cmである。器壁が荒れているため調整は判別し難い。色調茶褐色を呈し、良質の胎土には白色砂、金雲母を含む。焼成は、硬く焼きしまっている。平安時代後半11世紀代の所産であろう。

10）E区 Pit1出土遺物

擂鉢（28）　常滑産で、口径は40.0cmである。口縁端が上下につまみ出されている。上方よりも下方のつまみ出しの方が強い。内面には使用痕が残っている。外面は、横方向に刷毛状工具で調整され、さらにそれをナデ消している。口縁端部には、暗緑褐色の自然釉が付着している。色調暗褐色で、胎土は白色砂を含み均質である。焼成は堅緻である。16世紀前半の所産であろう。

11）F区pit 40・pit 41出土遺物

①土師器鍋A－Ⅱs類（26）　扁平球状の体部から外反しつつ立ち上がる口縁部は、その端部を内側に折り曲げられて仕上げられている。推定口径16.4cmである。胴部の最大径は上胴部にあり、径22cmである。口縁部内面・胴部内面に横方向の刷毛目が残る。外面上胴部にも横方向の刷毛目痕跡がある。中胴部以下には指頭圧痕が認められる。斎宮編年のSD3052より後出の要素を持ち、ミゾコ遺跡SD21出土A－Ⅲ類に先行する。新田編年の4類と5類の間に位置づけられるよう。pit 40出土。

②山茶椀（27）　底部径7.8cm。はりつけ高台がしっかりしている。色調淡灰色を呈する。胎土に白色砂・黒色微砂を含む。焼成は良好である。藤澤編年のⅡ－**4類**である。pit41出土。

12）C区SD24出土遺物

①常滑産壺（29・30）　(29)は、玉縁状の口縁部を持つ壺である。口径14.2cmである。釉が厚くかかり色調暗茶褐色を呈する。胎土に径1mm程度の砂粒を含む。胎土の色は暗灰色で良質である。焼成は、良好である。15世紀末～16世紀前半の所産か。(30)は玉縁状の口縁部を持つ壺で、口縁部比べて口縁端がやや内傾する。折り返され下垂した端部は、ややつまみ出されて細くなる。口径13.4cm。口縁部内外面は、横ナデされている。頸部内面には指押え痕がある。色調暗灰褐色を呈し、胎土は並で砂粒を多く含む。焼成は硬い。15世紀時半の所産か。

②常滑産小型甕（31・33・34）　(31)は、口縁部がN字状を呈する。口縁端部は、上下方に引き延ばされ強い横ナデにより尖がっている。頸部内面には指押え痕が残る。推定口径19.9cmである。色調茶褐色を呈し、胎土は並で径2mm程度の砂粒を含む。14世紀の所産であろう。

(33)は、玉縁状口縁で、折り返され下垂する端部の先端がややつまみ出されて尖る。色調暗褐色で、胎土、焼成ともに良好である。16世紀前半の所産。

(34)は、N字口縁の退化した甕で、色調暗褐色で、胎土・焼成は良好である。

③常滑産大型甕（37）　N字口縁が下垂して頸部に完全に密着する。口径41.0cmである。色調暗褐色、胎土は灰茶色を呈し、良質で白色砂を含む。焼成は良好である。16世紀前半の所産と考えている。

④信楽産甕（36）　口縁端部は、上方に強くつまみ出された後、斜め上方に鋭く外反する。さらに口縁下端部は、下垂し細長くおさまる。頸部内面には指頭圧痕がある。色調暗赤褐色を呈し、胎土は灰褐色である。神山1号窯併行14世紀末に比定できよう。

⑤フイゴ羽口（38・39）　(38)は、羽口の先端部が残存する。胴部径8.0cm。穿孔径2.7cmである。色調濁赤褐色を呈し、羽口の先端部は、黒く焼けている。

(39)は、やや小ぶりで推定径7cm、穿孔部径2cmである。色調赤褐色を呈し、胎土に金雲母、石英質微砂、長石微砂を含む。胎土は、かなり精製されている。

⑥土師器鍋（40・41・42）　(40)は、やや厚手で口縁部が外反し、口縁端部がつまみ出されて断面三角形となる。体部内外面に刷毛調整が認められる。推定口径23.4cmである。色調淡褐色で、外面に煤が付着している。胎土は、並で径1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。A－V－mである。

(41)は、斜め上方に長く引き出された後、口縁端

部が内側につまみ出されて断面三角形となる。体部外面には1.2cm幅で4条のハケ目を持つ原体で横方向に調整されている。胴部にかけてはさらに縦方向の刷毛調整がされている。胴部外面には、すすが付着している。AⅣ－1類である。16世紀前半の所産か。

(42)は、外反しつつ斜め上方に立ち上がった口縁部がその端部を上方に引き上げられ断面三角形となる。口縁部は、横ナデされ、頸部には、刷毛調整がされる。AⅥ－m類で、16世紀前半に比定される。

⑦茶釜型鍋BⅥ－1類（43）　薄手で内傾しつつ直線的に立ち上がる頸部は、その外面を縦方向に刷毛調整されている。口縁部は、内側につまみ出されている。さらに口縁部外側には、突帯状の段がつく。色調茶褐色を呈し、胎土は精良で金雲母を含む。焼成は、硬い。

⑧土師器土釜（44～47）　(44)は、口径19.2cmをはかる小型の土釜である。内傾しつつ立ち上がる口縁部は、内側につまみ出された後外上方に引き上げられ、上端面を持つ。体部の調整は不明である。色調淡黄褐色を呈し、胎土には0.5～1mm程度の砂粒を含む。焼成は、良好。外面に煤が付着している。土釜A－Ⅵs類で16世紀の所産か。

(45)は、口縁部が内傾し、端部が外側につまみ出されて突帯状の段を作るもので、体部は張り球状を呈する。体部外面は、横方向に刷毛調整される。口径18.8cmの小型の個体である。色調淡黄褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。土釜AⅤ－s類である。

(46)は、頸部が短く直立している。鍔がほぼ真横にはりつけられている。胴部外面の刷毛調整がていねいである。色調淡橙褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬い。外面には、煤が付着している。土釜BⅤ－m類である。15世紀の所産である。

(47)は、口径33.0cmの法量の大きい羽釜である。内弯しつつ立ち上がった口縁部は、横ナデされて内側に面を持つ。口縁部外側には貼り付け突帯がつけられている。口縁部に比べて、鍔部が短い。胴部外面は、原体幅1.5cmで7本1単位のハケ調整が横方向にされる。色調淡橙褐色を呈し、胎土は精良で金雲母・白色砂を含む。焼成は硬い。土釜CⅥ－1類である。

⑨瀬戸産卸皿（48・49）　(48)は、底部径7.0cmと小ぶりである。釉は、安定せず剝落箇所が多い。色調は、灰緑色である。胎土は、淡灰色である。焼成は硬い。内面に、ヘラ状工具で卸し目をつけている。瀬戸産で長曽窯併行15世紀前半と考えられる。

(49)は、底部径11.6cmと大ぶりである。腰部の立ち上がりが、(48)に比べてゆるやかである。釉は、黄緑色を呈し安定している。胎土は、暗黄灰色で、黒色微砂、白色砂が含まれている。ヘラ状工具で卸目がつけられている。15世紀前半と考えられる。

⑩灰釉盤（55・56）　いずれも横にひろがり、内側に段のある口縁部を持つ。釉の色調は、淡黄灰色、胎土は、黄灰色である。焼成は、良好である。口径は、26～27cmである。やや小ぶりであり、底部内面に卸し目がある可能性もある。15世紀前半の所産。

⑪灰釉縁釉皿（51）　ロクロ成形で底部に糸切痕が残る。口縁部がやや外反する。口径10.5cm、底部径5.0cm。色調灰色で、口縁部のみに淡灰緑色の釉がつけられている。胎土は良好で、焼成は硬い。15世紀後半の所産であろう。

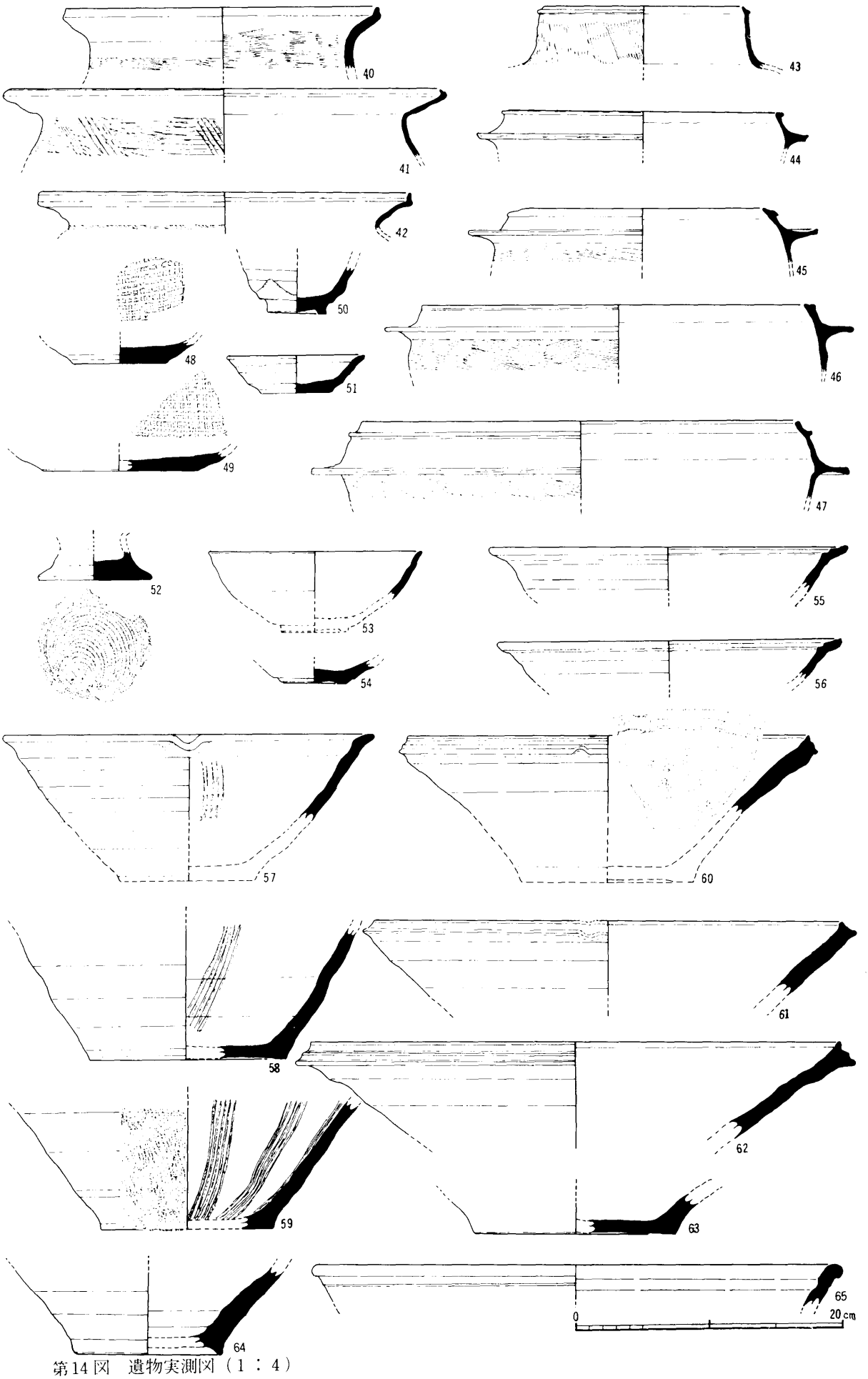
⑫灰釉尊式花瓶（52）　底部のみ残存し、径8.5cmである。底部の器壁は厚く、腰部は薄く引き出されている。底部にはロクロ回転による糸切痕が残る。釉の色は淡灰緑色で、胎土の色は、淡灰緑色である。胎土は良好で、黒色微砂、白色砂を含む。焼成は、良好である。15世紀中葉の所産である。

⑬灰釉平椀（53・54）　(53)は、口縁部のみ残存し、口径16.0cmである。斜め上方にゆるやかに引き出された後、口縁部がやや外反して終る。釉は、体部外面半分までかかる。釉の色は、淡黄灰緑色である。胎土は、淡灰色で精良であり、白色砂を含んでいる。焼成は硬い。

(54)は、径5.0cmの平椀底部である。削り出し高台である。釉の色は、淡黄灰緑色で、胎土は灰色である。いずれも15世紀代の所産である。

⑭天目茶椀（50）　底部径4.5cm。底部は、けずり出し高台である。釉は、厚くかかり漆黒色で安定している。胎土は、精良で淡黄白色を呈する。焼成は、堅緻である。

⑮信楽産擂鉢（57～59）　(57)は、口縁部が斜め上方に引き出された後外反する。口縁部のみの小片であるが、片口が残存している。口径27.6cmである。



第14図　遺物実測図（1：4）

内面には、幅1.5cmで5条1単位の擂目を持つ。間隔は不明。色調橙褐色で、胎土は並である。胎土には、金雲母、白色砂、赤色砂を含む。焼成は、軟質である。古市遺跡Q－V類であり、時期は15世紀後半と考えている。

(58)は、底部のみ残存し、底部径15cmである。内面に幅8mmで5本の擂目が施されている。底部内面には、使用痕が残る。色調淡乳褐色を呈し、胎土は並で、長石、石英がみられる。Q－V類であり、15世紀後半の所産か。

(59)は、外面に縦方向のハケ目がある。径13cmの底部から腰部は、斜め上方に直線的に立ち上がる。擂目は、2cm幅で5条が1単位である。色調淡黄褐色で胎土は、良好である。胎土に白色砂を含む。焼成は硬い。T－V類であり、15世紀後半に比定できる。

⑯擂鉢（65）　口縁部が外反し、内面には指圧による沈線がつく。口径39.4cmである。色調黄褐色で胎土は、良好で白色砂を含む。焼成は硬い。

⑰常滑産捏鉢（60～63）　(60)は、やや外反して立ち上がった口縁部が、その端部を上下につまみ出されている。上端部の方がより長く伸びている。口縁部内面に、竹管状の施文工具で3つの円を印刻している。片口部分が残っている。外面暗茶褐色、内面濁茶褐色である。胎土には黒色微砂を含み、焼成は堅緻である。15世紀後半の所産であろう。

(61)は、推定口径35cmで、口縁端部が両端に圧延される。(60)に比べて体部の傾斜が緩くなる。色調茶褐色である。胎土は並で、白色砂を含む。焼成は、並である。16世紀代の所産である。

(62)は、口径39.8cmを測る大ぶりのもので、口縁端部には、指による2条の沈線がみられる。体部内面は、ていねいにナデ調整されている。外面は、刷毛状工具で調整され、その後にナデ消されている。色調外面赤褐色、内面暗褐色で、胎土は良好である。焼成は堅緻。他のSD24遺物とは離れた箇所で発見されており混入と考えられる。17世紀代の所産か。

⑱山茶椀系練鉢（64）　はりつけ高台で、高台はやや高い。断面三角形を呈する。内面下方部には、使用痕がある。色調灰色で、胎土は良質である。胎土に白色砂を含む。焼成は、良好である。13世紀後半から14世紀初頭の所産であろう

2．包含層出土遺物

1）縄文時代

①縄文時代後期の土器（66～72）　6(66)は、深鉢である。ゆるやかに外反しつつ立ち上がる口縁部は、その端部がやや肥厚して丸く終わる。口縁部内面には、沈線が引かれている。外面には、3cm幅で2条の沈線が引かれている。外面には、一面にR$\frac{L}{L}$の縄文が施される。色調は、外面暗褐色で、内面淡褐色を呈する。外面に煤が付着している。胎土は、良質で金雲母・白色砂を含む。焼成は、良始である。堀之内Ⅰ式併行と考えている。

(67)は、径11cmの縄文土器深鉢の底部である。網代痕をかすかに残す底部から、腰部が強く外反して立ち上がる。外面を板状工具で横方向に削っている。色調淡褐色を呈し、胎土に金雲母・赤色粘土を含む。焼成は、良好である。この個体は、(66)と共にF区北より出土しており、同一個体である可能性もある。堀之内Ⅰ式併行であろう。

(68)・(69)は、縄文時代浅鉢である。共にF区包含層から出土している。地に縄文を施し、3ないし4条の平行する沈線により文様帯を区画している。色調は、褐色を呈する。胎土は良質で金雲母・白色砂を含む。焼成は硬い。

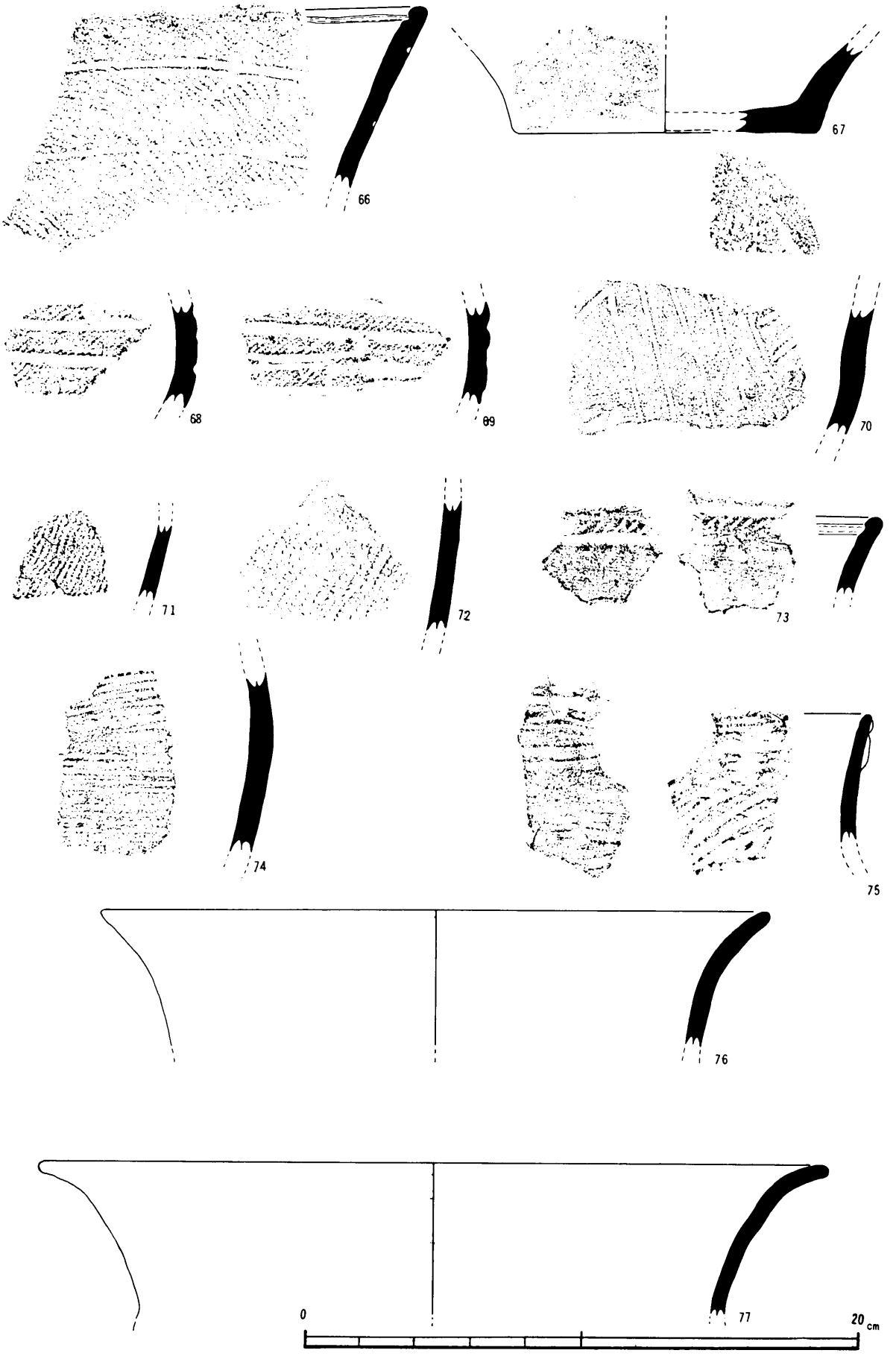
(70)は、色調暗茶褐色を呈する深鉢である。やや外側にふくらむ体部に5条の沈線が、山形に施されている。胎土には、白色砂を多く含む。焼成は、堅緻である。

(71)は、左下がりのやや細い縄文を施す小片である。色調黒褐色を呈し、胎土は精良で金雲母を含む。焼成は、堅緻である。

(72)は、左下がりのやや荒い縄文を施す小片で、色調濁褐色を呈する。胎土は、良質で金雲母を含む。

(73)は、外反する口縁部を持ち、口縁内面には、沈線が施されている。口縁上端面に刻み目がある。器面は、横方向のミガキ調整がなされる。

(76)・(77)は、無文の深鉢である。(76)は、やや小さく推定口径24cmである。(77)に比べてやや粗製である。口縁部は、ゆるく外反し端面がやや角ばる。色調濁灰褐色を呈し、胎土に長石・石英・金雲



第15図　縄文時代遺物実測図（１：２）

母・赤色土を含む。焼成は、やや軟。(77) は、外反する口縁部を持つ。内外面とも横方向にヘラミガキがなされる。色調は、暗褐色である。胎土に細い長石・石英・金雲母を含む。金雲母も目立つ。焼成は、堅緻である。

②縄文時代晩期の土器 (74)は、横方向に条痕が施される甕の胴部である。1.3cm幅で5条の条痕がつく。原体は貝殻であろう。色調淡褐色を呈し、胎土に長石、石英、赤色粘土、金雲母を含む。焼成は並である。

(75)は、口縁端に2条の突帯を持つ。(突帯をつけた後、条痕施文具でその突帯を横方向に2分している。内外面に荒い条痕が、施されている。まず右下りに条痕が施され、次に左下りに条痕が施されている。色調暗褐色で、胎土に金雲母・長石・石英を含む。焼成は、堅緻である。

2）弥生時代の遺物

①弥生時代中期土器(78) 甕の底部である。色調暗茶褐色を呈し、胎土に白色砂を含む。底部は、ケズリ調整によりやや上底となる。腰部は、内弯しつつ立ち上がる。縦方向にハケ調整がみられる。

3）平安時代～鎌倉時代の遺物

①黒色土器 (79～82) (79)は、ゆるやかに立ち上がる腰部と、外反し先尖りとなる口縁部を持つ。内外面ともに棒状工具によるミガキが認められる。口縁部内面には、細いハケ調整がみられる。壁壁が薄いのは、外面をケズっているためである。色調内面黒色、外面赤褐色である。胎土は、精製されており、金雲母を含む。焼成は良好。黒色土器A類である。試掘坑No.28の土坑から出土している。10世紀後半の所産であろう。°

(80)は、(79) と同様の特徴を持つが、口縁部の尖りが、ややゆるい。内外面とも黒色である。胎土、焼成ともに良好である。(79) と同じ試掘坑No.28の土坑出土である。黒色土器B類である。10世紀後半の所産であろう。

(81・82)は、共に黒色土器の高台部である。底部内面の周囲をヘラ磨きし、内面を平行線状にヘラ磨きしている。色調内面黒灰色で、胎土・焼成ともに良好である。推定底部径は、6cm前後をはかる。高台は、斜めに立ち上がりかなり高い。試掘坑No.28土坑出土である。

②瓦器椀 (83・84・85) (83)は、ゆるやかに立ち上がり口縁部がやや外反する。内面にヘラ磨きがされている。外面にもわずかにヘラ磨きが残る。推定口径16cmで、色調黒灰色を呈する。胎土は、良質で均質である。焼成も良好である。川越編年[9]のⅢ段階A型式で13世紀前半に位置づけられよう。

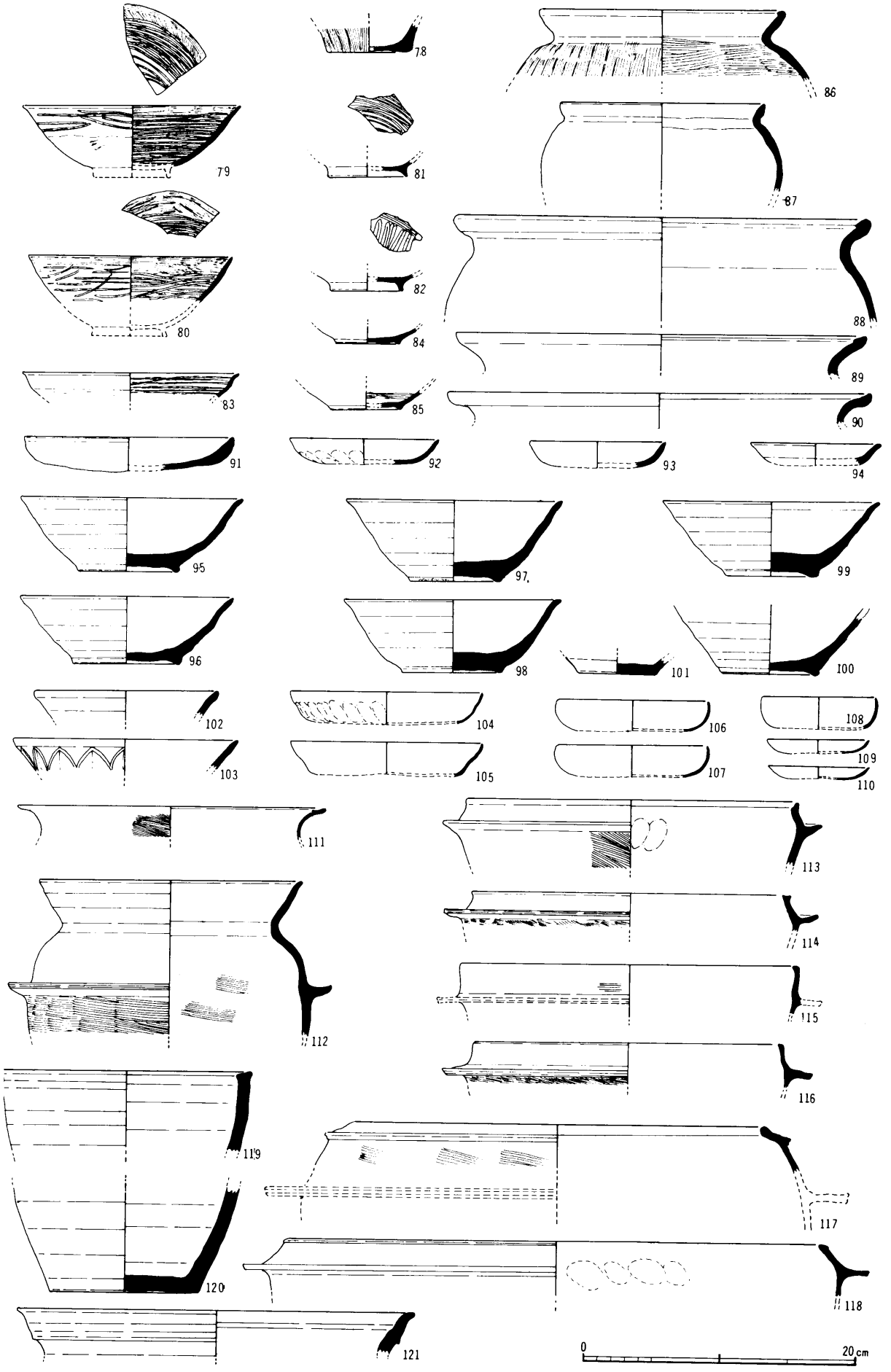
(84)・(85)は、断面三角形のはりつけ高台を持つ。両者とも器壁が荒れているため調整は不明である。底部径は、(84) が4.8cm、(85) が径9cmである。瓦質の黒い部分が剥離している。胎土は、乳白色で均質である。焼成は並である。瓦器は、この3点のみであり、(83) がE区、(84)・(85) がF区から出土した。

③土師器甕・鍋 (86～90) (86)は、推定口径18cmの甕である。頸部から引き出された口縁部は、くの字に外反する。口縁部端面は、内側につまみ出されて先が尖る。口縁部内外面ともハケ状工具による調整がされ、その後横ナデにより仕上げられている。胴部内外面には、ハケ調整される。色調淡褐色を呈し、胎土は良好で細砂を含む。焼成堅緻である。試掘坑No.28土坑より出土している。斎宮編年SE31・34併行で10世紀末葉と考えられる。新田編年Ⅳ－1段階。

(87)は、口径14.6cmの小型の甕である。張りのある胴部から頸部は、直線的に立ち上がり、口縁部は斜め上方に直線的に引き出され先細る。器壁が荒れているため調整痕は不明である。色調濁茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。10世紀後半の所産である。新田編年[10]の平安Ⅳ－1段階に位置づけられる。試掘坑No.28土坑より出土している。

(88)は、推定口径30cmをはかる。口縁部が、わらび手状に丸くなり、口縁部は、横ナデにより仕上げられている。胴部内外面に、指頭圧痕が残る。斎宮跡の第45次SK27と類似しており12世紀中葉と考えている。鍋AⅡ－2類である。

(89)は、直径30cmでわらび手状に立ち上がった口縁部が、上方より圧延されて上端面を持つ。色調濁褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。鍋AⅡ



第16図　包含層出土遺物実測図（1）（1：4）

類である。

(90)は、直径31cmでやや扁平な折り返えし口縁を持つ。色調橙褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。鍋A－Ⅲ－1類である。13世紀前半に比定できよう。

④土師器皿（91～94）　(91)は、口径15.4cm、器高2.5cmの土師器皿である。器壁が厚く、口縁部が肥厚する。色調褐色を呈し、胎土は良好である。焼成は並。E区包含層出土。斎宮編年SD3052併行である。土師器皿BⅡ－2類で12世紀中葉に位置づく。

(92)は、土師器皿で径11.0cmである。色調淡橙褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。口縁部横ナデ・下半部には指頭圧痕が残る。

(93)は、やや厚手で、斜め上方に引き出される。先端部は、先細る。色調橙褐色、胎土良、焼成良である。口径9.4cm。E区包含層出土。CⅡ類である。

(94)は、口径9.8cmでやや厚手の個体である。口縁部は、やや外反する。色調橙褐色、胎土良、焼成良である。E区包含層出土である。12世紀中葉の所産であろう。CⅡ－2類である。

⑤山茶椀（95～102）　(95・97・99・98)は、E35区地上直上で重なった状態で出土したものである。いずれも口径16cm程度で、器高が5.5cm～7cm内におさまるものである。肉厚の底部から腰部が張って弯曲しながら立ち上がる。口縁部は、外反してやや先細りになる。色調は、いずれも淡灰色で良質の胎土には白色砂を含む。(95)は、やや器高が低く高台に籾殻痕が残る。底部外面をナデ消した後高台をはりつけている。焼けひずみがある。(97)は、底部が厚く、高台部外面に籾殻痕が残る。(99)は、口縁部の外反が、他の個体に比べて強い。(98)は、はりつけ高台の形がやや甘いが、底部外面をナデ消している。これらは、藤澤編年のⅡ－4段階[11]に位置づけられ、12世紀末葉のものである。

(96)は、口径15.6cm、器高5.0cmである。薄手で、口縁部が強く外反する。底部の調整は、糸切痕をナデ消している。色調淡灰色を呈し、胎土に白色砂、黒色砂を含む。藤澤編年のⅢ－6段階に比定でき、13世紀前半と考えられる。

(100)は、F区pit 41より出土した。底部径7.4cmで、糸切痕をナデ消した底部にはりつけ高台をつけている。色調灰色を呈し、良質の胎土には白色砂を含む。藤澤編年のⅡ－4段階で12世紀末葉のものであろう。

(101)は、底部5.8cmをはかる。底部外面には、糸切痕が残る。藤澤編年Ⅳ－9段階で14世紀初頭のものであろう。

(102)は、口径13.4cmで口縁部がやや肥厚する。色調明灰色、胎土・焼成ともに良好である。A区包含層出土。藤澤編年Ⅳ－9段階で14世紀初頭のものであろう。

⑥青磁椀（103）　鎬蓮弁青磁椀である。口径16.4cmで、鎬蓮弁が大きい。釉の色は灰緑色で、胎土は灰白色である。胎土は良質で、焼成は硬い。森田分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類である。14世紀初頭の所産

4）室町時代～江戸時代の遺物

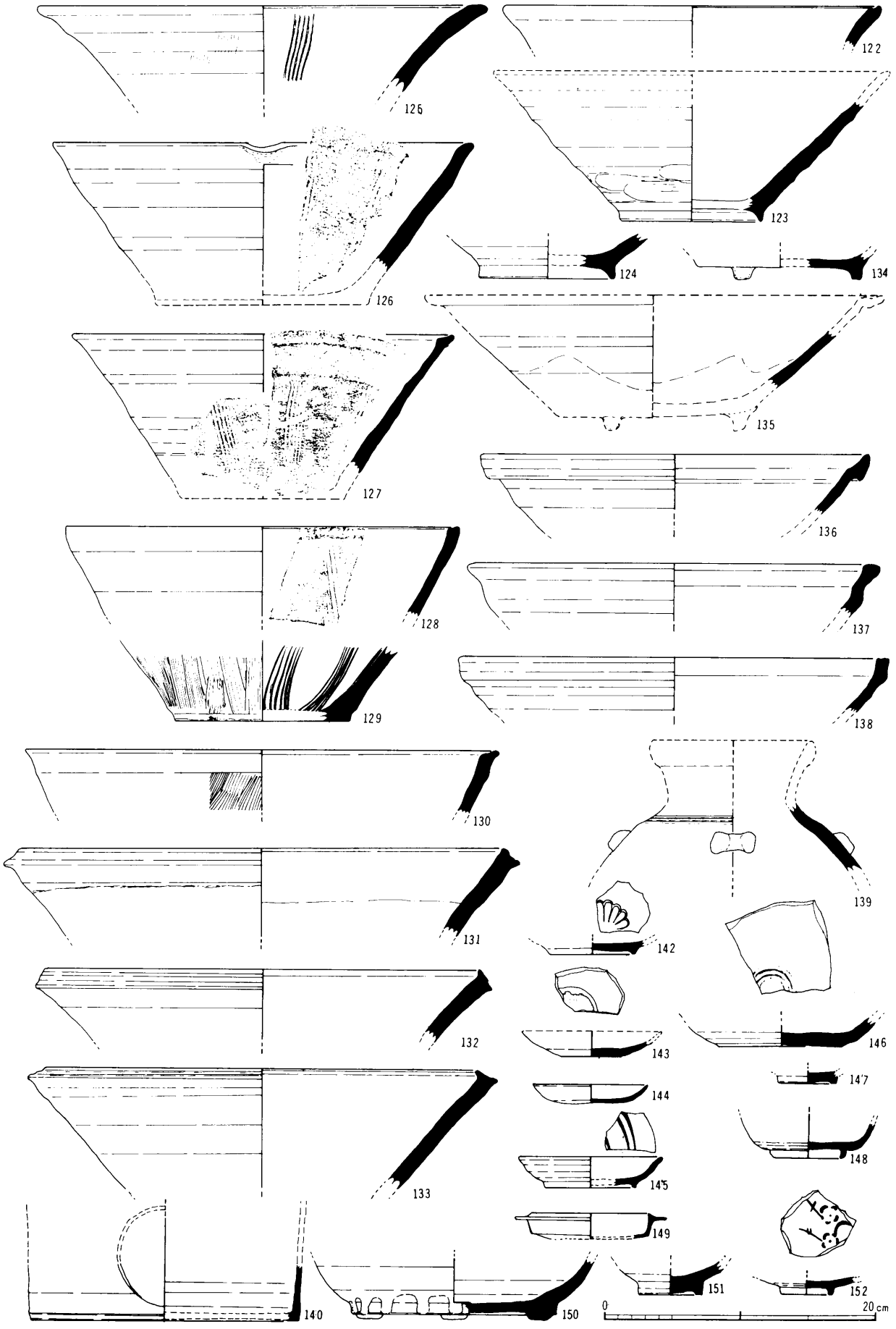
①土師器皿D－Ⅴ類（104～105）　口径14cm前後で器高2.2cm～2.4cm。扁平な底部から外弯しつつ立ち上がった後、口縁部は外反し先端が真上に尖る。色調淡橙褐色～淡乳褐色。胎土は、精良で均質である。焼成は、良好である。

②土師器皿B－Ⅴ類（106～107）　薄手で扁平な底部から真上に内弯気味に引き出された口縁部は、その先端が先細る。色調乳褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

③土師器小皿B－Vs類（108）　土師器皿B－Vn類とセットになるもので、同様に扁平な底部と直立し先細る口縁部を持つ。色調乳褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。15世紀末葉から16世紀代の所産。

④土師器小皿C－Ⅴ類（109、110）　径約7cmであり、左手手法により成形されている。口縁部は、横ナデされて先尖りになる。色調乳褐色、胎土・焼成ともに良好である。15世紀末葉から16世紀前半の所産。

⑤土師器鍋A－Vm類（111）　口縁部が外反し、折り曲げられて扁平となっている。径22.6cmである。体部外面に刷毛目が施される。C区包含層出土。15世紀末葉から16世紀前半の所産。



第17図　包含層出土遺物実測図(2)(1：4)

⑥土師器茶釜CⅥ－Ⅰ類（112）　口径18cmでありやや外反して直立する長い口縁部と、球状の体部を持つ。鍔部は短く、斜め上方にはりつけられている。

⑦土師器土釜EⅥ－m類（113）　内傾しつつ立ち上がった口縁部は、その先端をつまみ出され、内側に明瞭な沈線を持つ。鍔部は、はりつけられており、斜め上方に伸びる。器壁は、やや厚手である。体部外面には刷毛調整がなされている。色調橙褐色を呈し、胎土は良質で赤色土、白色微砂を含む。焼成は良好である。

⑧土釜BⅥ－m類（114）　口縁部が内傾し、口縁端部は、両側につまみ出されて上端面を持つ。口径23cm鍔部は、斜め上方にはりつけられている。体部外面には、横方向の刷毛調整がなされている。色調乳褐色で、胎土は均質である。焼成は良好である。

⑨土釜DⅥ－m類（115・116）　非常に薄手で、直立する口縁部は、やや内側につまみ出され、狭い上端面を持つ。色調は、乳褐色で、胎土は均質である。焼成は良好である。体部外面には、刷毛調整がなされている。口径は、(115) が25cm、(116) が22cmである。

⑩土釜CⅤ－ℓ類（117）　口縁部が内傾し、口縁端部は折り返されて突帯状となる。口縁部外面は横方向に刷毛調整される。口径30cmで大型である。色調淡黄褐色で、胎土は精良である。焼成は硬い。

⑪土釜AⅥ－m類（118）　口縁が内傾した後、強くつまみ出されて、上端面と外に出る稜を持つ。色調淡黄褐色で、胎土は精良。焼成は硬い。

⑫常滑産水指（119・120）　(119) は、口縁部が圧延され、強く横ナデされている。口径18.4cm。色調暗茶褐色、胎土は良好で白色砂を含む。焼成は、良好である。

(120)は、底部で径11.0cmである。平底の底部は、ケズリ調整がされている。色調暗茶褐色で、胎土は良好で白色砂を含む。焼成は、良好である。いずれも16世紀の所産であろう。

⑬信楽産甕（121）　外反する口縁部を持つ。口径29cm。色調茶褐色。胎土中に多くの長石質白砂を含む。焼成は硬い。15世紀代の所産。

⑭信楽産擂鉢[12]（125～130）　(125) は、軟質の擂鉢である。口縁部が外反し、やや肥厚する。外面に刷毛目をナデ消した跡がみとめられる。内面に擂目は認められず、2条のヘラ当り痕が残る。色調茶褐色で、胎土は並である。胎土に白色砂を含む。焼成は、軟質である。C区出土。古市遺跡におけるP－V類である。15世紀後半の所産か。下り合遺跡（49）に類似する。

(126) は、口縁端面が外反する。片口の擂鉢で内面には、4条1単位で原体幅1.5cmの擂目が施される。色調淡褐色で、胎土は良好である。胎土には、白色砂を含む。焼成は、良好である。Q－V類である。

(127) は、口縁部端が圧延され、上端面を持つ。内面には強い横ナデによる凹面がある。口径28cm。内面には幅1.2cmで5条の擂目がつく。色調淡褐色。胎土は良質で、焼成も良好。S-Ⅵ-2類である。

(128) は、口縁部がやや直立し、角ばった上端面を持つ。口径29cm。擂目は太く4条である。色調橙褐色、胎土は良質で金雲母を含む。焼成は、やや軟。R－V類である。

(129) は、擂鉢底部である。外面にたて方向のハケ調整が施されている。内面には、2cm幅で5条1単位の卸目が10条～12条施される。色調暗褐色である。胎土は並で、白色砂、金雲母を含む。T－V類である。

(130) は、口縁部端面が段状をなす。体部外面にはハケ調整がなされる。口径348 cm。色調濁褐色、胎土は良好である。焼成は良好。T－Ⅵ類である。

⑮常滑産捏鉢（131～133）　(131) は、口縁端部が、両側に圧延され中央部が凹む。先端は、両側に先細る。口径36cm。色調暗褐色、胎土は良好で白色砂を含む。焼成は良。15世紀後半の所産であろう。

(132) は、やや外反する口縁部は、その先端が上方に引き出される。推定口径31cm。色調赤茶褐色、胎土は良好である。焼成は硬い。16世紀後半の所産か。

(133) は、常滑産捏鉢である。斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部はその端面がつまみ出される。内面には使用痕跡がある。外面下端には、指頭圧痕が密に残る。口径31cm。16世紀後半の所産か。

⑯瀬戸産灰釉盤（134・135）　(134) は、灰釉盤

の底部である。盤には足が3個つくものと推定される。底部径11.2cm。色調暗褐色。胎土は、均質である。焼成は、良好。C区出土。15世紀代の所産である。

(135) は、灰釉盤の体部である。内外面ともに淡灰緑色の釉がかかる。胎土は良好で、焼成は硬い。C区出土、15世紀代の所産である。

⑰瀬戸産擂鉢 (136～138)　(136) は、口縁部が玉縁状になる。口径28.4cm。釉の色は、茶褐色。胎土は、黄褐色でやや軟質である。焼成は、良好である。16世紀末葉から17世紀前半の所産であろう。

(137) は、口縁部が外反した後、直立し肥厚する。口径30.4cm。釉の色は、茶褐色。胎土は、褐白色で並。焼成は、やや軟である。17世紀代の所産であろう。

(138) は、口縁部が直立し、外縁部に指圧による2条の凹線がつく。口径32cm。釉は茶褐色、胎土は褐白色である。17世紀以降の所産であろう。

⑱瀬戸産灰釉四耳壺[13] (139)　淡灰緑色の釉がかかっている。肩部は、丸味を帯びている。耳部は、貼り付けられ、ほとんど体部と密着している。肩部と頸部の間に櫛描きによる三条の線が描かれている。胎土は、良質で白色砂を含む。焼成は硬い。C区から出土している。

⑲灰釉鉢 (146)　糸切り痕を残す平底から腰部は、ゆるやかに張り出す。内面には淡灰緑色の釉が一面にかかっている。外面底部付近に釉の垂れた跡が残る。底部内面には、4条の同心円状櫛描文が施されている。釉は、淡灰緑色。胎土は灰色で白色砂を含む。15世紀代の所産である。

⑳瀬戸・美濃産印花文灰釉丸皿 (142)　底部は、削り出し高台で径6.4cmである。釉は、底部内外面にかけられている。底部外面に重ね焼きの円形の痕跡が残る。底部内面には直径3.6cmで推定16花弁の印花が刻印されている。釉の色調は、灰緑色である。胎土は、良好である。焼成は硬い。16世紀後半の所産であろう。

㉑鉄釉皿 (143・144)　(143) は、平底の底部を持つ鉄釉皿である。底部径4.4cm。底部内面に重ね焼痕が残る。釉は、濁褐色である。胎土は灰色で良質。焼成は並である。18世紀後半の所産か。

(144) は、径8.4cmの鉄釉皿である。口縁部は、ゆるやかに斜め上方に引き出される。釉の色は、茶褐色である。胎土は、灰色で良好。焼成は硬い。18世紀以降のものであろう。

㉒鉄釉絵付皿 (145)　ケズリ出し高台の底部から、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。口径10.8cm、底部径6.8cm、器高2.2cmである。底部内面には、褐灰色の釉で3条の同心円状の線が引かれている。胎土は、灰白色で良質である。焼成は硬い。

㉓天目茶椀 (147)　底部径4.8cm。高台は、削り出し高台で高台高1.0cmである。釉の色は、漆黒色である。外面は底部付近まで釉が垂れている。胎土は、淡乳白色で精良であり鉄分微砂を含む。焼成は、堅緻である。

㉔万古焼椀 (148)　ケズリ出し高台で底部が三日月状になる。底部径9.0cm。釉は、外面大胴部までかかる。釉の色は、褐緑色である。胎土は、暗褐色で良質である。焼成は硬い。19世紀以降の所産。

㉕その他の施釉陶器 (149) は落し蓋である。外径11.2cm。薄手で口縁部が垂直に出ている。

(150) は、足付き壺である。腰部が丸味を持って立ち上がり、外面に鉄釉がかけられている。底部15cm。釉の色は、黒褐色である。胎土は、乳白色で精良である。焼成は硬い。

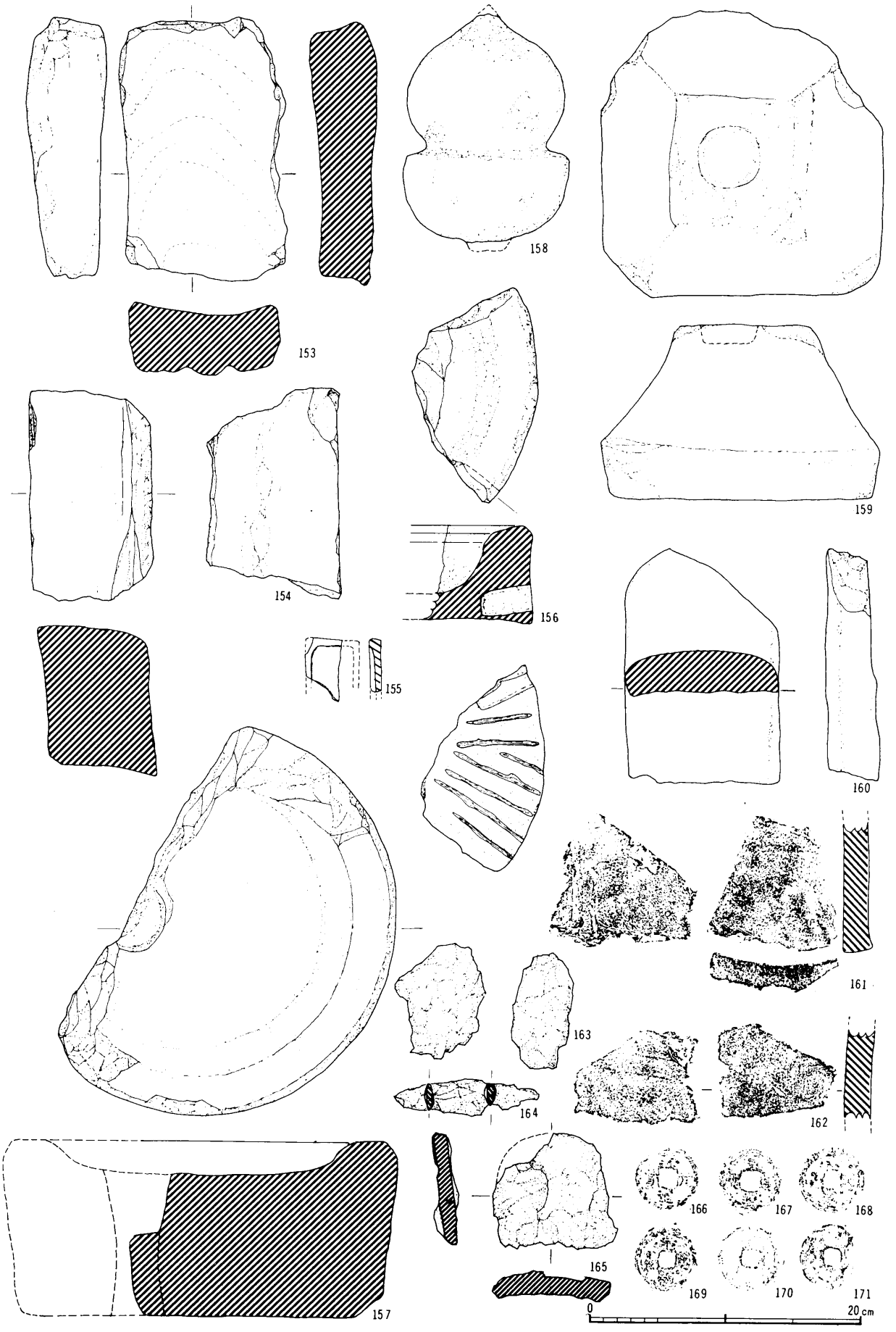
(151) は、椀底部である。やや外張りになる高台は、削り出し高台である。底部径4.6cmである。底部内面に漆黒色の鉄釉がかかっている。

(152) は、椀である。直立する削り出し高台を持つ。底部内面には、鉄釉で梅の花弁が2つ、群青色の釉で枝が3本手描きされている。釉の色は、黄灰緑色である。胎土は良好である。焼成は良好である。19世紀前半のもの。

(153) は、窯道具である。平底で底部径20cmである。体部は、薄手で外部は、ロクロ成形の後、下半をけずっている。

5）石製品・瓦・金属製品・銭貨

①砥石 (153・154)　いずれも砂岩製で、酸化物を多く含むためか赤褐色を呈する。(153) は、長辺18.4cm、幅11.0cmで2面を使用している。幅11.0cmの面を縦方向に使用した痕跡が残る。B区包含層出土。



第18図　石製品・金属製品・瓦・銭貨（1：4）(銭貨1：2)

(154) は、砂岩の粒子が非常に細く、使用面が光沢を持つ。砥石自体の摩耗も少ない。残存表15.2cm、幅7.4cmである。A区出土。

②石硯 (155)　幅4cm、残存長5.0cm、厚さ8mmである。長方形で約4mmの深さに硯部はけずり込まれている。色調褐色で、粘板岩製である。

③石臼 (156・157)　(157) は、径27cm、高さ7.3cmである。色調緑褐色の砂岩製で、砂粒が非常に細く硬い。地元では伊勢木石と呼んでいる。側面は、底部よりやや外反気味に立ち上がる。側面には敲打痕が残り、荒仕上げの状態である。上端面は内側に傾斜しており、研磨されている。内面側面には敲打痕が残り、荒仕上げの状態である。底部は、凹面状で、推定6～7条1単位の溝が、敲打され刻まれている。溝の幅4～5mm、溝間隔1.2cmである。刻み目は、2単位残っているが、推定8分画と考えられる。側面には、「横打込み式引き手」用の穴が穿たれている。A区SD4出土。

(157) は、花崗岩製の上臼未製品である。径29cmで高さは、13cmである。上面は、2.5cm幅で研磨されている。上部内面は、荒仕上げである。「殻落し」の穴がみられ、径5cmをはかる。しかし下部までの穿孔は、残っていない。底部に研磨された痕跡はあるが、刻み目が皆無なので未製品とした。SD24出土。

④五輪塔・空風輪 (158)　花崗岩製で推定高18.0cmである。幅は、空輪部11.6cm・風輪部12.0cmである。扶部は、推定高1cm、幅3.6cmである。空輪頂部には敲打痕が残る。空輪部・風輪部の境及び風輪部下輪にも敲打痕が残る。その他の部分は、研磨している。B区SD18出土。16世紀代の所産であろう。

⑤五輪塔火輪 (159)　幅20.6cm、高さ13.8cmで、上面幅9cmである。扶り部径4.6cm、深さ1.4cmである。反り部分は、強くはない。花崗岩製である。C区SD24出土。15世紀末～16世紀代の所産であろう。

⑥化粧石 (160)　残存長18cm、幅11.8cmである。断面隅丸の平たい長方形で、上面と側面を研磨して仕上げている。材質は、砂岩である。C区SD24出土。

⑦平瓦 (161・162)　(161) は、上面に布目が残り、下面はたたきとヘラケズリしている。厚さは、約2cmである。色調明灰色、胎土は良質で白色微砂を含む。焼成は良好である。C区出土。

(162) は、上面に布目が残る。下面には叩き目とヘラケズリとなで消し痕が残る。厚さは、約2cmである。色調淡橙褐色で、胎土は良質で白色微砂を含む。焼成は、良好である。C区SD19出土である。

⑧鉄鋌 (163)　色調暗黒褐色、長さ9cm、幅4.2cmである。重量は、225gである。A16出土。

⑨刀子 (164)　長さ10.8cm、幅2.4cm。刀身は、断面三角形である。柄部分も残っており長さ4.0cm、幅1.6cmである。色調は、茶褐色である。材質は、鉄製。

⑩鉄製工具 (165)　用途不明。断面観察の結果、4・5回以上の鍛造痕が見えた。最大幅8.4cm、残存表8.7cmである。A－A′断面にみるように内側に向って反っている。C区SD24出土。

⑨銭貨 (166～171)　試掘抗No.2土坑の炭混りの埋土より出土した。北宋・南宋銭である。(166) は、慶元通宝である。初鋳は、1195年である。

(167) は、元祐通宝である。北宋銭で初鋳は1086年である。篆書である。径2.3cm。方孔の一辺は、6mmである。

(168) は、元祐通宝である。径2.3cm。方孔の一辺は、7mmである。

(169) は、景徳元宝である。北宋銭で、初鋳は、1044年である。径2.4cm、方孔の一辺は6mmである。

(170)・(171) は、接着状態であった。(170) は、径2.4cm、方孔径6mmである。(171) は、径2.3cm、方孔径6mmである。

(増田安生)

4．結　　語

1．遺　　構

今回の調査は幅2mの排水路部分に限られていたため、遺跡の全容をつかむことはできなかった。しかし、トレンチは東西約600mにわたるため、遺跡の広がりについては、ほぼ把握できたといえよう。

試掘およびトレンチ調査の結果、遺構は古市の段丘面のほぼ全域に広がることが判明した。ただし、

雲出川に面するやや高位の、畑地が卓越する所では遺構密度が低かった。それに対して、現在の古市の集落が立地している東西に長く延びる旧河道寄りの所で遺構の密度が高かった。おそらくは現在の集落と重複しているものと思われる。

ところで、A・Bトレンチで確認されたように、東西約30mの範囲に柱穴群が集中する所がある。

そして、それらの柱穴群を画すると思われる南北溝が検出されている。これらのことから、溝で画された居住域が、本遺跡内にいくつか存在したことが考えられる。

一定の範囲の中で、建て替えられながら継続したと思われる柱穴群は、CトレンチSD20付近、EトレンチSA36付近、さらにその西の柱穴群にみられる。これらは、中世の集落構成や構造を知るための重要なカギとなろうが、今回の調査では全容を知るよしもない。

各遺構の時期については、東部のA～Cトレンチでは主として室町時代後半（15世紀末～16世紀初頭）に比定でき、一部の石組み溝SD3、SD18、SD23は室町時代末期（16世紀中葉～末葉）に比定できよう。

一方、西部のD～Fトレンチでは、遺構に伴う遺物が少ないが、他トレンチに比べてやや時期が古く、平安時代末から鎌倉時代初頭と考えられる遺物が出土している。

ところで、Dトレンチで検出された略方形を呈し、覆屋をもつと考えられる竪穴状土坑の性格であるが、おそらく掘立柱建物に付属する屋外の何らかの施設であろう。ただ、この土坑が、より大きな規模を有する施設の一部に含まれるものと考えることもできる。その場合、伊勢市中ノ垣外遺跡[14]や松阪市草山遺跡[15]などで多数検出されている総柱的建物の中で南東隅に、東西1間×南北2間内にほぼ収まる浅い方形土坑をもつものとの解釈もできよう。中ノ垣外遺跡ではこの土坑を、近世の民家の間取り例から廐と推定しつつ、土坑内から日常雑器類が多量に出土していることに注意し、他の機能を考える必要も論じている。

一方、阿山郡大山田村山出遺跡で検出されたSX3は、1.2m前後の正方形で深さ10cm弱の土坑に、東西1.9m×南北2.3mの1間四方の柱穴をもつものであるが、これについては埋葬遺構のひとつと考えている[16]。

古市遺跡の竪穴状土坑については、土坑内の礫に焼けたものを含むことから、掘立柱建物に付属した屋外の厨房施設と推定することもできる。しかし、中ノ垣外遺跡、草山遺跡例のような総柱建物に付属する廐と考えることも可能である。

いずれにせよ、現状では不明であり、今後類例の増加をまって検討する必要があろう。尚、この土坑の時期であるが、土坑内からは遺物の出土はほとんどない。埋土が、黒褐色であること、焼け石が多いことを付記しておく。

2．遺　　物

①縄文時代の遺物

後期の堀ノ内Ⅰ式併行の深鉢が出土した。口縁部にに刻み目を持つもの（66)、口縁部に刻み目を持つもの（73)、無文で内外面にミガキ調整するもの（76・77）がある。周辺では、対岸の大角遺跡[17]・馬乗岩遺跡等で縄文時代中・後期の遺物が発見されており、古市遺跡より1.5km東にある左岸河岸段丘に立地する和遅野遺跡[18]においても後期の遺物が発見されている。今回これらの遺跡群の中で空白であった古市において、縄文後期の遺物が出土したことは、当地域における居住の占地状況を知るうえで興味深い。

晩期では、条痕系深鉢（74・75）が出土した。(75)は、2条の突帯を持つ馬見塚式併行と考えられるものである。条痕文土器は、古市遺跡の西500mにある算所遺跡においても出土しており、今後の解明が待たれる。なお、石器ではフレイクも数片出ている。

②弥生時代の遺物

弥生時代の遺物としては、中期の甕・壺の破片が数点出土している。甕（78）は、底部がやや上底になり、体部外面を刷毛調整している。壺は、図示できない小片であるが、胴部下半部で外部を横方向にヘラ磨きしている。これらは、中期も後半の特徴を示している。甕底部は、大角遺跡[19]出土甕（4）のタイプに比定できよう。壺のヘラ磨き技法は、大角遺

跡出土壺[20]（２）・和遅野遺跡壺Ａ類[21]（46）に類似する。

③平安時代～鎌倉時代の遺物について

平安時代後半の遺物としては、試掘坑No.28の土坑より出土した黒色土器Ａ類（79）・Ｂ類（80）・甕（86）・甕（87）があげられる。これらは、斎宮編年のＳＥ3134併行と考えられ、10世紀末葉に位置づけた。古市遺跡のこの時期における、煮沸形態と供膳形態を知る好資料である。

この他に煮沸形態としてあげられるのは、土師器鍋Ａ Ⅱ－２類（88）・鍋AⅡ－３類（26）・鍋AⅡ類（89）・鍋Ａ Ⅲ類（90）がある。これら鍋は、いわゆる伊勢型鍋の範疇で把握することができる。

供膳形態としては、土師器皿Ａ Ⅰ類（25）（ＳＤ27出土、Ⅱ世紀代に比定。）、土師器皿Ｂ Ⅱ－２類（91）Ｅ区包含層出土。斎宮編年ＳＤ3052[22]併行、12世紀後半に比定し、土師器皿Ⅱ－１類（93）（Ｅ区包含層出土）、土師器皿（92）、土師器皿Ｃ－Ⅱ－２類（94）があげられる。瓦器は椀（83・84・85）があり、川越編年のⅢ段階Ａ型式に比定できる。瓦器椀は、３点のみであり、山茶椀との比率は、約５：95程度と低い。

山茶椀は、藤澤編年Ⅱ－４～Ⅲ－６段階のものが多い少量ではあるが、Ⅳ－９段階で14世紀初頭に比定できるものもある。

青磁椀では、鎬蓮弁青磁椀（106）があり、森田分類龍泉窯系青磁椀Ⅰ－５類である。平安時代後葉から鎌倉時代の遺物について青磁の占める割合は、１％に満たない。他に青磁椀Ⅰ－７類（14）がある。

調理形態では、須恵器系練鉢（122・123・124）がある。これらは、13世紀代～14世紀初頭に位置づく。

貯蔵形態にしては、須恵器甕（破片残存）、常滑産甕（31）がある。

④室町時代の遺物

古市遺跡において、この時代の遺物が多数を占める。ＳＤ４・ＳＤ24から出土している多量の遺物は室町後期に位置づき、良好な資料である。これらを中心に概観してみたい。

１）ＳＤ４出土遺物

煮沸形態としては、薄手で折り返された扁平な口縁部を持つ鍋Ａ－Ⅴ類（11・12）・断面三角形を呈するＢ－Ⅵｍ類（10）、口縁端部が肥厚する茶釜型鍋Ａ類（13）がある。

供膳形態では、灰釉平椀（19）、印花文青磁椀（龍泉窯系青磁椀Ⅰ－56）、青磁椀Ⅰ－７類（14）がある。

２）ＳＤ24出土遺物

煮沸形態としては、鍋Ａ－Ⅴｍ類（40）、鍋Ａ－Ⅵ－ℓ類（41・42）薄手が口縁端部の断面が三角形となる茶釜型鍋Ｂ－Ⅵℓ類（43）、口縁部が短く外に折り返される土釜Ａ－Ⅵｓ類（44）、口縁部が外に折り返されるが、体部は球形の土釜Ａ－Ⅴｓ類（45）、口縁端部が平坦で体部が球形をなす土釜Ｂ－Ⅴｍ類（46）、口縁部が内傾し、口縁部外面に突帯を持つＣ－Ⅵℓ類がある。ここでℓ・ｍ・ｓの小分類は、ℓ　口径30cm前後、ｍ：21～28cm、ｓ：20cm以下のものをさし、破片の中には、大型：中型を各種含む。

供膳形態では、天目茶椀（50）、瀬戸産縁釉皿（51）、灰釉平椀（53・54）がある。

調理形態では、瀬戸卸皿（48・49・50・56）、13世紀後半から14世紀代のものと考えられる須恵器系練鉢（64）、軟質で口縁が外反し片口となる信楽擂鉢Ｑ－Ⅴ類（57・58）、淡黄褐色で外面にハケ目がある信楽擂鉢Ｔ－Ⅴ類（59）・常滑産捏鉢（60～63）がある。産地不明の擂鉢（65）もある。

貯蔵形態では、常滑産壺（29・30）・常滑産小型甕（31・33・34）、大型甕（37）、信楽産甕（36）がある。

その他の遺物として特色があるものは、吹子の羽口（38・39）、仏器の尊式華瓶（52）があげられよう。

２）その他の遺構・包含層出土遺物

煮沸形態では、ＳＤ19出土土師器鍋Ｂ－Ⅵ類（23）、ＳＥ21出土鍋Ｂ－Ⅵℓ類（24）、鍋Ａ－Ⅵｍ類（111）、ＳＤ15出土釜Ｄ－Ⅵℓ類（22）、口縁がやや内傾し内面に淡線を持つ土釜Ｅ－Ⅴｍ類（113）、口縁部端面が平たく面を持つＢ－Ⅵｍ類（114）、薄手で口縁部が直立するＤ－Ⅵｍ類（115・116）口縁部が内傾し折り返されて突帯がつくＣ－Ⅴℓ類（117）、口縁部が内傾し上端面を外に出る稜がつくＡ－Ⅵｍ類（118）、がある。茶釜では、口縁部がやや長く短い鍔を持つ茶釜Ｃ－Ⅴℓ類（112）がある。

供膳形態では、薄手で浅い小皿Ｃ－Ⅴ類（１・５・

109・110)、薄手で口縁部が直立する小皿B－V類（4・7・8・108・)、小皿Bとセットをなし薄手で口縁が直立する皿B類（2・3・6・106・107)、口径14cm前後で口縁のナデが2回なされる皿C類（104・105）がある。灰紬手椀（18)、青磁小椀類(15)鎬蓮弁青磁椀類（17)、天目茶椀（20）瀬戸灰釉印花文丸皿（142）がある。

調理形態では、須恵器系練鉢（122～124)、瀬戸産灰紬盤（134・135)、内面に擂目の無い信楽産擂鉢P－V類（125)、口縁部が外反し片口を持つ信楽産擂鉢Q－V類（126)、角ばった口縁部を持つR－V類（128)、外面にハケ調整を持ち、口縁端部に段を持つT－V類（129・130)、常滑産捏鉢（131～133）がある。

貯蔵形態としては、SD19出土常滑産甕（32・35）瀬戸産灰紬四年壺（139）がある。

⑤江戸時代の遺物

供膳形態としては、鉄紬皿（143・144)、鉄紬絵付皿（145)、天目茶椀（147)、万古焼椀（148)、鉄釉椀（151)、絵付皿（152）がある。

調理形態としては、瀬戸産擂鉢（136～138）がある。

貯蔵形態としては、鉄紬足付き壺（150）がある。

3．まとめ

古市遺跡の調査は、線的な調査ではあったが、雲出川を遡行する水運と青山越、長野越の古道に通じる好立地をなす当地における、考古学的解明について若干の資料を提供することになった。以下遺物についてのまとめとしたい。

①縄文時代後期・晩期土器・フレイクが出土し、当地域の空白地域についての手がかりを提供した。

②弥生Ⅲ・Ⅳ様式土器数点が出土し、対岸の大角遺跡・上野遺跡や近隣の和遅野遺跡との関連を考察する資料を得た。

③古墳時代遺物は、今回の線的調査については、土師器S字口縁甕が1点のみ出土している。

③奈良時代遺物は出土していない。対岸の大角遺跡において奈良時代後半の須恵器杯が出土しており、今後の課題となろう。

④平安時代においては、10世紀後半に比定される黒色土器A・B類、11世紀に比定される土師器皿A－Ⅰ類（25）等が遺構に伴って発見されている。平安時代末葉の土器は、土師器鍋・皿等かなり多い。土師器について、斎宮跡で研究の進んでいる南勢における土師器編年の範疇で把握できる。

⑤鎌倉時代においては、煮沸形態は、いわゆる伊勢型鍋が大半である。瓦器と山茶椀が共存するがその割合は約5：95である。この時代の遺物もかなり多い。青磁のこの時代に占める割合は、0.5%である。

⑥室町時代においては、前期の遺物がほとんどなく、後期の遺物が多い。後期の遺物は、全体の約80%程度である。煮沸形態では、土釜A・B・C・D類が登場し鍋A・B類と共伴する。土釜と鍋の割合は、約4：6である。供膳形態では、土師皿の大小・青磁椀・瀬戸灰釉平椀・印花文内皿・鉢・天目茶椀が出土した。

調理形態では、13、14世紀の須恵器系練鉢に続いて、15、16世紀においては瀬戸産灰釉盤・信楽産擂鉢・常滑産捏鉢が交差している。15世紀前半において瀬戸産灰釉盤、15世紀～16世紀前半において信楽産擂鉢、15世紀後半から16世紀代が常滑産捏鉢が主流となっている。破片ではあるが瓦質擂鉢も1点出土している。

貯蔵形態では、常滑産壺・甕が90%を占める。少数ながら信楽産甕・瀬戸産灰釉皿瓦壺も出土した。

⑦江戸時代遺物

A区、C区で主に出土している。この時代の特長は、瀬戸・美濃産の陶器が多数出土していることである。今後の資料増加を待ちたい。

⑧石製品・瓦・金属製品

これらすべてを室町時代遺物としてとらえている。石臼の未製品(113)、図示しなかったが、SD19より水輪の未製品があり、古市遺跡内における石工の存在を暗示している。同様に吹子の羽口及び鉄鋌の出土は、集落内の鍛治屋の存在をうかがわせている。布目平瓦も2枚出土した。金属製品では、刀子と用途不明の鍛造品がある。

（増田安生・田村陽一）

〔註〕

① 色井秀譲編集『三重一志白山町文化誌』白山町教育委員会 1973年　P.65

② 本堂弘之　『大角遺跡発掘調査報告』　白山町教育委員会 1983年

③ 小玉道明・下村登良男　『野田浦遺跡調査報告』 白山町教育委員会 1971年

④ 稲生進一　『和遅野遺跡発掘調査報告』白山町教育委員会 1975年

⑤ 本堂弘之　「岩脇C遺跡」『昭和57年度農業基盤整備地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1983年

⑥ 土師皿の編年は、三重県埋蔵文化財調査報告68『ミゾコ遺跡発掘調査報告』1985による。

⑦ 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』1977年

⑧ 土師器甕・鍋については 斎宮編年、及び新田洋「平安時代～中世における煮炊用具－伊勢型鍋－に関する若干の覚え書」『三重考古学研究 I』1985年を参照し、⑥前掲書「ミゾコ遺跡」の編年観によった。

⑨ 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集　文化財論叢』昭和58年

⑩ ⑧参照

⑪ 藤澤良裕『瀬戸古窯跡群 I』瀬戸歴史民俗資料館紀要　瀬戸市歴史民俗資料館　1982年

⑫ 信楽の編年は、三重県において 駒田利治「神ノ木館跡」『昭和54年度県営圃場整備地域　埋蔵文化財発掘調査報告』P.107～P.130）がある。今回これとの対比をし得なかったので、暫定的に古市遺跡の中でのみ分類を行った。今後良好な資料の増加に伴ない、編年が進むことが期待される。古市遺跡の擂鉢に限っても、信楽と一まとめにしたが、複数の窯が想定される。

⑬ 愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅳ）1985年

⑭ 高見宜雄・岩中淳之「中ノ垣外遺跡」『昭和58年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1984年　P.131～200

⑮ 松阪市教育委員会「草山遺跡調査月報」　1982～1985年

⑯ 山下雅春　「山出遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1982年のP.77～P.80

⑰ ①前掲書　P.67

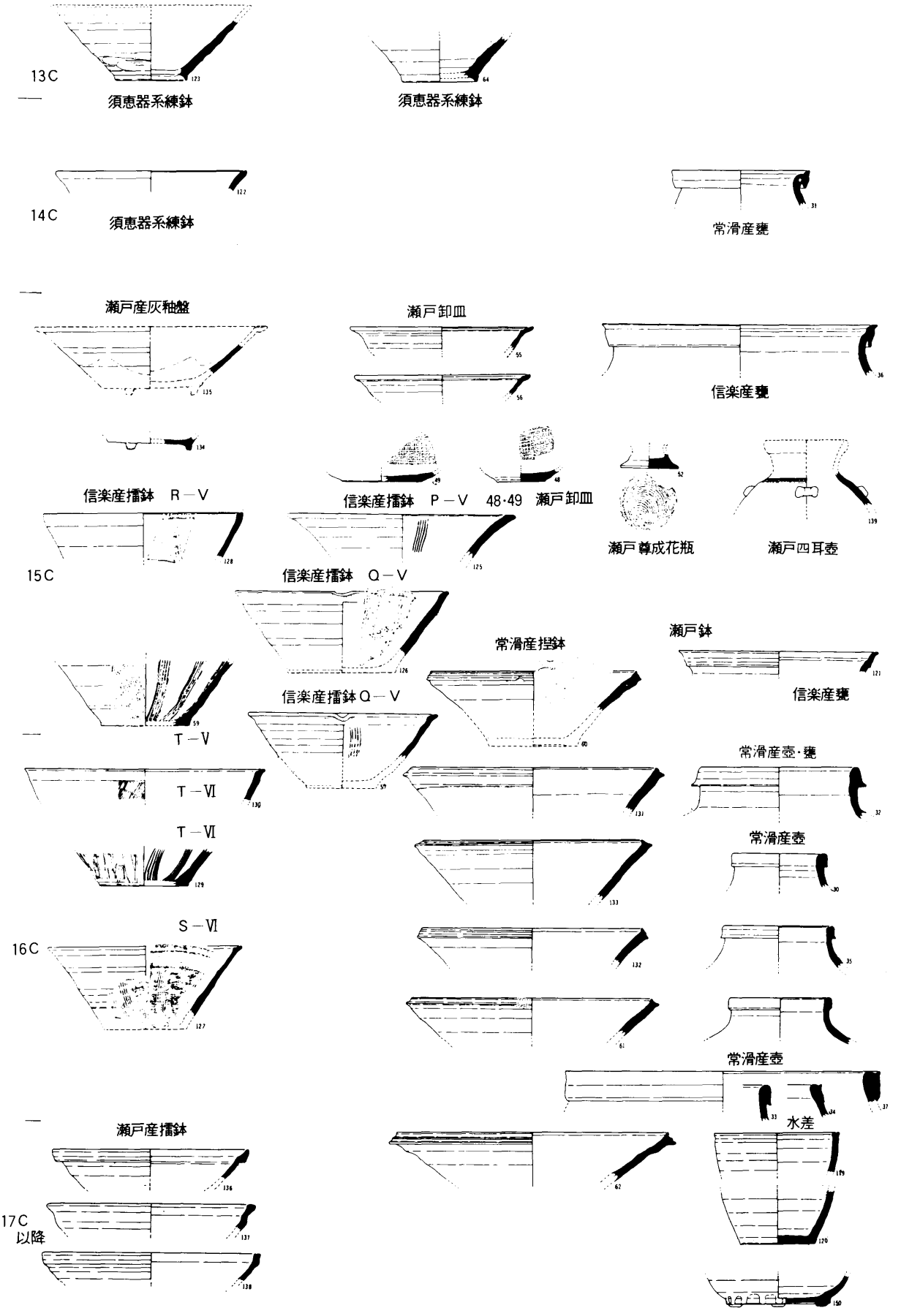
⑱ ①前掲書　P.62

⑲ ②前掲書　P.10第8図

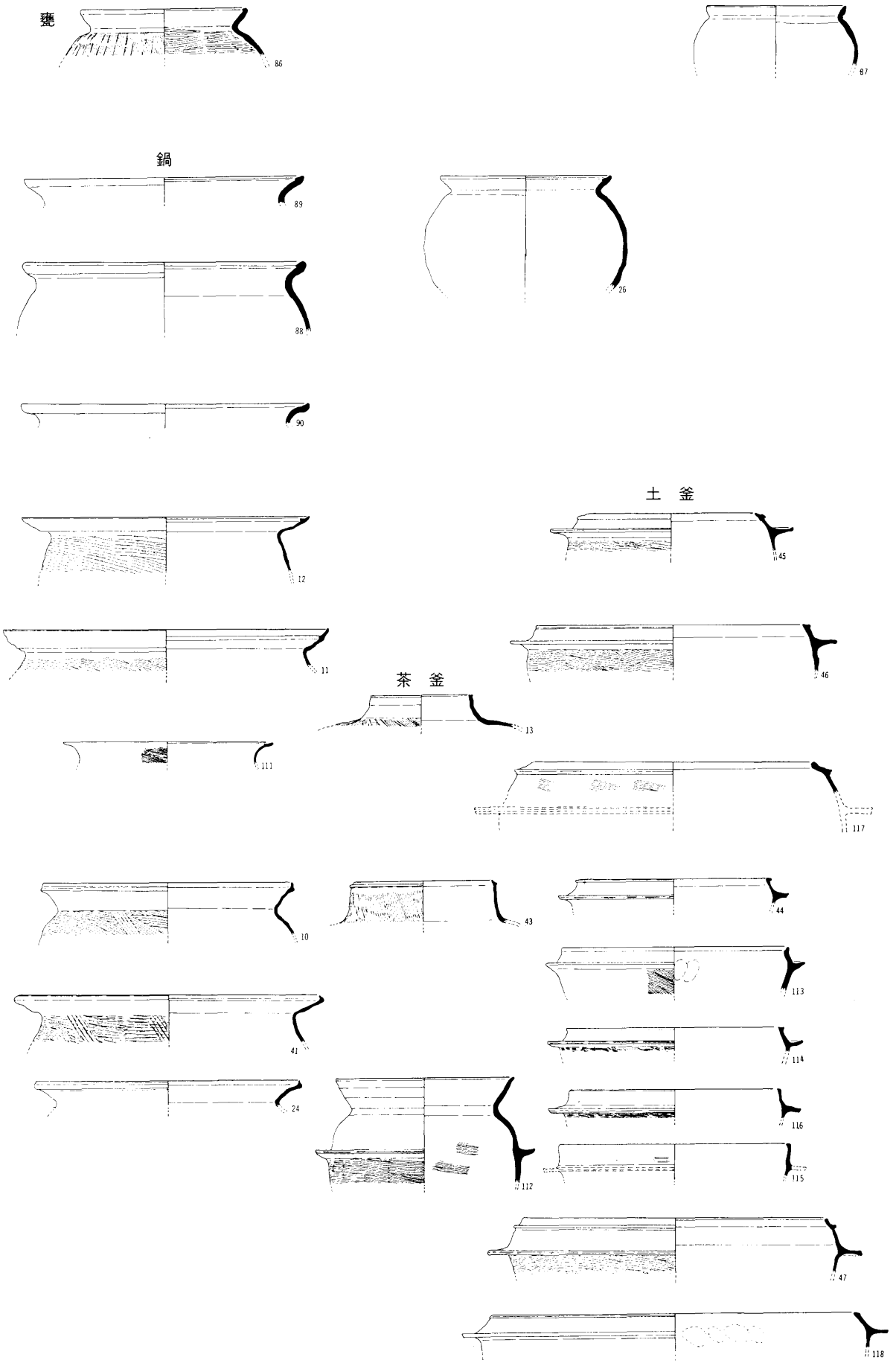
⑳ ②前掲書　P.10第8図

㉑ ④前掲書　P.12

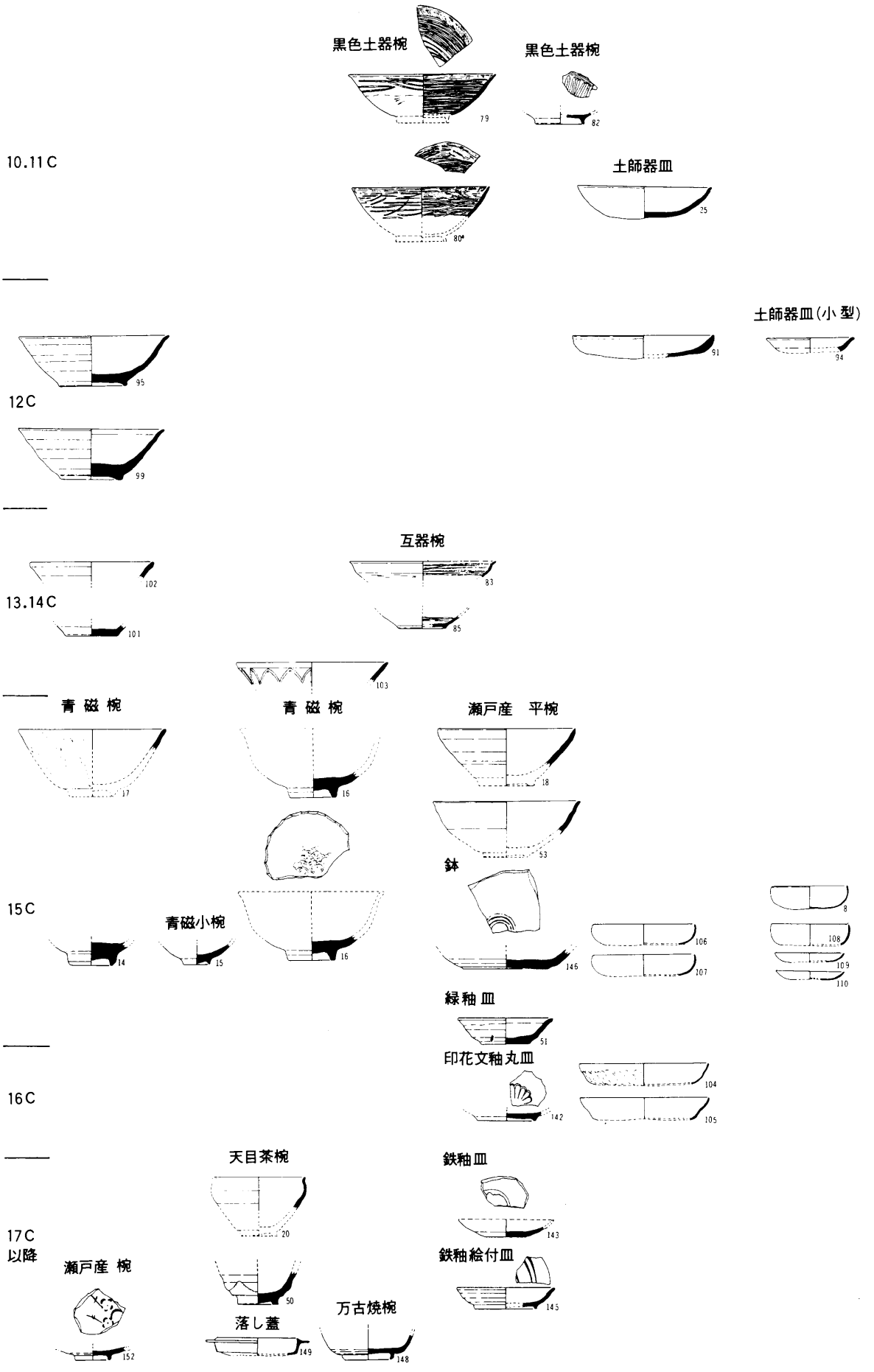
㉒ 斎宮跡調査事務所　「第50次調査」『三重県斎宮調査事務所年報 1983』P.21



第19図　古市遺跡における調理形態・貯蔵形態土器の流れ（1：8）



第20図　古市遺跡における煮沸形態土器の流れ（1：6）



第21図　古市遺跡における供膳形態土器の流れ（1：6）

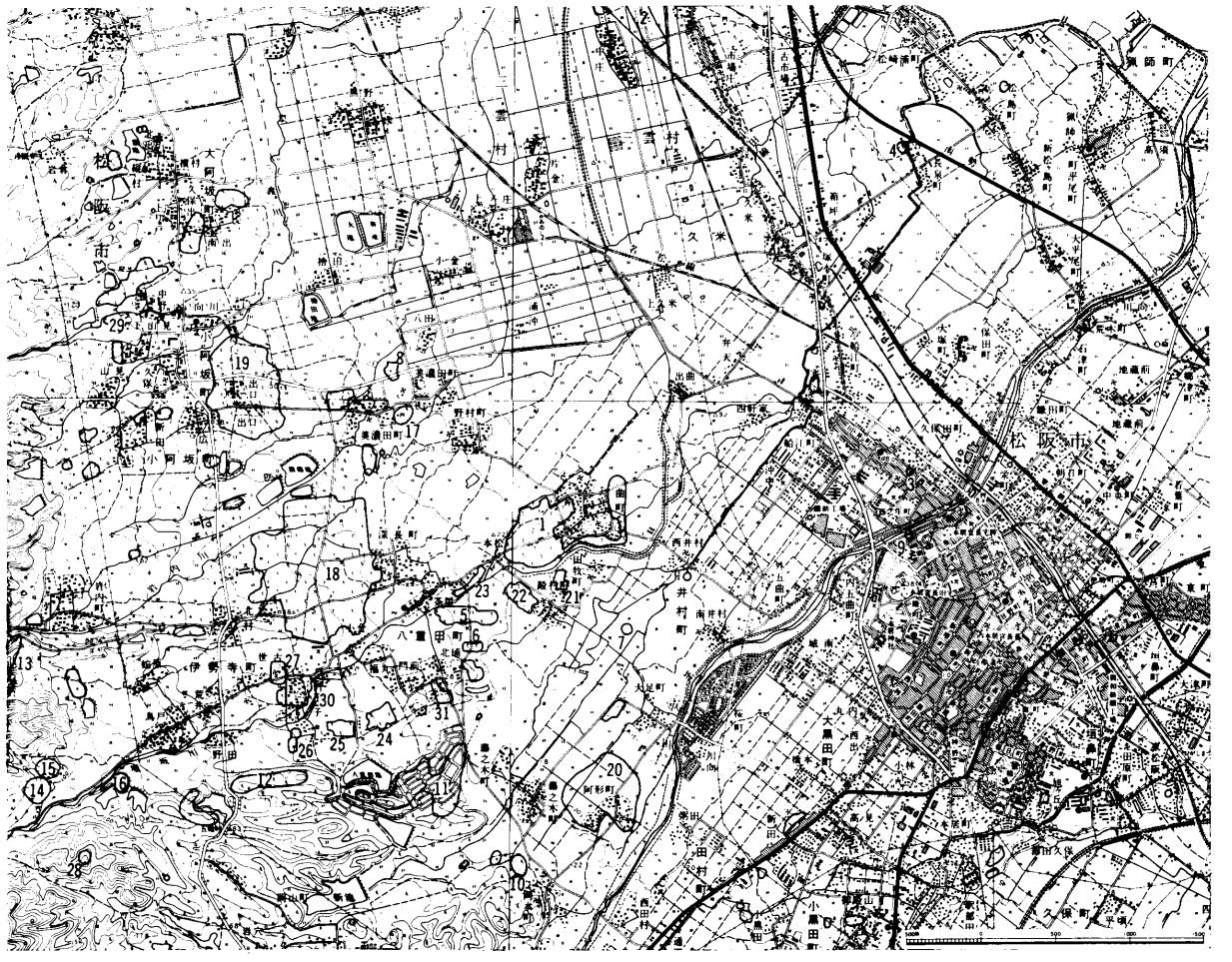
Ⅱ　松阪市曲町　曲遺跡

1．位置と環境

三重県の中央部南寄りに位置する松阪北西域は、一志地塊の丘陵に源を発する三渡川・岩内川・堀坂川の小河川が、緩斜面で連続する扇状地を形成し、一方では伊勢湾に向って沖積低地を発展させている。曲遺跡（1）は扇状地の末端部にあたるところで、堀坂川左岸の河岸段丘低位面[1]の標高約11mの微高地上に立地する。当遺跡は現曲集落の西域から南域にかけてのかなり広い地域が周知の遺跡として知られ、須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶椀片が多量に分布する遺物包含地[2]となっていた。試掘調査の結果、集落の東北部にも遺跡の広がることが確認され、今回、県営圃場整備事業に伴い地下遺構に影響を及ぼすと考えられる約3,300㎡を発掘調査した。行政区画上は松阪市曲町字出口に所在し、周囲には水田が広がっており、一部は桑畑として利用されていた。

さて、当遺跡をとりまく歴史的環境であるが、三渡川・岩内川・堀坂川の中流域は、遺跡の分布密度が非常に高く、弥生時代から中世にかけての多種の遺跡が展開している。

時代順に概観してみると、縄文時代以前の遺跡は縄文土器片・石器剥片がわずかに採取されているにすぎない。弥生時代になると、昭和47年に発掘調査され、県下で最も古いとされる前期の弥生土器を出土[3]した中ノ庄遺跡（2）が、当遺跡の北3.3kmの三



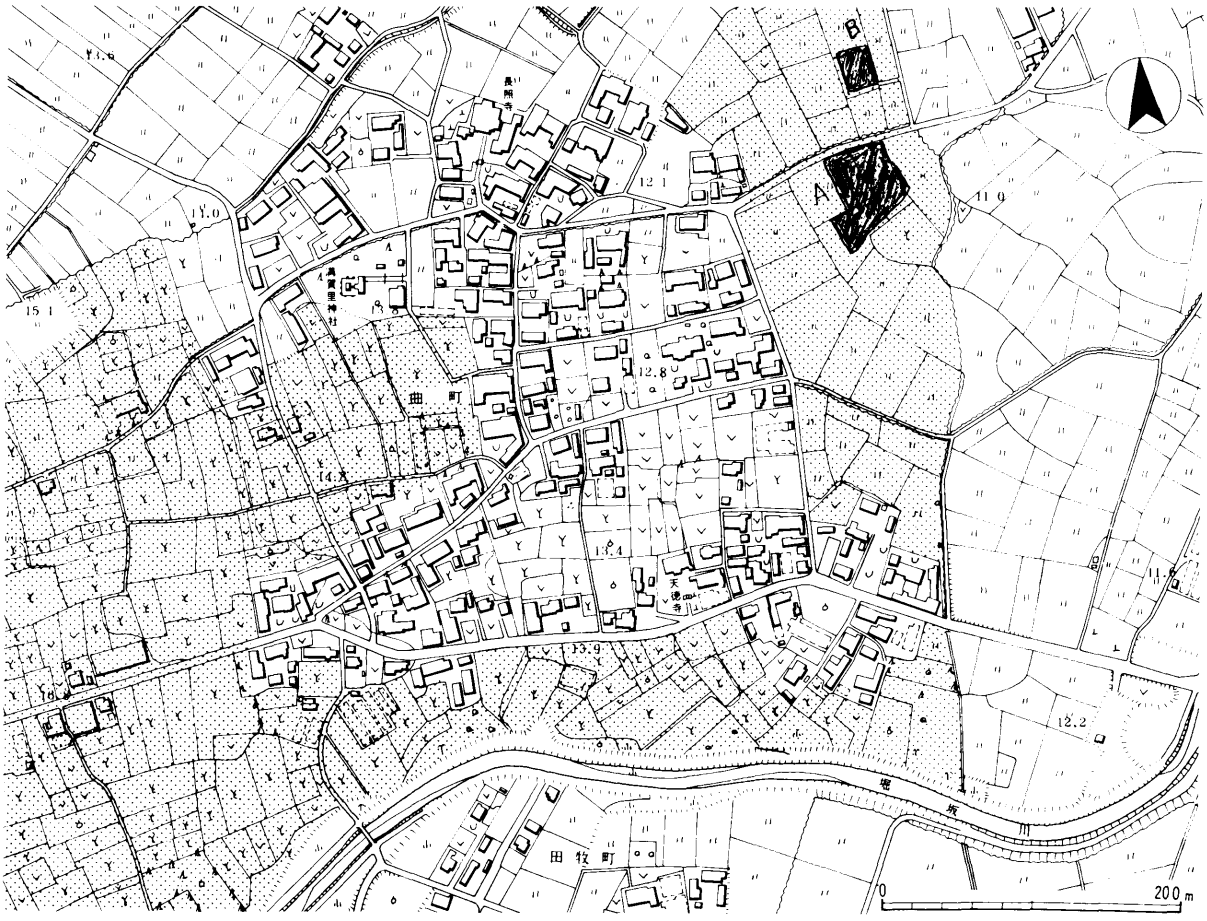
第22図　遺跡位置図（1：50,000）

渡川右岸に立地する。弥生時代中期になると、先の三渡川の沖積地の微高地上に、川井町遺跡（3）・鍋屋分遺跡（4）・城垣内遺跡（5）・田高田遺跡（6）・蛸遺跡（7）などが点在している。後期の遺跡としては、49年に試掘調査された箇所垣内遺跡（8）や内五曲遺跡（9）などが加わる。

古墳時代に入ると、松阪市と嬉野町との境にある前方後方墳の向山古墳が、小形仿製鏡や車輪石・石釧の出土[4]した前期の古墳として知られている。やや遅れた時期になると、阪内川右岸の花岡地区に全長約95mと伊勢国最大の前方後円墳である宝塚1号墳が出現し、また、同左岸でも帆立貝式の前方後円墳である高地蔵1号墳（10）が築かれている。4世紀末から5世紀前半にかけてのこの時期に、堀坂川流域の伊勢寺地区でも、48年に発掘調査され舶載神獣鏡が出土[5]した八重田1号墳をはじめ、仿製捩文鏡の出土した同8号墳、全長50mの前方後円墳である同10号墳が築造されている。5世紀後半になると、径15m前後の八重田7・12・16・18号墳等の円墳が見られ、全24基の八重田古墳群（11）を形成していた[6]。

古墳時代後期になると、横穴式石室が採用されるようになり、八重田古墳群の西奥の丘陵地に一越古墳群（12）が築造されるのをはじめ、堀坂川など三河川の流域の丘陵地上に、瑞厳寺古墳群（13）、上文珠古墳群（14）、下文珠古墳群（15）、平林古墳群（16）、美濃田古墳群（17）などの群集墳がみられるようになる。

当遺跡の西南域の丘陵地に群集する多数の古墳と相関連するように、古墳時代の土師器・須恵器の散布する遺跡が堀坂川流域に展開しており、ほとんどが奈良・平安時代から中世まで連続する複合遺跡として存在する。例えば、50年に発掘調査された小野遺跡は、遺構の検出は少なかったが、遺物は古墳時代前半から鎌倉時代後半におよぶ土器が出土[7]している。中には、伊勢寺遺跡（18）、出口遺跡（19）、阿形遺跡（20）のように広大な面積を有している遺跡もある。特に堀坂川流域は、当遺跡を東端にして北狭間遺跡(21)・わこ畑遺跡(22)・城垣内遺跡(5)・茶屋前遺跡(23)・田高田遺跡(6)・中広遺跡(24)・向王子A遺跡(25)・同B遺跡（26）等々の古墳時代から中世にかけての遺物包含地が連面とつながる。



第23図　遺跡地形図（1：5000）

寺院では、当遺跡の西南約2.5kmに方形の寺院地割が残存する伊勢寺廃寺（27）がある。現在、その一部は国分寺という寺院になっており、周辺から複弁蓮華文軒丸瓦や段顎をもつ重弧文軒平瓦などの白鳳期に比定される瓦や、奈良時代後半から平安時代にかけての瓦が採集[8]されている。

中世になると、嬉野町との境、標高321mの尾根上に別名「白米城」と呼ばれる阿坂城をはじめ、その出城が周辺に築かれている。また、伊勢寺の集落西南の丘陵地上には伊勢寺城（28）がみられる[9]。58年には中世を中心とする下山見遺跡（29）が試掘調査されているほか、王子遺跡（30）・門前遺跡（31）のように中世の土器片の散布する遺跡もいくつか存在する。

このように、曲遺跡の周辺を時代を追って概述してきたが、弥生時代中期以降、各時代の遺跡が密集する地域である。今後、発掘調査の機会が増加するにつれ、更に詳しく当地域の時代的性格なり、地域性が明らかになってくるものと思われる。

最後に、文献との関連で当遺跡の周辺を概観しておきたい。「曲」という地名は、文献上「勾御厨」として登場[10]し、古代律令制においては旧飯高郡に属する[11]。御厨は御園とともに神宮領の荘園として、早くは延長年間（923～930年）に度会郡城田郷の大橋御園や一志郡の島抜御厨の名が見られ[12]、伊勢国で500余にのぼる御厨・御園は10世紀後半から11世紀にかけて盛んに設置された[13]と言われる。勾御厨は、元久二年（1205年）の外宮禰宜度会忠行らの解状にその名が記されている[14]ほか、吾妻鏡でも貞応元年（1222年）の北条時房が伊勢守護に補任された記事の中で見られる[15]。このように、勾御厨の存在は、鎌倉時代初頭までは文献上でみられるが、どの時点までさかのぼるかは定かでない。また、厨の位置がどこに比定されるかも明らかではない。なお、当遺跡の西方すぐ近くまで、北30°東の土地割阡線をもつ条里地割の分布が確認[16]されており、荘の坪、上府殿という字名[17]が残されている。

以上、当遺跡をとりまく地形、および周辺の遺跡概況等を記するにとどめたい。

第24図　発掘区平面図（1：2000）

2．A地区の遺構

A地区の基本的層序は、第Ⅰ層；暗灰色土（耕作土）、第Ⅱ層；淡灰褐色土（床土）、第Ⅲ層；茶褐色砂質土、第Ⅳ層；暗茶褐色砂質土、第Ⅴ層；地山である。第Ⅲ層と第Ⅳ層が遺物包含層で、表土上面から地山面までは60～80cmである。

主な遺構として、竪穴住居３棟、掘立柱建物26棟、柵列８条、井戸３基、溝２条を検出したが、以下時代順、遺構種類別に概観していきたい。

A．弥生時代の遺構

(1) 溝

ＳＤ27　調査区の西端中央部から北端中央部へ流れており、幅は１～４ｍ、深さは10～40cmである。埋土は砂で、溝というよりは自然流路と考えた方がよいかも知れない。縄文土器（２）、弥生土器（５・10・13・16・19）が出土している。

B．奈良時代後半の遺構

(1) 掘立柱建物

ＳＢ26　２間以上×２間(4.0ｍ）で、棟方向はＮ58°Ｅの東西棟と考えられる。柱間寸法は桁行、梁行とも2.0ｍ等間、柱掘形は40×60cm前後で方形である。

ＳＢ38　桁行５間（8.5ｍ）×梁行２間（3.8ｍ）の大型の建物で棟方向はＮ58°Ｗである。柱間寸法は桁行1.7ｍの等間、梁行1.9ｍの等間で、柱掘形は短辺が50～80cm、長辺が70～110cmの長方形である。

ＳＢ39　桁行３間以上×梁行２間（3.9ｍ）で、棟方向はＮ29°Ｗである。柱間寸法は桁行2.4ｍの等間、梁行は2.5ｍ＋1.4ｍで、柱掘形は50～80cmである。

ＳＢ40　桁行４間以上×梁行２間（4.0ｍ）で、棟方向はＮ32°Ｗである。柱間寸法は桁行1.8ｍ、梁行2.0ｍで、柱掘形は一辺60～80cmの長方形である。

ＳＢ42　桁行５間（9.3ｍ）×梁行２間（4.2ｍ）の大型建物と考えられる。棟方向はＮ43°Ｗである。柱間寸法は桁行1.86ｍの等間、梁行2.1ｍの等間で、柱掘形は50～90cmの方形で、埋土に炭を含んでいる。切り合い関係によりＳＢ41より古い。

C．平安時代前葉の遺構

(1) 竪穴住居

ＳＢ34　3.5ｍ×3.0ｍの長方形で、長軸方向は、Ｎ78°Ｅである。検出面から床面までの深さは20cmである。

ＳＢ36　5.5ｍ×3.5ｍの長方形で、長軸方向はＮ45°Ｗで、床面までの深さは10cmである。北東隅に短径60cm×長径90cmの楕円形のピットが検出された。土師器杯（90・91）、皿（92）、甕（93・94）、長胴甕（95）、須恵器杯（96・97）、土錘（98）が出土している。

ＳＢ37　2.8ｍ×2.4ｍの長方形で、長軸方向はＮ71°Ｅで、床面までの深さは遺構検出面より20cmである。ＳＢ36と重なって検出されたものでＳＢ36より古い。

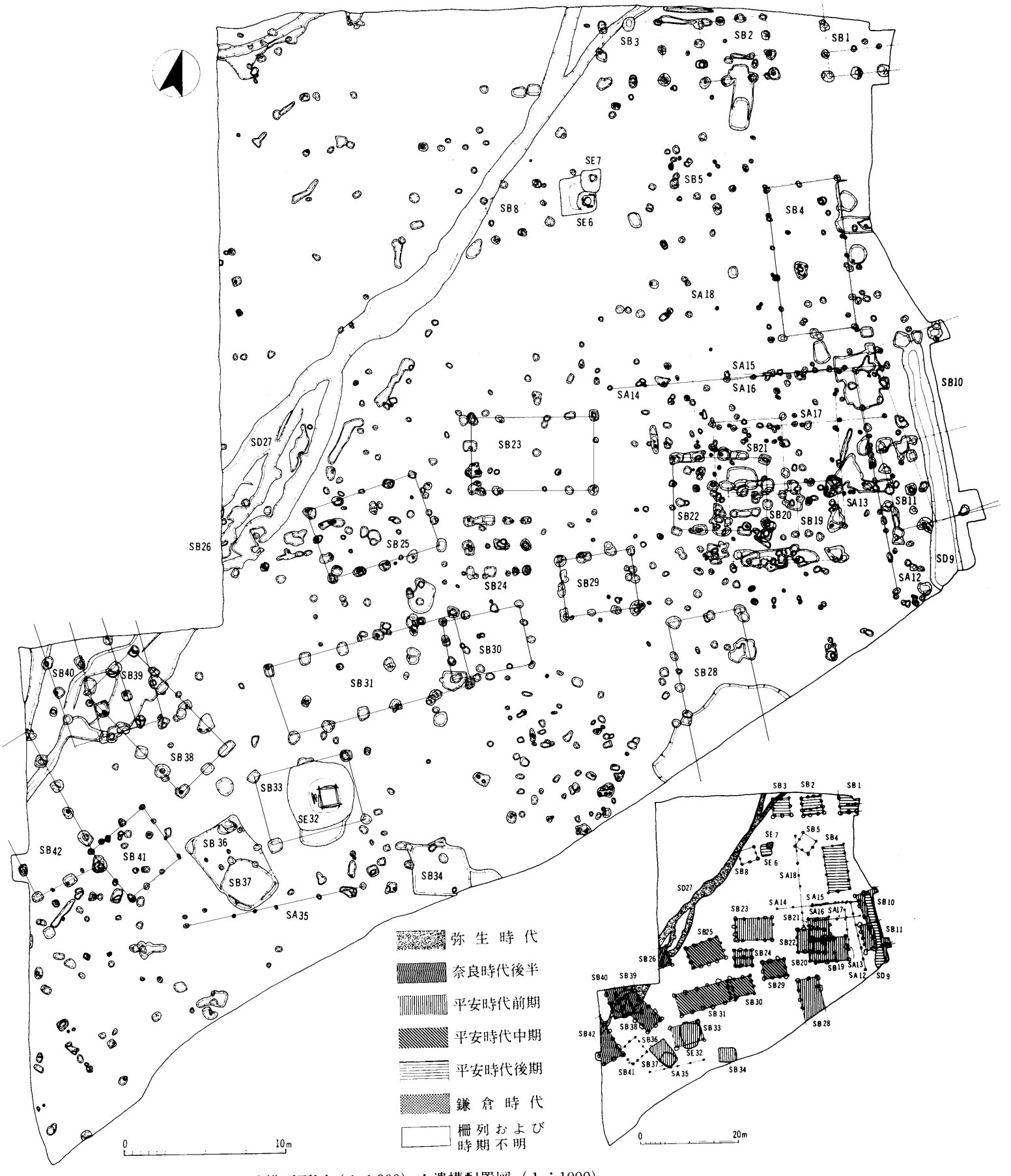
(2) 掘立柱建物

ＳＢ10　桁行５間（11.5ｍ）×梁行２間以上の大型の南北棟で、棟方向はＮ34°Ｗである。柱間寸法は桁行は2.3ｍの等間、梁行は1.8ｍ＋2.4ｍである。柱掘形は一辺50～90cmの方形または不整形で、西南隅の柱掘形はＳＤ９により消滅している。柱掘形より土師器杯（99～101）、甕（102）、製塩土器（103～105）が出土している。

ＳＢ11　桁行４間(5.2ｍ）×梁行２間以上の南北棟と考えられるが、東側はＳＤ９により消滅したものか、調査区外へ延びるものか不明である。棟方向はＮ28°Ｗで、桁行の柱間寸法は1.3ｍと狭い。柱掘形は40～80cm程度である。

ＳＢ19　桁行３間（6.9ｍ）×梁行２間（4.8ｍ）の東西棟で、棟方向はＮ72°Ｅである。柱間寸法は桁行は2.3ｍの等間、梁行2.0ｍ＋2.8ｍで、柱掘形は短径40～70cm、長径60～90cmの楕円形であるが、中には不整形なものもある。切り合い関係によりＳＢ20・22より古い。

ＳＢ20　桁行３間（5.1ｍ）×梁行２間（4.2ｍ）の東西棟で、棟方向はＮ74°Ｅである。柱間寸法は桁行が1.7ｍ等間、梁行は西側が2.1ｍ等間、東側が2.7



第25図　A地区遺構平面図（1：300）：遺構配置図（1：1000）

m＋1.5mである。柱掘形は30cm前後×40～70cmの楕円形で、いずれも埋土に炭を多量に混入している。切り合い関係によりＳＢ19・21・22より新しい。

ＳＢ21　桁行３間（4.8m）×梁行２間（4.2m）の南北棟で、棟方向はＮ17°Ｗである。柱間寸法は桁行は1.5m＋1.7m＋1.5m、梁行は2.1m等間である。柱掘形は径20～70cmの円形または不整形である。切り合い関係によりＳＢ20より古い。

ＳＢ22　桁行４間（5.7m）×梁行３間（4.5m）の東西棟で、棟方向はＮ76°Ｅである。柱間寸法は桁行1.43m等間、梁行1.5ｍ等間と狭く、柱掘形は60cm前後×70～90cmの方形であるが、西側の梁行方向の柱掘形は30～40cmと小型である。切り合い関係によりＳＢ19より新しく、ＳＢ20より古い。

ＳＢ23　桁行５間（7.5m）×梁行３間（4.5m）の大型の東西棟で、棟方向はＮ76°Ｅである。柱間寸法は桁行・梁行とも1.5ｍの等間で、柱掘形は形、大きさとも不揃いであり、検出できなかったものもある。

ＳＢ24　桁行３間（3.6m）×梁行２間（3.2m）の束柱をもつ建物で、棟方向はＳＢ23とほぼ同じのＮ74°Ｅの東西棟である。柱間寸法は桁行1.2m等間、梁行1.6ｍ等間と狭く、柱掘形は60×70cm前後の方形または径30～70cmの円形である。

ＳＢ28　桁行３間以上×梁行２間（4.5m）の南北棟で、棟方向はＮ25°Ｗである。柱間寸法は桁行は、2.0mの等間、梁行は2.0m＋2.5mで、柱掘形は60～90cmである。

ＳＢ33　桁行２間（5.8m）×梁行１間（4.2m）の東西棟で、棟方向はＮ61°Ｅである。ＳＥ32を囲むような形で検出されたもので、柱掘形は一辺が60～80cmの方形である。

(3)　柵　列

ＳＡ13　４間（8.0m）で、柱間寸法は2.0ｍ等間、方向はＳＢ21と同じでＮ17°Ｗである。柱掘形は径20～30cmの円形である。

(4)　井　戸

ＳＥ32　発掘区の西南部で検出されたもので、掘形の平面形は南北約5.2m、東西約4.1mの不整円形で、深さ約２ｍで、底に井側としての木組みを据えた井戸である。南側の掘形の一段低くなったテラス面は、本来の掘形によるものか、意図的な作業場としてのテラス面を意識したものかは不詳である。

井側は、長さ131cm～146cmの角材・板材を内法約１ｍの正方形になるよう組んでいる。南北の角材の両端は長さ20cm前後の柄になっており、東西の板材の両端近くに方形の柄穴が穿たれたところへ差し込まれ、角材の外側には、両肩に短い柄をもつ横板が東西の板材に掛かるように置かれている。（第27図参照）更に西側部分だけ井側の裏側に縦板や横板、長さ23cmの大きな石が補強材として使用されている。井側木組みや補強材は青灰砂混粘土によって固定されている。

出土遺物としては、井側内、掘形内から比較的まとまって出土しており、土師器杯・皿や甕が多く、製塩土器、須恵器などが若干含まれる。また「奥」という墨書の見られる土師器杯も出土している。使用時期は出土遺物から平安時代初頭と考えられる。

Ｄ．平安時代中葉の遺構

(1)　掘立柱建物

ＳＢ25　桁行４間（7.0m）×梁行３間（4.5m）の東西棟で、棟方向はＮ58°Ｅである。柱間寸法は桁行1.75m等間、梁行1.5ｍ等間であるが、柱通りは不揃いである。柱掘形は径40～90cmの円形、または不整円形である。

ＳＢ29　桁行３間（4.5m）×梁行２間（3.4m）の東西棟で、棟方向はＮ68°Ｅである。柱間寸法は桁行1.5m等間、梁行1.7m等間と狭く、柱掘形は径40～70cmの円形であるが、方形に近いものもある。柱掘形より土師器杯（106～108）、灰釉陶器椀（109）が出土している。

ＳＢ30　桁行３間（4.8m）×梁行３間（3.6m）の東西棟で、棟方向はＮ65°Ｅである。柱間寸法は桁行1.6m等間、梁行1.2m等間と狭く、柱通りが不揃いである。柱掘形は径30～60cmの不整円形である。

ＳＢ31　桁行５間（11.5m）×梁行２間（4.4m）の大型の東西棟で、棟方向はＮ61°Ｅである。柱間寸法は桁行2.3m等間、梁行2.2m等間で、柱掘形は一辺50～90cmの方形である。

E．平安時代末葉の遺構

(1) 掘立柱建物

ＳＢ１　桁行３間以上×梁行３間以上の束柱をもつ建物で、棟方向はＮ70°Ｅである。柱間寸法は桁行で1.6m等間、梁行で1.5mの等間と狭く、梁行の南から二番目の柱筋に束柱をもつ。柱掘形は側柱が径70～80cmの円形、束柱が径30～40cmの円形である。

ＳＢ２　桁行３間（4.2m）×梁行３間（3.6m）の束柱をもつ建物で、棟方向はＳＢ１とほぼ同じのＮ69°Ｅの東西棟である。柱間寸法は桁行で1.4m等間、梁行で1.2m等間と狭く、ＳＢ１と同様に梁行の南から二番目の柱筋に束柱をもつ。柱掘形は側柱が径50～70cmの円形または方形で、束柱は径40cm前後の円形である。

ＳＢ３　２間（3.6m）×２間（3.6m）の正方形の建物で、棟方向はＳＢ１・ＳＢ２とほぼ同じのＮ72°Ｅの東西棟と考えられる。柱間は桁行、梁行とも1.8mの等間で、柱掘形は径50～80cmの円形または不整円形である。

ＳＢ４　桁行５間（9.0m）×梁行２間（4.4m）の大型の南北棟で、棟方向はＮ21°Ｗである。柱間寸法は桁行が1.8m等間、梁行は2.0m＋2.4mで、柱掘形は径30～50cmの円形である。

(2) 柵　列

ＳＡ12　ＳＤ９から西へ３m離れて、平行して検出された柵列である。６間（13.8m）分検出され、柱間寸法は2.3m等間、軸方向はＮ25°Ｗである。柱掘形は20～40cmの円形である。

ＳＡ14　５間（17.0m）で、柱間寸法は3.4m等間と考えられるが、西から３番目の柱掘形は検出されなかった。方向はＮ72°Ｅで、柱掘形は径20～40cmである。

ＳＡ15　４間（9.5m）で、柱間寸法は西から2.4m＋2.4m＋2.0m＋2.7mである。方向はＮ74°Ｅ、柱掘形は径20～50cmの円形である。切り合い関係によりＳＡ16より新しい。

ＳＡ16　４間（7.1m）で、柱間寸法は西から1.7m＋1.7m＋2.0m＋1.7m、方向はＮ70°Ｅである。柱掘形は30cm前後の円形で、西から４番目の柱掘形の埋土には炭が混入していた。切り合い関係によりＳＡ15より古い。

ＳＡ17　ＳＡ14・15・16から南へ約３m離れて、ほぼ平行に検出された。４間（9.5m）で、柱間寸法は西から2.4m＋2.4m＋2.0m＋2.7mであり、規模・寸法ともＳＡ15と同じである。方向はＮ71°Ｅ、柱掘形は20～50cmの円形である。

ＳＡ18　６間（18.1m）で、柱間寸法は北から3.0m＋2.5m＋2.4m＋2.1m＋5.4m＋2.7mとバラついている。北から５番目と６番目の柱掘形の間が広すぎるので、７間であった可能性もある。方向はＮ18°Ｗで、柱掘形は径30～40cmの円形である。

(3) 井　戸

ＳＥ６　一辺約2.2mの方形の平面形で、深さ約1.8mの掘形の底に、縦板組横桟どめの木組みの中に３段の曲物を備えた井戸。北東部分はＳＥ７と重なっている。

縦板は残りの悪いものが多いが、幅25cm位のものを２枚ならべ、その間の部分の外側に巾10～15cmの縦板を添板として充てる。横桟は南北の長さ65cm前後の板材の両端を角形に抉り、東西の板材の両端に短い角柄を設けて組み合せるようになったもの。曲物は径38～47cmのもので、外側と中央の曲物の上端部分は残存状態が悪い。比較的大きな石をまわりにつめて青灰粘土で固定している。

また、木組みからやや離れた西南と西北部には、幅７cm、厚さ４cmの杭が打ち込まれている。井側、曲物内からの出土遺物は少ないが、箸と思われる長さ約20cmの木製品１点が出土した。掘形からは、墨書のある山茶椀等が出土している。

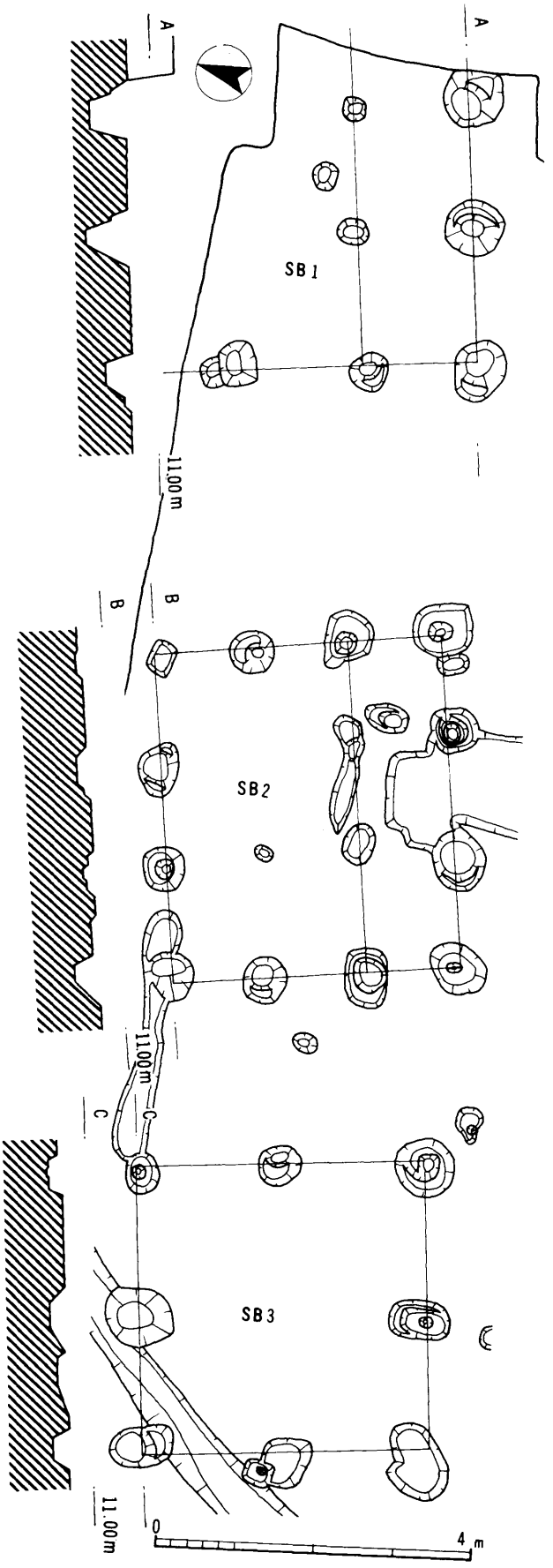
(4) 溝

ＳＤ９　調査区の東南で検出されたもので、幅1.1～2.0m、深さ30cmであるが、南端が調査区外へ延びるため長さは不明である。ＳＡ12と平行しており区画溝と考えられる。埋土より土師器杯（110～115）、甕（116～118）、灰釉陶器（119～125）が出土している。

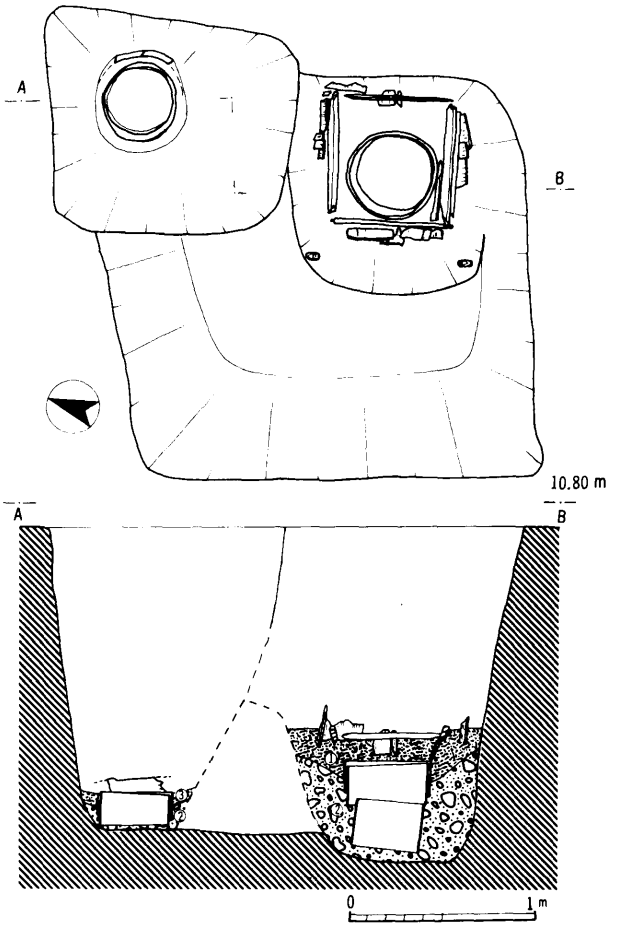
F．鎌倉時代の遺構

(1) 井　戸

ＳＥ７　素掘方形の掘形をもち、井筒・井側として３段の曲物を重ね上げた形態をもつ井戸と考えら

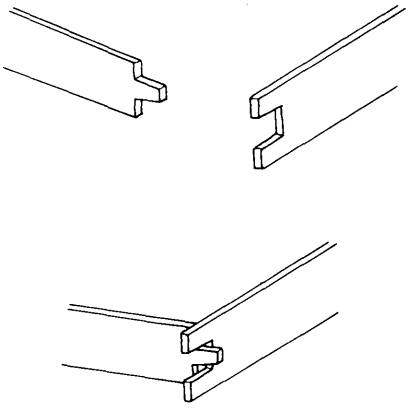


第26図　ＳＢ１～３実測図（１：80）



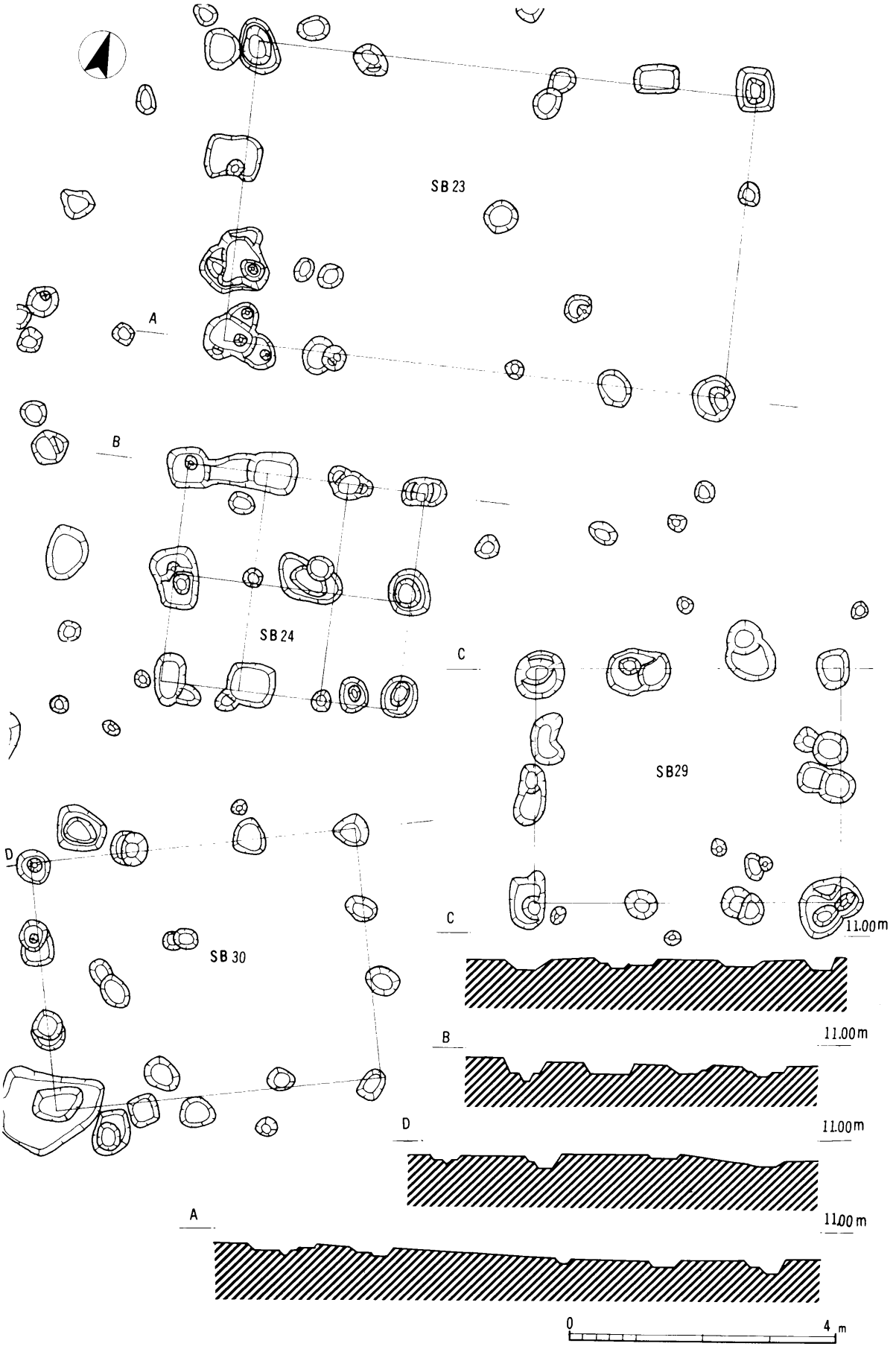
第27図　ＳＥ６、ＳＥ７井戸実測図（１：40）

① 青灰粘土
② 灰褐粗砂層
③ 暗灰粘土

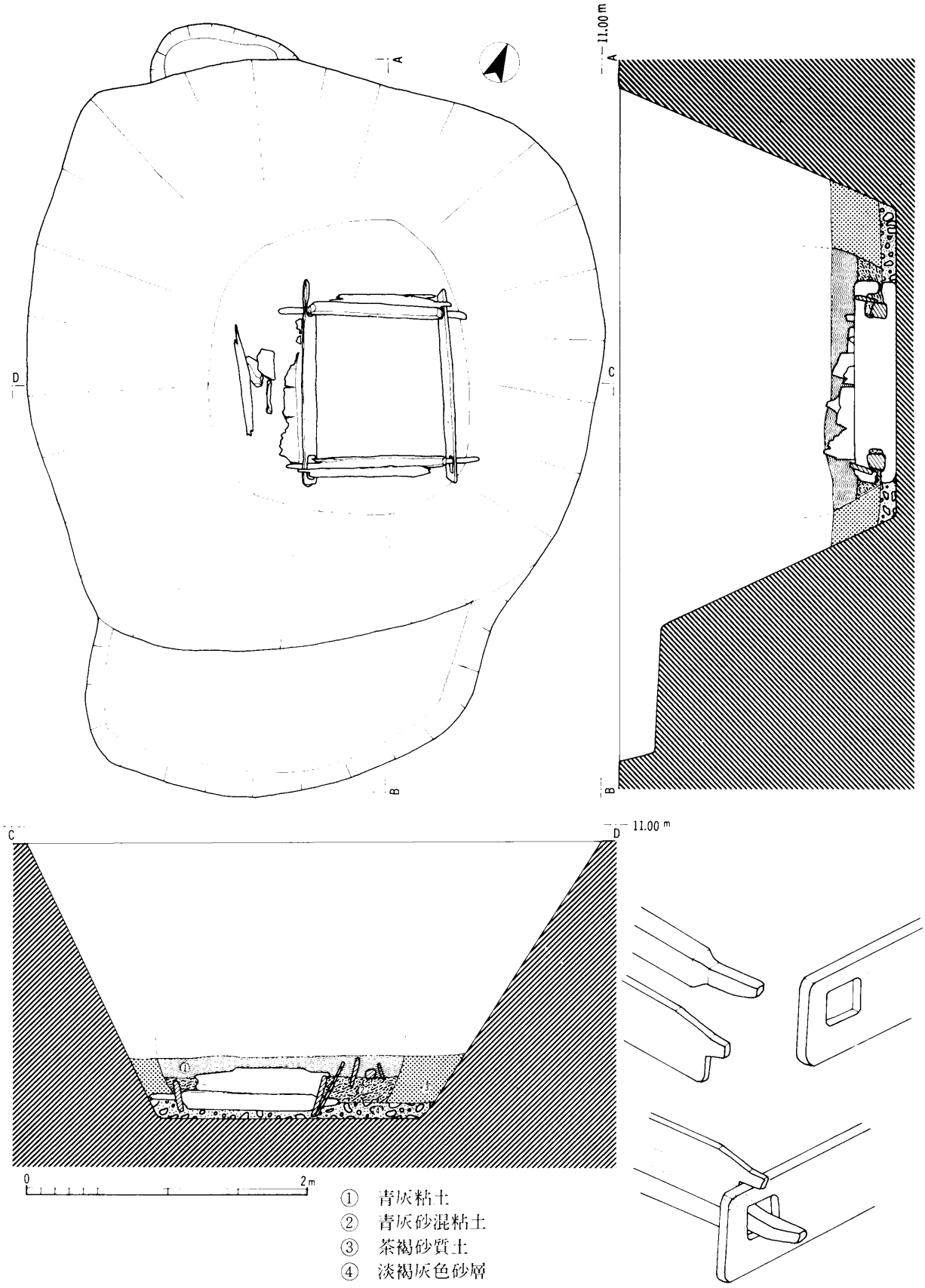


第28図　ＳＥ６井戸枠の組手模式図

第29図　ＳＢ19～22・ＳＢ31実測図（１：80）

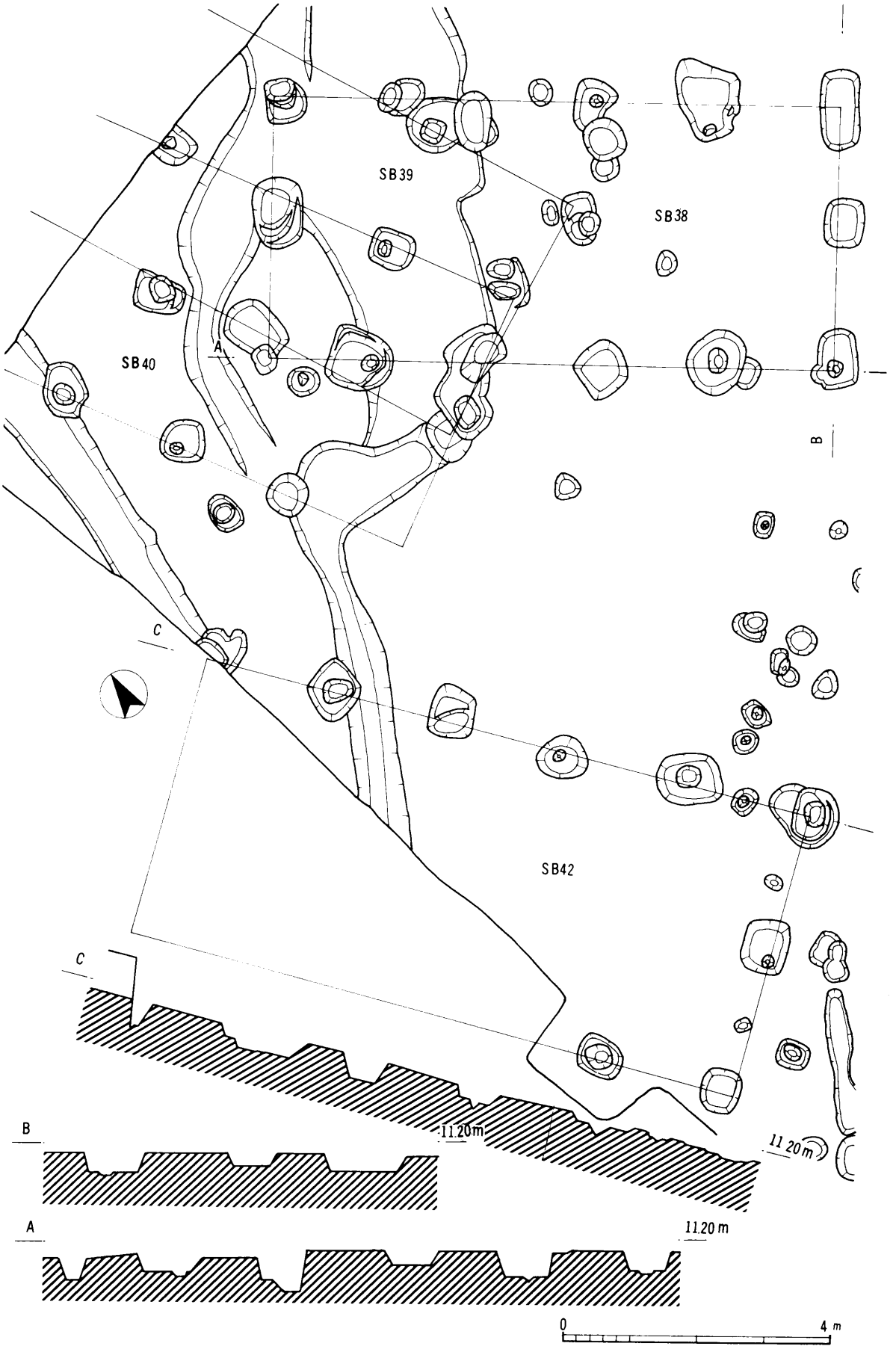


第30図　ＳＢ23・24・29・30実測図（１：80）



第31図　ＳＥ32井戸実測図（１：40）

第32図　ＳＥ32井戸枠の組手模式図



第33図　ＳＢ38～40・42実測図（１：80）

SB番号	規模(間)	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	面積(㎡)	時期	備考
1	3以上×3以上	N70°E	—	—	1.6	1.5	—	平安末葉	束柱
2	3 × 3	N69°E	4.2	3.6	1.4	1.2	15.12	〃	〃
3	2 × 2	N72°E	3.6	3.6	1.8	1.8	12.96	〃	
4	5 × 2	N21°W	9.0	4.4	1.8	2.0+2.4	39.6	〃	
5	2 × 2	N19°E	3.2	3.2	1.6	1.6	10.24	不明	
8	2 × 2	N58°E	3.5	2.6	1.75	1.3	9.1	〃	
10	5×2以上	N34°W	11.5	—	2.3	1.8+2.4	—	平安前葉	出土遺物99～105
11	4×2以上	N28°W	5.2	—	1.3	2.2	—	〃	
19	3 × 2	N72°E	6.9	4.8	2.3	2.0+2.8	33.12	〃	SB20、22より古い
20	3 × 2	N74°E	5.1	4.2	1.7	2.1 (2.7+1.5)	21.42	〃	SB19、21、22より新しい
21	3 × 2	N17°W	4.8	4.2	1.5+1.7 +1.5	2.1	20.16	〃	SB20より古い
22	4 × 3	N76°E	5.7	4.5	1.43	1.5	25.65	〃	SB19より新しい SB20より古い
23	5 × 3	N76°E	7.5	4.5	1.5	1.5	33.75	〃	
24	3 × 2	N74°E	3.6	3.2	1.2	1.6	11.52	〃	束柱
25	4 × 3	N58°E	7.0	4.5	1.75	1.5	31.5	平安中葉	
26	2以上×2	N58°E	—	4.0	2.0	2.0	—	奈良後半	
28	3以上×2	N25°W	—	4.5	2.0	2.0+2.5	—	平安前葉	
29	3 × 2	N68°E	4.5	3.4	1.5	1.7	15.3	平安中葉	出土遺物106～109
30	3 × 3	N65°E	4.8	3.6	1.6	1.2	17.28	〃	
31	5 × 2	N61°E	11.5	4.4	2.3	2.2	50.6	〃	
33	2 × 1	N61°E	5.8	4.2	2.9	4.2	24.36	平安前葉	SE32を囲う
38	5 × 2	N58°W	8.5	3.8	1.7	1.9	32.3	奈良後半	
39	3以上×2	N29°W	—	3.9	2.4	2.5+1.4	—	〃	
40	4以上×2	N32°W	—	4.0	1.8	2.0	—	〃	
41	3 × 3	N53°W	3.9	3.9	1.3	1.3	15.21	不明	SB42より新しい
42	5 × 2	N43°W	9.3	4.2	1.86	2.1	39.06	奈良後半	SB41より古い

第6表　A地区掘立柱建物一覧表

SA番号	規模(間)	軸方向	長さ(m)	柱間寸法(m)	時期	備考
12	6	N25°W	13.8	2.3	平安末葉	SD9と平行
13	4	N17°W	8.0	2.0	平安前葉	
14	5	N72°E	17.0	3.4	平安末葉	
15	4	N74°E	9.5	2.4+2.4+2.0+2.7	〃	SA16より新しい
16	5	N70°E	7.1	1.7+1.7+2.0+1.7	〃	SA15より古い
17	4	N71°E	9.5	2.4+2.4+2.0+2.7	〃	
18	7	N18°W	18.1	3.0+2.5+2.4+2.1 +5.4+2.7	〃	
35	5	N64°E	11.0	2.9+1.3+1.3+2.6+2.9	不明	

第7表　A地区柵列一覧表

れる。曲物は径38～45cmだが、高さは12cm前後と浅い。切り合い関係からＳＥ６の方が古いが、遺物にはほとんど時期差が認められないものも含む。

Ｇ．時期不明の遺構

(1) 掘立柱建物

ＳＢ５　２間（3.2m）×２間（3.2m）の正方形の建物で、棟方向は決定しがたいが、一応N19°Eとしておきたい。柱間寸法は桁行、梁行とも1.6ｍ等間と狭く、柱掘形は径30～50cmの円形、または一辺40～70cmの長方形である。

ＳＢ８　桁行２間（3.5m）×梁行２間（2.6m）の東西棟で、棟方向はＮ58°Ｅである。柱間寸法は桁行1.75ｍ等間、梁行1.3ｍ等間で、柱掘形は径40～60cmの円形である。

ＳＢ41　３間（3.9m）×３間（3.9m）の正方形の建物で、棟方向は決定しがたいが、一応N53°Wとしておきたい。柱間寸法は桁行、梁行とも1.3ｍと狭く、柱掘形は20～40cmの円形で、埋土に多量の炭が混入していた。切り合い関係によりＳＢ42より新しい。

(2) 柵　列

ＳＡ35　５間（11.0ｍ）で、柱間寸法は西から2.9ｍ＋1.3ｍ＋1.3ｍ＋2.6ｍ＋2.9ｍｍである。方向はＮ64°Ｅで、柱掘形は20～40cmの円形または楕円形である。

３．Ａ地区の遺物

出土した遺物は整理箱で150箱にのぼり、縄文時代後期の土器を上限として中世（鎌倉時代～室町時代）のものまでみられる。奈良時代以前のものと、中世のものは量的には少なく、平安時代に属するものが圧倒的に多い。土器以外のものでは、井戸枠や曲物等の木製品、石製紡錘車、土錘などが出土している。平安時代の土器では、土師器の杯、甕が量的に目立つが、灰釉陶器が比較的多く出土し、緑釉陶器片も20点を数える。その他、製塩土器もかなり出土している。また、墨書土器は７点に及び、中には「奥」という文字がはっきり読みとれるものがある。一括遺物として良好なものには、平安時代の井戸や溝、竪穴住居等から出土したものと、鎌倉時代初頭の井戸から出土したものがあり、他は包含層出土のものとして記述した。以下、時代別・形態別に個々に概述してゆく。

Ａ．縄文時代の土器（１～３）

小片がほとんどで数は少ない。ＳＤ27のほか、砂礫質の包含層から出土したものが多い。

（１）は甕の口縁部小片で、磨耗が進んでいるが、２本の太い沈線を配し、後期に属するものであろう。

（２）は晩期の甕形土器の口縁部片を考えられ、断面三角形の素文突帯が二条走る。胎土は２～４mmの小石を含むが精土に近く、色調は白っぽい黄褐色を呈する。ＳＤ27出土。

（３）は口縁部が「く」字状に内傾する晩期の浅鉢形土器片である。口縁部外面には幅２mmの２本の沈線が平行に走る。胎土は小粒砂を含み、色調は暗灰褐色を呈する。

Ｂ．弥生時代の遺物

(1) 弥生時代中期の土器

壺（４～８）　（４・５）は口縁部が大きく外反する広口壺である。（５）はラッパ状に開く口縁部をもち端部が下方へ垂れ下り、端面に櫛描波状文が施される。口縁部内側には瘤状突起が貼付される。頸部には４条のヘラ描沈線がめぐり、肩部にかけて９条単位の櫛描簾状文が２帯施され、体部上半部には時計回りの櫛描き横線帯が施されている。内面は頸部がヨコナデされ体部の３分の２以下はヘラケズリがなされる。色調は外面が白味を帯びた黄褐色を、体部内面は黒灰色を呈する。津市の亀井遺跡で類似したものが出土しており[18]、突起をもつなど東海系の形態をもちながら簾状文や口縁端部の櫛描波状文など畿内第Ⅲ様式の影響をうけた中期後半のものと考えられる。（４）は小片であり、口縁部の形態は不明であるが、櫛状工具による波状文が施されている。

（６～８）はいずれも口縁部が受口状を呈する細頸壺で口径は６～８cmである。口縁端部は垂直に立ち上るもの（６・７）とやや内傾して立つもの（８）がある。

（６）の口縁部は櫛描き列点文が、頸部には櫛描

き簾状文が2段に施される。

（7）の口縁部は2条の櫛状工具による凹線がめぐり、口縁部以下は縦方向の粗いハケメが施される。

（8）は口縁部に2条のヘラ描沈線が施され、その間に平たい浮文が貼付される。頸部にはハケメが施されているが、磨耗が激しい。内面には粗い横方向のハケメが見られる。（7・8）の胎土は精良であり、色調はいずれも淡灰褐色から淡褐色を呈する。

甕（9～11）「く」字形に短く外反する口縁部をもつもので、頸部から体部外面にかけて縦方向のハケメが施されている。

(11)は口径25cmと大形であり、他は12～15cmである。

(9・10)の口縁部はヘラ状工具による刻目文が(11)には櫛状工具による刻目が施される。内面は口縁部に横方向の比較的粗いハケメが見られる。色調はいずれも茶褐色を呈し、焼成は良好である。(9・10)には頸部を除く外面の一部に煤の付着が見られる。

(2) 弥生時代後期～末葉の土器

壺（12～14）(12)は口縁部が大きくラッパ状に開く広口壺であり、口径は25.6cm。口縁端部は上下に肥厚し、外面に櫛状工具による羽状刺突文、内面にも刺突文を施す。肩部には1条の突帯をめぐらし、刺突文を施す。頸部は細かいハケメが見られる。焼成は軟であり、色調は橙褐色を呈する。

(13)はほぼ完形に近い壺で、丸味をおびた球状の張りのある胴部から「く」字形に外反する長い口頸部がつき、端部は直立して丸くおさまる。端部外面には浅い凹線が走る。体部上半は縦位の、下半部には横位の調整時のハケメが残る。胎土は細砂を含むがていねいに仕上げられており、色調は淡褐色を呈する。ＳＤ27出土である。後期末葉に属するものであろう。

(14)は、外面ヘラミガキされたもので、わずかに細かいハケメの痕跡が残る。口縁部は鋭く外反し、端部は上方に肥厚する。体部内面は黒色に変色しておりハケメが見られる。

甕（15・16）(15)は口縁部が鋭く外反し、端部は直立して受口状をなす。口縁部下端には櫛状工具による刺突文が、不規則に連続して施され、体部外面にはハケメの痕跡が残り、肩部以下に1～3mmの櫛描き沈線が6条めぐる。焼成は良好であり、色調は暗茶褐色を呈する。口径14cmである。近江の影響をうけた後期前半のものであろう。

(16)は球形に近い体部をもつ台付小形甕で、口径よりも胴部最大径がやや大きい。口縁部はわずかに外反するもので短かく、体部外面は比較的細かいハケメがみられる。脚台は八字形に開くもので内外面ともしっかりとナデられている。脚台を除く外面には煤の付着が見られる。胎土は小石を含み粗土であり、色調は外面が暗褐色、内面は黄褐色を呈する後期後半のものである。

高杯（17～19）(17)は脚部が大きく八の字に開き、脚裾・杯部は欠損する。脚部高は12cm前後と推定される。脚柱部に櫛状工具による10条の横線文が二段に巡り、3方に円形の透し孔がみられる。外面はヘラミガキが施され、内面には比較的粗い横方向のハケメが施される。胎土は緻密であり、色調は明褐色を呈する。後期前半のものである。

(18)は脚裾、杯部を欠損する。脚柱部は上半が直線的で、中央部以下は大きく裾が広がるものと思われる。4方に円孔が穿たれているが、無文である。脚部内外面ともナデられている。胎土には細砂を含み、色調は淡褐色を呈する。

(19)は口径15cm、器高10.6cmで杯部は大きく内弯し端部は丸くおわる。脚部はやや中太で、脚部がゆるく屈折して開く。杯部内両はハケメのちナデられており、脚裾はヨコナデされている。胎土は小石や金雲母を多量に含み、色調は淡黄褐色を呈する。杯部には幅約1.5cmの粘土紐による成形痕跡が残り、杯部口縁部の一端には黒斑が見られる。ＳＤ27出土。

(3) 弥生時代中期の石器

石鏃（20）チャート製の無茎石鏃で、未製品と思われる。最大長3.0cm、最大幅2.6cm、最大厚0.9cmと大型のものである。

Ｃ．古墳時代の遺物

(1) 土師器

椀（21）口径10.7cm、器高3.8cm。丸みをもって立ち上がる体部から口縁部は丸くおわる。口縁部はヨコナデされている。胎土は精良であり、色調は淡黄白色を呈する。（29）の須恵器杯身と同じピットから出土したものである。

(2) 須恵器

杯蓋（22～24）　（22・23）はつまみを有しない杯蓋で、杯身（29・30）のタイプとセットになるものと思われる。天井部は未調査であり、天井部と体部の境の稜は不明瞭である。口縁部はロクロナデされ、天井部内面には不定方向のナデがみられる。口縁端部は内側にわずかに面をもつ。口径10.8cm、器高3.5cm前後。陶邑編年でＴＫ209期[19]に併行する7世紀前半のものであろう。

（24）宝珠形のつまみを有するもので、口径10cmと小さく、内面にかえりがみられる。陶邑編年によるⅢ型式段階に該当し[20]、7世紀のものである。

杯身（29～31）　（29・30）は口縁部の立ち上りが矮少化している。たちあがりは内傾したのち直立する。(29)は底部⅓がヘラ削りされ、体部はロクロナデされる。胎土は小石を含み比較的粗く、色調は淡青灰色を呈する。口径9.5cm。(30)は口径12.8cm。やや扁平な器形で、受部は水平にのびる。胎土は緻密で、色調は青灰色を呈する。

（31）は口径10cmと小型。口縁部は内弯気味に上外方へのびる。端部はやや肥厚して丸く仕上げられる。底部は平らで、ヘラケズリ後は未調整である。体部・口縁部はロクロナデされる。胎土は小石を含み、色調は青灰色を呈する。

高台付椀（34）　台付椀の椀部のみ残存しているもので、体部は外反しつつ上外方へのび、端部は丸くおさまる。口径15cmで、体部高は7.5cmと深い。低い高台の付くものであろう。

把手付椀（35）　杯、あるいは椀形態を呈し、棒状把手がのこる。把手は天井部と体部の境から長さ2.5cm、幅0.8cmで上方に折れ曲がる。対峙する部分が欠損している。天井部は回転ヘラケズリがなされ、体部との境は、わずかながら稜の痕跡が見られる。体部・口縁部は内弯し、浅い沈線が2ヶ所にめぐっている。口径9cm、器高4.4cm。胎土は小石を若干含むが精良であり色調は暗青灰色を呈する。蓋の可能性もある。

(3) 石製品

石製紡錘車（36）　滑石製の紡錘車で、上面径2cm、底面径4cm、高さ2cm。側面、底面それぞれに線刻の鋸歯文が見られ非常に精巧な仕上げである。県下では、おばたけ遺跡で同タイプのものが出土している他[21]、荘遺跡では動物等の絵が線刻されたものが出土している[22]。古墳時代後期のものと考えられるが、明確な時期決定はしがたい。

Ｄ．奈良時代の遺物

(1) 須恵器

須恵器杯蓋（25～28）　いずれもつまみを有するもので、口径は13～17cmと様々である。（25）は内外面ともていねいにロクロナデされており、口縁端部は下方へ短く屈曲する。外面には自然釉がかかり色調は淡乳灰色を呈する。（26）はつまみ部を欠損するが、天井部3分の2はヘラケズリがなされ、口縁端部は内側へ屈曲する。色調は青灰色を呈する。（27）は器高の低いもので天井部はほぼ水平に広がる。端部はわずかに下方に屈曲する。胎土は小石を若干含むが精良であり淡青灰色を呈する。（28）はつまみ部分のみ残存しているが、天井部中央内面に刻印のみられるものである。つまみの径は3.7cmで、偏平な凝宝珠形である。刻印は0.9cm四方で、国構えの中に片かなの「キ」のような記号が陽刻されている。

須恵器杯身（32・33）　(32)は口径13.4cm、体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさまる。底部は平底を呈していて、回転ヘラ切りが丁寧に行なわれている。内面3分の2は不定方向のナデがみられる。（33）は口径22cm、器高5cmと大形のもので、体部は、内弯気味に上方へのびた後に直立する。底部と体部の境は丸味をもつ。底部は回転ヘラケズリがみられ、口縁部はロクロナデされる。色調はいずれも青灰色を呈し、胎土の緻密な焼成良好なものである。

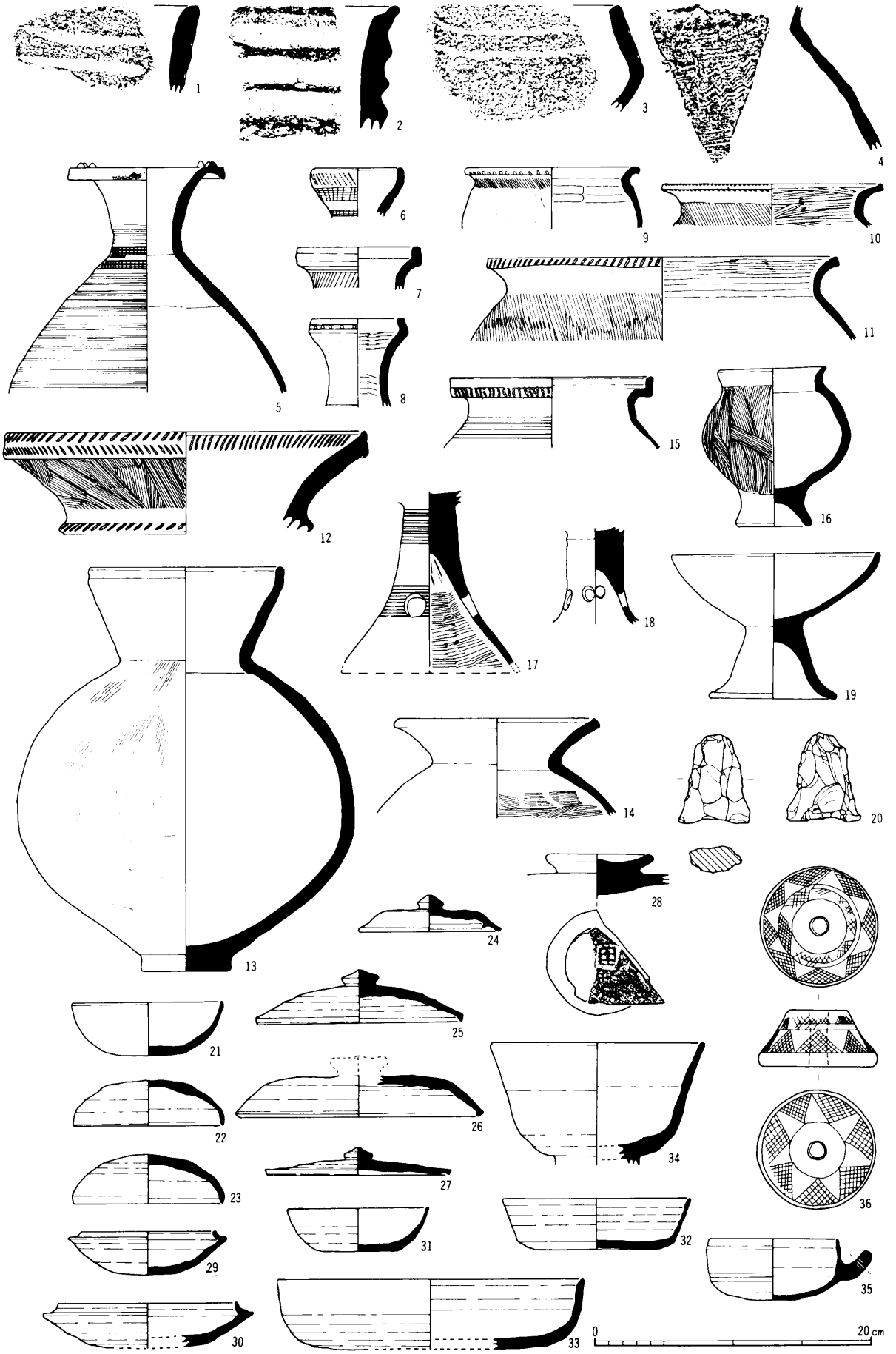
Ｅ．平安時代の遺物

(1) ＳＥ32井側内出土の土器

〔土師器〕

杯Ａ（39）　口径12.8cm、器高3cm、口縁部はゆるやかに内弯し、端部は丸くおわる。口縁上半部はヨコナデ、他はナデられている。胎土はやや粗く、全体的に黒く変色している。

杯（37・38）　口径13.6cm、器高3.5～4cm。平らな底部から、外傾する口縁部がつづくもので、口縁端部は、内側にわずかに肥厚する。口縁部はヨコナデされており、口縁下半部から底部にかけては、ユビオサエによる凹凸が残されている。（38）の底部



第34図　A区出土縄文時代～奈良時代の遺物実測図（1：4）（1～4、20、28、36は1：2）

外面はヘラケズリされており、口縁部内面には斜行暗文が施されている。胎土は緻密であり、色調は淡赤橙色を呈する。

皿A（40）　口径14cm、器高1.8cm。内弯して立ち上がる口縁部は「く」字状に屈曲し外反するもので外面全体がヘラミガキされており、内面はヨコナデされている。胎土は緻密であり、白色をおびた淡橙灰色の色調を呈する。

皿B（41）　口径16.4cm、器高2.5cm直立する口縁部から端部は外反してそのまま丸くおさまる。底部は未調整であり、色調は淡褐色を呈する。

甕B（42～47）　口径17cm前後、(47) は21.4cmとやや大きい。器高15cm前後。体部最大径は口径とほぼ同じである。口縁部はヨコナデされ、するどく外反し、端部はわずかに上方に肥厚して立ち上がる。(44) は口縁端部外面には浅い沈線が1本施されている。体部は球状で、外面は肩部から比較的粗いハケメ（4本／cm）が施され、下半部はヘラケズリがなされている。(46) は底部近くまで細かいハケメが施されている。内面は、横方向のハケメがみられ、外面と同じく下半部から底部にかけてはヘラケズリがなされている。(46) は外面下半分に使用による付煤がみられ、底部内面には、炭化米が大小併せて約100粒付着しており、炊飯に使用されていたものと推定される。色調はいずれも淡褐色から淡茶褐色を呈する。

(2)　ＳＥ32掘形内出土の遺物

〔土師器〕

椀（48～51）　口縁部はゆるやかに内弯し、丸味をおびた椀に近いもので、端部は内側にやや肥厚するもの（49・51）とそのまま丸くおわるものがある。口径11.4cmから15.6cm。器高は3.5cm前後、口縁上半部はヨコナデされており、下半部はユビオサエによる凹凸がわずかに残り、底部はナデられている。胎土は比較的粗く、色調は淡黄褐色を呈する。

杯A（52～60）　掘形出土の杯の中では最も多いもので、ほぼ平らな口径に対して比較的大きな底部を有し、口縁部はヨコナデされ、わずかに外反する。口縁端部は内側に肥厚するものが多い。底部は未調整あるいはナデられており、指圧痕の残るもの（55、57、58）がある。口径は12cmの小ぶりのものと、14cmから16cmのものがあり、器高は、いずれも3cm前後である。胎土は若干の細砂を含むものがあるが、精土に近いものがほとんどであり、色調は、やや赤味をおびた褐色を呈するもの（52、55、56、57、59、60）と淡褐色（53、54、58）を呈するものがある。(57・58) 底部は、わずかに内弯し外底部周囲にはユビオサエによる凹凸がはっきりと残されており、中央部に墨書がみられる。(57) は底部中央部が一部欠損しているが、「奥」という漢字が書かれている。(58) は残存が少なく、判読不能である。

杯C（61・62）　口径16.5cm前後、器高4.5cm、やや深めで、口縁部は、丸味をおびてゆるやかに内弯し、端部は丸くおわる。口縁上半部がヨコナデされており、底部にはケズリがみられる。(61) は淡茶褐色の色調を呈し、胎土は良好で硬い。(62) は内外面ともに付煤がみられるが、色調は赤褐色を呈し胎土はもろい。

杯B（63）　貼り付け高台をもつ杯で、口縁部はやや内弯しながら直立するが、端部は欠損しており不明である。口縁部外面は、ヨコナデ後ヘラミガキが施されており、内面には斜行暗文がみられ、ていねいな作りである。高台はやや外開きに付けられており高台径は推定15.6cmである。胎土は良好であり、色調は赤褐色を呈する。

盤（64）　口径推定22.8cm、器高4.6cm。外反してのびる体部からやや肥厚して端部をつくる。底部は欠損している。口縁端部はヨコナデされ、体部内面にはヘラミガキが施されている。体部外面は磨耗がすすみ調整は不明である。胎土は緻密で、焼成良好、色調は淡褐色を呈する。

皿（65～68）　口径15.4～17.4cm。器高2.5cm前後。ほぼ平らな底部からやや外反気味に口縁部が直立し端部は丸くおわる。口縁部はヨコナデされており、底部はナデられている。(65) は底部にユビオサエによる凹凸が残る。(67) の胎土は精緻である。色調は（66）が赤褐色、他は茶褐色から暗褐色を呈する。

甕A（69・70）　口径12.5cm前後の小型甕で「く」字形に強く外反する口縁部は、ヨコナデされている。(69) は胴部外面をハケメ調整し、内面は輪積み粘土の痕跡が残り、ナデられている。(70) は胴部内外面

ともナデられており、肩部内面には粘土のおり返し痕跡がのこり、ヘラのアタリがみうけられる。色調は(69)が茶褐色、(70)が赤味をおびた褐色を呈する。

甕B（71～77）　口径17.2cm～21.8cm、井側内出土の（42～47）の甕と同様の調整、技法等がみられる。ただし（71）は肩部近くまでヘラケズリがなされて赤橙色の色調を呈し胎土は緻密である。(77)は胴部内面がナデられている。（74、75、77）には外面に付煤がみられる。

甕C（78～80）　長胴甕と考えられるもので、いずれも口縁部から肩部にかけての小片である。(78)は口径推定37.8cm、他は口径24.8cm前後。（78）はほぼ直立する胴部から、口縁部が強く外反し、端部はつまみ上げられている。肩部から右斜め下がりに細かいハケメ調整がなされ、口縁部から肩部にかけてヨコナデされている。胴部内面は水平のハケメがみられ、頸部はヘラケズリされている。（79・80）の胴部外面は左斜め下がりのハケメ調整が見られ、口縁部は強くヨコナデされている。色調は（79）が赤橙色の他は、淡黄褐色を呈する。

甕D（81）把手をもつ大型の甕で、口径推定30cm。口縁部はヨコナデされ、胴部外面はナデられている。内面は細かいハケメが施され、その後把手のつけられている部分は強くおさえつけられ凹面となっている。把手は幅3cm、厚さ1.2cmで、口縁から約6cmの所から上方へむけてL字状につけられている。色調は黄褐色を呈し、胎土は砂混りで焼成はやや軟かい。

〔**須恵器**〕

杯蓋（85）　口径14.4cm。天井部を欠くものであるが、宝珠つまみをもつものと推定される。口縁端部はやや内側下方につまみ出し、外側に面をもつ。天井部⅔以上はヘラケズリがなされている。ロクロ回転は右まわりである。色調は淡灰青色を呈するが、胎土は細砂を若干含みやや粗い。

杯身（86）　底径11cm。平らな底部からやや内弯ぎみに体部が直立する。底部外面はヘラケズリがなされ、他はロクロナデである。色調は灰色を呈する。

〔**製塩土器**〕(82～84)　小片を含め掘形内からは8点出土しているが、図以外のものは小片である。(82・83)は体部のみ残存しているもので、口径は前者が17.8cm、後者は14.4cmと推定される。ともに1.6～2.2cm幅の粘土紐継ぎ目の痕跡が見られる。(84)は底部の一部が残存するものだが、体部にくらべて底部の厚みは非常に薄い。底径は推定15.2cmであり、体部はやや内傾して直立する。胎土はいずれも1～3mmの海浜性の砂粒を多数含み、色調は淡褐色から橙褐色を呈する。小片の中には熱により赤桃色に変色しているものがあるが、付煤は全くみられない。

〔**屋瓦**〕

丸瓦（87）　截頭円錐形を半截した行基式瓦で、残存長12.8cm。焼成は堅緻で、色調は青灰色を呈している。凹面には布目痕が残り、凸面はタタキ目の上をナデ消している。掘形内からは、他に平瓦の小片が2点出土している。

〔**土製品**〕

土錘（88・89）　いずれも一端が欠損しているが、径0.6cmの小型のものと、径1.5cmのもので、胴部はふくらみをもたず管状である。胎土はもろく色調は茶褐色を呈する。

(3)　SB36出土の土器

〔**土師器**〕

椀（90）　口径13.0cm、器高3.7cm（推定）。体部は半球形に近く、口縁部は内弯する。口縁部は内外面ともヨコナデし、体部外面はユビオサエ、底部は未調整である。胎土は砂粒含み粗で、色調は淡黄褐色である。

杯A（91）　口径16.2cm、器高2.5cm（推定）。底部は平坦で、口縁部が外反する。口縁部は、内外面ともヨコナデし、底部は未調整である。胎土は緻密で茶褐色を呈する。

皿（92）　口径22.8cm、器高2.6cm（推定）。口縁部は内外面ともヨコナデし外面底部をヘラケズリする。内面には、螺線状の暗文が見られる。胎土は緻密で、赤褐色を呈する。

甕A（93）　口径12.8cm、器高9.6cmの小型の甕である。「く」字形に外反する口縁部から端部は上方に肥厚する。体部外面上半は5本／cmの縦方向のハケメ調整、下半から底部はヘラケズリである。内面もヘラケズリする。底部外面に長さ7.5cmのヘラ描き直線があり、記号文と思われる。色調は茶褐色で、外面体部に煤が付着する。

甕B（94）　口径15.4cm余りで、口縁部は内外面

ともヨコナデし、体部外面は、4本／cmの縦方向のハケメ調整、内面は6本／cmの横方向のハケメ調整を施す。破片のため、体部下半は、不明である。色調は淡黄褐色で、胎土には細砂粒を含む。

甕C（95）　口径25.2cm余の長胴甕と考えられる。口縁部は「く」字形に外反し、端部は上方に丸く肥厚する。口縁部は内外面ともヨコナデされ、体部の外面には、斜位のハケメ調整、内面には横位のハケメ調整が施される。色調は淡黄褐色で、体部外面には煤の付着がみられる。

〔**須恵器**〕

杯（96・97）　（96）は底部は平底で口縁部は内外面ともロクロナデのあとがみられ、内部底面は乱ナデで仕上げる。色調は灰色である。

（97）は、口縁部が直立気味に内弯して開き、底部との境が明瞭である。口縁部内外面と内面底部はロクロナデ、外面底部は、ヘラケズリする。ロクロ回転は時計廻りである。白い砂粒を含み、青灰色を呈する。

〔**土製品**〕

土錘（98）　土師質の土錘で円球形をしているが凹凸がある。胎土は砂粒を含む。一部に黒斑がみられる。

(4)　ＳＢ10出土の土器

〔**土師器**〕

杯A（99～101）　口径12.0～16.0cm、器高2.8～3.3cm。口縁端部は、丸くおわるもの（99・101）と外面に面をつくり、面の中央と内面に沈線が施されているものがある。口縁は内外面ともヨコナデし、外面は口縁下端から底部をナデる。内底部は、（99）はヨコナデしているが、（100）、（101）は小片のため不明である。いずれも胎土は緻密で、色調は橙褐色を呈する。（99）は、外面底部に漢字二字の墨書があり、第一字は「治」の略字体、第二字は判読不能である。

甕C（102）口縁部は「く」の字形に外反し、端部は外面に面をつくり先端は内面に曲る。口縁部は内外面とも強くヨコナデし、体部は、外面は斜位のハケメ調整、内面は横位のハケメ調整を施す。緻密な胎土で、乳白色を呈する。

〔**製塩土器**〕（103～105）　口径は16.0cm～17.6cm（推定）。器形は「たらい状」をし、（104）は外面口縁端部に沈線がみられ、（105）は、粘土巻き上げ痕が残る。調整は内面はナデによるが、外面は未調整のもの（103）（105）と若干ナデているもの（104）とがある。胎土は1～3mmの小石を含み、粗である。色調は、褐色を呈する。

(5)　ＳＢ29出土の土器

〔**土師器**〕

杯B（106・107）　口径14.2～16.2cm、器高2.1～3.2cm（推定）。口縁は内弯して立ち上がるが、途中大きく外反して、端部を形成する。口縁はヨコナデし、口縁下半はユビオサエで調整されている。器壁は薄く、胎土は緻密で、淡褐色をしている。

杯C（108）　口径16.6cm、器高3.2cm（推定）。口縁部はゆるやかに立ちあがり、口縁端部でわずかに外反し、外面に沈線を施す。口縁上半は、内外面ともヨコナデされている。胎土には非常に細かい砂粒を含む。色調は、茶褐色をしているが、内面に黒斑がみられる。

〔**灰釉陶器**〕

椀（109）　口径15.8cm（推定）。器高5.0cm。体部は内弯して立ち上がり、口縁は外反する。外面体部下半はヘラケズリされており、ロクロ回転は時計廻りである。口縁部は内外面ともつやのある白色の釉が体部外面と内面には、つやのない白色の釉がかかっている。

(6)　ＳＤ９出土の土器

〔**土師器**〕

杯A（110・111）　口径は13.0～13.2cm、器高は3.2～3.8cm（推定）。口縁部は内弯して立ち上がる。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部は未調整である。（110）は口縁部外面に粘土紐の痕跡が残る。（110）は淡黄褐色を呈し、胎土は粗である。（111）は淡茶褐色で、胎土は良い。

杯B（113）　口径13.8cm、器高3.1cm（推定）。器形、調整手法は、ＳＢ19出土の杯B（106）、（107）と同様であるが、胎土に細砂粒を含む。

杯C（112）　口径13.8cm、器高3.4cm。口縁部はゆるやかに内弯し、端部で外反する。器壁が磨耗しており、調整技法は不明であるが、胎土には、砂粒を含み、色調は明茶褐色を呈する。内面底部に黒斑

がみられる。

椀（114・115）　高台径5.4～7.2cm。ロクロ水挽きされたもので、付高台は外側に開く。（115）は、底部外面に糸切り痕が残る。胎土に細砂粒を含み、色調は黄褐色である。

甕B（116）　口径15.0cm（推定）。直立気味の体部から口縁が外反し口縁端部で面をつくる。口縁部は内外面ともヨコナデしているが、内面には横方向のハケメが残る。体部は外面８本／cmの縦方向のハケメを施した後、ナデている。内面は９本／cmの横方向のハケメ調整をしている。胎土は緻密で、茶褐色をしている。

甕C（117・118）　口径は（117）が22.8cm（推定）。（118）が34.4cm（推定）。口縁が「く」の字形に外反し、端部で面をつくる。口縁部は内外面ともヨコナデし、外面体部は、斜め方向のハケメ調整を施す。体部内面は、（117）ではナデられており、（118）では横方向のハケメ調整が施されている。胎土は砂粒を含み、色調は淡褐色をしている。

〔**灰釉陶器**〕

皿（119～121）　高台径6.2～11.4cm(推定)。(119)、(120）は、角高台がつき、内面全体に白緑色の釉がかかっており、刷毛塗りと考えられる。黒笹14号窯式であろう。[23]（121）は高台の断面が三日月に近い形をしており、外面体部と内面に白緑色の釉がかかっており、刷毛塗りをしたと考えられる。直接重ね焼き痕が明瞭に残る。黒笹90号窯式であろう。

椀（122～125）　高台径6.4～8.8cm（推定）。(122・123）は断面が三日月形またはそれに近い形をした高台がつけられている。（122）は内面と体部外面に（123）では、内面に白緑色の釉がかけられており、刷毛塗りと考えられる。黒笹90号窯式であろう。（124）は、断面が三日月形に近い高台がつき、底部に糸切り痕が残る。釉は内面体部に漬け掛けされている。折戸53号窯式であろう。（125）は高台が外開きになっており内面底部に自然釉がみられる。胎土はあまりよくない。

(7)　包含層出土の土器

〔**土師器**〕

杯A（126）　口径12.6cm、器高3.6cm。口縁部は内弯気味に立ち上がり端部は丸くおさまる。口縁を内外面ともヨコナデするもので、外面に粘土紐の継ぎ痕が残る。色調は淡黄褐色で、胎土は緻密である。

杯B（127～131）　口径14cm内外、器高３cm内外。いずれも口縁部をヨコナデするものであるが、（130・131）では底部外面にユビオサエによる指頭圧痕が残る。色調は淡褐色を呈し、胎土は緻密である。

杯E（132）　口径17.8cm、器高3.9cm。ロクロ製で、底部外面に回転糸切り痕が明瞭に残り、直線的に外傾する体部には、ロクロ目が明瞭に残る。色調は茶褐色で砂粒を含み、口縁部内面の一部に黒斑がみられる。ｐｉｔ出土である。

皿（133）　口径16.2cm、器高2.0cm。口縁部はヨコナデし底部外面は未調整で凹凸がある。胎土は緻密で、色調は赤褐色を呈する。

皿（134～136）　口径11～12cm内外、底径５～６cm。ロクロ製で底部は厚く、糸切り痕が明瞭に残る。体部は直線的に外傾しているが、（136）では口縁部で内弯する。色調は茶褐色または淡黄褐色で、胎土は(134)、(136）は緻密、（135）は砂粒を含む。

皿（137・138）　（137）は口径９cm余り（推定）。（138）は約12cm。ロクロ水挽きによって浅い皿をつくり、高台をつけたもので、（137）は、底部外面に糸切り痕が残る。（138）はロクロ成形後内外面ともナデられている。胎土には、いずれも砂粒を含み、淡黄褐色を呈する。

椀（139）　口径14cm余り（推定）、器高5.4cm。体部は内弯しており口縁部の器壁が薄くなる。粗雑な作りで、外面は凹凸がはげしく高台も歪んでおり、外面に粘土ひもつなぎ痕がみられる。赤褐色を呈し、内面には、黒斑がみられる。

甕A（140）　口径13.2cm、器高9.6cm。底部は平底風で、胴部は球状をしており、口縁部は外反し、端部は上方に肥厚する。底部内外面と胴部内面はヘラケズリをしているが胴部内面上方には、横方向のハケメが残る。胴部外面は８本／cmの縦方向のハケメ調整が施され、口縁部は内外面ともヨコナデをする。胎土には、金雲母片や細砂粒を含み、色調は淡茶褐色であるが、外面は焼けて桃褐色をしている。

甕B（141）　口径14.8cm。口径が胴部最大径よりも小さいものである。口縁は「く」の字形に外反し内外面ともヨコナデされているが外面にはハケメが

残る。胴部は、外面は原体11本の縦方向のハケメ調整、内面は原体15本の横方向のハケメ調整が、それぞれ細かく施されている。色調は茶褐色で、細砂粒を含む。一応平安時代としたが、あるいは奈良時代のものかも知れない。

甕E（142）　口径28.0cm（推定）。肥厚した口縁部は「く」の字形に屈折し、口縁部をさらに外方にひく。内面には明瞭な稜線を示す。胎土に砂粒を含み、色調はレンガ色を呈する。焼きは硬い。愛知県（一宮市）の遺跡から多く出土するタイプである。

鍋（143）　口径18cm余り（推定）。口縁部は外反し、底部は浅い半球形をする。胴部は、外面は縦方向のハケメ、内面上部は、原体７本の横方向のハケメ、内面下部はヘラケズリで、それぞれ調整されている。胎土は緻密で、色調は淡黄褐色を呈する。

〔**黒色土器**〕

椀（144）　黒色土器Ａである。口縁内面直下には沈線がめぐる。内面体部は横方向にヘラミガキを施し、いぶし焼きされる。外面は、口縁部をヨコナデし、体部はヘラケズリする。粘土紐の継ぎ痕が残り、色調は茶褐色を呈する。

〔**製塩土器**〕(145～150)　口径14～19cm（推定）。器高５～6.2cmで、いわゆる志摩式製塩土器である。(145～147）は体部の器壁が比較的薄手で、口縁部がさらに薄くなるもので、外面はユビオサエによる指頭圧痕が明瞭に残る。内面は、(145)、(146）はナデられており、(147）はハケメが施されている。胎土には２～４mmの砂を含み、色調は褐色を呈するが、外面は熱を受けて、桃褐色に変色している。(145)の底部には、モミガラ痕や繊維痕がみられる。(148～150）は器壁が１cmを越える厚さのもので外面は、(149）は未調整、(148・150）はていねいにナデられており、内面は（149・150）はていねいにナデられ、(148）は粗いハケメが施される。胎土は、２mm以下砂粒を含むが緻密で、色調は褐色を呈する。(148)の外面は加熱により桃褐色に変色している。(149)の底部にはモミガラ痕がみられる。

〔**須恵器**〕

杯（151）　口径15.8cm（推定）。器高6.0cm。平らな底部に、直線的に外傾する体部がつらなる。底部外面はロクロケズリされており、体部にはロクロミズビキの跡が明瞭に残る。ロクロ回転は時計廻りである。胎土は、砂粒を少量含むが、堅緻で、色調は白灰色を呈する。

〔**緑釉陶器**〕(152～156）　(152)(153）は椀であるが（154～156）は、椀か皿か不明である。高台は(156）は、蛇ノ目高台で、他は外側に開く高台である。(153）の底部外面には糸切り痕がみられる。(152・153）は軟質で淡褐色をしており、(154～156)は硬質で灰白色を呈する。釉の色は、(152～154）濃緑色（155・156）は淡緑色をしている。(156）は底部外面には施釉されていない。(155）はｐｉｔ出土である。

〔**灰釉陶器**〕

椀（157～178）　形態、成形技法、施釉の特徴によって４つに大別することができる。①は(157・158)で、底部から体部下半にかけての器壁が厚く、高台の断面が方形であるが、下端中央部がややくぼむものである。底部外面はロクロケズリをされており、施釉は、内面全体に白緑色の釉がみられる。②は（159～170）で高台の断面が三日月形を呈するものである。(159・163・165・166・169・170）の底部外面にはロクロケズリの跡が残り、ロクロ回転は、(163・166）は時計廻り、他は不明である。施釉位置は、(159・160・161）は内面胴部に施釉されているが、底部しか残存していないため、口縁部内外面については不明である。(162～170）は内外両面とも施釉されているが(162～163）は、内面全面を、(165・166）は内面胴部を施釉し、低部に３～４cm幅のひと筆のハケ塗りをしており、(167～170）は内面胴部まで施釉している。釉の色は、いずれも白色または、白緑色である。(161・165・168・170）には、低部内面に直接重ね焼き痕がみられる。③は（171～177）で、高台が外側に開くものである。(172・173・175・177）には、底部外面に糸切り痕がみられる。施釉方法は（171・176・177）では白色の釉が漬け掛けされているが、他は小片のため不明である。(176・177）には口縁部に輪花が施されており、(177）は五方向と考えられるが、(176）は、小片のためその数は不明である。④は、(178）で、高台下端にモミガラ痕がみられるもので、

底部外面に糸切り痕を残す。

大椀（179）　口径32cm（推定）。ロクロ成形されており、口縁端部が外反する。内面にのみ施釉されており、白砂粒を若干含んだ胎土で、色調は灰白色を呈する。

皿（180～186）　皿も椀と同様に形態、成形技法、施釉によって大別できる。①は（180～182）で、底部から胴部にかけての器壁が厚く、断面方形の高台が付くものである。（181）は外面の底部と胴部をロクロケズリする。施釉はいずれも内面全面に白緑色の釉が施される。（182）は底部内面に三又トチン痕がみられ、また底部外面中央に墨書がみられるが判読は不能である。

②は（183～186）で口径が14～18cm程で、断面三日月形の高台が付くものである。（186）外面低部をヘラケズリしている。釉は（186）は、内面全面に（183～185）は内外両面で、（185）の外面の施釉は胴部中央までである。釉の色調は、いずれも白緑色である。椀の③～⑤にあたる皿は、出土していない。

F．鎌倉時代の遺物

(1)　ＳＥ６出土の遺物

〔**山茶椀**〕（187～190）　口径14.6cm～16.2cm（推定）（187・188）は口縁部のみ、（189・190）は底部のみ残存。体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯し外反する口縁部の端部は丸くおわる。底部内面中央部はわずかに肥厚し、付高台は径6.2cmと7.4cmであり、外に踏んばった短い逆台形状で（190）は幅が広く、端部に面をもつ。（187・189）の内面、（190）の底部を除く体部内面には淡緑色の自然釉がかかる。胎土、色調等は（188・189）が精土であり、淡灰白色を呈するが、（187・190）は若干細砂を含んでおり粗く淡灰色を呈する。（190）の高台内部には、二次的な付煤が濃くみられ、灯明用としていたものかもしれない。（190）の外底部には「＋」あるいは「×」という墨書がみられる。

〔**陶　器**〕

常滑甕（191）　頸部のみ残存する。推定口径22cmで頸部は直線的に外反し、胴張りの体部から頸部はくの字に外反する。頸部外面下半部を除いて暗茶褐色の施釉がなされている。曲物内から出土。

〔**木製品**〕

木製品として出土したものには、箸、曲物の他、井戸枠に使用された横桟、縦板の材等があるが、これらについては、〔第８表〕木製品一覧表のとおりである。

(2)　ＳＥ７出土の遺物

〔**土師器**〕

小皿（192）　口径6.8cm、器高1.3cm。手づくねであり、口縁部はゆるやかに内弯し、端部は細くつまみあげられており、ヨコナデがなされている。底部は口縁部に対して厚みが薄く、外底部は未調整である。色調は淡黄白色を呈する。

皿（193）　手づくねであり、口径15.6cm（推定）とやや大きめの皿。成形、調整は（192）と同様である。

鍋（194・195）　短く外反する口頸部から口縁端部は内側に折り返して、凹んだ面をもつ段をつくっている。口径25.5cm前後、（195）は体部最大径30cm、器高20cm（推定）。胎土中には砂粒を多く含んでおり、内面はナデられている。（194）の外壁は磨耗が進み調整技法等は不明である。色調は黄白色であり、口縁外面には一部付煤がみられる。

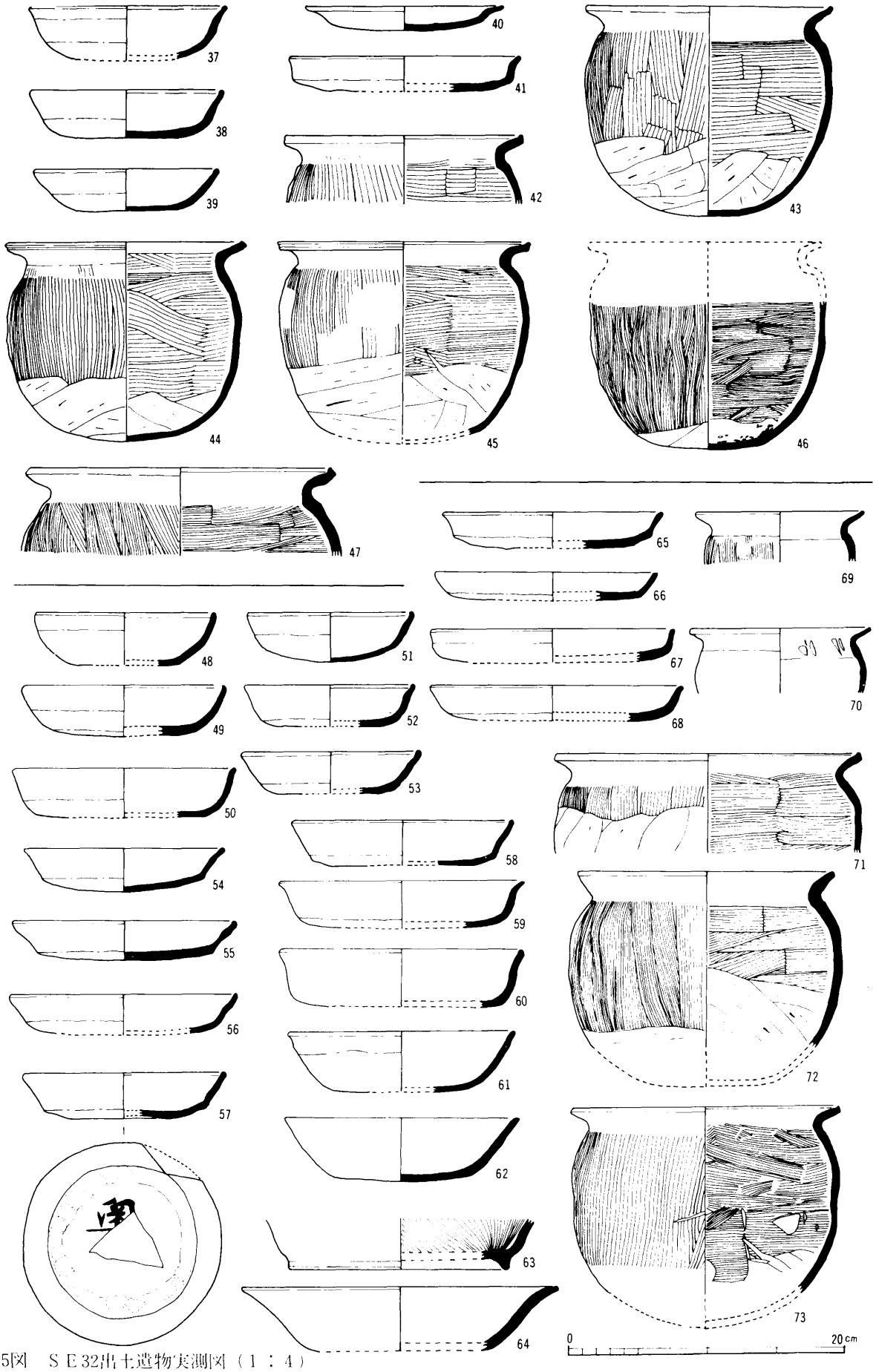
〔**木製品**〕

曲物（第８表）の木製品一覧表のとおりである。

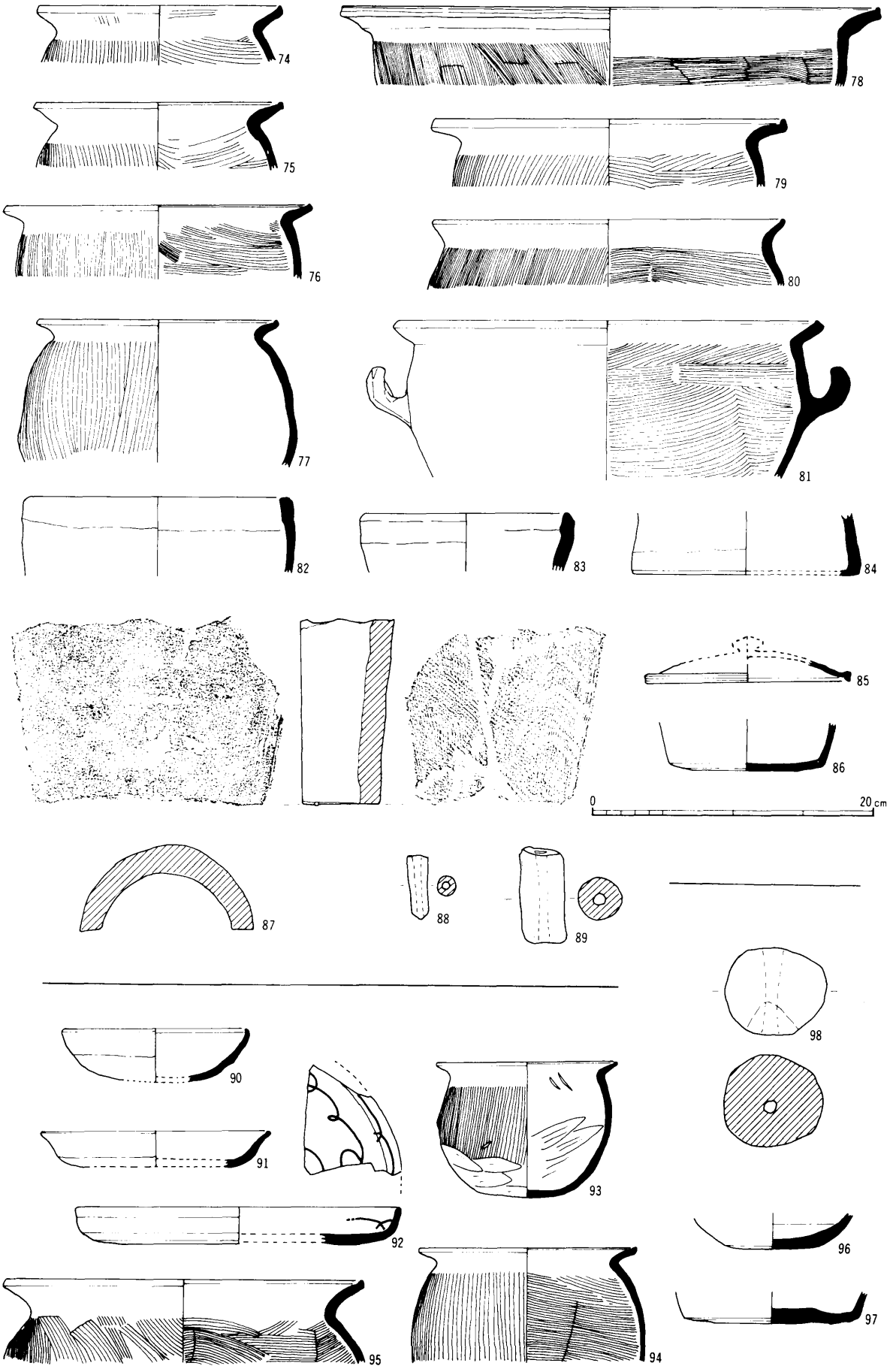
(3)　包含層出土の遺物

〔**青磁**〕

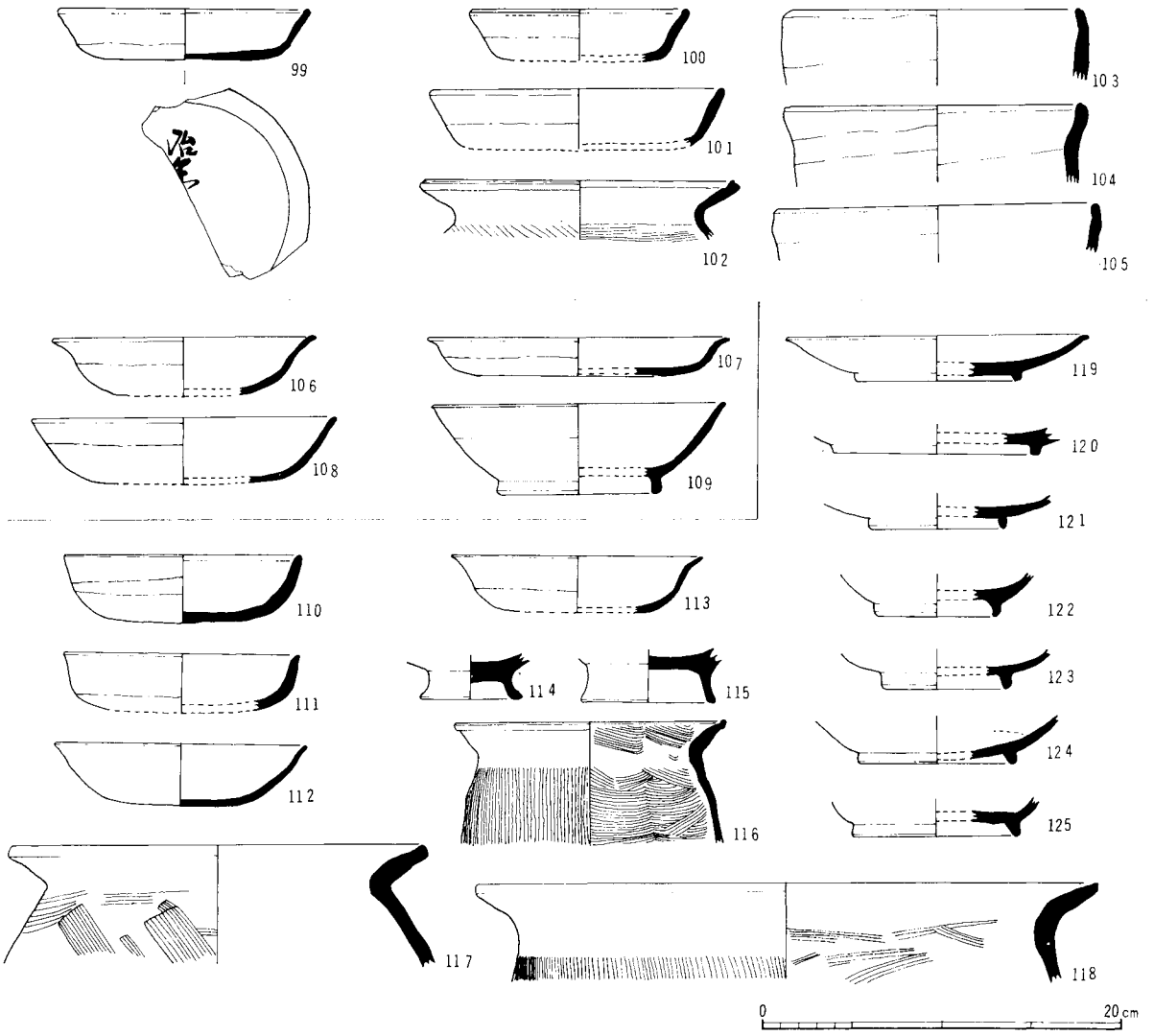
椀（196～198）　（196）は体部が内弯して立ち上がり、口縁部で強く外反しており、内面には、草花文が描かれている。うぐいす色の釉がうすく施されており、胎土は緻密で、灰白色を呈す。（197）は削り出し輪高台の断面が四角形で底部の器壁が厚く、内面には草花文が描かれている。釉は青味を帯びた緑色をしており、釉厚は0.4mm前後である。高台部畳付およびその内部と底部は露胎をなす。胎土は灰白色を呈し砂粒を含む。（198）は、体部が内弯気味に立ち上がるもので、体部内面上位には、沈線が施されている。外面は、櫛状工具による縦方向の平行線文が、内面には猫描手文が描かれている。猫描手文の原体は５点／６mmで、大きな点が１つ、小さな点が４つで構成されている。釉はうぐいす色で、うすく施されており、胎土は緻密で灰白色を呈す。



第35図　ＳＥ32出土遺物実測図（１：４）



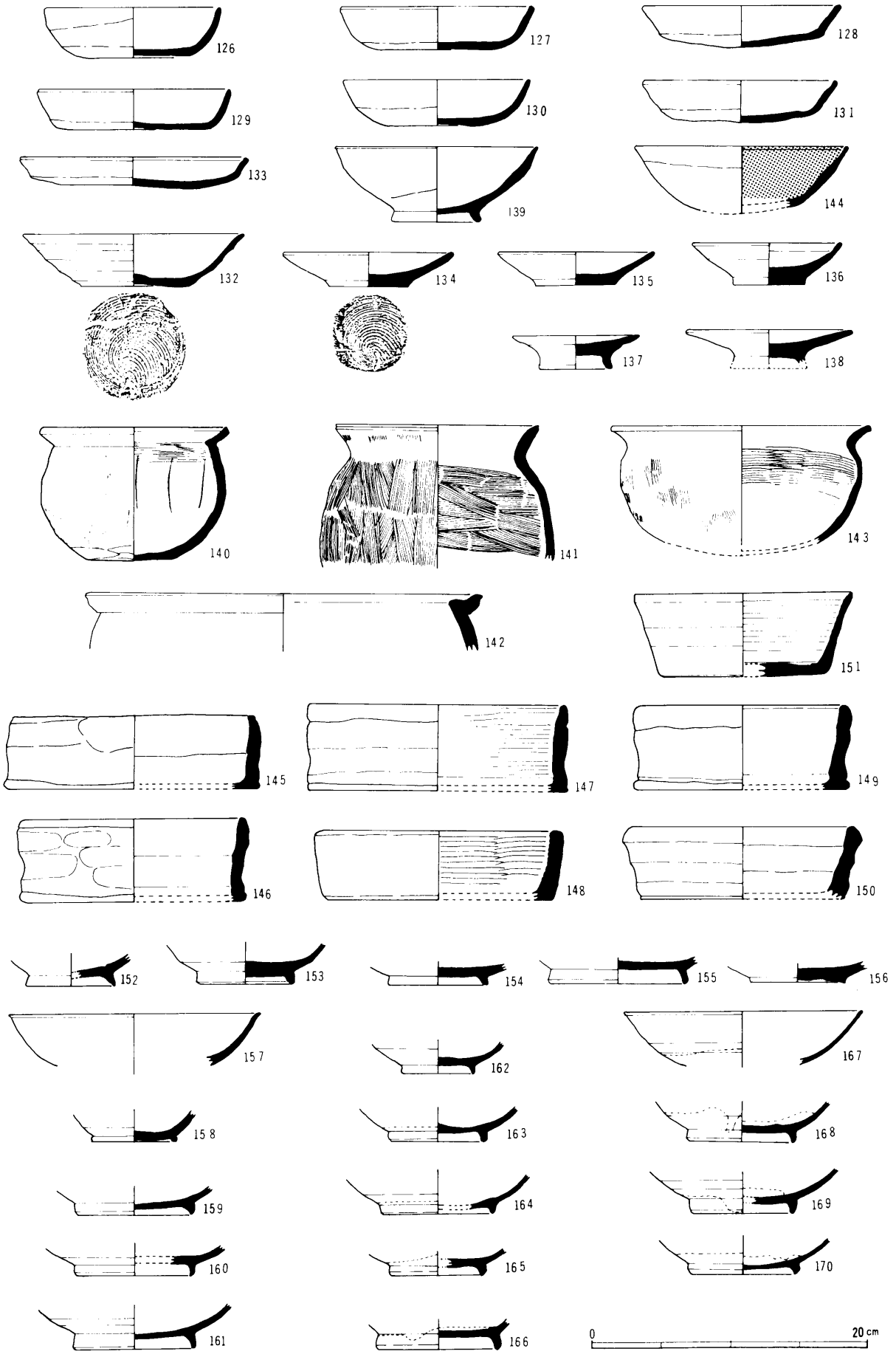
第36図　ＳＥ32掘形（74～89）・ＳＢ36（90～98）出土遺物実測図（１：４）（88･89･98は１：２）



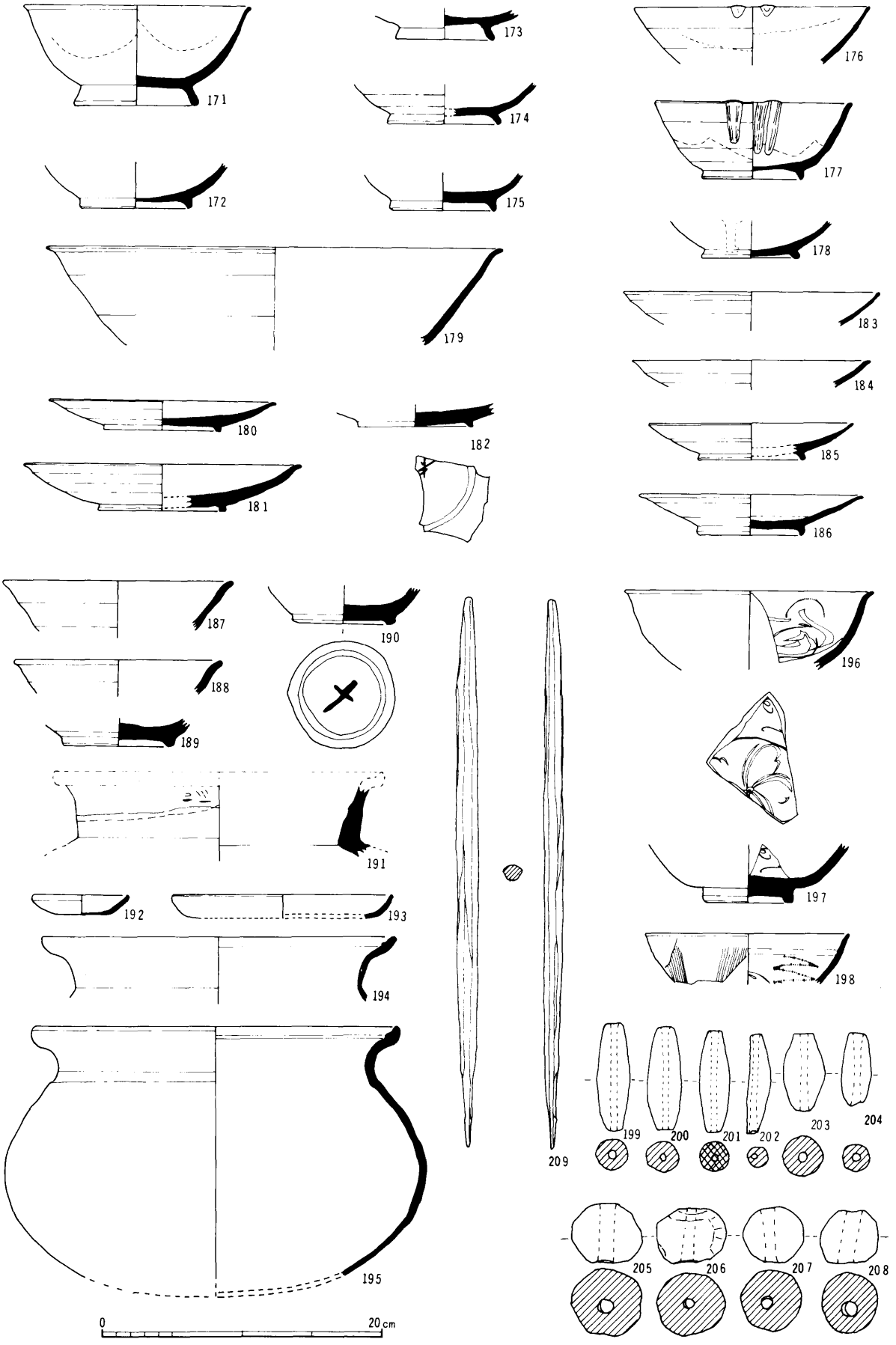
第37図　ＳＢ10(99～105)　ＳＢ29(106～109)　ＳＤ9（110～125）出土遺物実測図

番号	出土遺構	名称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
209	ＳＥ6	箸	19.5	0.7	0.5	面取り
210	〃	南側横桟	66.5	7.0	3.1	
211	〃	北側横桟	64.3	7.1	3.3	
212	〃	西側横桟	63.4	4.8	1.6	
213	〃	東側横桟	56.0	4.2	2.0	
214	〃	北側縦板	21.7残存	21.6	3.0	
215	〃	西側縦板（北寄）	19.9残存	20.0	2.4	
216	〃	西側縦板（南寄）	17.0残存	22.8	0.7	
217	〃	北側縦板（添板）	28.3残存	11.8	1.1	
218	〃	東側縦板	12.7残存	15.2	2.0	
219	〃	西側縦板（添板）	18.4残存	11.3	0.6	
220	〃	西南角縦杭	56.9残存	6.8	5.2	
221	〃	曲物（上）	径47.0	24.0	0.5	
222	〃	〃（下）	径44.0	16.9	0.5	
223	〃	〃（中）	径37.0	28.4	0.5	
224	ＳＥ7	〃（中）	径40.0	11.0	0.5	
225	〃	〃（上）	45.0	12.5	0.5	
226	〃	〃（下）	38.0	12.9	0.6	
227	ＳＥ32	東側横桟	136.4	21.3	4.1	
228	〃	西側横桟	146.1	29.6	4.0	
229	〃	南側横桟	135.2	11.3	8.4	
230	〃	北側横桟	131.1	10.5	7.5	
231	〃	南側横板	96.0残存	19.6	3.3	
232	〃	北側横板	94.1残存	15.6	3.1	
233	〃	西側外側横板	74.4残存	10.3	2.0	
234	〃	西側縦板（外側北寄）	29.6残存	19.6	3.5	
235	〃	〃（内側北寄）	29.7残存	19.7	3.2	
236	〃	〃（内側中央）	39.1残存	29.4	4.1	
237	〃	〃（内側南寄）	39.8残存	52.5	3.6	

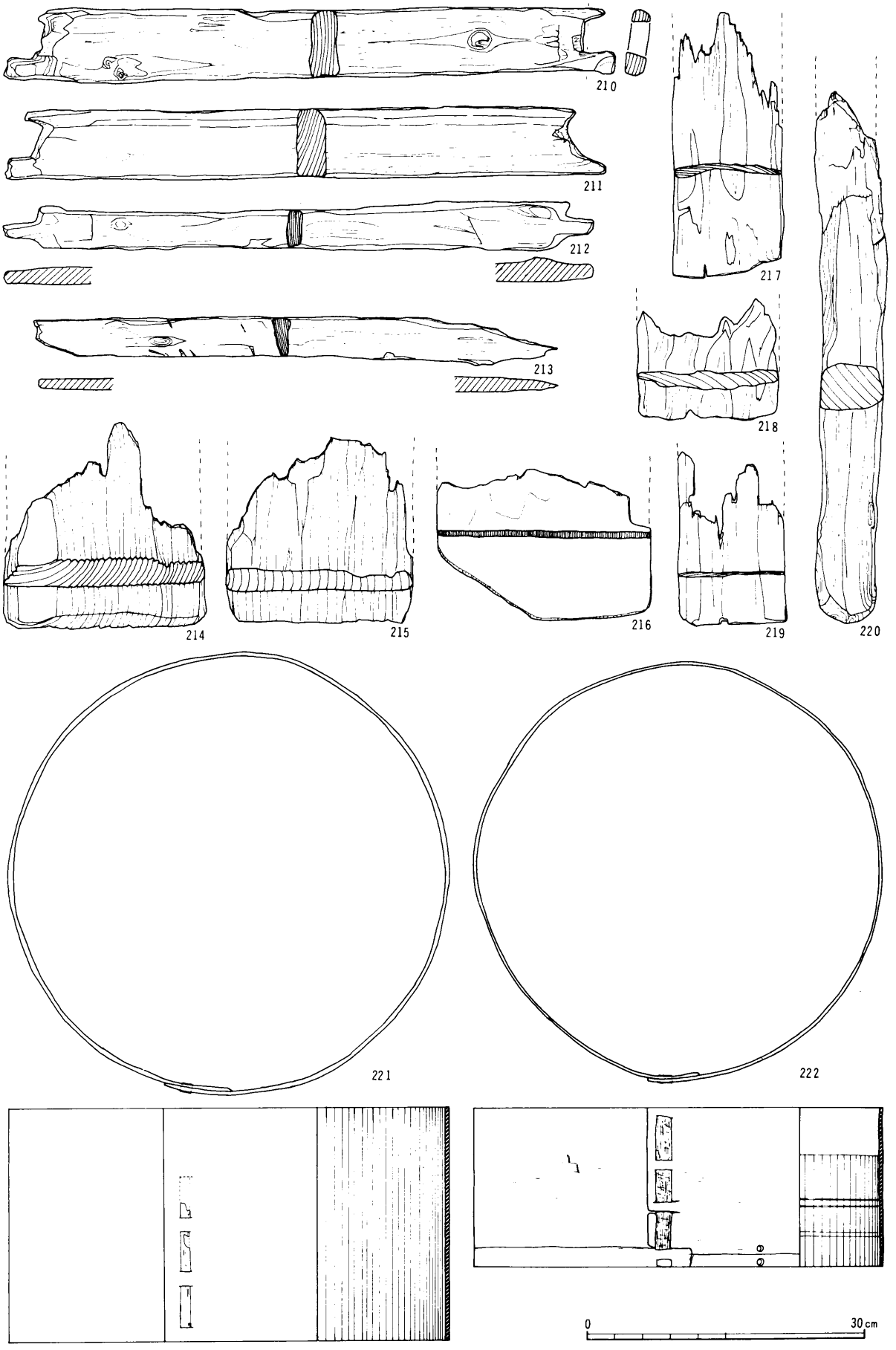
第８表　木製品一覧表



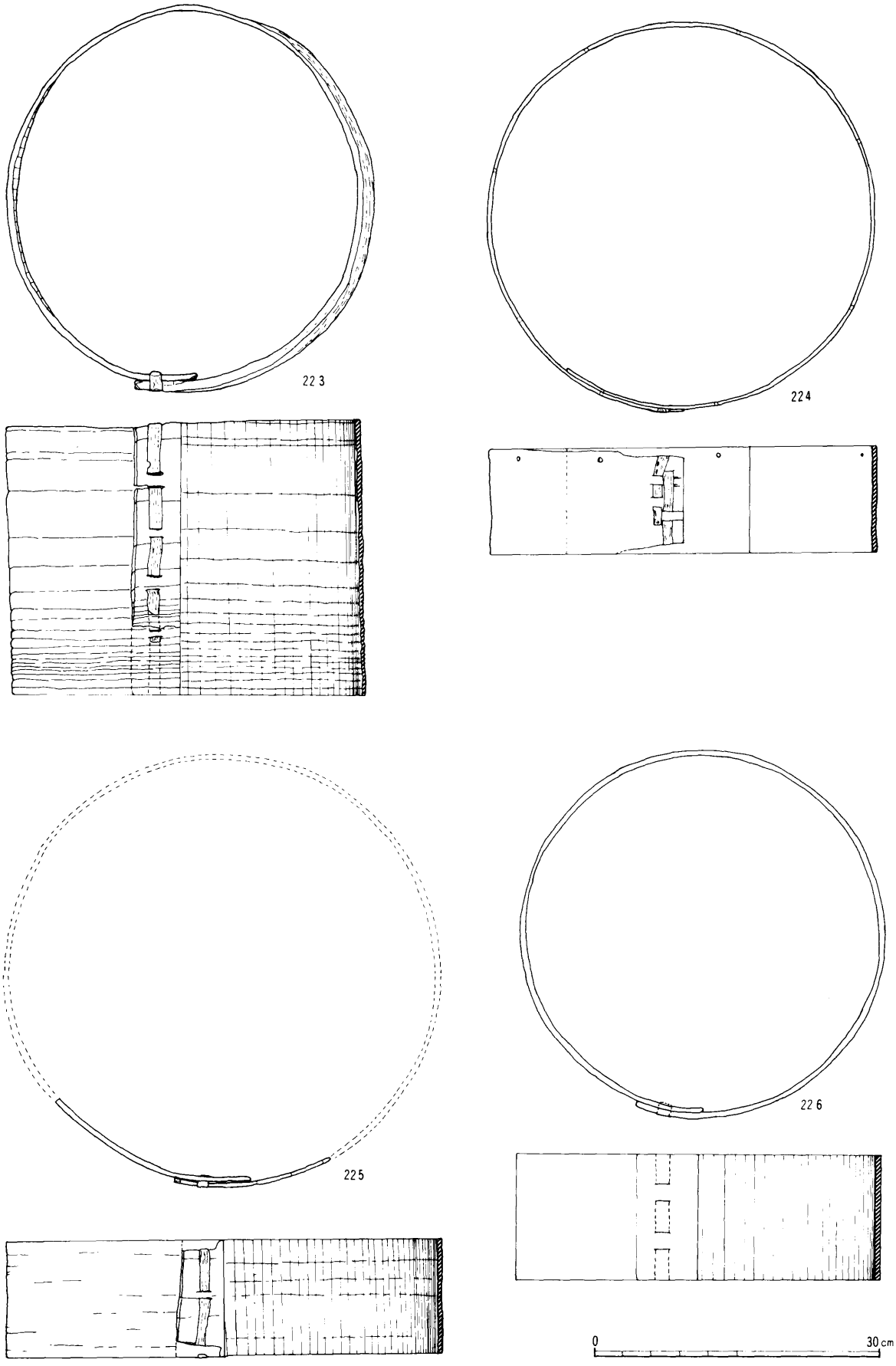
第38図　平安時代包含層出土遺物実測図（1：4）



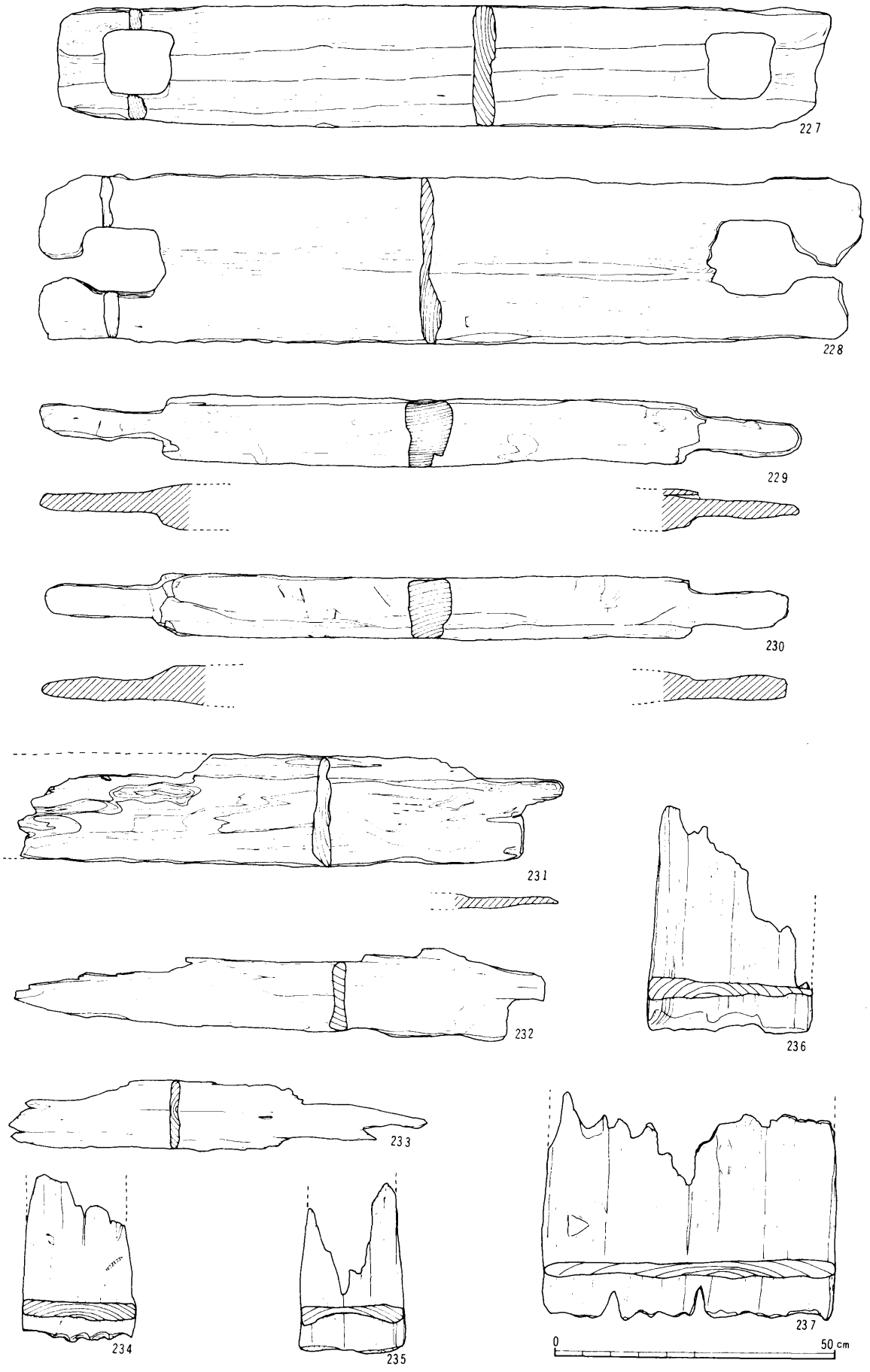
第39図　中世、およびの他包含層出土遺物(1：4)(209は1：2、199～208は1：3)



第40図　ＳＥ６出土木製品実測図（１：６）



第41図　ＳＥ６・ＳＥ７出土木製品実測図（１：６）



第42図　ＳＥ32出土木製品実測図（１：10）

〔土製品〕

土錘（199～208）　長さが5～6cmの長細いもの（199～202）と長さが5cm前後で中央にふくらみを持つもの（203・204）と、径3.2～3.6cmの球状のもの（205～208）がある。色調は、黒褐色、灰褐色、淡褐色と様々である。（206）にはヘラケズリによる面取りがある。

4．B地区の遺構

調査区は現状畑地であり、まわりの水田より約40cmの比高差がある。近年は宅地として所在していたらしい。土層の基本的層序は第Ⅰ層；表土、第Ⅱ層；茶褐色土、第Ⅲ層；淡茶褐色砂質土、第Ⅳ層；淡黄褐色土（地山）であり第Ⅱ層及びⅢ層が遺物包含層で、層の変化は漸移的である。地山までの深さは約90cm程度である。

遺構として、掘立柱建物3棟、土坑3基、溝2条、中世墓1基等を検出した。年代としては古墳時代から鎌倉時代までの各時代に及ぶものである。以下、時代順に個々概述してゆきたい。

A．古墳時代後期の遺構

(1) 溝

SD2　調査区の北側で検出された南北溝で、幅約0.6～1.3m、深さ約40cmの溝である。溝埋土からは、土師器甕の小片が出土している。なお、茶褐色砂質土の埋土の下層は暗茶褐色砂礫層となり、その中からは縄文土器が出土している。

SD8　幅約1.3m、深さ約45cmでSD2にほぼ平行して走る溝である。溝埋土からは、土師器椀、甕、須恵器杯などの小片が出土している。溝の南側は後世の攪乱のため検出不明であった。

B．奈良時代の遺構

(1) 土　坑

SK7　最大幅約1.5m、深さ約15cm余の不定形の土坑で、埋土からは奈良時代後期の土師器（杯・甕）等が出土している。

C．平安時代前葉の遺構

(1) 掘立柱建物

SB4　発掘区のほぼ中央部で検出した桁行4間（7.6m）×梁行3間（4.8m）の東西棟の掘立柱建物で、棟方向はN74°Eである。柱間は桁方向が1.9m、梁方向で1.6mの等間である。柱掘形は径90～45cmとやや不揃いで、深さは約20～40cm余である。

D．平安時代末葉の遺構

(1) 掘立柱建物

SB1　桁行4間（7.7m）×梁行（4.5cm）の南北棟の掘立柱建物で棟方向はN1°Eでほぼ磁北にのる。桁方向の柱間は比較的揃っているが、梁方向の柱間は不揃いである。柱掘形は径70cm程度で深さは20～35cmである。柱穴埋土内からは時期を決定する遺物がなく、一応、山茶椀の破片をもって建物時期上限を示し得る遺物とした。

(2) 土　坑

SK5　発掘区のほぼ中央で表土より約40cmで検出された径約1.5mの円形の土坑である。5～25cm程度の小石とともに多数の完形品を含む土器類が出土した土器溜である。土器は、土師器皿、鍋、山茶椀がほとんどを占め、型式からみると短期間に一括投棄されたものと考えられる。

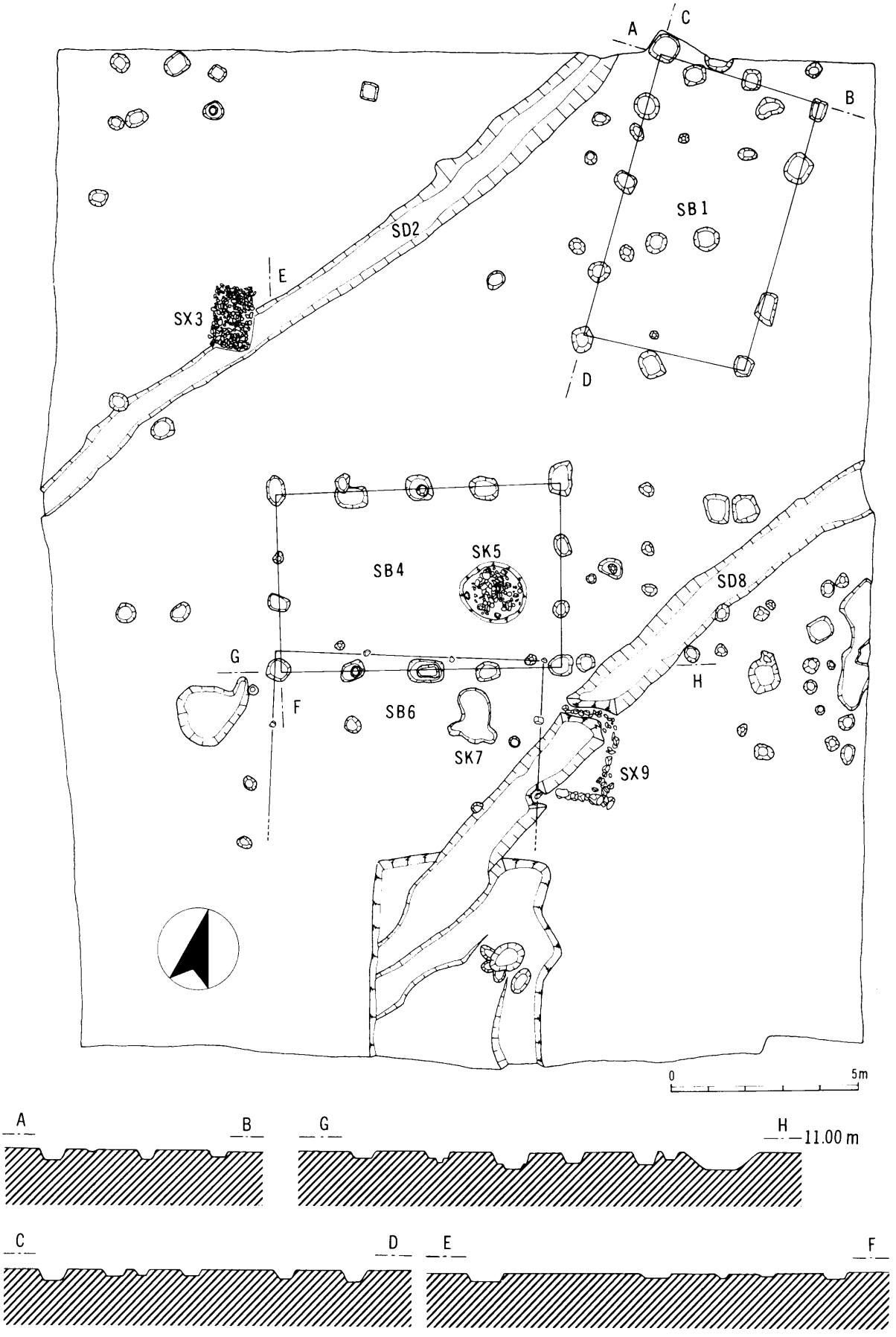
E．鎌倉時代の遺構

(1) 掘立柱建物

SB6　SB4の南側と重複し、東西3間（7.5m）×南北2間（3.6m）以上の柱穴の底に根石をもつ東西棟の掘立柱建物と考えられる。根石は20cm程度の扁平な河原石が使われており、東北隅の柱穴を除いた他は柱穴は検出されず、根石のみを検出した。建物の南側は後世の攪乱のため柱穴、根石とも検出されず全体の規模は不明である。棟方向はN78°Eである。

(2) 中世墓

SX3　発掘区の北西、SD2をきるかたちで検出した。礫槨施設をもつ中世墓である。長辺1.7m

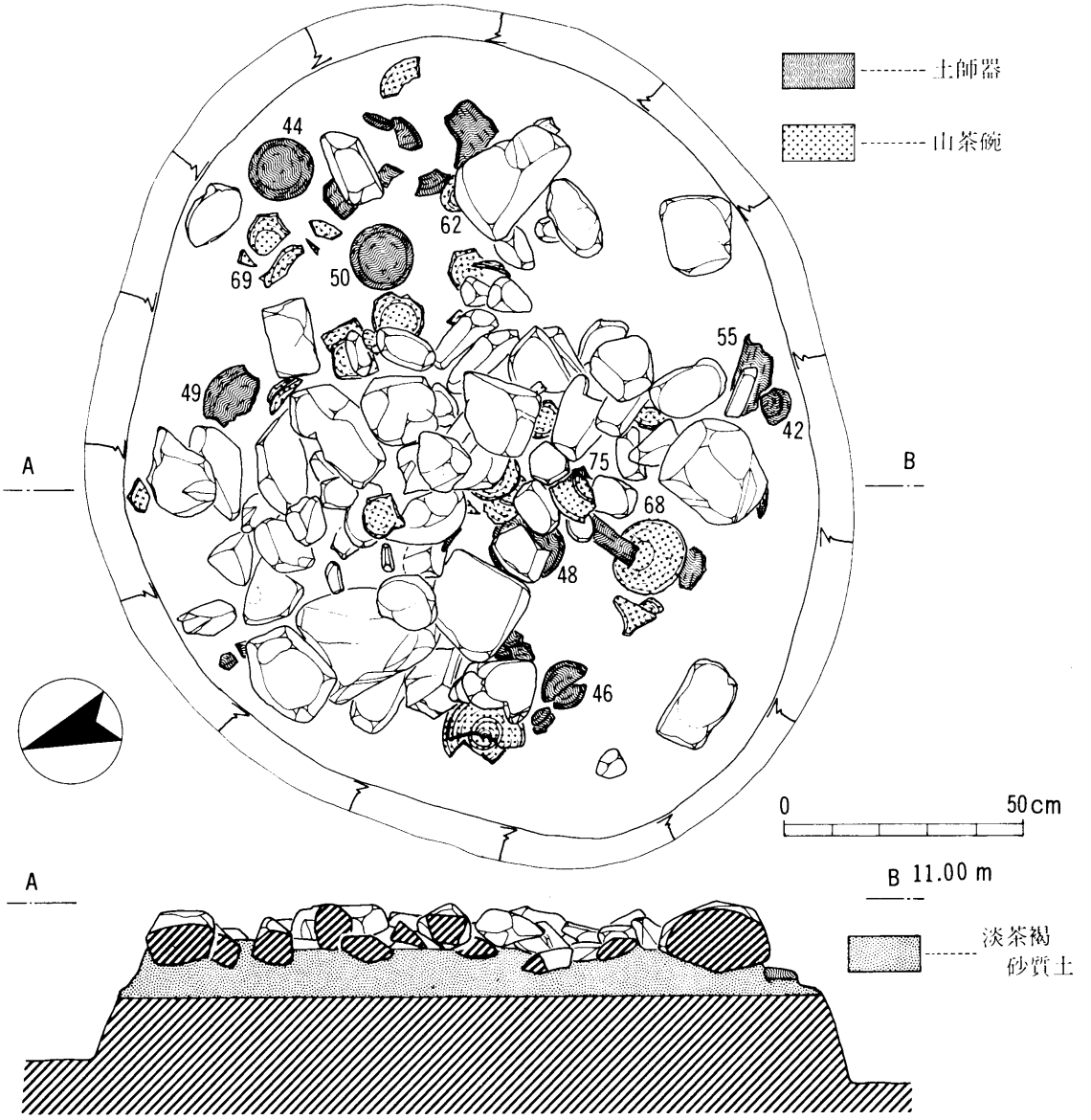


第43図　B地区遺構平面図（1：150）

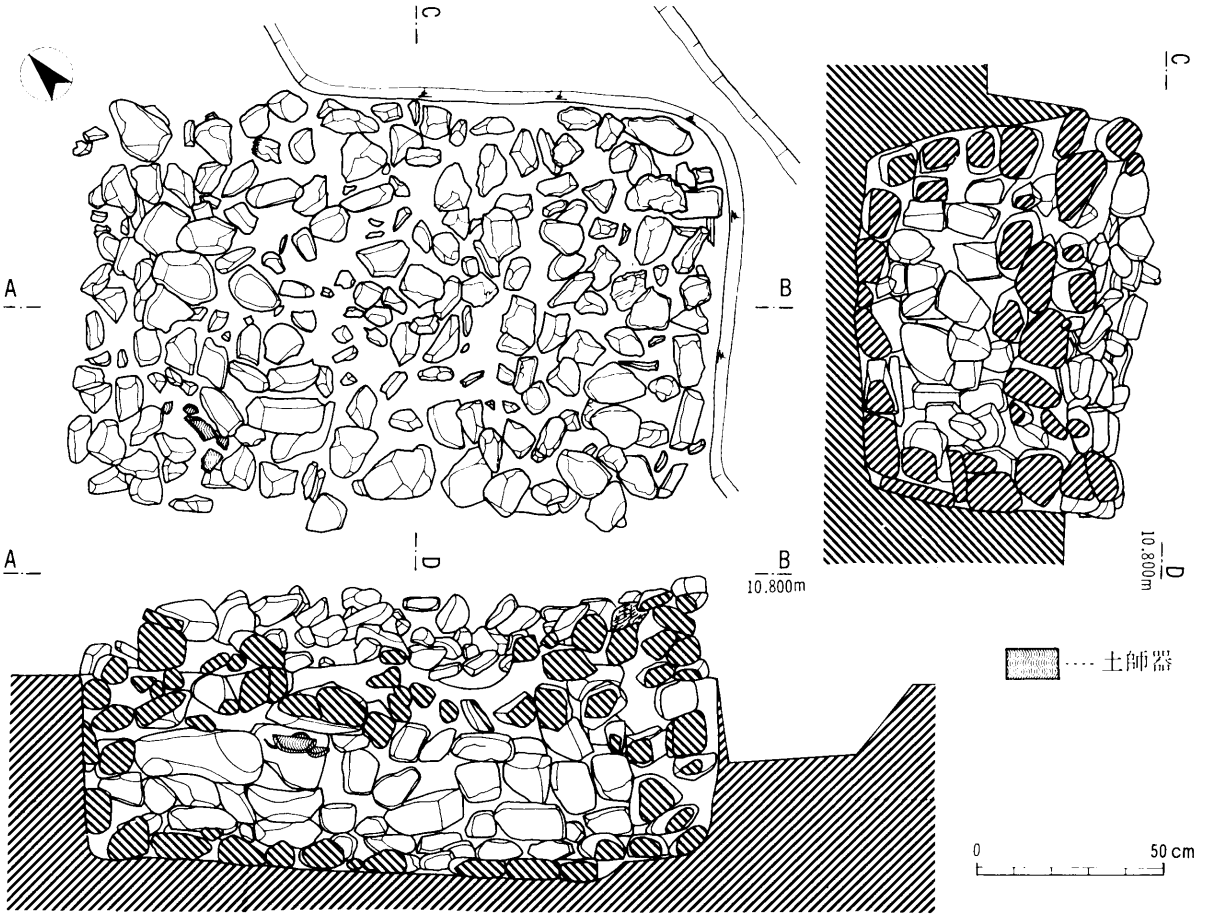
×短辺1.1m×深さ0.75mほどの長方形の掘形をもつ土坑内の床面に、10cm前後の扁平な河原石を東西0.8m×南北1.6mほどに整然と敷きつめ、その側壁を同じく10cm前後の扁平な川原石で積み上げられている。この礫槨の上部には、15cm大の川原石が全面にみとめられた。礫槨の内法は、東西0.8m×南北1.4m×深さ0.35mである。内部の四隅より木棺に使用したと思われる鉄製の角釘を5本検出している。また礫槨上部の礫の下には副葬品と考えられる土師器皿2点と小皿7点が出土したが、人骨、木棺の木片等は検出できなかった。

(3) 性格不明の遺構

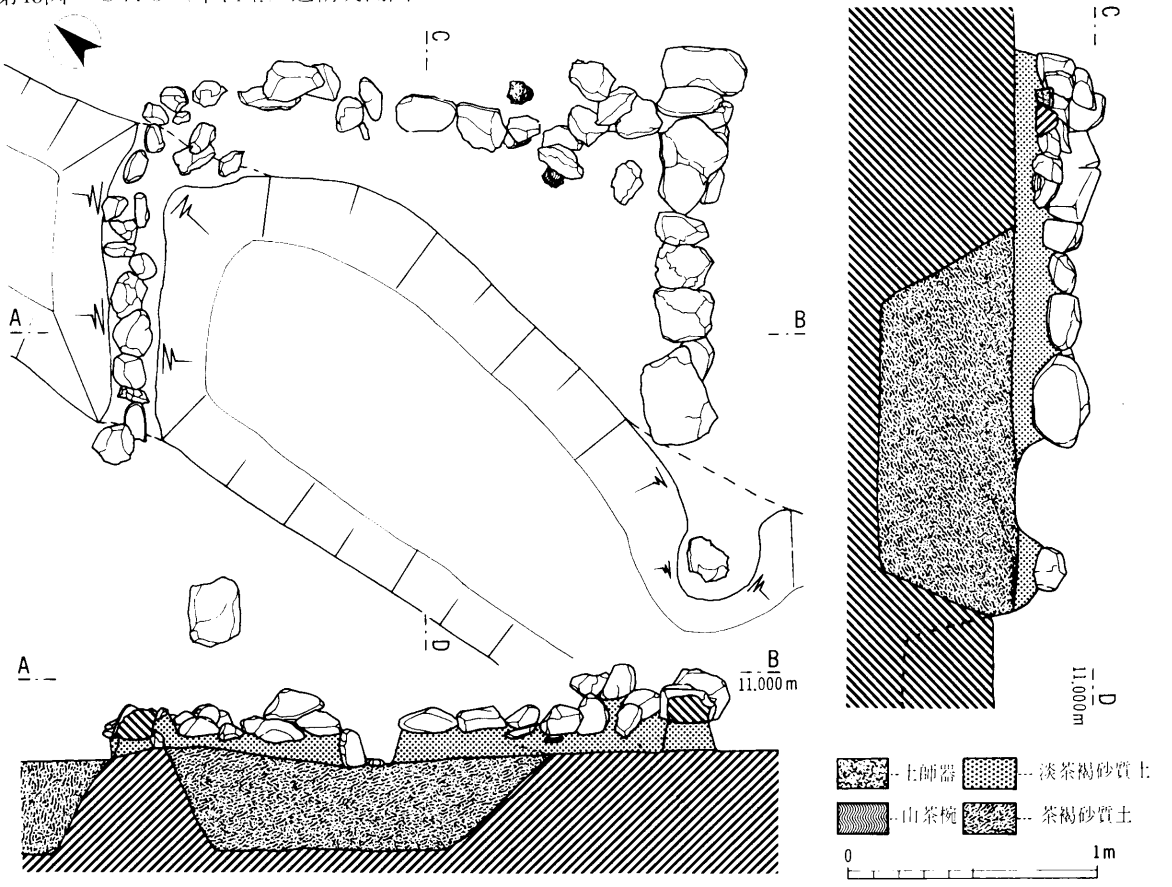
SX9 SD8の上にかかる「コ」の字状の石列である。東西1.6m、南北2.4m。レベルは標高10.9～11.0mでほぼ同じ高さで整列している。位置や方向から、SB6に付随する施設であったと考えられるが、性格は不明である。石組の間からは鎌倉時代の山茶椀、土師器鍋等の土器破片が出土しており、一応、SB6とSX9をこの時期に比定した。



第44図 SK5実測図（1：15） 数字は土器実測図番号を示す



第45図　ＳＸ３（中世墓）遺構実測図（１：20）



第46図　ＳＸ９実測図（１：30）

5．B地区の遺物

B地区から出土した遺物はそのほとんどが土器類で、他は少量の屋瓦、鉄製品、土製品等がある。時代的には縄文時代のものを上限として中世（鎌倉時代）に至るまでの広範囲の時代にわたり、その種類としては、縄文土器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀、磁器（青磁、白磁）、屋瓦、土錘、石器等に分けられる。量的には奈良時代後半、平安時代後半が多い。遺構に伴出する遺物としては、ＳＤ８、ＳＫ７、ＳＫ５、ＳＸ３でみられ、その他はすべて包含層である。以下、時代順に概述してゆきたい。

Ａ．縄文時代の遺物

(1) 縄文土器（１～４）

いずれも口縁部の小片であり深鉢形態と考えらるる。（１）は外面に３条の太い沈線が入る。（２）の口縁端部は面をもち刻目文が施され、外面には横位の条痕が走る。(3) は口縁端部上面をヨコナデされており面をもつ。また口縁部分の取り付け痕跡が内面に残り、外面にはわずかながら擦痕が残る。(4) は口縁端部内面に左下りの刻目が施される。(1・２・４）は、砂粒を多量に含み粗い胎土であるが、(3) は、胎土は良い。

(2) 石　器

フレイク（11～13）　(11) は断面は不定形な台形を呈する横長剥片で表面は１点から３方向に剥離され刃部を形成するが打面の残りは悪い。(12) は薄手の縦長剥片で、刃部はやや彎曲し鋭い。両面とも打点からのフィッシャーをよく残す。いずれもサヌカイト製。(13) は断面三角形を呈する５面体の石器で、そのうち１面のみ自然面である。４面のうち、横長剥片を剥離した痕跡をもつ面、縦長剥片を剥離した痕跡をもつ面が各１面みられる。サヌカイト製。

Ｂ．弥生時代の土器

(1) 弥生時代前期の土器

広口壺（５）　強く張る胴部からゆるく外反する頸部をもち口縁部は短く外に開く。また頸部と胴部の境には数条の沈線が施される。口縁部を欠き、胎土は砂粒を多く含むが焼成は良い。赤褐色を呈し一部に黒斑をもつ。

(2) 弥生時代中期の土器

細頸壺（６）　頸部から口縁部を残す細頸壺で、ゆるく外反する頸部から口縁部を内側に内傾させる。口縁部外面には縦方向のハケメ調整のあと２条の沈線で区画した間に櫛描列点文を持つ。口径は5.6 cm前後で赤褐色を呈す。

広口壺（７）　口縁端部を上下に引き伸ばし、端部上方に押圧による波状文を作り出し、下方には櫛による刺突文を施す。頸部には数条の沈線を施す。

(3) 弥生時代後期の土器

高杯（８）　脚部のみで脚部外面には櫛描直線文を施し、内面にはハケメ調整を右上から左下方向に、左上から右下方向に交互に繰り返されている。透し孔は３方にあると考えられる。

甕（９）　Ｓ字状口縁甕の頸部から口縁部にかけての小片で器壁が薄く、口縁部外面に刺突文をめぐらせる。また頸部から胴部にかけて２段のハケメ調整のあと変り目に櫛による平行直線文を施す。頸部内面には荒いハケメ調整がのこる。

高杯（10）　欠山期の高杯の脚部⅓ほどの破片で、脚裾が内弯ぎみに丸味をもつ。外面は丁寧にヘラ磨きされ、櫛描直線文が施される。３方向に透し孔が残る。内面は左上から右下方向にハケメ調整されている。色調は赤褐色を呈し胎土も良い。

Ｃ．古墳時代後期の遺物

(1) 土師器

椀（14・15）　口径11cm余の椀で口縁はやや内傾して立ち上がり、端部に面をつくる。口縁部内外面をヨコナデし、以下はヘラケズリされている。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒を含みやや粗い。

甕（18・19）　(18) はいわゆるＳ字状口縁甕の退化したもので口縁部が肥厚し、端部外面に凹んだ面をもつ。体部外面には荒いハケメが施され、口縁部はヨコナデされている。淡褐色を呈し、胎土は砂粒を僅かに含む。(19) は口縁部が「く」の字状に外反

し、端部を上方につまみあげる。体部外面には縦位の、内面には横位のハケメが施される。暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

(2) 須恵器

杯身（16・17）　いずれも底部を欠く破片で口径10cm前後である。口縁端部は、やや内傾し内側に鋭く段をなす（16）とゆるやかな（17）とがある。

高杯（20・21）（20）は外面にロクロヘラケズリ、内面にロクロナデの調整を施す。(21）は短脚一段透しの高杯の脚部で、脚端部には段がみられ断面三角形を呈す。(20)、(21）の透しはともに長方形であるが、何方向にあるかは不明。

D．奈良時代の遺物

(1) 土師器

椀（22）　口径12.4cm、器高3.6cm。半球形の体部から口縁部を内弯させる椀で、口縁部はヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリを施す。

杯A（23～25・27）　平坦な底部から口縁部を直線的にのばし端部を丸くおさめるもの（23・27）と口縁部を外反ぎみにのばしたのち、端部を上方につまみあげる（24・25）に分けられる。調整技法は、すべて口縁部をヨコナデし底部のみをヘラケズリする。(25・27）には底部内面に螺施状暗文がみられる。(27）は底部外面にヘラ記号をもつ。すべて胎土は緻密で、色調は（23）が淡赤褐色、他は赤褐色を呈す。

杯B（26）　高台が付く口径20cmのやや大型の杯で、口縁部はやや外反する。調整技法は磨滅が進んでいるが体部に縦位のハケメが残る。口縁部内面に斜放射状暗文が認められ、底部外面にヘラ記号を有する。高台は上方をヨコナデ、下方をユビオサエにより取り付けられている。色調は赤褐色を呈し、胎土は緻密である。

皿（28・30・31）（28）は口径21cm余で内弯した体部より端部を外上方にのばす皿で、(30・31）はいずれも口縁部はやや内弯するが、端部は（30）は丸く、(31）は尖がり気味におさめる。口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリする。すべて色調は赤褐色を呈し、胎土は緻密で、(30）は内面全体に煤が付着する。

杯蓋（29）　口径16cm余でつまみを欠く。口縁部を強くヨコナデし、天井部上面をつまみを取り囲むようにしてヘラミガキされている。

甕（32・33）　口縁部はやや厚手で「く」の字状に強く外反し、上方に丸くおさまるが（33）は端部外面に角ばった面をつくる。(32）は口縁部外面にハケメ・体部に細い縦位のハケメ、内面は横位のハケメを施す。(33）は口縁部を強くヨコナデし、胴部は粗いハケメ、内面は横位のハケメののちナデ消している。胎土は（32）は砂粒を含むが（33）は緻密である。

甑（34）　口径33cm余で口縁端部は外面で浅い段をもち内傾ぎみに丸くおさまる。外面は粗い右下りのハケメ、内面は横位のハケメを施す。淡黄褐色を呈し胎土は緻密である。

(2) 須恵器

杯（35～37）　高台径9cm前後の高台付きの杯で、(35）は口径13.4cm、器高4.2cm。口縁、体部ともロクロナデ、底部はヘラケズリののち高台を取り付けている。胎土は、(35）は砂粒を多く含むが、(36・37）は緻密である。

高杯（38）　高台径10.4cm。脚部のみの破片で杯部を欠く。裾端部外面は凹状をなし断面は三角形を呈す。内外面ともロクロ水挽きの痕跡を良く残す。

(3) 屋　瓦

軒丸瓦（116）　複弁八弁蓮華文軒丸瓦で瓦当面の復元長は17cm、厚さ2.3cmを測る。中房には1＋6の蓮子、外区内縁の珠文は18と考えられ、外縁に鋸歯文はみられない。また中房の周縁には凸線がめぐる。蓮華文の花弁の大きさは不揃いである。全体に磨滅がすすみ胎土も砂粒を多く含む。

E．平安時代の遺物

(1) ＳＫ５出土の遺物

〔土師器〕

小皿A（39）　口径8cm、器高1.5cmで口縁部をヨコナデし、内面にはハケメがみられる。内弯ぎみに立ち上がる口縁部から端部はそのまま丸くおさまる。口縁部以下は未調整でユビオサエによる凹凸を残す。

小皿B（40）　口径8.3cmで色調、胎土とも小皿

Aと同じで口縁から内面にかけてはヨコナデ、底部は未調整でユビオサエによる凹凸を残す。

小皿C（41）　やや厚手の小皿で口径8.2cm、垂直に立ち上がる口縁部から端部は上端に面をもつ。口縁端部から内面にかけてはヨコナデ、底部は未調整である。色調、胎土とも小皿Aと同じである。

小皿D（42）　底部に回転糸切り痕を残すロクロ製の小皿で、口径8.8cm、器高2.2cm。胎土は砂粒を多く含み暗黄褐色を呈する。

皿A（43～49）　口径14.0～14.5cm、器高3.1～3.3cmで、口縁部はやや外反し、端部は器壁が薄くなり丸くおさまる。調整技法、胎土、色調とも小皿Aと同じで、口縁部をヨコナデし内面全体にハケメ調整を施す。

皿B（50）　口径15.2cmと皿Aと比べてやや大きい。調整技法は小皿Bと同じで口縁部から内面にかけては丁寧にヨコナデされ、底部は未調整のままである。胎土は緻密だが色調は皿Aに比べてやや濃い黄褐色を呈する。

皿C（51）　口径15.5cm余、器高3.4cmのロクロ製土師器で底部は回転糸切り痕を残し、底部はやや突出している。胎土は砂粒を少量含み、色調は皿Bと同じである。

鍋（52～58）　口径22cm～25cmで、いずれも口縁部は「く」の字に外反し、口縁端部を内側に折り返す形態をとる。折り返し口縁の形態から、やや厚手で丸味をもつA類（52・57・58）、端部内面に面をもつB類（53・54）、やや薄手で端部内面が凹状となるC類（55・56）に分類できる。調整技法は口縁部内外面いずれもヨコナデしており、体部上半部の内外面ともハケメ調整しているもの（56・57）、と体部外面は未調整でユビオサエによる凹凸が目立つもの（52～55・58）とがあり、さらに体部内面を丁寧にヨコナデされているもの（55）や体部内面上方をヨコナデ、下方をヘラケズリされているもの（58）などがある。（55）は頸部に3条の浅い沈線が見られる。胎土はいずれも砂粒を多く含みやや粗い。全体に淡黄褐色を呈するが、外面全体に煤が付着しているもの（55）もある。

〔**石製品**〕

砥石（118）　長さ7.5cm、幅3.5cm、厚さ0.8cm余。砥面は、表面と裏面の一部、側面3面の計5面に及ぶ。中央部分は右下り方向によく磨滅し、凹状となっている。赤茶褐色を呈し、石材は硬い頁岩である。

〔**山茶椀・山皿**〕

山皿（59～64）　口径8.5cm、器高2.5cm、底径4.0cm前後で高台を持たない皿である。（59）は底部内面に仕上げナデがみられ、（60・63・64）は口縁部内面に面をつくる。（60）は口径のわりに底径が小さく丁寧につくられている。（61～63）は、口縁端部に自然釉がつき、（61）は口縁部が肥厚する。（64）は口縁まで直線的に立ち上がる。（60・63・64）は完形ですべて底部に糸切り痕を残し、胎土は緻密で色調は灰白色を呈す。

山茶椀A（65～75）　輪花をもつ山茶椀で、口径16cm、器高5.5cm、高台径7.5cm前後でおおむね体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部が外反する。（68・69）の輪花は、指によるナデ上げによるものであり、他はユビオサエによるものである。（65）は完形で体部は内弯ぎみに立ち上がりわずかに口縁が外反し、口縁端部内面に面をつくる。底部の糸切り痕はナデ消され、木葉圧痕をのこす。（66）は体部内面に自然釉がみられ、高台の断面は逆台形状を呈し、籾殻圧痕が残る。（67）はほぼ完形で、体部の内弯がきつく口縁部の外反も強い。底部の調整は糸切りののちナデ消している。色調は（68）が白灰色、（69）が灰白色を呈す。（68）は完形。（70・71）は体部がゆるく内弯し口縁端部内面に面をつくる。（72・74）は体部が直線的にのびる山茶椀で、（73）は、（70・75）と同様に口縁端部外面に面をもつ。

山茶椀B（76～79）　輪花を有しない山茶椀で、（77）は口縁部から体部外面にかけて自然釉がみられ、口縁部外面に重ね焼き痕を残す。すべて底部に糸切りのあとナデ消しがみられ、胎土は緻密で色調は灰白色を呈す。

(2)　包含層出土の遺物

〔**土師器**〕

小皿（80・81）　（80）は口径9.0cm、器高1.2cmの口縁端部が垂直に立ち上がる小皿で、（81）はSK5の一括出土の遺物土師器小皿Aと同一のもので、内面にハケメを施す。

杯（82・83）　丸味のある体部か、口縁部を垂直

ぎみに立ち上がり、(82) は口縁部を丸くおさめ、(83) は少し外反させるものである。ともに口径14cm前後、器高3.5cm前後で口縁部をヨコナデし、内面はナデ、外面はユビオサエのままである。

甕A (84・85)　口縁部がゆるく外反し口縁端部を尖り気味に直立する甕で、口縁部はヨコナデされ胴部外面を縦位に、内面を横位にハケメを施す。ともに茶褐色を呈し砂粒を含む。

甕B (88・89)　外反する口縁部の先端部を内側に折り曲げられた甕で、(88) は口径23.6cmで、(89) より口縁部の外反が強く、胴部はユビオサエのままである。(89) は砂粒を多く含み焼成もよくない。色調は、(88) は赤褐色、(89) は桃褐色を呈す。

製塩土器 (86・87)　外面は未調整でユビオサエによる指頭圧痕を残す (86) や粘土の帯を巻き上げた痕跡をもつ (87) がある。口径は22cm余、器高は、(86) が5.6cm、(87) が5.2cmで、色調はともに赤褐色を呈し、胎土はもろく砂粒を多く含む。

椀 (90)　ロクロ製土師器で、高く丸味をおびた高台をもち内面には黒斑がみられる。底部外面は、回転糸切りののちナデ消されている。

〔**灰釉陶器**〕

皿 (91)　角高台をもつ厚手の皿で、内面全体に灰釉を施すものである。また内面には三叉トチの痕が残る。黒笹14号窯式と考えられる。

椀 (92・93)　ともに三日月状の高台をもち、(92) は内面に刷毛塗りによる灰釉が施され、(93) は底部内内面をのぞき灰釉が施される。黒笹90号窯式であろう。すべて小片で口縁部まで残っているものはなく、胎土は堅緻である。

山皿 (94～101)　口径8.5cm、器高2.5cm内外のもので、内弯する体部から口縁部を外反させ端部を丸くおさめるもの (94～97) と、体部を直線的にのばし口縁端部を丸くおさめるもの (98～101) に大別できる。(97・98) は高台に籾殻圧痕を残し、(100・101) は貼り付け高台をもたない皿である。

山茶椀 (102～107)　(102) は体部が内弯ぎみに立ち上がり口縁部を外反させるもので、胎土が堅緻でつくりも良好である。(103) は (102) に比べ、口縁部の外反がゆるく体部の内弯も弱い。磨滅が著しく高台のつくりも雑である。(104) は他の山茶椀と胎土や色調が異なるもので、直線的にのびる体部からややや口縁部を外反させて端部外面に面をつくる。(105) は底部から体部にかけての破片で高台に三角形の高台がつく。(106・107) は高台のみの破片で、高台は逆台形を呈す。

片口鉢 (108)　復元口径33.6cmで、片口をもつ鉢になると考えられる。体部から口縁部の破片である。

F．鎌倉時代の遺物

(1)　SX3出土の遺物

〔**土師器**〕

小皿 (137～143)　口径8cm余、器高1.3cm余の法量の相似た小皿である。口縁部をヨコナデし、底部内面は丁寧にナデられている。外面は未調整でユビオサエの痕を残すもの (137・139～141) と一方向に軽くナデるもの (138・142・143) とがある。胎土は細砂粒を含み、色調は (139・140・142) は淡橙褐色、他は黄褐色を呈す。

皿 (144・145)　口径13cm余、器高3cm余。口縁部はゆるく内弯して立ち上がり端部を丸くおさめる。(144) は、底部に近くなるほど器壁が1mm前後と薄くなる。(145) は底部が平底であり、口縁部をヨコナデし、底部外面をナデ、外面は未調整である。ともに胎土は砂粒を含み、色調は黄褐色を呈す。

〔**鉄製品**〕

釘 (146～150)　(146) は完形。長さは5cm余で角釘であり、鉄錆がひどくもろい。これらの鉄釘は墓坑の四隅から出土し木棺に使用したと推定される。

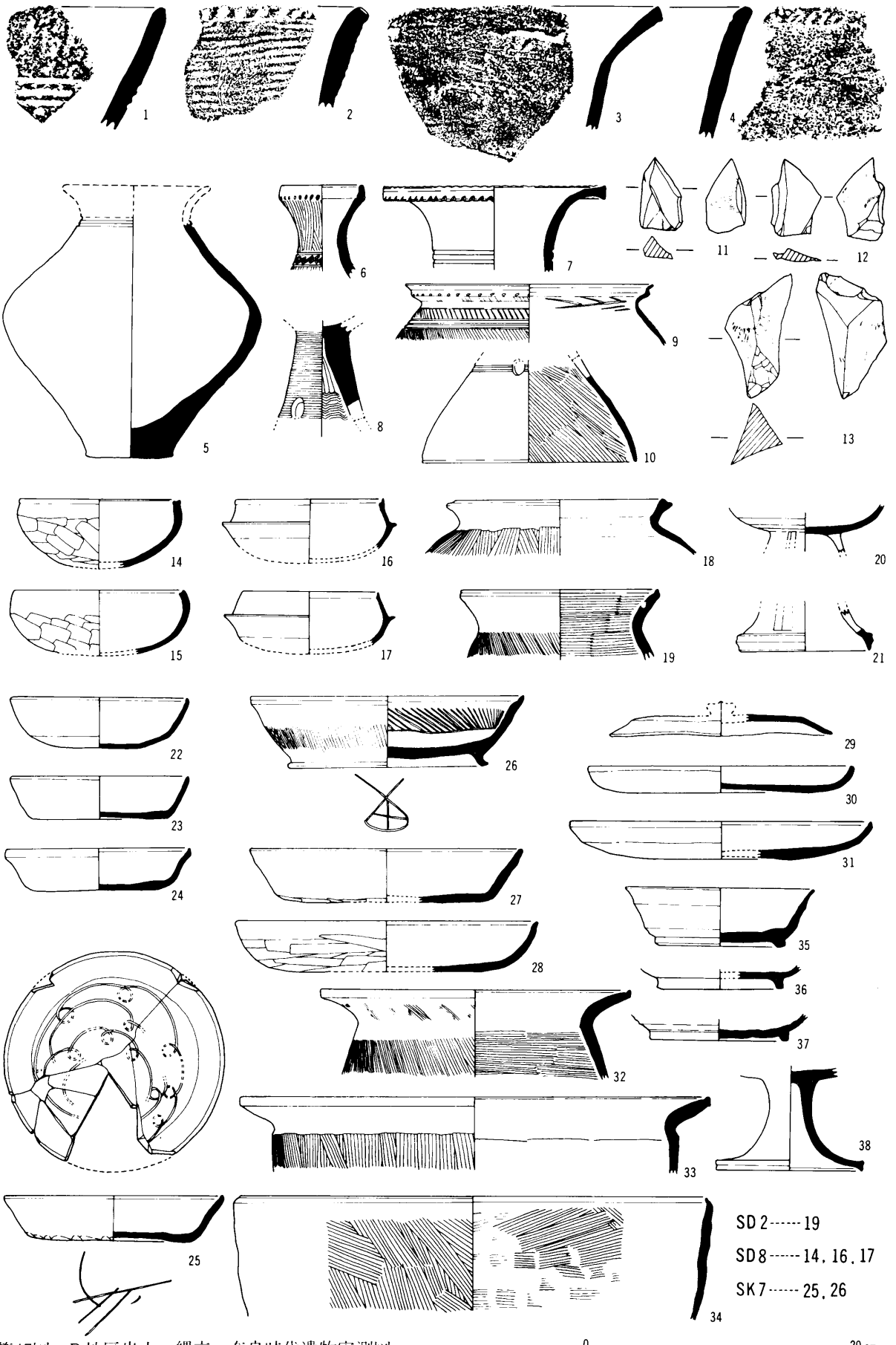
(2)　包含層出土の遺物

〔**土師器**〕

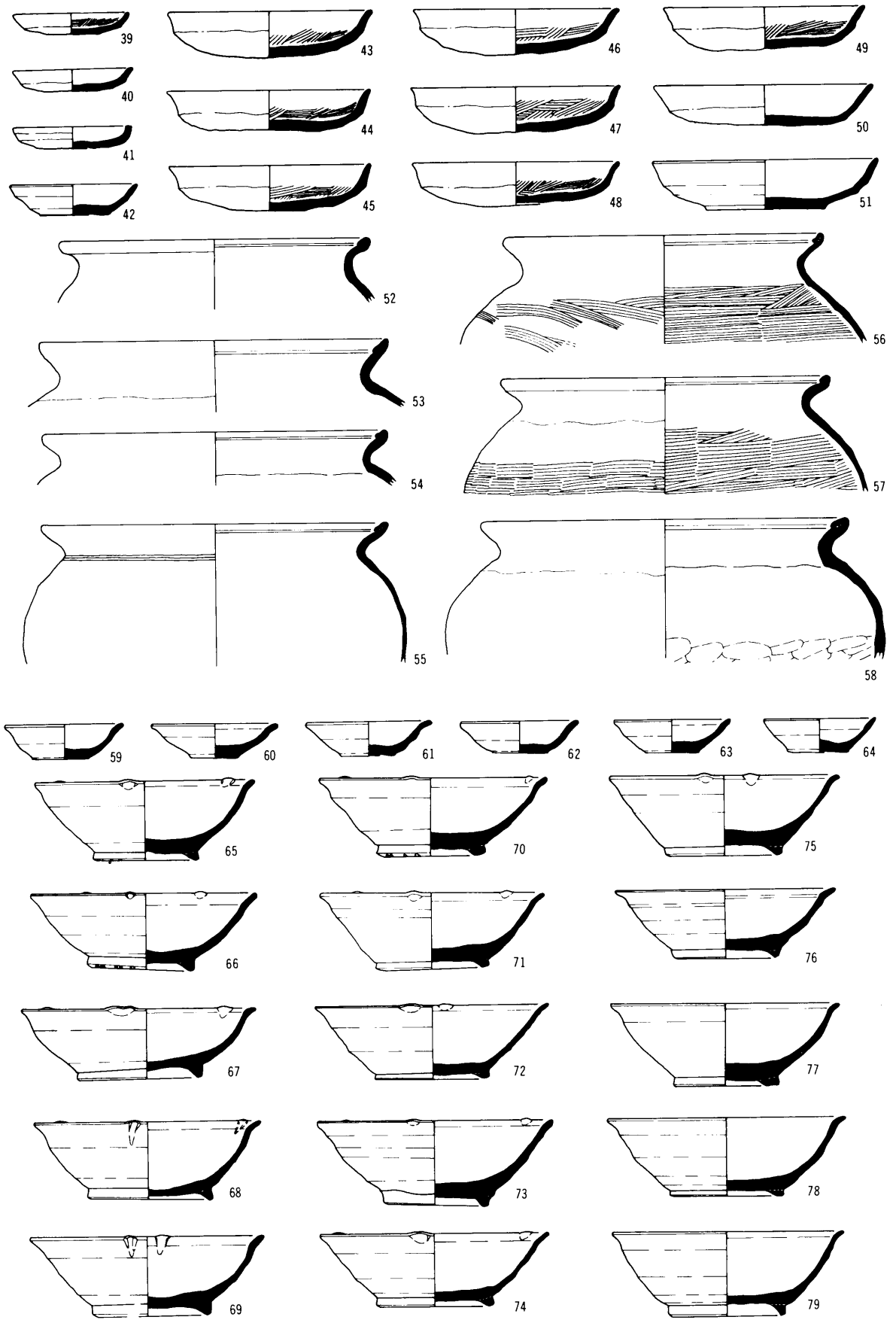
小皿 (109・110)　口径7.5cm、器高1.0cmの相似た小皿が底部中央が2mm前後と薄くなる。(110) は底部内面に墨書がみられるが、小片のため判読できなかった。

皿 (111・112)　(111) は (112) より口縁部の立ち上がりが強く外面にはユビオサエによる指頭圧痕が明瞭に残る。雑なつくりで歪みが大きい。

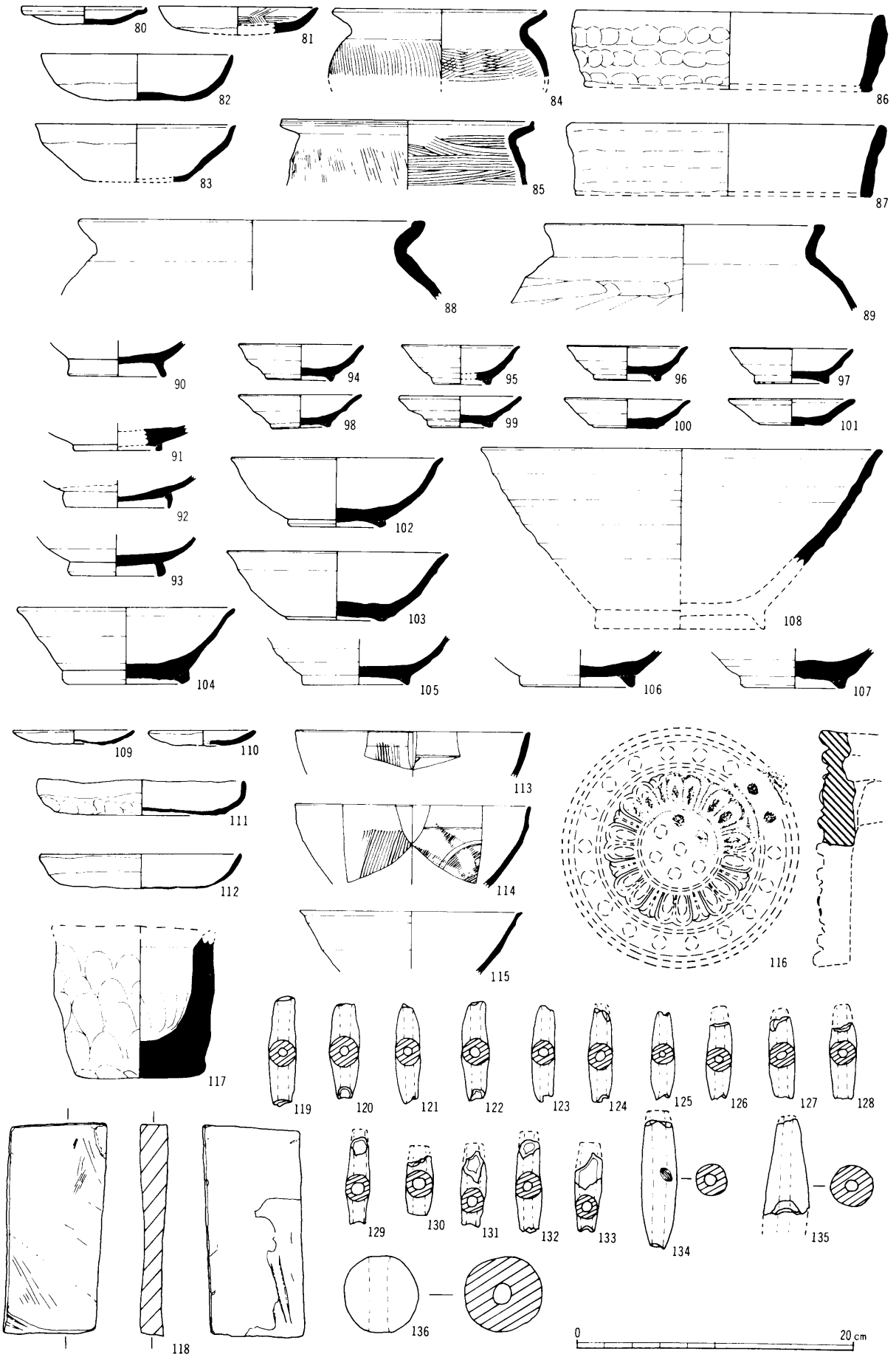
ミニチュア鉢 (117)　底径5.7cmで、口縁部を欠くがミニチュアの鉢になると思われる。体部外面はユビオサエによる指頭圧痕がみられ、内面にはナデの痕が良く残る。赤褐色を呈し胎土は緻密である。



第47図　B地区出土・縄文～奈良時代遺物実測図
（1：4、1～4、11～13は1：2）



第48図　ＳＫ５出土土器実測図（１：４）



第49図　遺物実測図（1：4、117･118･119～136は1：2）

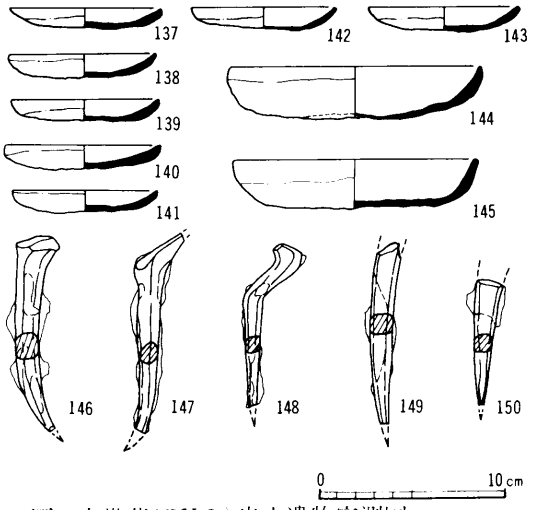
〔磁　器〕

青磁椀（113・114）　いずれも小片で外面に櫛描文がみられる。(114) は内面に1条の沈線がめぐり、底部にかけて櫛描きによるジグザグ状の文様を施す。(113) は灰白色、(114) は青灰白色を呈す。

白磁椀（115）　小片で体部は直線的に伸び鋭く口縁部を外反させ内面に面をもつ。漬け掛けされた釉がみられ、色調は明灰白色を呈す。

〔土製品〕

土錘（119～136）　(136) は球形の土錘で、他は両端がすぼまり中央部がふくらむ細長い土錘である。(119～133) まではピット中より一括出土したもので、すべて暗灰褐色を呈し、長さは4cm余から3cm余まで大小さまざまである。(134・135) は大ぶりの土錘で、(134) は復元長5.0cmで籾殻圧痕を残す。(136) は径2.7cmで一部に黒斑がみられる。(134～136) は桃褐色を呈す。



第50図　中世墓(SX3)出土遺物実測図
(1:4、146～150は1:2)

6．結　　語

1．A地区について

A．奈良～平安時代の建物群の変遷と性格

Ⅰ期（奈良時代後半）

調査区の南西部に集中して検出されたSB26・38・39・40・42の5棟の掘立柱建物からなる。棟方向はSB26がN58°Eで、SB39とSB40がN29°～32°Wで、ほぼ直交している。SB38とSB42は共に5間×2間の大型建物であるが、SB38はN58°W、SB42はN43°Wであり、棟方向を揃える建物は他に見あたらない。この時期の建物群は調査区外へさらに拡がることが予想され、全体の様相は明らかではないが、SB26を除き基本的に南北棟の建物群の配置が推定できる。またこの時期の建物は柱掘形は方形プランを呈し、規模は大きい。

Ⅱ期（平安時代前葉）

調査区の南半分に大きく広がる10棟の掘立柱建物と3棟の竪穴住居、1条の柵列、1基の井戸からなる。掘立柱建物は棟方向で3グループに大別できる。第1群はN34°Wの棟方向をもつSB10の1棟のみである。第2群はN25°～28°WのSB11・28とそれに直交するN61°EのSB33である。SB33はSE32を取り囲むような形で検出され、井戸の覆屋の可能性も考えられる。第3群は棟方向がN72°～76°E、またはそれに直交するSB19～24の6棟の建物とSA13（柵列）である。SB19～22は相互に重なり合っており、新旧関係は切り合いにより SB21→ / SB19→SB22→SB20である。なおSA13は方向、位置から判断して、SB21に伴なうものと考えられる。SB23は5間×2間で、面積が33.75㎡の大型建物で、この時期における中心的な建物である。SB24は平面形が正方形に近く、面積も11.52㎡と狭く、束柱をもち、柱間寸法も狭いため倉庫と考えられる。SB23とSB24は、距離が1.8mしか離れておらず、棟方向もほぼ一致しており、同時期に存在した屋と倉庫であろう。

Ⅲ期（平安時代中葉）

SB25・29～31の4棟の掘立柱建物からなるが、棟方向はN58°～68°Eと若干の幅をもっており、明らかに同時期に存在したと断定できる建物はない。SB25とSB31は大型の建物であるが、とりわけSB31は面積が50.6㎡と当遺跡最大のもので、この時期における中心的な建物である。なおSB30とSB31は重複しているが、柱掘形は切り合っておらず、遺物の時期差もほとんどない。

Ⅳ期（平安時代末葉）

調査区の東部に広がる建物群で、ＳＢ１～４の４棟の掘立柱建物とＳＡ12・14～18の６条の柵列、ＳＥ６の井戸からなり、棟方向はN18～25°W、又はそれに直交するN69～72°Eである。ＳＢ４は５間×２間で、面積が39.6㎡の大型建物で、この時期における中心的な建物である。ＳＢ４から約６ｍ北に、棟方向をほぼ揃えるＳＢ１～３がある。この３棟は、面積が12～16㎡の小さい建物で、柱間寸法が狭く、柱掘形も大きいことから倉庫と考えられる。ＳＢ４の西には柵列のＳＡ18が、南にはＳＡ14～17が、建群を区画するような形で配置されている。これらの柵列は何度かの建て替えによるものである。ＳＡ15とＳＡ17は約３ｍ離れているが、柱間寸法が西から2.4＋2.4＋2.0＋2.7ｍと同じであり、同時期に存在したと考えてよいであろう。ＳＤ９はＳＤ12から約３ｍ離れて平行して検出されたもので、多くの柵列とともに屋敷地を区画するための溝とも考えられる。

以上Ａ地区における奈良時代後半から平安時代にかけての建物配置の変遷を時代順に概述してきたが、その特徴は、①奈良時代は南北棟を基本としてほぼ同規模の５間×２間の大型建物がみられること、次に②平安時代に入ると、占地を変えながらも、５間×２間の大型建物（２棟以上）を中心にした計画的な建物配置がみられることである。しかし、計画的配置といっても、役所、あるいは官衙遺跡等にみられる棟方向等を方位に整然と揃えた大型建物の規則的な配置等を想定できるものではなく、平安時代のある階層の屋敷（館）跡の変遷（占地と建物）を考えた方が妥当と思われる。

出土遺物をみると、土師器は平安時代中葉を中心とし、この期に盛期を読みとることができる。また、比較的多量出土した灰釉陶器（黒笹90号窯式がほとんど）、緑釉陶器（20片）の出土などを考え合わせると、単なる一般的庶民層の集落とは考え難く、むしろ在地領主層的な存在を彷彿させるものである。

いずれにしても、集落の性格についてはなお今後の吟味と資料増加にまつ点が多く、文献資料も含めた総合的な検討課題としたい。

Ｂ．ＳＥ32の出土遺物

Ａ地区で出土した遺物は、縄文時代から中世まで幅広い時期にわたるが、量的には平安時代のものがそのほとんどを占める。遺構出土の遺物には、ＳＥ32、ＳＢ36、ＳＢ10、ＳＢ29、ＳＤ９からのものがあるが、ここではＳＥ32出土の遺物について若干触れたい。

ＳＥ32からは、土師器の椀・杯・皿・盤・甕、須恵器の杯、製塩土器、瓦、土錘など、図示できるものだけでも50点以上出土しているが、井側内出土の土師器（37～47）は井戸の存続期を知る資料となった。杯では、外底部をヘラケズリし口縁部をヨコナデするｂ手法で、暗文を施すもの（38）と、外底部は未調整で、口縁部をヨコナデするｅ手法のもの(37、39）がある。甕は外面の体部上半はハケメ調整、下半はヘラケズリされているが、ハケメが細かいもの（46）と比較的粗いもの（42～45、47）がある。これらの井側内出土の土器は、斎宮編年で平安時代初頭とされているＳＫ1445出土の土器とほぼ併行するものと考えられる。[24] また、掘形出土の土器の多くも、形態・技法とも井側内出土の土器と大差なく、ほぼ同時期のものと考えられる。井戸埋土上層では掘形内埋土と井側埋土を分けて遺物を取り上げられなかったため、掘形出土として図示した遺物の中には、井側埋土の遺物すなわち井戸使用期以降の遺物も含まれている可能性もある。

２．Ｂ地区について

Ｂ地区はＡ地区の北方、約30ｍほどに位置し、調査面積は約600㎡とＡ地区に比べ小面積であった。したがって、遺構全体について包括的にのべる資料に乏しいが、中でも、平地における中世墓（ＳＸ３）の検出とＳＫ５からの出土土器群は中世墓の構造と在り方を示す一例として、また後者は当該時期土器編年研究上の１つの好資料となろう。以下若干の考察を加えて小結としたい。

Ａ．中世墓（ＳＸ３）

中世墓（ＳＸ３）はその状況より、おそらく集団墓の形態をとるものでなく、平地の集落近辺あるいは、集落・屋敷地内につくられた個人墓的な墓であると考えられる。中世墓の埋葬形態は様々であるが、ＳＸ３は礫槨施設をもつもので、遺構説明で記したように礫槨内の四隅より鉄釘（146～150）を検出したことから木棺を埋納したと考えられる。埋葬手順

としては、地山面を長辺1.7m×短辺0.9m×深さ0.5mの長方形の土坑を掘りくぼめ、床面に10～20cm大の川原石を敷設したのち、木棺を納め、その上に供献遺物として土師器皿（144、145）、小皿（137～143）をおき、川原石で木棺の周囲、及び上面を覆ったと考えられる。このような礫槨構造をもつ中世墓の県下検出例としては河芸町千里ヶ丘遺跡があり、当遺跡の中世墓は形態的にこの例と類似している。[25] 他に礫槨、あるいは小石室風の構造をもつ中世墓を検出した遺跡としては、安濃町北浦遺跡[26]（ＳＸ16）や名張市辻垣内遺跡（Ｎ地区、ＳＸ２）などがあるが、規模・内容的に当例とは異なり、埋葬方法を異にするものである。また、床に川原石を敷いた中世墓としては安濃町大塚久保遺跡（ＳＸ13）[28]がある。ＳＸ３の築造時期は土師器（皿）から考えると13世紀前葉と推定される。いずれにしても、こうした礫槨構造をもつ墓が鎌倉時代以降にみられることは事実であるが、詳細な類型と内容の吟味は今後の資料の増加をまって課題としたい。

Ｂ．ＳＫ５出土土器

ＳＫ５より土師器（皿・鍋）、ロクロ製土師器（皿）、山茶椀、山皿などが一括集中して検出された。土師皿は、口径14.0～14.6cm、器高3.0～3.5cmで相似た法量をもち、胎土、色調、調整技法とも同じで、同一の製作集団を背後に想定することができる。また内面には一律にハケメ手法が明確に施されており、ある種の装飾性を思わせるが、斎宮跡をはじめ内面ナデ調整のみを一般とする県下のこの期の土師器調整手法に対して、当遺跡（あるいは当地域）の独自性〈手法の地域差〉を示すのか否か等は、今後のさらなる検討を要しよう。

ロクロ製の土師器（皿）は、ＳＫ５よりの他の出土土器に比べて量的には少ないが、12世紀中頃に盛行し、11世紀から12世紀の極めて限られた時期に登場する土器と考えられている。[29]

鍋は、すべて口縁部を折り返された、いわゆる「伊勢型鍋」と呼ばれる鍋で、口縁端部の形態により、Ａ、Ｂ、Ｃ類の３類（遺物編参照）に大別でき、型式的にはＡ類→Ｂ類→Ｃ類へと移行すると考えられている。時期は11世紀後葉から12世紀中葉頃の時期幅に位置づけられよう。[30]

山茶椀は、体部が彎曲し高台の高いもの（67～69）と、体部が比較的直線的に立ち上がり、扁平な逆台形状の高台をもつもの（70～75）に大別でき、前者は藤澤編年の第２型式第４段階に比定され、後者は第３型式第５段階に属すると考えられ、およそ12世紀中葉から後葉に位置づけられる。[31] 一方、山皿は小椀形態を残しつつも高台を消失しつおり前述の後者の山茶椀型式か、あるいはそれよりやや新しい型式に比定されよう。[32]

Ｃ．包含層出土の軒丸瓦

包含層出土の軒丸瓦は、複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、東大寺様式の瓦である。時期は８世紀後半に比定される。遺跡付近の東大寺様式の瓦の類例としては、松阪市御麻生薗廃寺に面径17cm、中房の蓮子を１＋５に配する軒丸瓦片が１点、[33] 同じ松阪市の丹生寺廃寺より曲線顎の均正唐草文軒平瓦片が１点表採されており、[34] 県下では上野市三田廃寺より表採されている。[35] ここでは類例をあげるにとどめ、今後の松阪市周辺の検出例に期待したい。

尚、報文執筆にあたっては、１章は服部、２、３章は河北・服部、４、５章は宮田・浅尾、６章のＡ地区は河北、Ｂ地区は宮田があたった。

〔註〕

① 『松阪市史　第一巻　自然篇』松阪市　1976
② 『松阪市史　第二巻　史料篇　考古』松阪市　1977
③ 谷本鋭次「中ノ庄遺跡発掘調査報告」『三重県教育委員会　1972
④ 前掲②に同じ
⑤ 前掲②に同じ
⑥ 前掲②に同じ
⑦ 吉村吉男「小野遺跡」『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1976
⑧ 前掲②に同じ
⑨ 『三重の中世城館』三重県教育委員会　1983
⑩ 清水正健編『荘園志料　上巻』　1978
⑪ 『三重県地名大辞典』角川書店　1983
⑫ 倉田康夫『条理制と荘園』東京堂出版　1976
⑬ 前掲⑫に同じ
⑭ 前掲⑪に同じ
⑮ 前掲⑪に同じ
⑯ 前掲⑫に同じ
⑰ 曲町在住、小泉祐次氏所蔵の字切図による。
⑱ 谷本鋭次「亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1973
⑲ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966
⑳ 中村浩『陶邑Ⅲ』大阪文化財センター　1980

㉑ 下村登良男　村上喜男『おばたけ遺跡発掘調査報告』鳥羽市教育委員会　1972

㉒ 大西素行、新田洋『荘遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1980

㉓ 灰釉陶器の窯式については下記の文献によった。

- 楢崎彰一『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(I)・(II)』愛知県教育委員会　1980　1981
- 斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル211号』　1982
- 楢崎彰一・斎藤孝正『愛知県古窯跡群分布調査報告（III）』愛知県教育委員会　1983
- 前川　要「猿投窯における灰釉陶器生産の最末期の諸様相」『瀬戸歴史民俗資料館研究紀要III』瀬戸市歴史民俗資料館　1984

㉔ 「斎宮跡の土師器」『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』三重県斎宮跡調査事務所　1985

㉕ 小玉道明・村上喜雄・金村允人『千里ヶ丘遺跡発掘調査報告』千里ヶ丘遺跡発掘調査団　1968

中世墓は、外部施設はすでに削平されてはいたが、15cm前後の円礫が1×2mの範囲に比較的まとまって発見されており、内部構造としては地山を2.0×0.7m、深さ35cm前後に掘りこみ、10～20cm大の川原石で礫槨を組んでいる。副葬品としては、刀子1本、土師器皿3枚、山茶椀1点を検出している。時期は鎌倉時代。

㉖ 伊藤久嗣「北浦遺跡」『昭和53年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1978

㉗ 中村信裕「辻垣内遺跡・上東野遺跡」『昭和57年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1982

㉘ 中村信裕「大塚久保遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981

㉙ 倉田直純『史跡斎宮跡　第37－4次発掘調査報告』明和町、三重県斎宮跡調査事務所　1985

㉚ 新田　洋「平安時代～中世における煮炊用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」『三重考古学研究1』三重考古学談話会　1985

㉛ 瀬戸市歴史民俗資料館藤澤良祐氏の御教示による。「藤澤編年」については、藤澤氏による『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要1』を参照。

㉜ 前掲⑦に同じ

㉝ 『松阪市史　第二巻　史料篇　考古』松阪市史編さん委員会　1978

㉞ 前掲⑨に同じ

㉟ 鈴木敏雄『三重県古瓦図録』　1933

Ⅲ　多気郡明和町　金剛坂遺跡

1．位置と環境

水源を台高山脈の高見峠付近に発する櫛田川は、西南日本を大きく外帯と内帯に分ける中央構造線に沿って東微北流し、いくつもの曲流を繰り返しながら飯南町粥見付近で、中央構造線を斜めに切る。そして大きく曲流しつつ、大まかに見れば3段を数える河岸段丘を形成し、国鉄紀勢本線の鉄橋付近で、伊勢平野に流れ出る。

国鉄鉄橋よりやや下流において、現在の本流とかつて本流であった祓川とが分流し、現本流は北流し祓川の方は北東流し、肥沃な沖積平野を形成して伊勢湾に注いでいる。

この櫛田川下流域の平野部は、大きく次の三地域に区分できる。

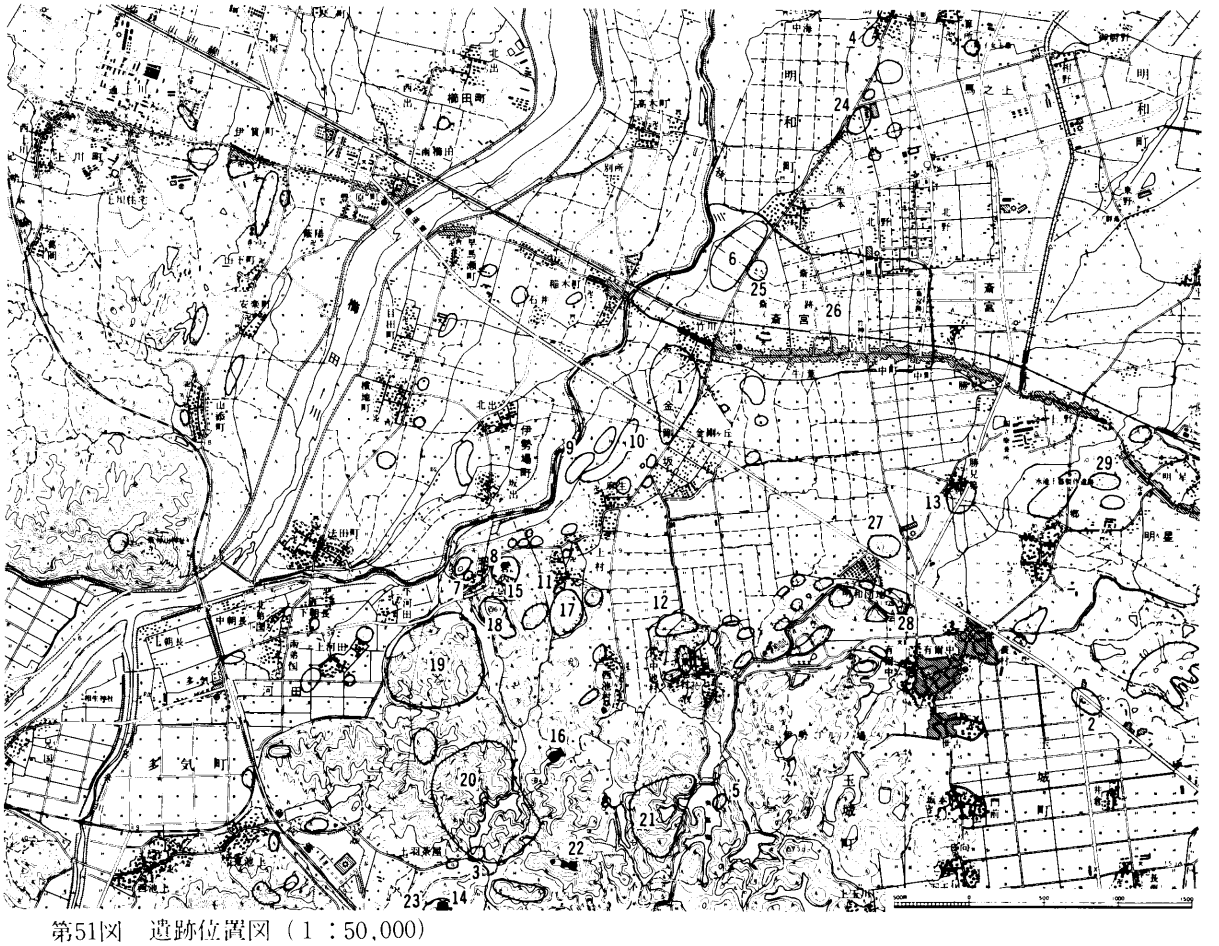
〔1〕　現櫛田川本流以西の海成層の厚い沖積平野が展開する地域。

〔2〕　川の氾濫により河道が何度も変遷し、自然堤防や旧河道が多く見られる本流と祓川とに挟まれた中央部。

〔3〕　祓川右岸の広大な洪積台地（明野原台地）。

さて、金剛坂遺跡[1]（1）は、前述のような展開をみせる櫛田川下流域の、祓川右岸の明野原台地（厳密には明野原台地は、中央部を南の玉城丘陵から北東流し台地面を浅く開析する大堀川によって東西に二分され、西方を斎宮台地と呼ぶこともある。）の西端部に位置する。

地形的に詳しくみると、国鉄鉄橋付近で分流した



第51図　遺跡位置図（1：50,000）

かつての本流である祓川は、少なくとも歴史時代のかなり古い頃には安定状態に入った。つまり、櫛田川の本流でなくなったと考えられている。[2] しかし、歴史時代を通して現河道と祓川の間の地域で氾濫と乱流を繰り返していたことが、地形図や空中写真から読みとれる。

安定状態に入る以前の祓川によって侵食を受けた明野原台地の侵食崖は、明和町岩内の中世城館（岩内城）の立地する城山付近から金剛坂、坂本、馬之上へと北東に延び、祓川沖積平野との明確な境界をなしている。沖積平野面と台地面との比高は、金剛坂字辰ノ口で6ｍ、同森田付近で3ｍである。

金剛坂遺跡はこのような地形的条件のもと、祓川沖積平野を見おろす標高15mの侵食崖上に位置し、南北約600ｍ、東西約100～200mの範囲およそ7万㎡に及び、縄文時代から歴史時代にわたる遺構・遺物を出す県下有数の遺跡である。

本遺跡は昭和46年に土砂採取による事前調査[3]が行なわれ、縄文時代後期とされる環状壺といったユニークな遺物や弥生時代前期の遠賀川式土器の伝播の問題を考える上での資料が多く出土するとともに、方形周溝墓を7基検出するなど多くの成果を得た。尚、行政的には多気郡明和町大字金剛坂字森田、字坂垣内、字辰ノ口に位置する。

周辺の遺跡についてみると、旧石器及び縄文時代の遺跡は櫛田川では上・中流域に多く分布し、下流域ではあまり展開がみられない。その中で玉城町のカリコ遺跡（2）をはじめ、大仏山山麓のシンデ遺跡、シンゲ池遺跡や石川遺跡等でナイフ型石器が採集されており、[4] 一地域としての展開がみられるほか、玉城丘陵中の上村池遺跡（3）などでもナイフ型石器が採集されている。

縄文時代の遺跡では、金剛坂遺跡自体も中・後・晩期の遺物の出土と後期の土坑が検出されている。また北東約2,500ｍの台地縁辺に位置する粟垣外遺跡（4）で晩期の土器が出土しているし、後期と推定される土器片や石器類が表面採集されている。その他、斎宮池遺跡（後期）（5）、上池村遺跡などがある。

弥生時代に入ると櫛田川上・中流よりも、むしろ下流域に人間の活動の中心が移ったことを遺跡の分布が物語っている。当地域では金剛坂遺跡が拠点的存在となるが、弥生時代の住居跡は未検出である。しかし、遺跡の規模からみると他を圧倒しているし、古く明治年間にパレススタイルの壺[5]も出土していることなど考えると、本遺跡の重要性は十分認識されよう。

金剛坂遺跡の北方の古里遺跡（6）では、中期の竪穴住居や土坑、溝、後期の壺棺墓が検出されているし、さらに粟垣外遺跡でも前期の溝が検出されていることから、祓川沖積平野に臨む台地の縁辺部には、弥生時代の人々の生活が連綿と営なまれていたことがわかる。

その他に岩内城山遺跡（7）、古墳調査時に前・後期の遺物を出土した神前山1号墳[6]（8）、祓川沖積平野の自然堤防上の下尾遺跡（9）、神殿遺跡（10）、台地内陸部では天皇山遺跡（11）、世古遺跡（12）、北野遺跡（13）がある。

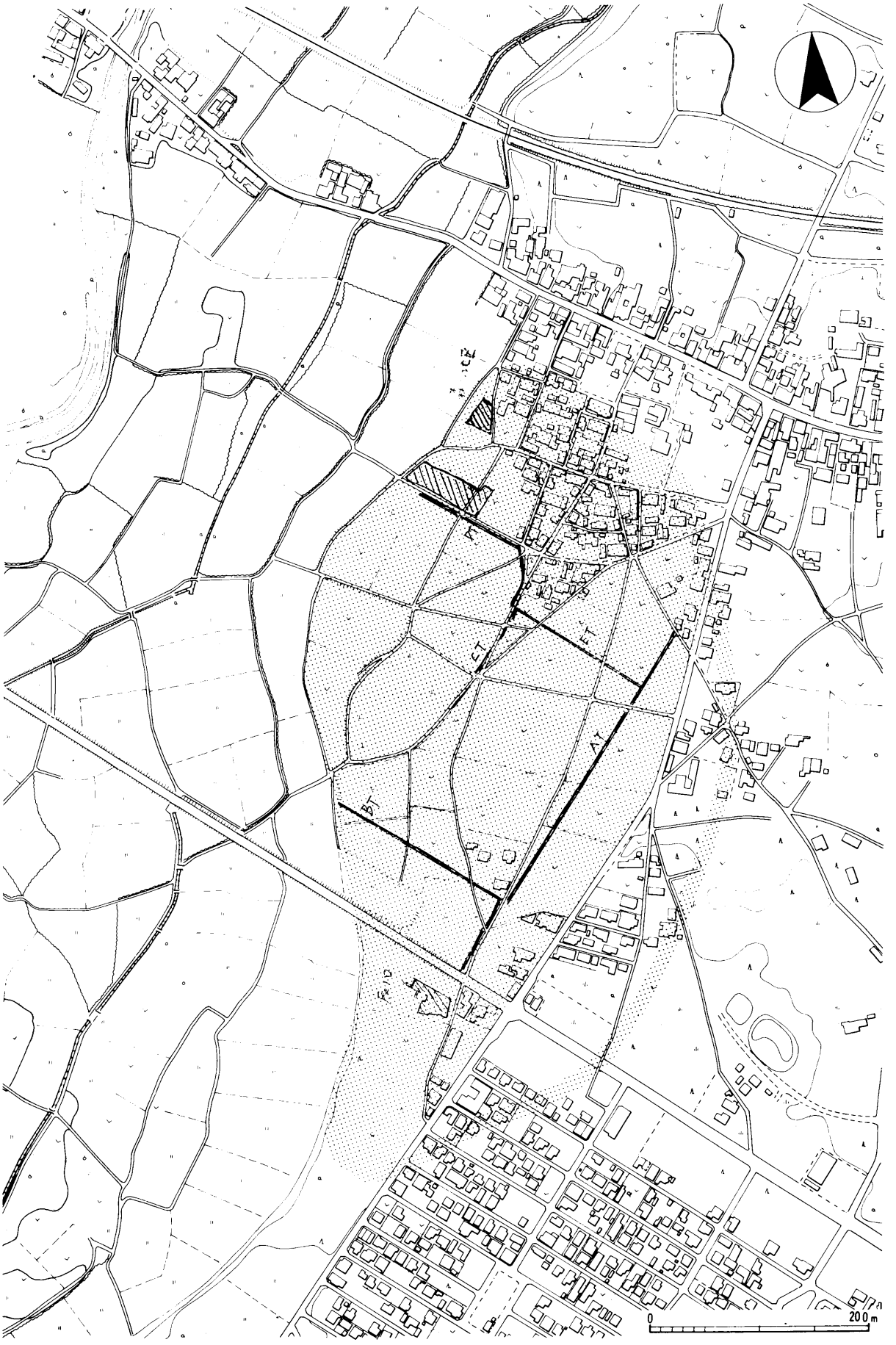
古墳時代に入ると、玉城丘陵には多数の古墳が築造される。玉城丘陵所在古墳中で最も古い様相を呈するのは、一辺25mの方墳である権現山2号墳（14）であるが、5世紀前半と推定されている。そのほか、全長25m以上の古墳15基を中心とした26支群408基[7]余が集中している。またこの丘陵から北へ延びる明野原台地上にも4支群約20基がある。

金剛坂、坂本周辺の古墳は戦中戦後の開墾によって相当数のものが破壊されている。主な古墳（群）は次の通りである。

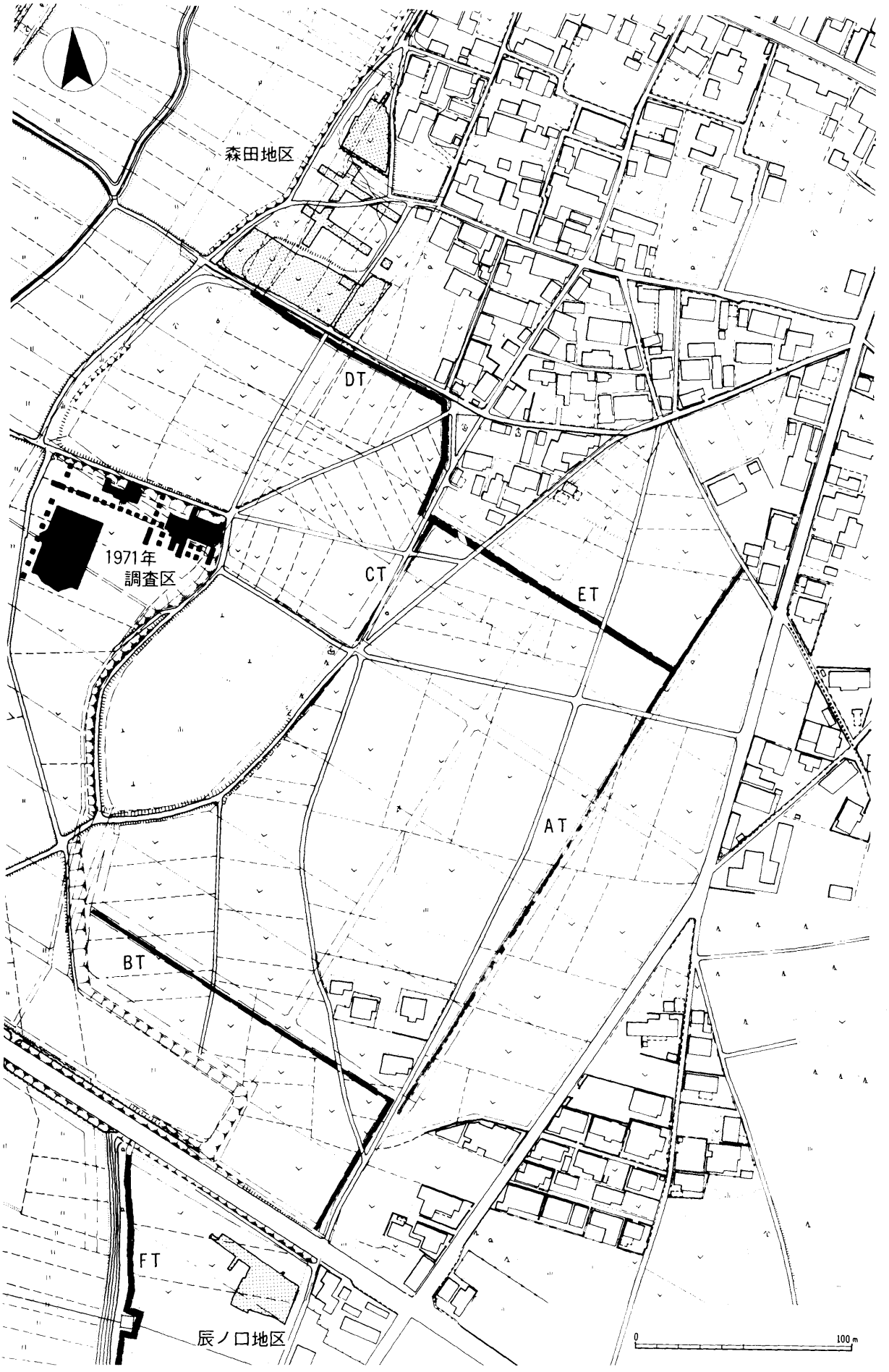
神前山古墳群（15）23基。高塚古墳（16）、天皇山古墳群（17）23基。大塚山古墳群（18）16基。河田古古墳群（19）30基。上村池古墳群（20）38基。斎宮池古墳群（21）16基。エフミ古墳群（22）6基。権現山古墳群（23）2基。坂本古墳群（24）6基。塚山古墳群（25）12基。金剛坂古墳群（消滅）。

以上のような多数の古墳の築造を支えた地域集団としての多くの集落の存在を忘れてはならないだろう。台地面でも特に丘陵末端部の微高地に、古墳時代から歴史時代へと続く遺跡も数多い。

歴代天皇の即位に伴ない、伊勢神宮の御杖代として祭祀に奉仕した未婚の内親王（斎王）の居所、及び官衙からなる国史跡斎宮跡（26）は、金剛坂遺跡の北東1.5kmにあり当地域の歴史に大きな特色を与え



第52図　遺跡地形図（1：5,000）　網目は遺跡範囲



第53図　発掘区平面図（1：2,500）

ている。当然のことながら、斎宮との深い関連性を示す遺跡も多い。

堀田遺跡[8](27)・発(おこ)シ遺跡(28)・水池土器製作遺跡(29)などでは、奈良時代の土器焼成坑が多数発見されている。このことは、古くからこの地域（有爾郷[9]）が、伊勢神宮へ献納する土器を製作していたことと何らかの形で関連するかもしれない。また、斎宮跡での多量の土師器の出土や古里遺跡[10]などでの土馬の出土とともに、斎宮（神宮）との深い関係が認められるのである。

2．森田地区の遺構

遺跡の基本的層序は、第Ⅰ層：暗茶褐色土（耕作土）、第Ⅱ層：黄褐色土（地山）で、地表面より地山面までは浅く、約40cmである。

遺物包含層は認められず、後世の開墾等により削平されたものと考えられる。

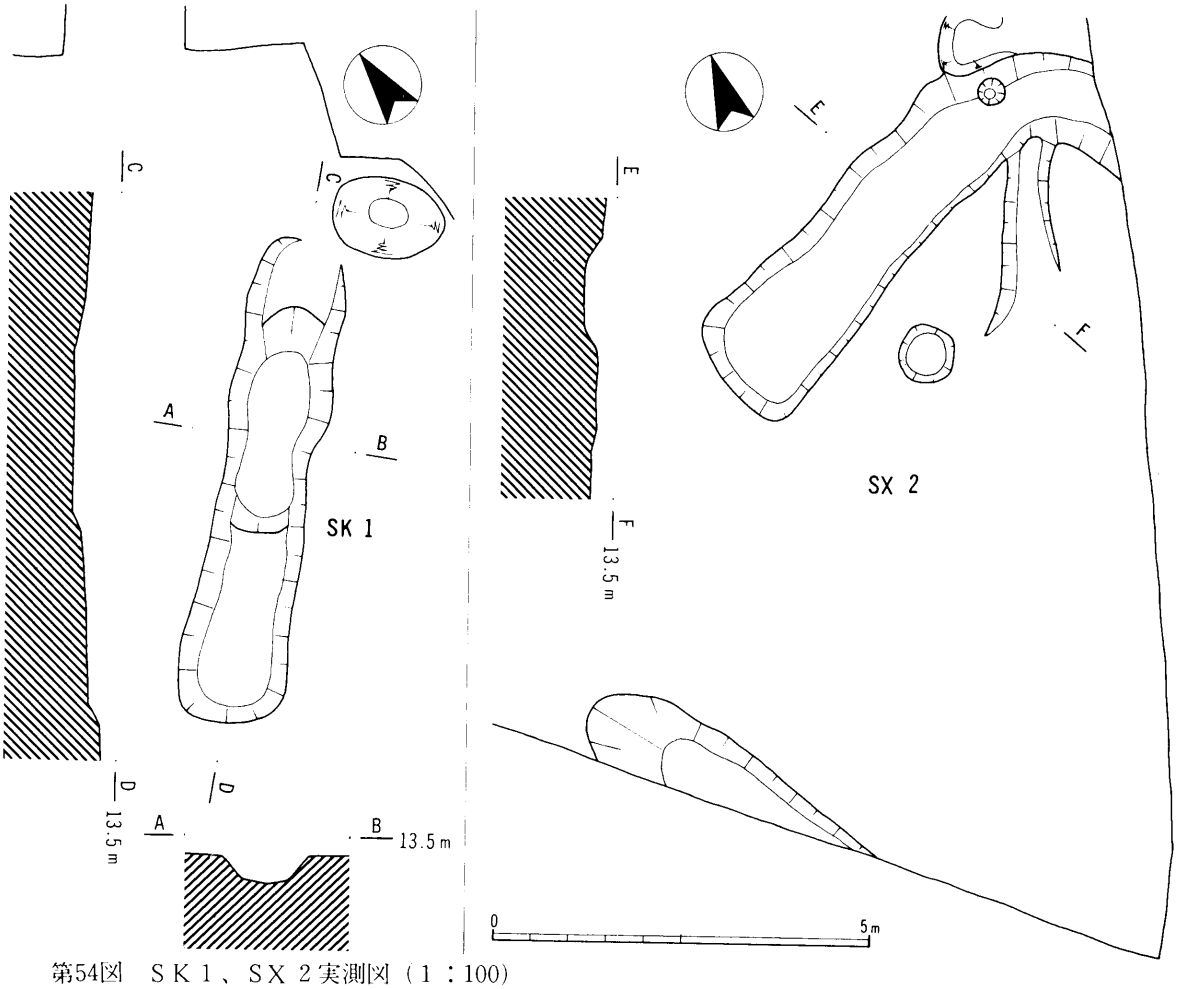
調査地は大きく三地区に分けられるが、便宜上西へ開く浅い谷部を中区とし、これより北側を北区、南側を南区と呼ぶ。調査前には北区は竹林および畑、中区および南区は畑であった。

北区および南区では、地山面が全面にわたり削平を受けていたが、現地形と同様に東から西へ向ってゆるく傾斜し、段丘崖付近においては礫層があらわれる。

検出した遺構は、方形周溝墓、土坑、溝、掘立柱建物である。

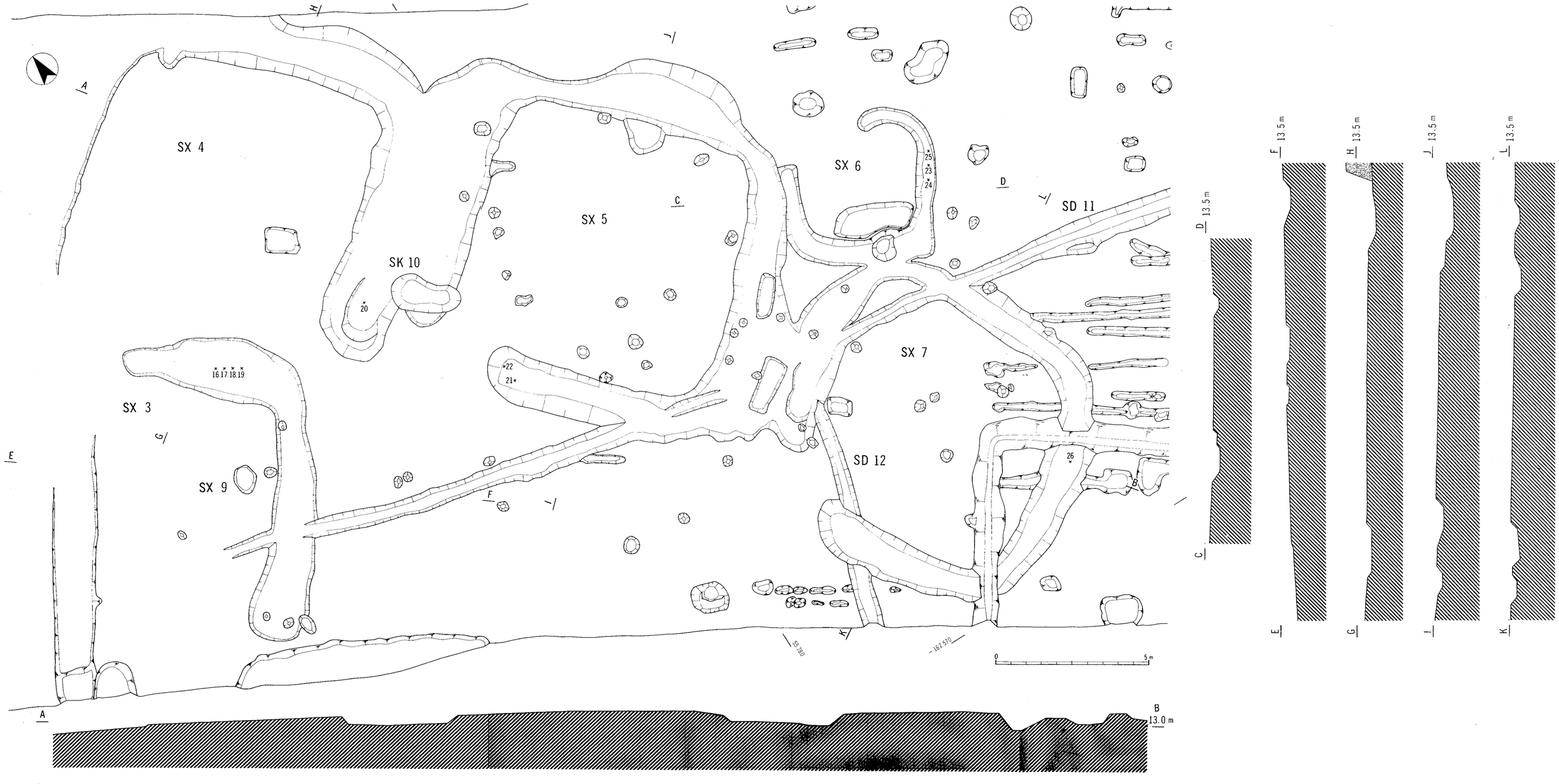
弥生時代の遺構内には黒褐色土が、奈良時代以降の遺構内には、暗茶褐色土が埋まっていた。

尚、中区は浅い谷地形がみられ、谷の最も深い部分には黒褐色土が厚く堆積していたが、遺構、遺物ともに検出されなかった。



第54図　ＳＫ１、ＳＸ２実測図（１：100）

第55図　森田地区遺構平面図（1：300）



第56図　ＳＸ３～９、ＳＸ10、ＳＤ11、12実測図（１：100）　数字は土器実測図番号を示す

1．北区の遺構

A．土　　坑

ＳＫ１　長径6.5m、短径1.3m、深さ16～34cmの細長い土坑である。長軸はＮ40°Ｅで、中央部やや北寄りに長径約３ｍの窪みがある。比較的多量の弥生時代中期の土器片が出土したが、保存状態は極めて悪いものであった。

この土坑の北東にある穴は、杉の立木の抜取穴であるが、このＳＫ１に続くものと考えられなくもない。そうだとすると、調査区以外へのびる方形周溝墓の周溝と考えることもできるが、ここでは土坑としておく。

B．方形周溝墓

ＳＫ２　調査区の南東端で、北西溝と南西溝の一部を検出した。北西溝は全長6.0ｍ、幅1.5ｍ、深さ17cmで北東溝へ続き、底部は平坦である。また南西溝はごく一部を検出したのみで、しかも削平を受けているため深さも15cmと浅い。周溝により画された台状部の径は北東――南西で9.0ｍである。南西溝内埋土より、弥生土器と思われる細片が２点出土したのみである。周溝内部の盛土および主体部は検出されなかった。

2．南区の遺構

A．方形周溝墓

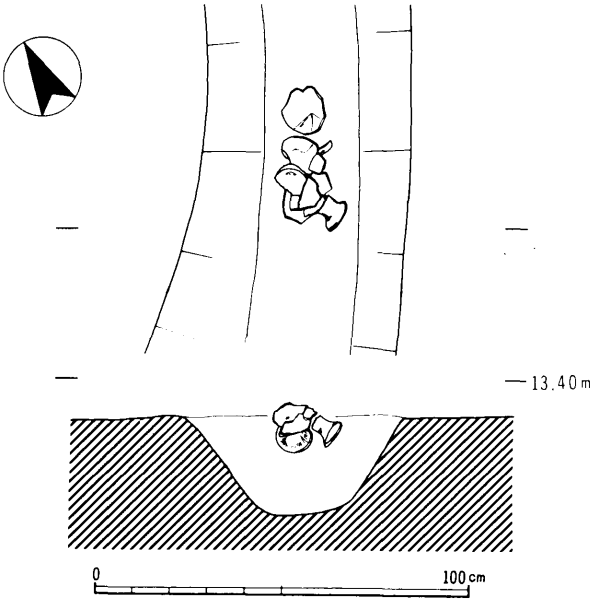
ＳＸ３　調査区の西部で、北東溝と南東溝を検出した。北西溝および南西溝は削平のためか検出されなかった。北東溝は全長6.0m、幅2.0m、深さ25cmで南東溝へ続く。南東溝は全長9.0m、幅1.5m、深さ14cm前後である。両溝とも底部はほぼ平坦で、南東溝を中央部やや南寄りでＳＤ11が東西に切る。周溝内部の盛土および主体部は、今回検出したすべての方形周溝墓で検出されなかった。北東溝の中央部から弥生時代後期の土器（16～19）が出土した。

ＳＸ４　ＳＸ３の北東に隣接して検出された。北西から北東そして南東に続く周溝を検出したが、南西溝は認められず、ＳＸ３の北東溝と共有するものかもしれない。

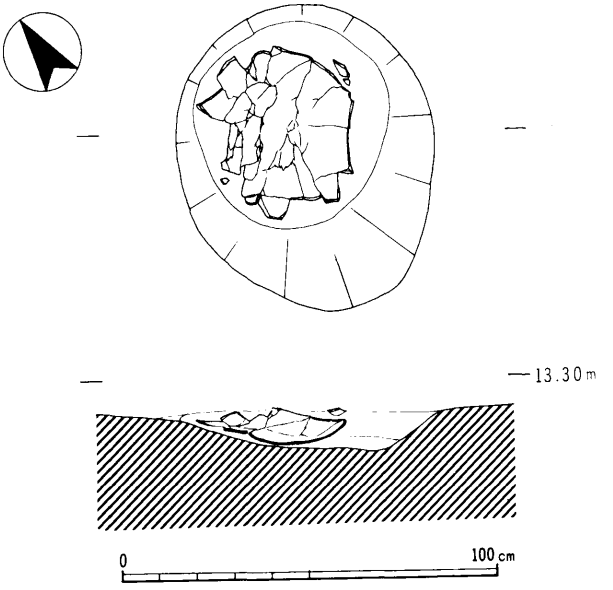
北西溝については、周溝内側の壁面を検出したにすぎず、溝幅は不明である。おそらく後世の削平が深く行なわれたものであろう。

北東溝は幅１.８ｍ、深さ20cmで底部はほぼ平坦で、若干浅くなって南東溝に続く。南東溝は幅約２.５ｍ、深さ30cmである。南端で２段の摺鉢状を呈し、底部近くより混入と考えられる弥生時代中期の土器（20）が出土した。この南東溝は隣接するＳＸ５の北西溝と重複しているが、その切り合い関係は不明である。台状部径は9.0ｍ×9.0ｍで、南隅が陸橋部と考えられる。

ＳＸ５　ＳＸ４の東に隣接してＳＸ４の南東溝と重複する状態で検出された。北西溝は南端近くで奈良時代の土坑ＳＫ10に切られるが、深さは30cm前後



第57図　ＳＸ６遺物出土状況（１：20）



第58図　ＳＸ９実測図（１：20）

で北端はやや狭く浅くなって北東溝へ続く。北東溝は幅0.8～2.0m、深さ10～44cmで溝中央部が最も深い。そしてコーナー部で浅く狭くなりつつ南東溝へ続く。南東溝は、北部でＳＸ６と一部重複するほか南部でＳＸ７と重複し、さらにＳＤ11に切られつつ南西溝へと続き、西のコーナーで幅２.０ｍの陸橋部を残して終る。南西溝の幅は１.５ｍ、深さは35cmで台状部径は8.5m×8.8mである。

南西溝西端から弥生時代後期の土器（21・22）が出土した。

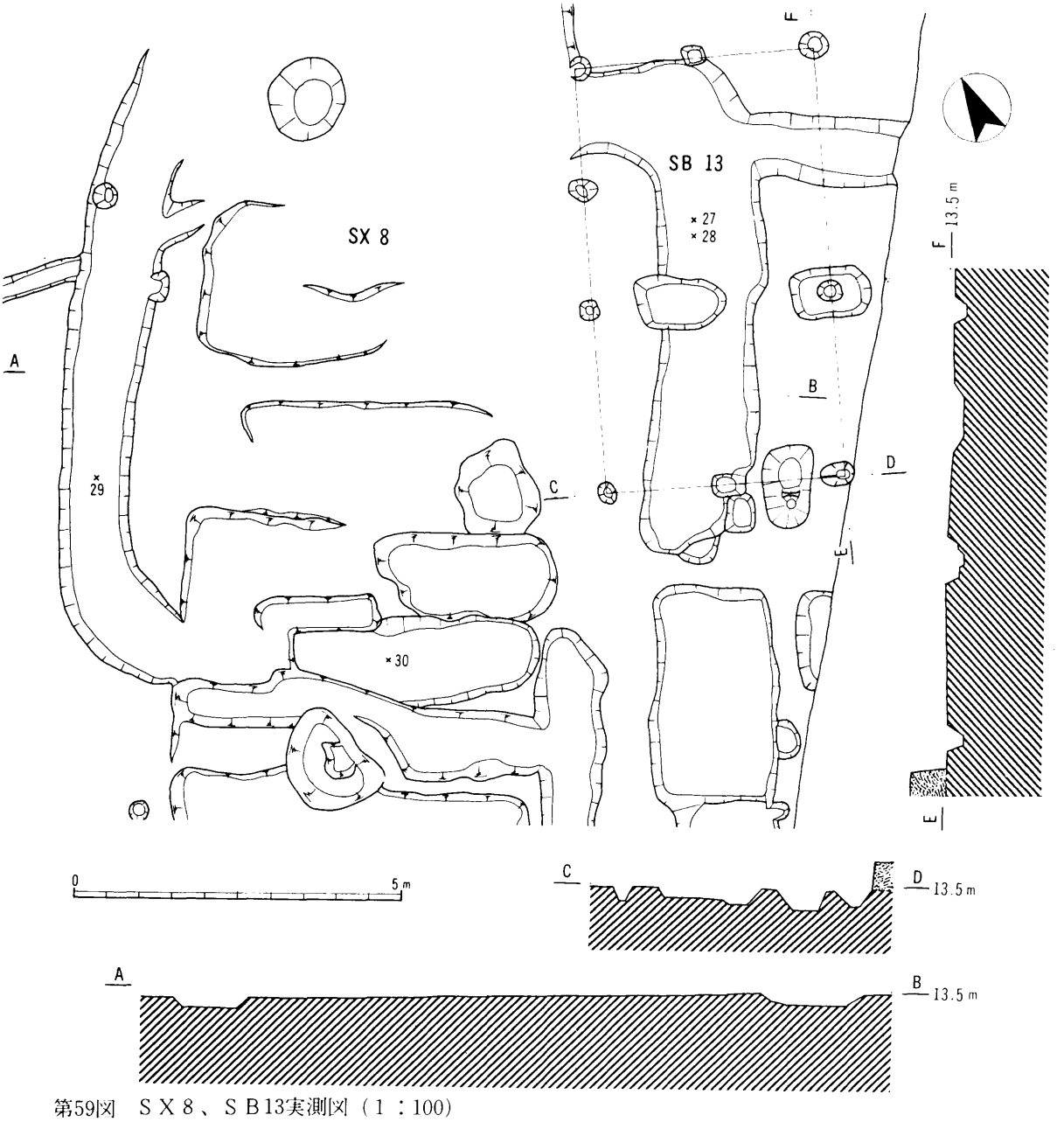
ＳＸ６　ＳＸ５の東に隣接して検出されたもので、他の方形周溝墓に比して規模が小さい。北西溝はＳＸ５の南東溝と重複し、南西溝は南に隣接するＳＸ７の北隅で重複するが、遺構の埋土はいずれも黒褐色で切り合いによる前後関係はつかめなかった。

北東溝は幅0.5m、深さ10cm。南東溝は幅0.8m、深さ15cm。南西溝は幅０.９ｍ、深さ20cm。北西溝は幅０.５ｍ、深さ15cmである。北隅に幅2.5mの陸橋部を有する。台状部径は3.8m×3.8mである。

南東溝のほぼ中央部で高杯３点（23～25）が一括出土した。これらは溝底から約15cm浮いた状態で出土している。

ＳＸ７　北西溝がＳＸ５およびＳＸ６と重複する。西隅に幅１.８ｍの陸橋部を有し、他の三方には周溝が連続してまわる。

北西溝は幅１.８ｍ、深さ35cm。北東溝は幅１.３ｍ、



第59図　ＳＸ８、ＳＢ13実測図（１：100）

深さ25cm。南東溝は幅1.5m、深さ35cm。南西溝は幅1.5m、深さ33cmである。北西溝と北東溝および南西溝は、SD11およびSD12によって切られる。台状部径は7.3m×7.5mである。

後世の開墾や耕作でかなり攪乱されているものの、南東溝中央よりやや北で弥生時代後期の壺（26）が、溝底にほぼ接して出土した。また南西溝からは丹彩の壺の肩部破片が1点出土している。

SX8　土取りや耕作のため、かなり攪乱を受けていたが、北西溝と南東溝および南西溝の一部を検出した。北西溝は幅1.1m、深さ15cm。南東溝は幅1.5m、深さ20cm。南西溝は幅1.4m、深さ14cm。各溝とも底部はほぼ平坦である。台状部径は7.8m×7.5mである。南隅に幅2.3mの陸橋部を有する。

攪乱から取り残された南西溝から弥生時代後期の壺（30）が出土したのをはじめ、北西溝と南東溝からも土器が出土した（27～29）。

B．壺　棺

SX9　SX3の台状部内東隅近くで検出された。掘形は1.0m×0.8mの楕円形を呈するが、大部分が削平されているため浅い。底に接して径20cmほどの黒斑のある弥生土器と思われる大型壺の体部が残存していた。残存土器には口縁部も底部もみられないことから、土器は正立状態では埋納されておらず、横臥で埋められていたと思われる。

残存土器は体部の最大径付近と考えられ、下半の黒斑部がヘラミガキされていることから壺と考えられ、弥生時代中期に比定できそうである。

方形周溝墓の台状部内に、主体部と共に土器棺が埋納される例は多くみられるが、本例の場合はSX3とは直接関係はないものと思われる。

C．土　坑

SK10　SX5の北西溝の南端近くで検出された。北西溝を切って検出されたが、遺構埋土は暗茶褐色で明瞭に区別ができた。2.3m×1.1mで深さ30cm、底はほぼ平坦なヒョウタン形の土坑である。奈良時代の小型長胴甕（31）が出土した。

D．溝

SD11　調査区の中央を東西に伸びる幅0.6～0.8m、深さ20～30cmの断面逆台形を呈する溝である。発掘区東部のSX8付近では攪乱のため不明となるが、SX8の南東溝の東の溝へ続き調査区外へと延びるものと考えられる。埋土中より山茶椀（32）と山皿（33）が出土した。

SD12　SX7の北西溝中央部を切るSD11から分岐し、ほぼ直角に南へ延びる溝である。幅0.5～0.7m、深さは20cm前後で断面は逆台形を呈する。混入と考えられる弥生土器片が微量出土したのみで、明言はできないがSD11と同期のものとみてよいだろう。調査区外南方へ延びるようである。

E．掘立柱建物

SB13　調査区東端のSX8の南東溝を跨ぐ恰好で検出された3間×2間の南北棟の建物である。柱間は桁行で1.85m＋1.85m＋2.8mで、梁間は1.85mの等間で棟方向はN17.8°Eである。柱穴の掘形は円形ないし楕円形または隅のくずれた方形で、径は30cm前後、深さは15～20cmである。柱穴内よりの遺物の出土はなかった。

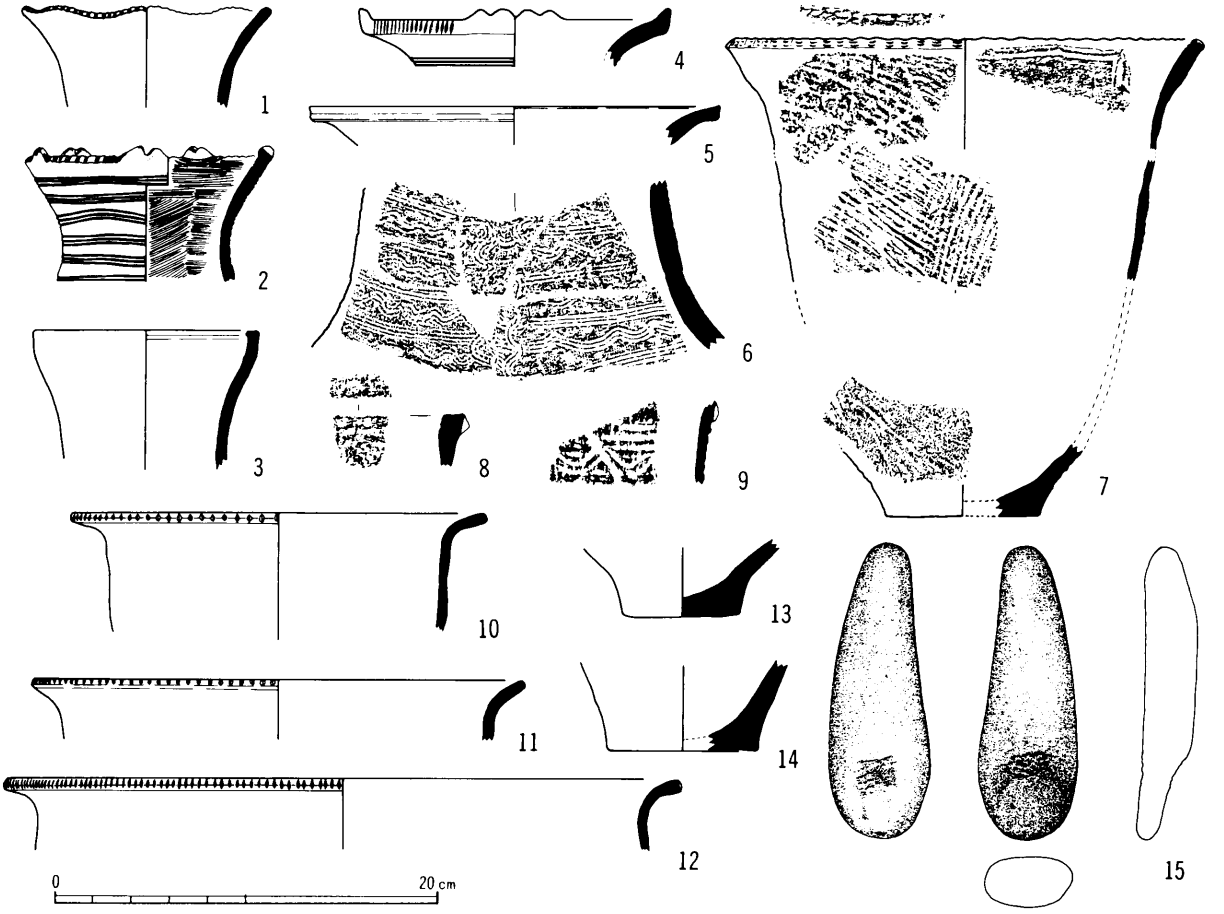
3．森田地区の遺物

1．弥生時代中期の遺物

A．SK1出土の遺物

土　器

広口壺（1・2・4～6）　ラッパ状に開く口縁部に刻目が施されたり、小波状であったり、突起がつけられたりするもの（1・2）と、大きく外反する口縁部が横へ広がり面をもつもの（4・5）がある。大型の広口壺（6）もこの形態のものと考えられる。（1）は波状の口縁部にヘラ状工具によって刻目を施したもので、刻目は波状の最高位が大きく深いものとなっている。推定口径13cmで胎土は精良ながら砂粒を含み、焼成はやや不良。色調は暗褐色を呈する。器表は摩耗のため詳細は不明であるが、内外面ともヨコナデ調整と思われる。（2）も口縁部成形については（1）と同様の手法によるもので波状部の最高位にあたる部位が突起状に大きく厚くつくられ、そこに大きな刻目が入る。この突起は全周に



第60図　ＳＫ１出土遺物実測図（１：４）

５ヵ所つけられており、全周にヘラ状工具による刻目が入る。口縁端部外面から頸部にかけては、ていねいなヨコナデののち３本単位の櫛描き横線文が単帯構成でほぼ等間隔に施される。一方、内面は５ヵ所につけられた突起部直下に器表で使用したものと同一の原体によって、波状の横線が施される。その下部には６本／cmの刷毛目が横位に施される。口径12.2cm、胎土は精良で焼成は良好、色調は褐色ないし暗橙褐色を呈する。

（４）は外反して横に広がる口縁端部にヘラ状工具で刻目を入れ、全周の４ヵ所に四個一対の瘤状突起をつけたもので、突起はナデられて丸味をもつ。

頸部には６本／cmの櫛描横線が入る。推定口径16.6cm、胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良。器壁の剝落が著しい。色調はやや暗い乳褐色を呈する。

（５）は口縁端部で若干肥厚し、ほぼ垂直方向に面がつくられ、上端はやや上方にヨコナデによってつまみあげられた形になっている。内外面ともヨコナデ調整がなされる。小片のため口径の推定には難があるが、もうすこし小さいかもしれない。胎土は微粒砂を含むが精良、焼成は良好で暗褐色を呈する。

（６）は大型の広口壺の頸部から肩部にかけての部分で、３本単位の櫛描横線文と波状文を交互に配し、全周をおそらく四分割する形で縦位に波状文を施している。無文部分には施文前に施された縦位の細かな刷毛目（７～８本／cm）が残る。胎土はやや粗く砂粒を含む。焼成はやや良で暗黄褐色を呈する。

細頸壺（３）　やや外弯ぎみに上方へ伸びた頸部はやや受口状を呈し、口縁端部は内側に肥厚し水平に面をつくる。内外面ともていねいにナデられている。推定口径12cm、胎土は（２）と同じもので精良、焼成は良好で暗橙褐色を呈する。

深鉢（７）　水神平式と呼ばれるもので、平底の底部からやや丸味をもってラッパ状に開く深鉢である。口縁部は押し引きによる小さな波状を呈し、その谷部に２本単位の工具（原体不明）の押し引きによる沈線が入る。口縁内面上端近くには同じ施文具

と考えられる二条の沈線が連続的に施され、一部は直角に1.5cmほど垂下する。

器表は口縁部直下から底部まで、縦位のあらい羽状条痕を施す。外面に若干の付煤が認められる。推定口径は24.4cm、同器高は25cm前後であろう。胎土は精であるが微粒砂を多く含む。焼成は良好であるが器壁の剝落が著しい。色調は橙褐色を呈する。

（8・9）の器形は小片のため不詳であるが、(8)は口縁端部外面に押し引き突帯がつく。口唇部と口縁部内面に二本単位の押し引きによる沈線が入るのは（7）と同様の手法であろう。突帯の直下より斜方位にあらい条痕が施される。

一方（9）は、一条の押し引き突帯の下は横位と波状の条痕を重ねて文様を構成している。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好だが（8・9）とも磨耗が著しい。橙褐色を呈する。

甕（10～12）　いずれも小片でしかも磨耗が激しいため推定復元した口径、器形等に問題があるかもしれない。丸味をもって大きく外反する口縁端部に、ヘラ状工具による刻目をもつものである。いずれも刷毛目調整と思われるが、磨耗のため不詳である。胎土に砂粒を含み、焼成は（11）は良好のほかはやや不良。

（13）は壺の（14）は甕の底部であろう。胎土に砂粒を含み焼成は不良。褐色を呈する。

石器（15）　河原石で握りやすいものを選んで利用したもので、長径15.5cm、最大幅5.4cm、最大厚さ2.8cm、重さ300グラムである。先端の方は偏平で薄くなっており、この部分の表裏には多くの打痕が認められる。また、わずかながら側面や先端部にも認められる。叩き石として利用されたものである。石材は硬砂岩かと思われる。

B．ＳＸ４出土の遺物

広口壺（20）　ＳＸ４の周溝内埋土から出土したものであるが、混入品と思われる。

残存の破片からは正確な器形の復元が難しく、図示したものも修正の余地は残るものの、ほぼ球形を呈するようである。体部上半を複帯構成で６本単位の櫛描横線文で凝似流水文風に飾る。下半部はナデ調整で体部から底部にうつるくびれ部に、縦位の粗い刷毛目を施す。また、底部から体部下半にかけて黒斑を有する。胎土に石英・長石の砂粒を多く含み焼成は良い。黄褐色ないし、やや暗い橙褐色を呈する。

２．弥生時代後期の遺物

A．ＳＸ３出土の遺物

広口壺（16～19）（16）は大きく外反する口縁部が端部で下方へ肥厚し垂直方向に面をもち、口縁内側上面で水平な面をもつものである。水平方向の面には櫛状工具による羽状の列点文が全周に施され、また口縁端部の垂直方向の面には刺突による小円文が施されている。(17)は頸部からく字状に外反する口縁部で、口縁内部上面に櫛描波状文が全周をめぐる。器壁の磨耗のため詳細な観察ができないが、原体は４本単位のものかと思われる。また、頸部最小径の部位から下方にかけて、櫛描横線文がみられる。

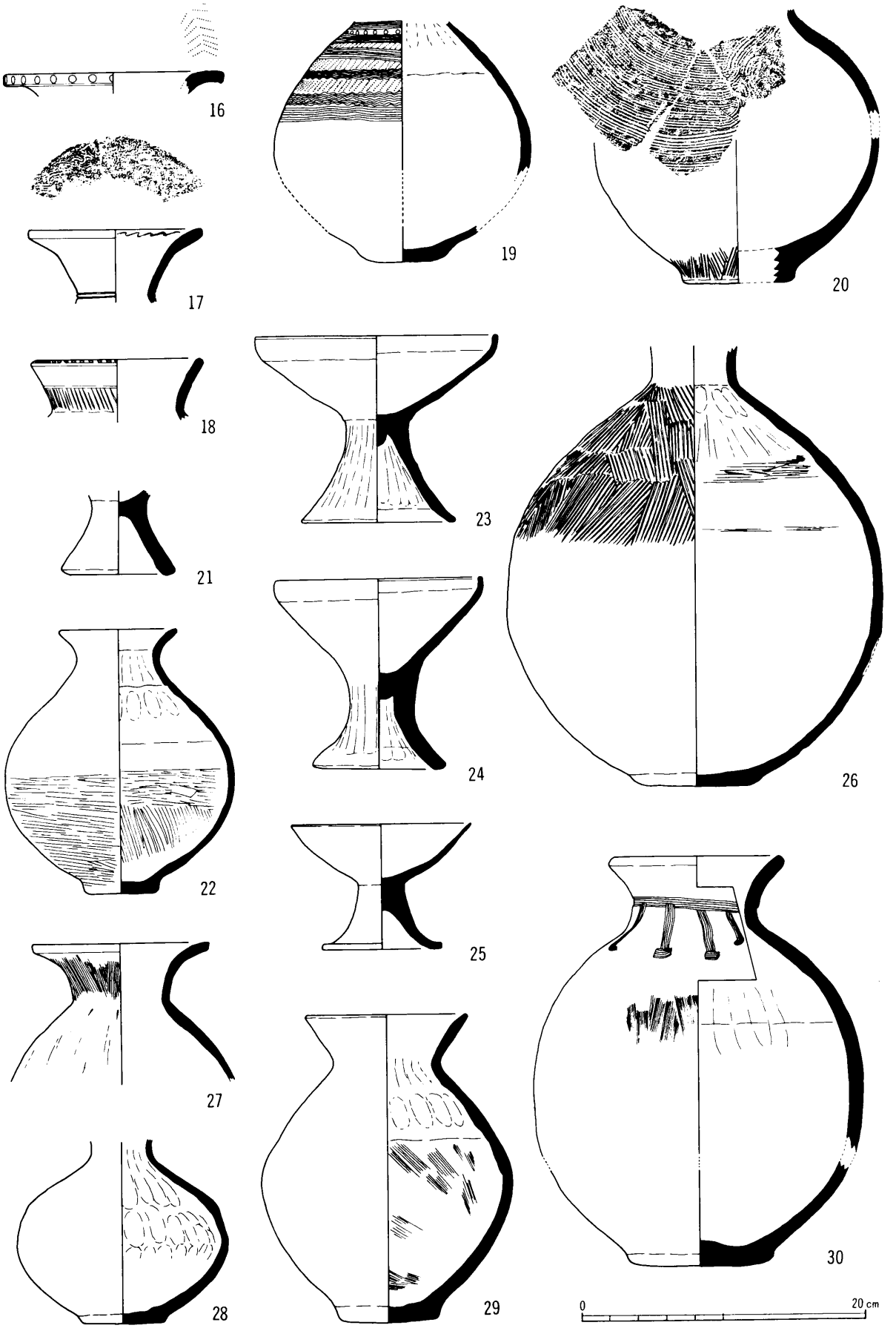
(18)は頸部からく字状に上方へ立ち上る口縁部で端部はやや丸味をもつが、小円文が全周に刺突施文される。口縁部外面は縦位のあらい刷毛目調整の後、ヨコナデされる。口縁部に近い上半分は強くナデられ、刷毛目が消されている。

(19)は体部最大径がやや下方にくる器形で、体部上半に施文がみられる。文様は７本か８本単位の櫛状工具を主として用い、上から横線文、小円文、横線文、列点文、横線文、列点文、波状文、列点文、波状文、横線文というふうに施文されている。列点文が横線文の上に施文されていることから、施文順序としては、先に横線文や波状文が施行されてのち、列点文が刺突されたものである。

全般的にいずれの土器も焼成は良いが、器壁の磨耗が著しい。色調は（16）が橙褐色、(17・18)が暗褐色、(19)が淡黄褐色である。

B．ＳＸ５出土の遺物

広口壺（22）　体部の最大径がやや下方にくるが球形に近いもので、頸部から丸味をもって外反する口縁部の立ち上がりは、体部の大きさに比べるとやや低く小さい感がある。口縁端部は丸くおさまる。口縁部から頸部にかけてはていねいにヨコナデされ、体部上半も同様である。最大径付近より下半は横位のヘラミガキが認められる。内面は頸部に粘土接合痕が明瞭にみられるほか、下半分には斜方向のヘラ



第61図　ＳＸ３、ＳＸ４、ＳＸ５、ＳＸ６、ＳＸ７、ＳＸ８出土遺物実測図（１：４）

ミガキ、その上部には横位のヘラ圧痕が認められる。

口径8.2cm、器高19.0cmで胎土は精良であるが、1～3mm程の石英、長石粒を多く含む、焼成は良好で、褐色を呈する。

高杯（21）　脚部のみであるが器壁はやや厚く、真直ぐ外方に八字状にふんばり底部に面をもつ。器壁の磨耗・剝落がはげしいため調整方法等不明である。胎土に砂粒を含むが焼成は良く、明るい橙褐色を呈する。底径8.4cm、脚高は5.3cmである。

C．SX6出土の遺物

高杯（23～25）　SX6の周溝内より一括出土したもので、杯部はやや内弯気味に斜め上方に開き、口縁端部をうすく丸味をもたせておさめるもの（25）と、口縁部近くで上方に向け受け口状をなし、口縁端部に水平な面をもつもの（22、24）に分けられる。

脚部の形態は、(23)では杯部接合部分より八字状にやや外弯しつつ広がるのに対し、(24)はほぼ円柱状で裾部においてやや内弯的なふくらみをもって広がる。また（25）は裾部が大きく広がり端部に垂直方向の面をもつ。

胎土や調整技法等でも（23、24）と（25）とは全く異なっている。胎土に砂粒を多く含み焼成がやや不良で器表の磨耗が著しい（23、24）に対し、(25)は精良な胎土に若干の砂粒は含むが焼成が極めて良好で堅緻である。

脚部の調整は（23）は下から上へ、(24)は上から下へのヘラケズリ。(25)は上から下へていねいなヘラミガキを、また杯部外面も下から上へていねいにヘラミガキを施している。

杯部と脚部の接合方法も、(23、24)はいわゆる円盤充塡法と呼ばれるもので、充塡された粘土塊が脚上部内側にそのまま残っている。（25）はソケット式と呼ばれる方式で杯部と脚部を接合している。

（23）は口径17.6cm、器高13.3cm、（24）は口径15.0cm、器高13.6cm、（25）は口径13.0cm、器高9.0cmである。

D．SX7出土の遺物

広口壺（26）　ほぼ球形の体部に小さめの頸部が残存している。SX7の南東溝の底についた状態で口縁部を欠くが、ほぼ完形で出土した。体部上半には5本単位で3本/cmのあらい刷毛目が施された後ナデられるが、下半部は刷毛目が認められない。体部内面には指圧痕、ヘラ圧痕が残る。

胎土は砂粒を含むが精良で、焼成も良好で堅緻である。体部の最大径は27.0cmで色調は褐色を呈する。また、体部最大径付近に径8cm程の黒斑を有する。尚、SX7の南西溝埋土中からは、小片ではあるが丹彩の壺頸部直下の破片が1点出土した。

E．SX8出土の遺物

広口壺（27～30）　(27)は図示していないが径7.0の平底の底部をもつもので、く字状に外反する口縁部は途中で大きく外反し、端部に面をもつ。頸部に11～12本/cmの細かい刷毛目が残る。口縁部内外面から頸部にかけてはていねいなヨコナデ、体部は縦方向にヘラミガキが施される。

胎土は精良で焼成は良好。体部下半に径10cm程の黒斑を有する。口径12.8cm、色調は淡黄褐色である。

（28）は口縁部を欠くが、体部のよく張った小型の壺である。器壁の磨耗が著しいため調整方法等はよくわからないが、全体にナデられている。内面には指オサエの痕跡がよく残っている。

胎土は良、焼成はやや甘い。淡褐色を呈する。

(29)は、く字状に斜め上方にのびる口縁をもつ。口縁部内外面および頸部はヨコナデ調整がなされる。体部は器壁の磨耗のため調整方法は不詳である。やや丸味を帯びた算盤珠状の器形を呈する。

体部内面上は指圧痕、下半には4本/cmの刷毛目がわずかに残る。

胎土は精、若干の長石、石英粒を含み焼成は普通である。色調はやや橙色のかかった褐色を呈し、底部付近に径5cm程の小さな黒斑を有する。

口径は11.4cm、器高は22.0cmである。

(30)はほぼ球形の体部をもち、口縁部は頸部から丸味をもってゆるやかに外反し、端部は丸くおさまる。全体的に器壁がやや厚く、にぶい感をうける。頸部には原体幅7mmで5本単位の櫛状工具により一条の横線がめぐり、そこから下の肩部にかけて、上から下へと懸垂状に全周で11本施文されている。それらの間隔は不揃いで、そのうちの5本はL字状に右方向へはね、6本はJ字状に左方向へはねている。体部には12本/cmの細かい刷毛目が残る。器表は全体

にていねいにナデ仕上げされている。体部外面には煤が付着している。大薮遺跡ＳＸ１出土土器[11]に似る胎土は並んで、石英・長石粒を含み、焼成も普通である。色調は褐色、口径は11.8cm、器高は約30cmである。

３．奈良時代の遺物

長胴甕（31）　ＳＫ10から出土したもので、長胴で上方がすぼまり気味の体部からゆるく外反し斜め上方にひらく口縁部をもつ。口縁端部は内側上方にわずかにつまみ出されて丸くおさまる。口縁部内外面ともヨコナデされ、体部外面には７本／cmの細かい刷毛目が施される。そののち下半部は縦位に上から下へヘラ削りされる。体部内面は頸部直下に４～５本／cmの刷毛目が施されたのちヨコナデされる。指圧痕も明瞭に残る。底部は欠損している。

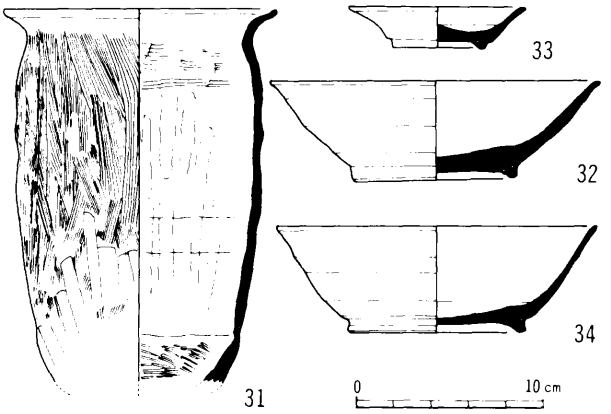
推定口径14.6cm、同器高21.0cmで褐色を呈する。

４．平安時代の遺物

ＳＤ11出土の遺物

山茶椀（32）　やや内弯気味に斜め上方へのび、口縁部で外反して端部は外へつままれヨコナデされる。内面はていねいなナデ仕上げ。高台は外へふんばるように張り出し、丸味を帯びた逆台形を呈する。高台の貼りつけ後ヨコナデを施すが、底部には糸切り痕が残る。ロクロ回転方向不明。

胎土中に砂粒を含むが焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。口径17.6cm、器高５.３cmである。藤澤編年[12]によればⅡ－４期に比定できそうである。平安時代終末頃に位置づけられよう。



第62図　ＳＫ10、ＳＤ11、包含層出土遺物実測図（１：４）

山皿（33）　底部中央が厚く自然釉が全体にかかる。高台は（32）よりは粗雑で籾殻痕が見られる。また底部外面には糸切り痕が残る。ロクロ回転方向は不明。胎土は良、焼成も良好で堅緻である。灰褐色を呈する。口径9.2cm、器高2.2cmである。藤澤編年Ⅱ－４期に比定できよう。

５．包含層出土の遺物

山茶椀（34）　耕作土中より出土したもので、器壁が薄く口縁端部は（32）のように外反せず、すんなりおさまるものだが、形態的には同じである。推定口径17.2cm、同器高５.７cmで高台には籾殻痕がみられる。

小　結

今回の圃場整備事業にかかる調査では、約７万m²に及ぶ当遺跡のほぼ全域にトレンチが入ることとなった。昭和46年に実施された先の調査結果も含めてかなり資料が増加した。しかし、遺跡の中心部と考えられる地域は排水路部分に限られ、きわめて狭いトレンチ掘りであったため、内容はなお不十分なままである。

当遺跡の北端部にあたる森田地区に限っていえば昭和46年調査時に検出された方形周溝墓が、今回の調査でも検出され、墓域の広がりを知る手がかりを得たことが成果としてあげられよう。今回７基が検出された。平面規模は一辺が10～12mで、先回調査の10～13mとほぼ同じ規模である。また周溝内部の盛土、主体部については、前回同様検出できなかった。これらの周溝墓は弥生時代後期に、さほど長期の時期差もなく一辺を接するか、または共有する形で、順次連接して築造されていったようである。このような在り方[13]は鈴鹿市東庄内Ｂ遺跡[14]や松阪市草山遺跡[15]などでみられるものであり、昭和46年調査時のものとは様相を異にする。

ＳＸ３～ＳＸ７の５基については一群として把握できるが、その中にあってＳＸ６のように一辺が約

5mと小規模なものもあり、同一集団内での被葬者の何らかの差として考えられよう。草山遺跡例でも規模が大小のものが一群を形成し、それらがいくつか集まって最も標高の高い丘陵尾根上に墓域を形成しているようである。

西に祓川沖積平野を望む台地端の南半については不明だが、北半部には中期から後期にわたっていくつかの方形周溝墓群が形成され、墓域が広がっていたことが指適できよう。

一方、弥生時代の住居跡は今回の調査でも検出されなかった。台地中央部寄りに居住域が存在するのかもしれない。今後の調査に期待したい。

ところでＳＫ１については弥生時代中期の遺物がかなりまとまって出土した。遺構の項でも述べたとおり、これを方形周溝の一部と考えられなくもないが、南溝にあたるものが検出されなかったことや、出土遺物に小片が多いことや、その出土状況からみて土坑と考える方が妥当であろう。小片が多いことと保存状態が極めて悪いことから、図示しえた遺物は少ないが中期初頭（畿内第Ⅱ様式）に対比できよう。

甕は刷毛目調整の畿内型のものが主体だが、一個体分の条痕深鉢型土器と他に小片（器形不明）が出土した。

いうまでもなく、三重県地方（伊勢湾西岸地方）においては弥生土器に伴なう条痕文系土器の出土する遺跡は少なく、量的にも少ないことから条痕文系土器は客体的な存在である。このような中で水神平式についても出土量が微量のため第Ⅰ・Ⅱ様式とどのように対応するのか等、現状では不詳な点が多い。今後の資料の増加を待ちたい。

（田村陽一）

〔註〕

① （　）内の数字は第51図の遺跡番号に相当する。

② 藤岡謙二郎編　『河谷の歴史地理』蘭書房　1953

③ 谷本鋭次・山沢義貴　『金剛坂遺跡発掘調査報告』　明和町教育委員会　1971

④ 明和中学校郷土史研究部　『郷土史研究部文集』　1984

⑤ 『弥生式土器集成　本編』Pl.54　1968

⑥ 下村登良男　『神前山１号墳発掘調査報告』　明和町教育委員会　1973

⑦ 王城丘陵全体の古墳総数408基については下村登良男氏のご教示による最新の数字である。

⑧ 伊藤久嗣「堀田遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1981

⑨ 金剛坂遺跡周辺は、『倭名類聚抄』にいう多気（竹）の郷に属する。

⑩ 山沢義貴ほか　「古里遺跡発掘調査報告 ――Ｃ地区――」　三重県教育委員会　1973

⑪ 吉水康夫　「大薮遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』　三重県教育委員会　1973

また古里遺跡Ｃ地区において中期中葉の細頸壺で、肩部に櫛描横線文をめぐらし、その上に縦方向に櫛描文を全周で４か所重ねるものが出土しており（PL．８－１）、手法的には同様のものであろう。

⑫ 藤澤良祐　「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ」　1982

⑬ 伊藤禎樹　「伊勢湾周辺の弥生時代の墓制」『信濃』　25－１、1973

⑭ 小玉道明ほか　「東庄内Ｂ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　三重県教育委員会　1970

⑮ 松阪市教育委員会　『草山遺跡発掘調査月報』No.1～10　1982～1985

その他の参考文献

- 谷本鋭次　『古里遺跡発掘調査報告 ――Ｄ地区――』　三重県教育委員会　1974
- 大塚初重ほか　「方形周溝墓の研究」『駿台史学』24　1969
- 山岸良二　『方形周溝墓』　ニューサイエンス社　1981
- 山岸良二　「三重県の方形周溝墓」『三重考古』創刊号　1975
- 紅村弘　「弥生土器」『考古学ジャーナル』112号、116号、1975
- 紅村弘　『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版　1981

5．辰ノ口地区の遺構

当遺跡は、行政区画上、多気郡明和町金剛坂字辰ノ口に属する。広大な金剛坂遺跡の県道松阪・鳥羽線の南側にあたる部分の調査で、現況は畑地である。調査面積が狭いために、遺跡の性格を全望できたとは言い難いが、弥生時代から鎌倉・室町時代にかけての遺構を調査区の随所に検出した。

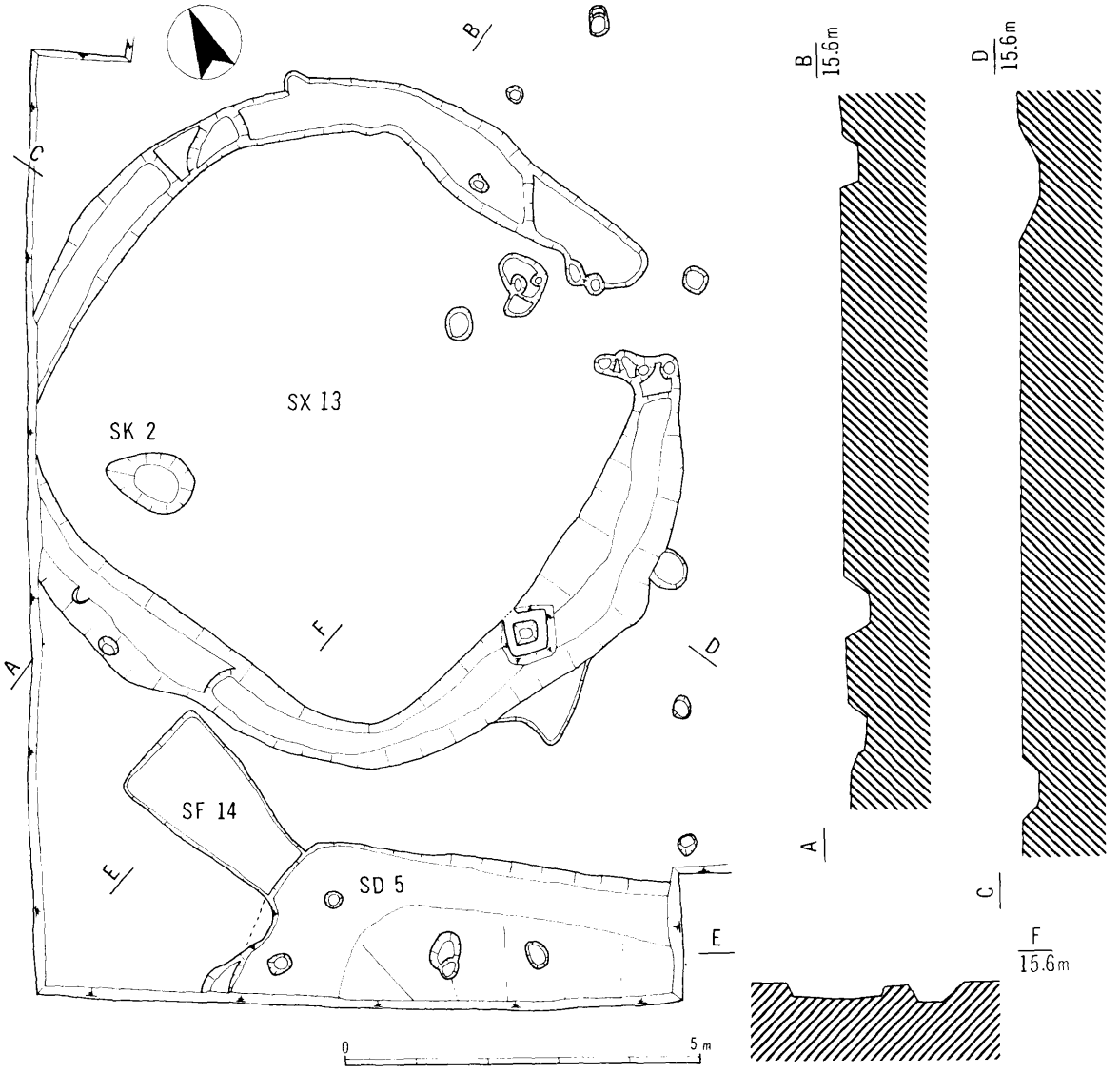
調査区の土層の基本的層序は、第Ⅰ層：耕作土、第Ⅱ層：茶褐色粘質土、第Ⅲ層：黄褐色粘質土（地山）で、第Ⅲ層（地山）までの深さは約60cmである。遺構埋土は、弥生時代から奈良時代にかけては黒褐色土、鎌倉時代の遺構には茶褐色土が充満していた。

調査区で検出した遺構は、弥生時代の溝１条、土坑２基、古墳時代の溝５条、奈良時代の竪穴住居２棟、掘立柱建物２棟、方形周溝状遺構１基、土器焼成坑１基、土坑１基、鎌倉時代の掘立柱建物１棟、土坑１基を検出した。以下に検出された遺構について時代別に概述する。

１．弥生時代の遺構

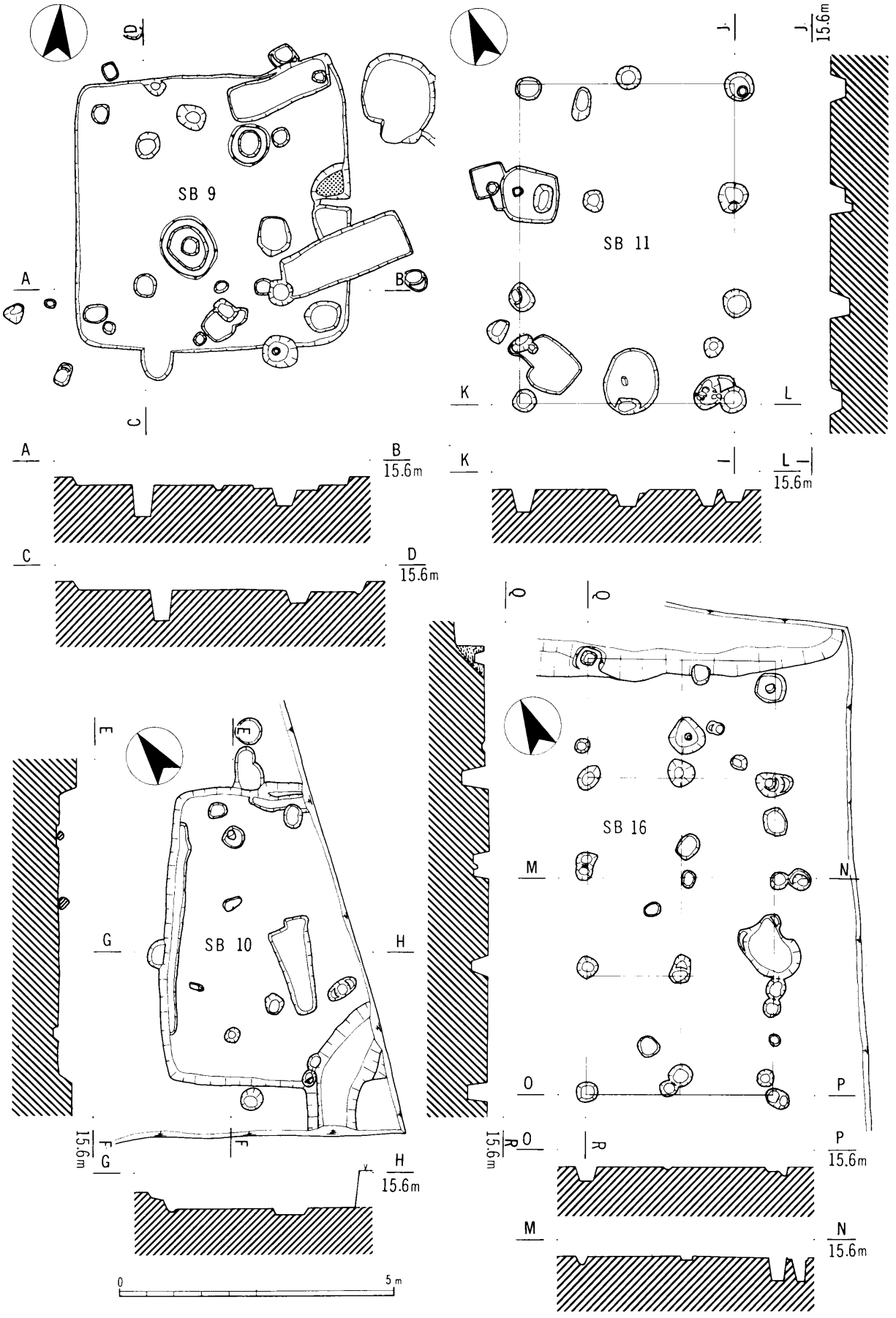
A．土　坑

ＳＫ１　発掘区の北西に位置する。溝幅は、南側で発掘区に切られているため長軸方向は不明だが、短軸方向は約２.３ｍの不定形な土坑である。溝の深さは約20cmである。土坑内より多量の弥生時代前期

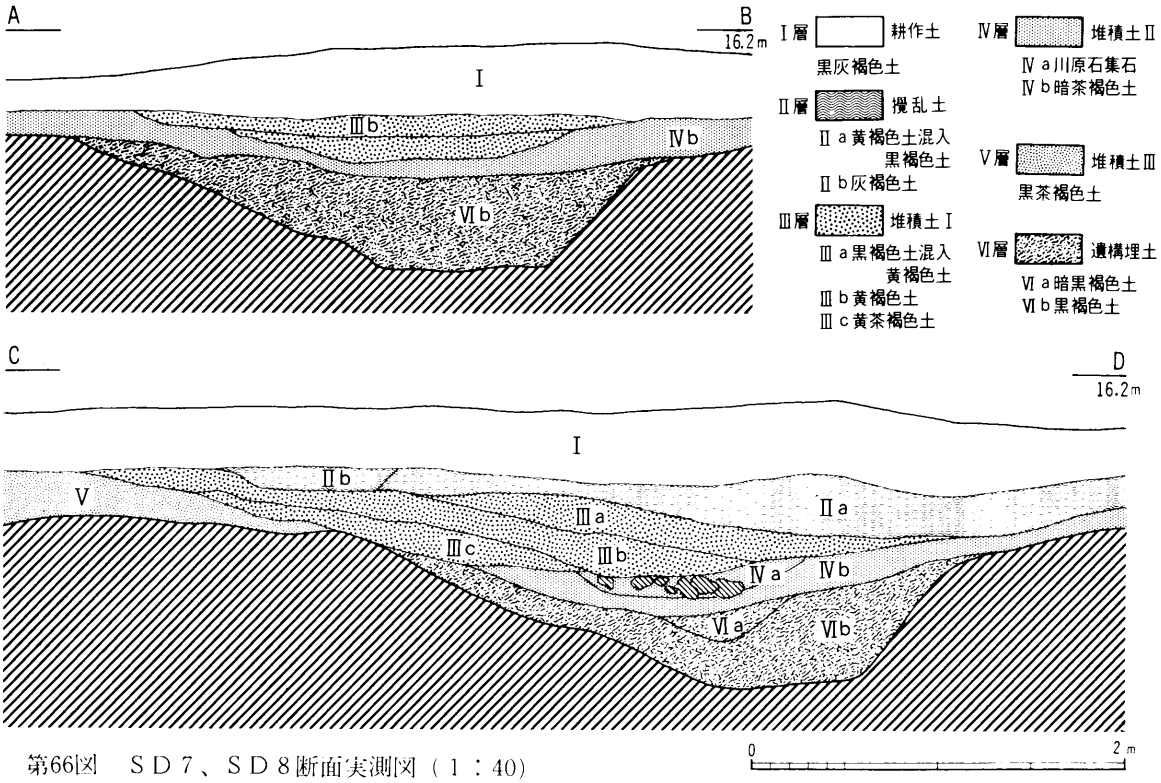


第63図　ＳＸ８、ＳＦ14実測図（１：100）

第64図　辰ノ口地区遺構平面図（1：200）



第65図　竪穴住居・掘立柱建物実測図（1：100）



第66図　ＳＤ７、ＳＤ８断面実測図（１：40）

の壺、甕（６）などの土器片を検出した。

ＳＫ２　方形周溝状遺構ＳＸ13内の西隅に位置し、溝幅は長軸方向で1.3ｍ、短軸方向で90cm、深さ34cmの北東部をややすぼめた楕円形を呈する土坑である。土坑内より弥生時代前期の甕（３）を検出した。

Ｂ．溝

ＳＤ３　ＳＫ１の東側で検出した溝で、溝幅２ｍ、深さ13cmで、溝幅はほぼ一定し、底は概して平坦である。ＳＫ１と同様、前期の壺（８）、甕（１）、蓋などの土器片を多量に検出した。

２．古墳時代の遺構

Ａ．溝

ＳＤ４　発掘区北東隅で検出した溝で、南東から北西方向に延び、北西隅で北方向に曲折する。溝幅は1.8m、深さ35cm前後。出土遺物には須恵器杯身(11)、埴輪片がある。

ＳＤ５　深さ30～45cm。溝幅は調査区内では確認できないが、西側で南方向に曲折する。溝内より埴輪片が出土した。

ＳＤ６　発掘区南東隅で検出した溝で、溝幅は一定しておらず最も狭い処で約90cm、広い処で約1.5ｍである。深さは30～40cm。竪穴住居（ＳＢ10）と重複するが溝内より７世紀代に比定される須恵器高杯（13）を検出し、竪穴住居から奈良時代の土師器が出土していることから竪穴住居にきられる溝と考えた。

ＳＤ７　溝幅1.9～2.4ｍ。深さ50～60cmの大溝で、南部分で直角的に西へ方向を変える。底面は平坦で断面は逆台形を呈するが西側の傾斜はゆるやかである。出土遺物には古墳時代の須恵器杯(10)、杯蓋(12、14)、平瓶や奈良時代の土師器杯、須恵器大甕（27）などが出土した。

ＳＤ８　ＳＤ７と平行する大溝で、溝幅約２ｍ、深さ80cm、溝の底面より約50cm上方で15cm前後の川原石の敷石層を検出した。底面は平坦で、断面は逆台形を呈するが東側の傾斜は西側に対してゆるやかである。出土遺物には、土師器高杯、須恵器甕の土器片や埴輪片などを検出した。

３．奈良時代の遺構

Ａ．竪穴住居

ＳＢ９　東西５.２ｍ、南北５ｍのほぼ正方形状のプランをとる竪穴住居で、深さは地山面から13cmほ

どで東壁中央にカマドをもつ。ピットや土坑を多数床面や周壁に検出したが、主柱穴は規則正しく並ぶ。主柱穴の掘形は楕円形で、深さは不規則であり床面より23～57cmを測る。方位はN８°Wでほぼ東西と南北方向にのる。周壁には周溝はみられなかった。出土遺物には土師器の細片がある。

ＳＢ10　発掘区の南隅、古墳時代の溝ＳＤ６をきる竪穴住居で、東半部分は未掘部分のため発掘区外となる。北辺と西辺には周壁に沿うようにして周溝が残存し、床面より周溝の深さは６～９cmである。壁辺の長さは、西辺で約5.5ｍである。竪穴内より検出した遺物には、土師器甕（23）、須恵器杯などがある。方位はＮ37°Ｅである。

Ｂ．掘立柱建物

ＳＢ11　２間×３間。桁行7.4ｍ、梁行3.9ｍの南北棟建物である。柱間は桁行、梁行とも1.9ｍの等間であり、柱穴の掘形は径50～80cm、深さ30～40cmである。棟方向はN19°Ｅを指す。出土遺物は柱穴内より土師器の細片を検出した。

ＳＢ12　発掘区の北東中央に位置し、梁行は２間であるが、桁行は北半部が発掘区外に延びるため不明である。桁行、梁行とも1.5ｍの等間である。柱掘方は径30～50cm、深さ20～40cmで柱穴内より土師器片を検出した。棟方向はN26°Ｅを指す。

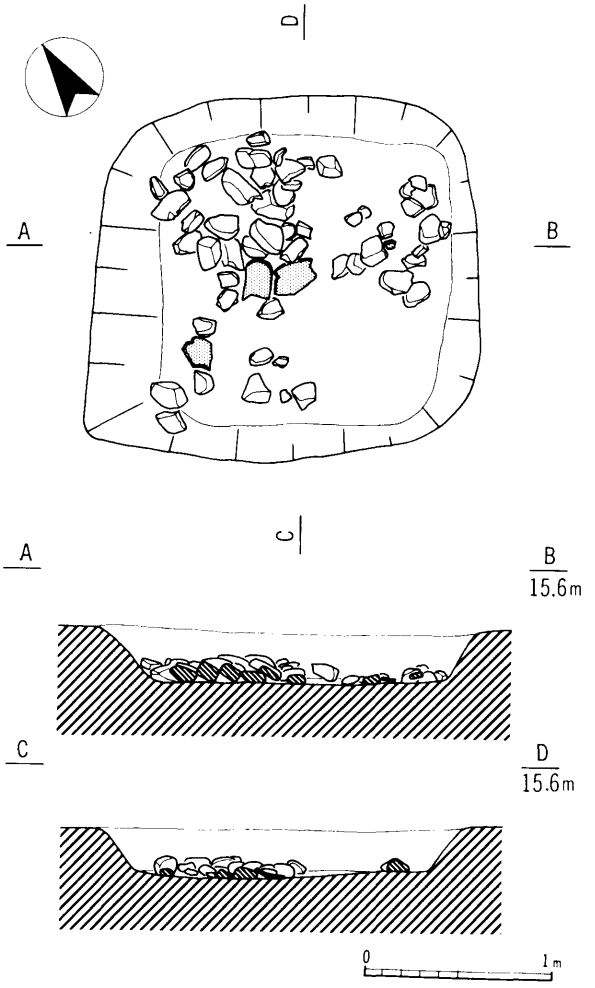
Ｃ．方形周溝状遺構

ＳＸ13　東西9.1ｍ、南北9.5ｍ。周溝の深さは、北辺で20～30cm、西辺で25～35cmである。周溝埋土より土師器椀（19、20）、土師器長胴甕（24、25）などが出土していることから、奈良時代の方形周溝状遺構と考えた。溝の断面は、四辺ともほぼ逆台形を呈する。

Ｄ．土器焼成坑

ＳＦ14　長径2.6ｍ（現存長）底径1.5ｍ。深さ15～20cmで二等辺三角形を呈し、ほぼ平坦な床面に対して側壁は垂直に立つ。先端部はＳＤ５と切り合う。焼土は側壁から床面にかけて赤褐色に良く焼けて硬質化している。方位はＮ160°Ｅで底辺側を北方向に向ける。焼成坑内からの遺物は極めて僅かで、床面焼土直上より硬質化した土師器杯（21）のほかは、若干の細片を検出したのみであった。

Ｅ　土　　坑



第67図　ＳＫ16実測図（１：40）

ＳＫ15　長径3.2ｍ、短径2.4ｍ、深さ50cmの不定形な土坑内より土師器杯（19）がある。

４．鎌倉時代の遺構

Ａ　掘立柱建物

ＡＢ16　２間×４間。柱通りは不揃いであるが、桁行7.9ｍ×梁行3.4ｍの総柱の南北棟建物である。桁行は1.8ｍの等間で、梁行は2.2m＋1.8m＋1.8m＋2.2mとなる。柱穴の掘形は径30～55cm、深さ20～50cmで円形を呈する。棟方向はN26°Ｅを指す。東側は未掘部分であるが、東側に伸びる可能性も考えられる。

Ｂ　土　　坑

ＳＫ17　一辺２ｍ四方の隅丸方形の土坑で、深さ30cmを測る。坑内には茶褐色土の埋土に径15cm～25cmの川原石が散在し、川原石の間には土師器皿(30)や土師器鍋（27、28、29）の土器片がみられた。人骨片や焼土、炭化物は検出されなかったが、土師器

鍋を蔵骨器に転用した平地の中世墓の可能性も考えられる。

6．辰ノ口地区の遺物

出土した遺物は、弥生時代の壺、甕、古墳時代の土師器、須恵器、埴輪、奈良時代の土師器、須恵器、鎌倉時代の土師器に大別される。

1．弥生時代の土器

壺（8）「く」の字状に外反する胴部上半から頸部にかけての破片で、頸部には2条の凸帯がめぐる。胎土は砂粒を多く含むが良好で、色調は淡褐色を呈する。SD3より出土。

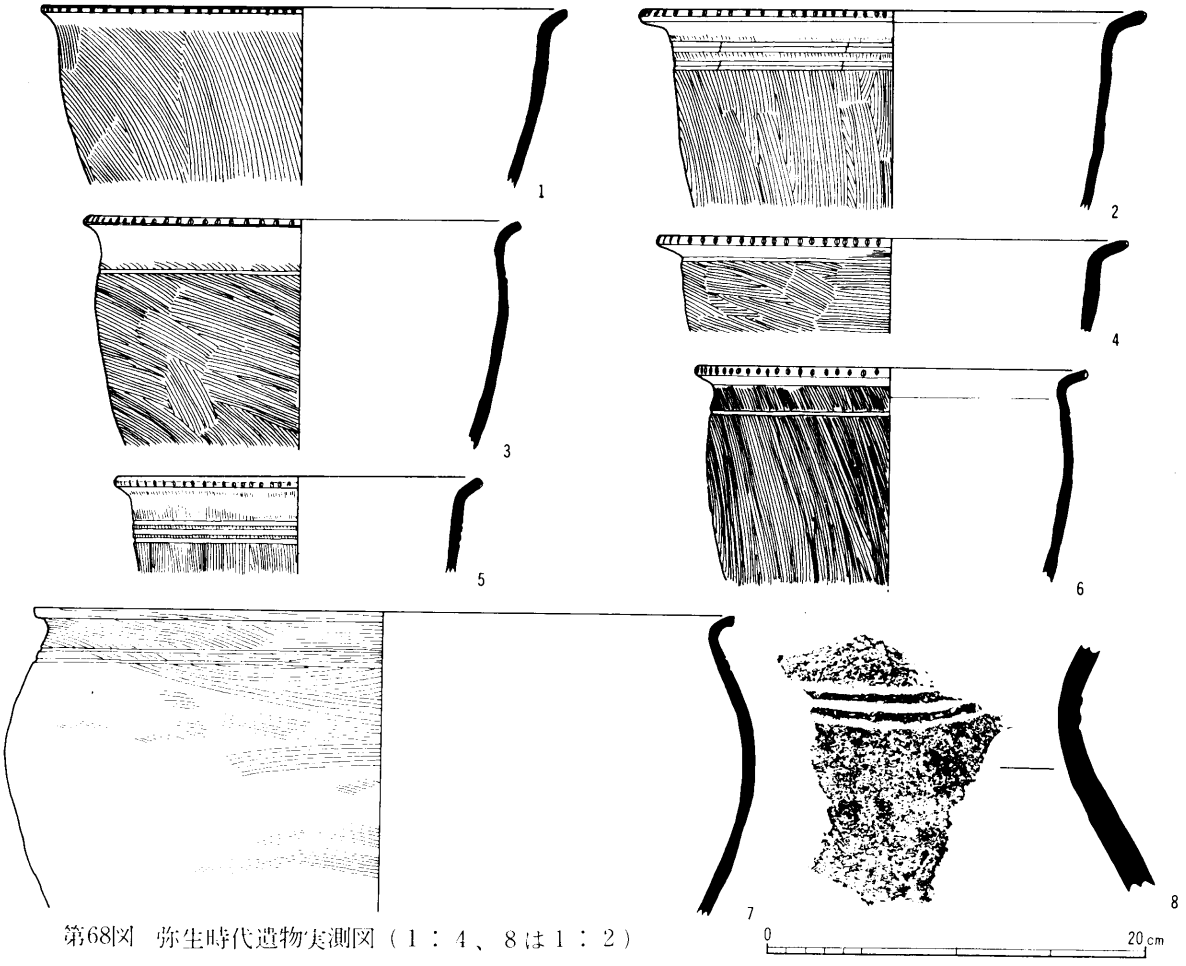
甕（1～6）すべて口縁部から肩部の断片で、接合によって完形になるのは見られなかった。口径は19～28cm前後。口縁部がゆるく外反するもの（1、2）と「く」の字状に外反するもの（3～6）に大別できる。いずれも口唇部に刻目をもち、頸部から胴部全体に刷毛目をもつ。頸部には篦描き沈線をもたないもの（1）、1条のもの（3・4・6）、3条のもの（5）がある。（2）は半截竹管により静止しながら沈線を施す甕であるが砂粒を含み、焼成が悪く脆弱である。色調は（1）は淡褐色、他は赤褐色を呈す。

鉢（7）口径31cm前後の大きな鉢である。張り出した胴部より甕同様に「く」の字状に外反し、口縁端部外側に面をもつ。胴部より口縁端部にかけて横方向に刷毛目が施され、肩部に2条の篦描き沈線がめぐる。胴部下半に黒斑がみられる。色調は赤褐色を呈する。包含層より検出した。

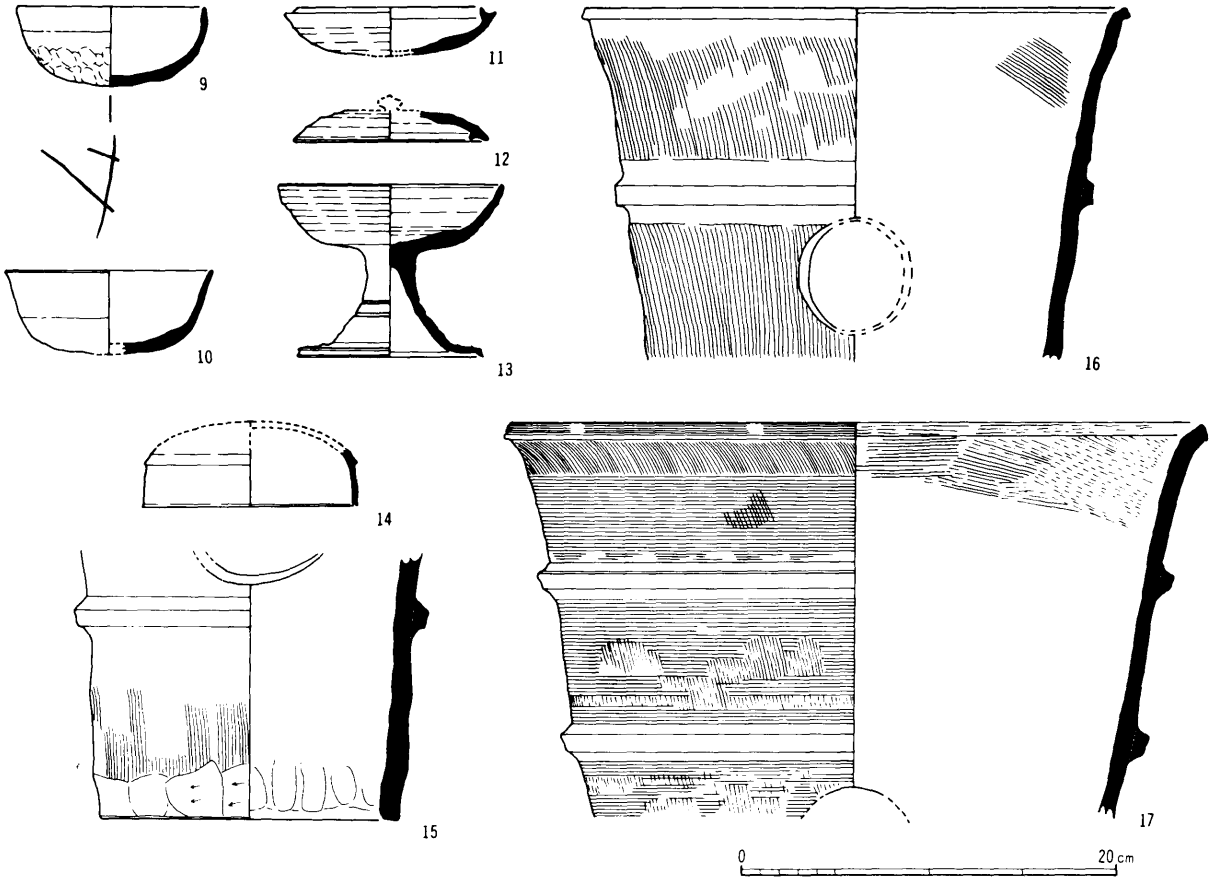
2．古墳時代の土器

土師器

椀（9）口径10cm、器高4.3cm。丸味をおびた



第68図　弥生時代遺物実測図（1：4、8は1：2）



第69図　古墳時代遺物実測図（１：４）

底部より口縁部が垂直に立ち上がり、端部を丸くおさめる。口縁部内外面をヨコナデ、底部外面にはヘラ記号がみられる。胎土、焼成とも良好で色調は淡橙色を呈する。ＳＸ13より出土。

須恵器

椀（10）　口径11cm前後。丸味をおびた底部より口縁部をわずかに外反させて端部を丸くおさめる。口縁部内外面をヨコナデし、底部外面はヘラケズリ、内面をナデている。内面にヘラ記号がみられ、胎土は緻密で焼成も良好。色調は淡白灰色を呈する。ＳＤ７より出土。

杯身（11）　口径６cm前後。受部はやや上方に引き出され、口縁部は短く内傾する立ち上がりをもつ杯身形態の終末に近い形態である。胎土は堅緻で焼成も良く、色調は淡灰色を呈す。ＳＤ４より出土。

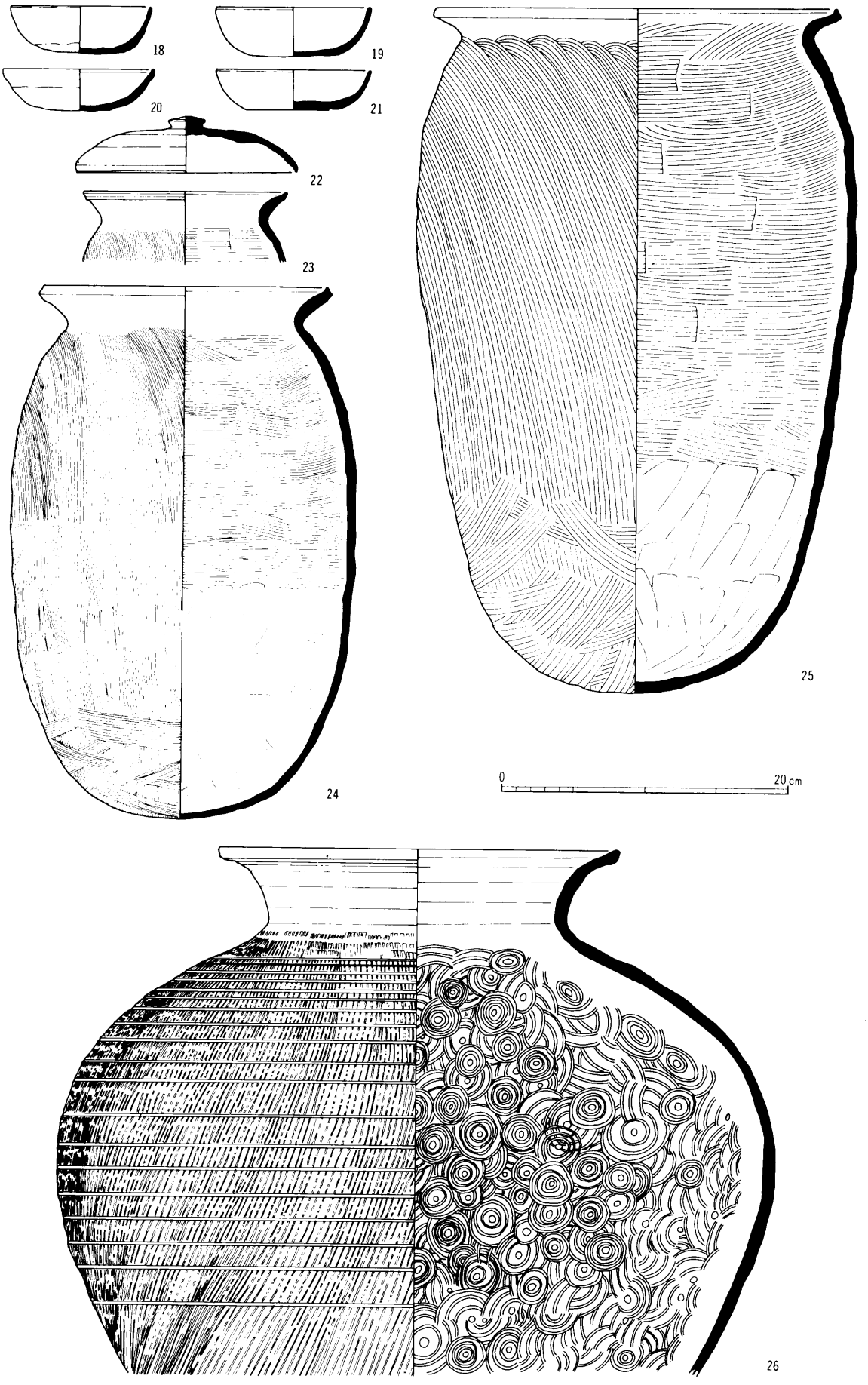
杯蓋（12）　天井部を欠くが、宝珠つまみをもつと考えられる杯蓋で、口縁部にかえりをもつ。口径11cm前後。３分の１程の破片で胎土は堅緻で焼成も良好である。色調は淡灰色でＳＤ７より出土。

高杯（13）　口径12cm、器高９cm、脚部高5.5cm、脚部底径10cm。杯部の口縁部は外上方にのびる。脚部は「八」の字形に広がり脚端部近くで水平になり、垂下して端部を丸くおさめる。脚部中央に２条の沈線がめぐる。胎土は細砂粒を含み、焼成は良く色調は淡灰色を呈する。ＳＤ６より出土。

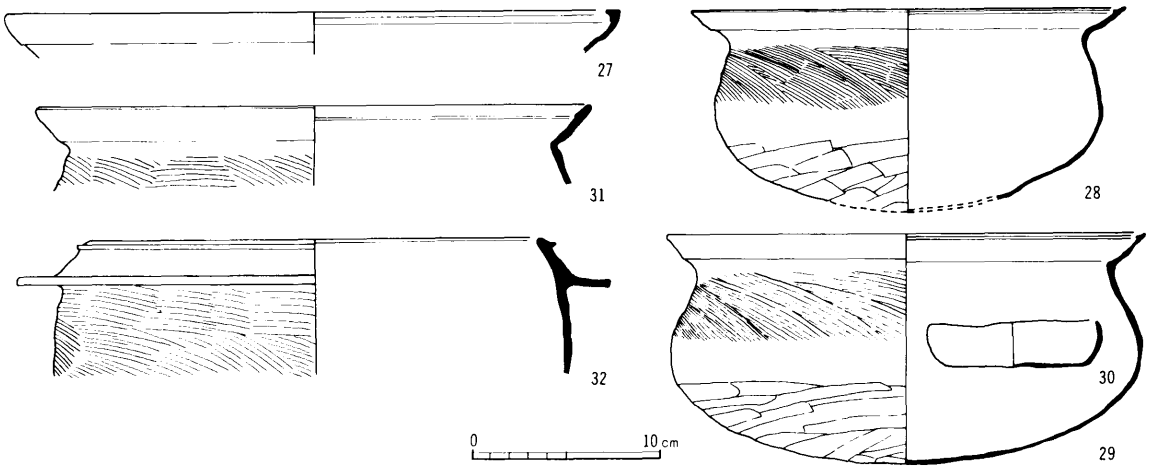
杯蓋（14）　口縁部はほぼ垂直に立ち、口縁部と天井部の境には明瞭な稜がみられる。天井部を欠くがやや平坦な天井部になると思われる。口径は復元長で11cm前後である。胎土は緻密で色調は灰白色である。ＳＤ７より出土。

埴　輪

円筒埴輪　15～17）　（15）は底部のみで接合により完形にはならなかった。復元による底径が16cmほどで、外面には縦方向に刷毛目調整され、底部は内外面ともユビオサエ、外面はその後横方向にヘラケズリされている。箍が断面「M」字状でヨコナデにより貼り付けられ、箍の上には円形の透孔が施される。(16）は円筒部から口縁部にかけての円筒埴輪で、外面には縦方向の刷毛目が施されるのみである。箍は（15）と同様に「M」字状に貼り付けられ箍の



第70図　奈良時代遺物実測図（１：４）



第71図　鎌倉～室町時代土器実測図（1：4）

下に楕円形の透孔が施されている。口径28cm前後。(17)は口径37cm前後。口縁部は外反ぎみにのび、口縁端部外側に面をもつ。外面は縦方向の刷毛目を施したあと横方向に休止せずに刷毛目調整している。内面は口縁部より円筒上半を主に横方向に刷毛目を施し、以下をナデている。箍の貼りつけは(15)、(16)と同様で、第二段目の箍の下に楕円形の透しがはいる。(15)、(16)、(17)とも胎土は良好で色調は黄褐色である。(15)はＳＸ13の周溝内より出土し、(16)、(17)はＳＸ13の南東周辺より一括出土したものである。

3．奈良時代の土器

土師器

杯（18～21）　口縁部を外上方にのばして端部を丸めるもの（18、19、21）と外上方にのばした口縁部からわずかに上方に立ち上がり端部を丸めるもの(20)にわけられる。すべて口縁内外面をヨコナデし、底部外面は未調整、内面はナデられている。いずれも口径11cm内外、底径2.0～3.4cm。(18)は底部にユビオサエの痕がみられ、(20)は磨滅が著しい。(21)は土器焼成坑の床面焼土直上より検出したものである。

甕A（23）　球形に近い体部から口縁部を外反させ端部を上方につまみあげる甕で、口縁端部のヨコナデのため外側が凹む。器面の調整技法は体部外面に縦方向、内面に横方向の刷毛目を施す。色調は淡褐色を呈す。胎土、焼成とも良好で色調は淡赤褐色である。ＳＢ10より出土。

甕B（24、25）　通称長胴甕と呼ばれる長胴の甕で、口縁部及び底部の形態は甕Ａと同様であるが、口径は（24）が20cm、(25)が28cm前後と甕Ａに比べ大きくなる。調整技法は、体部外面は縦方向、底部外面は不定方向、内面胴部上半に横方向の刷毛目を施し、下半はヘラケズリする。(25)は内面口縁部まで刷毛目がみられ、(24)よりも刷毛目は粗い。(24)は淡褐色、(25)は茶褐色で、(24)、(25)ともＳＸ13より出土した。

須恵器

杯蓋（22）　扁平な宝珠つまみをもつ杯蓋で、平坦な天井部から口縁部をゆるやかに内弯させ、端部を短く垂下させる。天井部を中心として約⅓程をロクロヘラケズリする。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡灰色を呈す。ピットより出土。

大甕（26）　口径28cm前後。胴部最大径は51cmにもなる甕で、丸味をおびた胴部から口縁部を「コ」字状に外反させ、口縁端部を肥厚させる。調整技法は胴部外面全体に平行叩き目を施したあと横方向のナデ痕跡が線状に数条胴部をめぐる。胴部内面は、同心円文を施す。色調は青灰色で、ＳＤ７より出土。

4．鎌倉～室町時代の土器

土師器

皿（30）　口径8.8cm。器高2.4cm。口縁部は内弯気味に直立し、端部を丸くおさめる。口縁部内外面をヨコナデ、底部外面をユビオサエのあとナデつけている。器壁は底部で最も薄く２mm前後となる。色調は淡黄褐色を呈する。ＳＫ16より出土。

鍋（27、28、29、31）　外反する口縁部より端部を内側に折り曲げた鍋で、通称伊勢型鍋と呼ばれる。

口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面上半は粗い刷毛目を斜めに施し、下半から底部にかけてはヘラケズリされる。内面は平滑にナデられ、底部外面に煤が付着する。(28) は口径25.2cm、器高は12.3cm、(29) は口径22.6cm。器高10.7cmで器壁は底部で2mm前後と非常に薄い。(27) は折り返えされた口縁端部上面に面をもつ。色調はおおむね淡褐色を呈し、(27)(28)、(29) はＳＫ16より出土。(31) は包含層より出土した。

羽釜形鍋 (32)　口径24cm前後。内傾する口縁部をもち端部は外側に折り曲げられ、ヨコナデにより凹状の面をもつ。体部外面は3～4本/cmの粗い刷毛目を施し、内面はナデで付上げられている。色調は淡褐色である。包含層出土。

7．小　　結

調査の結果、弥生時代から中世までの遺構を検出することができた。遺構は調査区の各所に散在し、周辺部に拡がる可能性をもつ。ここでは遺構と遺物について若干の考察を加えて遺跡の性格に迫りたい。

1．遺構について

ＳＤ７　ＳＤ８の土層断面（第65図）は、ＳＤ８の第Ⅱ層攪乱土、第Ⅴ層堆積土Ⅲを除くと第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層堆積土Ⅰ（黄褐色土を中心とする層）、第Ⅳ層堆積土Ⅱ（暗茶褐色土を中心とする層）第Ⅴ層遺構埋土(黒褐色土)と基本的に土層の層序を同じくする。またＳＤ７、ＳＤ８の中間より調査区南側にトレンチを入れ検出された溝状遺構の層序とも同一であった。さらにＳＤ７は、その南側部分で方向を西方へ変える。このことはトレンチで検出した溝状の遺構と合せてＳＤ７、ＳＤ８は大きく方形に巡る周溝であると考えられ、その一辺は20mを越える。ＳＤ７、ＳＤ８やトレンチにより検出された溝状遺構より埴輪片や須恵器蓋（14）が出土しており、また埴輪片は遺構周辺より多量に出土している。このことは、この方形周溝が削平された古墳の周溝である可能性をもつと推測され、時期を埴輪の年代におくと６世紀前葉から中葉（後述）、また須恵器蓋（21）の時期は、ＴＫ47、(５世紀末から６世紀初頭)の時代[1]が考えられ、後期の古墳と推測される。このような例としては、古里遺跡Ｄ地区のＳＸ42[2]があげられる。

次に１基のみであるが、調査区の南西隅に検出された土器焼成坑は、坑内よりの遺物が土師器の小片しかなく、その調整技法より奈良時代とした。県下の焼成坑は、斎宮跡（３基[3]）をはじめ史跡水池土器製作遺跡（16基[4]）堀田遺跡（20基[5]）のほか６遺跡、62基に及ぶ焼成坑が確認されている。その分布状況は名張市鴻之巣遺跡、(１基[6])、四日市市落河原遺跡、（３基[7]）を除く約94％が明和町に集中している。

2．遺物について

弥生時代前期の土器は、削り出し突帯をもつ壺(８)もあり若干古相を帯びるものもあるが、おおむね第Ⅰ様式の新段階に比定される。甕の多数は赤褐色を呈しており、いわゆる「亜流の遠賀川式土器」、紅村弘氏に言う「金剛坂式」と呼ばれる[8]一群の土器である。赤褐色を呈する弥生前期の土器は、昭和46年度に調査された当遺跡[9]の他に、納所遺跡[10]や上箕田遺跡[11]等より出土しており、時期的には前期後半より最末段階に出現し、尾張地方より伊勢湾西岸に分布する土器である。

埴輪は、すべて円筒埴輪で完形品になるものはなかった。調整技法としては、縦位に刷毛調整したあと、横位に途中休止せずに一度に一回転させるＣ種ヨコハケを施している。また透孔は、すべて円形で三角形や方形のものはない。箍は断面「Ｍ」字状を呈している。以上の諸点より川西編年でいう第Ⅴ期（６世紀前葉から中葉[12]）に位置づけたい。

遺跡の発掘調査は、浅尾・宮田が行ない、報文の執筆については、宮田があたった

（浅尾悟・宮田勝功）

〈註〉

① 田辺昭三「陶邑古窯跡群Ⅰ」　平安学園考古クラブ　1966

② 由沢義貴他『古里遺跡発掘調査報告 ―Ｃ地区―』三重県教育委員会　1973

ＳＸ42は、規模としては18.0×(18.0)、溝幅2.0～3.0m、深

さ25～35cmを測り、奈良時代の溝や鎌倉時代の溝に掘りぬかれているためその時代の遺物とともに須恵器杯、甕、土師器椀、甕などが出土している。さらに結語では「周溝から出土した土器の型式からみて、5C末～6C初に作られたことが知られるが、盛土、主体部とも確認できなかった。―中略―方形墳の封土が全く削平され、墳麓の周溝だけが検出されたとも考えられる。」と結んでいる。

③ 『史跡　斎宮跡発掘調査概報』三重県教育委員会　三重県斎宮跡調査事務所　1979、1982

④ 「水池土器製作址」『斎宮跡発掘』　斎宮研究会編　1979

⑤ 「堀田遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1981

⑥ 『三重県埋蔵文化財年報　14』　三重県教育委員会　1984

⑦ 「落河原遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1973

⑧ 紅村　弘「東海西部」『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社　1983

⑨ 山沢義貴、谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』　明和町教育委員会　1971

⑩ 伊藤久嗣　『納所遺跡 ―遺構と遺物―』　三重県教育委員会　1980

⑪ 仲見秀雄、真田幸成、大場範久『上箕田 ―弥生式遺跡　第二次調査報告』　1970

⑫ 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64号第2号　1978

Ⅳ　阿山郡大山田村　平松代遺跡

1．位置と環境

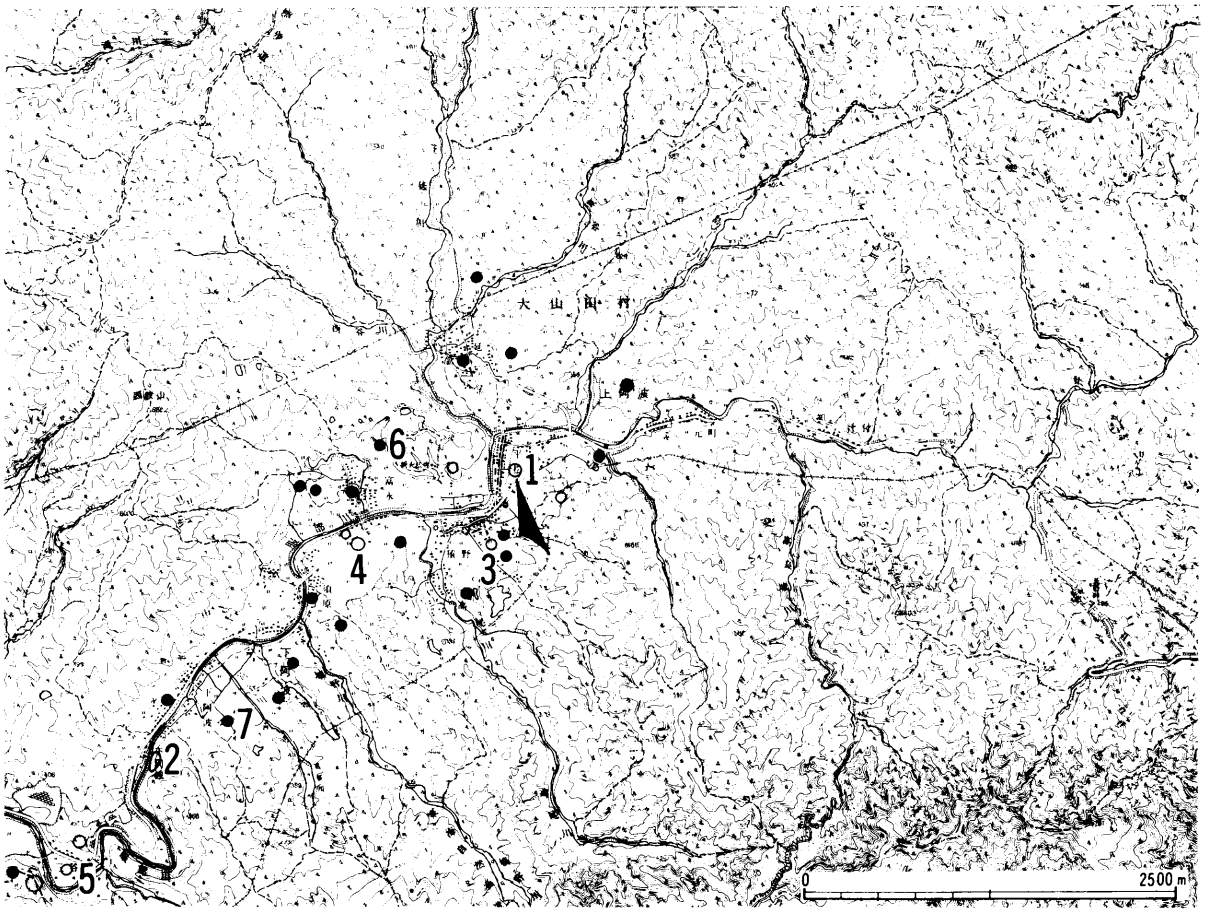
布引山地の鞍部の一つ、長野峠を西へ越えると、そこは上野盆地の最東端部大山田村である。木津川水系の一支流、服部川の最上流域に形成された河岸段丘を利用して、上阿波、下阿波の集落が形成されている。周囲を500m～700mの山に囲まれ、村内小盆地の観を呈する所である。

近世、伊賀街道四宿の一つとして発達した上阿波元町は、再三の大火に見舞われ、後に宿場は平松に遷る。元禄9年（1696年）8月のことである。服部川はこの平松で鉤の手に屈曲し約300m南流するが、宿場はその左岸に沿って町立てされた。

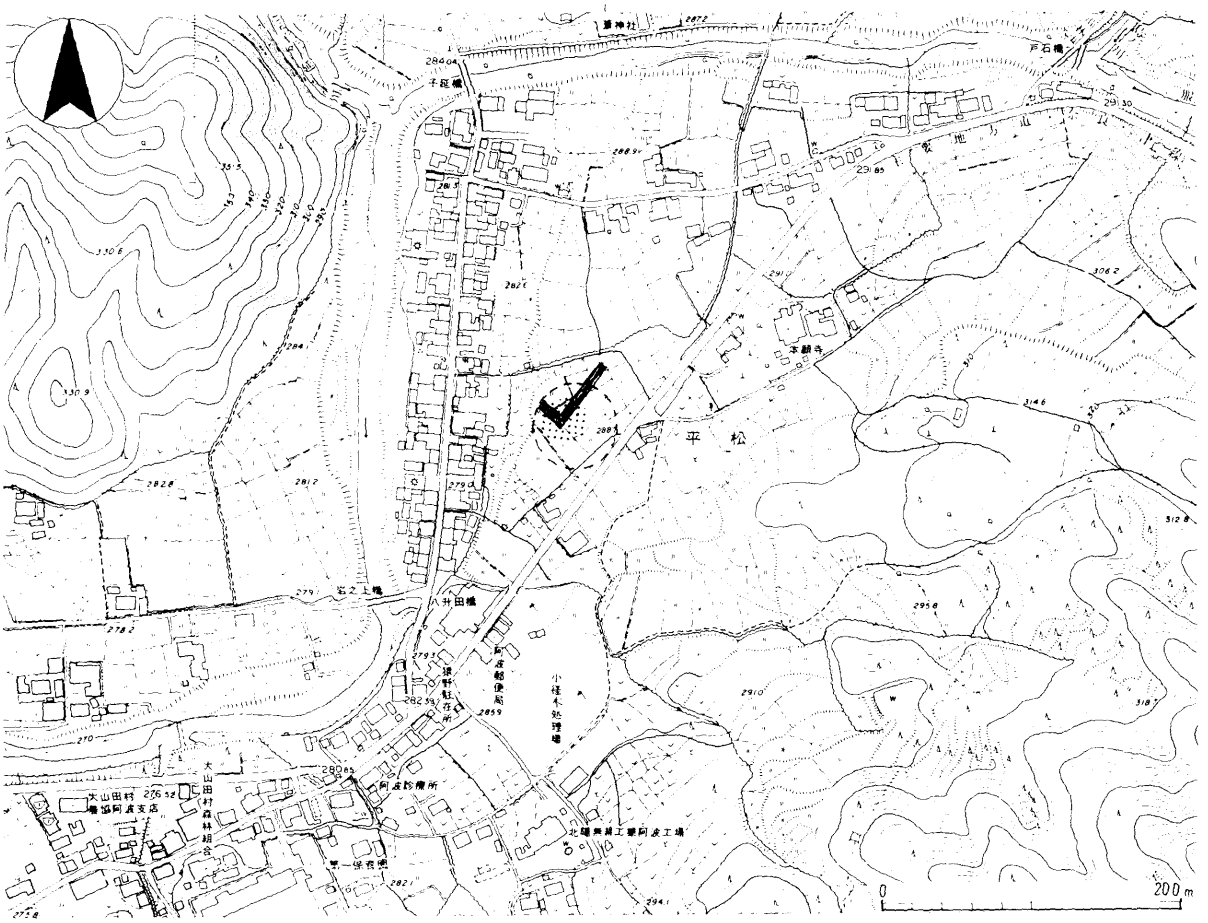
当該遺跡(1)は、ここ旧平松宿に東接する河岸段丘上、標高280m前後の水田下にある。阿山郡大山田村大字上阿波字平松代である。

かつて村内の布引山地尾根上（笠取山北方）でサヌカイト製有舌尖頭器が出土しており、この地域の歴史の古さを物語っている。縄文時代の土器の出土は、管見によれば3例ある。西谷遺跡、川久保遺跡（2）、永井氏城跡で、いずれも前期末～中期以降に属し、今回当該遺跡出土の早期押型文土器が、今のところ当村最古の土器であろう。

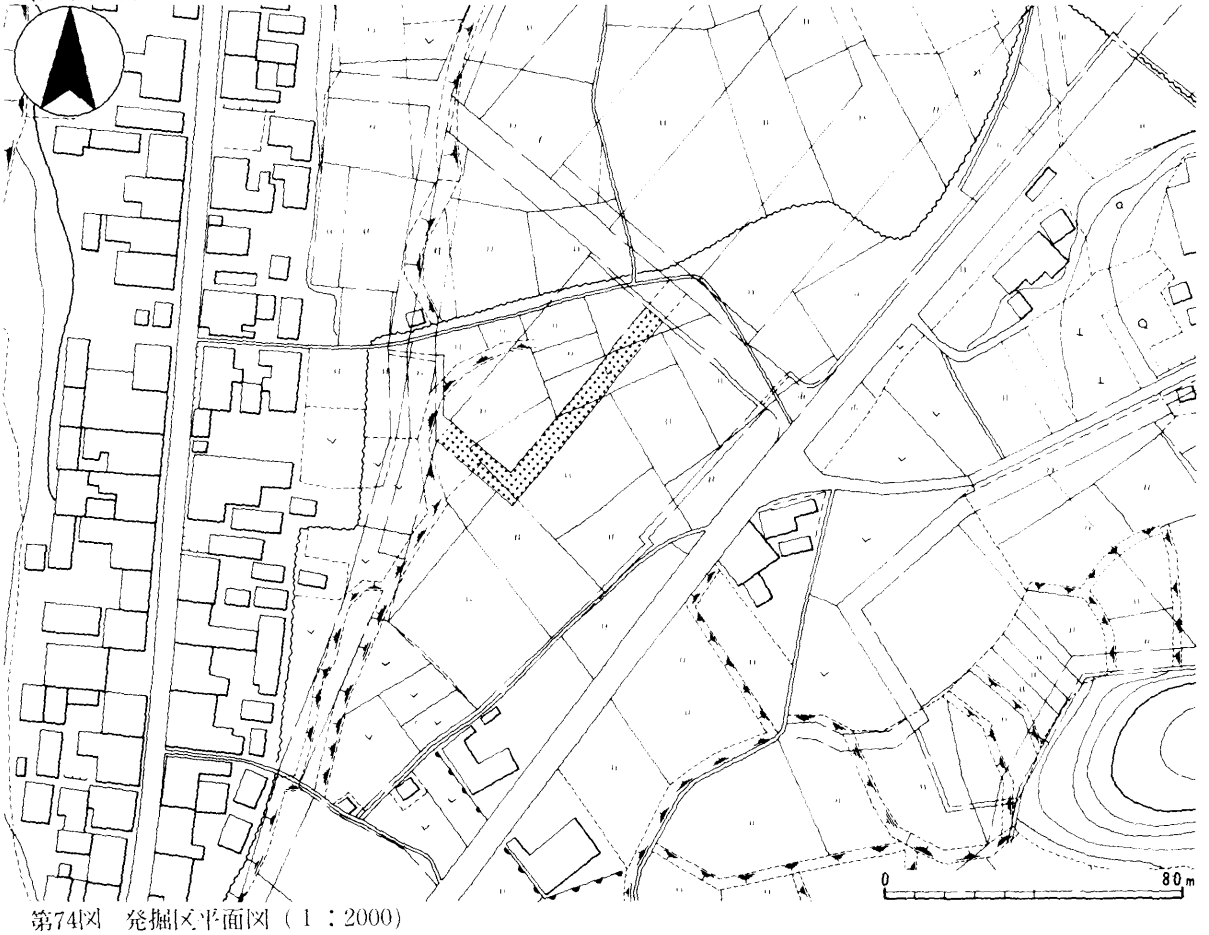
その他、大森遺跡（3）、北切遺跡（4）、三谷遺跡(5)、田中遺跡、歌野遺跡、西沖遺跡など弥生時代以降中世に至る各時期の遺跡がある。上阿波、下阿波



第72図　遺跡位置図（1：50000）



第73図　遺跡地形図（1：5000）



第74図　発掘区平面図（1：2000）

には中世城館も多く、現在までに野中城（７）をはじめ19館が知られているが、中には風呂谷館跡（６）のように発掘調査後ただちに破壊されて、すでに幻と化したものもある。

２．出土遺物

基本層序は、第一層が暗灰褐色耕作土で、第二層は黒褐色包含層であり、更にその下層が黄褐色の地山である。耕作土上面から地山面まで約60cmである。

発掘区内では遺構は検出されず、包含層の最下層部から出土した僅かな遺物について紹介しておく。

Ⅰ．土器　土器は施文具によりネガティヴな押型文土器（１～７）と縄目文土器（８）に分けられる。

押型文土器のうち（１）～（６）までは格子目文が見られる。（１）は口唇部に刻目をもち、口縁部に径約１cm、長さ約3.2cmの施文原体を横位に回転させたと思われ、頸部に縄文刺突を施している。器壁の厚さは0.8～1.0cmである。（２）は（１）より薄手で0.4～0.7cm、頸部の刺突までは確認できないが、口唇部から口縁部の技法は（１）に準じよう。いずれも、口縁部が外反する大川式に類似の深鉢と考えている。

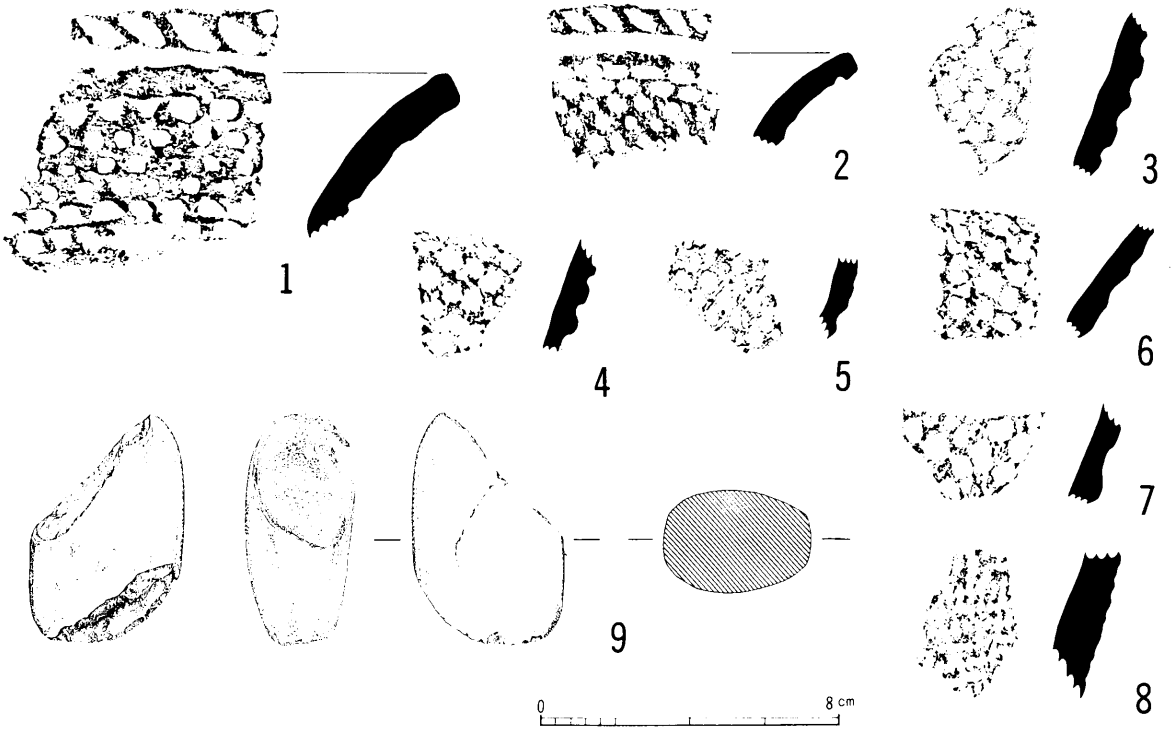
（３）～（５）は胴部の破片と思われるが、（６）については、外弯するカーブから見て深鉢の底部に近い部分ではないかと推定される。

（７）は横位の市松文が施されており、また（８）は回転縄文によって施文されている。

（１）～（３）は暗茶褐色を帯び、（４）は淡褐色、（５）は橙褐色、（６）～（７）は淡黄褐色、（８）ははは茶褐色を呈する土器である。外面に煤の付着が確認できる（２）と（４）の内面はとりわけ凹凸なくきれいに仕上げられている。これが所謂「つぶし」の技法によるものかどうかは筆者には判断できない。

Ⅱ．石器　図中に示したようなすり石が１点出土している。割れているが、縦約13cm、横約８cm、厚さ約5.4cmであったと推定される。丸味のある石鹸形のようである。参考までに、重さは現状で約685ｇである。

石器にはこの他にサヌカイトの剥片も採取しているが割愛する。



第75図　遺物実測図　拓影（１：２）

3．結びにかえて

伊賀において、縄文時代早期に属する遺跡は、名張川流域では白早稲遺跡、檀・柏原遺跡（以上名張市）、木津川流域の上小山遺跡（島ヶ原村）、池ノ側遺跡（上野市）、八王子遺跡（青山町）、久米川流域では和田遺跡（上野市）、柘植川流域で構出遺跡（伊賀町）、が知られている。いずれも木津川の本流・支流域に位置しており、今回はその中の服部川上流域での新発見遺跡である。

上記の中では最も下流に属する上小山遺跡の標高は130ｍで、その他は標高210ｍ～300ｍの間に位置し、いずれも丘陵地、舌状台地、あるいは河岸段丘上に立地しているようである。

白早稲遺跡以外では全て押型文土器の出土をみている。ここに紹介した数点の土器片も所謂大川系の縄文早期に属するもので、（１）～（７）はいずれも田戸下層併行の押型文土器であろう。絶対量が少ないので、比較にはならぬが、ここに見る格子目文には、例えば檀・柏原遺跡で見られた菱形状のものはなく、全て円形乃至は方形に近い形のネガティヴな押型文であり、東庄内Ａ遺跡や鐘突遺跡などで見られるような楕円形のものもない。

伊勢側ではすでに東庄内Ａ遺跡（鈴鹿市～亀山市）や射原垣内遺跡、鐘突遺跡（松阪市）などで比較的多量の縄文早期の土器が出土しており、樋ノ谷遺跡（度会郡大宮町）では県下初例の縄文早期の竪穴住居跡も発見されている。伊賀においては未だそのような例は聞かない。今回の発掘区は狭く、遺構はなく、遺物も少ないが、周辺の水田下には遺構や更に多量の遺物が埋蔵されている可能性も十分予想されるところではある。

大山田村だけに限定すれば、縄文土器出土遺跡はこれで４例目となった。下阿波の川久保遺（後期）は当遺跡よりやや下流の同じ盆地内にあり、平田の西谷遺跡（前期末～中期）、出後の永井氏城跡（晩期後半）はもう少し西下流の山田盆地内にある。この中で西谷遺跡は土器の出土量が比較的多い方で、30点と報告されているが、いずれにもせよ、伊賀における縄文時代の遺跡は大概小規模なものが点在するという指摘は、ここにおいても是とせねばならないであろう。

（田阪　仁）

〈参考文献〉
奈良県教育委員会『奈良県文化財調査報告』第二集、「大川遺跡」1958年。
鎌木義昌編『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』　河出書房　1967年
三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』「東庄内Ａ遺跡」その他。　1970年。
山本雅靖「木津川ルートとその遺跡―縄文時代の伊賀地方―」『伊賀盆地研究会々報４』1978年所収　など。
松阪市教育委員会『鐘突遺跡発掘調査報告』　1981年。
大山田村教育委員会『大山田村史』（上）　1982年。
青山町教育委員会『青山町史』　1983年。
島ケ原村史編纂委員会『島ケ原村史』　1983年
三重県教育委員会『歴史の道調査報告伊賀街道』1983年。
竹内理三他編『考古遺跡・遺物地名表』原始・古代編，柏書房　1983年。
後藤和民「縄文土器をつくる」　埴原和郎編『縄文人の知恵』小学館　1985年所収。

V　上野市高山　青ノ代遺跡

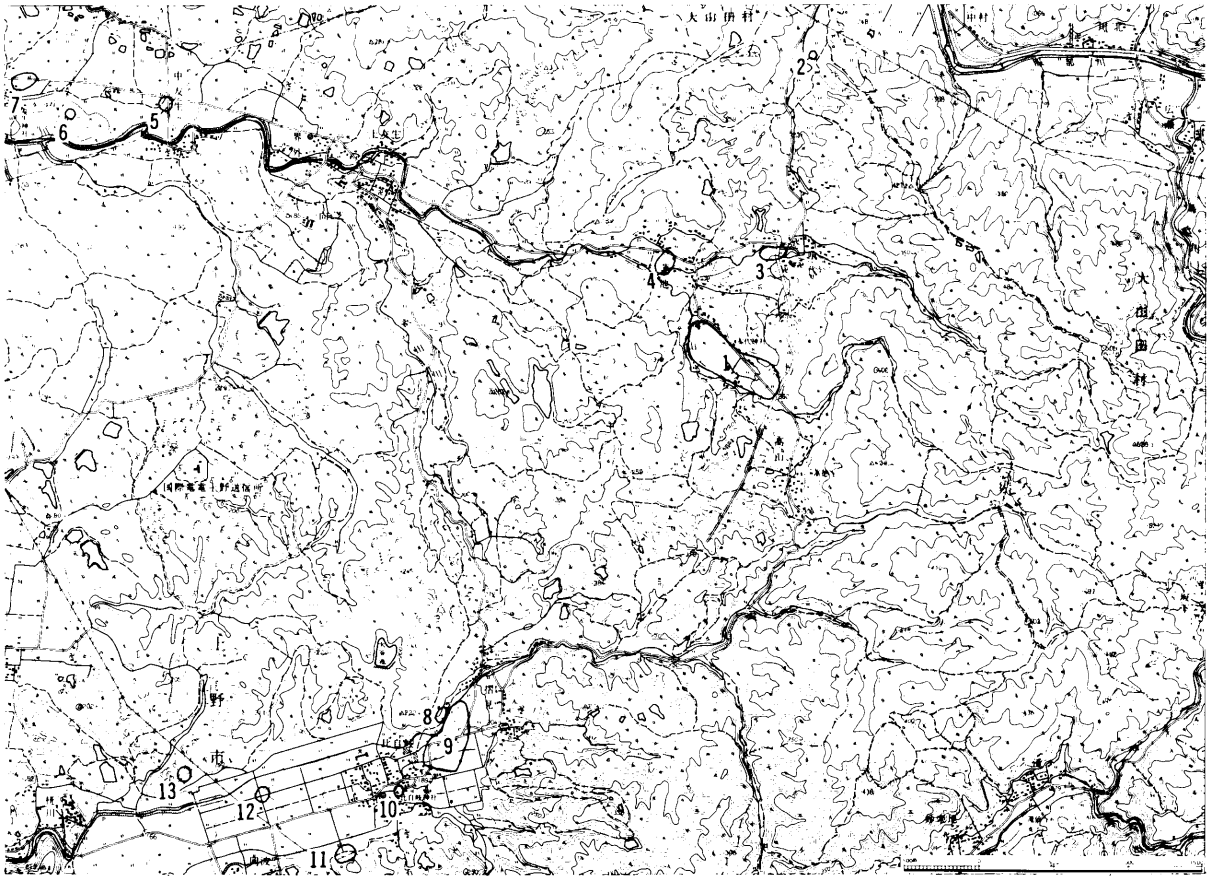
1．位置と歴史的環境

東名阪自動車道の友生インターチェンジから東へ約6kmで上野市蓮池に至る。小盆地をいくつも持つ上野盆地の東部、高山東山中に源を発する高山川が小さな蛇行を繰り返しながら西流・北流し、蓮池で久米川と合流する。青ノ代遺跡(1)は、この高山川右岸の谷底平野に位置する複合遺跡である。現状は水田と畑地であり、行政上は上野市高山字青ノ代から同市蓮池字青ノ代にまたがっている。高山から蓮池にかけて棚田が続くが、標高は高所で256m前後、低所で224m前後を測る。比高がきつく、低所の水田では湧水の激しさに対して、暗渠排水も設けられていた。

伊賀国は総じて城館の多い所で、近隣の喰代、蓮池、上友生、比自岐地内におよそ30の城館が分布している。[1] ここ高山地内にも従来から中世城館として数館が報告されている。[2]

弘安元年（1278年）11月の伊賀喰代厨申状に見える高元右馬入道は高山村の在地土豪と推定されており、[3] 従って、少なくとも13世紀代の遺構、遺物があるいは当該遺跡から出土する可能性も十分あると当初から予想された。

なお、周辺地域ですでに発掘調査した遺跡を一瞥しておくと、高猿6号墳（2）、馬場遺跡（3）、蓮池代遺跡（4）、岸之上遺跡（5）、渕遺跡（6）、大門遺跡（7）、下り合遺跡（8）、上寺遺跡（9）、西出中、近世墓（10）、馬場西遺跡（11）、玉塚古墳などがある。[4]



第76図　遺跡位置図（1：50000）

また、昭和23年～26年に京都大学が調査した石山古墳（13）は王塚古墳の北西約600ｍの山上にあり、夙に有名である。

喰代地内には40基あまりの古墳があるが、隣接する高山地内では全く知られず、中世城館以外に、住居跡を伴う遺跡が今回確認された意義は大きいと思われる。

2．遺　　構

第１次調査として幹線排水路部分を約2,000㎡、また、第２次調査として削平される部分の約2,000㎡を調査した。第１次調査では遺構は確認できず、第２次調査でも、Ａ～Ｃ区の３調査区のうち、確認できたのはＢ区のみであった。ここでは、このＢ区について報告したい。

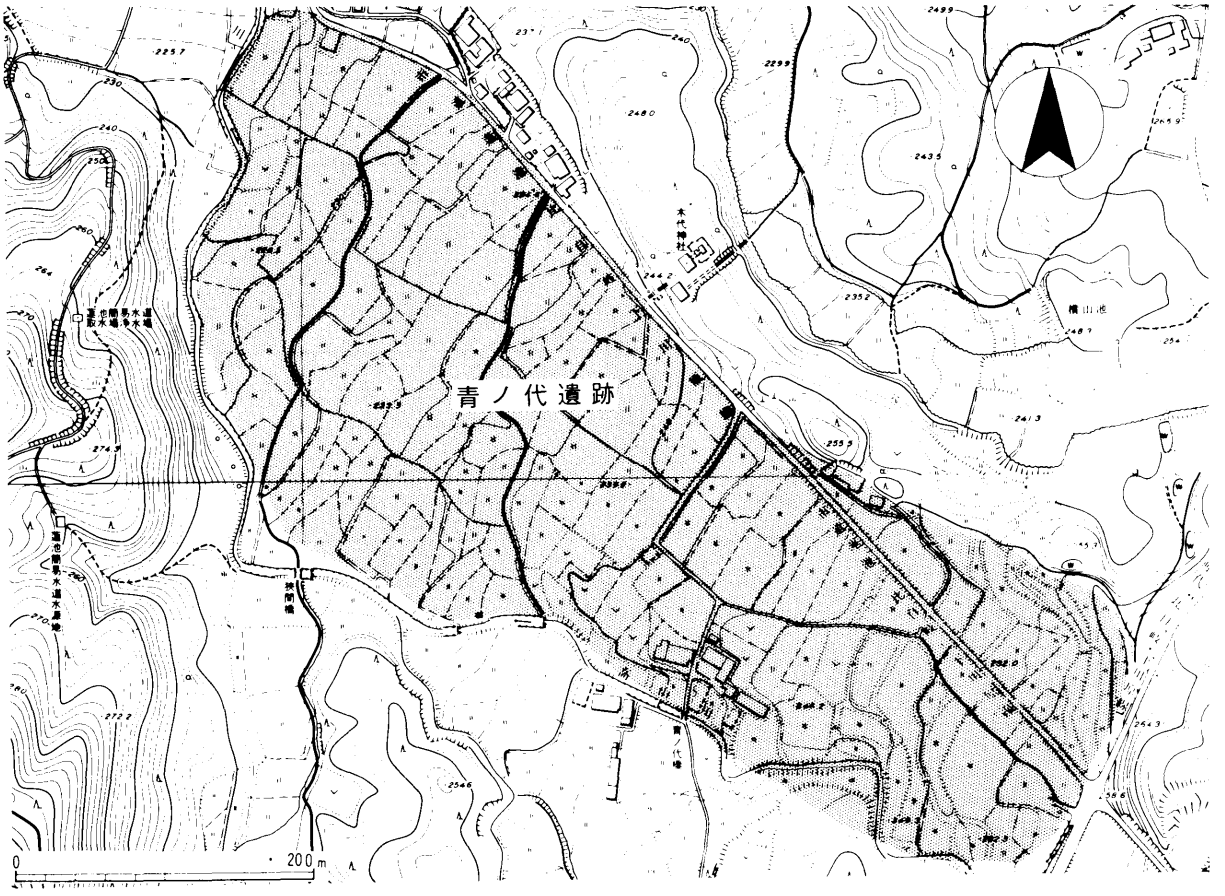
基本層序は、第Ⅰ層：耕作土、第Ⅱ層：茶褐灰色土、第Ⅲ層：灰褐色土、第Ⅳ層：暗褐色土、第Ⅴ層：黒褐色土である。地山は黄褐色土で、地山までの深さは80～120㎝である。北が最も高く、ゆるやかに南に下がり、発掘区中央から南ではまた高くなる。検出された遺構はわずかであるが、発掘区の南へいくほど密で、現在の住居と重複するようである。発掘区中央より北でも遺構は確認されたがまとまりはない。以下に主な遺構について概述する。

(1)　掘立柱建物

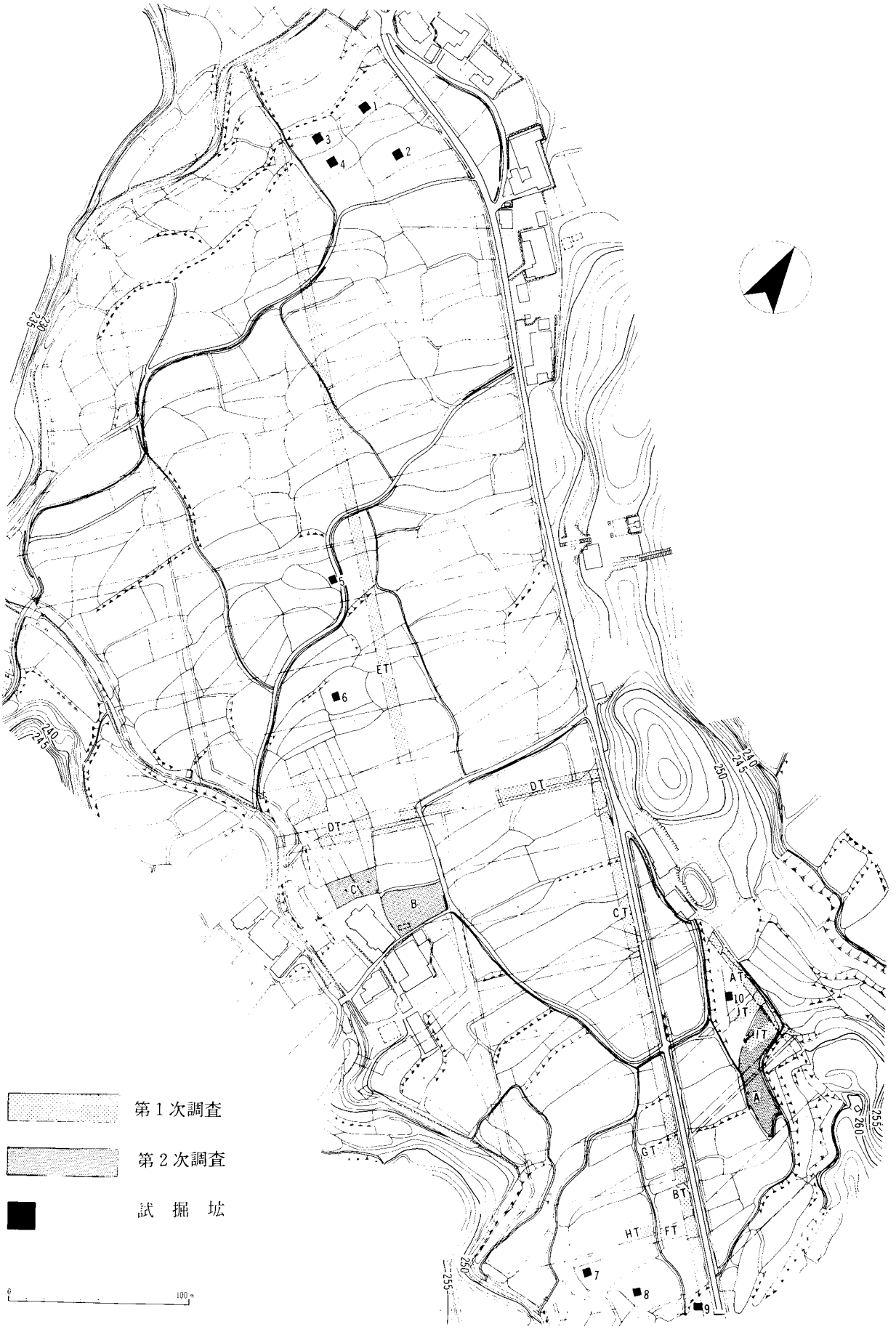
ＳＢ１　ピットを確認し得なかった部分もあるが、桁行４間×梁行４間の東西棟で、棟方向N60°Wの総柱掘立柱建物である。柱間は、桁行で2.20＋2.75＋2.50＋2.85ｍと不揃いであるが、梁行は2.20ｍとほぼ等間である。柱掘形は30～40㎝で、Pit Ａより瓦器椀（11・12）が出土している。平安時代末から鎌倉時代初めにかけてのものと思われる。

(2)　土　　坑

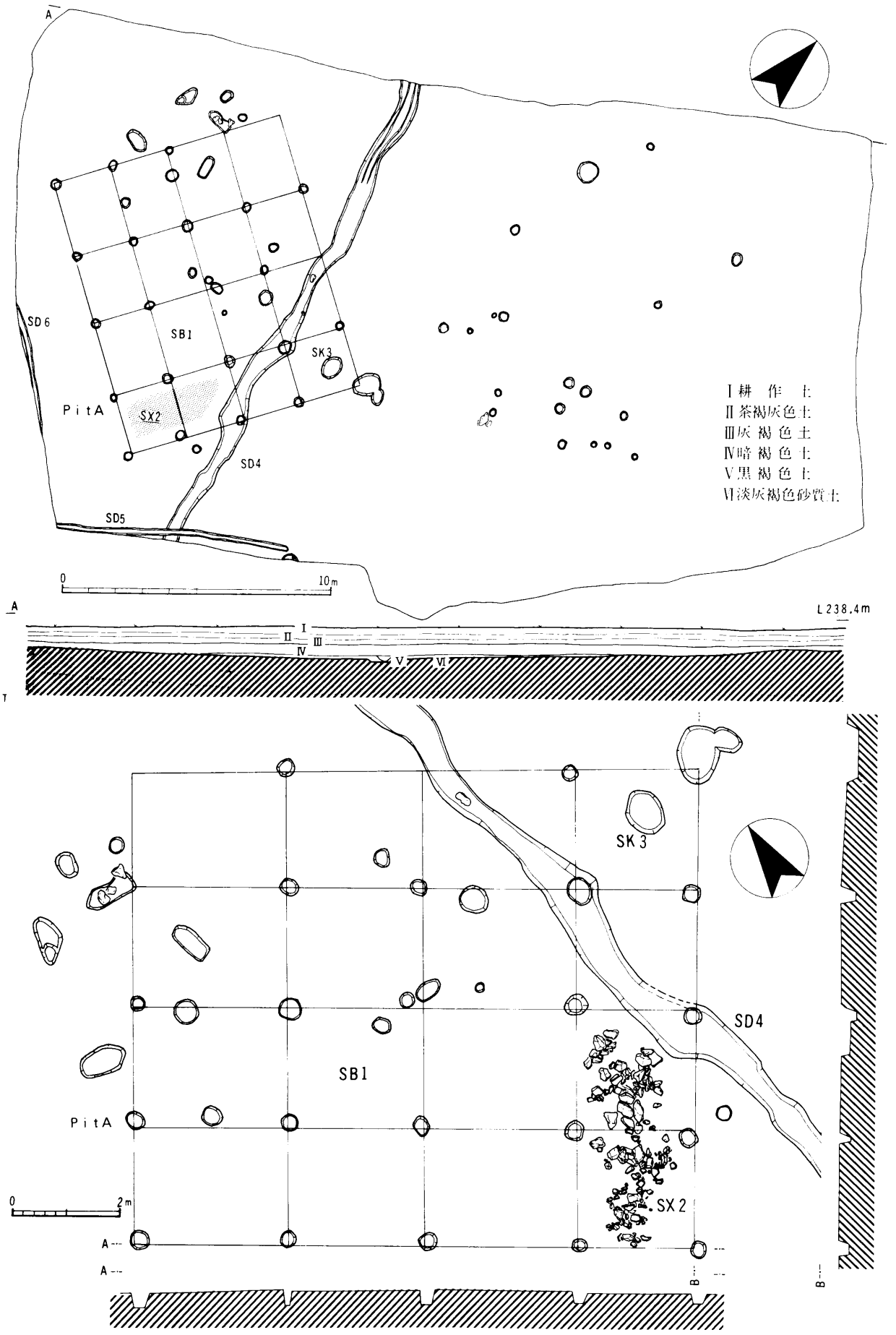
ＳＫ３　ＳＢ１の北東隅辺りで検出されており、長径90㎝、短径70㎝の楕円形の土坑である。瓦器椀



第77図　遺跡地形図（１：5000）



第78図　発掘区位置図（１：3000）



第79図　Ｂ区遺構平面図（上、１：200）　　ＳＢ１実測図（下、１：100）

(17～20) が出土しており、ＳＢ１と同時期と思われる。

(3) 溝

ＳＤ４　発掘区中央よりやや南寄りを横切るかたちで検出されており、幅0.6～１ｍ・深さ20～30cmの溝である。ＳＢ１のピットがこれを切る形で検出されており、時期はＳＢ１よりも古い。遺物は伴わない。

ＳＤ５・６　ＳＤ５は発掘区南寄りの東壁際で、またＳＤ６は発掘区東寄りの南壁際で検出された。ともに埋土は明灰褐色を呈し、幅約20cm、深さ約10cmである。同時期のものであろう。ＳＤ５からは土師器の細片が２点出土したが時期は不明である。ＳＤ５はＳＤ４より新しい。

(4) その他

ＳＸ２　集石遺構である。ＳＢ１南東隅の、桁行１間×梁行２間の中におさまるもので、石の重なりは少なく、おおむね平坦である。石にはりつくようなかたちで、瓦器椀 (13～15)、瓦器皿 (16) が出土している。

３．遺　　物

出土遺物としては、古墳時代後期から奈良時代の須恵器・土師器、平安時代末から鎌倉時代の瓦器・土師器・山茶椀・陶器類、室町時代以降の土師器・陶磁器類・古銭などがあり、整理箱に約20箱程度である。いずれも破片であり、全体像を窺えるものは少ないうえに保存状態も悪い。遺構に伴うものは少なく、そのほとんどが包含層出土である。

１．古墳時代後期～奈良時代

(1) 須恵器

蓋（１・２）　(1)はＡ区、(2)はＢ区包含層出土である。ともに⅙程度の残りである。

(1)は、口径13.2cm、器高3.5cm前後である。胎土・焼成とも良好で、非常に良質の須恵器である。明灰色を呈す。天井部はヘラケズリされ、頂部には宝珠つまみがつくものと思われる。口縁部内面にはかえりをもつが小さく、ほとんど内壁面に密着する。

(2)は、口径18.4cm、器高2.0cm前後である。胎土に１～４mmほどの白色砂を少量含む。焼成はおおむね良好で、淡青灰色を呈す。天井部は総体にふくらみが少なく、扁平に成形されている。ヘラケズリされ、頂部には宝珠つまみがつくものと思われる。天井部と口縁部の境界は段をなし、端部はわずかながら下方に屈曲する。

杯（３～６）　(3・4)はＡ区、(5)はＡトレンチ、(6)はＢ区包含層出土である。残りは⅙以下で、いずれも焼成は良好・淡灰色を呈す。

(3)は、口径10.0cm、器高2.6cm前後。胎土に１mm前後の白色砂を含む。底部は肥厚し、内面はヘラケズリが施される。受部は水平につまみだされ、口縁部の立ちあがりは短く、やや内傾して丸くおさまる。浅く小型化されたものである。

(4)は、口径14.6cm、器高4.5cm前後。胎土に最大径４mmの白色砂を含む。やや摩耗している。体部は丸みを帯び、やや厚手である。口縁部は外反ぎみで端部は丸くおさまる。底部はヘラケズリされる。

(5)は、口径12.6cm、器高4.2cm前後である。胎土は良好である。体部は丸みを帯び、口縁部は外反し端部は丸くおさまる。

(6)は、高台径10.8cm前後。胎土に１～３mmの白色砂を含む。中央でやや薄くなる底部に、断面方形のしっかりした高台がほぼ直立してはりつけられている。

壺（７）　Ａ区包含層出土である。口径11.0cm前後。焼成は良好であるが、胎土に１～４mmの白色砂を多く含む。口縁部の破片で、色調は淡灰色を呈す。内面には自然釉が見られる。薄手でていねいなつくりである。

(2) 土師器

長甕（８）　試掘坑ＮＯ.9包含層出土である。残りは悪く、口縁部から体部にかけての破片である。

口径は25.4cm前後。胎土に金雲母を少量含み、焼成はおおむね良好である。暗乳白色を呈す。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は短くかえる。詳細は不明であるが、体部外面と口縁部内面に横方向の、また体部内面には縦方向のハケメが施されているよ

うである。

甑（9）　試掘坑ＮＯ８包含層出土である。体部下半の破片である。底部径は20cm前後と大きい。胎土に金雲母を含む。焼成は良好で暗褐色を呈す。体部内外面には粗いハケメが斜めに施される。また粘土の継ぎめが見られ、指圧痕が明瞭である。

２．平安時代末～鎌倉時代初頭

(1) 黒色土器

椀（10）　Ｂ区包含層出土で底部が¼残存する。

高台径は8.8cm前後。胎土に２～４mm前後の白色砂と金雲母を含む。焼成はあまい。内面にだけ炭素を吸着させた、いわゆる黒色土器Ａ類である。底部は、中央部にかけて肥厚し、断面逆三角形の高台が外開してはりつく。ナデつけた痕は明瞭である。

(2) 瓦　器

○　ＳＢ１（Pit　Ａ）出土遺物

椀（11・12）　(11) は、口径16.0cm、器高5.6cm前後、(12)は、各々15.6cm、5.35cm前後である。ともに器高指数34を測り、高台径は7.0cm前後と大きい。胎土、焼成は良好で、黒灰色を呈す。

ほぼ平らな底部（11)、あるいは、やや歪曲し、器壁の薄い底部（12）に、断面逆三角形の高台がほぼ直立してはりつく。体部は丸みをもって開き、口縁部はヨコナデされ、わずかに外反しておさまる。端部内面には、幅１～２mmの沈線がめぐる。

内底面の暗文は、少なくとも３輪以上の連結輪状文と思われる。内画ヘラミガキは、(11) が非常に密なのに対し、(12)はやや間隙をもつ。外面ヘラミガキは簡素化されている。分割数は２～３回であろうか。

○　ＳＸ２出土遺物

椀（13～15）　(13) は口縁部の、(14・15) は底部のみの破片であり、全体像は窺えない。胎土・焼成はともに良好である。黒灰色を呈す。

(13)は、口径14.5cm前後、口縁部で器壁4mm弱とやや厚めである。内面の沈線は段状を呈す。内面ヘラミガキは非常に丁寧で緻密であるが、外面ヘラミガキは簡素化されている。

(14) は、高台径7.0cmを測り、ＳＢ１出土の瓦器椀同様大きい。起伏をもつ底部に断面逆三角形の高台がはりつく。暗文は連結輪状文と思われるが、それに先行してハケメが施される。

(15)は、高台径5.8cm前後。中央でやや厚みをもってふくらむ底部に、断面逆三角形の高台がはりつく。内底面には比較的丁寧な暗文が施され、少なくとも４輪以上の連結輪状文であろう。

(14・15) は、ともに残りが悪く判断し難いが、内面ヘラミガキは体部下部まで密に施されているようである。

皿（16）　口径8.6cm、器高1.55cmを測る。胎土焼成は良好である。灰白色を呈す。底部は上げ底状である。口縁部はわずかに外反し、端部は面をもつ。内底面はジグザグ状暗文が施され、内面ヘラミガキに先行する。

○　ＳＫ３出土遺物

椀（17～20）　¼～⅙程度の残りで、いずれも底部を欠損する。(19) 以外は外面に指圧痕が見られ、凹凸がある。

口径13.8cm～16.0cm前後と若干ばらつきが見られる。胎土は、白色砂・金雲母を少量含むもの（19）もあるがほぼ良好で、焼成もおおむね良い。黒灰色である。

口縁部は短く立ちぎみで、端部はヨコナデを受け外反ぎみである。内面には例外なく１～２mmの沈線が明瞭に残る。内面ヘラミガキは簡素化されたものである。

(19) 及び (20) の外面は、摩耗のため調整法は不明である。

○　包含層出土遺物

椀（21～25）　全体像を窺えるものは(21)のみで、他はすべて底部の破片である。いずれもＢ区包含層出土。

(21) は、口径16.4cm、器高5.4cm、高台径5.4cm前後。器高指数30を測る。胎土・焼成ともに良好で、内底面暗文、内面ヘラミガキは銀灰色に光る。

平らな底部に断面逆三角形の低い高台が直立してはりつく。体部は直線的に開き、口縁部はゆるやかに屈曲する。内面の沈線は１mm程度である。

暗文は３輪以上の連結輪状文であろう。内面ヘラミガキは密であるが、体部下部で多少の間隙をもつ。外面は摩耗のため不明。

(22～25) は、(24) の高台径が4.4cmとやや小さ

いが、他は5.6～5.8cmとほぼ均一である。胎土・焼成はおおむね良好である。黒灰色を呈す。

高台は、断面が逆三角形のもの（22・23）と、逆台形のもの（24・25）とあるが、ナデつけた痕は明瞭である。

暗文は連結輪状文と思われるが、(22・25）は〆字状のようにも見える。内面ヘラミガキは、底部付近に認められることからおおむね密と思われるが、外面は摩耗のため不明である。

(23)は、ヘラミガキに先行してハケメが施される。

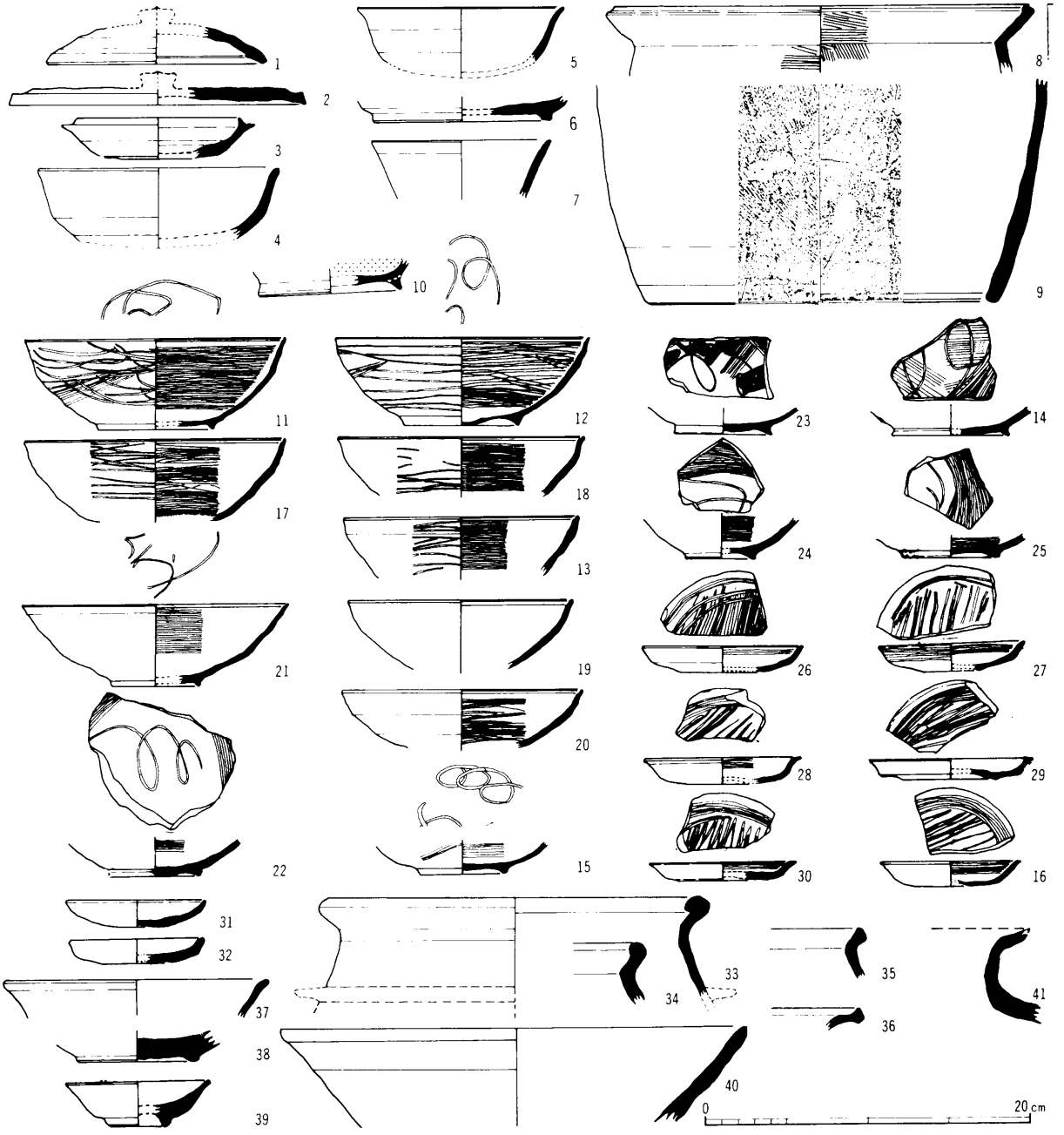
皿（26～30）　残りの良いもので¼程度である。ほとんどが、底部外面に指圧痕を残し、成形時のままである。(26～29）はB区、(30）はEトレンチ出土である。

口径8.9cm～10.0cm、器高1.1cm～1.7cm前後。29は胎土に小石を少量含むが、他は良好で、焼成も良。黒灰色である。底部は上げ底状で、口縁部は短く屈曲し、端部は外反する。面をもつもの（26・28）もある。

暗文はジグザグ状で、内面ヘラミガキに先行する。

(3) 土師器

皿（31・32）　(31）はA区、(32)はEトレンチ



第80図　遺物実測図（1：4）

包含層出土である。⅔以下の残りである。

口径 8.2 cm～ 8.4 cm、器高 1.5 cm～ 1.6 cmである。(31) は淡褐色、(32) は明褐色を呈す。

口縁部のみヨコナデで仕上げる。底部はやや上げ底状となる。(31) に比べ、(32) は厚手である。

羽釜 (33～35)　(33) は、B区出土で⅙の残り、(34･35) は、A区出土でともに口縁部の細片である。

胎土に金雲母・白色砂を含み、焼成はややあまいもの (34) を含む。色調は茶褐色 (33)、乳白色 (34)、暗褐色 (35) とさまざまである。(34)は、内面に煤が付着する。(33)の口径は、23.2cmである。

口縁部が「く」の字状に外反し、端部が折り返されるもの (33・34) と、上下に肥厚するもの (35) がある。内外面はナデ、口縁部はヨコナデを受ける。(33) は、大和B_1型d[5]と思われる。

鍋 (36)　試掘坑No.3包含層出土で、口縁部の細片である。胎土・焼成ともに良好で、内面は乳白色・外面は暗乳白色を呈す。

口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は三角形状に上方につまみあげられる。やや厚手。

(4) 陶　器

山茶椀 (37・38)　(37) はB区、(38)はA区。それぞれ包含層出土である。

(37)は、口径15.6cm前後である。胎土･焼成ともに良好で、淡灰色を呈す。薄手に仕上げられる。残りは悪く、形態は不明であるが、口縁部はやや外反しておさまる。歪みは大きく内面には自然釉が見られる。

(38)は、底部のみの破片である。高台径は 7.6 cmを測る。胎土に金雲母を含むが、焼成は良好である。淡灰色を呈す。高台は、はりつけ高台で退化しており、底部には糸切り痕が残るが、ナデにより大半が消えている。

山皿 (39)　口径8.8cm、器高3.0cm前後である。Eトレンチ包含層出土。

胎土は緻密であるが白色砂を少量含む。焼成は良好で淡灰色を呈す。口縁部から体部にかけての内面には自然釉が見られる。

練鉢 (40)　口縁部から体部にかけての破片で、Cトレンチ包含層出土である。

口径は28.8cm前後。胎土に細かな金雲母を含む。焼成は良好で淡灰色を呈す。体部は直線的である。口縁部はヨコナデを受け面をもつ。

常滑焼甕 (41)　口縁部から肩部にかけての破片であるが、口縁端部はわずかに欠損する。A区包含層出土である。

胎土は密で、焼成も良好である。やや赤みを帯びた灰色を呈する。肩部からやや肥厚しながら立ちあがり、口縁部は鋭く外反する。口縁部はヨコナデを受ける。肩部には自然釉が見られる。

3．室町時代以降の遺物

(1) 土 師 器

鍋 (42・43)　ともに口縁部の細片で、(42)はB区、(43)はEトレンチ包含層出土である。

(42)は、口径25.0cm程度のものであろう。胎土は良好で、焼成はややあまい。外面が暗褐色、内面が乳白色を呈す。口縁部はヨコナデされ、外方につまみあげられる。

(43)は、口径26.5cm前後のものであろう。胎土に白色砂を少量含み、焼成は良好である。暗乳白色を呈す。口縁端部はヨコナデを受け外方につまみあげられる。端部外面には凹みが見られる。

(2) 陶 磁 器

天目茶椀 (44～47)　(44) はEトレンチ、(45) はB区、(46)はJトレンチ、(47)はA区のいずれも包含層出土。

(44)は口径11.8cm前後。胎土・焼成ともに良好である。釉な光沢のある鉄釉である。

体部は直線的に立ちあがる。口縁部は若干内側に折れ、端部は外反して丸くおさまる。口縁部から体部下半にかけての破片である。

(45)は口径11.2cm前後。胎土･焼成ともに良好で、釉は光沢の鈍い鉄釉である。

体部は丸みを帯び、口縁部はやや内弯し、端部は短く外反し丸くおさまる。口縁部から体部上半にかけての破片である。

(46)は口径11.2cm前後。胎土・焼成ともに良好で、光沢をもつ鉄釉がかけられる。

体部は丸みを帯び、口縁部は内弯し、端部は短く外反する。口縁部から体部下半にかけての破片である。

(47)は、胎土に白色砂を含み、焼成は良好である。釉は鉄釉で光沢をもつ。

底部の破片でヘラケズリが見られる。高台は露胎である。

大海茶入（48）　口縁部⅓の残りで、試掘坑NO,9包含層出土である。

口径5.2cm前後。胎土・焼成とも良好で、光沢をもつ鉄釉がかけられる。肩の張る器型をなす体部は、最大径で8.8cmを測る。短く直立する口縁部は端部内面に面をもつ。

灰釉椀（49・50）　ともにB区包含層出土で、底部の破片である。

(49)は、胎土は密・焼成は良好である。高台付近まで釉がかけられている。

ヘラケズリが施され、ほぼ直立した高台がケズリだされる。

(50)は、胎土に白色砂を少量含む小椀である。(49)と同様、高台付近まで釉がかかり、ヘラケズリが施されている。高台は方形に直立してケズリだされ、底部は厚い。ロクロ回転方向は時計回りである。

灰釉皿（51）　B区包含層出土で、口縁部の破片である。

口径11.2cm前後。胎土に白色砂を少量含む。焼成は良好である。釉は口縁部内面のみにかかる。縁釉皿であろう。

灰釉鉢（52）　B区包含層出土。口縁部の破片で口径27.0cm前後。胎土は粗く、焼成もややあまい。釉もほとんどはげおちており残りはよくない。口縁部は三角形状につまみだされて肥厚し、ヨコナデを受ける。

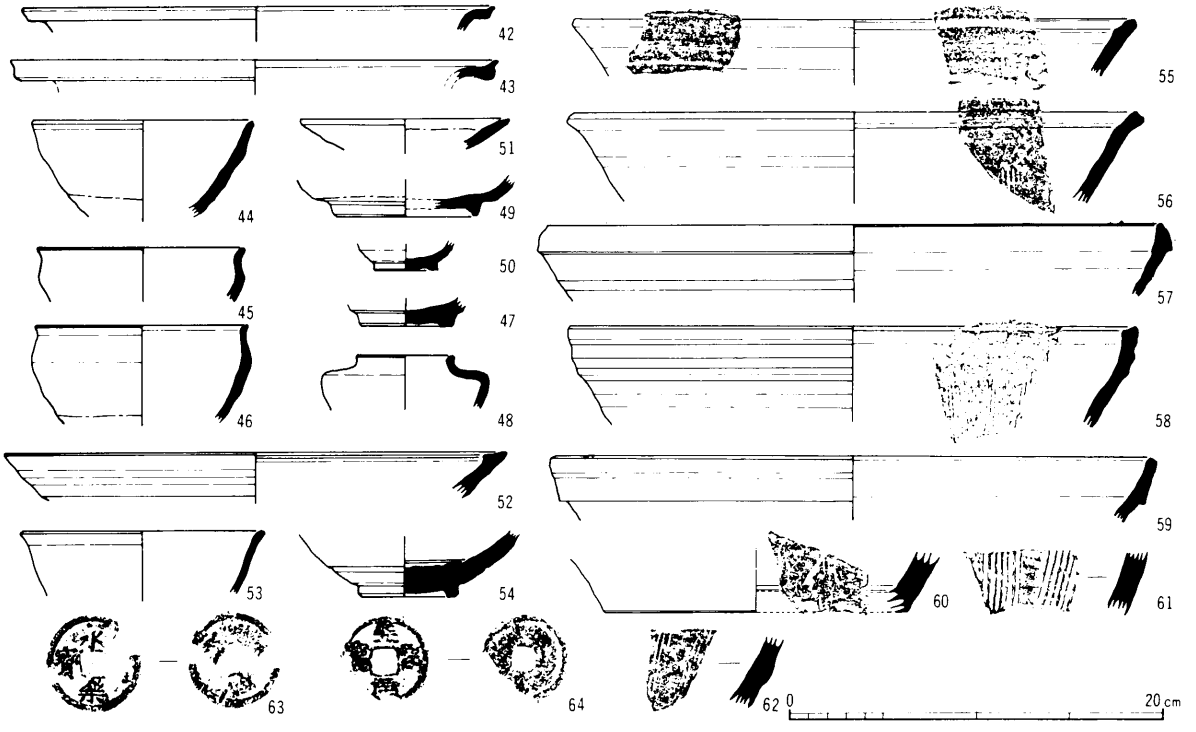
青磁椀（53・54）　(53)はCトレンチ、(54)はEトレンチ包含層出土である。

(53)は口縁部の出土で、口径12.8cmを測る。胎土は精緻、焼成も良好で、淡灰緑色の釉が薄くかかる。口縁部はやや肥厚し、外反ぎみに丸くおさまるものである。

(54)は底部の出土である。釉はうぐいす色を呈し、厚さは非常に薄い。胎土・焼成は(53)と同様。底部から高台にかけてヘラケズリされ、しっかりした高台がケズリ出される。また、底部は1.3cmと非常に厚い。

擂鉢（55～62）　(55・57)はEトレンチ、(56)は試掘坑NO,3、(58～62)はB区のそれぞれ包含層出土である。

(55～59)は口縁部の破片である。(55)は口径30cm前後、軟質のもので、胎土に白色砂、金雲母を含む。口縁部は直線的で、端部内面が段状を呈するものである。4条の筋目が見られるが分割数は不明である。



第81図　遺物実測図（1：4）

(56)は、口径30m前後。硬質で胎土には最大径4mm程の白色砂を含む。口縁部はやや外反し、端部内面は段状を呈す。4条の筋目が見られ、分割数は不明である。

(57)は、口径30cm前後、硬質で、胎土には2mm前後の白色砂を多く含む。口縁部がやや内弯し、端部は外方に肥厚するものである。

(58・58)は、口径33cm前後。硬質で胎土に1～3mmの白色砂を含むものである。施釉されたもので口縁部はやや内弯し、縁帯をつくるものである。筋目は5～6条を数える。

(60～62)は、体部あるいは底部の砂片である。内面の筋目は4～6条を数える。

(3) 古　　銭

古銭は3枚出土したが、うち判読可能な2枚について報告する。ともにBトレンチ包含層出土である。

永楽通宝 (63)　径2.5cm、厚さ0.1cm。「通」の字を欠損する。初鋳は1587年である。

天聖元宝 (64)　径2.2cm、厚さ0.1cmである。縁をわずかに欠損する。北宋銭で初鋳は1023年である。

4．結　　語

遺構は、第2次調査のB区で検出されたのみで、遺物についても、そのほとんどが包含層出土であり、必ずしも良好な資料とは言えない。ここでは、掘立柱建物と瓦器椀を中心に要点をまとめて結語としたい。

1．掘立柱建物について

青ノ代遺跡では、掘立柱建物（ＳＢＩ）が1棟検出された。ピットを検出し得なかった部分もあるが4間×4間の総柱掘立柱建物と考えられる。このＳＢＩの南東隅には、桁行1間×梁行2間に収まる形で集石遺構（ＳＸ２）が検出されており、建物に伴うものと思われる。

同じような形で集石を伴う建物は、伊勢市中ノ垣外遺跡[6]に1例見られるだけであるが、南東隅に同じプランで土坑を伴う例は最近各地で見つかっている。同中ノ垣外遺跡をはじめ、明和町斎宮跡[7]、松阪市草山遺跡[8]、鈴鹿内末野C遺跡[9]、名張市檀・柏原遺跡[10]などでの検出例がそれである。この土坑の性格については、中ノ垣外遺跡では、近世の民家を例にとり厩ではないかと推測しており、また斎宮跡では、土坑内の出土遺物より、台所や納戸の可能性もあると指摘している。

集石遺構と土坑とが同一の性格をもつかどうかの問題点はあるとしても、これらが、総柱掘立柱建物の南東隅で検出されている点、及び時期的に平定時代から鎌倉時代にかけてに限られる点で共通しており興味深い。今後の検出例に期するところが大きい。

2．瓦器椀について

出土遺物の中で、遺構に伴うものは土師器の細片を除けば瓦器のみであった。伊賀では、畿内、紀伊とともに瓦器が集中的に分布するが、そのほとんどは、川越氏の指摘する大和型に属するもの[11]で、青ノ代遺跡出土の瓦器もその例外ではない。

当遺跡出土の瓦器椀は、包含層出土も含め14点報告したが、全体像を窺えるものは3点のみであり、また、他のものについても残りが悪く、摩耗しているものもあり型式分類は避けた。

ＳＢ１出土の（11・12）及びＳＸ２出土の（14）の高台径は7.0cmを測る。報告された伊賀地内の瓦器椀で、高台径7.0cmを測るものは、伊賀町的場遺跡[12]で1例（Ａ類）あるのみであり、大きめといえよう。

また、ＳＸ２出土の（14）、ＳＫ３出土の（17）、包含層出土の（23）にはそれぞれハケメが施され、このような出土例は、伊賀町的場遺跡・上野市城山城遺跡、同下り合遺跡[14]、大山田村北切遺跡[15]で数例見られるだけである。

これら2点は、当遺跡出土の瓦器椀の特色といえるが、先にも述べたようにこれらは大和型の範疇を越えるものではない。

器高指数は30～34、摩耗したものを除けば、内面のヘラミガキはおおむね密であり、外面のヘラミガキは簡素化の傾向をたどる。時期の想定は難しいが白石編年[16]に依拠すればⅡ－6に相当すると考えられ、若干幅をもたせても、12世紀後半から、13世紀にか

けての所産と考えられる。包含層出土ではあるが、大和B_1型dの羽釜も出土しており、同時期のものと思われる。

3．まとめ

今回の調査では、中世の集落の一端を窺うにすぎなかったが、出土遺物から勘案して、古墳時代後期から奈良時代・平安時代末から鎌倉時代初頭、室町時代以降というように、集落が断続的に営まれたものと思われる。遺構は第2次調査B区以外には確認されず、その所在・推移については明らかにし得なかったが、これらの集落が高山青ノ代、蓮池青ノ代と広範囲にわたり点在したことは予想される。

高山から蓮池に通ずる市道をはさんだ、A・Bトレンチを中心とする高所は、すでに削平・客土・あるいは中世以降の開墾を受けているようである。古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器・土師器が多く採集されたのはこの地区である。

また、C・Dトレンチを中心とする谷筋の北側は、湧水のため湿地帯があるようで地盤が不安定であるが、谷筋南側は比較的安定しており、第2次調査B区で、集落の一端を窺うことができたわけである。

Eトレンチを中心とする部分についても、中世を中心とする遺物が多く採集されたが、農林水産部耕地第二課及び、上野耕地事務所・上野東部土地改良区との再三の協議の結果、盛土対応、現状保存されるに至った。

以上のように、遺物の散布状況から遺跡の範囲を広大なものとし、断続的な集落の点在を推定したが遺構は確認しておらず、想像の域を脱しないものである。

最後に、周辺の集落遺跡である、蓮池代遺跡[17]及び下り合遺跡[18]について若干ふれておく。

蓮池代遺跡は、奈良時代を中心とする集落跡であるが、出土遺物を見ると、やや当遺跡の方が古層を帯びるようである。また、蓮池代遺跡では、墨書土器・円面硯が出土し、公的な性格が強いとされるのに対し、当遺跡では日常的なものが多く、一般集落を予想させる。

下り合遺跡は、鎌倉時代・室町時代後期に比定され、若干当遺跡の方が先行する要素をもつ。しかし下り合遺跡が鎌倉期全般を通じて営まれた集落であるのに対して、その継続期間が短いようである。出土遺物を見ると、日常雑器類が多く、ハケメが施された瓦器椀の出土例からも、性格はよく似た集落と考える。

なお、Ⅰ章は田阪が、Ⅱ～Ⅳ章は稲垣が文責を負う。

〔註〕

① 『三重の中世城館』三重県教育委員会　1976　福井健二著『三重の城』三重県良書出版会　1979

② 註①に同じ

③ 『三重県の地名』平凡社　1983

④ • 山田猛「馬場西遺跡」『昭和52年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告2』三重県教育委員会　1978
• 山田猛「王塚古墳」『昭和53年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会　1979
• 山田猛「上寺遺跡」『昭和54年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会　1980
• 吉村利男「高猿6号墳」伊勢野久好・駒田利治「下り合遺跡」『昭和55年度県営圃場整備地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981
• 森前稔「蓮池代遺跡」森前稔・山田猛「馬場遺跡」『昭和56年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会　1982
• 杉谷政樹「岸之上遺跡」「大門遺跡」「渕遺跡」『昭和58年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会　1984

⑤ 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良文化財研究所　1983

⑥ 高見宜雄・岩中淳之「中ノ垣外遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』三重県教育委員会　1984

⑦ • 『三重県斎宮跡調査事務所年報1983・1984』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所　1984・1985
• 『史跡斎宮跡　第37－4次発掘調査報告』明和町　三重県斎宮跡調査事務所　1985

⑧ 『草山遺跡発掘調査月報No.8・No.9』松阪市教育委員会　1984・1985

⑨ • 中森成行『木野C遺跡調査概報』鈴鹿市遺跡調査会　1979
• 田阪仁「檀・柏原遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』三重県教育委員会　1984

⑪ 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1983

⑫ 駒田利治「的場遺跡発掘調査報告」『伊賀町文化財調査報告書2』伊賀町教育委員会　1978

⑬ 「城山城跡発掘調査報」『三重県埋蔵文化財調査報告45　恒岡氏城跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1981

⑭ 註④に同じ

⑮ 新田洋・田中喜久雄「北切遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』三重県教育委員会　1984

⑯ • 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の覚え書－古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察」『古代学研究54』1969
• 白石太一郎「瓦器の生産に関する二・三の覚え書」『古代文化27第1号』1975

⑰ 註④に同じ

⑱ 註④に同じ

Ⅵ　名張市中村　観音寺遺跡

1．位置と歴史的環境

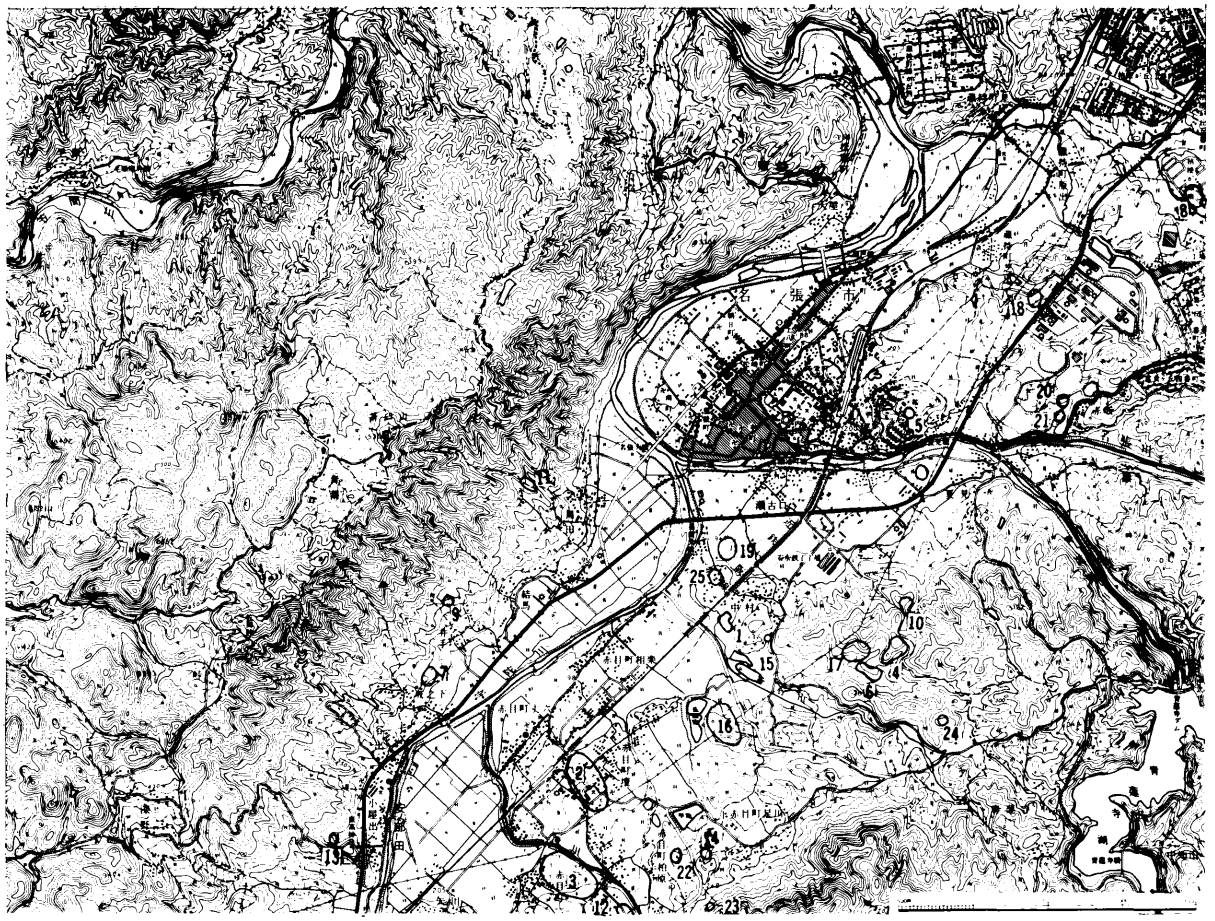
室生山中に源を発する一級河川宇陀川は、「伊賀大断層」に沿って北東に流れ、名張市中央部の新町橋付近で、名張川に合流する。この間、いりくんだ室生山系の谷筋から流れ出る多くの小河川と合流する。

観音寺遺跡（1）は、その一支流である釜石川を見下ろす丘陵先端部に位置する。後世の削平のために現況は、階段状であるが、前面に広がる沖積地との比高差は15.0m前後と、眺望のひらけた好所に占地する。

行政上、本遺跡は、名張市中村字観音寺に位置する。この中村という地名については、現在では遺跡の立地する丘陵周辺の狭い範囲をさすが、平安末期の「藤原実遠所領譲状案」によれば、現在の名張市丈六、檀、柏原から中村、瀬古口にかけての地域をさしたとみられ、本遺跡が、地理的・地形的にその中央部に営まれていたといえよう。

近年、この地域は、大阪へのベッドタウンとして急速な開発が進み、それとあいまって、発掘調査も急増し、あらためて歴史の様相があきらかになりつつある。以下にその概略を述べる。

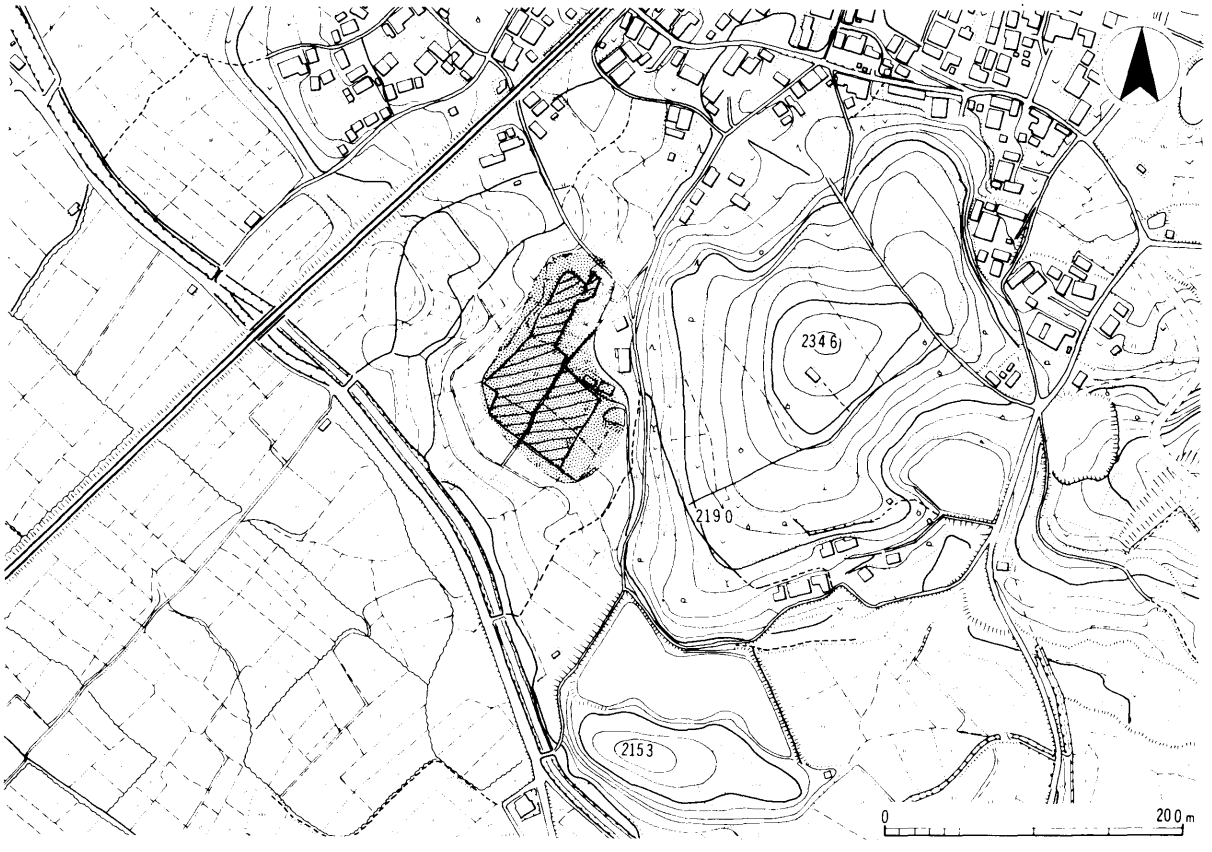
まず、縄文時代では、赤目檀、柏原遺跡（2）・辻垣内遺跡（3）・など滝川流域の沖積地に広範な遺跡が早期より営まれ、辻垣内遺跡では、早期の押形文土器、中・後期の深鉢などが出土し、長期にわたる



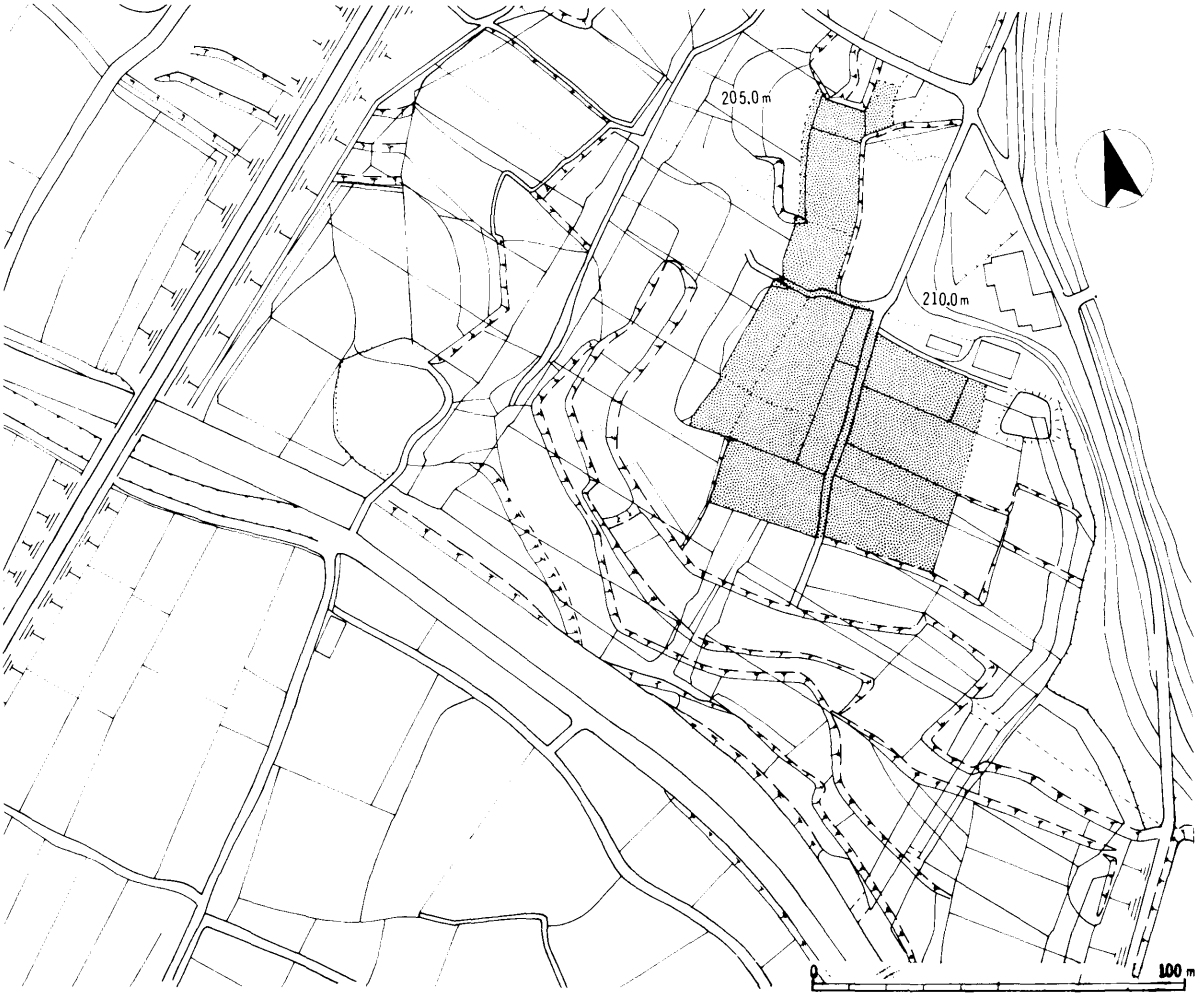
第82図　遺跡位置図（1：50000）

遺跡の継続がうかがわれる。一方本遺跡後方の丘陵上に展開された前山遺跡群中の白早稲遺跡（4）では、早期のサヌカイト製有舌尖頭器が出土している。しかし、土器・遺構は検出されていない。

弥生時代前期では、平尾山遺跡(5)・土山遺跡(6)などの丘陵上の小規模な遺跡で、土器片が採集されているにすぎない。しかし、土山遺跡出土例は、弥生時代前期中段階に属し、伊賀地方において最古の遠賀川系の土器であり、畿内から伊勢湾西岸の一志町中ノ庄遺跡への伝播を考える上で貴重な資料を提供している。中期では、発掘例は少ないが、水差形土器を出土した辻垣内遺跡・多数のサヌカイト片を伴なう御所垣内遺跡（7）などが知られ、ともに円形竪穴式住居が検出されていることは興味深い。後期から古墳時代前期にかけて、遺跡の数は増大する。蔵持黒田遺跡(8)・井手城屋敷遺跡(9)・前山遺跡群内の人参峠遺跡(10)・土山遺跡(6)・白早稲遺跡(4)・中ノ谷遺跡(11)・上東野遺跡（12）などが知られているが、その多くは、いわゆる平地に形成されることはなく、比高10～20mの河岸段丘上や、本遺跡のように丘陵の先端部に営まれ、中には、比高50m～80mの極めて高所な丘陵尾根線上に営まれるものもある。古墳時代前期の遺跡としては、弥生時代末から継続する前山遺跡群内の各遺跡をはじめとして、赤目檀・柏原遺跡・上東野遺跡などが知られ、庄内式併行期から布留式併行期の土器を多数出土している。このように名張盆地南部の宇陀川流域においては、弥生時代後期から古墳時代前期にかけ、集落の増加をみ、それは同時に水稲耕作の技術向上に支えられた生活基盤の安定を示すものといえよう。しかし、本流域における古墳の出現は、発掘例からすると、後期をまたなくてはならず、盆地北部の美旗古墳群が中期初頭に突如として大型の前方後円墳の築造を開始するのとは対称的である。宇陀川流域の古墳群はおおむね100～150基を数えることができるが、この中にあって、横穴式石室を内部主体とする前方後円墳である鹿高神社1号墳(13)・琴平山古墳（14）などはその盟主的な存在であろうか。本遺跡周辺の古墳群としては、方墳を主体とする高塚古墳群(15)・二ツ塚古墳群(16)・中村古墳群(17)などがある。中村古墳群の2号墳は、全長11.2mの巨大な横穴式石室をもち名張盆地においても有数の規模



第83図　遺跡地形図　（1：6000）



第84図　遺構平面図（1：2000）

をもつ。以後、この名張の地は、畿内から東国へ通ずる主要道として様々な歴史の舞台に登場する。飛鳥・奈良時代の掘立柱建物28棟や円面硯を出土した鴻ノ巣遺跡（18）・大型の円面硯を出土した浦遺跡(19)・夏見廃寺(20)・赤坂遺跡(21)など、本遺跡を含めて、宇陀川右岸に展開される古代の集落のあり方は、古代律令制下の地域の様相を解明する上での貴重な遺跡である。また、当該地域の古代末から中世は、東大寺をはじめとする有力社寺と、黒田の悪党に代表される地方土豪層との攻争の歴史である。この過程の中で生ずる内外の矛盾に対応するために地方土豪層は自己防衛の手段として、堀を巡らす城館を築造しはじめる。伊賀地方にはこのようないわゆる「中世城館」が数多く知られ、本遺跡周辺にも、滝野氏城(22)・宮城館跡(23)・愛宕堡(24)などが築かれ、『三国地誌』には、当中村所在として、中村八郎氏宅（25）が記されている。

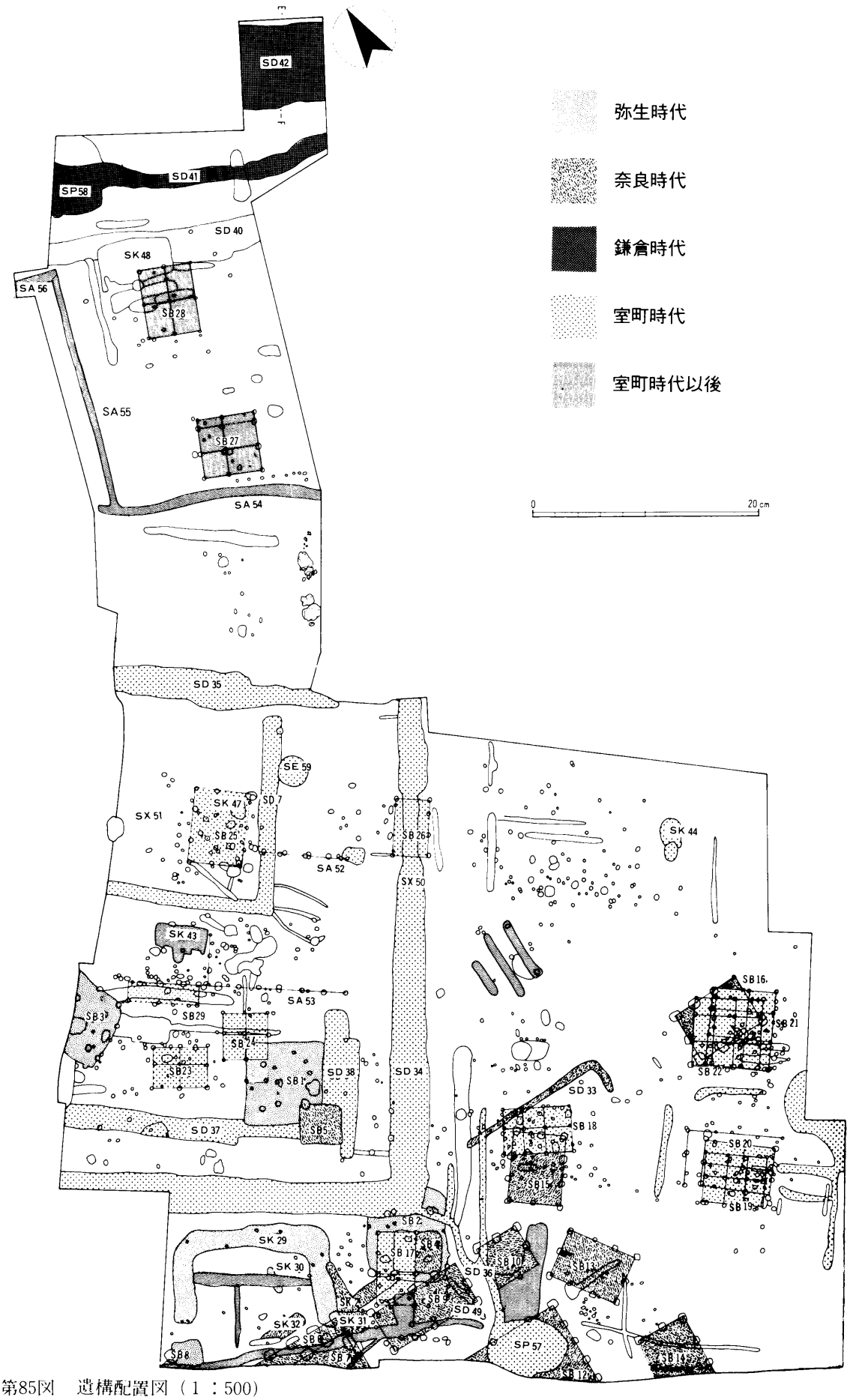
2．遺　　構

観音寺遺跡は舌状にのびる丘陵の先端に立地するため南へゆるやかに傾斜し、最も高い北東端と南西端との比高は、1.5m前後をはかる。遺跡の土層の基本的層序は、第Ⅰ層：耕作土(約20cm)・第Ⅱ層：粘質茶褐色土(約20cm)・第Ⅲ層：粘質黄褐色土層(地山)である。第Ⅱ層中に、弥生～中世に至る遺物が混入するが、単一の時期の包含層として分層することはできない。遺構の検出は第Ⅲ層直上である。

1．弥生時代後期の遺構

(1) 竪穴住居

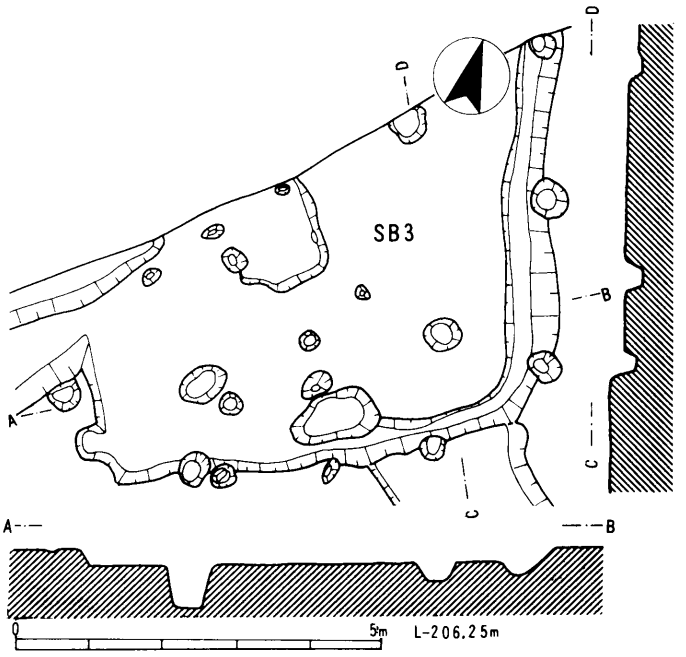
ＳＢ１　南隅を奈良時代の竪穴式住居（ＳＢ５）



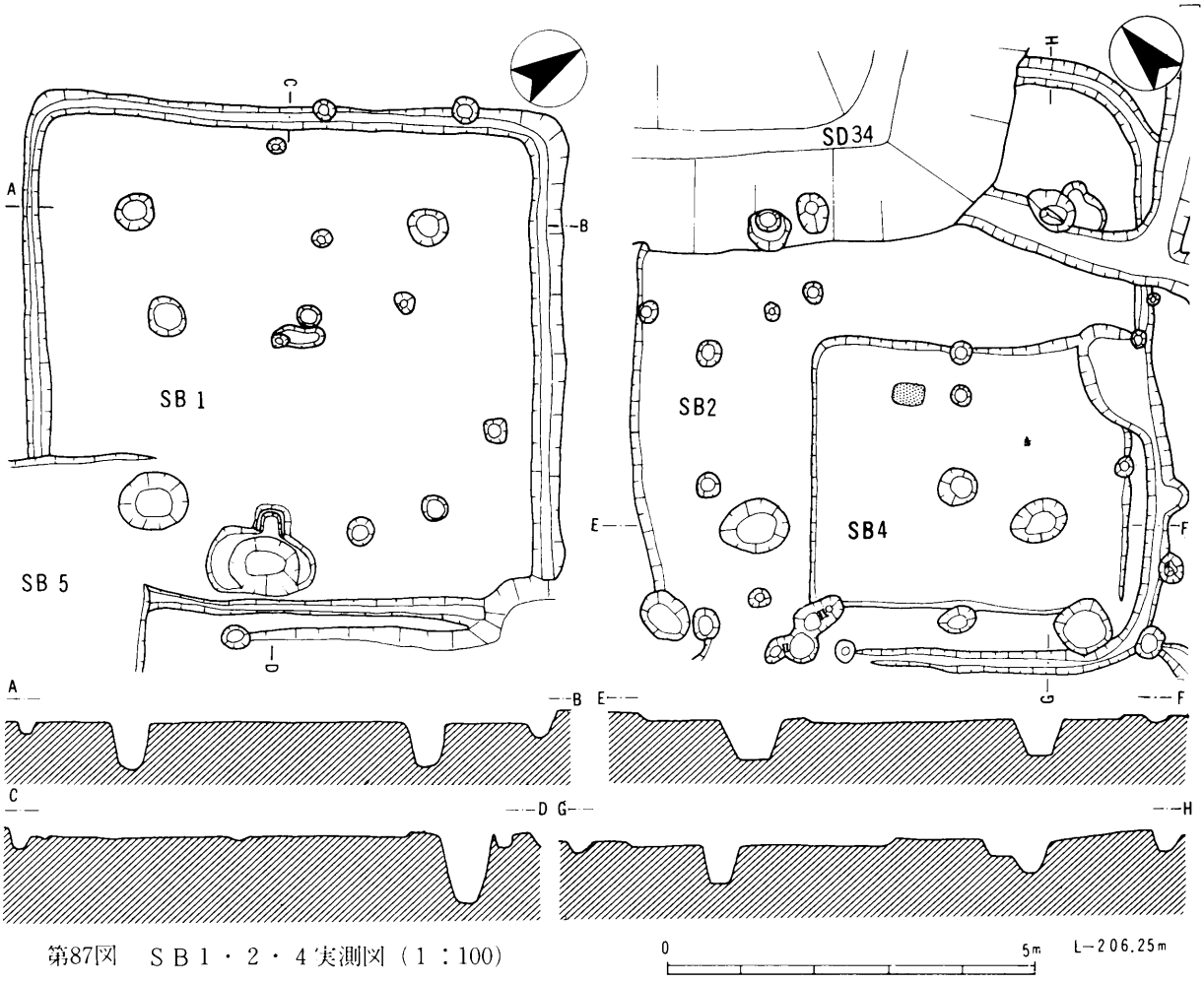
第85図　遺構配置図（1：500）

によって切られているが、一辺7.3m程の正方形プランをもつ住居と考えられる。4方に幅40cm・深さ10cm前後の周溝を巡らせる。主柱穴は南西隅のものが径80cmと大きく、他は50cm前後である。4穴で構成され柱間は4.0mである。東壁に接して長径1.5m、短径0.8m、深さ1.0mの二段に掘り凹められた楕円形の貯蔵穴が設けられている。この埋土中より、高杯　甕などが出土している。現存壁高は13cmと浅いが、暗褐色の埋土中には、総数145点の土器片が包含されていた。しかし、いずれも細片で、原位置を保った状況のものはない。

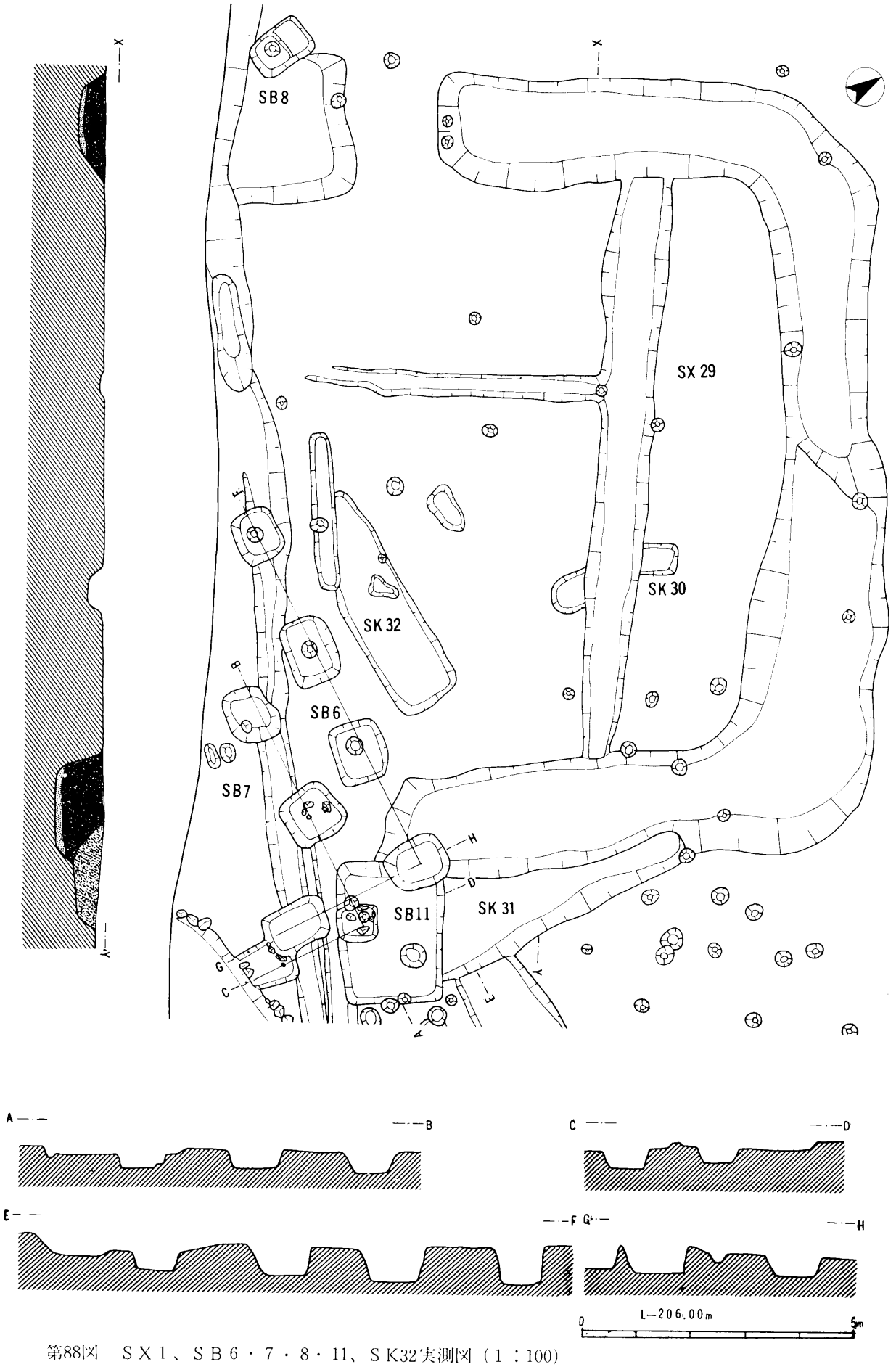
SB？　室町時代の堀（SD34）によって北隅を欠損しているが、長辺8.0m・短辺7.2mの長方形プランをもつ住居と復元できる。現存する3ヶ所のコーナーは、丸味をもっている。検出面から床面までの深さは10cmと浅い。南から東にかけて幅30cm・深さ10cmの周溝が巡る。主柱穴は径70cm・深さ50cm程の4穴で構成され、柱間は4.0m前後である。南東壁に接して長径1.3m・深さ20cmの浅い凹地があり、若干の土器を出土する。遺物は、



第86図　ＳＢ３実測図（１：100）



第87図　ＳＢ１・２・４実測図（１：100）



第88図　ＳＸ１、ＳＢ６・７・８・11、ＳＫ32実測図（１：100）

この他に、北西壁にもたれかかった状況で高杯２点などが出土している。また、床面中央部で40cm余りの範囲にわたって焼土がみられた。

ＳＢ３　発掘区西端での検出のため完掘されていないが、一辺6.5ｍの方形プランをもつ住居と考えられる。南から東にかけて周溝が巡る。主柱穴は径50cm前後と平均しているが、深さは20～60cmと差がみられる。南壁に接して長径1.2ｍの凹地が検出されたが、遺物はみられない。遺物は、周溝内に落ち込んだ状況で小形壺・鉢などが出土したほか、暗黒褐色の埋土中より総個体数51の土器が出土している。検出面より床面までは20cmである。

(2) 方形周溝墓

ＳＸ１　発掘区北西端で「コ」の字状を呈する溝状遺構を検出した。南側は、後世の削平のため、周溝が一周するものか、あるいは、検出された状況でその機能を果たすものかは不明である。主軸はＮ25°Ｅを示し、溝内側で一辺13ｍ前後を測る。溝幅は、最大2.1ｍ、最も狭いところで1.7ｍ、西隅は、幅2.0ｍほど掘り残し陸橋部状を呈している。周溝埋土は、大きく下層の淡褐色粘質土（約5.0cm）と上層の粘質暗黒褐色土（約15cm）に分層することができ、両層にわたって総計151個体分の土器が含まれている。溝によって区画された内側で、弥生式土器を伴なう遺構としては、長径2.4ｍ、短径0.6ｍの楕円坑（ＳＫ29）がある。

(3) 溝

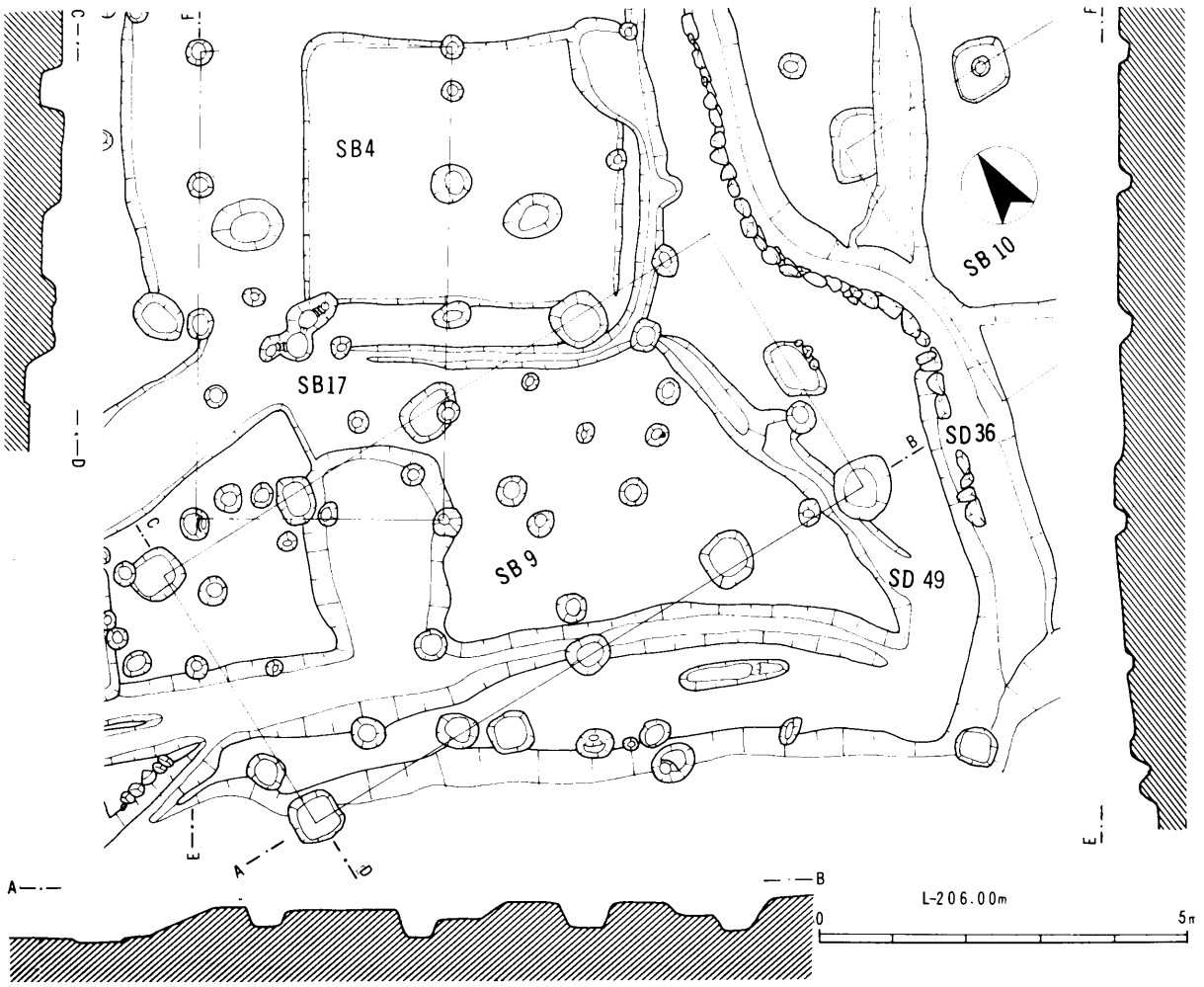
ＳＤ49　ＳＢ２の南東隅から南へ向かってのびる幅40cm、深さ25cmの溝である。茶褐色の埋土中より高杯１点、甕片が出土している。

２．奈良時代の遺構

(1) 竪穴住居

ＳＢ４　一辺4.0ｍの正方形プランをもつ。ＳＢ２と重複して検出された。主柱穴・周溝などはみられず住居というよりも方形土坑とすべきかもしれない。

ＳＢ５　一辺3.0ｍの正方形を呈する。ＳＢ１と



第89図　ＳＢ４・９・10・17、ＳＤ36・49実測図（１：100）

重複する。ＳＢ４同様主柱穴などの施設はない。床面より須恵器片を出土する。

ＳＢ11　長辺2.5m、短辺2.0m、現存壁高0.23mの長方形を呈する。ＳＫ31およびＳＢ４掘立柱建物掘形によって切られているが、奈良時代の須恵器片を出土することから、この時期のものとした。柱穴などはみられない。

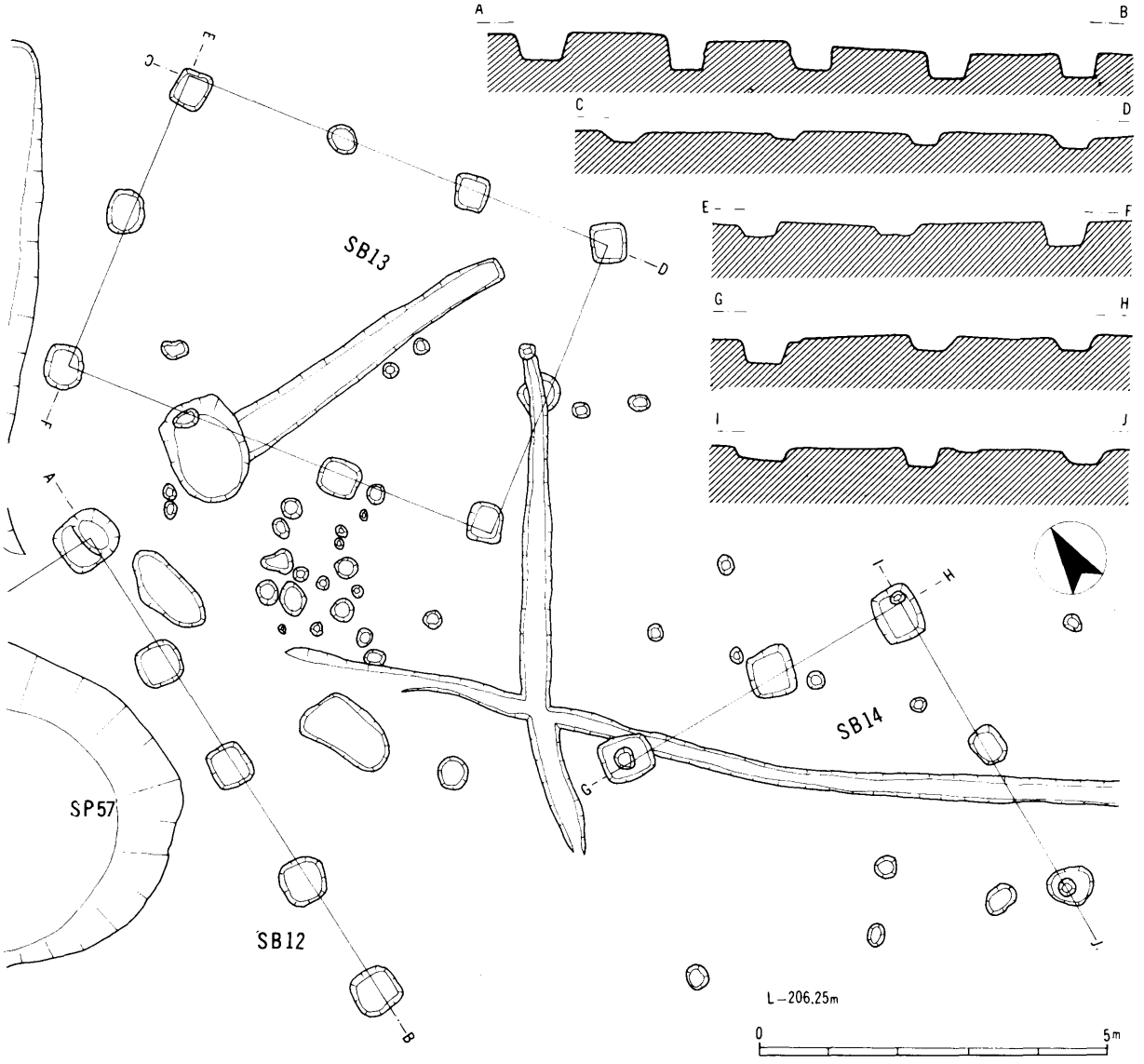
(2) 掘立柱建物

ＳＢ６　桁行３間以上、梁行１間以上の建物で、棟方向は、ほぼ真南を向く。いずれの掘形も長辺1.3m、短辺0.9m、深さ0.9mと大型である。掘形内には径30cm程の柱穴が確認されるものもある。ＳＢ７と重複して検出され、ＳＢ７に先行するものと思われる。なお、ＳＢ７の掘形では、人頭大の河原石を埋込んで柱を安定させた状況がみうけられたが、ＳＢ６には石材はみられない。掘形内より須恵器片・土師器片が出土しており、とくに北東から２番目の掘形からは、ミニチュアの須恵器壺、長頸壺、ミニチュア鍋が一括出土した。

ＳＢ７　桁行２間以上、梁行１間以上の建物で、ＳＢ６と重複している。柱掘形は長辺1.2m、短辺1.0mとＳＢ６に比べて方形に近く、人頭大の河原石を用いて柱の安定に役立てている。

ＳＢ８　発掘区北西隅で検出した長辺1.1m、短辺0.8mの長方形の掘形から想定される建物である。ＳＢ６・ＳＢ７同様の粘質茶褐色の埋土をもち、２つの掘形が重複しており、ＳＢ６とＳＢ７の建て替えと同様に、西側にのびる建物であろう。

ＳＢ９　桁行４間(8.7m)・梁行２間(4.0m)でＳＢ７より4.5m東に棟方向をそろえて建てられてい



第90図　ＳＢ12・13・14実測図（１：100）

る。掘形は一辺0.7m前後の正方形を基本とするが、不定形のものも含まれる。北東隅の掘形は、室町時代の石組溝によって消滅している。

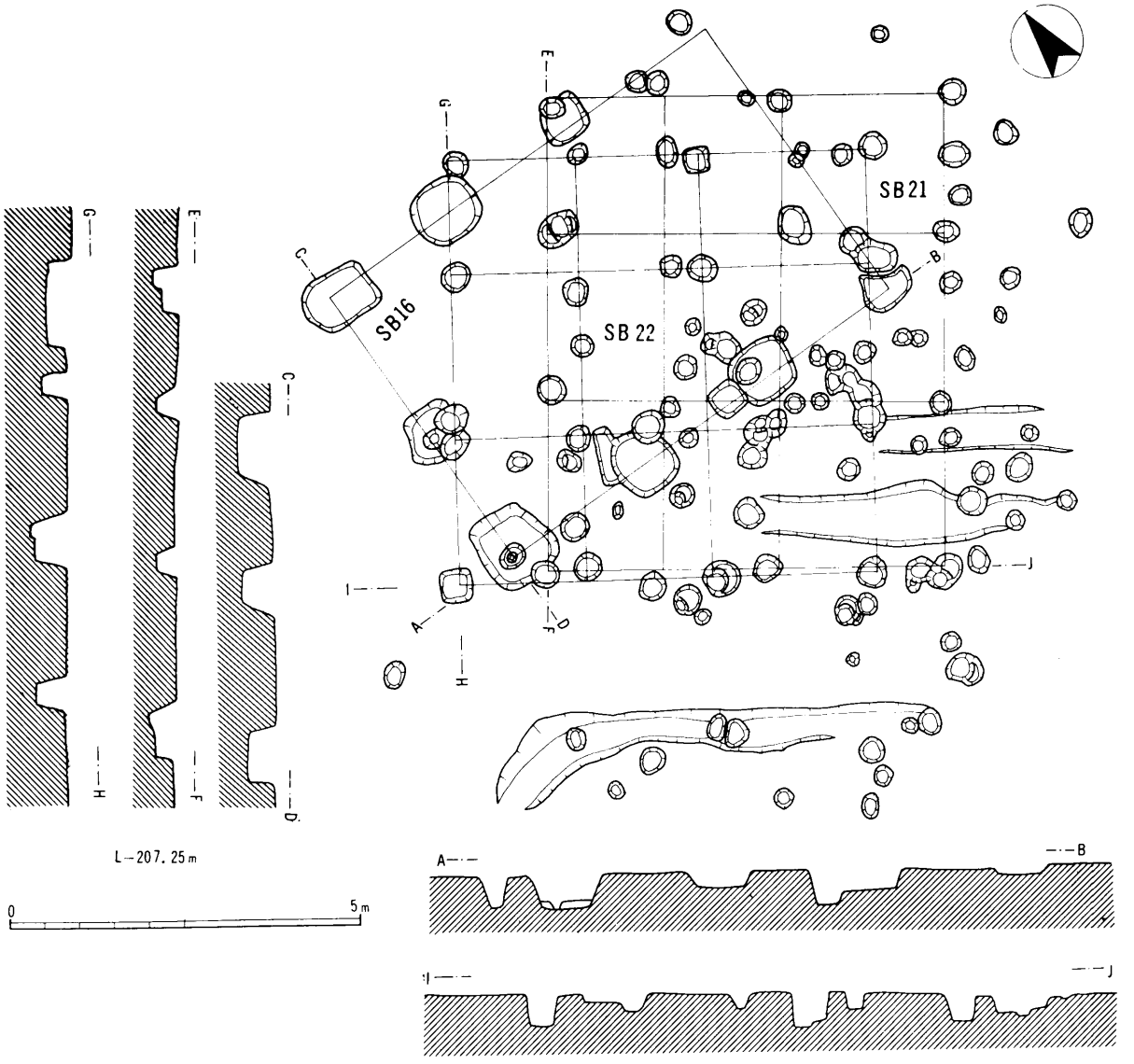
SB10　2間×2間の正方形プランをもつ建物であろう。しかし、SB9と棟をそろえ、柱間がSB9と同様2.2mで、SB9とSB10がつらなった2間×6間の長大な建物と考えることもできる。掘形は一辺0.7mの正方形を基本とする。

SB12　SB10より3.6m南側に建てられた桁行2間以上、梁行4間以上の建物である。後世の削平と中世の水溜（SP57）によって柱穴の大半を欠損する。西側柱列では、一辺0.6mの正方形の掘形を基本とし、北西隅柱が0.85m×0.75mと大きい。柱間2.0m等間である。棟方向は真南をさす。

SB13　桁行3間（6.6m）、梁行2間（4.5m）の建物である。棟方向はN37°WでSB7・SB9など南面する建物群とは方向を異にする。掘形は一辺0.6mの方形を基本とするが、対応する一対の掘形は径0.4mの円形を呈する。埋土はSB4同様粘質暗茶褐色で、須恵・土師器片を含む。

SB14　桁行2間以上、梁行2間以上の建物である。掘形は、一辺0.7mの方形に近く、柱間2.25mである。埋土中より須恵器、土師器を出土するが、埋土は淡茶色を呈し、他のものと異なる。棟方向は真南を向く。

SB15　桁行3間、(6.4m)、梁行2間（4.3m）で



第91図　SB16・21・22実測図（1：100）

棟方向はN52°Wを示す。掘形は一辺0.7mの方形を基本とする。埋土は暗茶褐色で、須恵・土師器を含む。

ＳＢ16　桁行３間（6.6m）、梁行２間（4.7m）。ＳＢ７、ＳＢ９同様に南面する建物である。遺構検出面が南西に傾斜しているためか、北東隅掘形を欠損し、深さも南西隅のものが最も深く0.4ｍである。ＳＢ７などの南面する建物群とは約40m離れているが、方形の掘形をもち、須恵・土師器を含む。真南を向く。

(3)　溝

ＳＤ33　幅0.8m、深さ0.5m、ＳＢ７などの南面する建物群と平行して走り東端で「Ｌ」字に曲る。暗茶褐色の埋土中より須恵・土師器を含む。東西12ｍ分を検出し、東端を延長するとＳＢ16北側柱列と直線的につながる。

３．鎌倉時代の遺構

(1)　溝

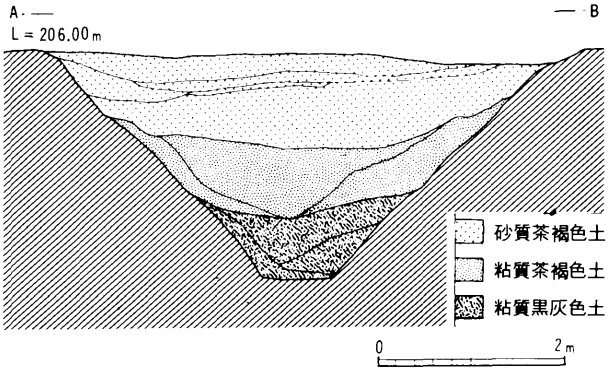
ＳＤ41　ＳＤ10と並行してのびる溝である。幅1.3ｍ、深さ0.3ｍ。北西に向かってゆるやかに傾斜し、北西端で、径0.6ｍの二段に掘り凹められた土坑につらなる。この土坑（ＳＰ58）は、深さ0.7ｍで水溜りと考えられる。暗黒褐色の埋土中に瓦器片を含む。

ＳＤ42　発掘区北東端で検出した溝である。耕作土、床土の直下から地山を切り込んで逆台形状を呈し上幅6.1m、下幅1.5m、深さ1.0ｍ。検出した範囲は7.0ｍであるが、発掘区外南東の湿地帯につらなると思われる。遺物は、埋土下層のヘドロ状暗灰色土中から多量の瓦器が出土している。

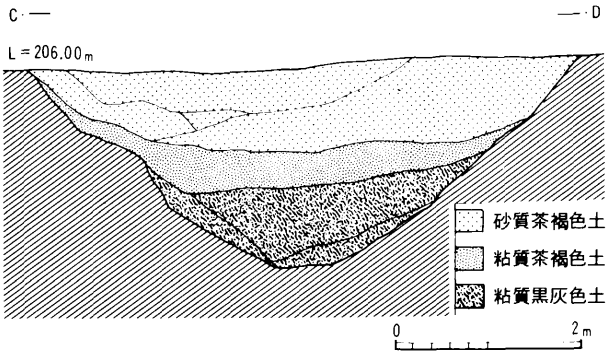
４．室町時代の遺構

発掘区全域にわたってこの時期の遺構を検出した。とくに三方を濠で区画した館跡は、室町期の城館の様相を知るうえで貴重な資料である。

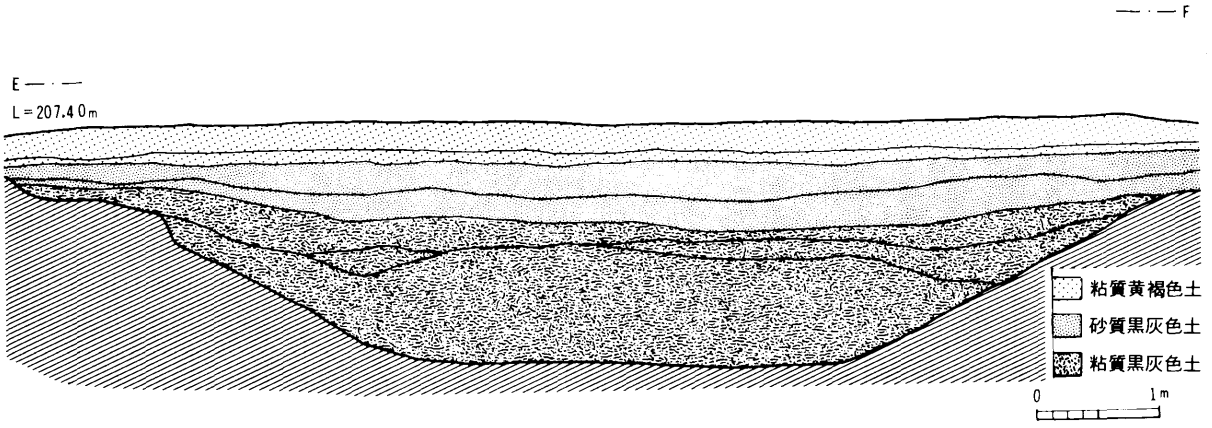
この項では、まず、濠をもつ館に伴なう遺構・施



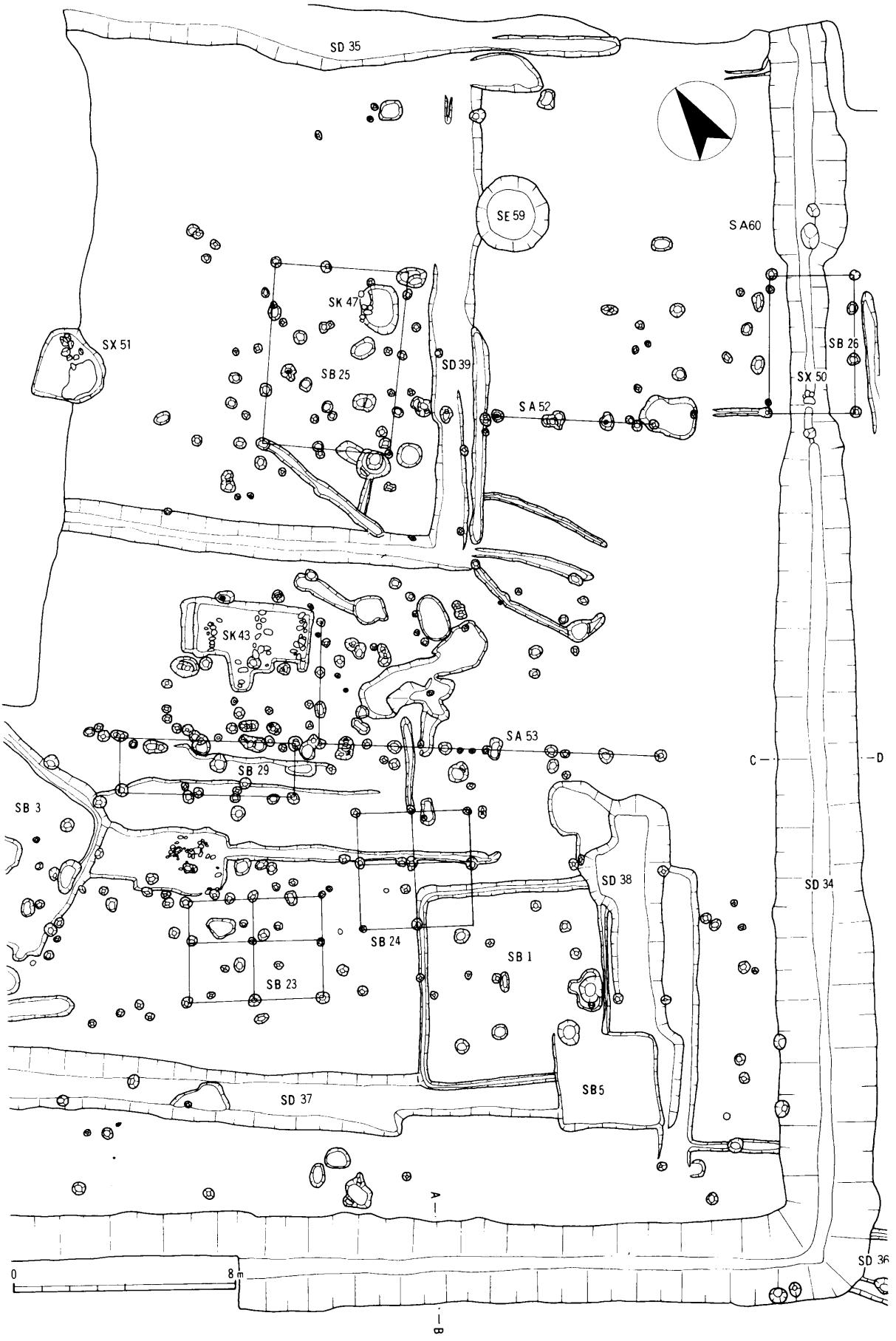
第92図　中世堀南北土層断面図（１：80）



第93図　中世堀東西土層断面図（１：80）



第94図　ＳＤ42土層断面図（１：80）



第95図　中世館跡遺構平面図（1：200）

設について、つづいて、館外の遺構について述べる。

1．館に伴なう遺構・施設

(1) 土塁・濠

ＳＡ60 郭内東隅の濠内側で、幅2.5m、長さ13.5mにわたって地山が0.4ｍ前後高い平坦面が残り、この面上に門跡（ＳＢ26）が位置する。また郭全体をみると、濠にそって「コ」の字状に室町時代後期の遺構の検出されない空白部分が認められかって濠にそって三方に土塁が構築されており、その一部がＳＡ３の状況で残存したと考えられる。

ＳＤ34・35 外周で長辺46.0m、短辺32.0m以上の「コ」の字状を呈する濠である。上幅3.0m～3.5m、下幅0.5m、深さ1.0m～1.3ｍで断面逆台形状を呈する。底面の標高は南西隅が最も低く、この部分にＳＤ36、ＳＰ57へ連続する浅い溝が切り込まれ、濠内の水量調節をおこなっている。この周濠は一周連続するものではなく北東隅で、自然の岩盤からなる比高3.0ｍの高まりによって分断されている。小谷に面した西側については、トレンチ調査の結果、落ち込みなどの遺構は認められず、自然の傾斜を利用して防御施設としたものと思われる。濠内埋土は、大きく三層に大別できる。下層はヘドロ状の黒灰色土で、濠が灌水状態であったことが推測される。中層は粘質茶褐色土で、上層は、中層に比べやや明るく砂や瀝を多く含む。下層中には遺物は含まず、中層より室町後期の丸瓦・擂鉢片が出土する。上層にもわずかに土師器片を含むが、濠埋土中には近世陶器類はみられない。

(2) 掘立柱建物

ＳＢ23 ２間（4.8m）×２間（3.8m）の総柱建物である。棟方向はＮ37°Ｅを示し、ＳＢ24、ＳＢ25とほぼ並立する。径0.3m、深さ0.3mの円形の掘形を基本とし、淡茶色の埋土中に土師器片を含む。

ＳＢ24 ３間（6.0m）×２間（4.0m）の総柱建物である。棟方向はＮ38°Ｅ。桁行、梁行とも柱間は2.0m等間である。径0.3m、深さ0.2mの円形掘形で浅い。

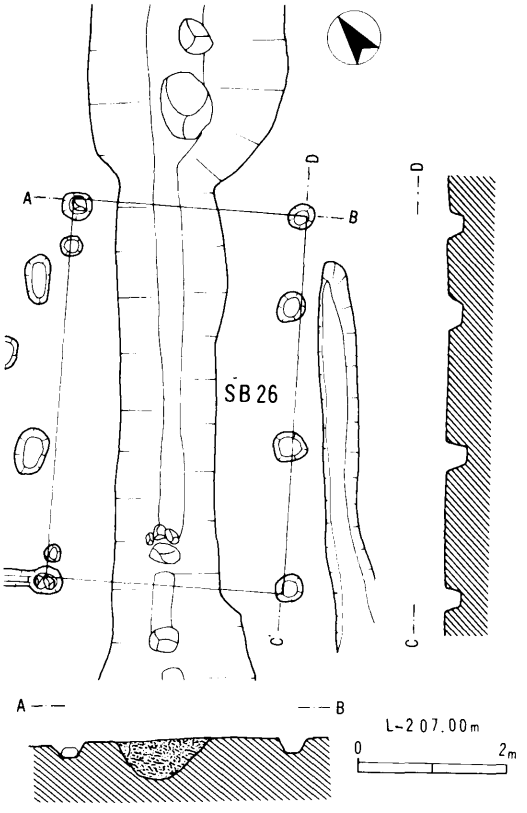
ＳＢ25 ３間（6.5m）×２間（4.6m）の建物として復元したが、柱間も不揃いであり、疑問が残る。しかし、柱穴は径、深さとも0.4ｍと安定しており、また、この建物を区画する如の溝（ＳＤ39）が検出されていることから建物を想定した。淡茶色の柱穴埋土中に土師器片、擂鉢を含む。これら３棟の掘立柱建物の柱穴内には平石を裾えたものはなく後述する柵列（ＳＡ52、ＳＡ53）とは対称的である。

(3) 門

ＳＢ26 土橋と考えた部分を挟んで郭外に４穴、郭内にも４穴対応する柱穴を検出した。郭外のものは、2.0ｍの等間で、郭内のものは両端に大小２穴が一組となり、両端の２穴には平石を裾えている。また、郭内の柱穴間には長径0.5ｍほどの隋円孔があり、石材のぬき取られた痕跡と考えられる。これらの柱穴はいずれも多量の炭を含み火を受けたようである。

(4) 土　橋

ＳＸ50 濠南東部で、濠幅が5.5ｍにわたって1.2ｍ前後に狭くなり底面も0.5ｍ高くなる部分が認められる。底面には人頭大の河原石が埋め込まれており、その上を整地している。このことから下部を暗渠とした土橋をつくり、門（ＳＢ26）を築いたと思われる。



第96図　ＳＢ26実測図（１：100）

(5) 井　戸

ＳＥ59　径2.3m、深さ4.0mの素掘りの井戸である。耕作土直下から1.3m程傾斜をもち、さらに下方へ壺状に掘り下げている。そのため口径に比して中位の径は1.3m、底径0.8mと狭い。埋土は詳しく観察することができなかったが、上部で0.3m～0.4mの河原石が多数投げこまれていた。遺物は底位から室町後期の擂鉢が出土し、その使用時期の一端を知ることができる。また前述の河原石とともに近代の鎌柄頭が混入しており、完全に埋没したのは近年のことのようである。

(6) 溝

ＳＤ36　濠ＳＤ34の南隅を切り込んで濠内の水量調節に具したと考えられる小溝である。ゆるやかに南へ傾斜しながら石組みされた「Ｓ」字状の溝を通り、水溜りＳＰ57へとつらなる。石組みは西側のみを人頭大の河原石で４段に積み上げている。

ＳＤ37　南西濠から2.8m隔てて並走する幅2.0m前後、深さ0.6ｍの溝である。埋土は砂質淡茶色を呈する。遺物は含まれていないが、埋土除去後、瓦器を伴なう柱列を検出していることからその上限を鎌倉時代後半とすることができる。この溝と濠とにはさまれた空白部分については先に述べた通り土塁を想定することができることから、土塁内側の側溝と考えられる。

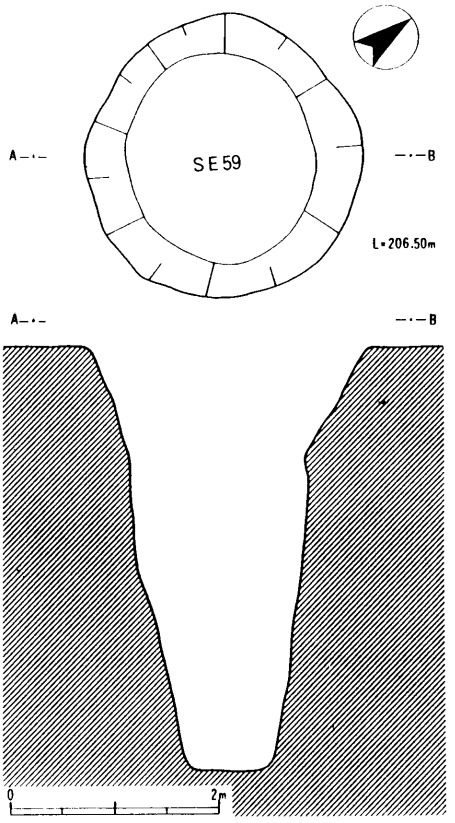
ＳＤ38　南東濠から4.0ｍ隔てて並走する幅広の溝である。柵列（ＳＡ53）と南西土塁想定部分までの8.5ｍで完結する。ＳＤ37同様土塁内側の側溝であろう。

ＳＤ39　ＳＢ25を「Ｌ」字状に囲む幅1.2m～1.3mの浅い溝である。深さは、北東端で0.1ｍと最も浅く、コーナーで0.2ｍ、北西端で0.35mと傾斜する。埋土は黒灰色砂質で土師器片、擂鉢を含む。ＳＥ59と接することから排水的な施設と思われる。

(7) 土　坑

ＳＫ47　長径1.8m、短径1.2m、深さ0.25mの隋円坑である。長辺の一方に0.2ｍほどの河原石を並べている。埋土はスミを極めて多く含んだ暗茶褐色土で、擂鉢を含む。ＳＢ25のほぼ南東隅に掘られ、家屋内の施設とも考えられる。

(8) 集　石



第97図　ＳＥ59実測図（１：60）

ＳＸ51　径2.0ｍの円坑の中に人頭大の石を敷きつめ、石材・壁土とも火を受けて焼土化している。遺物はススの付着した土師器皿、擂鉢、青磁片など多い。

(9) 水溜り

ＳＰ59　長径7.0m、短径5.0mの隋円形を呈し、北側地山面から底面まで1.0ｍ。埋土は、粘質の黒灰色でヘドロ状を呈する。遺物の出土はないがＳＤ34、ＳＤ36と連続することからこの時期のものと考えた。

(10) 柵　列

ＳＡ1・ＳＡ2「コ」の字状の濠に囲まれた郭内中央部をＮ56°Ｗの方向に並走する2列の柱列を検出した。しかし、他の柱穴とは建物を構成せず、また２列の柱穴は互いに対応するものの、柱列間が12.0ｍと長く束柱も認められないことから、独立した２列の柵列と考えた。ＳＡ52は門跡と考えたＳＢ26の南側柱列と方向をそろえて北西へ３間分検出された。柱間は1.87m等間である。柱穴径は0.4ｍを基本とし、深さ0.2ｍ、いずれも底に平らな石を裾えている。埋土は茶褐色を呈し土師器片、擂鉢片を含む。

ＳＡ53は、ＳＡ52に対応して西側へ約12.0m離れた地点で、北西へ10間分検出された。柱間、柱穴埋土、大きさともＳＡ52と同じであるが、平石をともなうものは南東から第２穴のみである。

５．館外の遺構

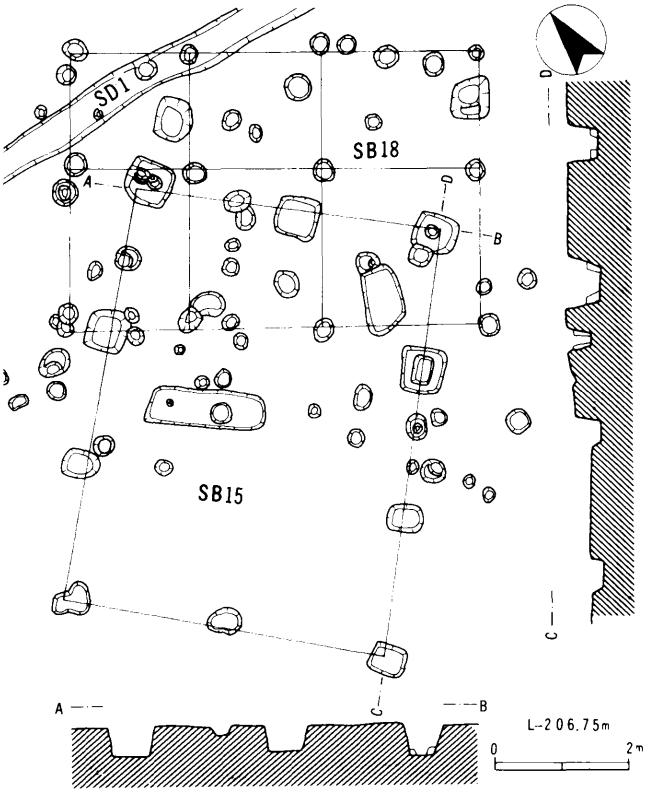
(1) 掘立柱建物

ＳＢ17　３間（6.4m）×２間（3.6m）の側柱からなる長方形の建物である。N32°Ｅで、濠ＳＤ34の南隅に位置する。径0.3m、深さ0.3mの柱穴をもつ。

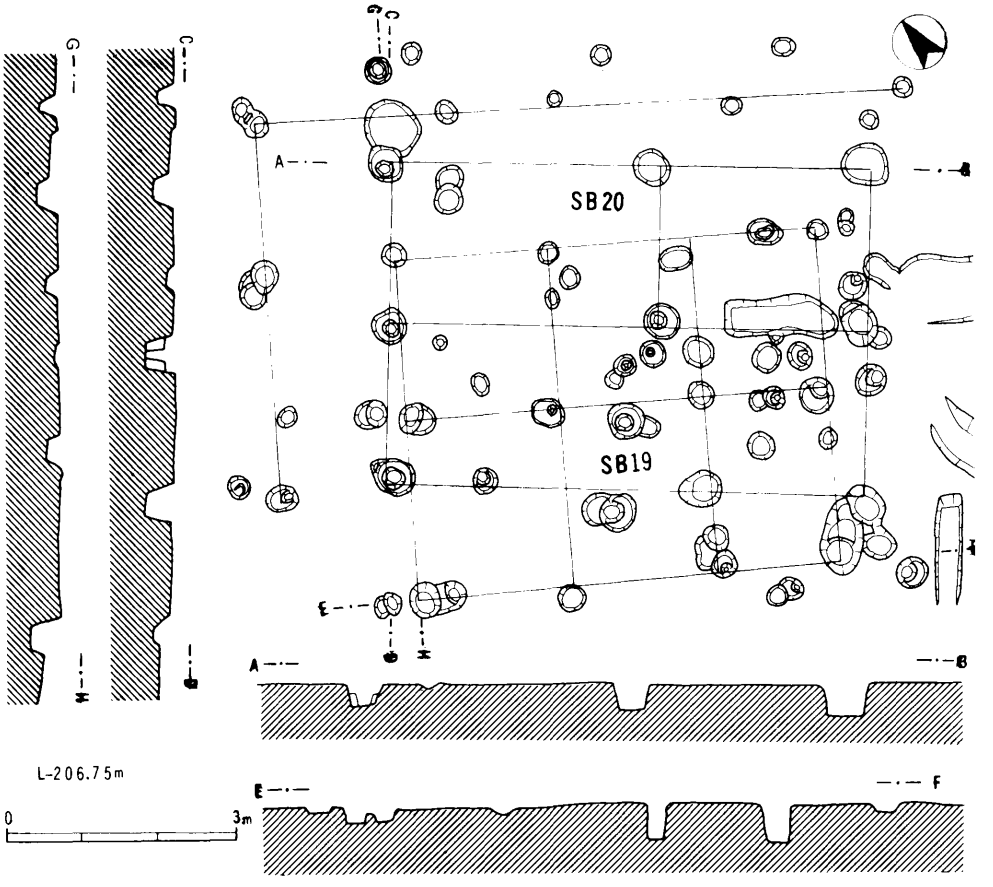
ＳＢ18　３間（6.0m）×２間（4.0m）(の総柱建物で、N38°Ｅを向く。柱間は桁行1間分が長く他の２間は1.87mと等間である。梁行も等間ではない。

ＳＢ19　桁行３間（5.6m）×梁行２間（4.4m）の総柱建物である。棟方向はN34°Ｅを示す。柱穴は径0.3m、深さ0.2mの円形である。黒灰色砂質の埋土から土師器皿が出土している。なおこの建物を「Ｌ」字状に囲む柱列が認められる。

ＳＢ20　桁行２間（6.3m）×梁行２間（4.2m）で中央に束柱をもつ建物と復元できる。棟方向Ｎ36°



第98図　ＳＢ15・18実測図（１：120）



第99図　ＳＢ19・20実測図（１：100）

Eを示す。梁行柱間は2.3m等間であるが桁行は不揃であることから建物としての疑問が残る。しかし、検出された柱穴群の中で、深さ0.6m、径0.5mときわめて安定した柱穴によって構成される建物である。埋土は黒灰色砂質を呈する。

SB21　SB22と重複して検出された桁行3間(6.8m)×梁行3間(5.7m)の長方形プランをもつ総柱建物である。棟方向はN36°EでほぼSB22と同じである。柱間は縦方向で1間分は短く他は2.5m等間、梁方向は1間分は長く、他は1.6m等間で企画もSB22と同一である。柱穴は径0.4mの円形で深さは0.2～0.3mと相対的に浅い。黒灰色砂質の埋土に、青磁片、土師器片、瓦器片を含む。

SB22　3間6.0m)×3間(6.0m)の正方形プランをもつ総柱建物である。棟方向はN35°E。柱間は、桁・梁ともに2間分等間である。柱穴は径0.5mの円形を基本とするが、深さは、梁行等間2間分は0.5mと深く、柱間の狭い北側柱列は0.2mと浅い。埋土は、黒灰色砂質土で、擂鉢、土師器片、瓦器片を含む。

4．室町以降

(1) 掘立柱建物

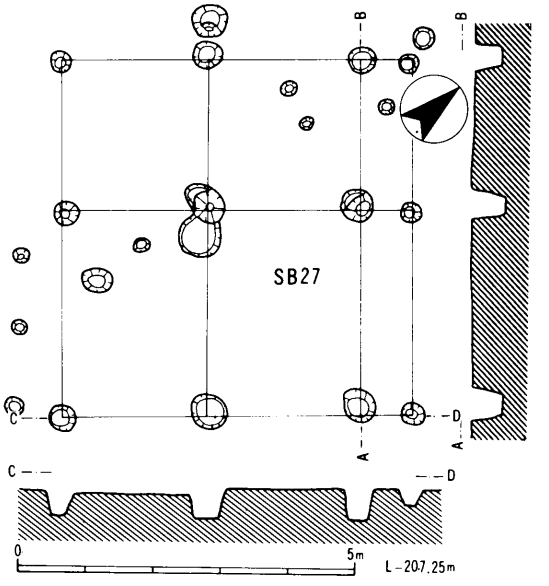
SB27　SB28の南側で、棟方向をそろえて検出された桁行2間(4.4m)、梁行2間(5.2m)で、東側にはり出し部を持つ総柱の建物である。柱間は桁行で、2.2m等間で、梁行は、3.0m＋2.2mである。柱穴は径50cm、深さ45cm前後を基本とする。

SB28　発掘区北端で、2方を石組みによって区画された中で、SB27とともに検出されたものである。

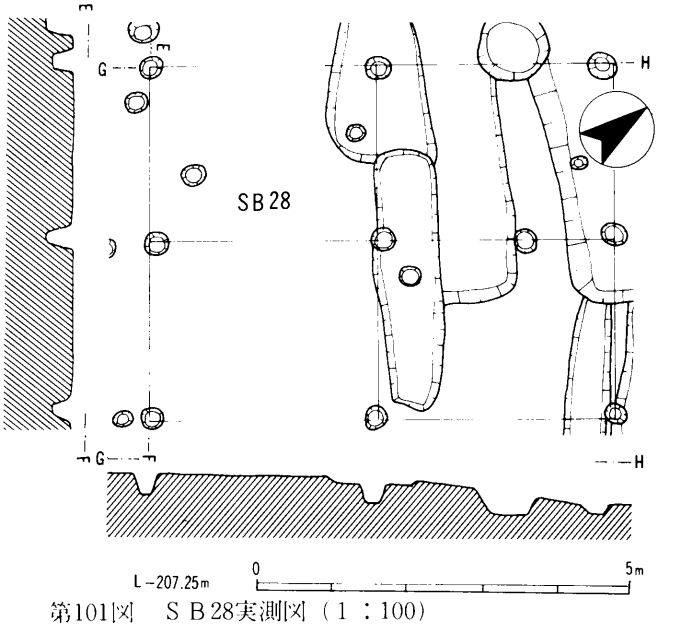
桁行2間(6.0m)梁行2間(4.8m)で棟方向はN24°Eである。柱間は、桁行3.0m、梁行は2.4mでともに等間である。柱穴は、径30cm、深さ40cmを基本とする。北東の柱列は、土師器鍋片を出土する方形竪穴状遺構埋土上面で検出された。また近世の溝によって削平されているため浅い。周辺から寛永通宝が出土しており、また先の切り合い関係からこの時期のものと考えた。

(2) 柵

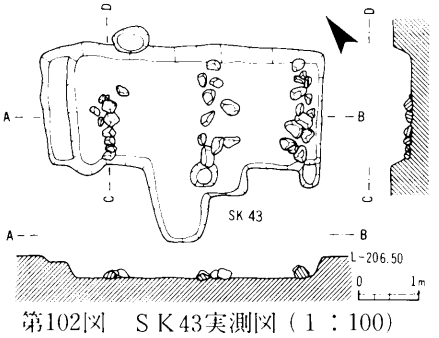
SA4・5　SB27、SB28にそって長さ21cmにわたり積まれている。長径60cm、短径30cm前後の山石を3～4段乱雑に積んでいる。石積時の裏込め中には、室町時代後期の瓦片が混入しており、SB27、SB28とともにこの石組の時期を室町以後と定めることができよう。



第100図　SB27実測図（1：100）



第101図　SB28実測図（1：100）



第102図　SK43実測図（1：100）

3．遺　　物

観音寺遺跡から出土した遺物は、弥生時代後期の竪穴住居及び方形周溝墓からの弥生土器、石器、奈良時代掘立柱建物群に伴う須恵器、土師器、中世城館跡を中心とした建物群に伴う土器、瓦、陶器、鉄器の三時期のものに大別することができる。しかし、いずれの時期のものも丘陵上の立地という遺跡の性格から、その多くが細片で、剥落が激しく、調整法等の観察は不十分にならざるを得なかった。

しかし、方形周溝墓溝内、及び竪穴住居出土の土器群は、伊賀地方における弥生時代後期の土器編年上重要な資料である。以下、時代別に概述していく。

1．弥生時代後期の遺物

方形周溝墓溝内（ＳＸ29)、竪穴住居（ＳＢ１、ＳＢ２、ＳＢ３）のいずれの遺物も暗黒褐色の遺構埋土中のものが多数を占め、床面に原位置を保って検出されたものは数点にすぎない。しかも、埋土は、床面より明確な層位をもって分層しうるものではなく、さほど長くない時期に逐次集積されてきたものと考えられる。よって本稿では、各遺構ごとに記述を進めていくことにする。

(1) ＳＸ29出土遺物

広口壺Ａ（１～３）　外弯ぎみに長く伸びた頸部をもち口縁部が下方あるいは上下に拡張され面をなすものである。１は、口径17.2cmを測り、精良な胎土で乳白色を呈す。２は、赤褐色を呈し胎土に砂粒を含む。口縁端面に１条以上の沈線が巡る。３は、下方に垂下されるとともに上外方にも粘土をはりつけ、ヨコナデして面を広く拡張するもので、円形浮文を貼った装飾的な土器である。頸部外面にタテハケの痕跡が残る。口縁のみの出土であるため、器台と考えることもできよう。

広口壺Ｂ（４・５）　肩部から短く外弯ぎみにのびる口縁部をもち端部に面をもつものである。いずれも口縁部のみの出土であるが、ともに口径6.5cm前後で、赤褐色を呈する。

広口壺Ｃ（６）　肩部から明瞭な稜をもって直線的に外傾する口縁部をもち、端部を丸くおさめるものである。胴部は、中央にはりのある球形で、やや突出した平底となる。器高15.7cm、最大腹径15.0cmの中型の壺である。調整等は不明であるが、器体中央に、焼成後うちかいた長径3.0cmほどの隋円孔をもうけている。

広口壺Ｄ（７）　肩部と明瞭な稜をもって直立する頸部をもつものである。口縁部を欠損するが、大きく外反すると考えられる。最大腹径23.5cmを測る無花果形の胴部からなだらかに底部へ移行し、幅広い平底となる。調整等不明。

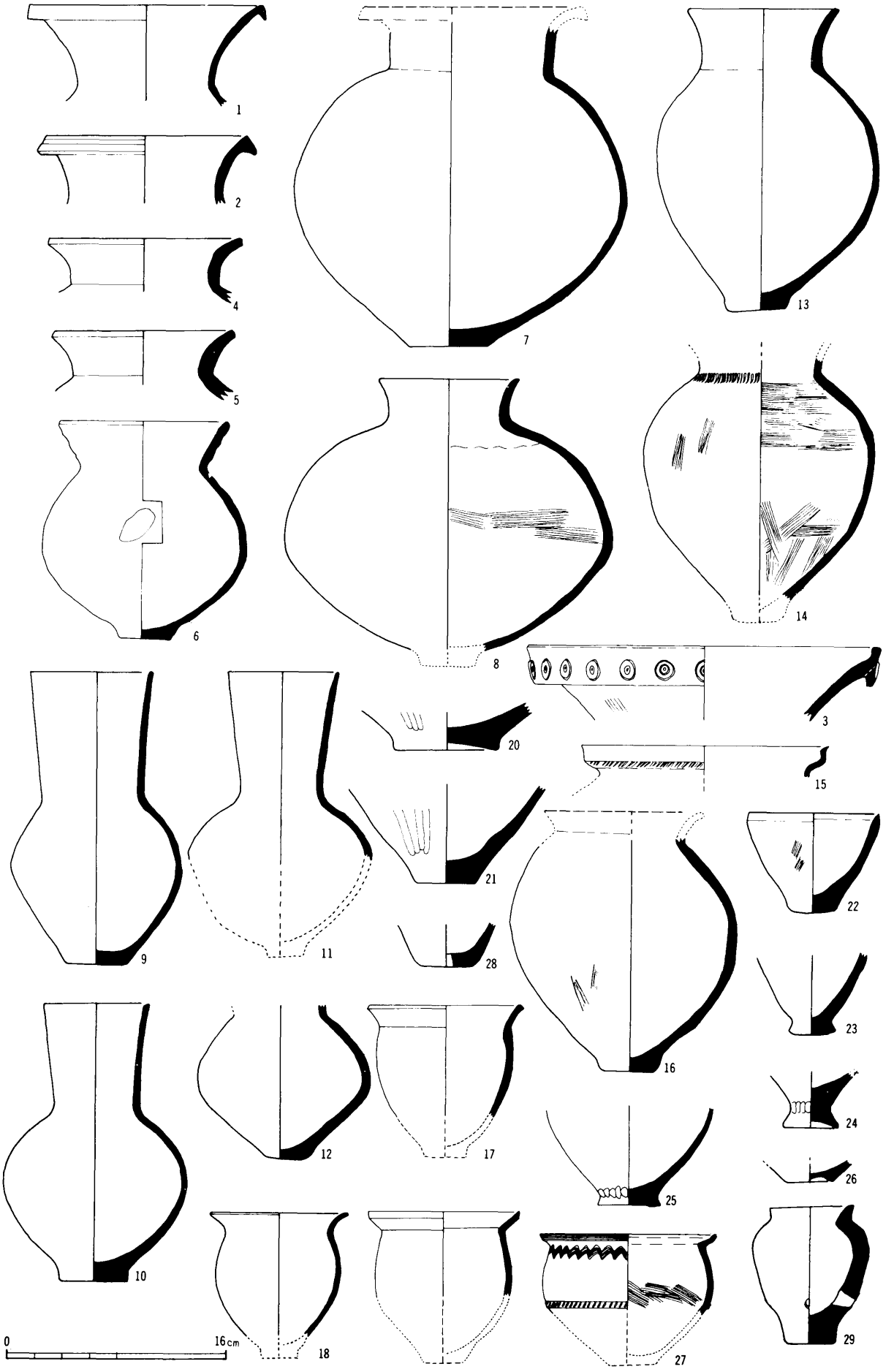
広口壺Ｅ（８）　体部中央部が強く張り出した扁平な胴部に、やや外反する短い口縁部をもつもので、端部は丸くおさまる。口縁部は強くヨコナデされ、体部内面にヨコ方向の断続的なハケ目（$^{6本}/_{1.5cm}$）が施される。口径10.0cm、推定器高21.0cm。

長頸壺Ａ（９～12）　球形に近い胴部に腹径の⅔内外の径をもち、上方へ直線的に長く伸びる頸部を有するものである。いずれも器高20cm余りの小形のものである。９は、ややはり出した胴部からなだらかに頸部へとつながり、底部は、巾広い平底となる。10は、丸味のある胴部をもち、突出した平底となる。11は、他のものに比べて頸部の外傾度がつよい。12は、中央が強く張り出す算盤玉形の体部をもつ。いずれも口縁端部で外反するものではない。

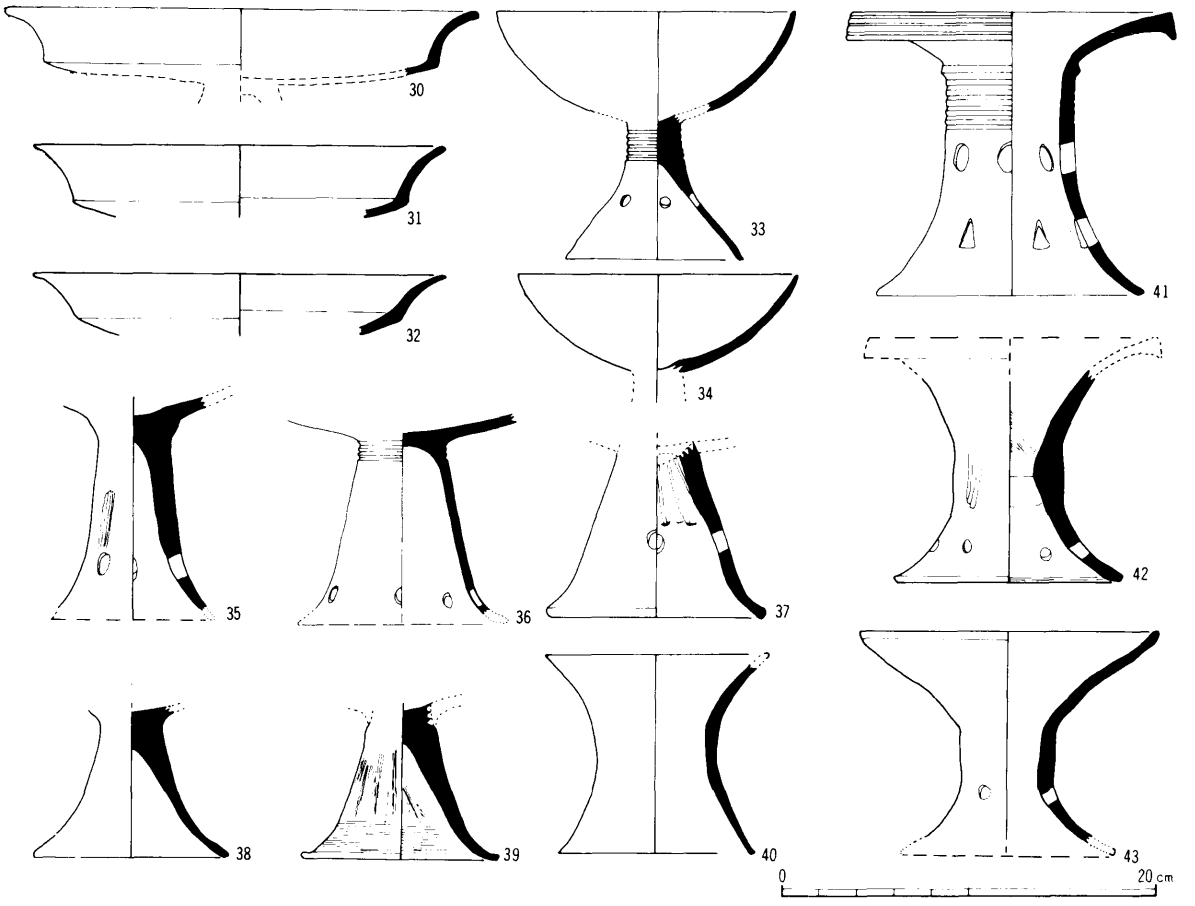
短頸壺（13・14）　長胴の体部に外弯ぎみに開く口頸部をもつ壺である。口頸部高が、器高の⅕前後を測る。13は、器高21.7cm、最大腹径16.3cm、口径11.0cm、長胴の体部からなだらかに頸部へ移行し、口縁端部は丸くおさまる。14は、口縁部を欠損するが、明瞭な稜をもって肩部から頸部へ移行し、稜直下にクシ目を施して飾る。体部外面にタテハケ、内面上半部にヨコハケ、下半部に不定方向のハケの痕跡がみられる。

甕Ａ（15）　受け口状口縁をもつ甕である。口縁部のみの細片であるため口径には疑問が残る。肩部から外反したのち短く直立し、端部はつまみ出されて、内傾する面をもつ。口縁部外面に左下がりのハケが施される。

甕Ｂ（16～19）　「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕である。16は、口縁部を欠損するが、体高16.8



第103図　ＳＸ29出土遺物（１：４）



第104図　ＳＸ29出土遺物（１：４）

cm、最大腹径16.4cmを測り、体部外面にハケの痕跡を残す。17～19は、いずれも口径、器高とともに10cm前後で、口径が最大腹径をしのぐ小型の甕である。口縁端部は、17では、面をもち、18は、丸くおさまる。また、19は、端部外面をヨコナデして垂直な面をもち尖頭状を呈する。

壺・甕底部（20～21）　壺と甕の底部をそのものだけで判別することはむづかしいので、一括して底部として摘出すると52個体を数える。そのうち底部が若干凹むもの（20）は６個体にすぎず、多くは平底（21）を呈する。

鉢Ａ（22）　胴部よりそのまま口縁端部へ移行するものである。口径9.6cm、器高7.2cm。平底の底部から内弯ぎみに外上方へひろがり、端部をヨコナデして尖頭状をなす。体部外面に細かいハケ目が認められる。

鉢Ｂ（27）　口縁部を有する鉢を一括して鉢Ｂ類とする。27は、口縁部が、外傾したのち上外方へつまみ出される。いわゆる受け口状を呈する。口縁端部に刻み目を施し、口縁部外面に３条の横線を、肩部に櫛描波状文を巡らせ、さらに、体部中央部に刻み目のある突帯を貼りつける装飾的な鉢である。体部内面中央部を右下がりのハケで調整し、上半部から口縁にかけてヨコナデする。推定口径12.6cmで、浅い椀状を呈するものと思われる。

鉢底部（23～26・28）　鉢の底部と考えられるものは27個体分出土している。平底のもの（23）が半数以上を占め、上げ底を呈し、外面に指頭圧痕の残るもの（24）、ドーナッツ状に凹むもの（26）は、すくない。また底部に径1.0cm前後の円孔をもつ有孔鉢（28）などもある。

ミニチュア土器（29）　広口壺Ｂ類を模倣してつくられたものと思われる。口径6.0cm、器高9.8cm。器壁1.5cm前後の厚手のもので、全体をナデ調整して仕上げる。体部下半に焼成前の円孔を穿っている。茶褐色を呈し、胎土は緻密で、若干の金雲母を含む。

高杯Ａ$_2$（30～32）　曲折してたつ口縁部をもつ杯部を裾ひろがりの高い脚台に乗せた高杯である。いずれも杯部の細片であるが、推定口径20～25cmを測る。口縁部外面を強くヨコナデして杯底部との境

に稜をなす。

脚部の個体数は61を数え、すべて中空のものである。35は、「ハ」の字状にスムースに端部まで移行する脚高10cm以上の長脚のものである。外面をヘラミガキし、3孔を穿つ。36は、3条の沈線を巡らす薄手のもので、脚裾部に5孔を穿つ。35に比べややふくらみをもって裾部へ移行する。38・39は、脚高8cm余りの短脚のものである。唯一調整法の観察できる39では、外面をヘラミガキした後裾部内外面をヨコハケし、さらに全体にタテ方向のハケを施している。

高杯B（33・34）　半球状の杯部をもつ高杯である。33は、口径16.0cm、器高13.1cmを測る。脚部は細い筒部から内弯ぎみに裾部へ移行し、端部は丸くおさまる。筒部には、クシ状工具による横線が2条巡り、中央部に3孔を穿つ。34は、口径15.0cmで浅い椀形の杯部のみである。いずれも調整等不明。

器台A（40）　裾部から口縁部まで曲線的にスムースに移行する器台である。器高10cm、乳黄色を呈し精良な胎土で薄手に仕上げられている。

器台B（41）　裾ひろがりの体部から大きく屈折した口縁部をもち、端部を垂下させて面をもつ器台である。口径17.0cm、器高15.0cm。口縁端面と、体部上半部に沈線を巡らせ、体部下半には、円孔と三角孔を上下に配する。また、体部と皿部の境に断面三角形の凸帯をはりつける。

器台C（42・43）　中央部のやや張る体部から屈折して、口縁部、裾部へそれぞれ移行する器台である。ともに内面の指おさえによる凹凸が顕著である。42は、内面に右下がりのハケの痕跡がみられる。いずれも、推定器高13～14cmを測る。

(2)　SB1出土の遺物

広口壺A（44～46）　長く外上方へ伸びた頸部から外反する口縁部につづき、端部を下方に拡張して面をもつ。46は、口径21.0cm、口縁端面に4条の沈線を巡らし、頸部と体部の境に断面三角形の凸帯を貼りつけその直下に櫛目を施す。44・45はいずれも端面に装飾をもたない。

広口壺B（47）　肩部から短く外弯ぎみにのびる口縁部をもち端部に面をもつ。口縁のみの出土であるが推定口径12.0cm。

広口壺C（48）　肩部から明瞭な稜をもって直線的に外傾する口縁部をもつ。端部に面をもつ。推定口径15.4cm。

広口壺E（49）　肩部から外弯する口縁部へスムーズに移行し、明瞭な稜をもたない。端部は丸くおさまる。中央部のはった扁平な胴部がつくものと思われる。口径10.8cm、頸部はヨコナデされる。

長頸壺A（50）　体部下半部のみの出土である。球形の胴部に突出した平底の底部をもつ。最大腹径12.4cm体部外面にハケの痕跡が残る。燈黄色を呈す。

短頸壺（51・52）　51は、直立したのちやや外反する口縁部をもち端部は丸くおさまる。肩部にクシ目列が巡る。52は、口径11.2cm、口径部は肩部から明瞭な稜をもって外弯ぎみに直立する。端部は若干肥厚し面をもつ。肩部には51同様クシ目列が巡る。

甕A（57・58）　受け口状を呈する口縁部をもつ甕である。ともに口縁のみの細片で、口径には疑問が残る。口縁部をヨコナデし外面にクシ状工具による刺突文を施している。暗黒褐色を呈し胎土に砂粒を多く含む。

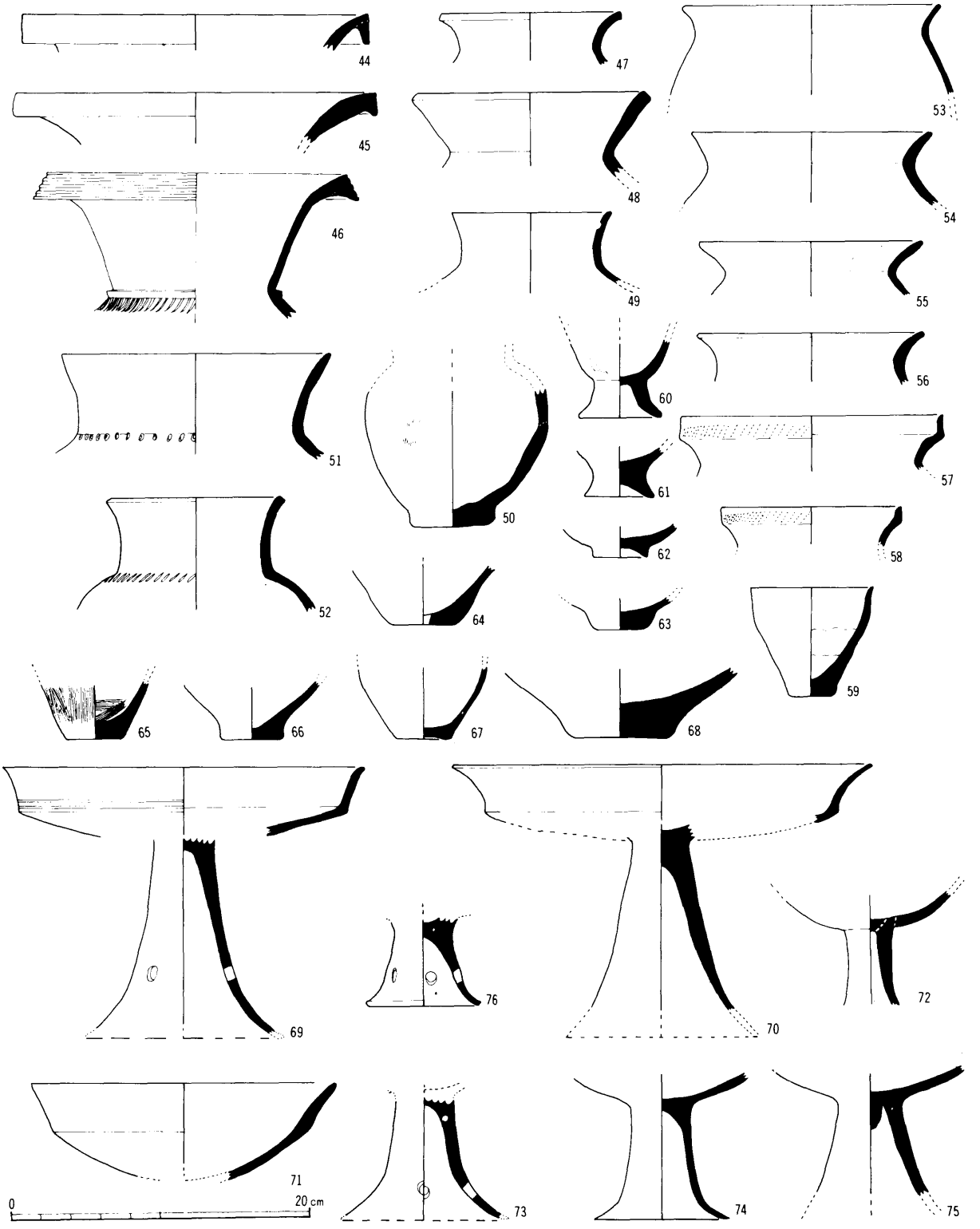
甕B（53～56）　いずれも口径15～16cmで、内面に明瞭な稜をもって「く」の字状に外反する口縁部をもつものである。53は、燈黄色を呈し薄手に仕上げられる。調整法や胴部の形状を知り得るものはないが、細片の中に数点だけタタキ目の観察できるものがある。

鉢A（59）　口径8.0cm、器高7.3cmの小形の鉢である。底径2.8cmの平らな底部から内弯ぎみに外上方へのびる体部をもつ。口縁端部はヨコナデされ、内面はナデつけて粘土巻き上げ痕を消している。淡燈色を呈す。

鉢C（60）　脚台をもつ鉢である。脚高2.4cm、底径5.4cm。脚部は「ハ」の字状に開き、端部でわずかに肥厚し丸くおさまる。脚内外面ともヨコナデし、体部外面をタテ方向のハケ目を施す。

有孔鉢（64）　底径4.3cmの平底の中央部に径0.8cmの円孔を穿つ。体部内面はハケ調整したのちなで消している。外面は淡茶色を呈するのに対し、内面は黒灰色を呈する。

高杯A_1（69）　口径24.0cm。浅い体部から直線的に外傾する口縁部をもち、端部はヨコ方向に若干つ

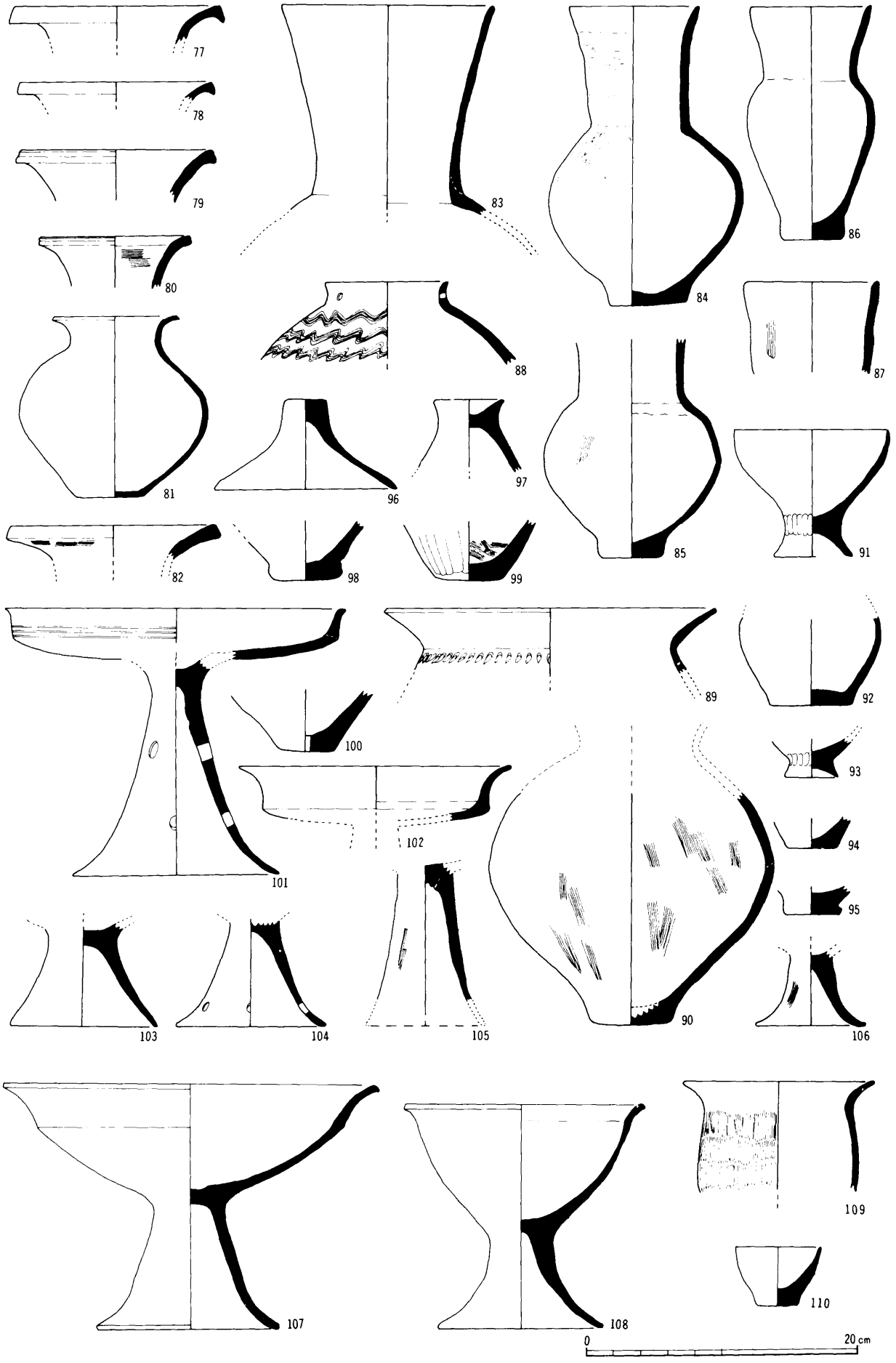


第105図　ＳＢ１出土遺物（１：４）

まみ出され、水平な面をもつ。口縁部と体部との境に明瞭な稜をもち、２条の沈線が巡る。

高杯Ａ₂(70)　口径28.0cm、口縁部のみの出土であるが、明瞭な稜をもって外反する。端部は丸くおさめられる。脚部は、69同様「八」の字状にゆるやかに開く長脚のものと思われる。

高杯Ｂ（72）　口縁部を欠損するが、浅い椀形の杯部をもつものと思われる。杯部と脚部の接合は、円筒状の脚部を挿入したものである。乳黄色を呈し胎土は緻密である。



第106図　ＳＢ２・３出土遺物（１：４）

高杯C（71）　口径20.5cm、深い杯部をもち、口縁部のヨコナデは強くなく外反度は弱い。内面の稜はほとんど目立たず、椀状を呈する。体部を口縁部高とはほぼ等しく、高杯A類とB類との中間的な様相を示す。

(2)　SB3出土の遺物

広口壺A（77～79）　口縁端部を拡張して面をもつ壺である。いずれも口縁部のみの出土であるが、口径15.0cm前後と推定される。79の端面には1条の沈線が巡る。

広口壺B（80・81）　肩部から外傾したのちわずかに外反する口縁部をもつ。80は、推定口径11.0cm、淡燈色を呈す。口縁部はヨコナデされ、端面に1条の沈線が巡る。81は、口径9.0cm、器高13.2cm、最大腹径13.9cm。肩部から頸部へなだらかに移行し、わずかに外反し、外上方に面をもっておわる。胴部中央部の張った球形の体部をもち底部は突出しない平底となる。淡茶色を呈し、精良な胎土による薄手のつくりである。

長頸壺A（83～85）　83は、口径15.6cm、頸高14.0cmと大形の長頸壺である。直線的に外傾する口頸部をもち外面をていねいにヘラミガキし、口縁部はヨコナデする。淡燈色を呈する。84は、口径9.4cm、器高21.9cm最大腹径14.3cm。球形の胴部から直立する長い頸部をもち、わずかに外反しておわる。底部は突出した平底となる。外面には、細かいタテ方向のハケを施す。85は、最大腹径13.0cmの球形の体部に突出した平底がつく。体部外面にタテハケがみられる。

長頸壺B（86・87）　肩のはった長胴の体部から直立したのち内弯ぎみにのびる口頸部をもつ壺である。86は、器高17.0cm、頸高5.9cm、口径8.8cm。底部は突出した平面である。黒褐色を呈し胎土に砂粒を多く含む。

短頸直口壺（88）　球形ないし扁平な体部にきわめて短い口縁部をつけた壺である。口径9.0cm。口頸部は直立し強くヨコナデされ、端部は尖頭状を呈する。肩部外面に櫛描波状文（$^{5本}/_{1.2cm}$）が3条巡る。また、頸部に2ヶの円孔を穿つ。

甕B（89・90）　89は「く」の字状に外反する口縁部をもち端部は面をもっておわる。推定口径24.0cm、口縁部内外面ともヨコナデし、肩部に笹状工具による刺突文を施す。90は、最大腹径21.0cm。体部全面に煤が付着し、内外面とも、ハケ目の痕跡が残る。

鉢C（91）　口径11.2cm、器高9.2cm。深い椀形の杯部をわずかに裾のひろがる短い脚部にのせた鉢である。杯部は内弯ぎみに上外方へのび尖頭状を呈しておわる。

蓋形土器（96・97）　96は口径13.4cm、器高6.5cm。平坦なつまみ部をもち笠形の体部をなす。外面はていねいにヨコナデされる。内面端部に煤が付着する。97は、端部を欠損するが、天井部の凹むつまみをもつ笠形の蓋と考えられる。

有孔鉢（100）　底部のみの出土である。底径4.0cmの平底に径1.0cmの円孔を穿つ。内面は黒灰色、外面は黄茶色を呈する。

高杯A_1（101）　復元口径25.0cm、器高20.0cm、浅い杯部に直立した口縁部をもち端部は外方にわずかにつまみ出され水平な面をもつ。口縁下部には2条の凹線が巡り、脚部には上下二段、交互に6個の円孔が穿たれる。

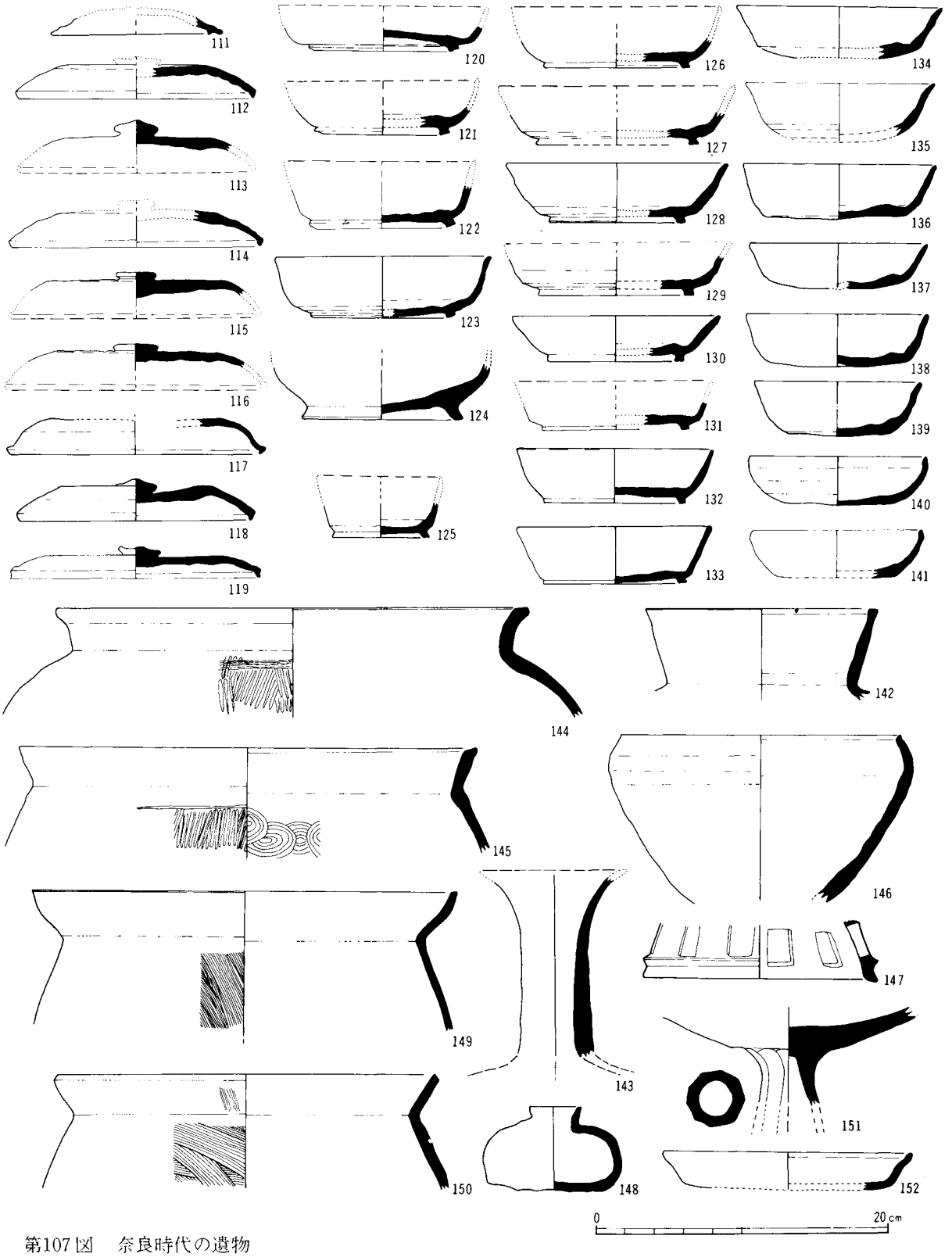
高杯A_2（102）　推定口径20cm。口縁部が強くヨコナデされ、杯部との境に明瞭な稜をもって巻き込むように外反する。脚部の形状には、直線的に「ハ」ノ字状にひらくもの（103）、裾でやや屈折するもの（104）、脚高5.0cmの小形のもの（106）がみられるが、長脚のもの（105）が主流を占める。

(4)　SB2出土の遺物

高杯A_2（107）　口径27.0cm、器高18.0cm。深い杯部から、強くヨコナデされた口縁部へつづく高杯である。脚部は中央でややふくらんだ後、裾部へ移行する。脚部外面にはヘラミガキの痕跡がみられ、裾部はヨコナデされる。杯内面底部は指おさえにより若干凹む。

高杯D（108）　B類に比して深い杯部を、裾ひろがりの短い脚部にのせた高杯である。杯部は内弯ぎみにのびたのち、わずかに外反し、端部に面をもっておわる。剝落がひどく調整等不明。

甕B（109）　「く」の字状に外反する口縁部をもち端部は丸くおさまる。口径14.0cm、最大腹径11.2cmで、口径が最大腹径を凌ぐ小形の甕である。体部



第107図　奈良時代の遺物

内外面とも細かいタテ方向のハケを施す。黒褐色を呈する。

ミニチュア土器（110）　口径6.2cm、器高4.3cm。内弯ぎみにのびる体部をもち端部は尖頭状をなす。内外面ともヨコナデする。

2．奈良時代中葉の遺物

この時期の遺物は、ＳＢ６、ＳＢ７、などの大型掘立柱建物掘形埋土・土坑ＳＫ31、ＳＫ32、方形竪穴状遺構などから出土している。須恵器片が多く土

師器は細片で図化できたものは数点にすぎない。

(1) 須恵器

杯蓋A（111） 口縁部のみの破片である。推定口径11.6cmで、口縁部内面にかえりをもつ。かえりは、口縁端部よりもやや下方へ突出している。

杯蓋B（112～119） 天井部を粗くヘラ削りし、中央部に扁平な宝珠形つまみをもつ。口縁端部は短く屈曲し端部内面はわずかに肥厚する。いずれも口径17cm前後を測る。つまみは扁平なもの（116・119）と、まだ宝珠形のおもかげを残しているもの(113・118)とがある。内面はいずれも横ナデ調整後、仕上げナデを施す。119は、他のものに比して天井部のふくらみがすくなく平らに成形され内外面とも横ナデ調整をし、ヘラケズリ痕を残さない点やや新しい様相を示す。

杯身A（120～133） 高台をもつ杯身で、口縁部が外上方へのび丸くおさまるものである。高台が「ハ」ノ字形にふんばり高台下端部内側に接地面のあるもの（120～124)、ややふんばるが高台端部が水平なもの（125～133）に分類することができる。総体的に口径は15cm前後を測る。しかし、125は推定口径10cmで直線的に上方へ伸びる口縁部をもつ小型のものである。

124は、胎土に砂粒を多く含み、焼成の甘い粗雑な感を与える。器壁は厚手で、断面方形の高く安定感のある高台のつくものである。132・133は、他に比して高台が底部端につくやや小ぶりのものである。外面の調整法としては、内外面とも横ナデされているが、体部下半にヘラケズリの痕跡を残し稜をもって口縁部へ移行するもの（127・128）もある。

杯身B（134～139） 平坦な底部から直線的に外上方へのびる口縁部をもつものである。端部は丸くおさめられる。体部は内外面とも横ナデされ、底部は未調整である。また内面中央には仕上げナデを施す。

杯身C（140・141） 平坦な底部から内弯ぎみにのびる口縁部を持ち端部がわずかに肥厚して丸くおわるものである。口径11.0cm前後と小ぶりで、内外面ともていねいに横ナデされる。底部外面は未調整で粘土の巻も上げ痕が残り、内面中央に仕上げナデを残す。

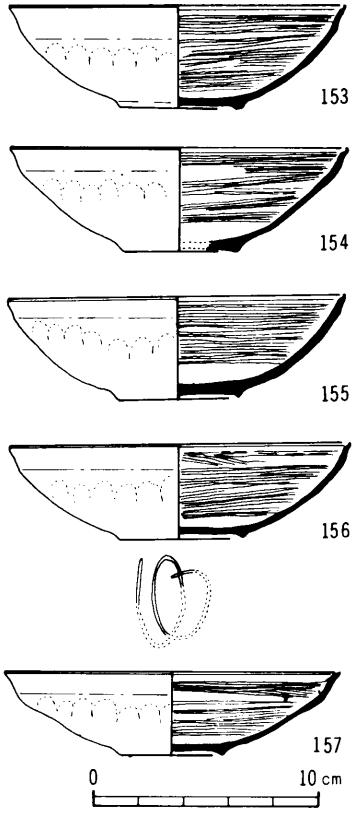
直口壺（142） 口縁部のみの出土である。直立して上方に伸びる口頸部を持ち端部はやや内側に肥厚し、水平な面をもつ。推定口径15.4cm、内外両とも横ナデされる。

長頸壺（143） 頸部のみの出土である。口頸部は細長く、上方へ次第に外反しながらのびる。推定頸高12.4cm、口径10.0cm、胎土に砂粒を多く含み、全体に淡緑色の自然釉がかかる。

甕（144・145） 145は「く」の字状に外反する口縁部を持ち、端部は内傾する面をもつ。口縁部はロクロナデされ体部外面には平行タタキ目、内面には同心円文が残る。推定口径31.0cm。144は、外反する口縁端部を外上方へつまみ出し内傾する面をもっておわる。頸部内外面はロクロナデされ、体部外面に平行タタキ目を残し、内面は、ていねいにナデ消されている。推定口径32.0cm。

鉢（146） 内弯する口縁をもち、器壁は上端へ近づくにしたがって薄く、端部は外上方へつまみ出され、内傾する面をもっておわる。内外面ともていねいに横ナデされ、体部内面下半は不定方向のナデで調整される。推定口径19.0cm。

円面硯（147） $\frac{1}{10}$ほどの細片であるため底径、傾きには疑問の残るところではあるが、8方に長方形



第108図 鎌倉時代の遺物（1：4）

のスカシ孔をもつ底径約18.0cmの円面硯と考えられる。胎土・焼成とも良好である。

ミニチュア土器（148）　口径3.4cm、長径9.4cm、短径5.0cm、器高5.6cmをはかる楕円球の体部に短く直立する口縁部をもつもので、あたかも俵瓶を模した如くのものである。手捏ねによって成形され凹凸が激しい。

(2) 土師器

甕（149・150）　149は、推定口径29.0cm、口縁部はやや内弯ぎみに外上方へのびたのち内側へ短くかえり、端部に水平な面をもつ。口縁部内外面はナデられ、体部外面には右下がりの細かいハケが施される。体部内面については不明。明褐色を呈す。

150は、推定口径25.8cm、「く」の字状に外反した口縁部をもち端部に外上方に向く面をもつ。体部外面にはハケを施す。口縁部の調整については剝落がひどく不明であるが、若干タテ方向のハケを残す。

高杯（151）　断面9角に面取りをした脚柱部に水平方向に開く浅い盤状の杯部をのせたものである。脚柱外面はヘラ削りされ、杯部内外面はていねいにナデられている。胎土は緻密、赤燈色を呈す。

皿（152）　口縁部のみで口径には疑問が残る。口縁部は、横ナデされ端部は肥厚し丸くおさまる。高杯の杯部とも考えられる。胎土は緻密で、赤燈色を呈す。推定口径17.0cm、器高2.6cm。

3．鎌倉時代の遺物

瓦器椀（153～156）　A類、器高指数30前後で、断面三角形状に近い、高台が貼り付けられ、外面のヘラミガキは消滅して指頭圧痕の残る椀である。

いずれも口径15.0cm～15.2cm、器高4.2cm～4.7cmを測る。154は、他に比して厚手のものであり、内面ヘラミガキは密である。155は、内面底にヨコ方向にハケ調整したのち暗文を施す。156は器高指数28でやや偏年である。

B類（157）　口径15.0cm、器高3.7cmを測る。器高指数24を示し扁平な感を与えるものである。高体部はあまり内弯せず外上方へ開き、高台は断面三角形の低いものである。内面のヘラミガキには間隙があり、外面には指頭圧痕を残す。

4．室町時代の遺物

(1) 擂　鉢

擂鉢A（158～165）　軟質のもので、内面に施された筋目が1単位3～5条を数え、内面を10前後に分割するものをA類とする。以下口縁の形態により3形態に分類する。

A_1（158～161）　口縁は端部で外反し内傾する面をもつ。158は、推定口径26.0cmの瓦質の擂鉢である。3条の筋目が、口縁直下まで掻き上げられる。160は、推定口径24.0cm。乳白色を呈する。筋目原体は不明であるが、内面を6～8分割し体部中位まで掻き上げている。161は淡燈色を呈しやや硬質である。内面を1単位4条の筋目で10～12分割する。推定口径30.0cm。

A_2（162～163）　底部から直線的にのびて端部がヨコナデされて尖頭状をなす。162は、口径28.0cm。胎土に0.1m～0.3mの長石を多く含み乳黄色を呈す。原体4条の筋目で内面を13～15分割する。163は、162同様の色調、胎土をもつ。口縁内面には1条の横線が巡る。原体4条の筋目で横線直下まで掻き上げられる。内面を10～12分割する。

A_3（164、165）　口縁部をヨコナデするが端部が丸くおさまるものであるともに淡赤色を呈す土師質の擂鉢である。内面に軽い段をもち、その直下までゆるくカーブした筋目が掻き上げられる。165の外面にはクシ状工具による横線がみられる。

擂鉢B（166、167）　茶褐色ないし赤褐色を呈し、硬く焼き占められ、原体5～6条の筋目で、内面を20前後に分割したものを総称してB類とする。ともに口縁端部は外反して丸くおさまり、内面直下に段をもつ。

擂鉢C（168、169）　硬く焼き締められ、施釉された擂鉢である。内面の筋目もほぼ全面にひろがる。169は口縁のみの出土であるが、外面に幅2.5cmの縁帯をもち2条の凹線を巡らす。

(2) 土師器

皿A（170～172）　口径7.5cm前後、器高1.3cm前後で、底中央部が指オサエによって凹む「ヘソ皿」に似たものである。体部はナデ調整され、上外方

向を向き、底部には、指頭圧痕が残る。

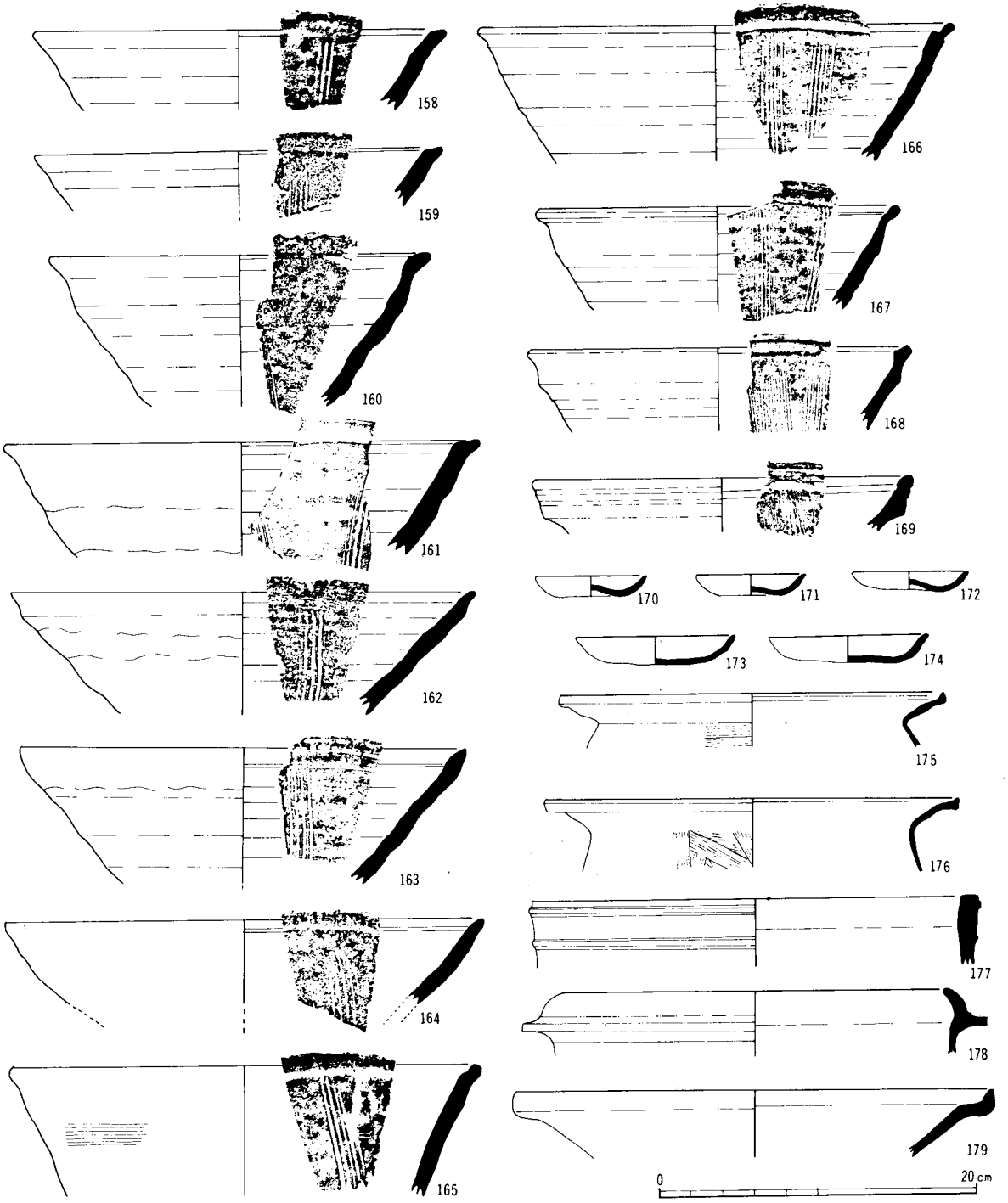
皿B（173、174）　口径10cm、器高1.8cmを測り、底面がほぼ平坦な皿である。体部内外面ともヨコナデする。底部は凹凸がはげしい。いずれも煤が付着している。

鍋（175、176）　「く」の字状に強く外反する口頸部をもち、口縁部は断面三角形を呈し、端部は上方につまみ上げられている。いずれも口径部のみの破片で、口径には疑問が残るが、175は口径24.0cm、やや丸味をもった体部をもつものと思われる。体部は粗いヨコ方向のハケを施す。176は口径26.0で、体部外面にヨコハケとタテハケをまばらに施す。

(3)　瓦質土器

鉢（177）　推定口径28.0cm。直立する体部に2条の凸帯を貼り付ける。内外面とも黒色を呈する。凸帯の間に印刻文の痕跡を残す。火舎の口縁部と思われる。

羽釜（178）　口径24.0cm。大きく内弯する口縁部



第109図　室町時代の遺物（1：4）

に、断面長方形の鍔が水平に巡る。

(4) 陶磁器

青磁皿（179）　口径15.0cm。直線的に外傾する体部から、水平方向へのびたのち端部で垂直につまみあげられた口縁部へつらなるものである。淡緑色を呈す。高台の付くものと思われる。

4．結　　語

観音寺遺跡は、名張川の支流釜石川左岸に面した丘陵端に位置する弥生時代から中世に至る複合遺跡である。水田面からの比高20m前後と前面に広がる沖積地を一望できる立地をもつ。後世の掘削のため遺跡の西側は消滅しているが、総面積は7,000㎡を越えると思われる。

調査の結果、弥生時代後期の小集落、奈良時代中葉の官衙的色彩の濃い建物群、室町時代後期の中世城館跡を中心とした建物群の三時期の遺構を検出した。

その他鎌倉時代中頃の瓦器を伴なう大溝を検出したが、その時期の確実な建物等は今回の調査では確認することはできなかった。

以下に各時期毎に今回の調査の成果と問題点を列記しておきたい。

1．弥生時代

この時代に属する遺構・遺物は、3棟の竪穴住居（ＳＢ１～３）と「コ」の字状を呈する溝状遺構（ＳＸ29）それらに伴なう総点数350余りの土器、石器である。この溝状遺構は、西側を後世の掘削のため確認できないが、溝内側で一辺13mを測る方形区画をもつものと推測される。周溝の深さは一定ではなく、現存する２つのコーナーがやや高く、北西隅では、幅2.0mにわたって陸橋部状に掘り残されている。この溝内からは総個体数150余りの弥生土器が出土しているが、土器の配置には意図的なものが見られず、区画内からの転落により遂次集積されていったものと思われる。これらの土器の器種構成は、壺あるいは甕と思われるものが35%、鉢が18%、高杯が41%、器台４%、その他２%と、他の竪穴住居に比して高杯の比率が高い。また器台形土器４点、体部を焼成後うち欠いて隋円孔を設けた壺など儀器的な意味をもつ遺物の出土が顕著である。このようなことから、この溝状遺構を方形周溝墓と考えてよかろう。伊賀地方における方形周溝墓の検出例は、弥生中期の大山田村北切Ｂ遺跡[1]での２基と、後期の上野市山ノ川遺跡[2]との２遺跡で、南伊賀では初の検出となった。この方形周溝墓をとりまくように３棟の竪穴住居を検出しているが、後述するように、時間的に大きな隔たりは認められず、集落内において居住地と墓地とが隣接して営まれていたことが推測される。

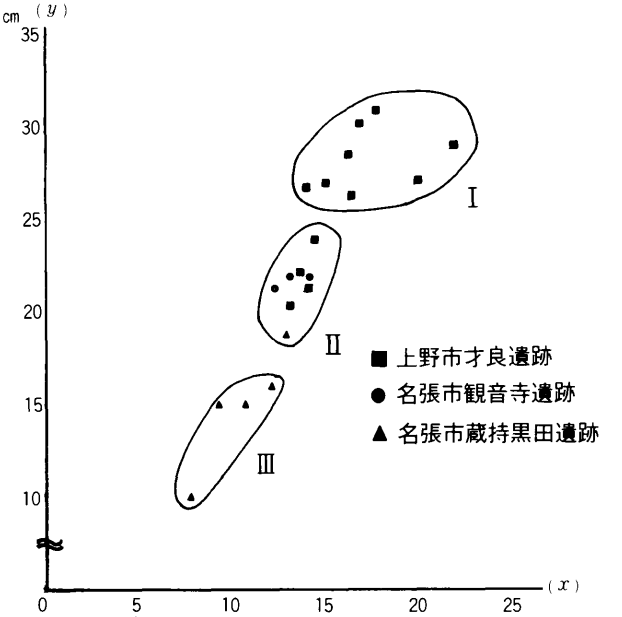
土器では流水文の施された細片が一点混入するほかは、壺、甕、高杯、鉢、器台など畿内第Ｖ様式に属するものである。

遺跡全体の器種の構成比率をみると、壺あるいは甕が40%、鉢形土器19%、高杯38%、その他３%と、方形周溝墓ＳＸ29の41%を最高として極めて高杯の比率が高い。蔵持黒田遺跡[3]など県内外の統計結果と比較すると、一般住居跡における器種構成はおおむね壺、甕があわせて55%前後、高杯が20%前後、鉢形土器が18%前後となっており高杯の比率が２倍近い値を示す。これと同様の傾向をもつ遺構としては、摂津の会下山Ｐ・Ｑ地点祭祀址[4]、あるいは奈良県六条山方形竪穴、方形土坑[5]などが相当し、いずれも非日常的性格をもつと解されている遺構である。このようなことから方形周溝墓をとり囲み短期間に終結する集落の様相を知る上で興味深い。

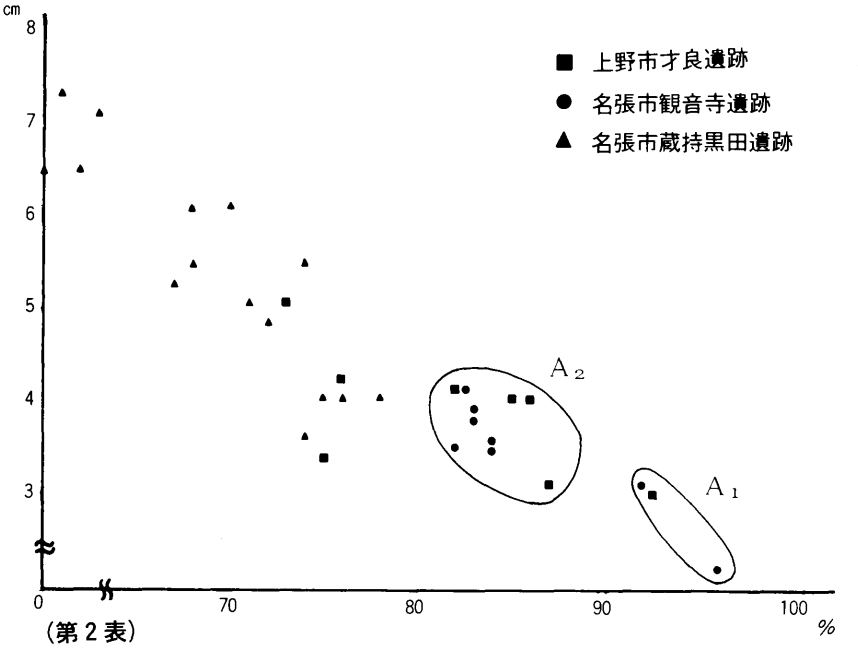
次に、本遺跡出土土器群の指向する時期について各器種ごとに留意される点を整理していきたい。

広口壺では、口縁部の形態から５型式に分類して観察したが、口縁端部を下方に拡張して面をもつＡ類の出土が多く、これらは「弥生式土器集成」分類の畿内第Ｖ様式壺Ａと類似している[6]。伊賀盆地では、この種の壺は上野市才良遺跡ＳＤ１[7]に類例がみられ、口縁端部を大きく拡張垂下させ４条の沈線と円形浮文で飾るものと、口縁端面に半載竹管を施し、口縁

部内面に波状文を巡らす装飾的なものが報告をされている。これに対して本遺跡では、ＳＢ１、ＳＢ３、ＳＸ29から軽い沈線が施されるか、あるいは無文化したものが出土し、ＳＢ２からは検出をされていない。また、後期後半の名張市蔵持黒田遺跡[3]ではすでに壺Ａ類はみられない。口縁部が直線的に外傾する壺Ｂ類は口縁端部に面をもち、体部は丸味をおびているものの器高を凌賀するには至っていない。類例は、上野市田中遺跡[8]に一例あるのみで、畿内では、纒向東田土坑１上層例と類似し後期中頃の所産とされている[9]。長頸壺は、ＳＢ３（83）を除いてすべて器高20.0cm～25.0cmと小形化しているが、頸部と体部の稜は比較的明瞭で、直立する口頸部をもつ点、典形的な長頸壺のプロポーションを残している。前出の蔵持黒田遺跡ＳＸ６出土例は頸部と体部との稜があまく大きく外傾する口縁部をもつ。また蔵持黒田ＳＸ６と同時期頃の名張市土山遺跡ＳＫ７出土例[10]は、器高12cm最大腹径12.0cmと極めて小形化し短い口頸部をもつ。これに対して才良遺跡[7]では長頸壺の占める割合いが高く、器高も25cm～30cmの大形品が主流を占める。伊賀盆地出土の長頸壺の最大腹径をx軸に、器高をy軸として図化したものが表１であるが、これによると器高25cm以上、最大腹径12cm以上のⅠ群、器高20cm～25cm、最大腹径12.0cm～14.0cmのⅡ群、器高16.0cm以下のⅢ群と大きく３つに分けられる。そしてそれらはおおむね、才良遺跡、観音寺遺跡、蔵持黒田ＳＸ６に相当する。また、畿内では、第Ⅴ様式の中で最も古いとされる西ノ辻Ⅰ地点式[11]がⅠ群と、新しい時期とされる唐古第45上層式[12]がⅢ群に近い値を示す[13]。高杯では椀状の杯部をもつＢ類と皿状の杯部をもつＡ類がみられる。Ａ類はさらに口縁部が直立ぎみに立ち上がるA_1類と、杯部から稜をもって外反するA_2類に分けられる。遺構毎にみるとＳＢ１、ＳＢ３ではA_1類、A_2類が共伴しているがＳＢ２、ＳＸ29ではA_1類はみられない。表２は才良遺跡、観音寺遺跡、蔵持黒田遺跡出土の高杯の口縁部長をy軸に、外傾指数（杯底部径÷口縁部径×100）をx軸[14]として図化したものであるが、口縁部長が短く外傾指数90％以上のものがA_1類に相当し、A_2類としたものは外傾指数80％～90％を示す。この表の如く高杯の杯部の形態差は口縁部の外傾度と長さによって規定されることがわかる。A_1類は観音寺遺跡で２例、才良遺跡で１例とその占める割合いが低く、第Ⅴ様式の初頭とされる奈良県橿原市忌部山遺跡[15]のように、直立あるいは内傾する口縁部をもつものを主体とし、大形の装飾的な器台、長頸壺Ⅰ群を伴なうものとは様相を異にしている。現在までのところ伊賀盆地ではこ



（第１表）



（第２表）

のような組成の遺跡は検出されていない。また、蔵持黒田遺跡の高杯は、外傾指数が60%～80%の範囲におおきくばらつきをみせ口縁部の発達と同時に外傾度が増している。A_1類としたものは河内の西ノ辻E式[16]、摂津の会下山F、L住居祉資料[4]に、またA_2類は、摂津の田能6Y調査区2溝[17]に類似する。杯部と脚部の接合手法は、SB1を例にとると、中空のままの脚基部の上縁に杯底部を積み上げ、中央に粘土塊を明らかに充填したものが54個体中26個体確認され、充填によるおさえの結果と断定しえないが杯中央部が凹むものが14個体と中期に盛行する粘土円板を充填する手法の遺制が高い割合いで残存している。

また、内面のシボリ目を残すものは極めて少なくナデによってていねいに消されており、内面にシボリ目を残すものを主流とする蔵持黒田出土例とは異なる。脚部の形態は内弯ぎみに開くもの1点、円筒状の脚部片2個体、他は「八」の字状にゆるやかに開くもので、すべて中空形態をとり、これは才良遺跡にもいえる。器台では、小形で無文のものと装飾的なものがSX29より4個体出土しているが、いずれも筒形器台で、無文のものもゆるやかに受部から裾部へ移行するもので、蔵持黒田出土例「く」の字に受部と裾部が分かれるようなものではない。また、装飾的な器台は、鈴鹿市上箕田Ⅳ式器台B類[18]と、下段の透し孔が三角形であることを除けば文様構成はすべて一致する。甕として識別できるものは極めて少ないが、単純に「く」の字状に外反するものと、いわゆる受け口状を呈するものがある。体部の調整法は摩滅がひどく不明な点が多いが、タタキ目が観察できるものは数点で、多くはハケ目を残すものである。

この傾向は、才良遺跡でもみられ、これに対して蔵持黒田遺跡、同市井手城屋敷遺跡[19]ではタタキを施すものが主流を占める。また、甕ないしは壺の底部が軽く凹むものあるいはドーナッツ状に凹むものの占める割合いは、10%前後とフラットな平底が圧倒的に多いこともタタキによる調整法が主流でないことの傍証となろうか。口縁端部の形態は才良遺跡では、わずかに下方に垂れさがり面をもつものが多く、

本遺跡例は、面をもつもの、丸くおさまるものが共伴する。しかし端部が上方へつまみあげられるものはなく、蔵持黒田遺跡SB1床面資料以後散見される。鉢の調整、底部の形状も甕と同様の傾向にある。体部中央部に刻目凸帯を巡らせ受け口状口縁をもつ鉢C類は、手焙形土器との関連が強いとされ、類例は前出の上箕田Ⅳ式鉢B類[18]にみられる。以上の諸点から観音寺遺跡の時代的な位置づけについて、大阪府大師山遺跡[20]、安満遺跡[17]、奈良県六条山遺跡[5]などで試みられている畿内第Ⅴ様式の細分の成果に依拠して整理していくと、大師山遺跡では弥生後期を前半2小期、後半3小期に、また六条山では前半、後半各3小期に細分し、いずれも、その画期を二種口縁壺、手焙形土器、細頸壺などの出現に求めている。

この二大区分に従うならば、観音寺遺跡からはそのいずれの器種も出土しておらず、後期前半に中心を置くといえよう。才良遺跡からは手焙形土器の出土をみ、また排土中からの採集品であるが弥生後期末頃の小形器台など新しい要素もみうけられるが、加飾に富む壺A類、大形品の長頸壺の多量さ、高杯A_1類を伴なうことなど、本遺跡に比して古相の要素も多く、先行する土器を摘出することも可能である。

蔵持黒田遺跡[3]の報文の中で、後期後半の4細分が示されており、その中で最も古いとされるSX6出土資料中には、外傾指数73%前後の外傾度の高い中実形態の高杯や手焙形土器を伴ない、また長頸壺の形態などから、高杯A_1を伴なわないSX29、SB2よりも後出と考えられる。このようなことから、限られた資料の中で伊賀地方の弥生後期の土器の様相について述べることについては限界があろうが、おおむね、才良遺跡SD1、観音寺遺跡SB1、3を後期古相、SX29、SB2を中相に、蔵持黒田遺跡SX6を新相として大禍ないと思われる。さらに、今後の資料の増加をまって伊賀地方における細分化が進められることであろう。また、伊賀地方の弥生後期の地域性については、すでに「近江・東海とのつながりをもちながらも、圧倒的な畿内様式の優性さにおおわれた感がある」[8]とされているように、本遺跡でも、近江・東海とのつながりを示す高杯C類や受け口状口縁甕A類などがわずかに認められるにとどまる。

2．奈良時代

この時期の遺構としては、方形の掘形をもつ掘立柱建物10棟などが検出された。そのうち7棟は主軸

をN89°Eに向けほぼ南面する。すべての柱穴を検出できた建物がすくないためその機能について言及できないが、掘形の大きさからすればＳＢ６・ＳＢ７が中心的建物と考えられようか。このＳＢ６・７を中心として８棟の掘立柱建物が集中し、ＳＢ16が１棟離れて建てられている。掘形内及び周辺遺構の遺物から時期を推定すると、かえりをもつ須恵器杯蓋一点の他は、奈良時代中頃と考えられる。遺物は、須恵器が多く、中に円面硯を含む。なお、硯を伴なう奈良時代の遺跡は、名張盆地では宇陀川左岸に、西から、辻垣内遺跡、観音寺遺跡、浦遺跡、赤坂遺跡、鴻之巣遺跡と点在し、夏見廃寺を含めて相互の関連を今後検討していくことが必要であろう。

３．室町時代

この時期に属する遺構としては、10棟の掘立柱建物などがある。うち４棟は城館堀内に他は堀外で検出されている。城館は、３方を幅2.5m、深さ2.5mの堀で区画されており、北側は、比高15m余りの小谷へつらなる。内溝長辺43m、短辺29.5mの長方形を呈する城館跡である。この堀にそって、この時期の遺構が認められない空白地帯が幅２mにわたって「コ」の字状に巡りここに土塁を想定することができる。堀は瓦器片を含む柱穴を削り取って掘込まれていることからその上限を鎌倉時代後半に求めることができる。

館跡に伴なう土器類は、擂鉢をはじめとする日常雑器が多く、その中で擂鉢Ａ類Ｂ類が中心をなす。このことから城館の時期はおおむね15Ｃ後半から16Ｃ前半に中心を置くと考えられる。堀内からの出土遺物はきわめて少ないが堀床面上で軒丸瓦、埋土中層で擂鉢Ａ類が出土している。しかしいずれの層にも近世陶器類がみられないことから、16Ｃ前半以後短期間に堀が埋没したと考えられ、城館跡そのものもこの時期に廃絶したと考えられる。なお、堀埋土、上層の瀝層中には、若干の須恵器片、弥生土器片を含むことから、土塁盛土が埋積したと思われる。堀外の建物群については、ＳＢ16柱穴内及び、ＳＫ44から、擂鉢Ａ、Ｂ類が出土しており、城館内建物と大きな時期差は認められない。

門跡と考えたＳＢ26を、大手門と考えるかどうかは疑問が残る所であるが、堀に並行して走る古道を堺としてこの時期の建物が棟方向をほぼN36°Ｅ前後にそろえて建てられており、その生活用水を確保するため井戸が遺跡の中で一ヶ所しか検出されなかったことから、土塁に囲まれた建物を中心として、相互の関連をもって一つの集落を形成していたものと考えられる。

名称ＳＡ	規模(間)	方　向	桁行(m)	梁行(m)
6	(3)×(1)	南　面	((6.7)	(2.6)
7	(2)×(1)	〃	(4.4)	(2.1)
9	4 × 2	〃	8.6	3.8
10	2 × 2	〃	4.2	4.1
12	(2)×(4)	〃	(4.2)	(7.6)
13	3 × 2	N53°E	6.6	4.5
14	(2)×(2)	南　面	(4.6)	(4.7)
15	3 × 2	N38°E	6.4	4.3
16	3 × 2	南　面	6.6	4.7
17	3 × 2	N　°E	6.4	3.6
18	3 × 2	N32°E	6.0	4.0
19	3 × 2	N38°E	5.6	4.4
20	2 × 2	N34°E	6.3	4.2
21	3 × 3	N36°E	6.8	5.7
22	3 × 3	N36°E	6.0	6.0
23	2 × 2	N36°E	4.8	3.8
24	3 × 2	N38°E	6.0	4.0
25	3 × 2	N41°E	6.5	4.0
27	2 × 2	N24°E	4.4	5.2
28	2 × 2	N24°E	6.0	4.8

(第３表)

この中心的館の構造については、この時期の完堀例が少ないため詳しく言及できないが、ＳＢ25を取り囲むようにＳＤ39が巡りこの内側には焼土とスミを伴なうＳＫ49が掘られ、また調理用具としての擂鉢が多いことから、井戸を含めてその性格がうかがわれる。

中央部を走る２列の柵列にはさまれた遺構としては時期不明のＳＫ43があるのみで、空白地帯となる。柵列ＳＡ53の南側には、ＳＢ24．ＳＢ23の２棟の建物が、建てられている。この南西のＳＤ37とＳＡ53、ＳＡ53とＳＡ52、ＳＡ52と北側堀ＳＤ35のそれぞれの距離はいずれも12m前後で２列の柵列によって郭内が３等分された形となっており、３分された地割にそれぞれ独自の機能が付与されていたとも考えら

れる。ＳＡ53とＳＤ37、ＳＤ38に囲まれた地区内にＳＢ23．ＳＢ24の２棟が営まれている。しかしＳＢ24は、２間×２間の総柱建物で倉庫的なものとも考えられるし、ＳＢ23も主屋とするには規模が小さい。今後の発掘例をまって検討していく必要がある。

（仁保晋作）

〈註〉

① 田中喜久雄・新田洋「北切Ａ・Ｂ遺跡」昭和58年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告　三重県教育委員会　1984

② 谷本鋭次「上野市山ノ川遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会

③ 水口昌也・門田了三『蔵持黒田遺跡』　名張市遺跡調査会　1979

④ 石野博信・林川行弘・森岡秀人『増補・会下山遺跡』芦屋市教育委員会編　1985

⑤ 寺沢薫ほか『六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所編　1981

⑥ 佐原真「畿内地方」『(弥生式土器集成)　本編２.』1968

⑦ 西森平之『才良遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会　1983

⑧ 宇佐晋一・森川桜男「伊賀における弥生式土器・土師器集成」『伊賀郷土史研究４』1961

⑨ 石野博信・関川尚功『纒向』奈良県桜井市教育委員会　1976

⑩ 門田了三「土山遺跡」『名張市遺跡調査概要Ⅲ』1989

⑪ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」『弥生式土器集成１』1958

⑫ 末永雅雄・小林行雄・藤方謙二『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊』1943

⑬ 長頸壺の統計的処理については、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』奈良県国立文化財研究1981を参考とした。

⑭ 高杯についても前掲⑬を参考とした。

⑮ 網干善教ほか『忌部山遺跡発掘調査報告書』奈良県都市計画地方審議会　1977

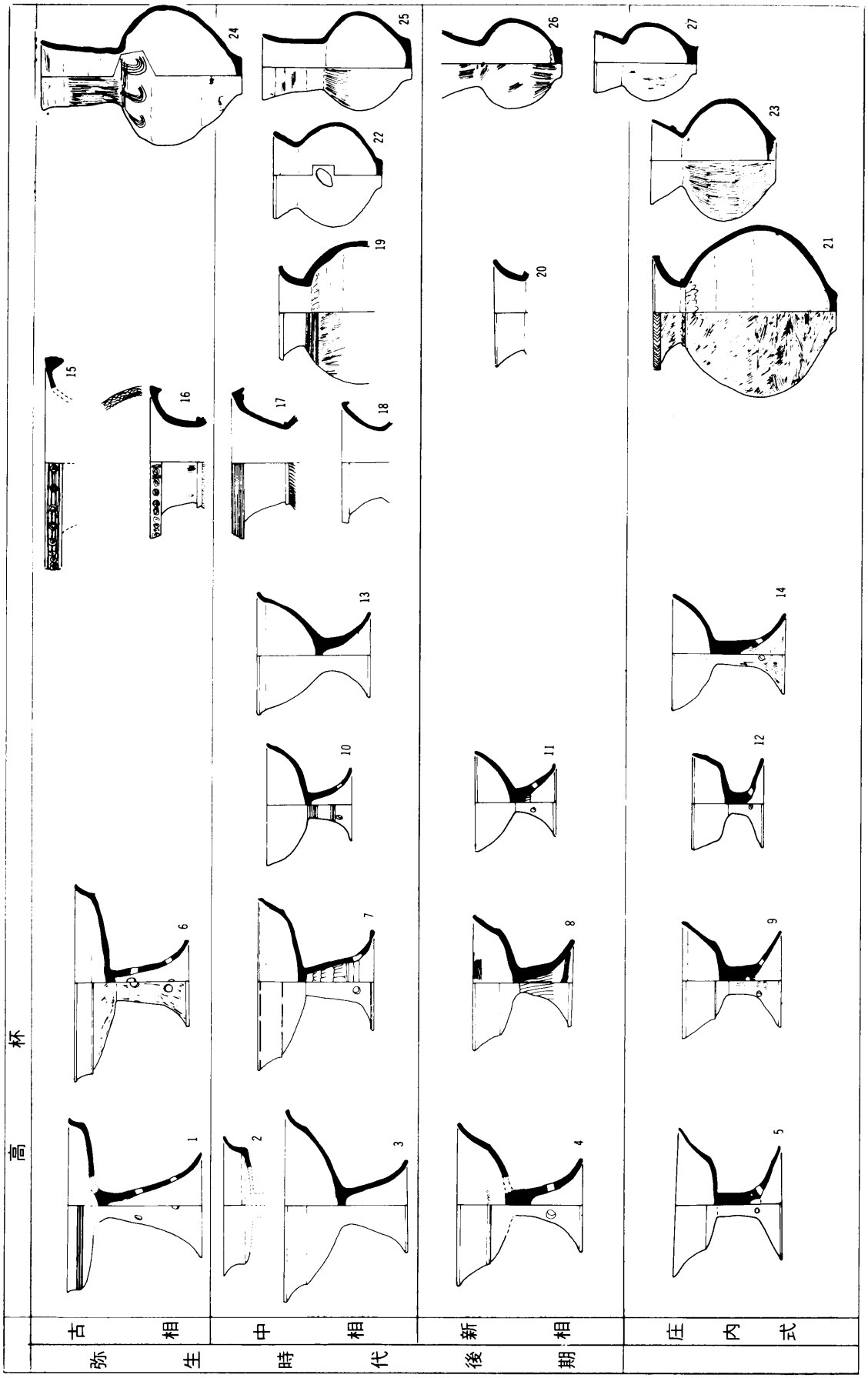
⑯ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ｅ・Ｆ・Ｏ・Ｈ地点の土器」『弥生式土器集成１』　1958

⑰ 森田克行・橋本久和『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会　1977

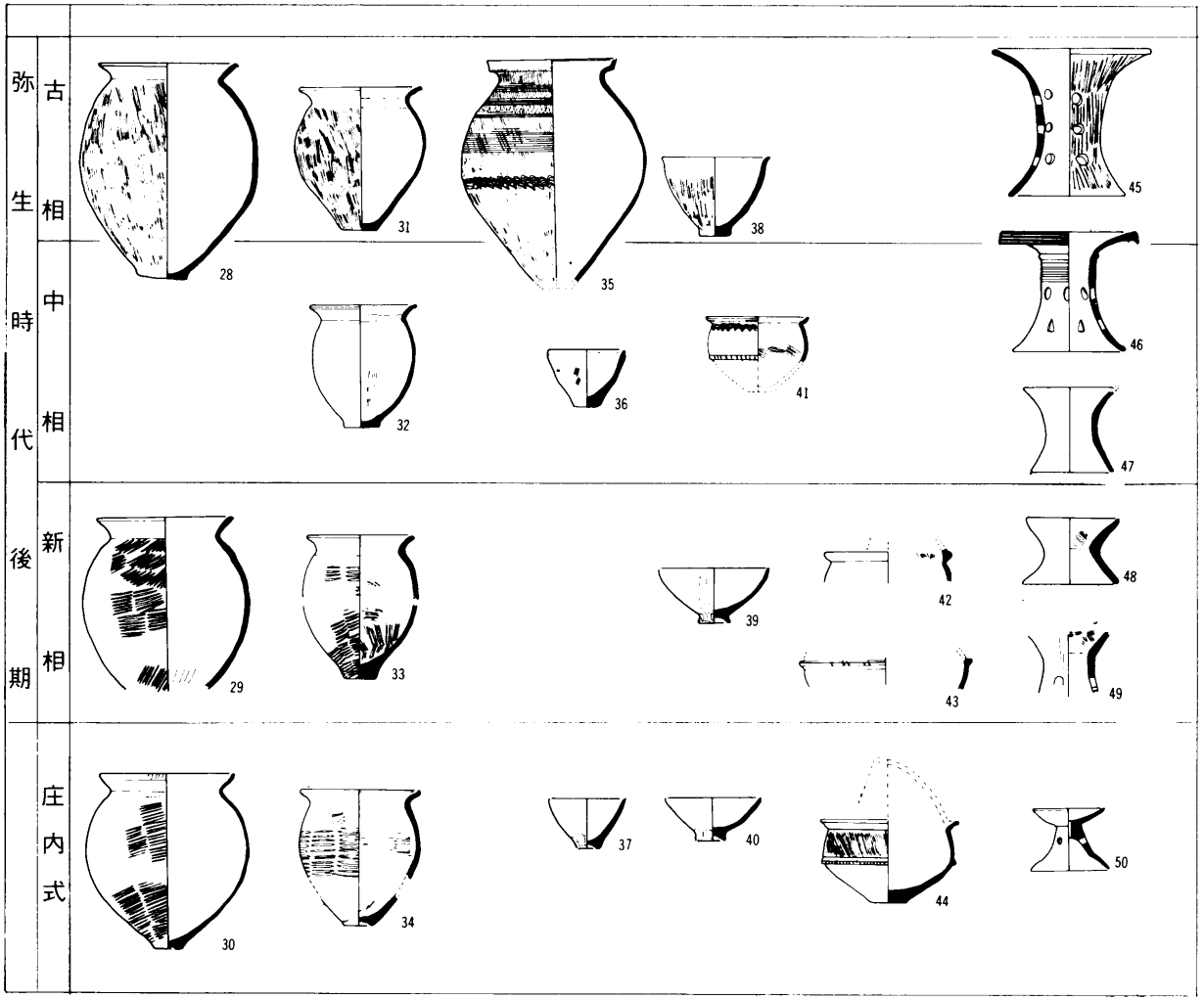
⑱ 真田幸成・大場範久・仲見秀雄『上箕田弥生式遺跡第二次調査報告』鈴鹿市教育委員会

⑲ 水口昌也・門田了三『井出・城屋敷遺跡』名張市教育委員会　1985

⑳ 網干善教ほか『河内長野市大師山遺跡』関西大学　1977



(第4表) 伊賀地方における弥生時代後期編年試案1 (1：8)



第5表　伊賀地方における弥生時代後期編年試案2（1：8）

第6表

遺　跡　名	出土状況	遺物対照番号（第5表）
名張市観音寺遺跡	S　B　5	(1、2、25)
〃	S　B　3	(3、13)
〃　蔵持黒田遺跡	S　X　6	(4、8、11、20、26、29、
〃　蔵持黒田遺跡	S　X　6	(4，8、11、20、26、29、33、39、42、43、49)
〃　白早稲遺跡	S　X　23	(5)
上野市才良遺跡	S　D　1	(6、10、15、16、24、28、45)
〃　神　部	グリッド3	(7、19、32)
名張市蔵持黒田遺跡	S　B　1	(9、12、34、37、40、44)
〃　土山遺跡	SK2中層	(14)
〃　観音寺遺跡	S　B　1	(17、36)
〃	S　X　1	(18、22、41、46、47)
上野市神部C地区	V　層	(21)
〃　北堀池遺跡		(23、50)
名張市土山遺跡	S　K　7	(27)
〃	SK2上層	(30)
上野市上の川遺跡		(31、35、38)
名張市蔵持黒田遺跡		(48)

Ⅰ　飯南郡飯高町森　岸本遺跡

1．位置と環境

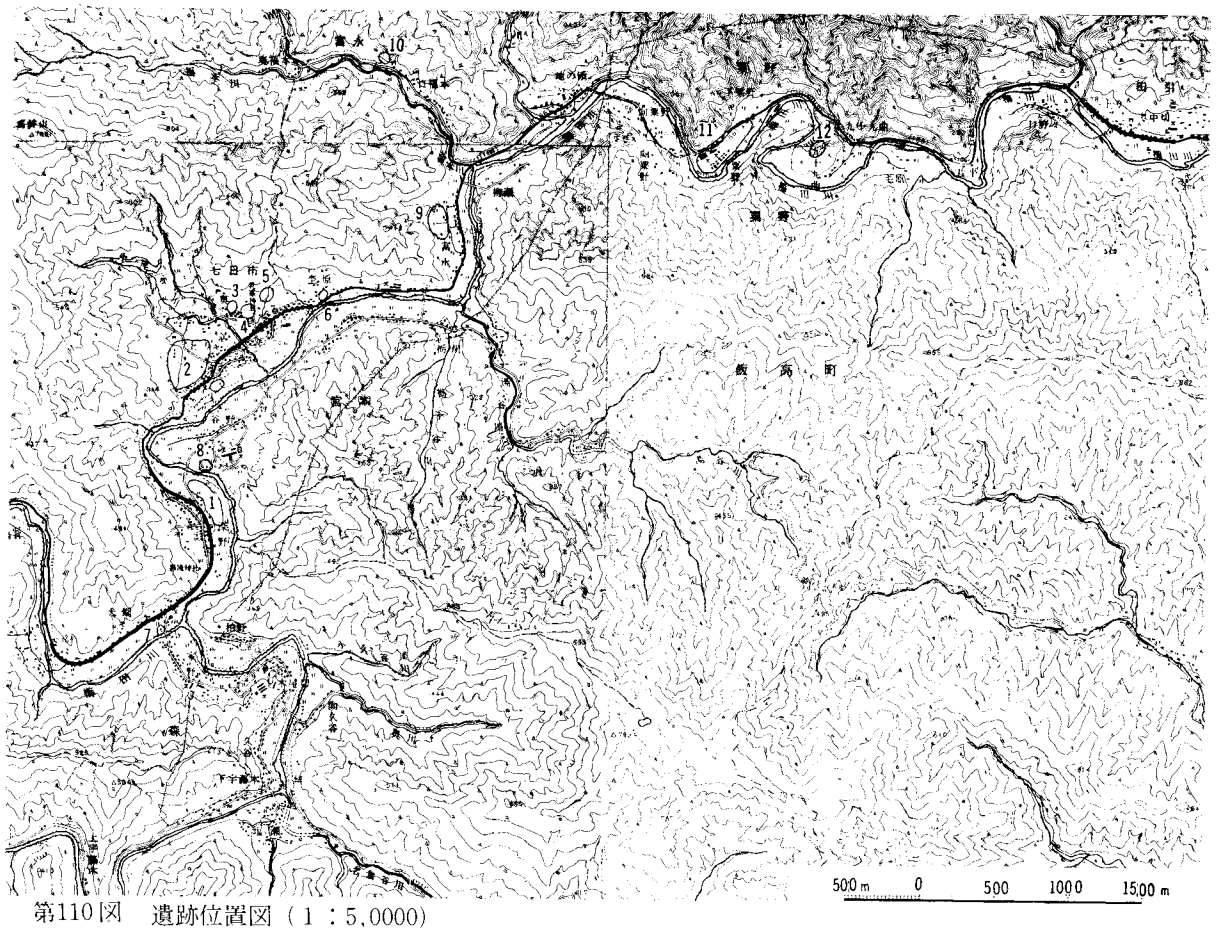
飯高町深野の集落の東側は、櫛田川により形成された河岸段丘上であり、棚田状をなす水田がひろがっている。昭和59年度畜産経営環境整備事業がこの地域で実施されることになり、同年4月に分布調査を行った。その結果、深野字岸本において、縄文土器、中世土師器等の散布地を確認した。松阪耕地事務所と協議のうえ同年5月22・23日に試掘調査を行った。

試掘調査は、4×2mの試掘抗を18ヶ所設定して行った。7ヶ所において縄文土器、山茶碗、土師器皿等が出土した。また重機により既に削平されていた整備事業水田地No20の水田で約50㎡にわたり遺構を確認したところ柱穴を検出した。

当地域における整備事業は、蓮ダム工事により発生する砕石を使い水田面の床上げを行うという複合的な工事を実施しており、緊急な対応の必要があった。再度松阪耕地事務所との協議が持たれ、400㎡について発掘調査を実施することになった。遺跡範囲の他の部分は、削平せず工事対応がなされることになった。試掘において平安時代末葉の柱穴が出土しているので遺跡略記号を7GKMとした。調査は、9月10日、11日に実施した。調査は、文化課技師新田洋、同主事田阪仁、同主事増田安生があたった。

調査にあたり飯高町森林組合、建設省三重土木事務所の協力を得た。報告書作成について宇治山田高校教諭奥義次氏の御教示を得た。記して謝意を表します。

岸本遺跡は、行政上飯南郡飯高町森71番地他に所



第110図　遺跡位置図（1：5,0000）

属する。森の中でも当地区は、深野と呼称され、遺跡所在地の小字は、岸本と呼称される。

1）自然的環境

櫛田川は、その上流・中流において中央構造線に沿って東流し、下流では北流して伊勢湾にそそぐ、三重県で第２番目に長い川である。全長は、約87km・河床勾配は、$\frac{1}{80}$である。中央構造線沿いのこの川の岩石露頭の景観は、花崗片麻岩、赤色チャート、緑泥片岩、結晶片岩等多種多様に及び複雑かつ美しい。櫛田川は、飯南郡粥見で中央構造線を斜行する。したがって飯南町柿野地区では、花崗片麻岩の露頭が多いのに対し、粥見以西では、絹雲母千枚岩等の露頭が多くなり外帯の特徴を示している。飯高町地内では、高見山から局ヶ嶽に連なる高見山地が北にせまり、西側から南側には、大台山系の山々がせまっており、その間を櫛田川は、蛇行しつつ谷を開析している。両岸には、狭い河岸段丘を形成しており、本流にそそぐ支流が土砂を運び河岸段丘上に小扇状地を形成している。

飯高町深野地区も櫛田川左岸のこのような段丘上の小扇状地区に立地しており標高約225m～240mのところに現在集落が営まれている。集落裏の畑の土壌には結晶片岩質の小石が多い。水田は、集落の東の標高約214m～225mの段丘面に石垣を積んで作られている。段丘低位面と櫛田川の北高差は、約10mをはかりかなり急峻な崖となっている。

岸本遺跡は、現在の集落に近い段丘面でも比較的高い標高約220m～225m程度の水田に立地している。

2）歴史的環境

縄文前期・中期の遺跡は、現在飯高町内では発見されていない。ただ当遺跡の条痕系土器は、胴部のみの残存であり明確には、位置づけられないが、かなり古相であり早期末～前期に比定できる可能性がある。後期の遺跡は、飯高町赤桶の宮ノ東遺跡[2]があり、中津式、元住吉山Ⅱ式、宮滝式の土器と石鏃、フレイク等がかなり出土している。飯南町においても中期から連続する粥見波留遺跡[3]、早期からの複合遺跡である下仁柿の百合遺跡[4]、夏明の広遺跡[5]等がある。さて岸本遺跡の近隣では、七日市牧ⅡA遺跡(3)、牧ⅡB遺跡（４）で石鏃、フレイク等が表採されているが、時期決定は難しい。縄文晩期の遺跡としては、飯南町深野の東沖遺跡[6]があり、条痕土器が出ている。

弥生時代前期の遺跡としては、飯高町深野込垣内遺跡（３）があり、第１様式の壺破片が出ている。宇栗子遺跡では、前期貼り付け突帯の壺が出土している。中期では、岸本遺跡（１）、４条１単位の櫛描文土器片が表採された七日市上り遺跡（２）、簾状文のある土器片が表採されている七日市牧ⅡA遺跡（５）がある。飯南町においては、横野チカネ遺跡[8]、中期の壺・甕が表採された殿垣内遺跡[9]等がある。

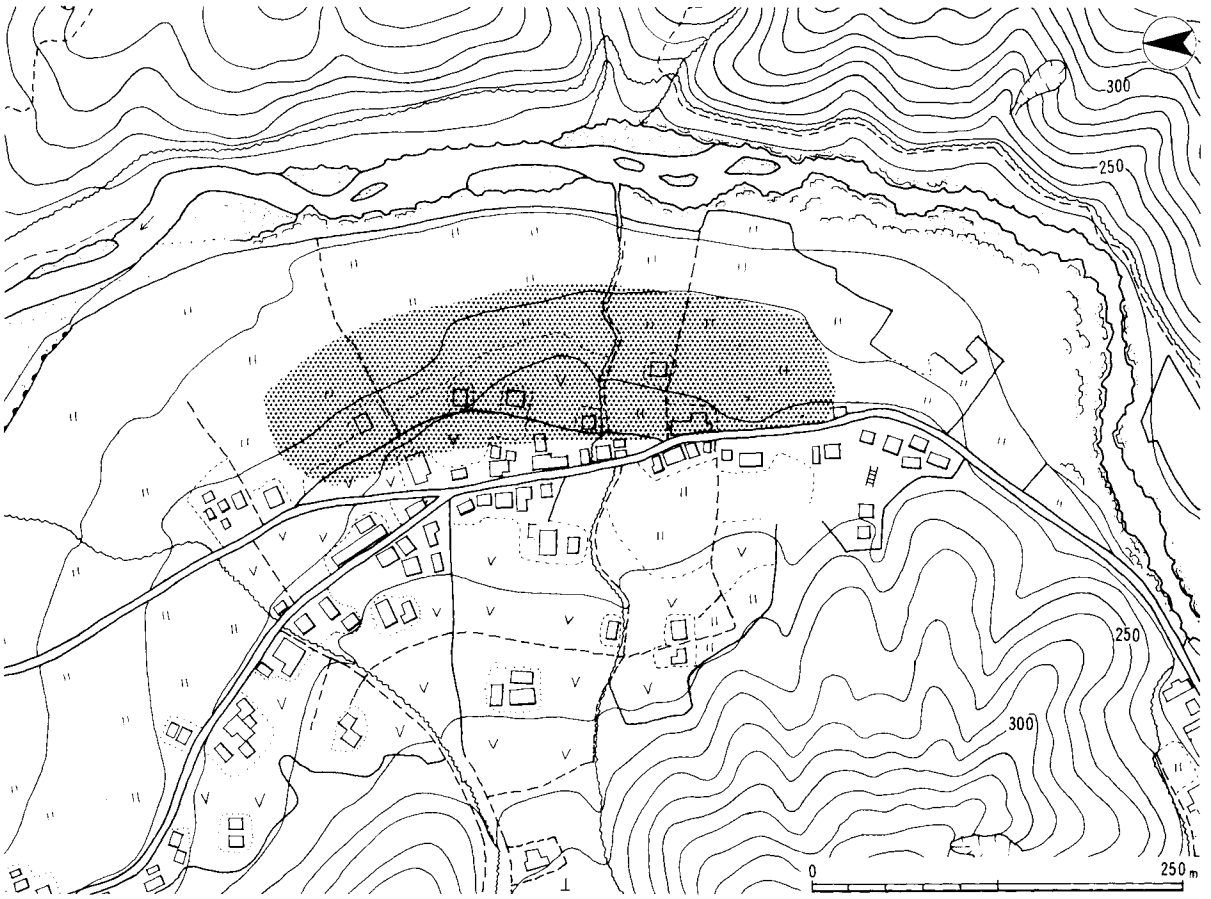
古墳から奈良時代の遺物は、飯南郡では現在唯一、飯南町下仁柿下組の北沖遺跡[10]で古墳時代後期Ｓ字口縁土師器甕台部が表採されている。

平安時代には、高野山及び熊野三山の信仰の波及の１ルートとして櫛田川水系が利用された。また「伊勢兵乱記[11]」にみるように、滝野城の攻防、平信兼の谷野城（８）籠城の伝承等も残る。平安時代後半の遺跡としては、岸本遺跡（１）、瓦器を出している上り遺跡（２）、飯南町下仁柿北沖遺跡がある。

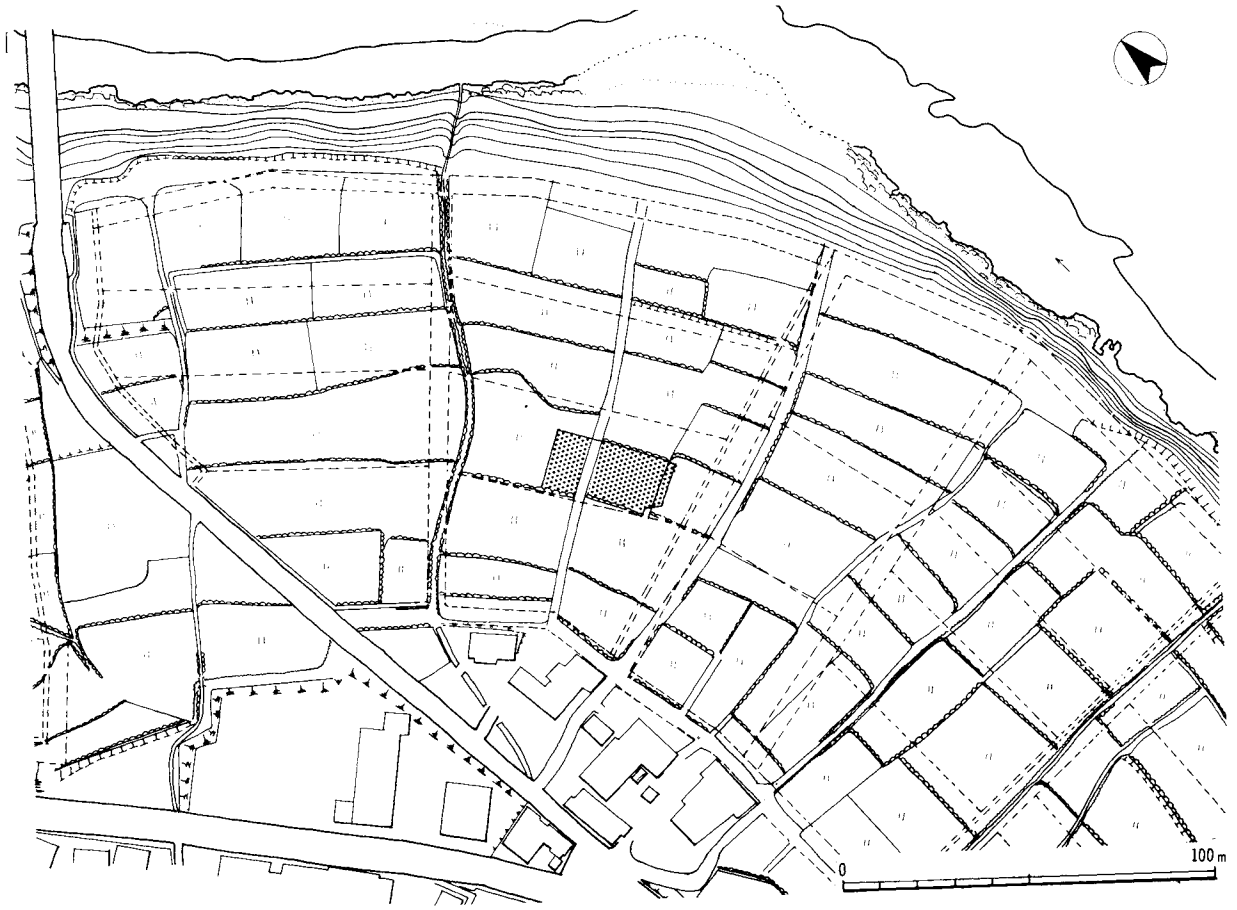
鎌倉時代には、『神鳳抄[12]』にみるように富永の御薗となる。この時代の遺跡としては、青磁が表採されている上り遺跡（２）がある。

室町時代には、櫛田川上中流域は、霧山城に拠点を置く北畠氏を中心とする南朝の勢力範囲として、位置づけられる。吉野と伊勢平野を結ぶ交通の要衝であり、なおかつ飯高町滝野地区庄司越の街道にみるように、霧山城にも至近の地勢であった。

室町後半から安土桃山時代にかけては、多数の中世城館[13]が造営された。櫛田川上流より飯高町峯城、波瀬城、青田城、森城（７）、谷野城（８）、七日市城(13)、富永城（９）、福本城(10)，九曲城(12)、田引城、赤桶城、下滝野城等がある。飯南町では、有間野滝野城・有間野鉄中城等がある。室町時代の遺物散布地としては、飯南町岸本遺跡（１）、七日市上り遺跡（２）、粟野遺跡(11)、飯南町深野宮ノ西遺跡、飯南町深野東沖遺跡等がある。この時代の集落は、現在の集落と重複している場合が多く、狭い谷あいの集落立地からすれば、古い屋敷地を拡幅して新しい屋敷地を構える場合もあり、考古資料の表採についても困難を伴うが、今後の分布調査が期待される。



第111図　遺跡範囲図（1：5.000）



第112図　発掘区域図（1：2000）

2．遺　　構

当遺跡における基本的層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層黄褐色粘質土（床土）、第Ⅲ層黒褐色土、第Ⅳ層褐色砂質土（地山）である。黒褐色土が包含層であり、遺構は、すべて地山面で検出した。

遺構としては、平安時代末葉の掘立柱建物ＳＢ１、室町時代の土坑ＳＫ２とその他の柱穴群がある。柱穴群については中世の鍋、土師器皿小片が出土しているが、建物跡としてまとまらなかった。

1）平安時代末葉の遺構

ＳＢ１　３間×２間の総柱建物である。東西棟で桁行7.5m、梁行5.0ｍである。棟方向は、磁北に対し２度北にふる。桁行、梁間の柱間は、ともに2.50ｍである。柱穴の直径は、約40～50cmで、検出面からの深さは、約50cmである。柱穴の埋土は、黒褐色土である。遺物は、３つの柱穴から山茶椀・土師器皿が出土している。いずれも12世紀後半の所産である。

2）室町時代の遺構

ＳＫ２　東西辺１ｍ・南北辺1.3mの方形土坑である。る。埋土は、暗褐色土で中に扁平な川原石（径20～30cm、厚さ５cm前後）が地山よりやや上に置かれていた。深さは、地山までが46cm、敷石までが約40cmである。石は、原形をとどめずくずれていた。埋土中より羽釜、鍋が出土した。これらは、火葬蔵骨器として転用され、この土坑は、火葬墓の可能性もあろうかと考えた。しかし、複数の鍋・羽釜が出土したこと、それらに煤が付着していたことを考え合せて、煮炊用の屋外炉をここでは想定しておきたい。

ＳＫ３　ＳＫ２の東側に隣接する。東西辺１ｍ・南北辺０.７ｍの方形土坑である。埋土は、暗褐色である。深さは、地山まで47cm中にＳＫ２同様の扁平な川原石が７枚置かれており、地山面より５～10cmの高さである。ＳＫ２との切り合い関係は、不明である。埋土中より鍋の小辺が出土したが、図示はできなかった。

3．遺　　物

1）　ＳＢ１出土遺物

山茶椀（１・２）　１は、口縁部が薄手で外反するもので推定口径16cm、推定器高６cmである。淡灰色を呈し、胎土は精良である。焼成は、堅緻である。ＳＢ１柱穴出土。２は、１とは別の柱穴中より出土した。口縁がやはり薄手で外反する。推定口径15cm、推定器高5.9cmである。色調灰色、胎土は、均質で良好である。焼成は、硬い。いずれも12世紀後半の所産[14]であろう。産地は、渥美窯か。

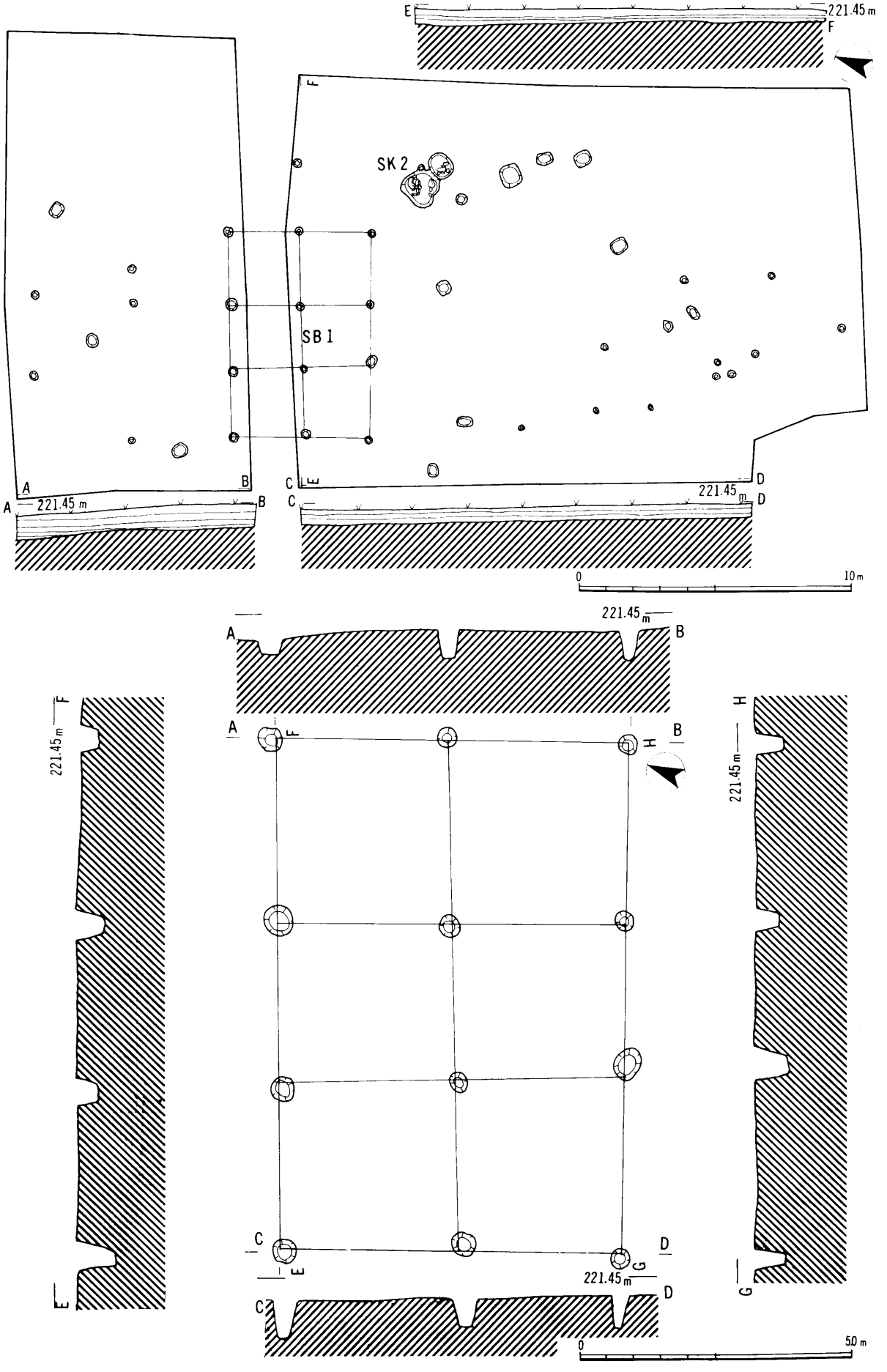
土師器皿（３）　やや厚手で口縁部が斜め上方に引き出され、端部が先細る。推定口径14cm、器高 2.5cmである。口縁部ヨコナデで、底部の調整は不明。色調淡褐色を呈し、胎土は良好で白色砂を含む。土師器小皿と同じ柱穴から出土している。12世紀後半の所産[15]であろう。

土師器小皿（４）やや厚手で、口縁部が斜め上方に引き出され、端部が先細る。推定口径８cm、推定器高1.1cm。色調淡褐色で、胎土は良好白色砂を含む。焼成は、良好である。

2）ＳＫ２出土遺物

鍋Ａ（５・６）　口縁部が、外反しつつ立ち上がり、内側に折り返されて扁平に圧延されている。５は、推定口径27.7cm。色調淡乳褐色で胎土は、普で白色砂を多く含む。焼成は、良好である。６は、推定口径28cm。色調淡橙褐色。胎土は良好で白色砂を含む。焼成は、良好である。

鍋Ｂ（７）　顎部からくの字状に立ち上がった口縁部は、真上に引き出された後、内側に短く折り返される。口径32cm。色調淡橙褐色。胎土、焼成ともに良好である。



第113図　遺構平面図（１：200)(上)・ＳＢ１平面図（１：80)(下)

鍋C（8）　くの字状に屈曲しつつ引き出された口縁部は、その端面を内側に折り返されて断面三角形を呈する。推定口径22.4cm。色調乳褐色。胎土は、並で白色砂を含む。焼成は良好である。

土釜A（9）　体部上半に最大径を持つ。口縁部は、内傾して端部がやや先細る。鍔部は、やや短く、斜め下方に直線的にはりつけられている。鍔部下端には刷毛調整痕が残る。体部は、球形を呈し、上半を横方向に、下半を斜め下方に刷毛調整している。おそらく半乾燥状態で個体を倒置させ、時計回りに刷毛調整を施したものと思われる。

3）包含層出土遺物

①　縄文時代の遺物

条痕系縄文土器（10～14）　いずれも内外面ともに条痕がある。色調黒褐色で胎土は、良質である。胎土に白色微砂、黒雲母を含む。焼成は堅緻である。(10) は、胴部で外面には、原体幅1.5cmに6本の条痕がつく。条痕は、斜め方向に右下がりに施されており、角度は、様々であり各単位が切り合っている。おそらく器面の調整が意図されているためであろう。内面には、外面と同じ原体帯の横方向の条痕が施される。(11) は、原体幅1.4cmに4本のやや浅い条痕が施される。外面は、斜方向にかなり乱方向に施され、内面は、横方向である。(11) の条痕は、他の個体よりもやや甘く、あるいは、植物の茎か自然木の小枝等を数本合せて器面調整した可能性もある。

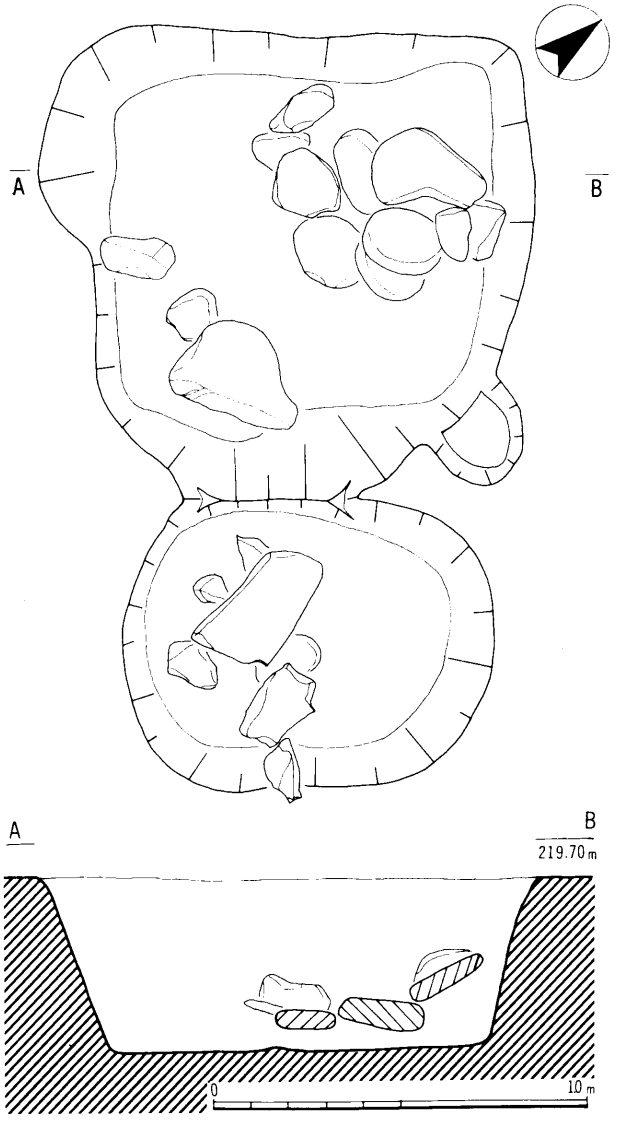
(12) は、原体1単位1.5cm幅で条痕が6本つく。外面は、斜め方向に右下がりに条痕を施し、内面は、横方向に条痕を施している。(13) は、原体1単位1.5cm幅で6本の条痕が施される。外面は、横方向で横方向に（一部横方向の後たて方向もある。）、内面は横方向に条痕が施される。(14) は、原体1単位1.5cm幅で条痕が6本施される。外面上部は、右下がり斜め方向に、中央部が横方向、下部が右下がり斜め方向に施される。この横方向の条痕部が、粘土ひも巻き上げ痕と対応する。内面は、横方向の条痕である。

無茎石鏃（15）　長さ2.1cm、幅1.2cm。表側、外側ともに、縁に調整が加えられている。材質は、サヌカイト製である。

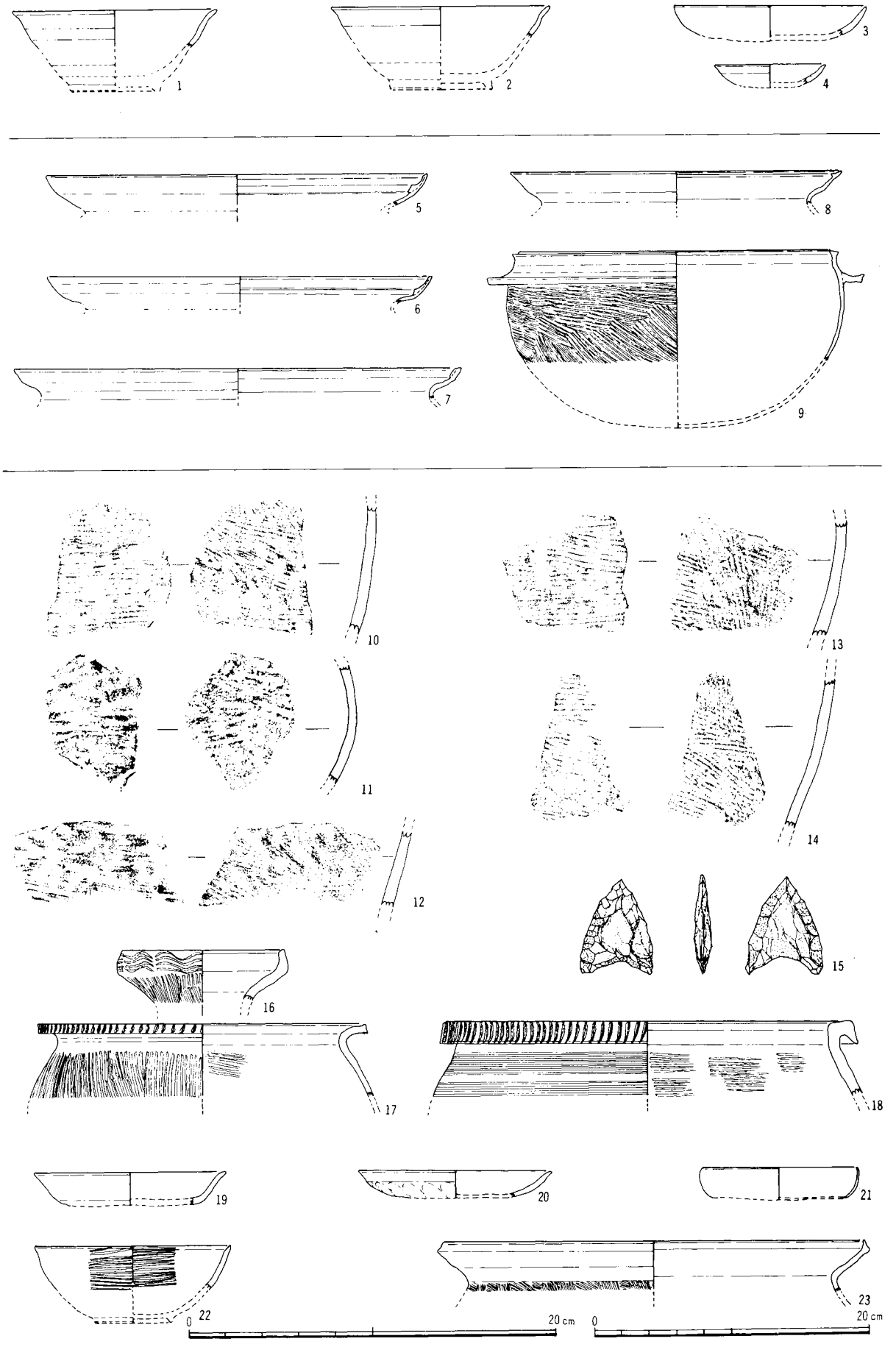
②　弥生時代の遺物

細頸壺（16）　いわゆる受口状口縁を持ち、口縁部は、やや内傾して直立し、先端が丸くおさまる。口縁部外面には、原体幅9㎜に5条の櫛描波状文を施す。鍔部は、縦方向に刷毛調整が為されている。口縁部内面は、横ナデされている。鍔部内面には指圧痕が残る。色調暗褐色を呈し、胎土精良で白色微砂を含む。焼成は、堅緻である。排定口径9.0cmである。

甕（17）　薄手で、「く」の字状に直線的に引き出された口縁部は、その端部を上下に肥厚させる。口縁部端面には、ヘラ状工具による刺突が施される。体部外面は、たて方向の刷毛調整が施される。原体幅1.6cmあたり7本の刷毛目である。体部内面は、



第114図　ＳＫ２・ＳＫ３平面図・断面図（１：20）



第115図　遺物実測図　10～14（1：2）・15（1：1）他は1：4　　1～4：SB1出土
5～9：SK2出土

斜め方向の刷毛調整の後それをナデ消している。色調橙褐色を呈し、胎土は良好である。胎土には、白色砂、赤色粉が混入している。焼成は、良好である。第3様式新段階である。推定口径18cm。

台付鉢（18）　内傾する頸部から、水平方向に折り曲げられた口縁部は、その端部が下垂する。端面には、ヘラ状工具による刺突文が施される。体部には、原体幅1.2cmに9条の櫛描横線が、2単位施される。口縁部上面、内面ともていねいなヘラ磨きである。色調赤褐色を呈し、良好な胎土には、長石質白色微砂が含まれている。焼成は、堅緻である。推定口径22.8cmである。

③　平安時代以降の遺物

平安時代土師器皿A（19）　やや厚手で口縁部が外反する。色調淡褐色、胎土は、良好である。推定口径14cm。

平安時代土師器皿B（20）　厚手で斜め上方に引き出された後口縁部は外反する。口縁部のみ横ナデされた低部には指圧痕が残り未調整である。色調淡褐色を呈し、胎土は良好である。胎土には赤色粉を含む。焼成は、良好である。推定口径14cm。推定器高2.4cmである。12世紀代の所産か。

瓦器椀（22）　口縁部がやや外反し、口縁部内面に沈線を持つ。体部内外面にヘラミガキが施される。色調暗灰色を呈し胎土・焼成ともに良好である。推定口径14.2cm。12世紀前半の所産であろう。

室町時代土師器皿C（21）　薄手で口縁部が内弯しつつ直立する。色調乳褐色で胎土・焼成ともに良好である。推定口径11.4cm、器高2.3cmである。

室町時代土師器鍋C（23）　薄手で口縁部がくの字状に立ち上がり端部は、つまみ出されて断面三角形を呈する。体部外面は、刷毛調整がなされ、口縁部内外面は、ヨコナデである。色調乳褐色を呈し、胎土焼成ともに良好である。推定口径は、30.8cmである。

3．結　　語

岸本遺跡の調査は、小規模ではあったが、櫛田川上流の飯高町における最初の発掘調査であり、この水系の文化伝播について若干の考古資料を提示することができた意義は、大きい。以下、遺構・遺物についてまとめてみたい。

1）遺構について

ＳＢ１は、3間×2間の総柱建物で桁行7.5ｍ×梁行5.0ｍであり面積37.5㎡である。時期は、12世紀後半に位置づく。このような3間×2間の掘立柱建物は、平安末から鎌倉時代において、かなり一般的で建物の基本単位であったと考えられる。同時代の3間＋2間の掘立柱建物をいくつかあげたい。馬場遺跡[16]ＳＢ１(7.2m×4.2m、30.24㎡、総柱東西棟、東隣に建物)、玉城町赤垣内遺跡[17]ＳＢ19（6.7m×4.5m、30.15㎡、東西棟)、明和町愛場遺跡[18]ＳＢ４（5.8m×4m、23.2㎡、南北棟井戸に隣接)、名張市檀・柏原遺跡[19]ＳＢ２（6.6m×4.7m、33.2㎡東西棟）等が例示できる。約30㎡～40㎡の家屋面積は、1世帯の居住する最少の単位として可能であろう。今当遺跡ＳＢ１のような3間×2間を基本単位と考えたが、平安時代末葉から鎌倉時代には、これに一面廂、二面廂、三面廂が付くものも多数現れる。また4間×4間で隅に土坑を持つ建物も現れる。そうした例と比較するとき当遺跡のＳＢ１の規模は、かなり小さい。また3間×2間の掘立柱が単独で立つ場合、副屋を伴う場合、3間×2間の掘立柱建物自体が副屋である場合を考慮に入れておく必要もある。このような要素を合せて、居住空間の大小、またその意味する段階層差を考えていく問題提起としたい。

2）遺物について

①　縄文時代条痕系土器

体部のみの破片であるため判断の根拠は、今1つ弱いが、内外面の条痕であること、両面にも横方向の施文であること、胎土中に繊維を混入すること等古い要素が強い。現段階では、茅山上層式～鵜ヶ島台併行の早期に位置づけるか、あるいは鳥浜貝塚の北白川下層の前期に位置づけるかは、微妙なところ

である。

② 弥生時代土器

わずか3点であるが、幾内的特徴を持つ細頸壺、甕、台付鉢がある。これらは、中期中様の第3様式新段階に比定される。細頸壺は、口縁に波状文を施し、頸部に刷毛目を施している。この特徴は、東庄内B遺跡[6]細頸壺B類（62）（ただし受け口状口縁の形態・体部刷毛調整の類似である）・亀井遺跡[7]壺形土器b′（104）（ただしこの個体には突帯がつく）に類似するものである。胎土から在地産かと考えている。甕は、薄手で、口縁が上下に肥厚し、端面に櫛状工具による刺突を施すこと等から、飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ[20]、藤原宮西辺地区の調査ＳＥ610 出土甕Ｅ類に比定できよう。ＳＥ610は、甕Ｅが大部分であり、凹線文の初現段階である。当遺跡の甕は、吉野方面からの搬入の可能性もある。台付鉢は、藤原宮西辺地区の調査ＳＥ610 出土台付鉢Ｂ類の、腹部に稜をもち、口縁端部を下方に折り曲げる特徴に類似している。ただ岸本遺跡の台付鉢の端部には、櫛描刺突が施されている点が異なる。胎土が、暗褐色を呈し、搬入品の可能性もある。

③ ＳＢ１出土遺物

ＳＢ１の柱穴から出土した山茶椀は、藤澤編年のⅡ－４段階に比定できる。土師器は、斎宮編年のＳＤ3052併行のものである。

④ ＳＫ２出土遺物

ＳＫ２出土の土師器鍋Ａ、鍋Ｂ、鍋Ｃ、羽釜Ａは、ミゾコ遺跡[21]ＳＤ２出土の遺物と同時期と考えられる。時期的には15世紀末葉と考えられる。これらの鍋は、いわゆる伊勢型鍋と呼称されているものであり、室町後半における当遺跡の煮沸容器の供給は、伊勢平野からなされていたことを示唆している。土釜についても、伊勢地方のものと考えている。

⑤ 包含層出土瓦器椀

包含層出土瓦器椀（22）は、厚手で内外面にかなりていねいなヘラミガキがなされており、大和型瓦器である。川越編年[22]の第１段階Ｄ型式にあたり、11世紀末葉の所産と考えられる。平安時代後半における大和型瓦器の流通を考えるうえでの好資料となろう。櫛田川流域における瓦器の発見例としては、先述の飯高町七日市上り遺跡、飯南郡粥見城、1腰遺跡、飯南町横野百合遺跡、勢和村下村Ａ遺跡等がある。特に国道368号線と166号線の交差点に近く、美杉村を経て榊原に至る分岐点に位置する百合遺跡において大和型瓦器が表採されている。また近畿自動車道にかかる緊急発掘調査により下村Ａ遺跡において出土した瓦器椀及び瓦器鍋も輪花山茶椀の時期と同時期と考えられ、大和型瓦器である。これらの発見は、平安後半の大和型瓦器の流通を考えるうえで示唆することが多い。　（増田安生）

〈註〉

① 位置と環境の１）自然的環境をまとめるのに際して参照した文献は、次のとおりである。
○飯南町「飯南町史」 昭和59年
○松阪市史編さん委員会『松阪市史』第一巻、自然編
○市村昌三・前田昇 「櫛田川の段丘地形」『大阪教育大学研究紀要』昭和48年

② 宮ノ東遺跡以下飯高町内の遺跡については、『飯高町史』近刊の草稿段階で、宇治山田高校奥義次氏のまとめられたものを拝見し、参照させていただいた。

③ 奥義次　飯南町『飯南町史』　Ｐ47　昭和59年

④ ③前掲書Ｐ67

⑤ ③　〃　Ｐ89

⑥ ③　〃　Ｐ90

⑦ 飯高町における弥生時代の表採遺物は、奥義次氏の努力による。

⑧ ③前掲書Ｐ82

⑨ ③　〃　Ｐ83

⑩ 昭和60年度県営圃場整備事業にかかり、昭和59年度に分布調査され、昭和59年11月に試掘がなされた。縄文後期、平安末葉の土器が出土している。表採のＳ字口縁甕は、増田安生による。

⑪ 矢ヶ瀬清一編著「飯南郡飯高町田引・粟野郷土史」Ｐ９『延久元年（1069年）散位為房朝臣、散位宗近朝臣等という公卿悪人共、凡そ三百人許りの兵を率ひ伊勢國へ立越へ、飯高郡高見山へ楯籠り、金銀米麦を取り、又美女を掠めて荒すこと甚し、……』とある。

⑫ 『神鳳抄』によると河俣谷（櫛田川上流域）には、粥見・滝野・富永の御薗があった。

⑬ 三重県教育委員会『三重の中世城館』　Ｐ115～Ｐ117参照

⑭ 藤澤良裕『瀬戸古窯址群Ⅰ』　瀬戸市歴史民俗資料館紀要　瀬戸市歴史民俗資料館　1982年

⑮ ミゾコ遺跡（三重県教育委員会　1984年）のＳＢ31出土皿Ｂ－Ⅱ類併行であろう。

⑯ 森前稔・山田猛　三重県教育委員会『昭和56年度県営圃場整

備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1982年
⑰ 小玉道明　赤垣内遺跡 P41　三重県教育委員会　『昭和48年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1979年
⑱ 高見宜雄　愛場遺跡　P63・64　三重県教育委員会『昭和57年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1983年3月
⑲ 田阪仁　檀・柏原遺跡　三重県教育委委会『昭和58年県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1984年3月
⑳ 木下正史　「藤原宮西辺地区の調査」P73　『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所　昭和55年3月31日
㉑ 増田安生　三重県教育委員会『ミソコ遺跡発掘調査報告』　P20・21　1985年3月
㉒ 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　文化財論叢』　昭和58年

図　　版

古市遺跡航空写真（西から）

調査前近景 Aトレンチ（北東から）

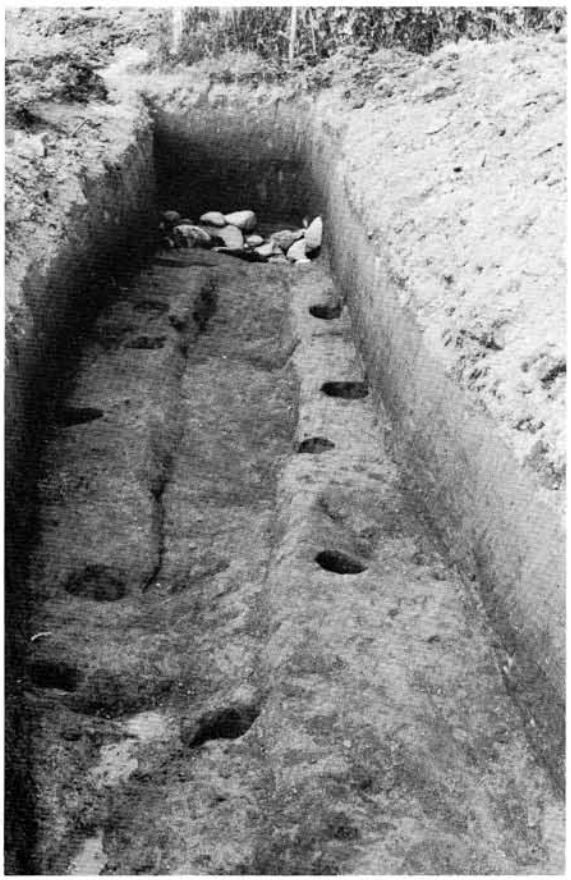
調査風景 Dトレンチ（南から）

ＳＡ１（西から）

ＳＤ３・ＳＤ４（東から）

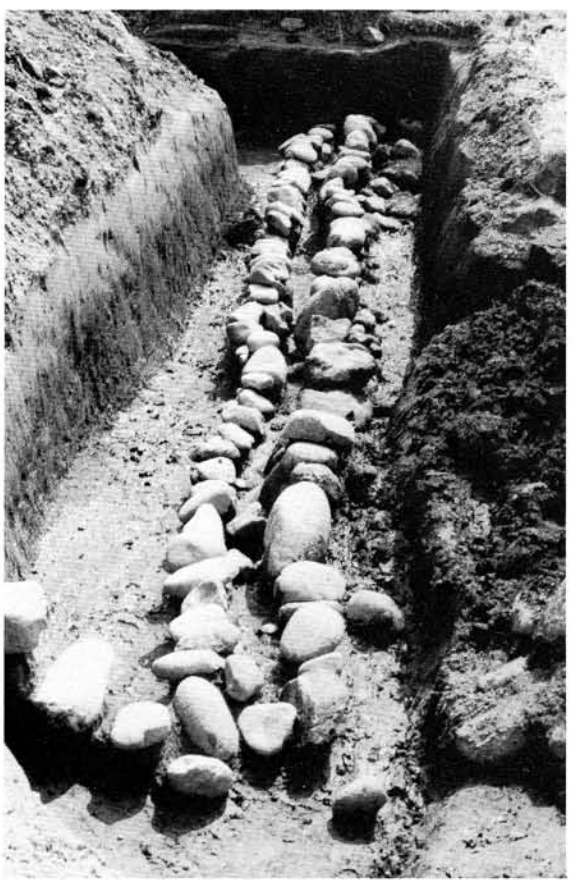
Ａトレンチ 柱穴群（東から）

Ｂトレンチ 柱穴群（東から）



ＳＤ19・ＳＤ29（西から）

ＳＥ21（南西から）

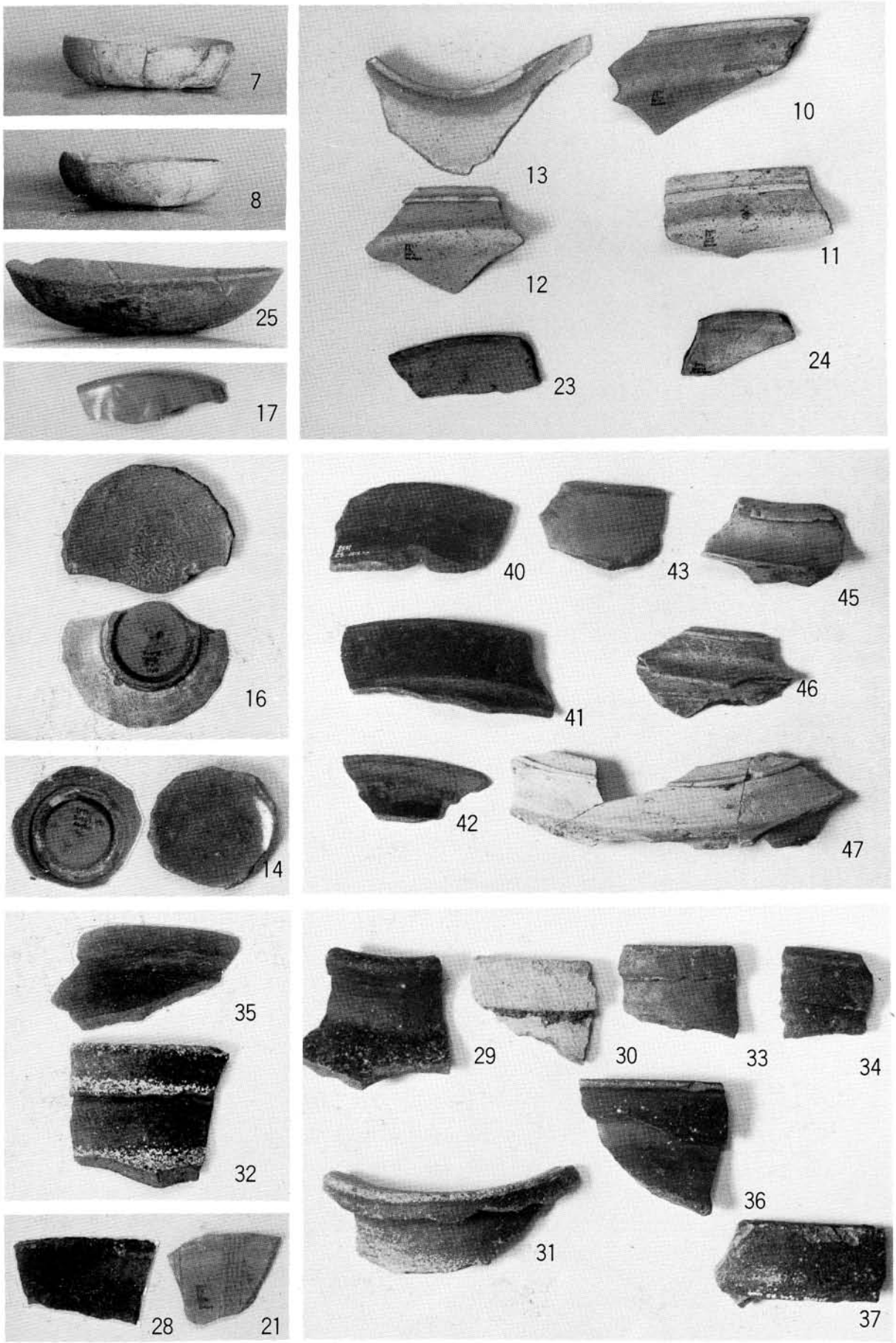


ＳＤ23（東から）

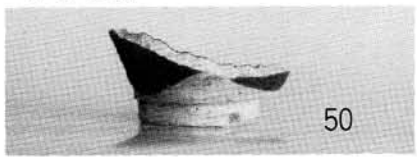
ＳＤ24（北から）

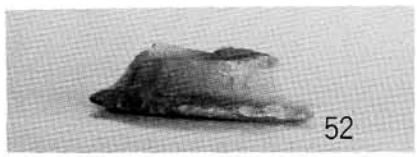
ＳＫ28～31（北から）

ＳＫ31（北東から）

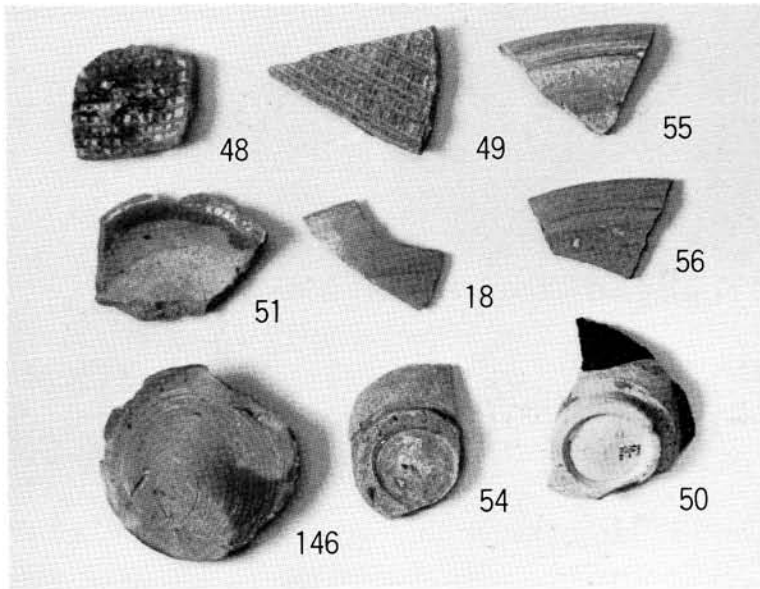

7
8
25
17
13
10
12
11
23
24
16
40
43
45
41
46
42
47
14
35
32
29
30
33
34
36
31
28
21
37

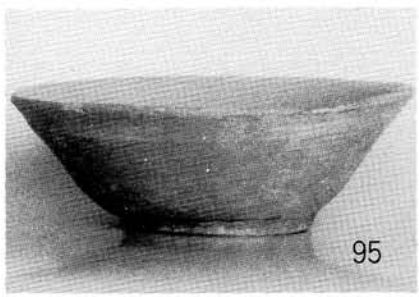
出土遺物（1：3）


50

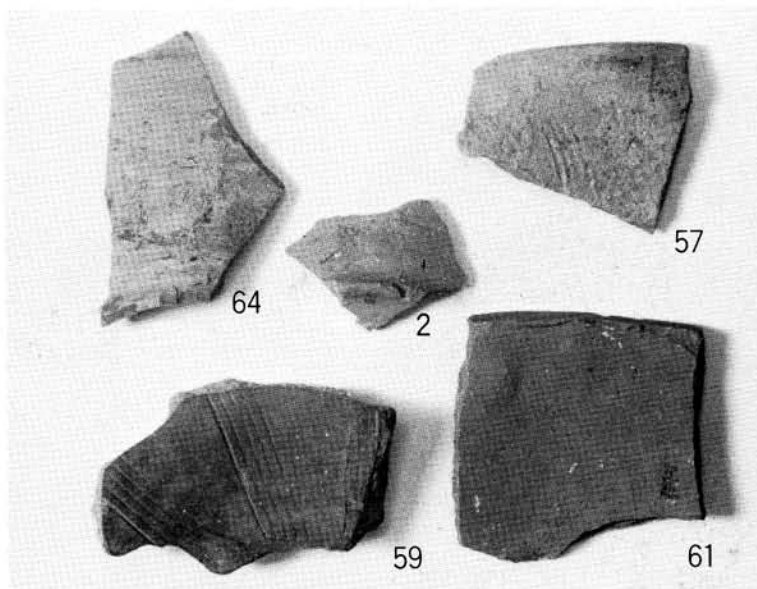

52

95

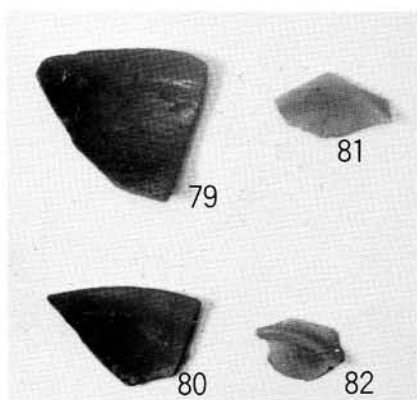

48
49
55
51
18
56
146
54
50

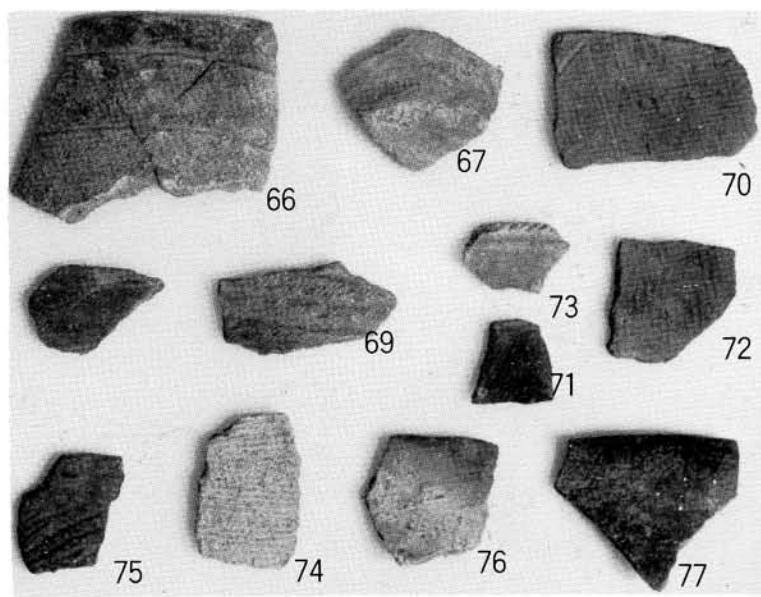

95

96

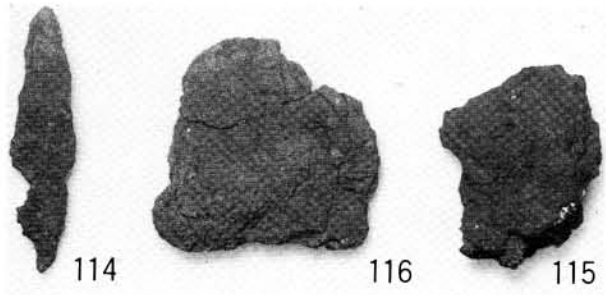

64
2
57
59
61

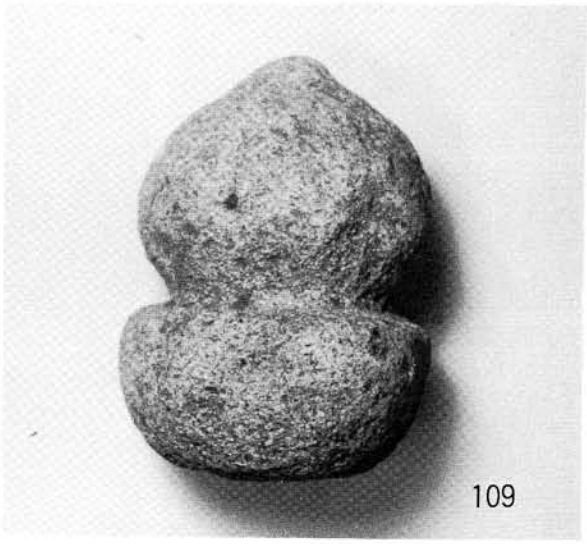
78

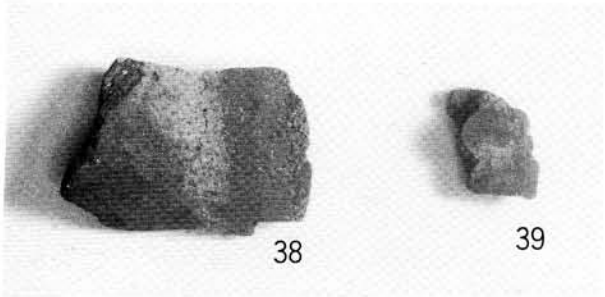

79
81
80
82

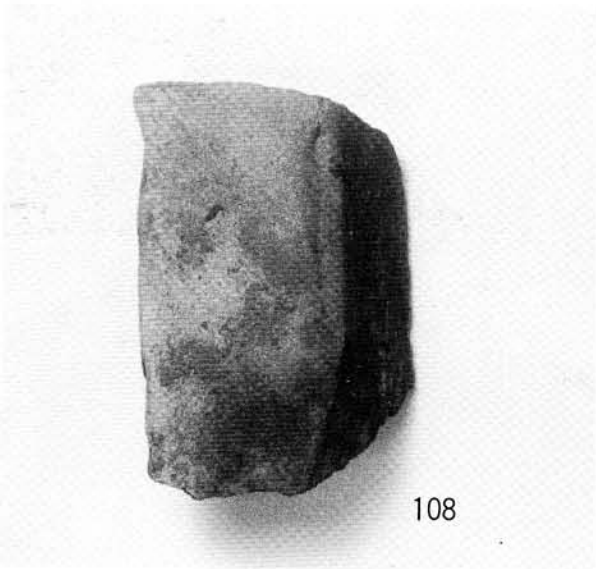

66
67
70
69
73
72
71
75
74
76
77

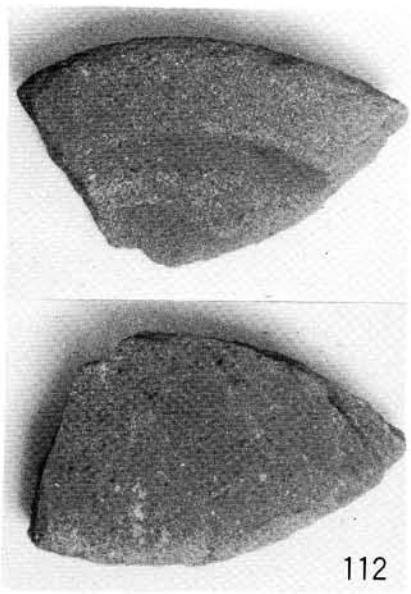
出土遺物（1：3）

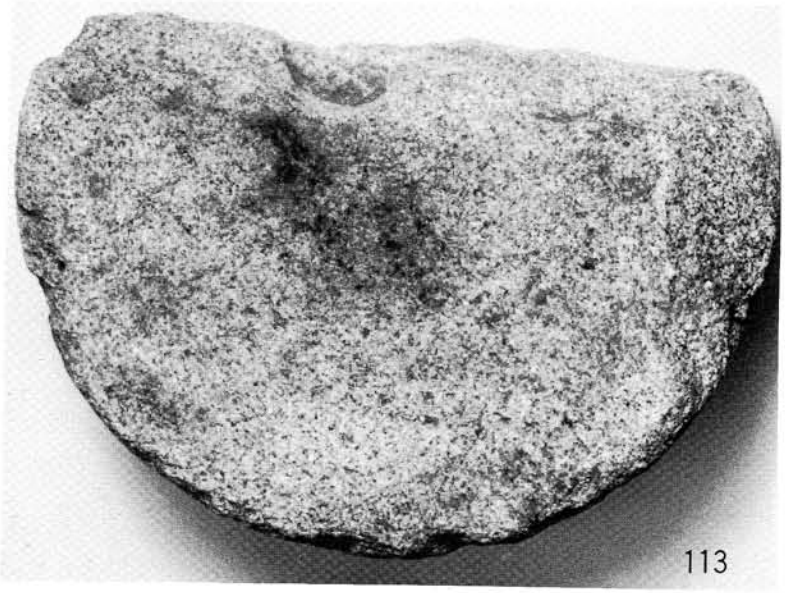












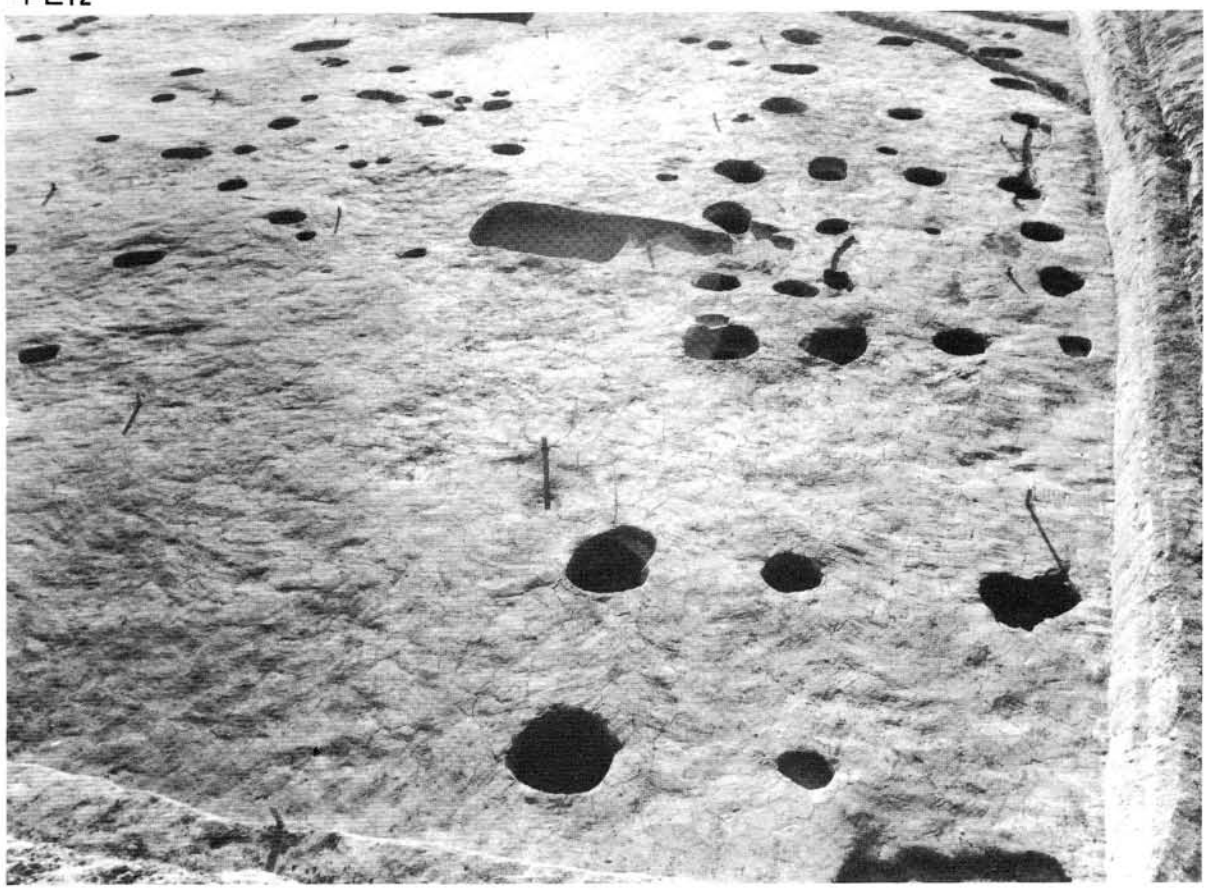
石製品、金属製品　（1：3）

航空写真（東から）

A地区調査前風景（東から）

調査区全景（上空から）

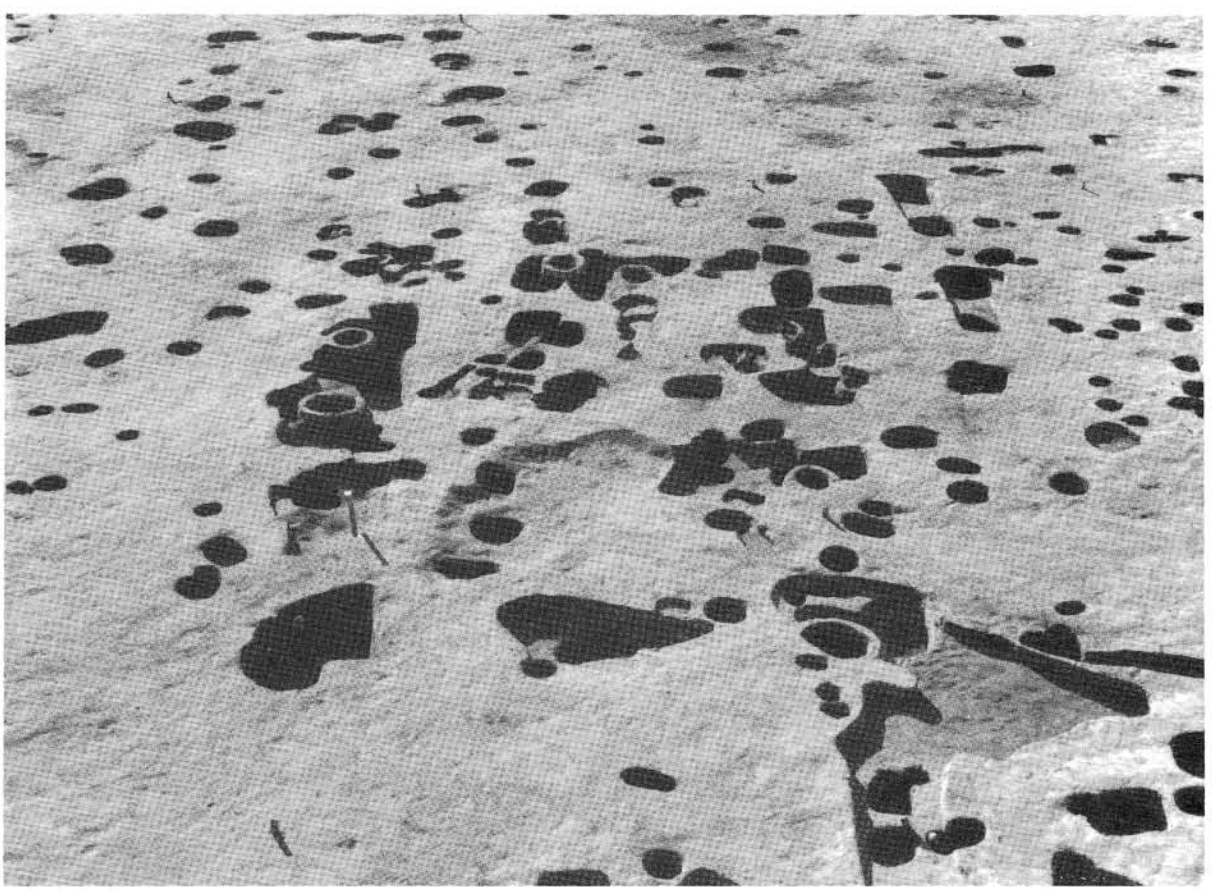
A地区調査区全景



A地区 SB1～3（東から）

A地区北部（西から）

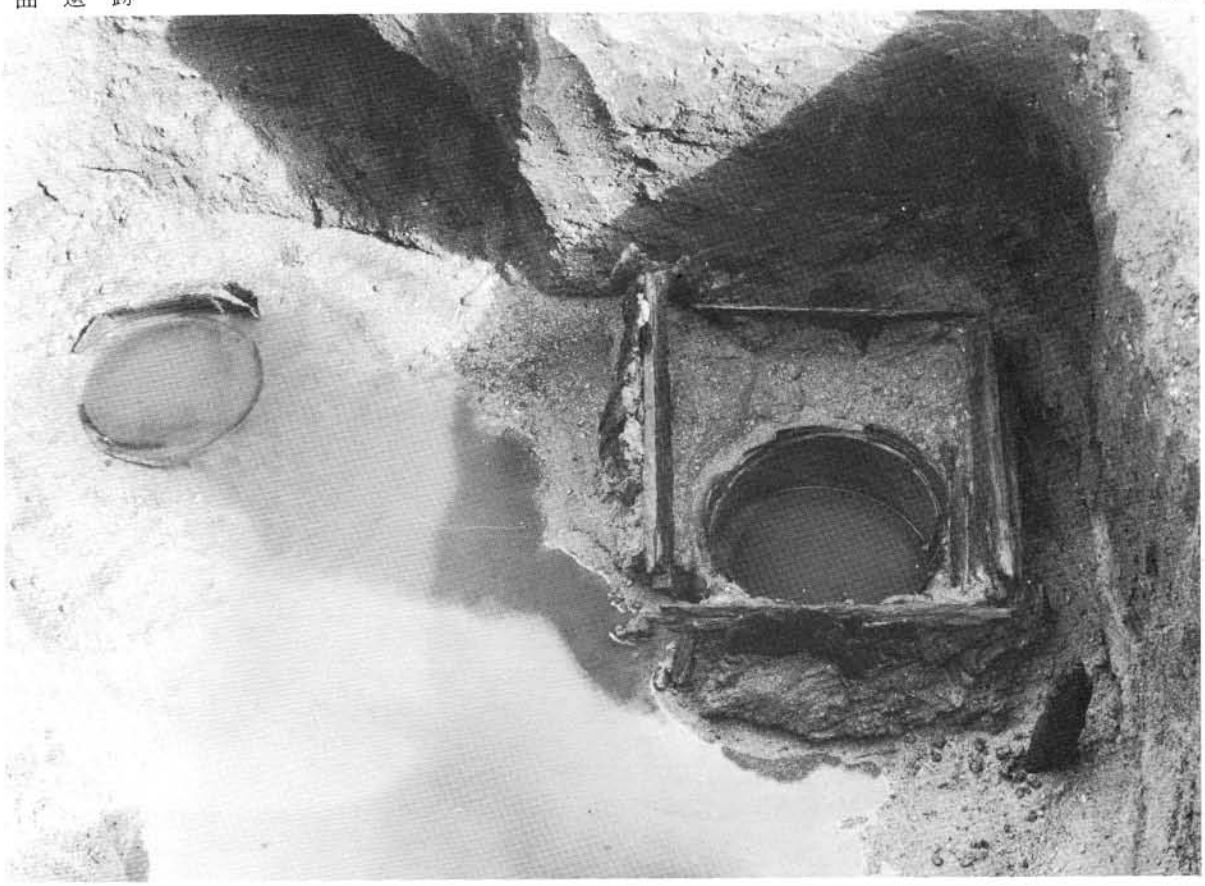
A地区東部（北より）



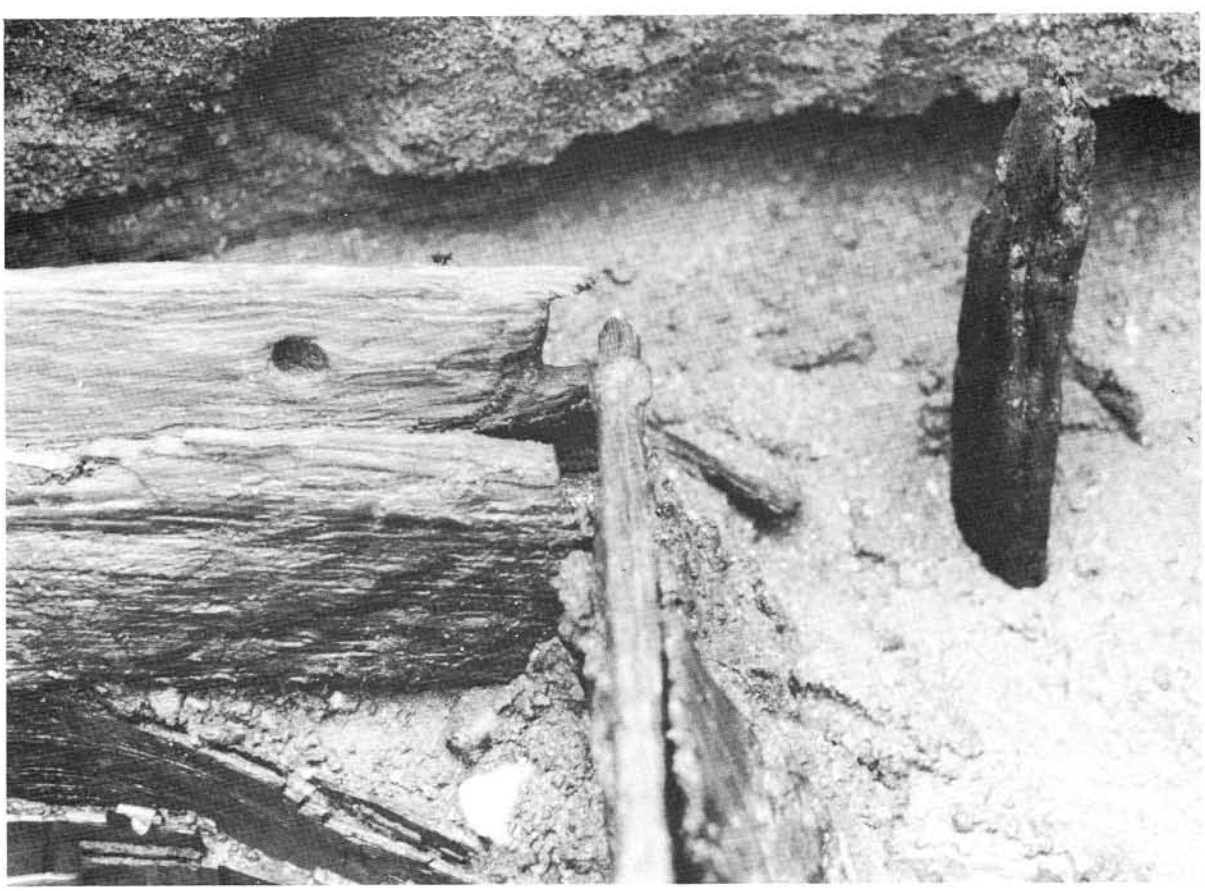
S B19～22（東より）

ＳＢ30・31（東より）

ＳＢ36・37・38・41・42（北より）



ＳＥ７(左)・ＳＥ６(右)　(西から)

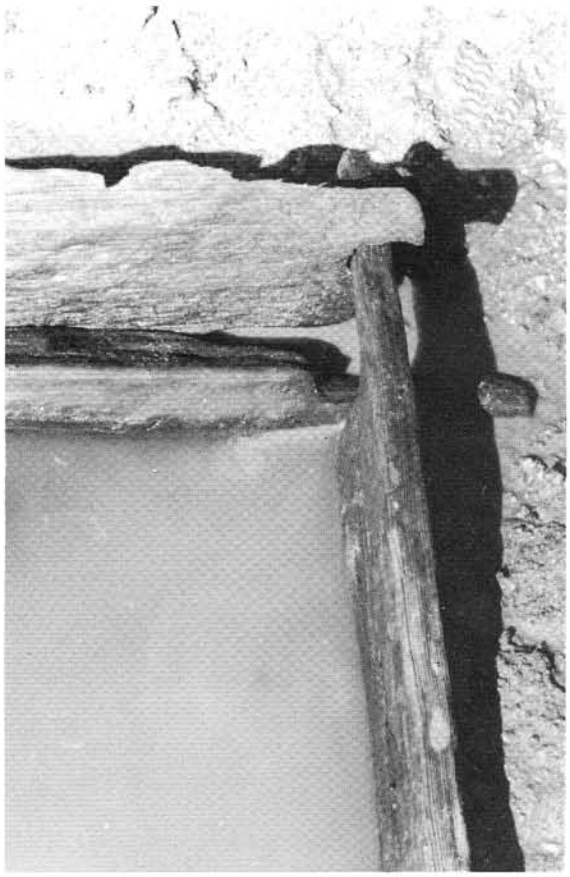


ＳＥ６ 井戸枠南西隅（北から）

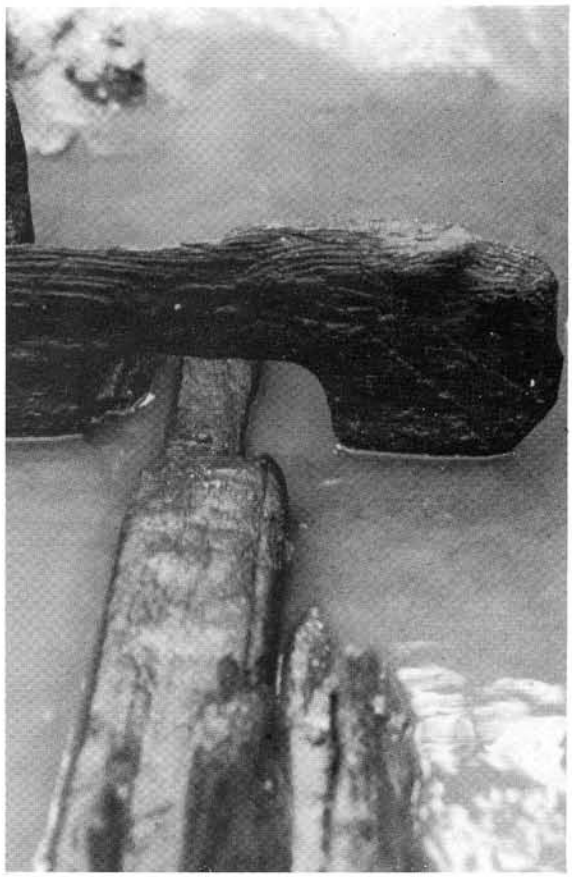
調査風景

ＳＤ27 遺物出土状況

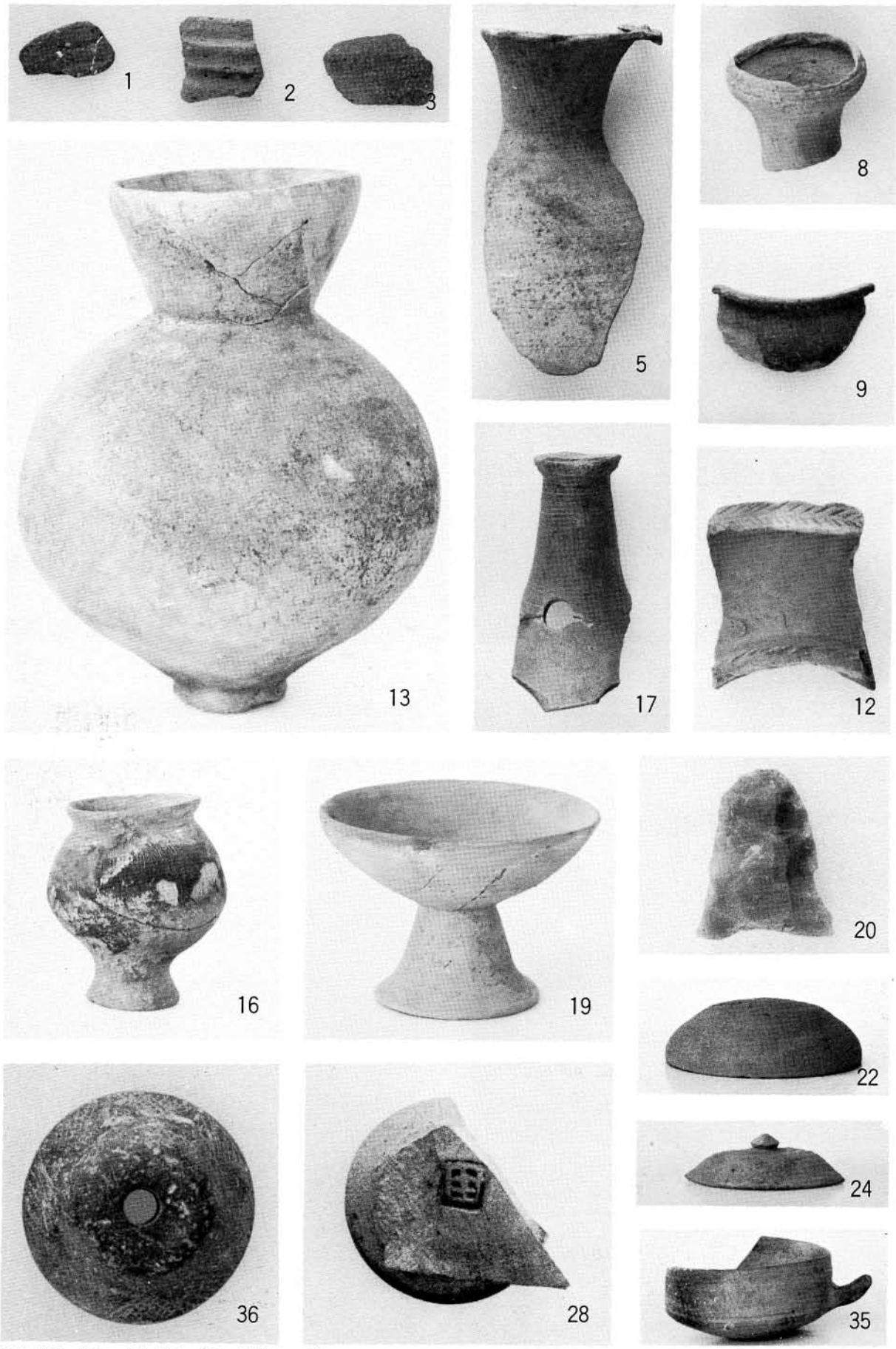
ＳＥ32（東から）



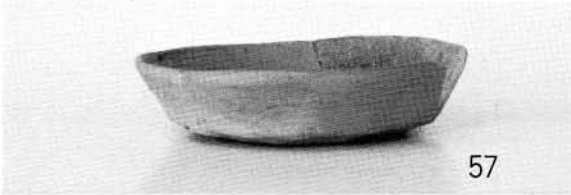
ＳＥ32 井戸枠北東角（南から）

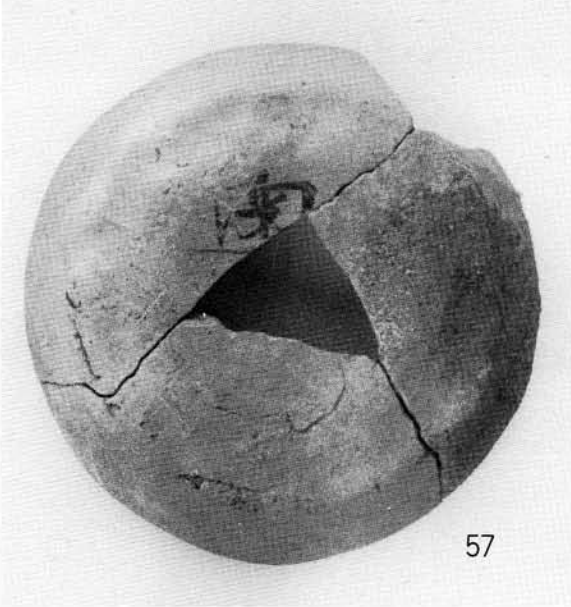


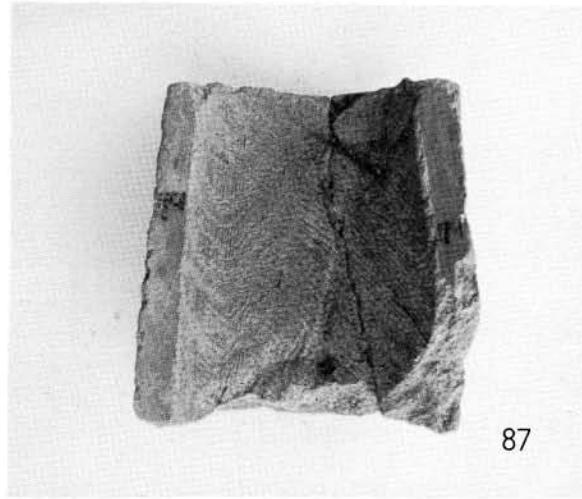
ＳＥ32 井戸枠北西角（東から）

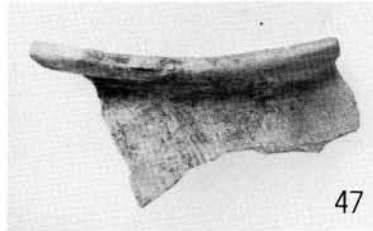


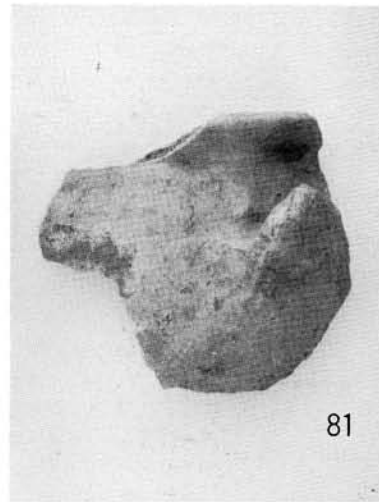
出土遺物（1：3）（20・28・36は1：1）

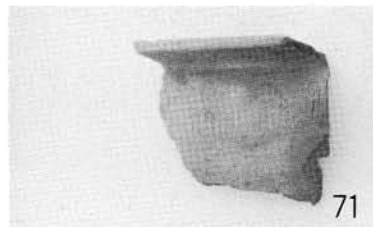




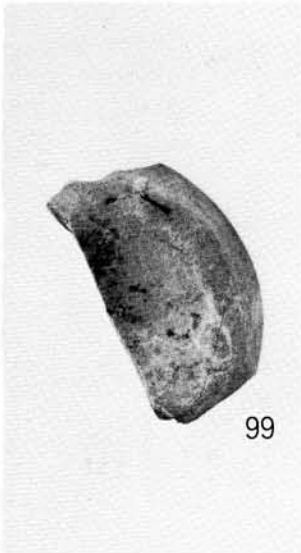


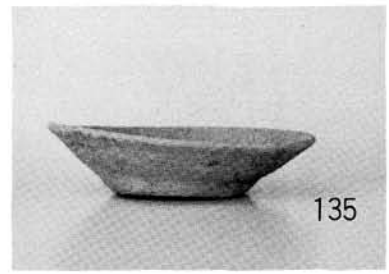


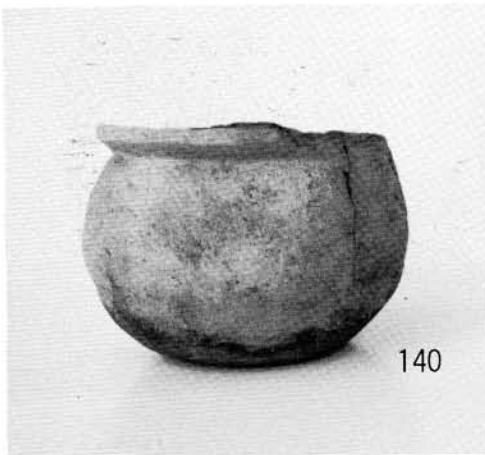


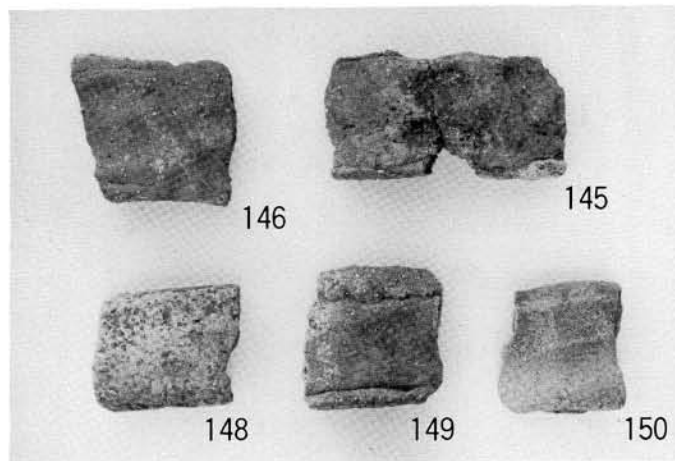


出土遺物（1：3）（57の底部写真は1：2）

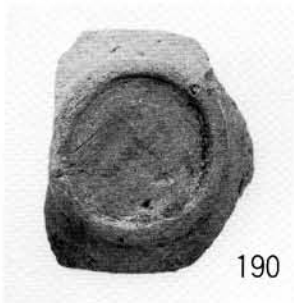


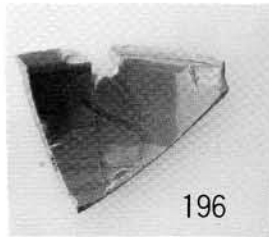


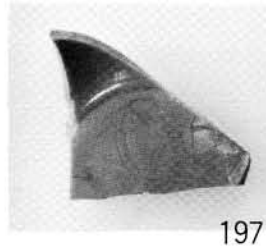


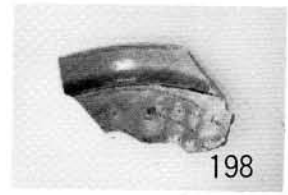


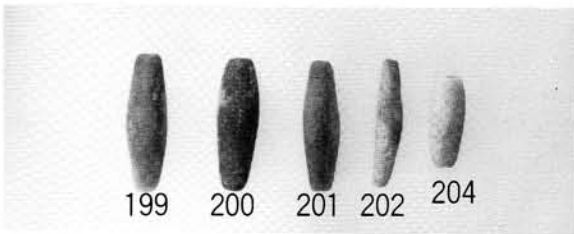
出土遺物（1：3）

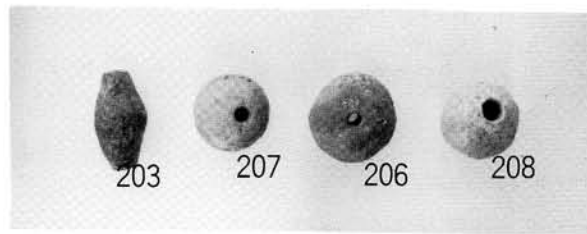


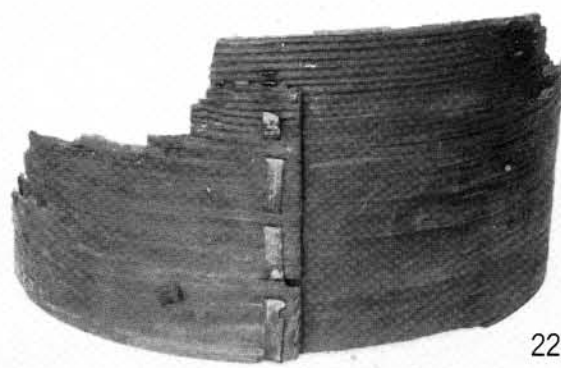


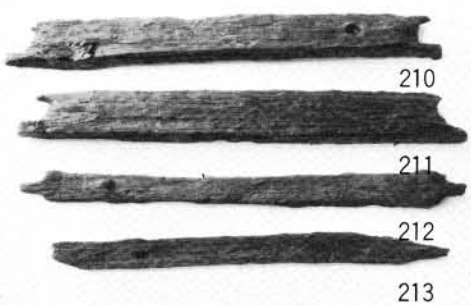






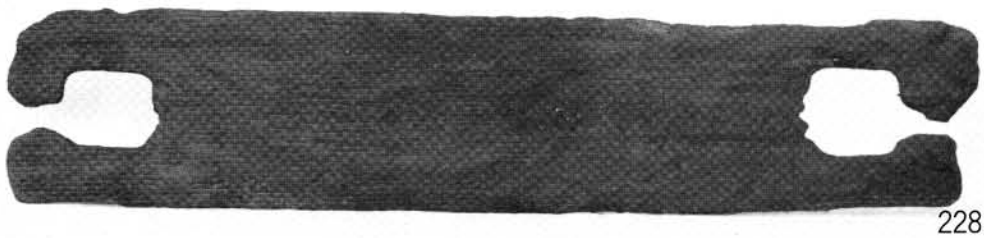






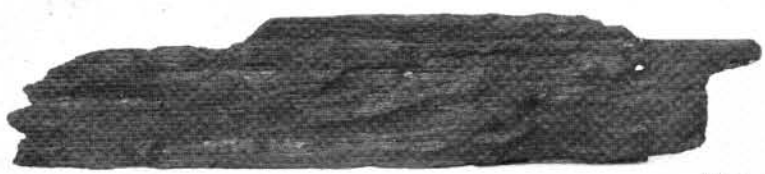
出土遺物（1：3）（209は1：2、210～213は1：10、220、222～224は1：6）

227


228

229

230


231

232

236

233

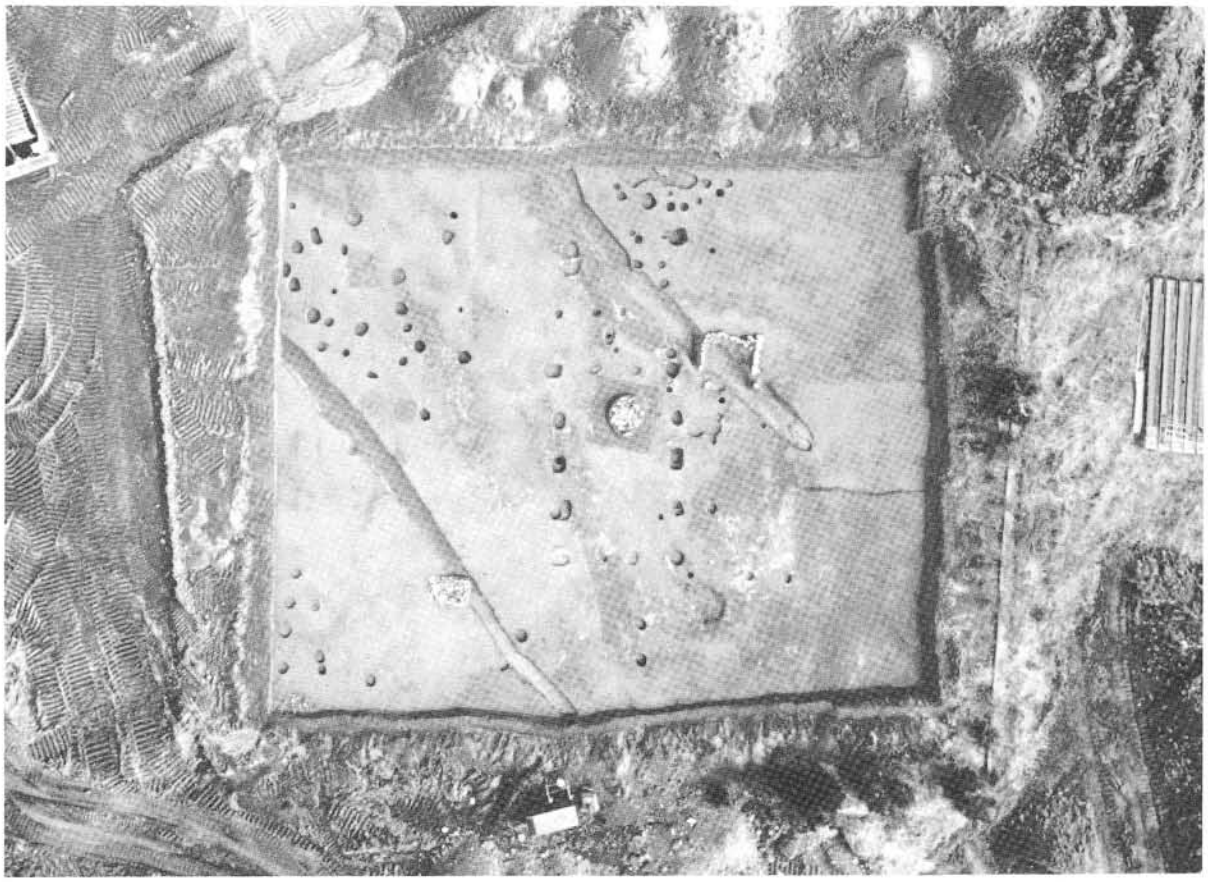
234

235

237

出土遺物（1：10）

B地区調査前風景（西南より）



曲遺跡B地区航空写真

発掘調査後全景（北東より）

発掘調査後全景（北より）

ＳＢ１（南より）

ＳＢ４、ＳＢ６（西より）

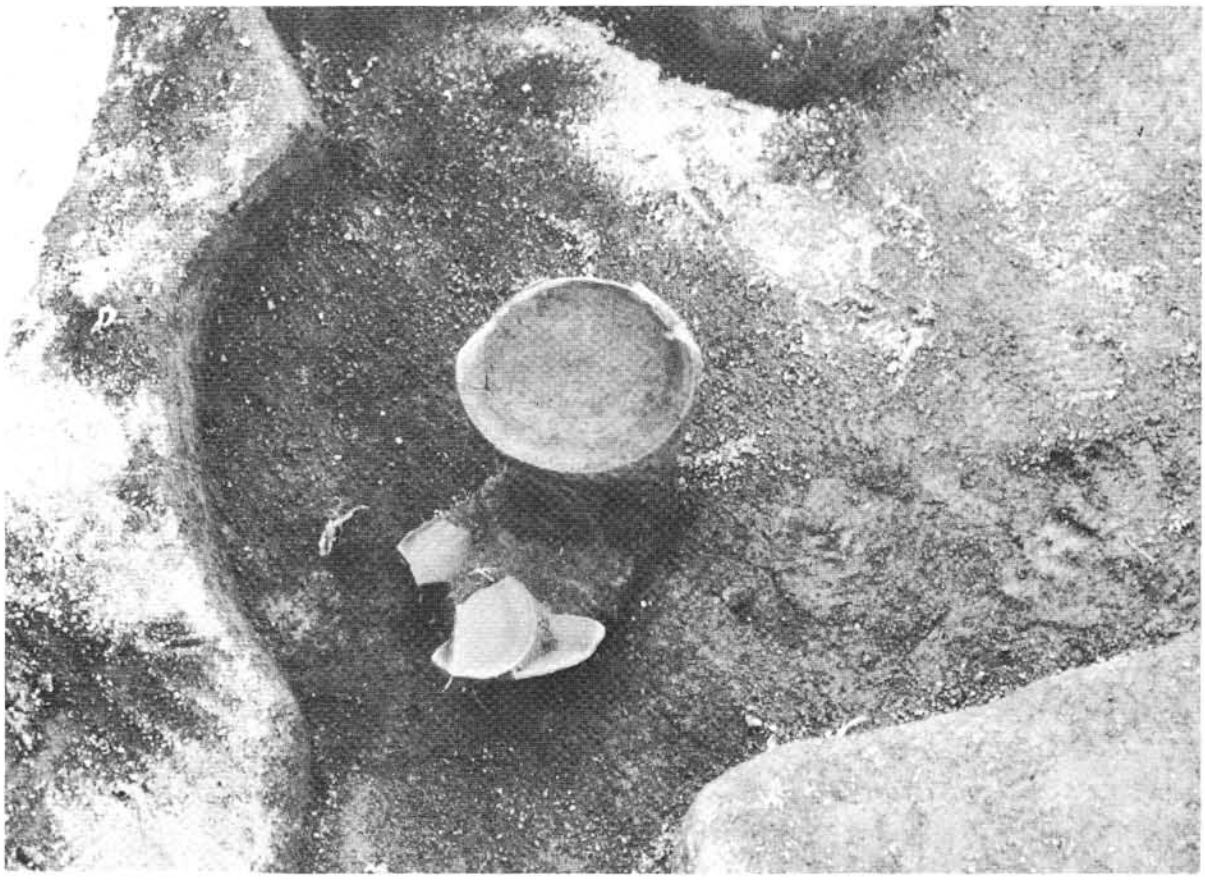
ＳＫ５（南より）

ＳＸ９（西より）

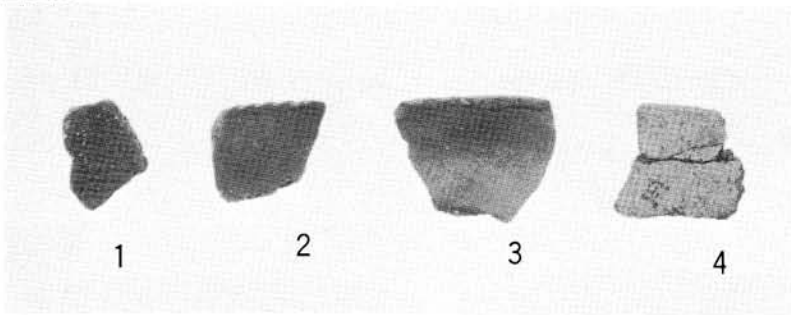
ＳＸ３（西より）

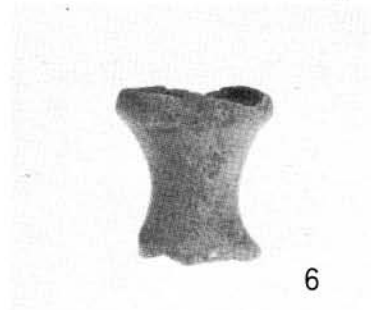
ＳＸ３断面（西より）

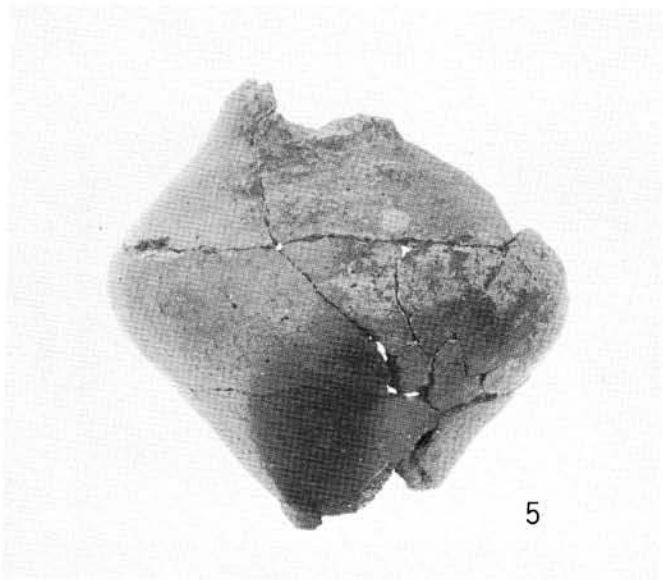
ＳＸ３ 底部敷石（東より）

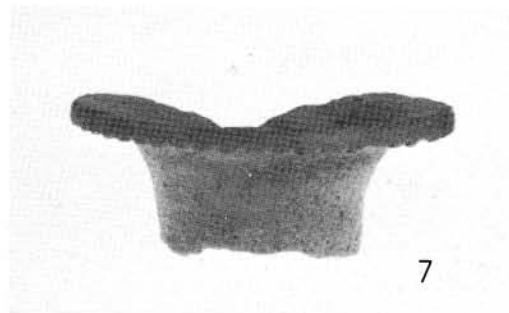


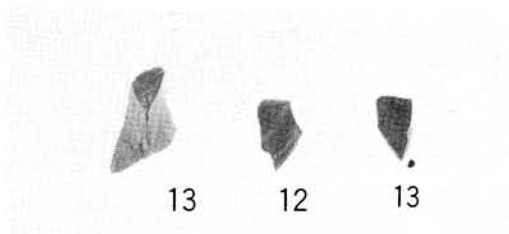
ＳＫ７ 土器出土状況（東より）

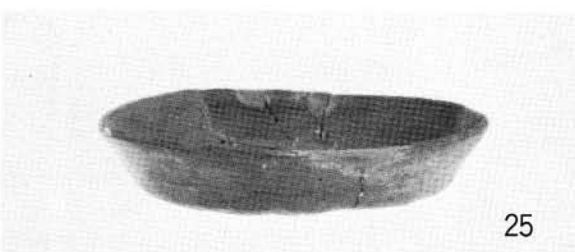


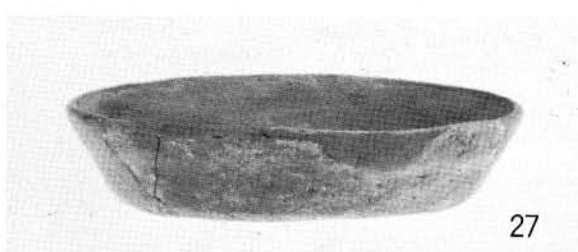


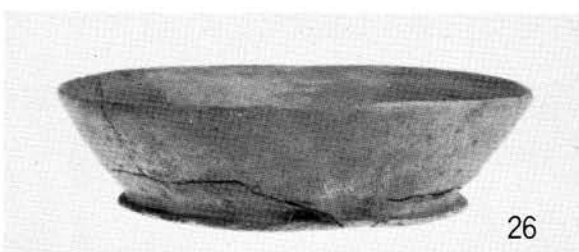


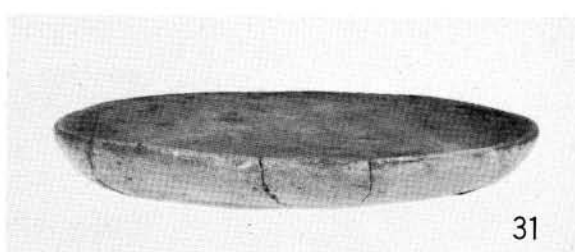






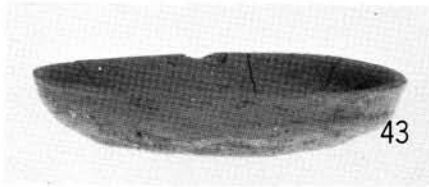


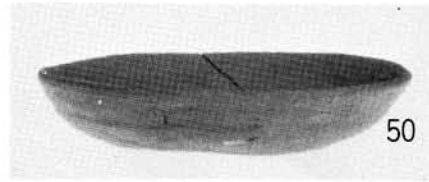




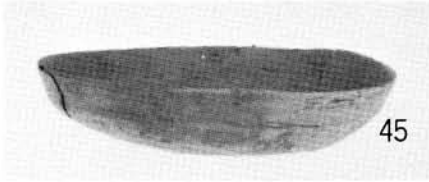
出土遺物（1：3）

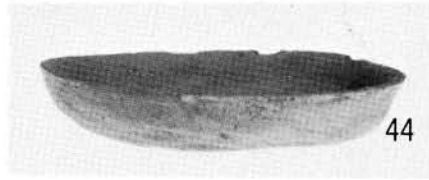
39


43


50

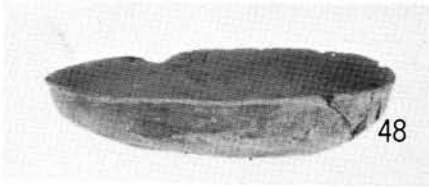
40

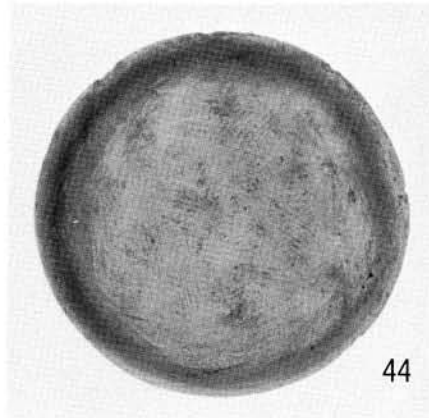

45

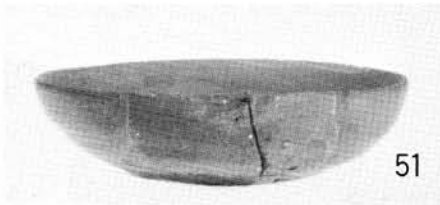

44

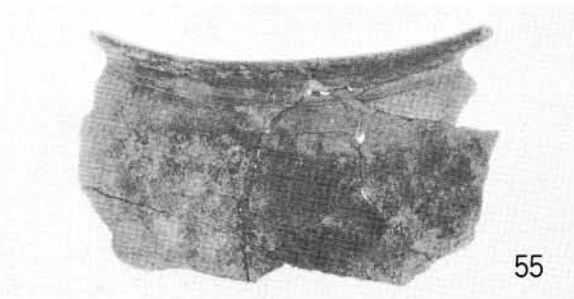
41

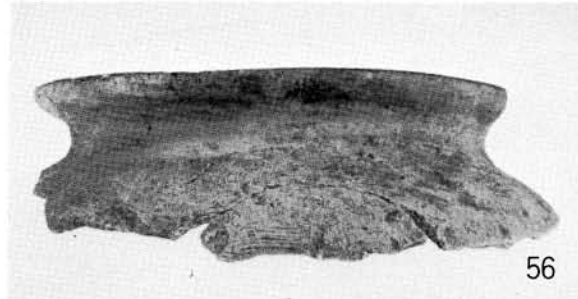
42

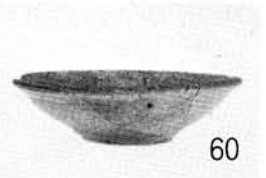

48


44

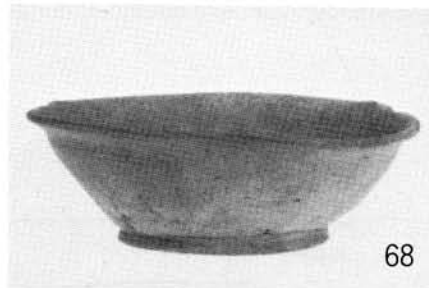

51

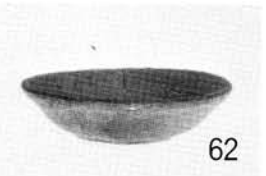

55

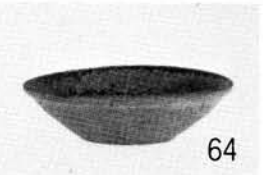

56

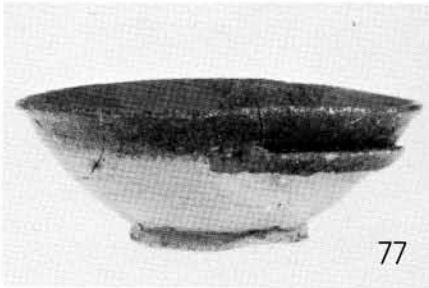

60

65


68

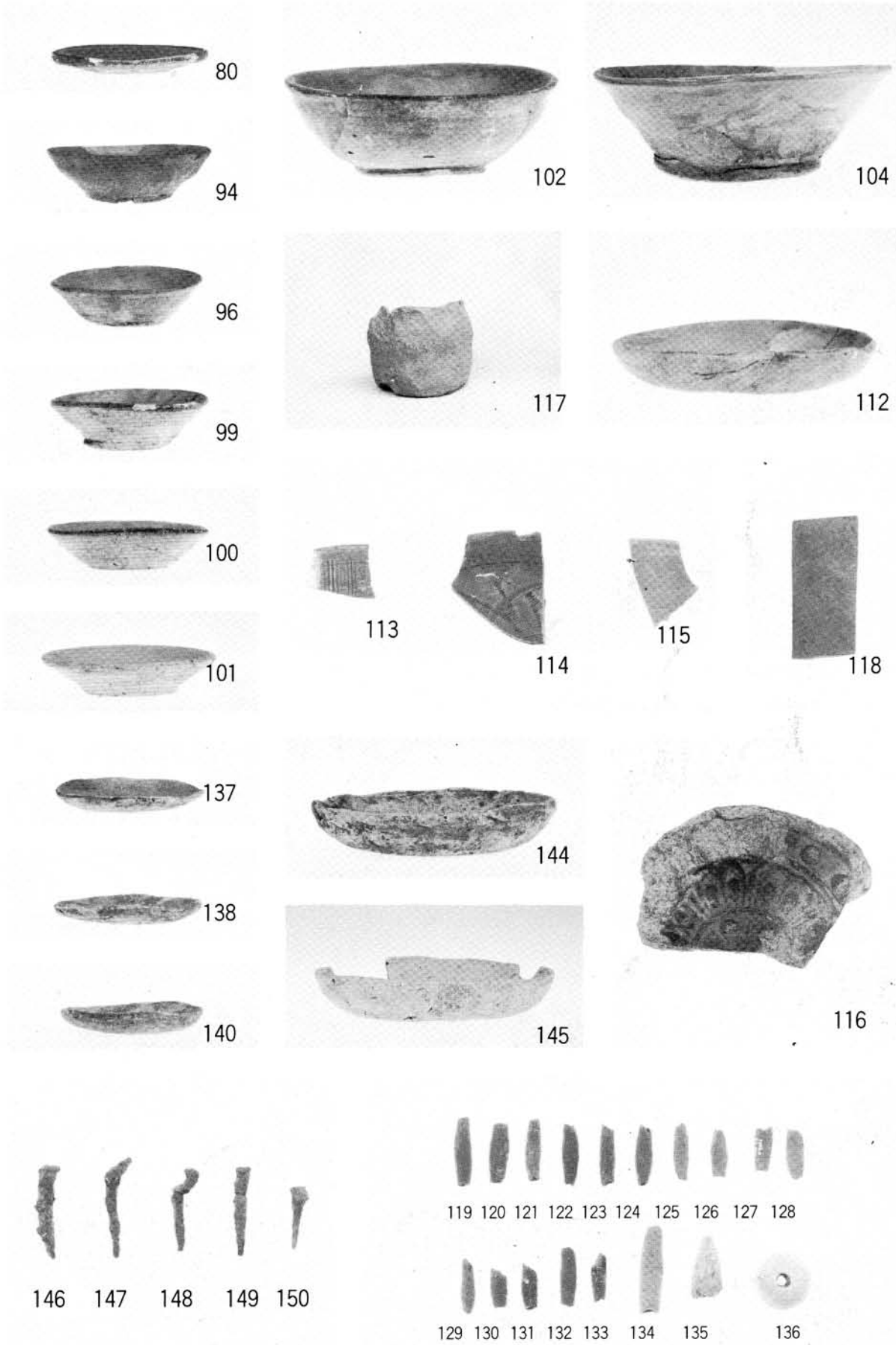

62


64


77

78

出土遺物（1：3）

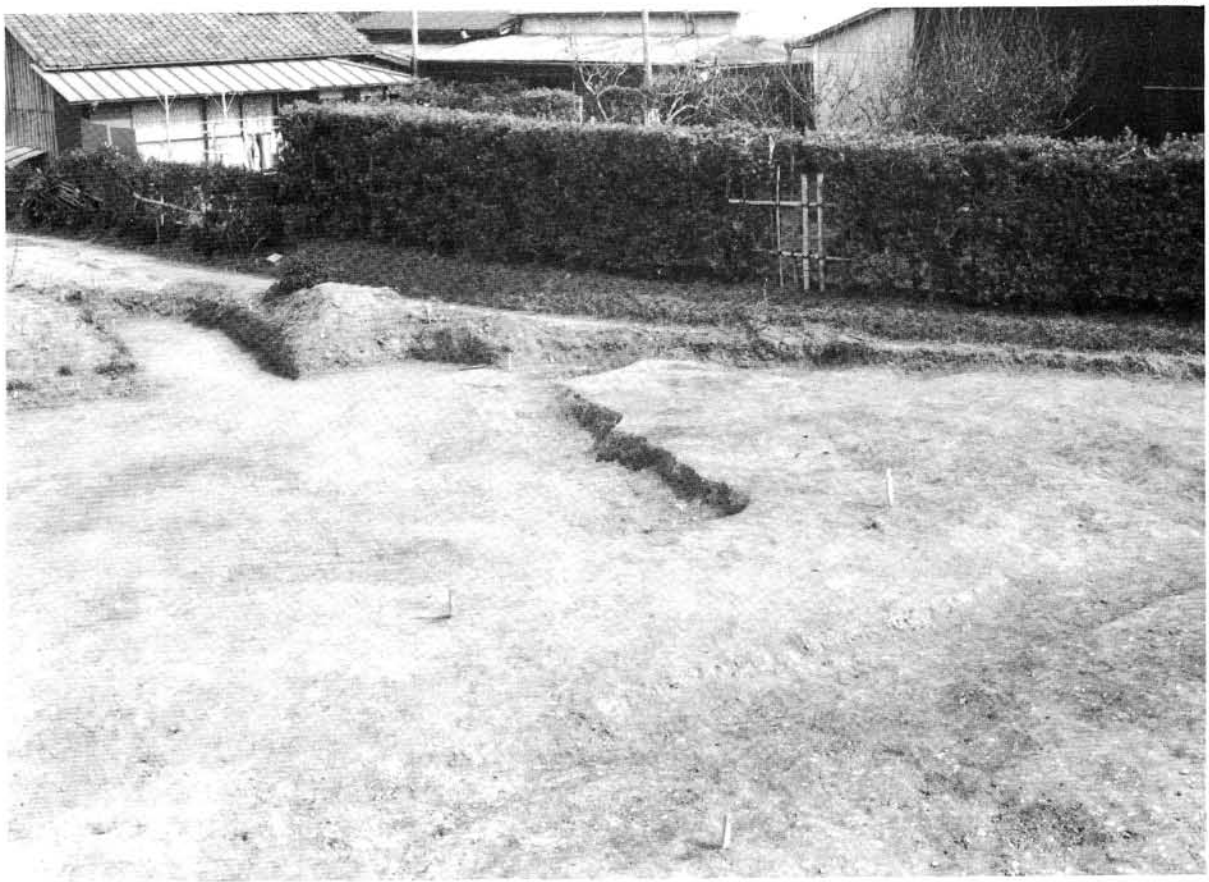

80
94
96
99
100
101
137
138
140
102
104
117
112
113
114
115
118
144
145
116
146 147 148 149 150
119 120 121 122 123 124 125 126 127 128
129 130 131 132 133 134 135 136

出土遺物（1：3）

金剛坂遺跡航空写真（南東から）

森田地区 北区全景（北から）

森田地区 南区空中写真



ＳＫ１（南西から）

ＳＸ２（北西から）

ＳＸ３．ＳＸ４（東から）

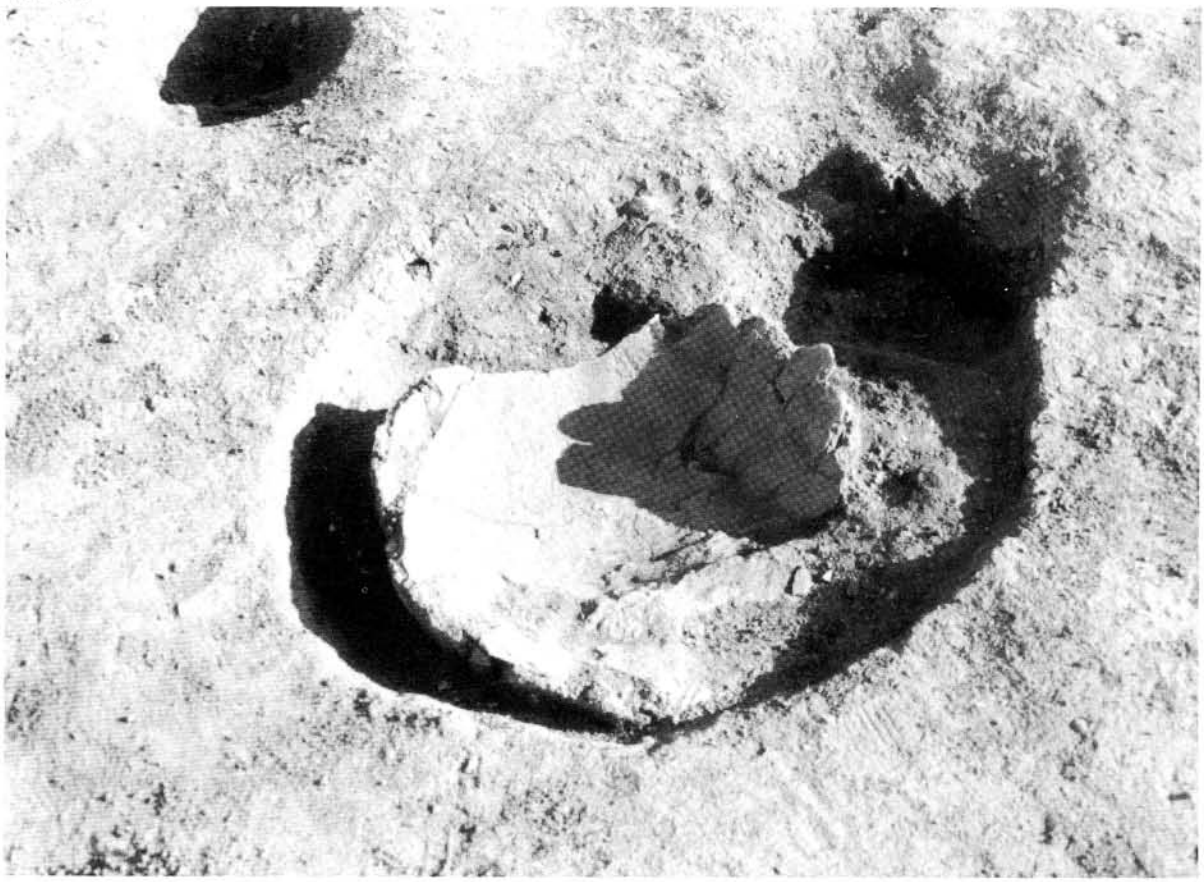
ＳＸ５（東から）

ＳＸ６．ＳＸ７（北から）

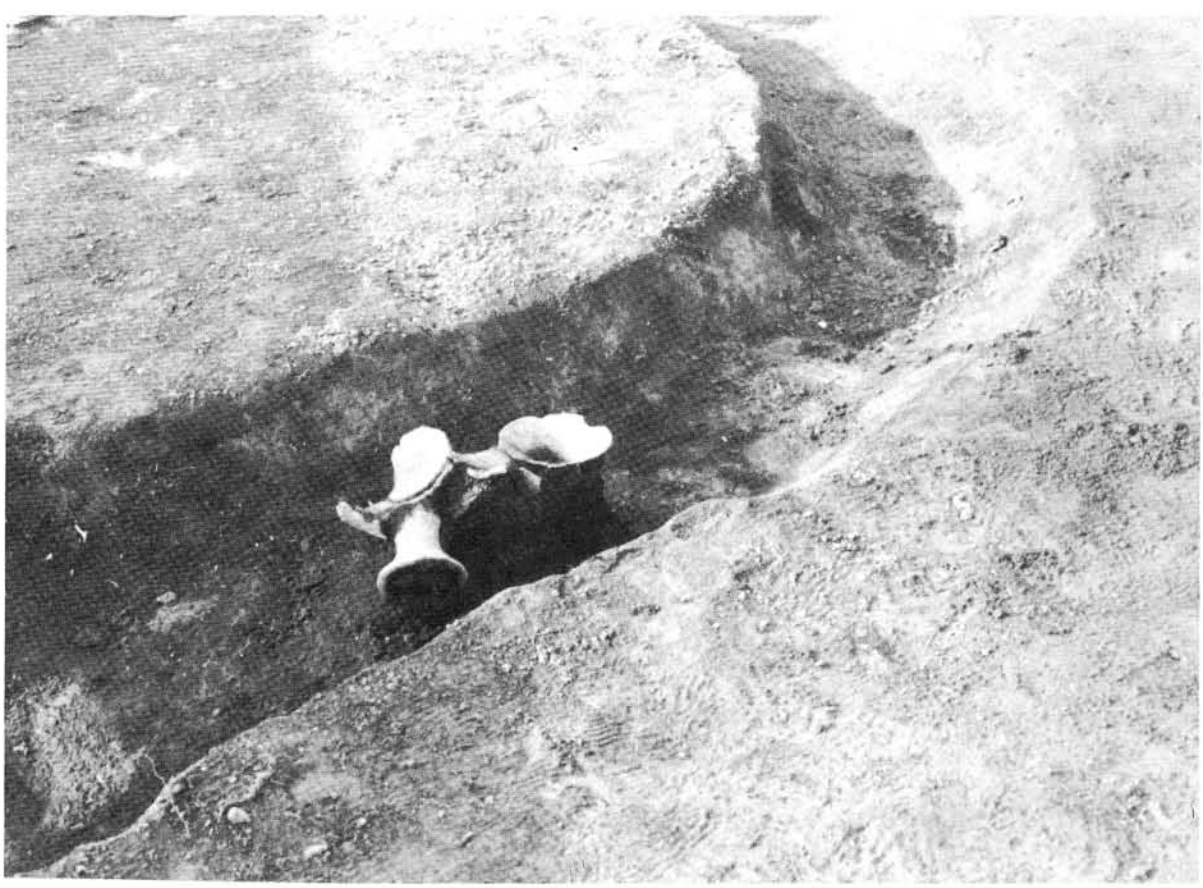
ＳＸ７（東から）

ＳＸ８（南西から）

ＳＢ13（南西から）

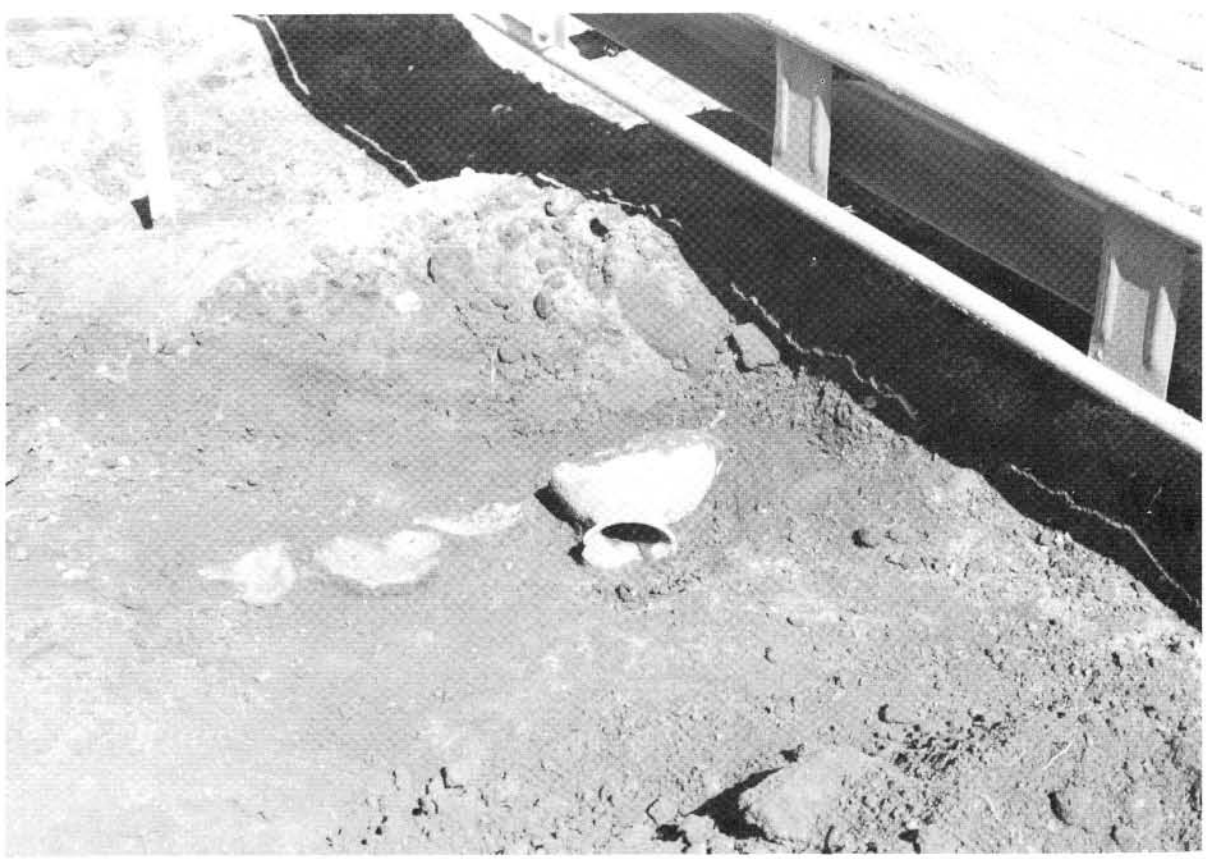


ＳＸ９（北から）

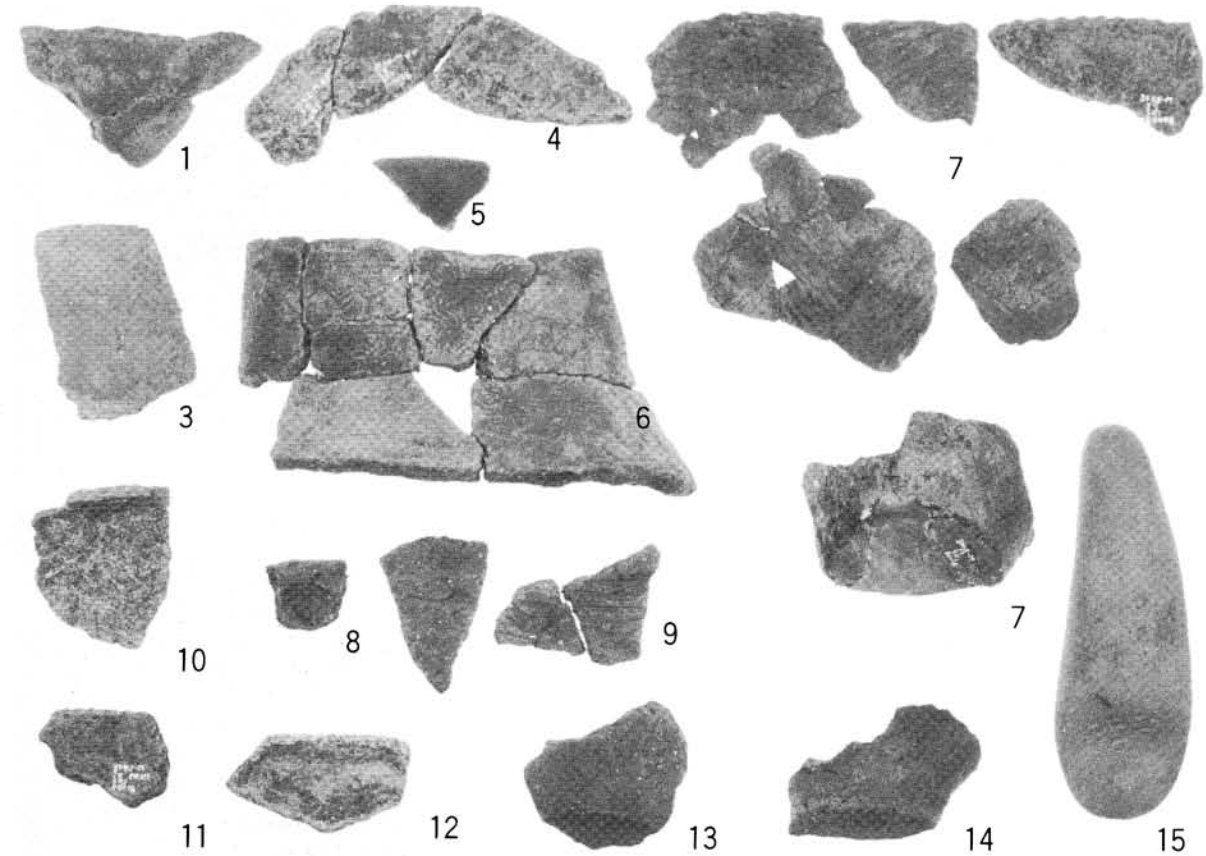


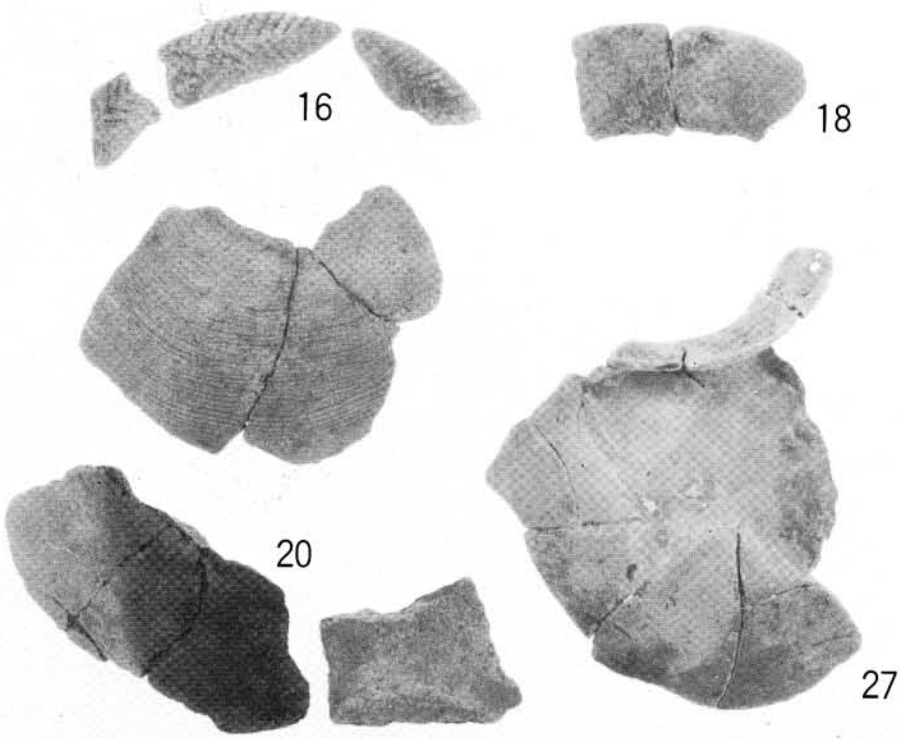
ＳＸ６　土器出土状況（南から）

ＳＸ７　土器出土状況（西から）



ＳＸ８　土器出土状況（西から）





出土遺物（1：3）

2

19

17

21

23

22

24

25

出土遺物（1：3）

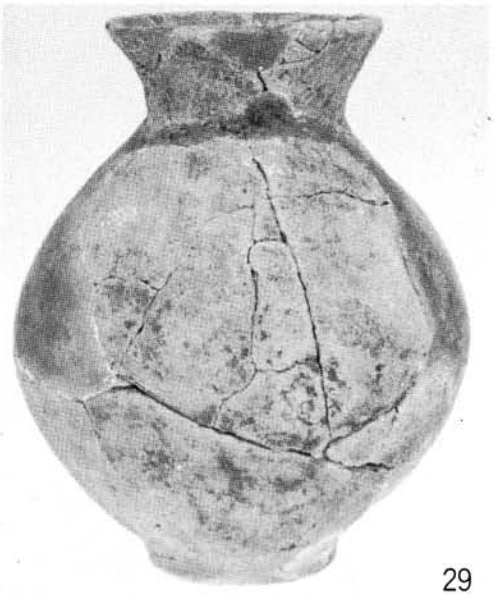
26

31

32

28

30



29

出土遺物（1：3）

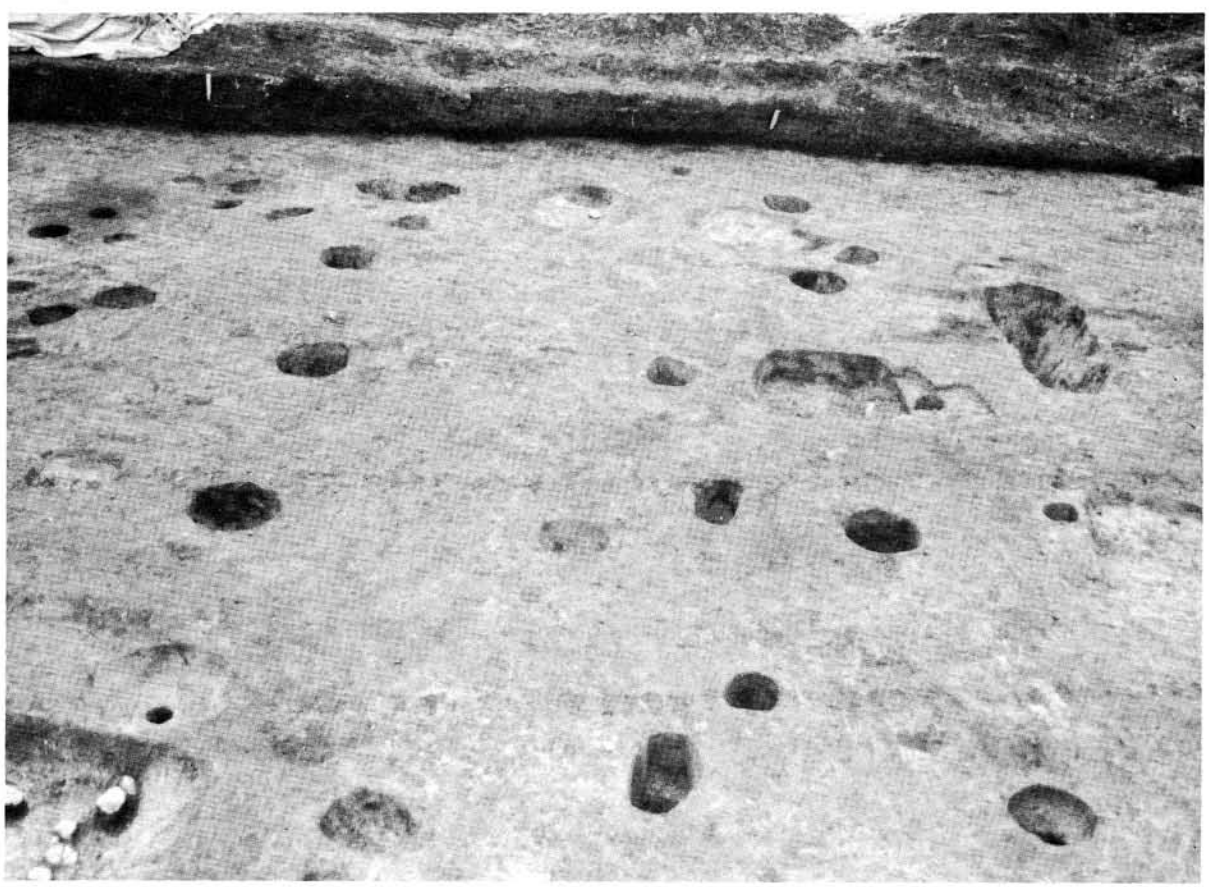
辰ノ口地区調査風景（北東より）

発掘調査後（西より）

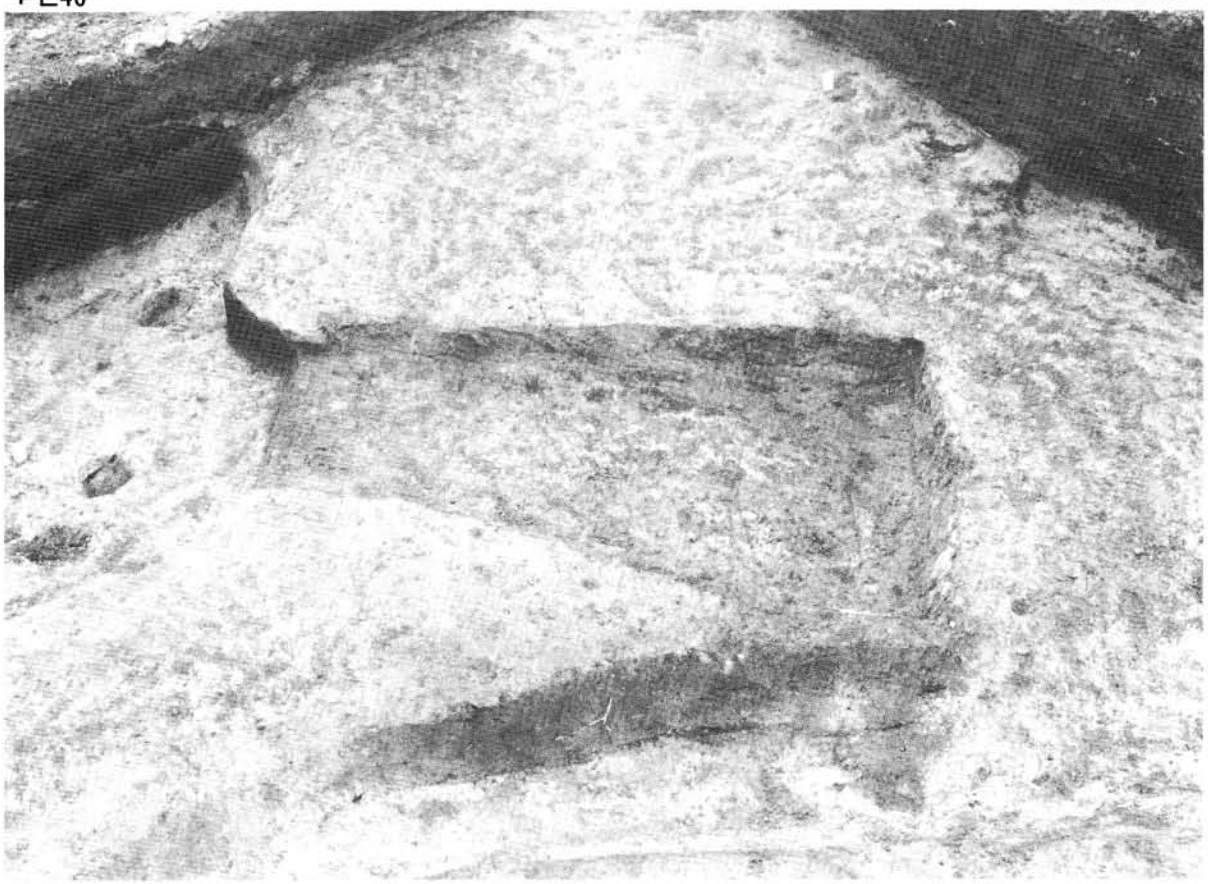
発掘調査後（東より）

S×13（東より）

ＳＢ９（南東より）

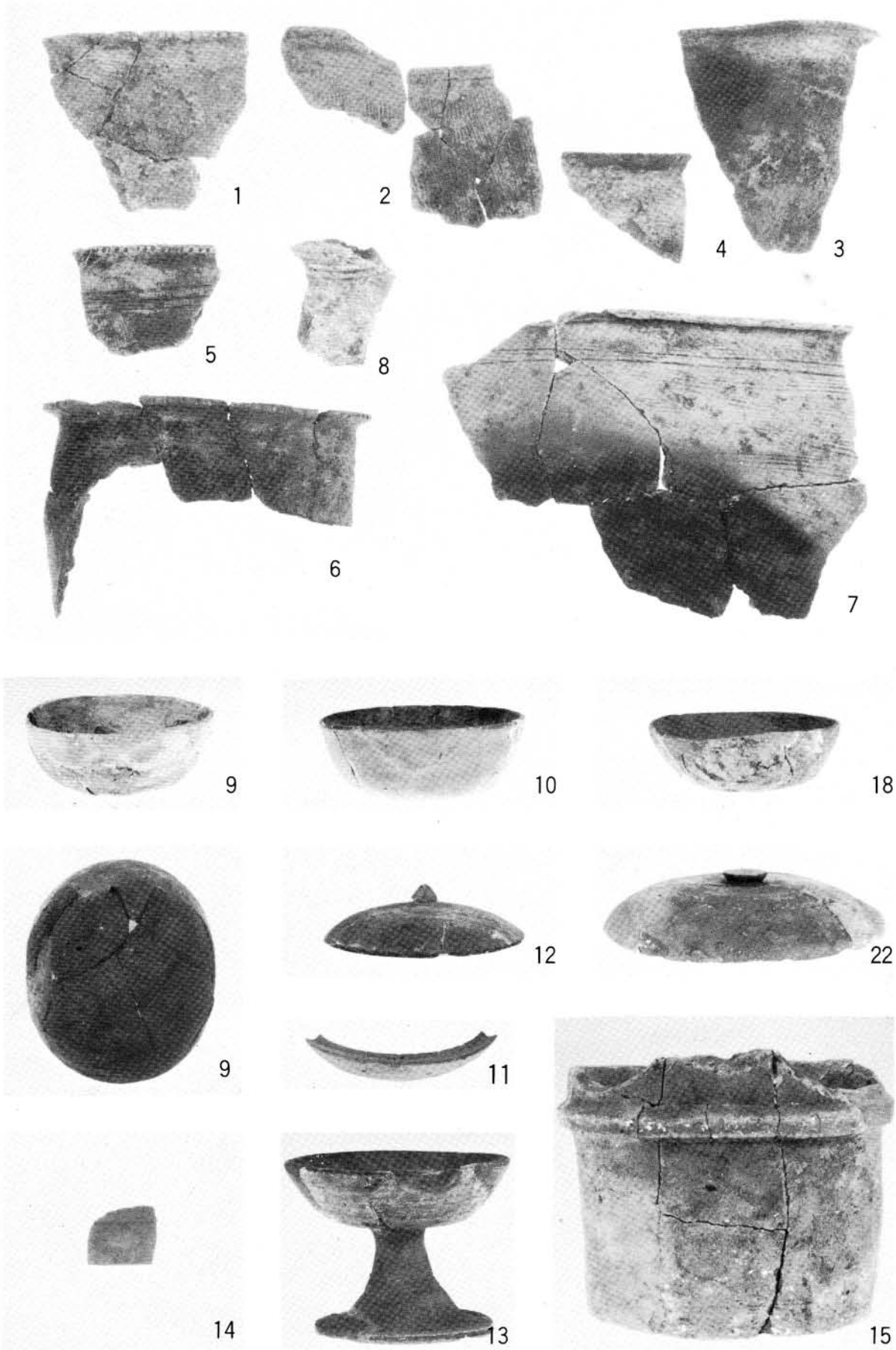


ＳＢ11（北より）



ＳＦ14（北東より）

ＳＫ17（北より）



出土遺物（1：3）

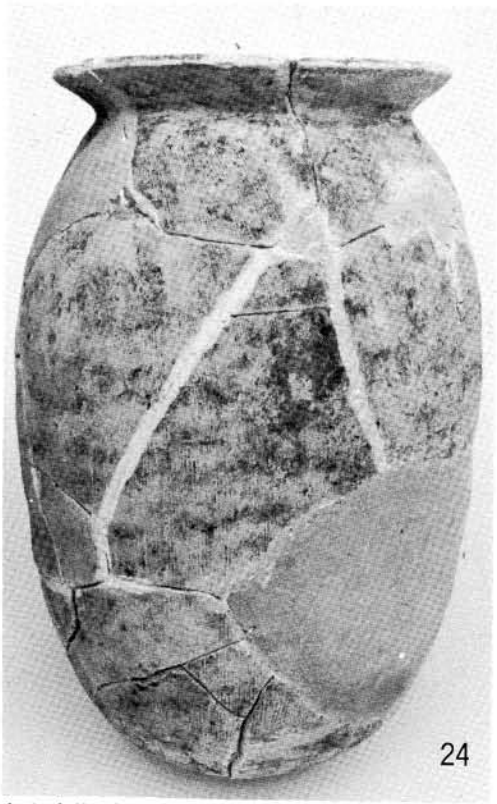
16

17

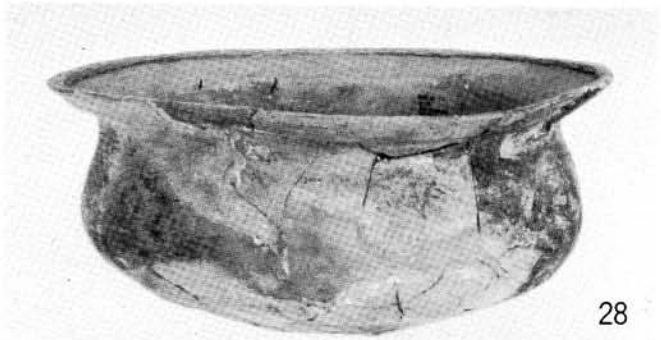
23

31

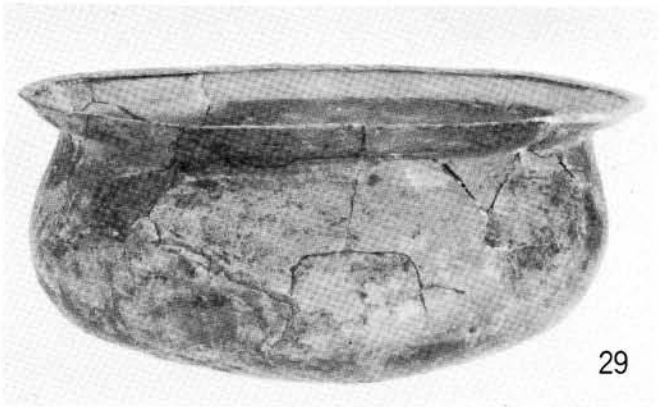
30



24



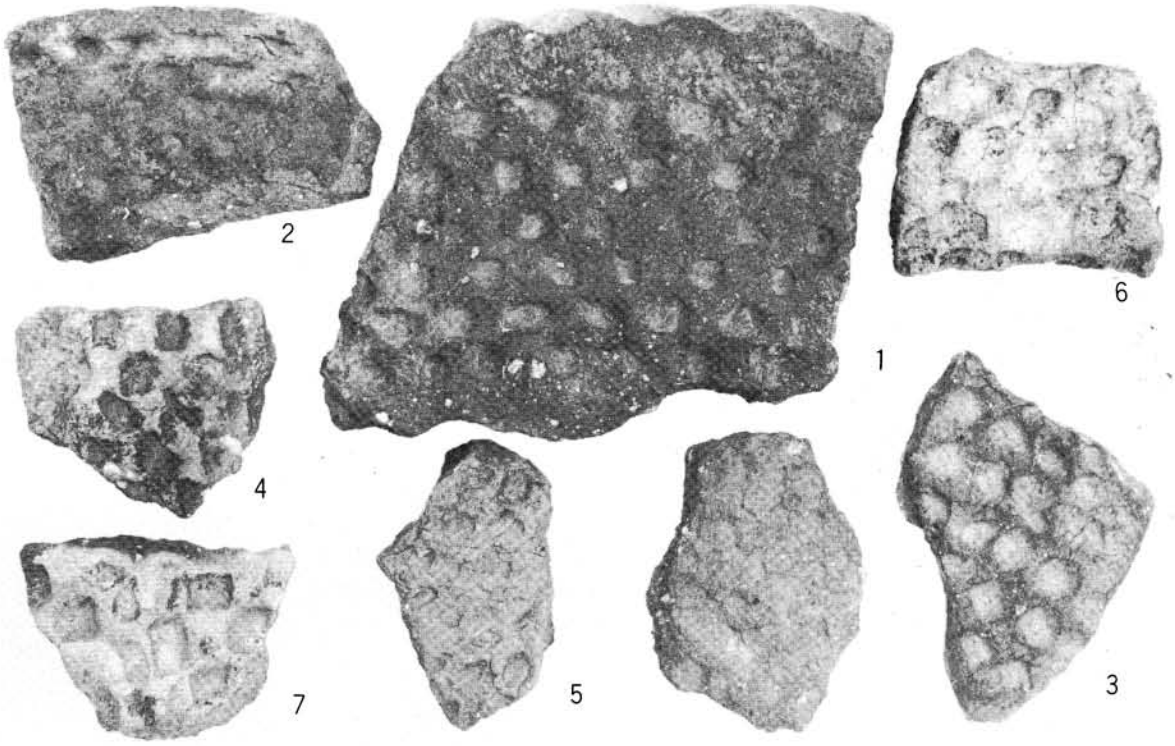
28



29

出土遺物（1：3、24は1：4）

作業風景（西方から）



出土遺物（1：1）

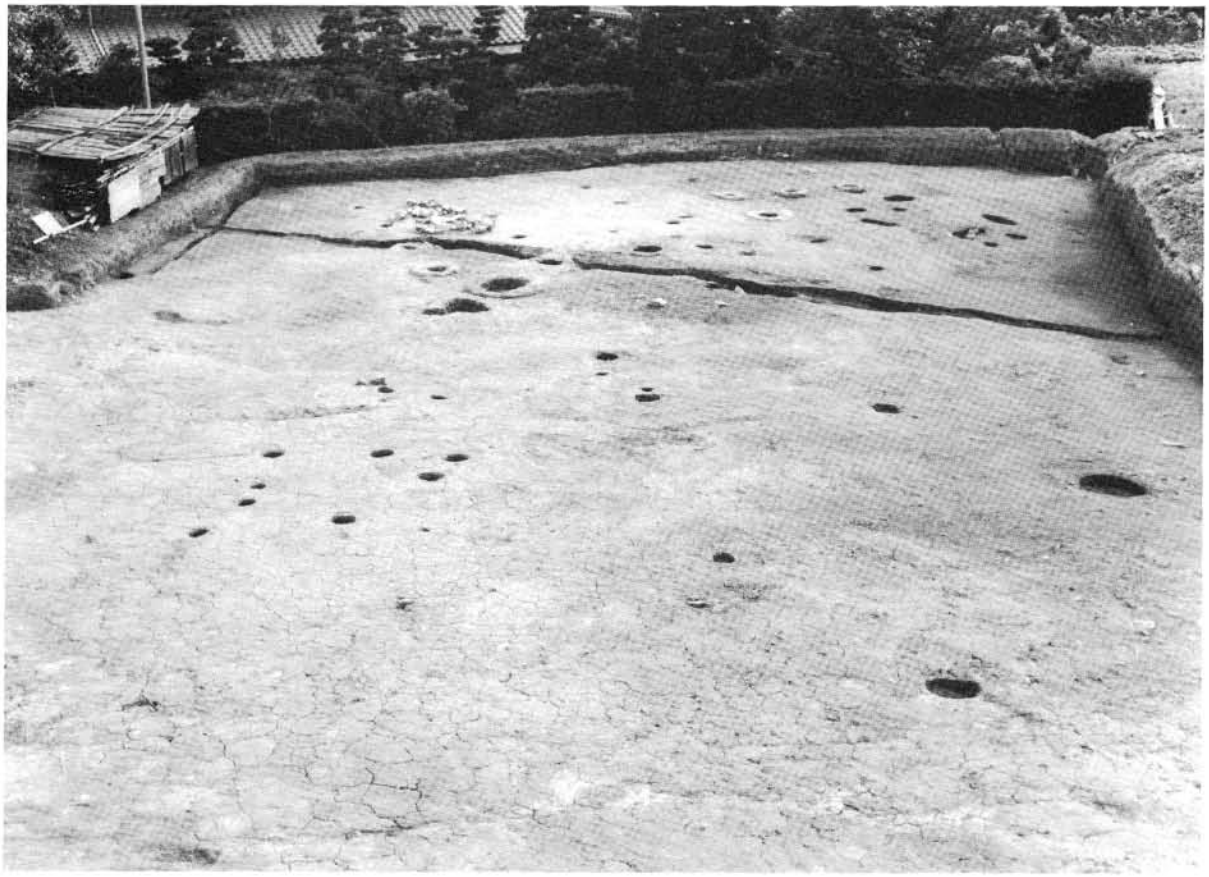
航空写真

調査前風景（北東から）

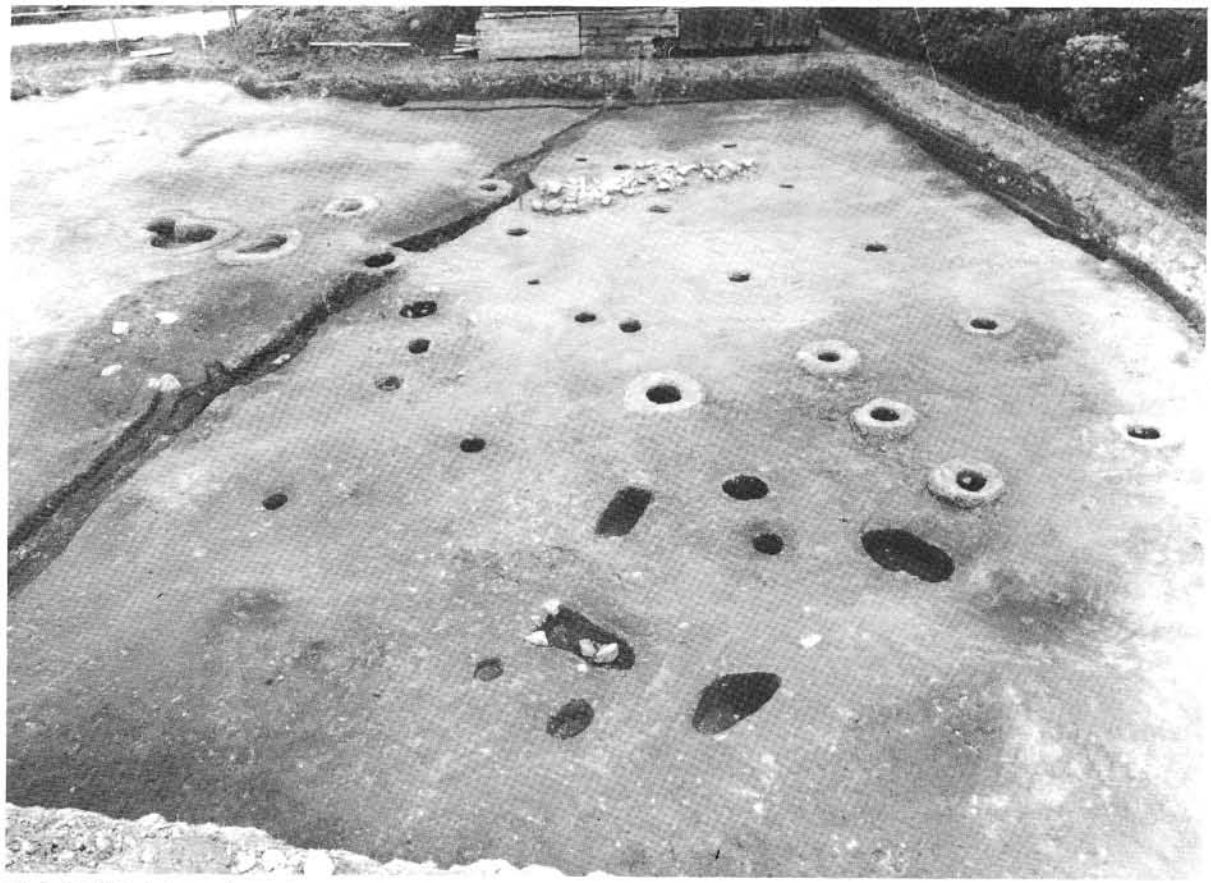
発掘調査風景

B地区全景（北から）

Ｂ地区遺構近景（西から）



ＳＸ１（北から）



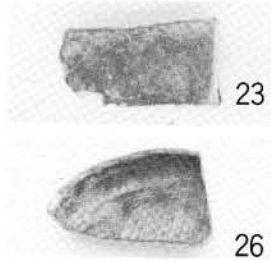
調査前風景（東から）

Eトレンチ全景（東から）

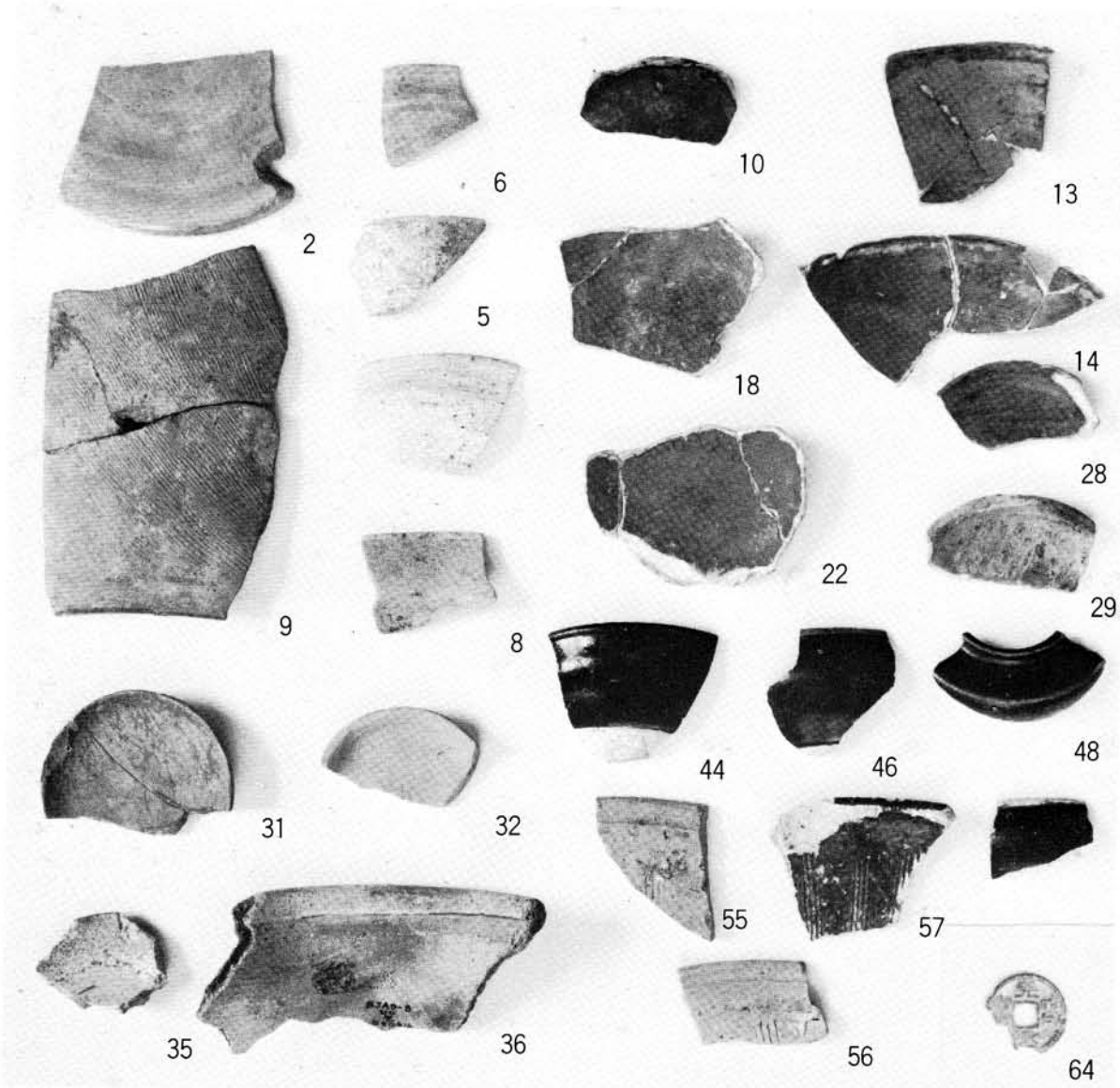
11

12

21

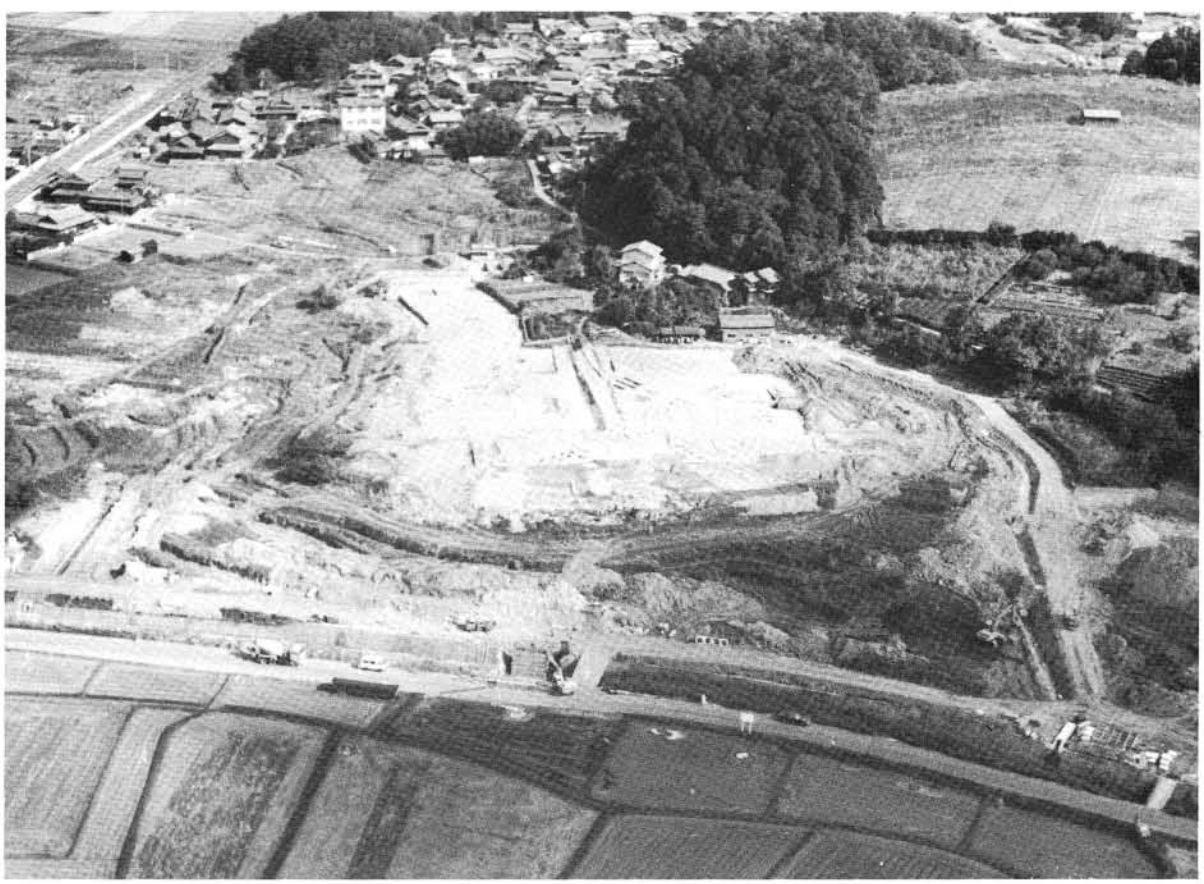

23
26

14
30


2
6
10
13
5
18
14
28
9
22
29
8
44
46
48
31
32
55
57
35
36
56
64

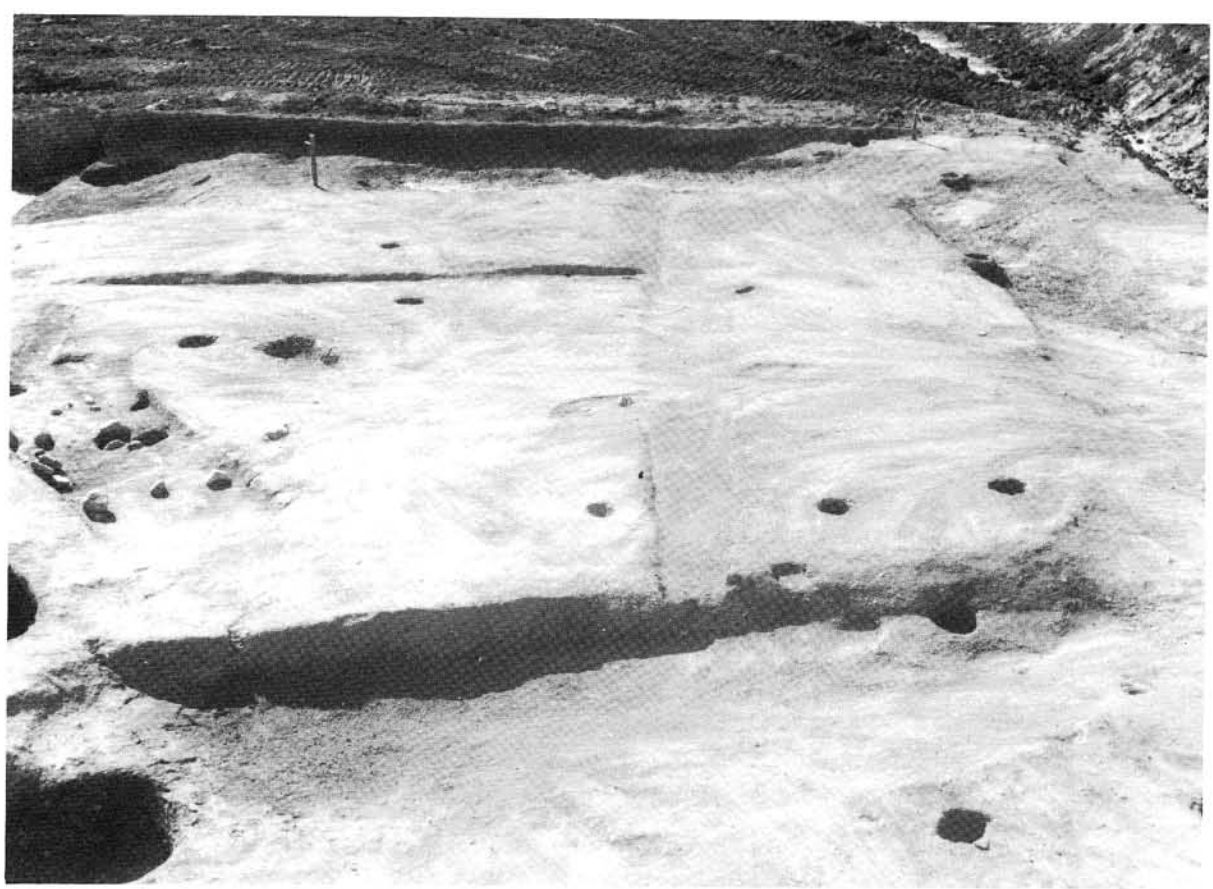
出土遺物（1：3）

航空写真

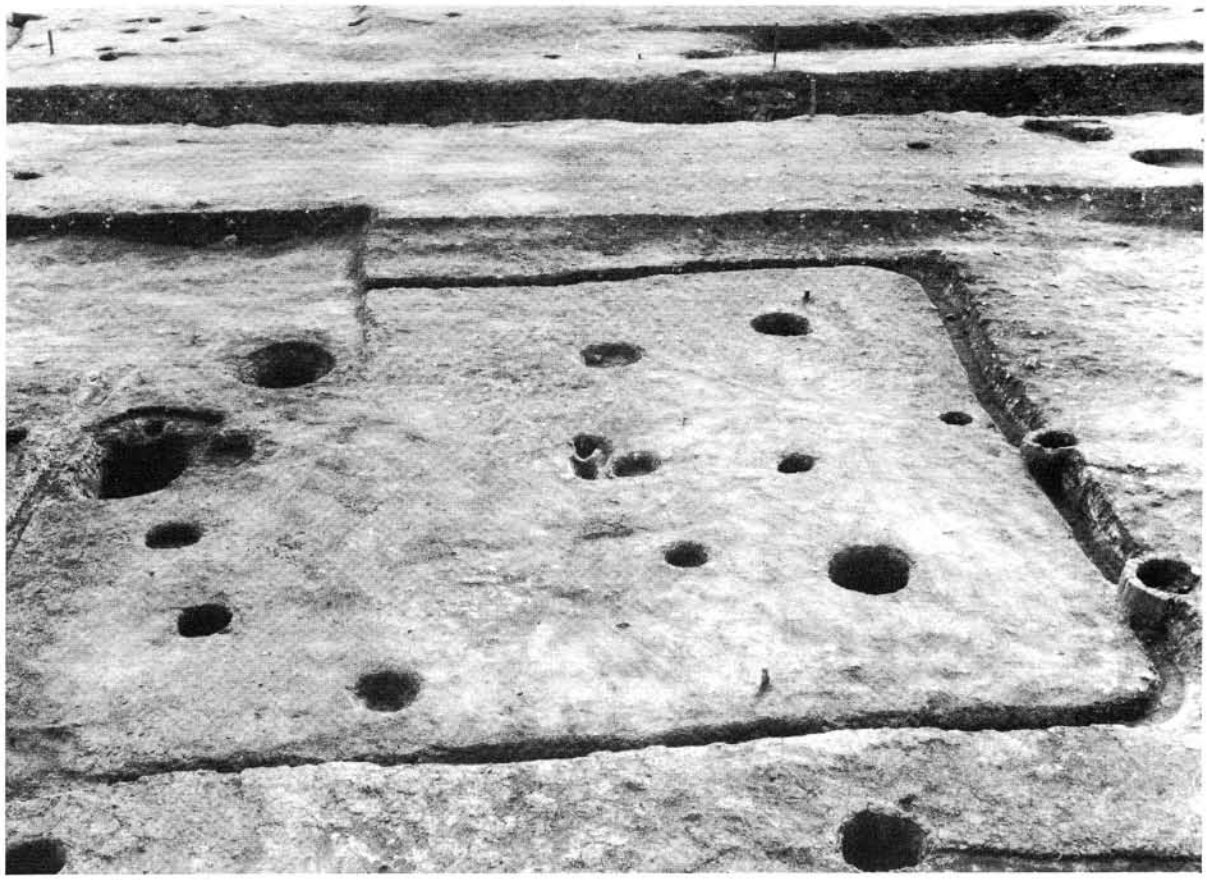


発掘区全景

発掘調査風景



ＳＸ29（北東より）



ＳＢ１（北東より）

ＳＢ１ 貯蔵穴

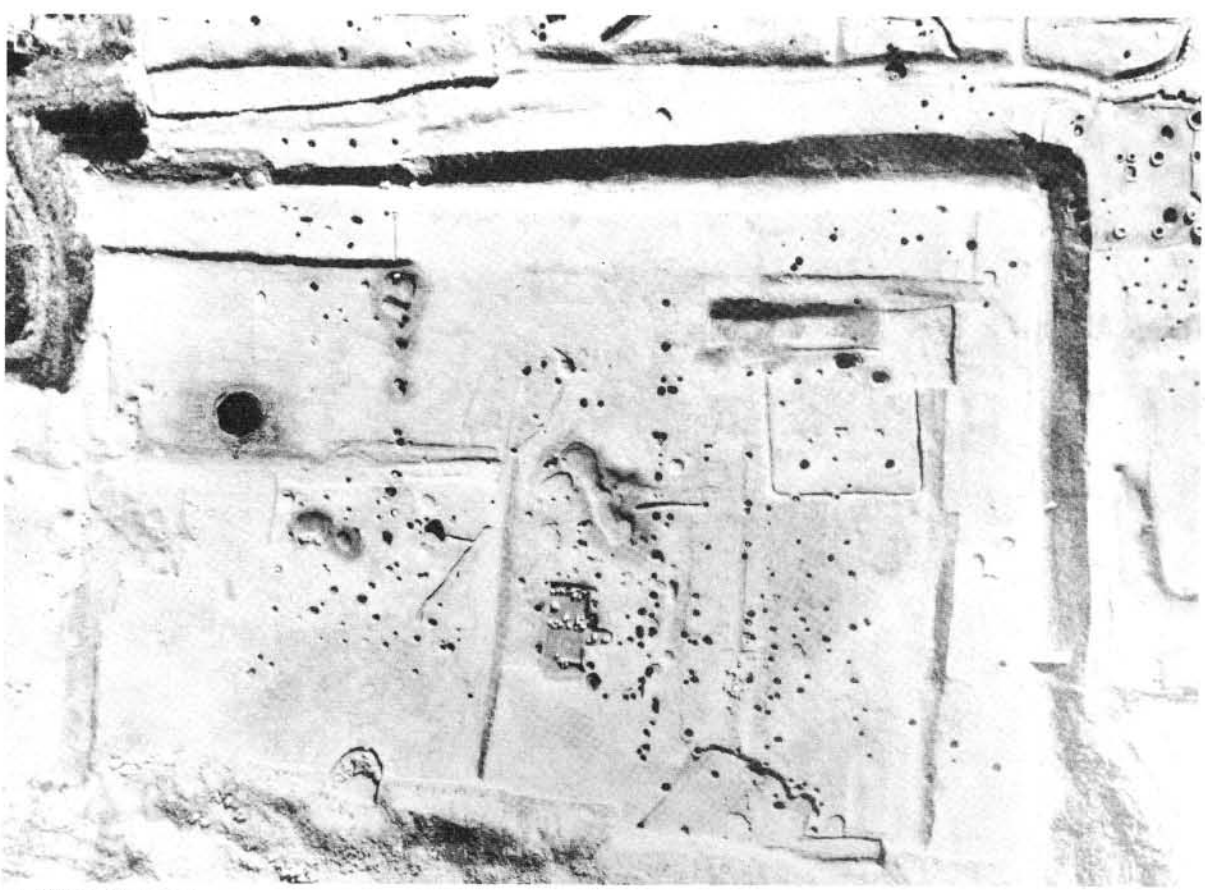
ＳＢ２（北より）

ＳＢ３（南より）

ＳＢ６、７（東より）

ＳＢ13（北東より）

ＳＢ16（東より）



中世城館航空写真

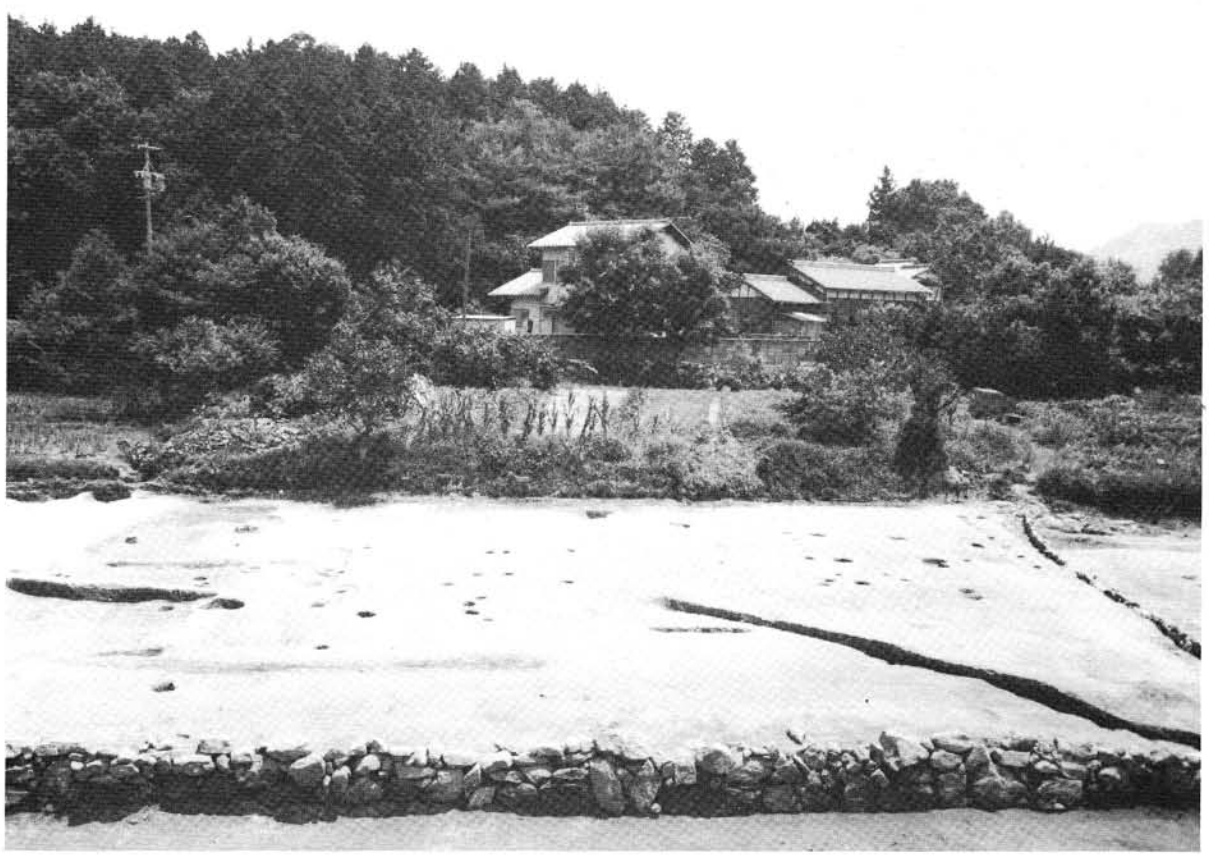
ＳＢ19、20（北西より）

ＳＢ15、18（北より）

ＳＢ26（西より）

ＳＢ12、ＳＰ57（北より）

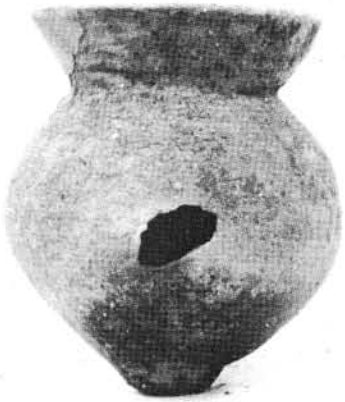
ＳＫ43（西より）



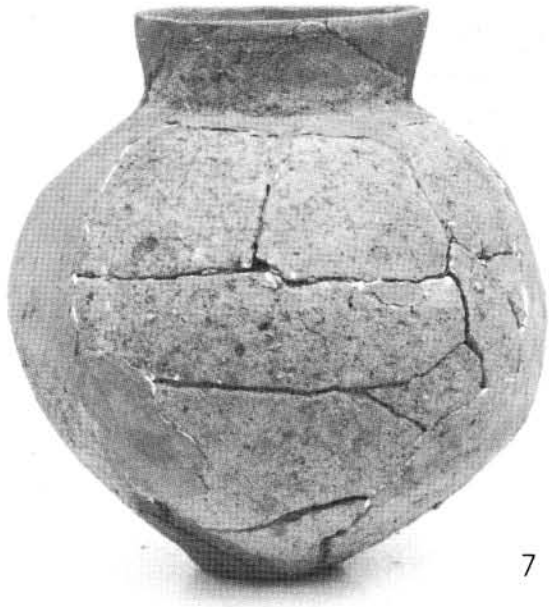
ＳＢ27、28全景（西より）

46

13



6



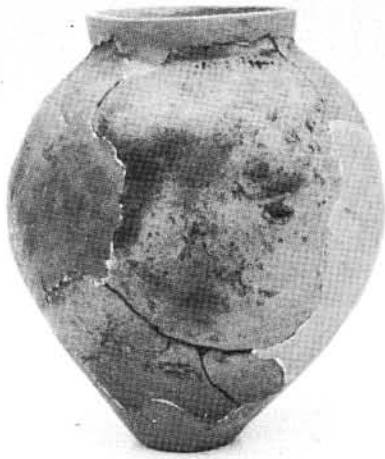
7

81

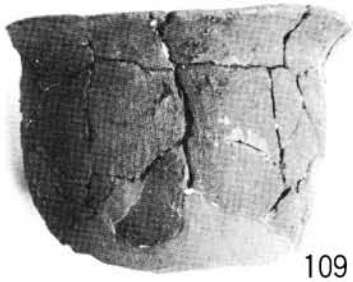
8

12

出土遺物（1：3）


14

90


109

96

91

29

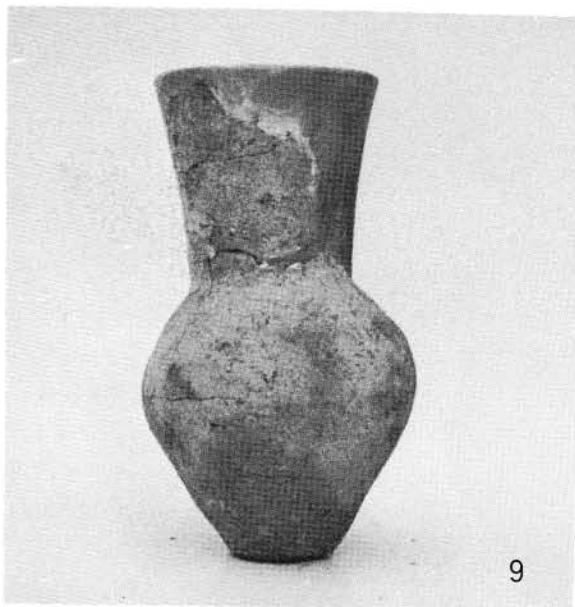
59

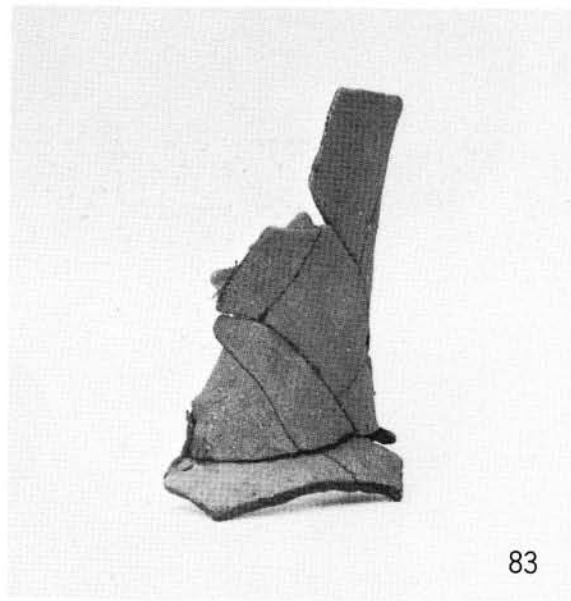
41

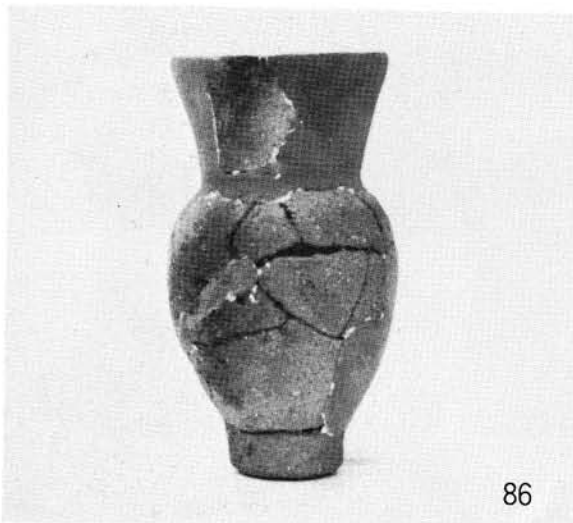
40

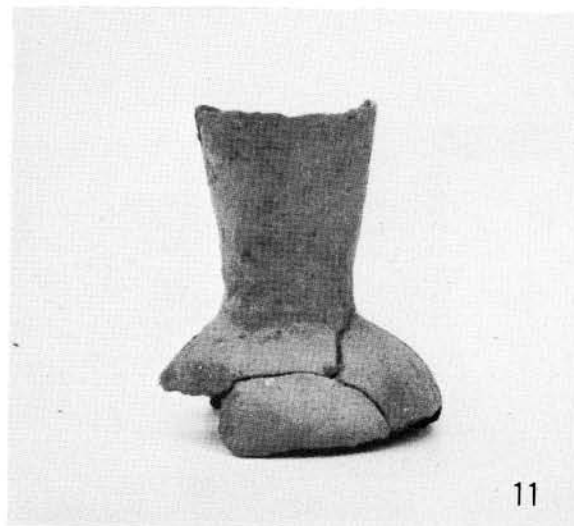
42

出土遺物（1：3）

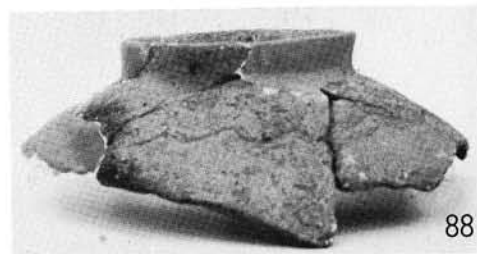








出土遺物（1：3）

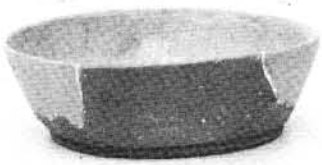


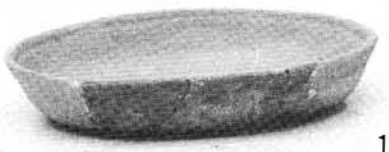
出土遺物（1：3）

118

119

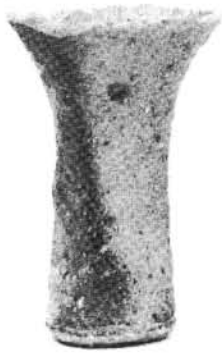
132


133


152

148

149


143

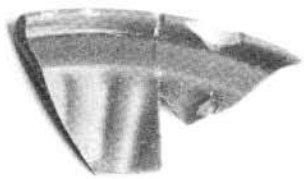
143

156

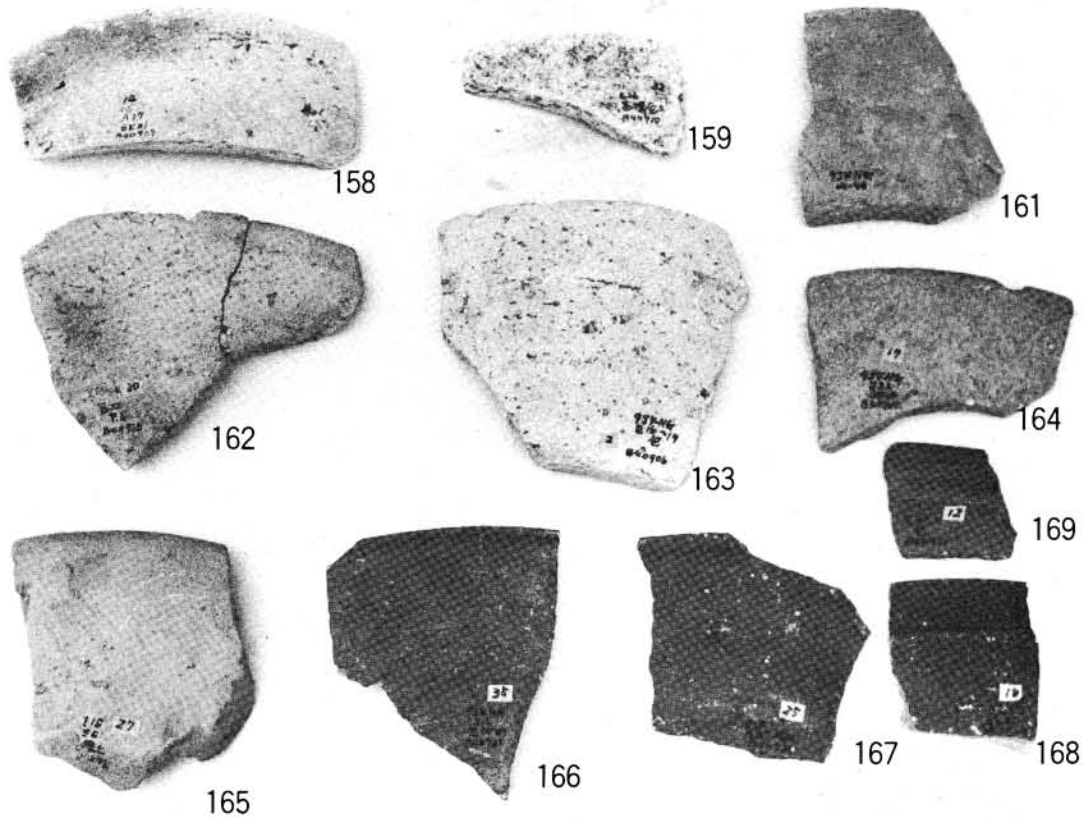
154

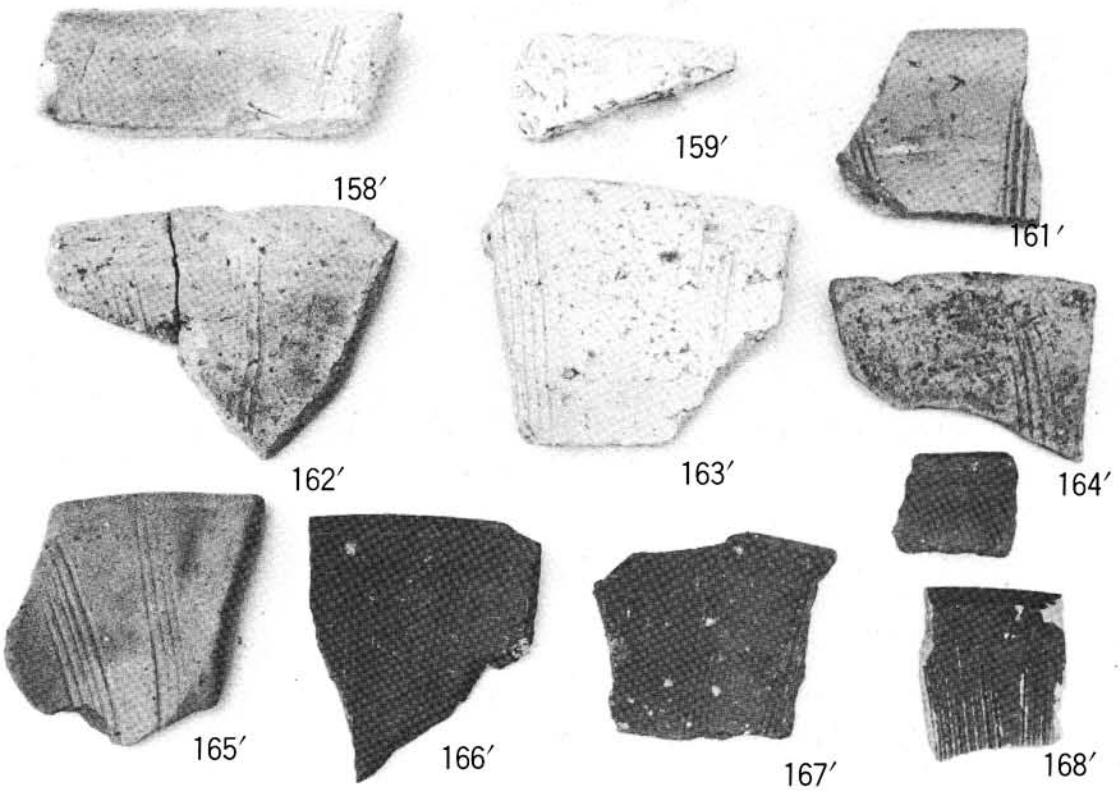
171

174


179

出土遺物（1：3）

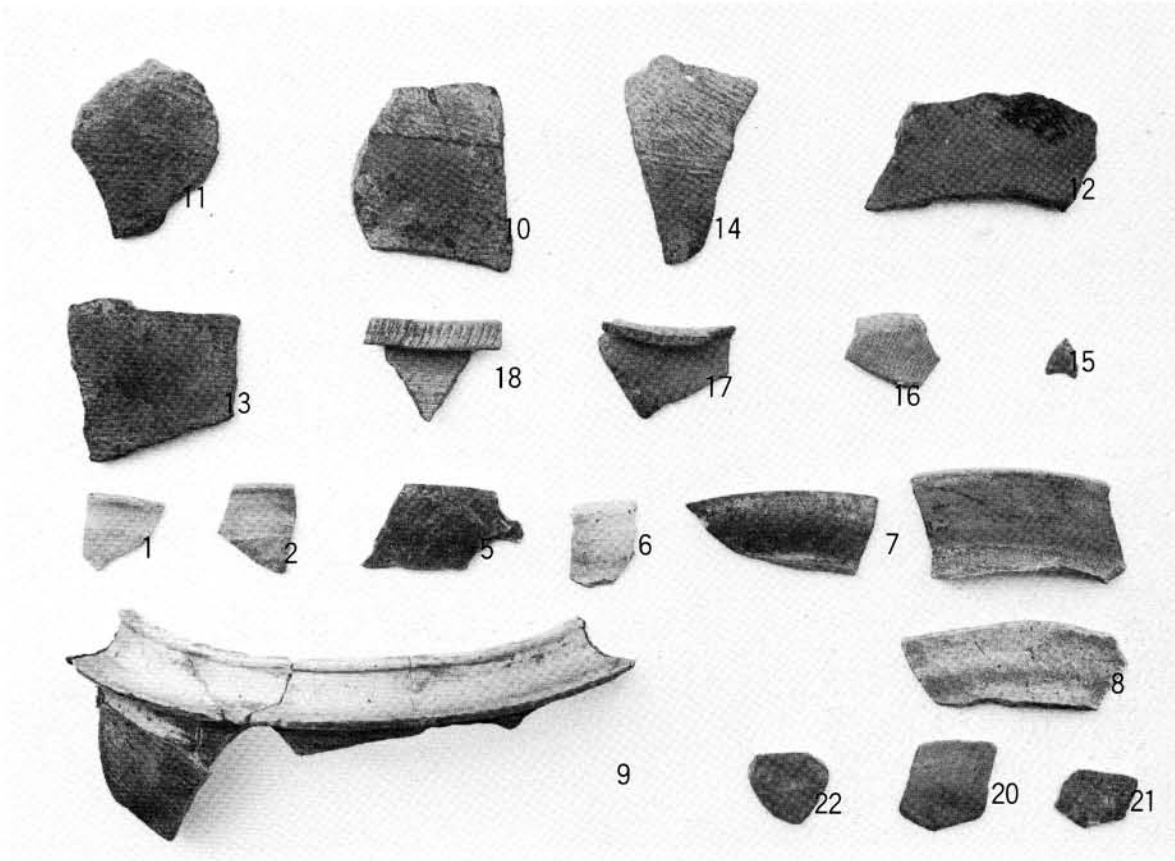

158
159
161
162
163
164
169
165
166
167
168


158′
159′
161′
162′
163′
164′
165′
166′
167′
168′

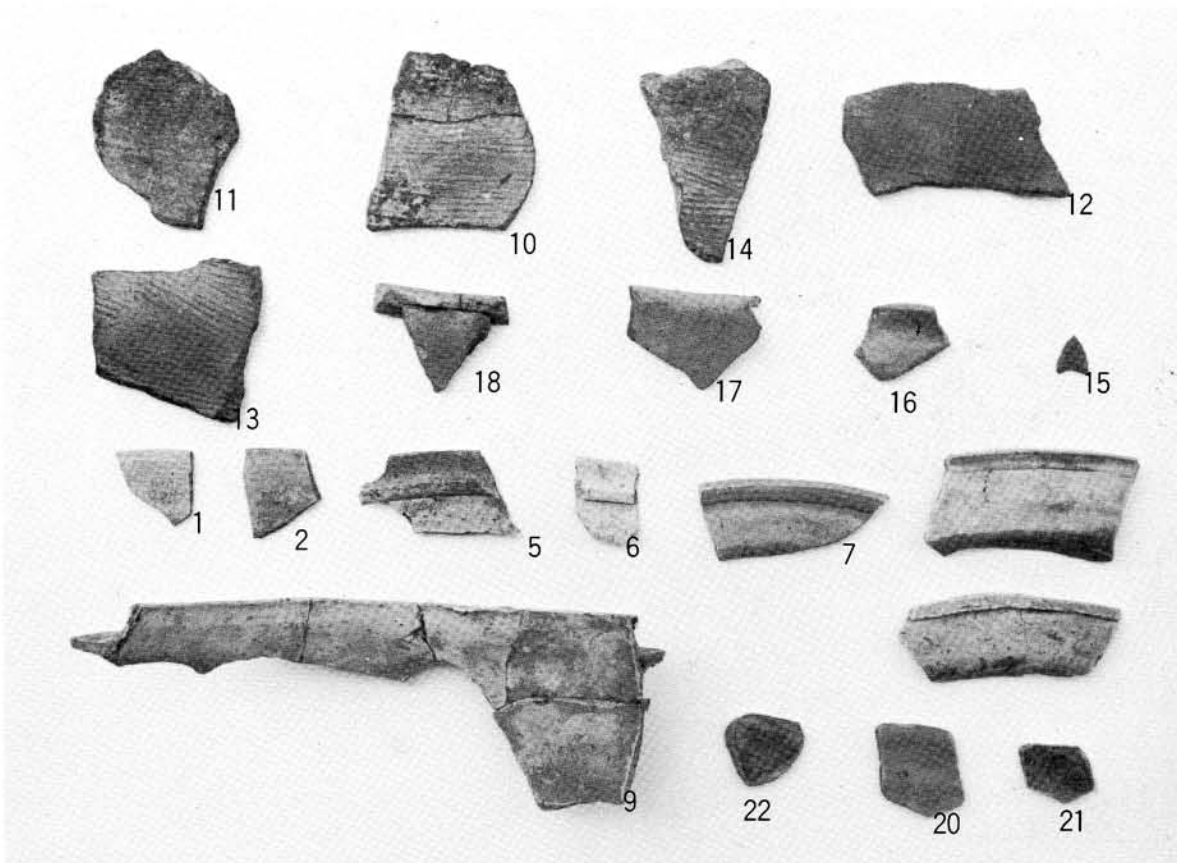
出土遺物（1：3）

遺跡北辺

SK 2



出土遺物（1：3）〈表〉



出土遺物（1：3）〈裏〉

昭和60(1985)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年4月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告72

昭和59年度県営圃場整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告

昭和60年3月31日

編　集　三重県教育委員会
発　行　三重県教育委員会
印　刷　オリエンタル印刷株式会社